MUVLUVにチート転生者あらわる！

ラーズグリーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＵＶＬＵＶにチート転生者あらわる！

【Ｎコード】
Ｎ９０７６Ｐ

【作者名】
ラーズグリーズ

【あらすじ】
マブラヴオルタネティヴをクリアした俺こと、不動悠斗は見知らぬ場所に居た。目の前に土下座している爺さんが居たんだよ。神様？と名乗る人？からチートの力を貰い地獄のような世界を生き延びることになった。

第零話（前書き）

処女作品なのでよろしくお願いいたします

第零話

人生って、自分ではどうしようもない事って有るよね。自宅でマイPCでゲームをしていたんだよ。　マブラヴオルタネイティヴって言う燃えゲーを。　　そしたら、自分エンディングを、感動しながら見ていたんだよ。そしたら　涙が止まらなかったから、少し目を閉じていたんだよ、次に目を開けたら　土下座している爺さんが居たんだよ。

「えーと、あなたは、誰ですか？」

とりあえず話かけてみた。

「すいませんでした。あなた死ぬ運命では、無いのに死なせてしまいました」

凄い勢いで謝る老人。　　え？てか俺死んだの？自宅でゲームしてたよな？　エンディング見て感動してたよな？

何処に死ぬ要素があんだよ！

「うむ、それはな、お前さんが目を閉じていた時に　お前の部屋に隕石が落ちてしまったのだ。それが当たり死んだのだよ」

ええ～！！そんな死にかたかよ！宝くじに当たるより確率低いだろ！てか、俺の人生それで終了かよ！まだクリアして無いゲームあんのに！てか、何で俺がそんなんで死ぬんだよ？この爺さんのせいか？

「儂、爺さんじゃなくて、神様なんじゃが」

「はぁ？またまた、冗談でしょ？」

「いや、本当じゃよ。儂の名は、ゼウスともうす」

あれ？神話に出てくる神様じゃね？しかも、最高神かよ！もしかし

て「テンプレじゃよ」人の心を、読んだよ！
「神様質問です！」
「なんじゃ？」
「俺このまま転生出来るんですか？」
「うむ、してもらうぞ」
よしきた！これで完璧にテンプレ転生人生だよ。「何処の世界に行くんですか？」
できれば、マブラヴがいいなＡＦの世界で笑が見たいな。
「残念だが、マブラヴオルタネイティヴの世界に行ってもらう」
ＯＴＬマジか～死亡フラグ満載かよ！神様俺にまた死ねと！鬼畜だね！
「安心せい。特典もある」　（・∀・）キター！！俺は生き残れる。なにくれる？
「まず、一つ目は、ありとあらゆる兵器の知識を与える。二つ目は、ありとあらゆる人物を呼び出せる能力を与える。三つ目　は、秘密基地を与える。　秘密基地は、無人島に見えるようにしてレーダーに映らないようにしておく。プラントも有るから安心じゃ。兵器の製造の資源は、不要じゃ。ＢＥＴＡを倒したら、自動的に資源になるのと、金になる。ＢＥＴＡを皆殺しにしてきてくれ」
うんチートだね！これならかてるかな？けどたりないからもう少しねだろうかな。
「神様俺の体はどうなるの？」
隕石当ったんだから体無いんだろうな。
「安心せい。ここに新しい体がある」
すると神様が右手をかざすと、光に包まれた人が出てきた。
「これが、新しい俺の体」
顔は、イケメンで華奢な体つきに見えて凄い筋肉のついた体だ。分かりやすく言うなら、ブルーデスティニーのパイロットのユウ・カジマさん見たいな感じだ。

「うむ、今から1つに融合するぞ」
右手をかざすと神様。
「どうだ新しい体のちょうしわ？」

「最高だよ。かなり使いやすい。体が別人のように動く」
この体ならバグ転くらいらくらくできるな。
「ちなみに、その体には、ニュータイプとＳＥＥＤがついておる。あと鍛えれば鍛えるほど、強くなる。ＢＥＴＡにや人を殺しても恐怖や罪悪感に悩むことは、ないから安心するのじゃ」マジか！神様ありがとう。
「あと、何が欲しい？」
うーん？機体が欲しいくらいかな？
「俺の専用機が欲しいな」
「分かったどんな機体が欲しいんじゃ？」
「グフ・カスタムだ。だだし頭部にバルカンと脚部に3連装ミサイルポッドを2つ付けてくれ」
俺は生前からノリス・パッカード大佐が好きだったから、彼の愛機てあるＢ3グフこと、グフ・カスタムに乗るこにした。
「ほう、あえてガンダムではなく、敵役のグフか。　だが、此だけでは、不安があるな、フェイズシフト装甲とＶ2ガンダムのミノフスキードライブとＩフィールドそれに無限反応炉を付けてやろう。これならエネルギー切れにならんからな。あとナノスキン装甲付けて自己修復も付けてやろう」
どんな化け物な機体だよ！ＢＥＴＡの攻撃完全に無効にして、なおかつ整備不要って！一人で勝てるよね！
「機体の操作はわかるだろ？お前がやっていたアーケードゲームの戦場の？と同じじゃ」
ゲームと同じかよ！！　　けどいいね、戦場の？なら、かなり金つぎ込んだから余裕だよ。
「問題ない」

つい、クールに言っちゃった。
「ならば、お前を転生させよう。ちなみに原作知識はオマケで付けてやる。　向こうの世界には、きちんと戸籍と軍の役所が手配してある。安心して、ＢＥＴＡを、全滅してこい。」　ありがとう神様あんた本当に神様だよ！尊敬しちゃうよ。
「ありがとう神様！あんた本当に凄いよ。がんばってくるわ」
「よいよい、儂のミスで死なせたのじゃから、此くらい当たり前じゃよ。そい言えば、お前の名前を、聞いておらんかったの」「そい言えば、名乗ってなかったな、不動悠斗だ。　じゃあなゼウス様」
そう言って俺の意識は、消えた。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼウスｓｉｄｅ

「行ったのう」
儂のミスとはいえ、若い命を奪ってしまうとはのう。だか、今まで転生者　とは、違うのう。大半の者はもっとねだるのだが、あやつは、儂が提示したのだけで、文句も言わんかったの。悠斗なら世界を救うかもしれん。　「楽しみに見せてもらうかの」

ゼウスｓｉｄｅｏｕｔ

第零話（後書き）

やっと投稿

第一話（前書き）

かなり、独自設定です。

第一話

悠斗ｓｉｄｅ

「ここ何処だ？」

こんにちは。今俺は神様からもらった、グフ・カスタムに乗っている。

服装はジオン軍の通常軍服を着ている。ピンクのじゃないよ。あれは、あの人だから、着れるんだよ。今俺の居る場所は見知らぬ場所ですね。ビルや商店が建ちなんでいる場所なんだけど、所々崩れているから、横浜基地かな？と、思ったんだか、基地らしき物が見えないから、その線は外した。ぶっちゃけ神様から余裕何処に送るとは、聞かなかったから、場所が解らないんだよね。

「取り敢えず、起動させるか」

指でスイッチを押す。ギューイーと起動音がする。動かしかだ、全部頭に入っているから、らくだね。

「凄い、５倍のエネルギーゲインがある！」

５倍どころか無限だよ！　神様からもらったチート機体ですよ。エネルギー切れにならなあから、戦闘でも安心だね。

「とりあえず、今俺の居る場所調べよ」

キーボードを打ち検索を、開始する。するとすぐさま、でてきた。

「なになに、１９９８年１月３日朝鮮半島南部光州（クワンジュ）より東に１０キロ地点か。神様、あんた本当に鬼畜だな。戦力準備してないのに、光州作戦中に送るか？普通しないよ！」

さて、神様相手に愚痴ってもしょうがない。

取り敢えず、戦場に向かいますか。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

???side

「HQ、HQ、こちら大東亜連合軍だ。住民避難の為に援軍を、回してもらえないか」

男の太い声か通信室にはいる。

「こちら、HQ、現在そちら回せる戦力がない。現状の戦力で対応してください」

女性オペレーターの凛とした声が返す。

「フザケるな！BETAもう目の前まで来ているのだ、住民の避難を、優先するのが先だろ！」

男の怒鳴り声が響く。
かなり焦っているのが、よくわかる。

「今回の作戦は、住民の避難とBETAの迎撃である。　そちらに回す戦力がもう　有りません。これ以上戦力を、割くと国連指令部が、陥落する恐れが有ります。現状の戦力で対応してください」

怒鳴る男に対して女性オペレーターは、冷静に返す。

「ならば、我が軍が援軍に動こう」

日違う男の声がはいる。
「な！彩峰閣下なにを、おっしゃっているのですか！閣下の部隊が居なくなれば、本部の防衛に影響がでます。再度考え直しを、お願いいたします」
女性オペレーターは、冷静に上官に考え直すよう求める。
「だか、今助けを求める住民がいるのだ、ここで動かなければ、軍の名折れだ！」
彩峰閣下は声を、あげる。今、まさに動こうとした。
「ＨＱ、ＨＱ！こちら極東国連軍所属フレイム戦術中隊だ、前線に所属不明の戦術機が、現れた。至急確認されたし」
前線衛士から緊急連絡が、入る。
「こちらＨＱ、その戦術機は、何処から出てきた！」
極東国連指令部が、慌ただしくなる。
？？？ｓｉｄｅｏｕｔ
悠斗ｓｉｄｅ
現在最前線でＢＥＴＡを相手にしています。さっきから、無線に応答せよとか、入ってきてウザイです。
前方から突撃級（デストロイヤー）突っ込んできます。

「ウザイんだよ！」
ブーストジャンプで上空でやり過ごし、背中を向けた瞬間、トリガーのスイッチを押す。
ダンダンダンダンダンとガトリングシールドから、マズノズルフラッシュが咲く。背中の弱点を晒しだした突撃級に襲い懸かる。
ビチャビチャと、体液や肉の破片等がそこら辺一帯に飛び、赤い血の池を作る。死んだ突撃級の死体に押し潰され下に居た小型種のＢＥＴＡも死んで逝く。
「はてさて、さっきから喧し無線に、応じますかね」
俺は、無線のスイッチを、ＯＮにする。
「やっとつながりました。此方は、国連軍ＨＱです。貴殿の所属と名前を名乗れ。なお国際共通語である、英語または、国際翻訳機の電源を入れて、返答せよ」

ＨＱから、通信がきた。凛とした女性の声が聞こえた。
（やべ！俺の所属て何になってんだ？神様からは、戸籍と、地位が有るって言われたけど、思いだせ！）
「繰り返す、そこのしろい戦術機の衛士、返答せよ。返事が無い場合は、所属不明として撃墜させてもらう」

（やば！やば！ヤバい！俺の周囲に、激震やら、イーグルやらが、寄ってきたよ！明らかに３６？突撃銃が、グフ・カスタムに向けられてるよ！え～とえ～と、！思い出した！神様知識くれるの遅い！
え～と大佐ね俺、国連軍独立試験部隊の隊長で、試作兵器の性能試験に来てたのね。これで行ける）
「済まない、此方は、国連軍独立試験部隊メビウス所属不動悠斗大佐だ。現在試作兵器の性能テストを、行っている。確認されたし」

「少々お待ちを。・・・確認出来ました大佐。失礼しました。オープンチャンネルでも、返答が有りませんでしたので」

「良い気にしなくて良い。それより、此方の後方にまだ、民間人が居る。ここは、俺が抑えるから、空いている味方部隊は、民間人の避難誘導に行け」
「な！大佐其れは無茶です！幾ら何でも危険です！）
「下手な足手まといが居るよりは、一人でする方が楽だ」

「しかし！」

「これは、命令だ。俺の回りに居るイーグルより前の型の戦術機は、民間人の避難誘導に当たれ」

「・・・分かりました。ＨＱより各機へ、エリア１４８に居る激震及び殲撃８型は、民間人の避難誘導に順次当たれ。繰り返す」

オペレーターが、各機に指示をだす。
「此方サンダー中隊後退します」
「ブリザード中隊後退して避難誘導に従軍します」「スカイ中隊任務あたります。大佐、武運をお祈りします」

激震等が下がり、イーグルクラスと、俺のグフ・カスタムが、残るだけどなった。
「此方は、フレイム中隊長李大尉であります。不動大佐、たった４８機のイーグルと、大佐の機体だけで此処を持たせるのですか?幾らなんでも無謀だと、思いますが」

渋い感じの男の声がする。「確かに一見すると無謀に思えるが、下手に彩峰閣下に動かれて、指令部が陥落されるよりも、我々が前に出て守るほうが、危険度が遥かに少ない」

「まあ、本部防衛の戦力低下されるよりも我々が動く方が、早いですからね」
「納得して貰えたな。なら三キロ前進して前方から来るＢＥＴＡどもを、狩りにいくぞ！」
「「「「ｓｉｒ！ｙｅｓ！ｓｉｒ」」」」
俺達は、前進を開始した。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

李大尉ｓｉｄｅ

私は、大東亜連合軍所属の李大尉だ。今、私有り得ない物を見ている。
私の部隊がエリア１４８に向かう途中に、まだ民間人が取り残去れているとの通信があった。現在光州作戦は、佳境に有った半島脱出作戦と、ＢＥＴＡの迎撃。正直作戦は、遅々として進んでいなかった。「隊長、作戦が余り芳しくない、様ですな」
「そうだな、副隊長。民間人がかなりごねている様だ」
「良いですな、頭の中が温かい奴らは。前線戦う、うちら衛士の身にもなって欲しいもんだ」
「そうだそうだ」と声が上がる。まあ、私からしても部下の命を預かる身としては、勘弁して欲しいが、残ろうとする民間人の気持ちも、分かる。どうせ、此処で生き延びても、衛星状態の良くない難民キャンプに、押し込まれるだけだ。どうせ死ぬんなら、自分たち

の住んで居た国で、死にたいよな。その気持ちは、皆に有るだが、私は軍人で有り上からきた命令に従うだけだ。
「お前達もうすぐエリアに着く、武器をオールグリーンにしな。全機行くぞ」
「了解！」

現場に着いた俺達を待っていたのは、５００体は居たで有ろうＢＥＴＡの死体と残ＢＥＴＡと戦っていた見たことのない、白い戦術機だった。

李大尉ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

「そこ、迂闊なやつめ！」
俺は今、要撃級（グラップラー）と交戦している。
コイツは、顔みたい尻尾振り回してくるから、結構戦いずらい相手だ。まあ、射撃武器なら、楽に殺れるし、格闘なら合間を縫うようにして、やれば良い。
右手に持ったＭＭＰ８０マシンガンを、要撃級に合わせてトリガーを、引くダダダタと、小刻みにマズノズルフラッシュが発生し、要撃級をミンチに変える。
「不動大佐。敵の殲滅を完了しました」３６？突撃銃で同じく要撃級を、撃破した、李大尉から通信が入る。
「了解。此方も確認した。どれくらい残った？」
戦力確認を、行う。残った機体よっては、後退も視野に入れなければならない。

「フレイム中隊残機８機です」
「トルネード中隊残機１０機であります」
「リバー中隊残機９機ですね」
「ウイング中隊残機６機しか居ません」

「ウイング中隊の被害が大きい。１０００体ものＢＥＴＡ相手に、支援砲撃なしで良く頑張った。ＨＱ、ＢＥＴＡの殲滅及び民間人の退却は、終了した。指示をくれ」

「此方ＨＱ、全民間人の退却に成功した。また、指令部の防衛にも成功した。　此れより、各機は当初予定の港より脱出せよ。極東国連指令部は、本部施設の放棄を決定し、朝鮮半島から完全撤退する。　３０分ほど前に撤退を開始した。そちらの部隊が最後尾なので、急ぎ撤退を、開始してください」

「了解。各機聞いたな。俺達が、最後尾だ。俺が、殿をするから、ウイング中隊から、順次退却開始だ」

「了解しました。ウイング中隊各機最大戦速で退却するよ！」
「了解」×６

「次にリバー中隊先に行けそちらの部隊の破損が酷い機体が多い」

「すいません。リバー中隊全機港まで帰還だ」
「了解です」×９

２つの中隊がブースト吹かして南に飛んで行った。段々とブーストの光が小さくなっつて行く。
「行きましたね」

「そうだな、大尉。よし、トルネード中隊及びフレイム中隊は、退却を開始せよ」

「了解しました。大佐どの。トルネード中隊全機帰還だ」

「了解です」×１０

「不動大佐、お世話になりました。この戦いで生き延びれたのは、大佐のお陰です」

「違うぞ大尉。大尉の実力が有ったからこそ、生き残れたんだ。それを、忘れないでくれ。俺は、一切指揮は、執っていないのだから」

「ありがとございます大佐。では、失礼します」

「うん。また、何処で共闘出来ると良いな」

お互いに敬礼しあった。

「フレイム中隊全機家に帰るぞ」

「ｙｅｓｓｉｒ」×９

最後の部隊が飛びたっていった。ブーストの光が小さく見えるなるまで見送った。

「さて、俺も撤退しますか。ＨＱ聞こえるか？」

「此方ＨＱです。どうしました？」

「最後尾の不動大佐だ。対東亜連合軍の撤退を確認した。俺の撤退する港の指示をくれ」

「了解。不動大佐はその間、釜山港に撤退してください。国連と帝国軍は、そちらから退却しています」

「了解しました。此れよりそちらに合流します」

（さーて、帰るとしますかね）

俺もまた、グフ・カスタムのスラスターを吹かして空を飛び、釜山港を目指した。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第一話（後書き）

連投するつもりが、難産になってしまった。

第二話（前書き）

やっとできた。有名な人が登場します。本分は、短いです。どうぞ。

第二話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は現在光州作戦に参加した後、国連指令部の命令に従い釜山に向かい殿をしつつ東に進軍していたが、流石に長期間の戦闘と極度の緊張感に俺はグフ・カスタムを近くの川辺に寄せ休憩をとっていた。

「ふー、流石に疲れたな。初戦闘がまさか光州作戦とわ」

（ぶっちゃけオルタネイティブやっていたけど、触り位で殆んど知らんかったが俺の介入で彩峰閣下の部隊は民間人の救出には参加せず、国連指令部も陥落しなかった。もしかするとクーデターが発生しなくなるかもしれない）

改めて、俺の介入が歴史のイレギュラーになったのは確実だ。

（正史道理に行かないが、少なくとも良い方に動けば良いのだかな）

だが、楽観視するのは早計だ。もしかしたら世界の修正力が働くかもしれない。

（結局の所、２００１年の１０月２２日に『白銀武』が来てみてからじゃないと、どうしょうもないと言うことか）

そんな事を考えて「そこまで待たんでも良いんじゃぞ」・・・と、声が聞こえた。俺は、素早く腰のホルスターに有るデザートイーグルを取り出し周囲を確認する。

（右・クリア。左・クリア。前方・クリア。後方・クリア。おかしい？誰も居ないのに、声が聞こえたんだか？気のせいか？）

「気のせいちゃうで。儂やゼウスや」

頭の中に声が響く。

「ゼウス？・・ああ！神様か」

「そうじゃ。今、お主の頭に直接話しかけておるのじゃ」

「いきなりですね。それで何の用ですか？」

「うむ。お主に能力を授けたのは覚えておるの？」

「はい。３つ頂きました」

「実はのう、２つ目の能力に人物を呼び出せるだけだったのが、儂のミスで兵器なんかも持ったこれるようになっちった。テヘ＝☆」

「うわ！キモ！！て、そうじゃねえや！神様のミスて、別に俺が不利になるようなミスじゃないですよね」

実際考えてみれば、別に補給や戦力強化がしやすくなっただけじゃん。寧ろＢＥＴＡのや俺と敵対した奴等が不利になるだけじゃん？

寧ろ喜んで受け入れられるよね！

「まあ、ミスしたのは儂じゃからお主が良ければそれでよいが。あと此を渡しておくぞ」

何やら俺の右腕が光だしたと思ったら、腕時計がされていた。

「この時計はいったいなんですか？」

唯の腕時計貰ってもどうしようもないんだけど。

「うむ。その時計はのう、お主の能力を発動させるためのアイテムじゃ。何なら今、誰か呼んでみるがよい。安心せい。お主が呼んだ人物は、お主に忠実に従うようになっておる」

うーん、凄いよ神様。アフターケアしっかりしてるよ！てか、そんなアイテム此処に送る前にくださいよ！危うく死ぬかとおもったよ！てそんな事は、後回しにして誰を呼び出しますか？

（１人だと寂しかったから、ベテランで安心感の有る人を呼ぼう。そうなると、俺の機体より前の機体が良いからあの人達にしよう！）

「神様！決まったよ！どうやって呼ぶの？」

「お！決まったか。呼び出す方法は、腕時計を装備した状態で呼び出す人又は物を頭に浮かべれよい。そうすると出てくる」

よし！やりかたが分かった。思い浮かべるはあの人、二つ名は青い巨星、ランバ・ラル大尉。機体は、ＭＳ－０７Ｂグフ。

その部下、アコース少尉　機体は、ＭＳ－０６Ｊザク？Ｊ型。同じく部下の、コズン・グラハム少尉。機体は、同じくＭＳ－０６Ｊザク？Ｊ型だ。

俺は、ファーストガンダムに出てくるエースパイロットと、その部下でベテランパイロットの三人を呼ぶことにした。　回りが光ったかと思うと、目の前に三機のＭＳと三人の男達がいた。

「どうやら呼べたな。なら儂は帰るから、後は頑張っるのじゃ」
神様はそう言って話しを切っていった。
「そこの若いの？あんたが俺達を呼んだのか？」
コズン少尉が俺に声をかけてきた。
「ああ、そうだ。自己紹介をしよう。国連軍所属独立試験部隊メビウス所属の不動悠斗大佐だ。君たちの上官になる」
ランバ・ラル大尉達に、そう告げると皆驚いていた。
「ほう～、時代が変わった要だな。君みたいな青年が大佐だとわ」
やべ！ラル大尉の名台詞を生できけましたよ！　メッチャ嬉しいわ！
「済まない、失礼な発言だったな」
「いえ、ランバ・ラル大尉からすれば、かなり若い男が上官とくれば、そう言いたくなると思います」
「なかなか、太っ腹な男だな気にいったぞ」
「いえいえ、所詮まだ若輩の身ですから、ランバ・ラル大尉達に教わる所が多いと思います」
「その謙虚な姿勢、ますます気にいったよ。確か悠斗と言ったな。これから貴様は私達ラル隊の仲間だ」

「ありがとうございます。ラル大尉」

やった、原作のア？ロみたいになんか気にいられたよ！ラル大尉達と一緒なら全然怖くないぜ！

「それで、これからどうするんですか？大佐殿」

「そうだな。現在俺は光州作戦に参加して撤退中だったな」

「撤退中？それなら早いとこ危険エリアから脱出しないと、ヤバいんじゃないんですか？」

「そうだな。詳しい話は移動しながら行う。よし！全員機体に搭乗せよ」

俺が指示を出すと、三人とも自分の愛機の基にいき、コックピットを開け機体に入っていった。俺もコックピットハッチを閉め、グフ・カスタムを起動させた。

「よし。全機起動したな？」

「此方ラル大尉。グフは問題無く起動した」

「アコース少尉であります。ザク？システムに不備なし。完全に起動しました」

「よーし。コズン少尉、感度良好であります」

「よし。全機の起動を確認した。三人に聞いておくが、ＢＥＴＡに対する知識は有るのか？」

「大丈夫ですぞ。呼び出された時に、ＢＥＴＡに対する知識は貰ってある。また、奴等の姿や個々の能力も分かっている。安心してもらいたい。私達は元々ゲリラ屋だ。戦争に対する慣れは、１日の長がある。安心して背中を預けていい」

「そうか。唯の杞憂だったな。ならば、全機出撃。目的地は脱出予定の釜山港だ。陣形は、俺のグフ・カスタムと、ラル大尉のグフが前衛。アコース少尉とコズン少尉のザク？が後衛だ。各機死ぬんじゃないぞ！」

「「「了解」」」

俺は新たな仲間達と共に、一路釜山を目指して進軍を再開した。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第二話（後書き）

次回は、釜山までいきたい。

第三話（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。こんな、駄文ですが、頑張って行きたいと思います。本編を、どうぞ。

第三話

朝鮮半島南部釜山港。
現在、朝鮮半島からの脱出のために、日本海がわから帝国海軍の戦艦六隻からなる脱出支援艦隊が砲撃を行いながら、脱出船の出港を支援していた。

帝国軍衛士ｓｉｄｅ

俺達は、現在撤退する友軍部隊のために、前方から迫りくるＢＥＴＡ相手に死闘を、繰り広げていた。

「クソ！脱出地点は、目のなのに、なぜ撤退許可がおりない！」

戦術機を、操作しながら許可を出さない指令部に悪態をつく。

「隊長、悪態つくのは良いですけどＨＱにも聞こえてますよ」

「そんなこと位分かってる！撤退許可がおりなきゃ、俺達は下がれないんだぞ！」

「確かに。此処まで来て犬死になら、やってられませんよね」部下からも、似たような返事が帰ってくる。４８機の戦術機と、戦車６０台だけで、防衛ラインを維持しているが、崩壊も時間の問題だ。

「ＨＱ、支援砲撃をもっと増やせないのか！」

「現在最大火力にて、砲撃している」

「クソ！まともな、支援さえ出来ないのかよ！」

「口を慎め。現在最大火力にて砲撃しているんだ。現時点では、其が精一杯だ」

ち、ＨＱからの冷静な声が余計俺を苛立たせる。

「全機聞こえたな。現在これ以上の支援は、望めない。全員死ぬ覚悟は、で来てるな！」

「隊長、何時でも出来てますよ。」

「出来てるよ」「衛士になった時にしましたよ」等と、部下達から聞こえてくる。此れから死に行くのに、気にしてないような連中だ。

「全員聞け。我々は退路確保の為に捨て子間になるだろう。最後まで帝国軍の意地を、見せるのだ！」

「「「「「「「「「「「「了解！（です）」」」」」」」」」」」」

良い感じで士気は、上がった。あとは、撤退命令が出るまで、踏ん張るしかない。

「前方から、お客さんがきました」

「よし！全機兵装自由に使え、お客さんを1歩もこの先に行かすな！」

来やがれＢＥＴＡ！ぶっ殺してやるからよ。必ず生き残ってやる。

部下達も必ずだ！

「ＨＱより各機へ、此れより制圧支援砲撃を行う、各隊は砲撃に注意せよ」

戦艦群から、砲撃が行われる。地面を走るＢＥＴＡ達をミンチに変える。砲撃の影響で、地面が大きく揺れる。ガタガタと機体が小刻みに動く。

「ヒュ～、隊長これなら生き残れそうですよ」

「ああ、だが油断するなよ。面制圧で、全部のＢＥＴＡが死んだとは、かきらんからな」

「はは、そうですな」

此方に、前進してきたＢＥＴＡは、全て死体とかしていた。たが、先程の砲撃で震動計が、使い物にならないのが、ＢＥＴＡが全滅したからさほど、気にかけていなかった。　だか、この時もっと注意しておけばよかった。奴等は、地下深くを進行してくることを。

「ん？なんだこの、小刻みな揺れは？」

「どうした？」

「隊長。今、揺れませんでしたか？」

「面制圧を、したんだから揺れるだろう」

「はて？気のせいだったかな？」

「安心しろ。上手くいけば、このまま退却できるかもしれん」

「ＨＱより各機へ、ＢＥＴＡ全滅を確認。全機戦術機搭載空母に帰還せよ」

ＨＱより退却指示がはいる。洋上に近い戦術機部隊から、退却を始めたその時だった。ドーンと、大きな音と共に地面が膨れ上がり、土が上空に高く舞い上がった。

「しまった！ＢＥＴＡの地下進行だ！」

誰かが、そう叫んだ。次の瞬間空を飛んでいた、部隊が光に包まれた。

「いかん！光線級（ルクス）だ！空を飛んでは、いけない！」

はっと！して回りを確認する。光線級の攻撃で空を飛んで空母に戻ろうとしていた、２個中隊の激震が墜落して残骸になっていた。

「クソ！あのとき気にしていれば！」

「隊長！後悔は後にしてください。それより、早く戦線を建て直さないと！」

「分かっている！残っている機体は２機編隊（エレメント）を崩すな！ＢＥＴＡに潰されるぞ！」

素早く部隊を、立て直す。此処で、崩れると待っているのは、全滅だ。

「隊長！戦車隊にＢＥＴＡが向かっています！」

いかん！戦車隊が全滅したら、戦車による砲撃が無くなり、戦線が崩壊する。

「戦車隊、素早く後退しろ」

ＨＱから、指示が与えられるも、時速１００キロで迫る突撃級に距離を、詰められる。戦車は、後退速度が遅い。そのまま突撃級に踏みつぶされる。「助けてくれ！」「死にたくない」「来るな！くるな！」等と無線から、断末魔が聴こえる。まさに地獄のようだ。

「ＨＱより各機へ、戦車隊は全滅した。此れより戦艦隊は、後退する。戦艦隊が安全距離に退却するまで、光線級の排除にあたれ」

ＨＱから、理不尽な命令がくる。たった、２個中隊で光線級の排除だと？冗談も大概にしろ！光線級に行くまでに、突撃級（デストロイヤー）、要撃級（グラップラー）、を、排除しなきゃならん。

「支援砲撃は、出きるのか？」

「現在ＡＬ弾に交換作業を、行っているが、２０分ほどかかる。それまでは、支援できない」

「チクショウ！このままじゃ、全滅するぞ」

「何とか頑張ってくれ。ＢＥＴＡの数が判明した。およそ５００だ」

５００体だと！勝てるか！２個中隊では、余りにも多すぎる数だ。

「隊長。隊長！聴こえますか！」

「なんだ！」

また、何かあったのか？　もう、うんざりだ。これ以上悪くなんでほしい。

「南西方向から友軍反応が近ずいています」

「友軍？まだ、我々以外にも撤退していない、部隊が有るのか？」

「どうやら、あるようです。反応は、４機です」

１個小隊が、取り残されていたのか？そう考えていると、「隊長前！」はっ！前を見ると、要撃級の腕が俺の目の前に迫ってきている。避けれない。スローモーションで、腕が迫る。死んだな。そう感じて、眼を閉じようと「諦めるな」そう、声が聞こえた瞬間目の前赤い花が咲いた。

帝国軍衛士ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

遡ること、３０分前。俺達は釜山手前、五キロ地点の海岸沿いにいた。

「よし。一旦行動停止する」

「大佐？何か有りましたか？」

アコース少尉が、周囲警戒を、行いながら聞いてきた。

「脱出の準備を、行う」

「脱出の準備したらですか？」

ラル大尉も不思議そうだ。

「ああ、我々は脱出船がないのでな。これから、呼び出しますよ」

「ほう？誰を呼ぶのですか？」

「少々お待ちを」

俺は、思い浮かべる。潜水艦艦長ドライゼ中佐。潜水艦はユーコン（Ｕ－９９型）隊員は、デラーズ・フリート兵多数（Ｇジェネレーション）から。回りが光ると、其処には接岸され、係留されたユーコンとドライゼ中佐に船員のデラーズ兵達だった。

「ご苦労様です。大佐。ユーコンの艦長をさせてもらいます、ドライゼ中佐であります」

スッと、敬礼するドライゼ中佐と、デラーズ兵達。

「ご苦労中佐。君の上官に当たる不動悠斗大佐だ。よろしくたのむ」

此方も、敬礼で返す。

「大佐、我々はなにをすればよろしいですか？」

「ドライゼ中佐。貴殿には、新型潜水艦ユーコンU－９９型を与える。貴殿達は、艦て沖に出たあと合図が有るまで、潜水して待機していつくれ。合図が有りしだい、我々を回収し秘密基地まで退却する」

「了解しました。それでは、直ぐに出港準備に入ります」

「頼みます。我々は、釜山まで行きますので、そちらでお会いしましょう」

「解りました。御武運を」
互いに握手を交わす。その後、ドライゼ中佐達は、潜水艦に乗り込み出港していった。

「此方も、出発する。釜山を目指すぞ」

「「「了解（だ）」」」

一路釜山を、目指して前進を開始した。
３０分後、俺達は釜山に到着した。

「ラル大尉。釜山に着いたので、指揮をお願いしたいのですが？よろしいですか？」

「どうしてですか？

「流石に、戦闘経験の短い私が指揮をするより、ラル大尉の方が良いと思いまして」

実際、指揮経験のない俺が指揮を執るのは、無理だから。此処は、ラル大尉に任せるのが、安心だ。

「解りました。では、私が指揮を執りますが、大佐は、オブザーバーでお願いします」

「解りました。何かあれば、対応します」

「大佐、これも指揮訓練の一環みたいなものですよ。実戦経験の有る貴方なら、直ぐにできますよ」

「それなら、良いのですが、」

ドーンと大きな音がした。

「アコース、何事だ！」

「ラル大尉。友軍が面制圧のための、砲撃支援を行った模様です」

「いかん！ラル大尉、ＢＥＴＡが地下進行をしているかもしれない。急がないと」

「そうですな。よし、私と大佐が前衛を行う。アコースとコズンは、後衛だ」

「了解しました」

「了解であります」

「分かりました大尉」

即座に噴射行動を行いながら、友軍がいる地点まで前進する。すると、１機の激震が今まさに要撃級の攻撃を、喰らいそうになっていた。「諦めるな」俺は素早くガトリングシールドを、要撃級に向けて放つ。キュイーンと言う音がすると砲身が回り初め、ダタダタと弾が発射され、要撃級に紅の花が咲いた。

「良い判断です。そのまま、一気に前に出ますぞ」

ラル大尉の指示の元、俺は前に出る。シールドから、ヒートサーベルを抜き要撃級を、切り捨てる。ガトリングシールドで他にもいる要撃級を射殺し、群がってくる戦車級（タンク）を、頭部バルカンてミンチにする。仲間を見て見ると、ラル大尉は、ヒートサーベルで、要撃級を切りながら、背中を向けている、突撃級をフィンガーバルカンで射殺している。アコースは、クラッカーを投げて要撃級を倒しながら、回りの小型種を巻き込んでいる。コズンは、１２０?マシンガンで、突撃級を滅多うちにしていた。

「大丈夫か?」

助けた激震の衛士に声をかける。

「ああ、お陰て助かった。ありがとう」

「気にするな。それより、早く脱出しなさい。ここは、我々が抑える」

「此方も下がりたいのだが、許可がおりない！」

「任せろ。ＨＱ聴こえているな」

「此方ＨＱ。聴こえていた。大佐殿よろしいのですか?」

「構わん。早く撤退させるんだ」

「了解しました。ＨＱより各機へ。帝国軍戦術機は、空母へ撤退せよ。繰り返す」

「許可が、降りたな。早く脱出して行きたまえ。後は、我々が引き受けた」

「すみません、大佐殿。よし！全機撤退だ。飛行高度に気をつけながら、空母に帰還せよ」

「すいません、撤退します」

「後を頼みます」などと言った通信が入り、激震が空に飛びたち、空母へと帰還していった。

「よし。帝国軍は、撤退を完了したな」

「大佐殿。光線級の排除を、完了しました。残りは要塞級（フォート）と、小型種だけです」

「了解だ。アコース少尉」

残り少ないＢＥＴＡ。後方から、ゆっくりとした速度で要塞級が３体迫ってくる。要塞級の中には、光線級が入っていることがあるため、油断できない。

「小型種より、厄介な要塞級が残りましたな」

ラル大尉の言う通りだ。体長６６メートルはある、要塞級は、モー

ス硬度１５以上あり、生半可な攻撃は効かない。また、下にある触角は、戦術機すら簡単に溶かす溶解液を出すので、かなりの脅威だ。

「ラル大尉」

「どうしました？大佐」

「俺にやらせてもらいたい」

「何故ですか？」

「試してみたいな事があってな」

「分かりました。後方から、援護します」

「すまない、大尉」

そう言って、ブーストダッシュして、要塞級に接近する。

「く！でかいな。だが、負ける訳には、行かないんでな」

そのままの勢いで、ブーストジャンプして、右手に握っているヒートサーベルで、首を切り落とす。ズブシャと言う音と共に、首から血が吹き出し体から、切り離しされた首が地面に落ち、ズドーンと音がした。頭から切り離しされた、体は立ったまま血を流していた。

「まず、一匹」

上に上がった俺は、機体を左に向け、一気に近ずきヒートサーベルで、頭を、切り裂いた。

「オマケだ、持っていけ！」

下に落下しながら、ガトリングシールドを起動させ、切り裂いた頭に、銃弾を浴びさせる。ガカガと音と共に、要塞級の頭から、ビチャビチャと血が吹き飛ぶ。頭を、潰された要塞級は、そのまま絶命した。

「二匹め！」

一旦着陸して、再度ブーストジャンプをして、最後の要塞級の懐に入る。　触角が、近づいいてくるが、クイックブーストで左に避け、ヒートサーベルで切り落とす。反転して、そのまま左足を五本全て切り落とし脱出する。支えを失った、要塞級が左に傾きながら、倒れる。ズドーンと大きな音がした。ヒートサーベルを仕舞い、腰のマウントからＭＭＰ－８０？マシンガンをとりだす。

「これで、ラストォォォォー！」

ガトリングシールドとＭＭＰ－８０？マシンガンが火を、吹く。密集した弾丸が、要塞級に降りそそぐ。要塞級は、その嵐のなかで絶命した。

「ＢＥＴＡの全滅を、確認しました。大佐、お疲れ様でした」

「ありがとうアコース少尉。周辺警戒を怠るな。ドライゼ中佐聴こえるか？」

「此方ユーコン艦長、ドライゼです。聴こえております大佐」

「よし、迎えに来てくれ。全機収容後、太平洋秘密基地に向かう」

「了解しました。直ぐに参ります」

そう言って通信を、切った。その後、迎えに来たユーコンに、収容され釜山港を、離れた。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第三話（後書き）

頑張ってみた、戦闘描写。もっと上手くかきたいです。誰か、作者に文才をくれ！

第四話（前書き）

感想ありがとうございます。m（＿＿）m今回も捏造設定などがあります。では、本編をどうぞ。

第四話

悠斗ｓｉｄｅ

無事に釜山港を出港できた俺達は、艦内にて休息をとった。脱出から3日たち、パイロットの休息も十分だと判断した俺は、ラル大尉とドライゼ艦長と共に、今後の予定を協議するため、現在誰も居ない食堂にて、珈琲を飲みつつ話し合いを始めた。

「さて、会議を初めよう。ドライゼ艦長、説明を頼む」

「畏まりました。現在本艦は、東シナ海を抜け太平洋に浮かぶ秘密基地に向け、進路をとっております。到着予定は、明日のＡＭ０８時００分と予定しています」

「ふむ、かなり遅いのではないのか？」

「ラル大尉。秘密基地に向かう以上、秘密基地の存在を他の国、特にアメリカ等に知られては、困りますので、このようにゆっくりとしか、動けないのです」

「そうだったな。すまない艦長、私が軽率だった。しかし、厄介ですな」

珈琲を飲みながら、眉間にシワを寄せている。ドライゼ艦長を見て見ると、彼も眉間にシワがよって、厳しい表情をしていた。

「何が、厄介なんだい？」

「悠斗大佐、アメリカの存在がですよ。かつての地球連邦のようなものですよ」

「確かに、あの国は戦後の世界統一の事が頭にあるせいか、自国こそが正義と信じて止まない国だ。だから国連軽視と、言われるのだからな」

事実、オルタネイティヴの世界では、他国の領土に勝手にG弾を投下するは、クーデター軍を裏から操るは、セコいことと卑怯な事ばかりしていたからな。大国が聞いて呆れる。結局のところ、自国を戦火に巻き込みたくないだけでなく、世界の王になろうとしているし、力があるぶん、質が悪い。確かに、力で抑えつける考えかたは、地球連邦とよく似ている。そのやり方が後々、組織の腐敗を増長させて、ティターンズを生み、エゥーゴとの戦争に発展していくんだよな。

「まあ、アメリカ等の戦いも覚悟する必要は、あるだろう。其よりも、艦長に頼んでいた件の方を、教えて欲しい」

「そうでしたね。話が逸れましたね。大佐に指示された件のですが、第４計画は日本主導で行われています」

（よし！ここは、ゲームと変わらなかったな）

「またアメリカは、予備計画を国連に提出し、現在議論がされていますが、恐らくアメリカやアメリカ派の国々の工作で、安保理で採択され、賛成多数で可決されると思います」

（所謂、第５計画か。五次元効果爆弾（G弾）による、ＢＥＴＡ殲滅とバーナード星系への移住計画が、セットになっているんだよな。

まあ、第４計画が挫折したら発動すんだけど、そんなことさせないから、いいけどね。神様から、００ユニットの作り方教えてもらってるし。まあ、白銀武が何周目かにもよるけどね。２週目なら、精神が未熟だから、ＢＥＴＡに対するトラウマを、克服してもらう必要があるだよな。もし、テンプレならＳＳなんかに有るような、３週目なんだと楽だから良いんだけどな）

ついつい、思考を違う方に向けてしまった。

「大佐？大佐？聞いてますか？」

「え！はい？」

何やら、ドライゼ艦長が話していたが、全く聞いていなかったため、変な返事をしてしまった。

「悠斗大佐。聞いてなかったんですね」

「はい。すみません」

顔に、手をあてる二人「やれやれ」といった表情だ。

「大佐、会議なんですから確りしてください」

「そうですぞ。キチンと聞いておかなければ、後で自身が苦労することに、なりますぞ」

はい。怒られました。俺確かに、階級こそ二人の上になるけど、頭が上がりません。ベテランの経験に勝るものなど無いのですから。

「まあ、大佐も覚えるのが大変でしょうが、頑張って覚えてくださ

い」

ドライゼ艦長とラル大尉の二人が、馬鹿息子を見るような目で俺を見ていた。やめて！俺のライフは、もう0よ！お説教されるのは、苦手なんです。（涙）

「もう一度、説明し直します。この世界での、不動悠斗大佐についてです。　まず、生まれは、大日本帝国。不動家の三男です。ちなみに、不動家は斯衛に属しています」

え？なんて、言いました？今俺のお家は、斯衛に属している？つまり、武士の家系ですか？？神様あんた、なんてことしてるんですか！！

「家族は、父と母それに兄が二人がです。斯衛での色は山吹色です。父は斯衛軍中将。長男が斯衛軍少佐。次男が帝国軍大尉です」

ちょっと待て。俺の家の家系は、そんなに軍属ばかりなのか？下手したら、戦場で共闘するとかしたらマジで、あり得んぞ。この世界の俺の記憶って無いから、神様からの補助待ちになるから、ボロが出るぞ！とりあえず、珈琲を飲む。口の中に、仄かな酸味と強い苦味が広がる。

「同じ斯衛の中に、幼なじみが五人います。まず、煌武院悠陽殿下。次に、御剣冥夜様。斯衛軍赤の月詠真耶、　従姉妹の月詠真那。山吹の篁唯依の五名です」

どんだけご都合主義ですか！！神様あんた、もう少し考えてから、設定しといてくれよ！普通に胃に穴があきそいだよ。危うく、珈琲吹くところだったよ。

「ゲホゲホ、ゴッホゴホ」
「大丈夫ですか？大佐！」
ラル大尉が透かさず立ち上がる。
「大丈夫だ。嘘せただけだ」
「そうですか」
座り直すラル大尉。すいません。嘘せた事よりも、自分のご都合設定しますの方に俺はビックリです。
「続けますよ。大佐は、十二歳で国連軍に入隊。この時、斯衛とモメたらしいですが、父親のごり押しでそのまま国連軍に入隊したそうです」
うん。そうだろね。普通、斯衛の人間なら斯衛軍に入隊させるか、駄目なら帝国軍でしょうね。其れを、国連軍にねじ込むお父様の方が、俺は凄いと思うよ。てか、五摂家キチンと止めろよ！斯衛の山吹の人間を、外にださせんなよ！組織として、管理しろよ！
「衛士適正では、歴代一位を記録し、訓練学校時代は、格闘訓練で上官を圧倒し、戦術機訓練でも高い評価を受けています」
まあ、ユウ・カジマの肉体ですから。一応シュミレーターとはいえ、アムロ・レイの乗るガンダムを倒していますから。
「その後、十四歳で初陣。初陣の時の作戦は、九一六作戦に国連軍の増援部隊として激震に乗り参加。部隊は壊滅するも、３００体のＢＥＴＡを撃破する戦果を、上げる。この作戦の戦果により、二階

級特進により、大尉となりす」

スゲー！激震でその戦果上げるなんて、どんな化け物だよ！ＸＭ－３無しで、やったこの世界の俺どんな人間だよ！

「この作戦を皮切りに、１９９４年インド亜大陸撤退戦、１９９７年アラビア半島撤退戦、同年スエズ運河防衛戦に参加し多大なる戦果を上げる。また、１９９６年に、ＭＳザク（旧ザク）を開発、性能テストを行う。当初のザク（旧ザク）の性能のレベルは、１．５世代機と同等と判断される。尚、小型核反応炉の情報は、ブラックボックス化されているため、現在この世界では、量産されていない」

凄いな！旧ザクは、この世界で普通に認められてるよ！核反応炉造るのもこの時代でも有り得ないよ。宇宙西暦まで、待たなきゃならんのにな。まあ、今の愛機のグフ・カスタムもチート機体だし。てか、グフ・カスタムが光の翼が使用可能てどうだよ。ジェネレータ出力７３５０キロワットて、出力余りすぎだよな。まあ、反省も後悔もしてないけどな。

「１９９７年、ザクの改良型の開発に成功。機体名は、ザク？ＪＣ型と名ずけられる。ザク？は中東での戦いで、使用され注目を浴びるも、高コストが原因で一般には、量産されていない。戦術機レベルは第３世代機と評価される」

まあ、ジオン公国の傑作量産機ですから、それぐらいのレベルでしょうな。まあ、反応炉積んだりしてる時点で普通につくれません（汗）

「１９９７年、国連事務総長直轄部隊の部隊長として、召還される。この時昇進して、大佐となる。この部隊には、独立作戦許可があり他国の戦闘に積極的に介入する事が許可されている。また、如何なる国または、組織であってもこの部隊に係わる技術を強要することはできず、人事件も持っているため、他国軍からでも人員の引き抜きが出来るとのことです」

はあ？なんですかそれ！アメリカさんでも、俺から技術を強要することができないし、俺は他人から戦力引き抜き放題ですか。神様、あんた自身アフターサービス良すぎてしょ。これで、勝てなきゃ俺単なる、ザコじゃん！頑張ろう。

「とまあ、こんな感じですよ。大佐の軍歴は何処を見ても、エリートですよ」

「さすがですな。パイロットだけでなく、技術者としても一流なら、陽のうちようがありませんな」

「ハッハッハー」と、笑う二人に俺は苦笑いしか、できなかった。しかし、この後秘密基地で更に、驚く羽目になるとは思ってもいなかった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ラルｓｉｄｅ

今私は、自分を呼んだ悠斗の軍歴をドライゼ中佐より、説明されていた。　かなり若い大佐だが、軍歴を聞くと華々し戦果を持っていた。これくらい優秀な、若手はなかなかいない。まして、上官でありながら、技術者でもある。これから先が楽しみで仕方ない。ハモンが居れば、このような子供が欲しいと言うだろうか？基地に着いたら、呼んでもらうように頼んで置こう。悠斗のような若手を、戦場に駆り立てるような世界か。我がジオンも同じであっただろうが、やはり若い命が散るのは良くないな。まあ、悠斗が無理をせんように、注意しながら見ているか。まあ、お節介だろうがな。親馬鹿なのだろうか？

ラルｓｉｄｅｏｕｔ

ドライゼｓｉｄｅ

私は、船乗りとして、色々な人間を見てきたが、彼ほど異質なのは初めてだ。エースパイロットだけでなく、技術者でもある、まさにエリートのなかのエリートだ。大半の奴はエリート意識を持つと、録な奴にならんが、彼は違った。下の指摘をキチンと受け入れられ

る人間だ。彼が、このまま出世して実戦経験を、沢山踏めば、よい司令官になるだろ。その指揮のもとで戦い続けたいが、反面まだ、メンタル面が弱いのは、仕方ないな。此方も鍛え上げて行けば良いか。時間は、またあるのだから。

ドライゼｓｉｄｅｏｕｔ

第四話（後書き）

次回は、秘密基地での話になります。

第五話（前書き）

やっと出来ました。独自設定と独自解釈、ご都合主義満載です。本文を、どうぞ。

第五話

悠斗ｓｉｄｅ

午前８時。我々は、秘密基地潜水艦ドックに帰港した。秘密基地はメガフロートで出来ており、島の大きさは、長さ百キロメートル、横幅百キロメートルの巨大な海に浮かぶ断崖絶壁でできた要塞島になっており、島北部から中央部まで軍事基地になっており、南部は民間人が住める環境になっている。基地の中の設備は、潜水艦ドックと洋上艦ドックはセットになっており、島の中に大空洞があり、その中に入ることで存在を、秘匿するのが可能であり秘密工作などをやられにくい利点がある。出入口も八ヶ所あり、出港も入港もスムーズに行える要になっている。警備も万全で、島の至るところに湾岸砲がメガ粒子砲の隠し銃座がセットされており、その他に隠しミサイルランチャー、隠し大型ガトリングガン銃座が島の全土に隙間なく配置されており、所属不明の船や航空機や人間が、半径百キロ以内に感知されると即座に自動排除を行ってくれる。うん。夜も安心して寝れるね。次に地上施設だけど、滑走路が、南北に延びていて全部で６本あり、マスドライバー（シャトル打ち上げ場）は、３ヶ所ある。横浜基地より、でかくて大きい。宇宙軍設立しても楽々打ち上げできるよ。地上ＭＳ収容施設が八ヶ所あり、航空戦力施設が三ヶ所有る。ＭＳ収容施設の広さは、一棟２１６機（２個連隊）入るスペースがある。航空戦力のほうも、同じ大きさである。指令部は２種類あり、地上指令部、地下指令部、の２つだ。地下には、プラントがあり其処で、色々な物が生産可能になっている。電気は、無限原子炉から送られてくる。この原子炉の不思議は、核燃料棒の補充が必要なく、メンテナンスも必要ないということだ。また、この原子炉は何故か、無限のマークが刻まれている。

え?何で上陸したばかりなのに、そんなこと知ってるのかって?神様から教えてくれたチート能力に決まってるじゃないですか。だって俺は今、自分の目の前にいる人にビックリしてますもん。なんで貴女がここに入るんです?これも神様のアフターサービスだとしたら、ご都合にも程があるでしょ。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

初めてまして。私は今、国連事務総長直轄部隊の基地に居ります。私の生まれ故郷のフィンランドは、ＢＥＴＡの手に落ちアメリカでの難民生活を強いられてきたわ。私は、母と妹の為にアメリカの市民権を得るために軍入隊した。私は衛士適正があったおかげで、幾分良い給料をもらっていた。私は所属していたのは、アメリカ陸軍第６６戦術機甲大隊だった。其処には、私と同じような理由で、入隊したアメリカ人以外の人間達で組織されていたわ。上官の少佐はアメリカ人であったけど、差別をするような人では、なかったわ。衛士になって、間もない私に、有る組織が接触してきた。ＣＩＡ（アメリカ中央情報局）だったわ。私の難民キャンプに居る家族を人質にとり、私に工作員になるように、脅してきた。　私は直ぐに、返答はできないと言って待ってもらった。凄く悩んだ、だって家族を人質に取られているし、だけど仲間は裏切りたくない。身も心も、張り裂けそうだったわ。そんな時だった、公園でベンチに座り悩んでいる私に、初老の男性が話しかけてきた。その男性からの、言葉

に驚いたわ。だって行きなり声をかけてきて、私が返事をしたら、
「貴女の家族は、国連で保護いたしました。安心してください」と。
初めは冗談かと思ったけど、私が悩んでいる事は、誰にも話していなかったから、本当だとわかった。何故助けてもらったと、尋ねたら「貴女が衛士として優秀であり、私の依頼人が貴女達の様な人達を、助けている人だから」と。正直年甲斐も無く泣いてしまったわ。まるで、おとぎ話の白馬の王子様みたいじゃない。本当にあのまさか、あの最年少大佐であり、国連事務総長直轄部隊の隊長で世界最強の衛士として、名高い彼がこんな一人の女の為に動いていたなんて、信じられなかったわ。倒したＢＥＴＡの数は、一万体を越えているとされ、大陸方面の、ありとあらゆる戦場に参加する生きる伝説。また、顔も良くまだ結婚していないから、沢山の国から求婚がくるも、全部断っている人。　そんな彼が、私を助けててくれた。もう、感謝しても仕切れないくらいだったわ。そんなこと考えていたわ。

「不動大佐は、貴女を必要としている。もし良ければ、彼の元に行かないかね？貴女が、望めば直ぐに此方で手を打ちましょう。大丈夫、家族と一緒に移住できますから」

「はい。喜んで行かせてぐたさい」

「分かりました。では、準備して待っていてください。此方から迎えに行きますので」

そう言って初老の男性は、去っていった。私その背中に、礼をして見送った。彼から、連絡が来たのは、二日後だった。
彼の車に乗り車の中で家族と再開した。三人で抱きしめあったわ。聞いたら、ＣＩＡに捕らわれていたら、初老の男性の仲間が、交渉して母と妹を、助けてだしてくれたの。その後、二人に危害が及ば

ない安全な場所で、匿っていた。暫くの間、家族と話していたら車が止まった。降りると、輸送機のＣ－５が待機していた。全員で乗り込み、輸送機が飛びった。機内で一夜を過ごした。次の日に基地にたどり着いた。私は家族と別れ、初老の男性に指示された通りに、基地に向かい潜水艦ドックにて待っていた。すると、８時丁度に、見たことのない潜水艦が、帰港した。私は出迎えの為に、身なりを整えて、待っていてると、ハッチが開き中から、船員が出てきた。最後に出てきたのが、私たちを助けてくださった、不動大佐だった。此方を見ると、驚いた顔をされた。一番乗りが自分たちじゃないことに、驚いたのかしら？これから、挨拶して仲間として頑張らなくちゃ。出来れば、女としてもね。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

えー、潜水艦を降りたらなんと、神様から貰った基地に、原作キャラのイルマ・テスレフさんが、国連軍の制服着て待っていました。なんで？原作キャラいんの？てか、一番乗りが俺達じゃないの？ラル大尉や、ドライゼ中佐は挨拶してるし、他の船員も挨拶してます。取り敢えず、挨拶しますか。

「初めまして、国連事務総長直轄部隊メビウス所属不動悠斗大佐で

す」

「初めまして不動大佐。私は国連事務総長直轄部隊メビウスに本日付にて異動になりましたイルマ・テスレフ中尉であります」

あれ?階級上がってますよ?この人少尉じゃなかったか?

「大佐。この度、私の家族を助けて頂きありがとうございます」

そう言って、深く頭を下げるテスレフ中尉。なにそれ?俺は何にも知りませんよ?あれですか?神様また、なんかしてくれたんですね。まあ、原作だと家族人質にされて、ＣＩＡに使われて死んだからな。まあ、俺の元に来たのは以外だけど、生きて行けるなら、いいか。何にせよ、話を合わせるか。

「いや、テスレフ中尉達家族が無事で良かったよ。君みたいなやさしい人に酷い事をさせようとする、アメリカが許せないからね。気にしなくて良いよ」

「しかし、それでは私の気が晴れません。何か、お礼をさせてください」

弱ったよ。俺、あんまり女性慣れしてないから、テスレフ中尉みたいな、綺麗な人が近ずいてくると、きついんだよ。ちょっと、テスレフ中尉から良い匂いがするし。ヤバイね!ラル大尉や、ドライゼ中佐はニタニタしながらこっち見てるし。てか、見てるなら助けてよ!理性が辛いんですよ。

「テスレフ中尉、少し近くないかい?」

「あ!す、すみません」

顔赤くしながら下がってくれた。ヤベ！ちょっと、ドキッとしたよ。前世は、女性とこうゆうことしたことなかったし。

「お礼の件はまた今度にして、君はどうやって此処に来たんだい？」

いや、さすがにこれは重要だよ。ここは、秘密基地なんだから、何処からか情報が漏れていたら、大変なことになるから。

「はい。私達を、助けてくれた初老の男性に、此処まで連れてきて、頂きました」

「初老の男性？名前は、なんて言っていた？」

「いえ、名前は伺っておりません。家族を案内に向かいましたので、暫くしたら来ると思います」

初老の男性？誰だ？やるとしたら、神様位しか思い浮かばん。待つしかないか。打つ手が浮かばんからな。

「分かった。俺は、佐官室にて作業を行う。テスレフ中尉は、ラル大尉達と共に、指令室に行ってくれ。ドライゼ中佐は、俺に着いてきてくれ、会議を行う」

「分かりました。ランバ・ラル大尉此方にどうぞ」

ラル大尉とテスレフ中尉達は、潜水艦ドックを去っていった。

「さて、人払いはしたから、出てきてください、神様」

「フフフ、よう気がついたのう」

俺の前に、初老の男性の姿をした、神様が出てきた。

「たく、何してるんですか、原作キャラがいたから、マジでビビったぞ！」

「なーに、ただのアフターサービスじゃよ」

「何がアフターサービスだ！俺の寿命がストレスでマッハだよ」

「良いじゃないか、ハーレム作れば良いんんじゃよ」

「絶対いつかぶっ殺す」

「大佐。落ち着いてください」

ドライゼ中佐が、俺を宥める。正直止めて貰わなきゃ殴ってたよ。

「まあ、ワシができるアフターサービスは、此が最後じゃよ。頑張って世界を、救うのだぞ。あと、国連事務総長は、ワシが用意しといた奴だから、安心して良いぞ。じゃあね」

それだけ言って、神様は消えて帰っていった。

「言われへんでも、頑張って世界を救うよ。取り敢えず、人材足りないから呼び出しますか」

すぐさま思考を、切り替える。あとは、なるようになれだ！まずは、デラーズフリート兵五万人（パイロット、整備兵など）司令官に、エギーユ・デラーズ中将、ノイエン・ビッター少将。ギニアス・サハリン大佐。コンスコン准将。ユーリ・ケラーネ少将。フォン・ヘルシング大佐。キリング中佐。エースパイロットから、黒い三連星のガイア大尉、マッシュ大尉、オルテガ大尉。荒野の迅雷、ヴィッシュ・ドナヒュー大尉。ニムバス・シュターゼン少佐。ジオン公国第６位の撃墜記録を持つ、ギャビー・ハザード中佐。トーマス・クルツ大尉。カラカル隊隊長、ロイ・グリンウッド少佐。ジオン公国第８位の撃墜記録を持つ、ロバート・ギリアム大尉。

真紅の稲妻、ジョニー・ライデン少佐。ニュータイプと噂された男、イアン・グレーデン中尉。白狼の、シン・マツナガ大尉。ワンショットキラー、ブレニフ・オグス中佐。ノリス・パッカード大佐。アイナ・サハリン少尉。サイクロプス隊隊長、シュタイナー・バーディー大尉。ミハイル・カミンスキー少尉。ガブリエル・ガルシア曹長。アンディ・ストロース曹長。バーナード・ワイズマン伍長。ソロモンの悪夢、アナベル・ガトー少佐。シーマ・ガラハウ中佐。ケリィ・レズナー大尉（左腕あり）。カリウス少尉。フラナガン・ブーン大尉。クランプ中尉。エリオット・レム中佐、赤い彗星、シャア・アズナブル大佐。ジェラルド・サカイ少尉。マサヤ・ナカガワ中尉。クラウレ・ハモンさん。を、呼び出した。一瞬眩しい光に包まれ腕を上げ、光に背を向ける。光が、収まった後、振り向いて見ると、其処には俺が呼んだ人達が整列していた。ドライゼ中佐は、ビックリしてポカンとした顔をしていた。

「貴殿が、私達を呼んでくれた不動悠斗大佐ですね。私はエギーユ・デラーズ中将と申します」

デラーズ中将は、右手を差し出して握手を、求めてきた。

「はい。デラーズ中将。私が、お呼びしました」

俺も右手を、差し出してガッチリと握手した。

「情報は、既に頂いております。、この母なる地球からＢＥＴＡを、根絶やしにしてやりましょう」

「デラーズ中将。今人類は、危険な状態にあるのに今だに一つになれていません。今は、力を蓄える時期なのです。かつて、あなた方が三年の月日を耐えたように」

「分かっております。耐えることには、馴れておりますから」

「では、此からの動きを考えるた、中央指令室に行きましょう」

「そうですな。まずは、此からの動きを考えてからでも、遅くはありませんからな」

他の隊員達に指示を出し、俺とデラーズ中将、ガトー少佐、シーマ中佐、ハモンさん、クランプ中尉と他の隊員達と共に、ラル大尉とテスレフ中尉が待っている、中央司令室に向かう。司令室に着いて、ラル大尉とテスレフ中尉と合流し、デラーズ中将達と、挨拶を交わし、今後の詳しい予定を話し合うのは、明日行うことに決まり、俺は司令室を後にし、プラントの生産能力で、どれくらいの兵器や衣食住にかかわるものが、生産出来るのか、いくら金がかるのかを、確認するためにプラントに向かった。１５分後、生産プラント中央コントロール室の前に着いた。この中央コントロール室に入るには、

ドアの右側にある、網膜照会機能に右目の網膜パターンを、照会してドアが開き中に進むと、ドアの前に指紋照会機に左手を乗せ、指紋パターンの照会をしてドアが開く。部屋の作りは、前面がガラス張りになっていて、プラントから生産されている物を確認出来るようになっている。俺は、部屋の中央に置いてある、パソコンの電源を、入れる。

「こいつ、動くぞ！」

画面に、ネオ・ジオンのマークが浮かび上がってきた。（なんで？ネオ・ジオン？）作者が好きだからです。
今、電波を受信した気がする。

まあ、電波はどうでも良いとして、今の画面には、現在の生産状況が表示されていた。

ＭＳ生産ライン稼働率、１００パーセント。生産ＭＳ、ＭＳ－０６ザク？Ｆ型、日産１００機。ＭＳ－０７Ｂグフ、日産３０機。ＭＳ－０６Ｋザクキャノン、日産５０機。ＭＳ－０７Ｂ－３グフ・カスタム、日産１０機。現在の在庫数、ザク？Ｆ型、１０００機。予定数量、８０００機。グフ、３００機。予定数量、４００機。ザクキャノン、在庫数５００機。予定数量、３０００機。グフ・カスタム、在庫数、１００機。予定数量１５０機。

支援車両生産ライン稼働率１００パーセント。生産車両、ホバートラック（神改造済）、日産４０両。ホバーカーゴトラック、日産４０車両。マゼラ・アタック（神改造済）、日産６０車両。６１式戦車（神改造済）、日産６０車両。陸戦艇ビッグ・トレー（神改造済）、日産１０隻。ＲＭＶ－１ガンタンク？、日産１００機。現在在庫数、　ホバートラック、４００車両。ホバーカーゴトラック、４０

０車両。マゼラ・アタック、６００車両。６１式戦車６００車両。ビッグ・トレー１００隻。

航空機生産ライン稼働率０パーセント。ガルダ級空母。日産０機。在庫数　アウドムラ１隻。スードリ１隻。メロウド１隻。ガーウィッシュ１隻。ガルダ６隻。

食料品生産ライン稼働率５０パーセント。在庫数基地人員及び居住区住民、毎日３食天然素材を食べられます。戦闘食品１０年分（カロリーメイト）

武器弾薬予備パーツ製造ライン稼働率１００パーセント。日産、１０００機分。在庫、オーバーホール１００回は、できます。

医療品製造ライン稼働率５０パーセント。日産、１０万人分の医療品。在庫数、現在の人口の半分の人を治療できます。

頭が痛くなってきた。神の置き土産に俺は頭を、悩ませることになった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第五話（後書き）

パイロットの階級は、ギレンの野望から持ってきました。シン・マツナガについては、めぐりあい宇宙から、設定持ってきました。

第六話（前書き）

独自設定、オリジナル戦艦登場です。本文をどうぞ。

第六話

悠斗ｓｉｄｅ

あの、神様が残した置き土産の兵器は、現在の戦力に使用することにした。神改造の内容を調べて見ると、本当にチート機体にされていた。ホバートラックは、フェイズシフト装甲にされ、時速１８０キロで走行できるようになり、ソナーは５０キロ離れた物の移動が、感知出来るようになっていた。戦車級の噛み付き攻撃なんか、効かなくなったよ。

マゼラ・アタックと６１式戦車は、フェイズシフト装甲になり戦車砲は一発で、突撃級の装甲を貫通して後ろにいるＢＥＴＡも巻き込んて爆発するね。しかも、装填速度が僅か２秒で、速射可能。　後退速度は、百キロでバック可能になっていた。現行の戦車に乗って戦ってる戦車兵が、哀れに思えるよ。ビッグ・トレーに至っては、かなり大型化され、ＭＳを３０機搭載可能になり、ビーム兵器は無くなった代わりに、三連装４０センチ砲３門に、メガ粒子砲の代わりに、８０センチ砲が２門付けられ、２５？ＣＩＷＳが装備され、航行距離が太平洋横断可能に迄伸びていた。神様、あんた何やってんだよ！車両系はありがたいけど、ビッグ・トレーは、やり過ぎだろう！ビーム兵器無くした代わりに、第二次世界対戦中に、ドイツ軍が実際に使った列車砲のドーラを付けるか？どんだけの威力だと思ってんの？要塞攻略に使われる兵器だぞ！最早、ため息しか、出てこなかった。　気を取り直して、自分が新たに生産する、兵器を考える。パソコンを操作し、現在俺の持っている金の額と資源を、確認してみる。すると、画面に表示された数字に、呆れてしまった。

「ハハハ、スゲーな！だってあり得ないだろ資金が１０００京円っ

て！」

今の日本の国家予算だって、８０兆円だぞ！しかも、桁事態その上かよ！普通に一生遊んで暮らせるよ。しかも初回ボーナス特典て、書いてあるし！どんだけ太っ腹なんだよ！

「落ち着け、落ち着くんだ悠斗」

すーはー、すーはーと深呼吸する。気分が落ち着いてから、パソコンを見る。其処には、資源の総量が写しだされていた。

「・・・はっ！此れは何かの、冗談か？総資源数、１０００不可思議トン」

京の上ですか。もう、驚けないよ。無限の一歩手前ですね。このプラントの何処にそんだけの物資が入っているんでしょうね。俺は、パソコンを操作して、生産リストを開く、今開いたのはＭＳの生産リストだ。

「ふーん。何でも出来るんだな。自分で設計も出来るし、自分が欲しいものを選択して設定して、おけば、パソコンが勝手に設計して表示してくれるのか」

まあ、オリジナルＭＳは作るか分からんけどな。　取り敢えず、生産するＭＳを決めよう。リストを下に向かって動かす。宇宙西暦から、ＣＥ迄の、ＭＳがズラリと表示された。

「うーん、ビーム兵器を持っている機体は、ＢＥＴＡに対応措置をとられたくないから、除外するとやっぱり、ザクシリーズが一番無難かな」

ガンダムとかを、出せば楽々行けそうだけど、ＢＥＴＡは航空戦力を、２週間で無力化したんだから、ビーム兵器だって同じ位の期間で対策を打ってくるはずだ。人類が使うＡＬ弾に対して、桜花作戦の時迎撃しなかった位だから、自重しながら戦うしかないな。

「ドムシリーズは、明星作戦の時に使う予定だから、まだ生産を初めるのは、いいや。それより、エースパイロット用の機体は、どうしようかな？」

普通に行けば、Ｓ型なんだけどグフが有る以上、Ｓ型よりは、Ｒ１型を地上用に改造して、重力下での高機動仕様にしたほうが良いかな？

「うーん、やはりＲ１型を地上用に改造しよう。あと、ザク？Ｆ２型を量産しよう。神様が作って置いていったのも、Ｆ２型に改造しておこう」

パソコンを操作して、Ｆ２型を生産させようとさて、指が止まる。

「おいおい。オプションパーツを、付けられるのかよ」

そう、生産しようとしたら、画面にオプションパーツを付けますか？と、表示された。良いね、こう言うの好きだよ。パーツの一覧表を見てみると、様々なパーツがあった。例えば、Ｉフィールド発生装置（レーザーだって防げます）とか、ＤＧ細胞など、沢山のオプションパーツがあった。しかも、タダで何個も付けられる。これは、

流石にチートだな。下手したら、ビーム兵器いらないかもよ。だってレーザー級の、レーザー防いで、フェイズシフト装甲で、打撃無効にして、ＢＥＴＡなんか目じゃないよ。

「まあ、フェイズシフト装甲と、Ｉフィールド発生装置付けるか。これで、充分だろ。量産機に付け過ぎると、後々めんどくさい事になるだろうし」

特に、アメリカとかアメリカとかアメリカとかですよ。重要なので、三回言いました。

「ザク？Ｆ２型、生産。日産２５０機。予定数量１００００機。これで良いな」

取り敢えず、主力ＭＳの準備は完了した。あとは、ザク？Ｒ－１型の地上用改造だけだ。やはり、エース用に改造するか。

「やっぱり、Ｉフィールド発生装置と、フェイズシフト装甲に、ナノスキン装甲だろ、あとは武器弾薬無限瞬間回復装置だな。あと、なにつけようか？」

なんか、パッとするものがないな。弾薬無限回復って、ゲームじゃ当たり前だけど、現実にされたら、他の軍の人達は、涙目だろうね。

「ザク？Ｒ－１型。エースパイロット仕様、日産５０機。予定数量、１０００機」

「あとは、潜水艦艦隊と洋上艦隊を、作らないとな。人間も足りないから、呼び出さないとな」

現在潜水艦は、１隻だけだし洋上艦は、１隻もない。使う所が、余りないが有ることに越した事はない。

「まずは、潜水艦から改造するか、ユーコンの搭載数を上げるために、船を大型化してＭＳ３６機（１個大隊）は、搭載出来る用にしよう。また、魚雷発射口を、２０門にして対地対空ミサイル発射口１０門にして、ＭＳ発進は中央部開閉型にして、一斉に出撃出来る要にしよう。艦腹部下からと、艦後部から、出撃出来る要にして置けば、水陸両用ＭＳも出撃できるな。マッドアングラーも大型化して、ＭＳ１０８機（１個連隊）は、搭載可能にしておこう。ＭＡも同時に3機まで、搭載可能にして置けば、制海権は、確実に握れる。武装も、魚雷発射口４０門対地対空ミサイル発射口２０門にして、腹部下から、出撃可能。潜水艦後部からも出撃可能にしておこう。ドライゼ中佐の乗るユーコンは、訓練艦に格下げして、新しく生産するユーコンを、主力にしよう」

これで、ＢＥＴＡの日本進行に安心して、介入できる。帝国が、介入拒否しても、国連事務総長権限で介入しよう。あの国は、頭が固いし考えが古い上に、プライドは人１倍高い。確かに、民草の心の支えは必要だ。しかし、それを一人の少女に押し付けるか？自身を、傀儡と分かりながら恍惚さを保つ為に、また国を守り導いて行く為に、自身の心を殺してまで、人を殺す覚悟を決めさせる。正直、血で汚れるのは、俺みたいに戦争にドップリ浸かった奴のすることで、１７歳の少女にさせる事じゃねえな。いくら将軍と言えど、前世の

俺の世界の日本なら、笑顔で姉妹仲良く、暮らしていただろうにな。まあ、彼女に姉妹の絆を、取り戻させるのは、俺がやるしかないんだよな。クーデターフラグへし折ったの、間違えだったかな？まあ、いいや。次の事考えるなきゃな。

「洋上艦隊は、どうしようかな？この世界だと、戦艦がまだまだ海の主力戦力だからな。やはり、紀伊級戦艦の三番艦駿河と四番艦の近江を生産するか。あとは、オリジナル戦艦で、６００メートル当たりの長さで、排水量３０万トンクラスで、７６．１Ｃｍ砲三連装６基（合計１８門）搭載して、ＶＴＬ（誘導弾発射システム）搭載、対空・対地・対艦・対潜ミサイル搭載、ヘリコプターデッキ搭載、ラミネート装甲（レーザー何て効きません）装備、フェイズシフト装甲装備、ステルス機能搭載の原子力戦艦にしよう。　最大船速は、６０ノットだな。艦名は、播磨にしよう。同型艦は、３０隻あれば、充分だろう。重巡は、５０隻。排水量八万トンクラスの原子力重巡洋艦で、装備や装甲は、播磨と同じでいいや。主砲は、　１８インチ４６Ｃｍ三連装砲６門にサイズダウンしたが、まあいいか。あとは、播磨と同じだし。巡洋艦は、装甲や装備は同じだけど、砲はサイズダウンした原子力巡洋艦にした。よし、紀伊級戦艦は、日産４隻。予定数量は、２０隻。播磨級戦艦は、日産２隻。予定数量は、３０隻。巡洋艦、日産１０隻。予定数量は、３００隻。　あと、ＭＳ搭載空母は、タケミカズチでいいや。トナカ一佐が乗ってたやつだし。もともとＭＳ搭載してるから、装甲だけ、フェイズシフト装甲と、ラミネート装甲にして、原子力空母化するだけだし。ＭＳ搭載数は、１個連隊（１０８機）位大丈夫に改造したから、問題ないな。タケミカズチ級空母、日産８隻。予定数量３５０隻。」

まあ、こんだけ有れば、取り敢えず戦力不足はないでしょう。人員不足になりそうだから、呼び出しますか。まずは、デラーズフリー

ト兵（船員、パイロット、警備員兵、情報部員など）九万人。司令官、ロイ・ジューコフ大佐。キリング・J・ダニガン中将。エーリッヒ・ハルトマン少佐。ユーリー・ハスラー少将。パイロット、ノルディット・バウアー中佐。アルフディーノ・ラム少尉。エリック・マンスフィールド中佐。キリー・ギャレット少佐。サイラス・ロック中尉。ゲイリー少尉。ボブ中尉。アダムスキー少尉。デトローフ・コッセル大尉。以上の人員を、増員した。まあ、何回かに分けて召喚しましたよ。この部屋は、そんなに広くないから、一般兵は、潜水艦ドッグに召喚して、そこに居るドライゼ中佐に、指示を出してもらい、キリング・J・ダニガン中将達は、ここに召喚して、中央指令部に行ってもらいました。椅子から立ち上がり、背伸びをする。ゴキゴキと関節や背骨がなる。グゥ～と腹がなった。時計を確認して見ると、7時を少し過ぎていた。

「あら？時間が経つのは、早いな。晩飯を、食べに行きますか」パソコンの電源を、落とすと机の上に、アイ○ォーンが置かれていた。

「なんで、アイ○ォーンが置いてあるんだ？」

ア○フォーンの電源を、入れてみると、パソコンと同じ用にネオ・ジオンのマークが、表示されたあとパソコンと同じ生産ラインの情報が、表札された。

「これは、此処に来なくても、生産ラインのを使用できるってことか！」

持ち運びできる分、楽ができるな。アイフォー○を、ポケットに入れて部屋を後にした。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

今私は、シュミレータールームにいます。この基地に来てから、初めての訓練なのですが、皆さん誰も強化装備に着替えていません。軍服のまま、シュミレーターに乗って訓練しています。ベッドレスこそ着けていますが、果たして軍服でシュミレーターに乗っていて、大丈夫なのでしょうか？　ちょうど、シュミレーターたから降りてきた、髪の毛を束ねている少佐に尋ねてみました。上官に失礼だけど。聞いてみなくちゃ、分からないし。

「あの～少佐。少しお話があるのですが、よろしいでしょうか？」

「うん？君は誰だい？」

「はっ！失礼しました。本日付で異動してきました、イルマ・テスレフ中尉です」

即座に、背筋を伸ばし敬礼をする。

「そうか。私は、アナベル・ガトー少佐だ。楽にして良い。何か、質問があるようだが？」

「はい。失礼ですが、なぜ衛士強化装備に、誰も着替えていないのですか？」

「うん？テスレフ中尉は、ＭＳに乗った事は、無いのかね？」

「はい。ＭＳに乗った事は、ありません。ですが、戦術機と同じ兵器だと、聞いています」

「確かに、二足歩行と言う点では同じだか、ＭＳには強化装備を着なくても使える。次に、パイロットには、よほど強いＧ（重力）がかからないと、体に負担はこない。だから、誰もシュミレーターでも実戦でも、強化装備は着ない。まあ、たまに着ている奴もいるが、そこは個人の自由だ。私的には、余り着ないがな」

「そんなに、性能が違うのですか！それは、知りませんでした。ありがとうございます」

頭を下げる。そんなに、　コックピットの中が違うなら操作も違う可能性が高い。早めにきて正解だったわ。

「ガトー少佐。もし、よろしければ、私に訓練をつけてもらえませんか？」

「分かりました。私で良ければ、お相手致しましょう。カリウス！ＣＰ（コマンドポスト）を、してくれ」

「はい！ガトー少佐」

カリウスと呼ばれた青年が、返事をしながら制御室に入って行った。

「では、シミュレーターに入ってください」

「分かりました。よろしくお願いします」

シミュレーターに入ってヘッドレスを、装着する。服は軍服のままにした。ガトー少佐程の方が、そう仰るなら試して見る価値は、あると思ったからだ。

「管制ユニットは、戦術機とさほど変わらないわね。モニター画面が有るから、網膜投影システムでは無いのね」

正直、そこまで戦術機と代わる物だとは、思えない。どちらかと、言えば戦術機の方が優れているんじゃないかと思うほどだ。

「テスレフ中尉、準備はよろしいですか？」

「はい。カリウス少尉大丈夫です」

「分かりました。テスレフ中尉が乗って居るのは、ガトー少佐と同じザク？ＪＣ型です。初期生産型になります。テスレフ中尉はＭＳに乗るのが初めてなので、最初に基本動作をして頂きます。まずは、歩いてマーカまで移動してください」

「分かりました。マーカまで移動します」

これは、戦術機でも基本中の基本だ。いつもの用に、レバーを動かす。すると、ズドーンと転倒してまった。顔が赤くなり、熱くなっているのが自分でも分かった。要は、恥ずかしいのだ。

「テスレフ中尉、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。いつも道理にしたのに転倒するなんて、思いませんでした」

なんとなく、ガトー少佐の笑い声が聞こえた気がする。

「そりゃ、そうですよ。ＭＳに搭載されているＯＳは、戦術機のＯＳの３倍早く動かせるんですから」

それを、先に言って欲しかったわ。

「ゆっくりと、立ち上がってください。大丈夫です。扱いに繊細になってますが、慣れればすぐに使いこなすように、慣れますよ」

言われた通りに、ゆっくりと、立ち上がりる。確かに、繊細に使わなければならないが、５分も動かしたら、慣れてきた。

「早いですね。もう慣れてきたみたいじゃないですか。ＭＳのＯＳは、動作の切れ目を待つこと無く、次の行動に動けますから、入力を待つ必要がなく、任意のタイミングで動作を、キャンセルできます。また、特定の動作パターンを入力しておく事で、その動作に素早く移れます。また、最初に動作入力しておくと、その動作をしてくれますので、有効に使ってください。よろしいですか？」

「はい。大丈夫です。勉強になりました」

「それは、良かったです。それでは、これよりガトー少佐との、模擬戦に移ります」

映像が変わると、市街地になっていた。

「模擬戦を、開始します。勝利条件は、敵機の撃墜または、戦闘不能にすることです」

「了解です」

「分かった」

「カウント開始。カウント１０秒前、９、８、７、６、５、４、３、２、１、０。戦闘開始」

カリウス少尉の顔が消え、模擬戦が開始された。私は遮蔽物に隠れながら、ガトー少佐の乗るザクを、探すレーダーには、まだ何も反応がない。

「さて、何処にいるかしら？」

ゆっくりと、周囲を警戒しながら、進む。すると、レーダーに反応があった。一気に近ずいてくる。

「沈めーー！」

ガトー少佐のザクから、バズーカの弾が発射される。

「く！回避！」

ブーストジャンプで、飛んで回避する。先ほど居た場所は、爆発して吹き飛んだ。

「そこ！」

ジャンプ中に、ロックオンした、ガトー少佐にマシンガンをお見舞いする、すると、ガトー少佐のは、マシンガンの弾幕をものともせずに、回避しながら、肉薄してくる。

「もらった！」

「しまった！」

ガトー少佐に、懐に入られてしまい、ヒートホークで一刀両断にされてしまった。

「テスレフ機、コックピットに致命的損傷大破。ガトー少佐の勝利です」

「流石ガトー少佐です。手も足もでませんでした」

モニターにガトー少佐が、写しだされる。

「いえ、テスレフ中尉は、反応速度や、判断力はかなり良いパイロットだが、反面格闘戦が苦手なようですな」

「はい。アメリカ軍では、射撃に重点が置かれていましたので、格闘は余りしたことはありません」

「そうですか。なら、格闘戦を重点的に行いましょう。できる事に越したこと、ないですから」

「はい。よろしくお願いいたします。しかし、このＯＳは、使いやすいですね。このＯＳを、世界に発進すれば、世界中で多くの衛士が助かるのでは？」

此れだけ使い心地の良いＯＳならば、戦術機のＯＳなんて玩具以下だ。このＯＳだけでも、衛士の死の８分は、容易に越えられるようになるだろう。まさに、ＯＳの革命だ。

「それは、不動大佐次第ですよ。我々は、パイロットとして、成すべき事を成すのです。お話は、此くらいにして、訓練に移りましょ

う」

「はい。今度こそ当てさせてもらいます」

このあと、3時間は絞られたわ。結局1回も被弾させる事は、出来なかったわ。流石に自信が無くなりそうだわ。訓練終了後に、ガトー少佐達と別れて、シャワールームに向かった。シャ～～とシャワーから、暖かいお湯が出る。ちょうど一人だったから、のんびり使えるわ。この基地のシャワールームは、男女別に作られている。まあ、前線基地なら、男女に関係なく一つのシャワールームを、使うんでしょうけど。

「うーん、まだ肌は綺麗だし、胸も大きいし、ウエストは細いし、ヒップだってそんなに大きくない。テスレフ、まだ私は若い。諦めたら駄目！」

不動大佐は、多分女性経験が、少ないはずだから私にも、チャンスがある。今時、良い男は少なくなっているから、せっかく見つけた優良物件なら、手にいれなくちゃ。シャワーを、浴び終えた私は、夕食を食べるために、ＰＸに向かった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第六話（後書き）

うーん、此くらいならチート？なんでしょうか？

第七話（前書き）

遂に国連事務総長が登場。ご都合主義に独自設定独自解釈のオンパレードです。本文をどうぞ。

第七話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は、今ＰＸ（ＰＯｓｔＥｘｃｈａｎｇｅ）に来ている。晩飯を食べに来たのだが、丁度夕食の時間に重なってしまい、無茶苦茶混んでいる。なんだか前世で卒業した、高校の昼休みの光景と同じだ。まあ、俺の卒業した学校がマンモス高校だった事が、要因なんだけどな。取り敢えず列に並び順番を待つことにした。

「何食おうかな？」

取り敢えず、壁に書かれているメニューを見る。　沢山のメニューが書かれていた。

「メニューが、沢山あるな。和、洋、中華、何でもあるな」

我が基地には、贅沢な事に世界中の料理が食べられるのだ。しかも、素材は全て天然物だ。まあ、あのプラントから生産されているんだけどね。まあ、前線国家だと合成食品が基本だから、それに比べたら遥かに恵まれているからな。光州作戦の時に食べた軍用レーションは、クソ不味かったな。なぜあんなクソ不味い物なんか、食わなきゃならんのだ！なら、カロリーメ○トにしろよ！俺達の機体には、カロリーメ○トを、非常食にしてあるぞ。あれが、一番上手い。やっぱりチョコレート味が良いよな。ベジタブル味？あれは、苦手だからあんまり好きじゃない。まあ、軍用レーションに比べたらまだ、ましだけどね。そんなこと考えていたら、俺の番がきた。

「注文は？」

「焼肉定食」

オーダーを受けた人が下がる。一、二分待つとトレーに乗せられた、焼肉定食が出された。

「焼肉定食お待ち」

「ありがとう」

そう言って、トレーを受けとる。空いている席を探すと、丁度窓際の席が空いているので、そこに座って食べる事にした。

「いただきます」

箸を持ちのんびりと、食事を始める。ご飯にワカメの味噌汁、焼肉に千切りキャベツにポテトサラダにお新香が、焼肉定食の内訳だ。それらを、のんびりと、食べていると前に誰かが座った。

「相席失礼するよ」

「どうぞ。シーマ中佐」

そう、目の前にシーマ・ガラハウ中佐が、スープスパゲッティのサラダセットを、持って来ていた。

「不動大佐は、今日はなにしていたんだい？」

「俺ですか？プラントに籠りきりですよ。シーマ中佐は、訓練ですか？」

「ああ、私の所の腑抜けどもに、渇を入れてやったよ。そう言えば、あたしらがシミュレーター訓練してる時に、新しくきた金髪の中尉が、ガトーを捕まえて訓練してたね」

「おや、テスレフ中尉がですか？なら、相手が悪かったですね。ソロモンの悪夢と言われた男を、相手にシミュレーターで戦えば、自信喪失になりそうですね」

「まあ、ガトーだから手加減は、しただろけどね」

「ええ、全く相手になりませんでしたけど」

「「え？」」

何時のまにか俺の横にイルマ中尉が座って食事していた。

「どうしました？二人共、驚いた顔して」

「あんた何時のまに来ていたんだい？」

「お二人の会話の冒頭の辺りから、居ましたよ」

全く気づかなかったよ。どんな隠密のスキルが、ついているんですか！

「イルマ中尉は、初めてＭＳに乗ったのだろ、手応えはいかがですか？」

「はい、ハッキリ言ってＭＳは、非常に凄かったです。特にＯＳは、今までの考えてを覆す画期的なＯＳだと思いました。これが、世界

中に広まれば死の8分は、完全に死語になると思います」

「そう言って貰えれば、有難いですね。まあ、当分は我々だけしか使えないでしょうけどね」

コップに注がれている、緑茶を飲む。お茶の味が口一杯に広がる。食後のリラックスは、大事だかね。そうこうしてるうちに、二人も食べ終わる。俺は、三人分のトレーを、片付け席に戻るとなにやら和気あいあいな雰囲気で、二人が話していた。

「なんか、打ち解けたみたいだけど、何かあったのかい？」

「いえ、何もありませんよ。ね、シーマ中佐？」

「そうだよ、大した事じゃあ無いよ」

「？？まあ、仲が良いのは良いことだよ」

二人が仲良くなること事態は、別に問題にならないが、何故だろ背中にイヤな感じがするのは？ニュータイプの勘が気をつけろと、言っているんだろうか？まあ、いいや。

「では、俺は失礼するよ」

「あら、大佐もう戻られるのですか？」

「なんだい、もう戻るのかい？」

「ええ、明日の会議の打ち合わせを、デラーズ中将としてこようと、思いますんで」

明日の会議は、我々の此れからの動きに関してだから、打ち合わせが大切だ。それに、国連事務総長にも、連絡を取りたい。誰か、確認する意味あいも込めて、連絡を取る必要があるからな。

「そうですか。なら、仕方ありませんよね。すいません、引き留めてしまい」

「いや、良いさ。気にする必要はないよ。これは、俺の仕事なんだから」

「そいつは、失礼したね。じゃあ頑張って来なよ」

「ええ、それでは失礼するよ」

俺は、立ち上がり席を元に戻してから、ＰＸを後にした。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

不動大佐が、席を去ってから私は、シーマ中佐とお話をしていた。

「不動大佐は、忙しい方ですね」

「そりゃ、そうだよ。私と同じ左官だけど、私は部隊の訓練がメインの仕事だけど、悠斗はパイロットに技術者、それに加えて生産ラインの管理者もやっているんだから、忙しいさ」

確かに、必要な場合には居るんですが、そうでない時は、技術者としての研究をされているのでしょう。この基地で一番忙しいのかもしれません。

「うーん。どうしたら、お近好きに馴れるのでしょうか？」

「イルマも諦めないのかね。私が悠斗の恋人になる予定なのに」

「あら、シーマ中佐？私の方が悠斗さんに、相応しと思うのですけど。やはり、悠斗さんとて男の子ですから、行き過ぎた年増より、年の近い私の方が良いに決まってます」

「へえ～？小娘が、意気がるんじゃないよ。悠斗には、私位女の脂が乗った方が、丁度良いのさ」

二人の間に火花が散る。周りの人達は、触らぬ神に祟りなしの状態で、見守っていた。ぶっちゃけ、巻き込まれて自分に矛先が来るのを、恐れています。女の修羅場に飛び込むのは、バカのやることだ。

「良いでしょう。シーマ中佐、貴女を私のライバルとして認めます。どちらが先に彼を物にするか勝負です」

「望む所だ。私は引くつもりは、無いからね」

お互いに右手を出し、握手をした。此れから悠斗を巡る恋の駆け引きが始まろうとしていた。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

なにやら、不穏な感じがした。具体的には、ＰＸで誰かが争うような感じだ。まあ、あの二人は大丈夫だろう。仲が良さそうだったし。今俺は、中央指令部に来ている。デラーズ中将と、明日行う予定になっている会議の打ち合わせに来た。丁度デラーズ閣下がいたので、後ろから話かけた。

「ご苦労様ですデラーズ閣下」

「うん？おお！不動大佐か。どうしたんだ？こんな時間に指令部に来るなんて？」

此方に振り向いて、俺の存在を確認すると、近くにいた女性オペレーターに珈琲を出すように指示する。

「いえ、明日の会議の打ち合わせに来たのと、国連事務総長に連絡を取ろうと思いまして」

「そうだったか。まあ、此れからの動きは大変だからな。まずは、

事務総長にコンタクトを取っておいた方が、良いだろ」

珈琲を手渡される。女性オペレーターに、感謝の言葉を言って笑顔で受けとる。何故か女性オペレーターは、顔を赤くして離れていった。なんかしたか？

「フフ。不動大佐は、罪作りな男だな」

「はあ？何か俺は、変なことをしましたか？」

「気づいていないのか」

はあ～と、ため息を吐くデラーズ中将。意味が分かりません。取り敢えず、受けとった珈琲を飲む。口の中に苦味が広がり、頭が冴えてくる。

「まあ、なんにせよまずは、事務総長に連絡を取りましょう」

「そうだな。オペレーター、国連事務総長に回線を繋げてくれ」

「はい。少々お待ちください」

先程、珈琲を渡してくれたオペレーターが、回線を繋いでいるようだ。

「回線繋がりました。中央モニターに、映像が出ます」

ブゥン～と音がなり、モニターに映像が映しだされる。画面中央に、桃色のボブカットに黒いスーツを着た女性が椅子に座っている。神様、あんたが気に入った人ってこの人ですか。確かに政治の手腕

は一流ですけど、まさかアクシズの全権を握っていた、ハマーン・カーンさんですか。俺は、酷い頭痛を感じた。

「久しぶりだなデラーズ中将。息災だったか？」

「お久しぶりです、ハマーン様。私の方は何もありませんでしたよ」

「そうか。便りが無いのは元気な証拠と言うわけか。それより、悠斗。貴様は光州作戦で派手に暴れたそうじゃないか。おかげで、此方は貴様の造った機体は何なのかと、連日電話や質問の嵐だぞ。何時までもノロリクラリとは、やっていられんぞ。どうするつもりだ？」

「ハマーン事務総長、連絡が遅れて申し訳ございません。機体の方は、グフとグフ・カスタムに関しては、スペックデータを公開して構いません。技術が無ければ造れませんから」

「確かに技術が無ければ造れまいな。まあ、煩いのはアメリカばかりで他の国々は、技術的に気になっている様だがな」

「ええ。戦術機の技術で儲けている自分達の利益が脅かされるのを、嫌がっているのでしょう」

「全く、あの俗物どもは自国の事に関しては機敏に動くくくせに、他国の事になると直ぐに卑怯な事をする。あの国がしゃしゃり出て来なければ、もう少し楽になるのだがな」

「そうですな。あの国は、一度本気で痛い目をしてみると良いでし

ょうな」

「そう思うだろデラーズ。まあ、その気になればコロニーの1つも落としてやれば、大人しくなるだろう」

いや、コロニー落としなんてしたらこの世界確実に滅ぶよ！まあ、やれるかと聞かれれば出来ると、答えられるけどね。生産ラインには、コロニーて項目あるから、生産出来るし。やらないよ絶対！まだ、滅ぼす必要無いし。

「まあ、冗談はさておき。悠斗貴様に、伝える事が有る。光州作戦での活躍大義であった。大東亜連合、帝国、極東国連軍から、感謝の言葉が寄せられている。更に貴様が光州作戦で上げた戦果を鑑みても、今の大佐と言う地位では最早納まらん。なので、不動悠斗大佐の一階級昇進を命じる。国連軍准将と言う立場になる。その地位で満足することなく更に自身を高め、人類の剣となりて世界を救うのだ。良いな？」

「はっ！ありがたき所存であります。更なる高みを目指して、粉骨砕身の覚悟で進んで行きたいと思います」

即座に敬礼をする。初めての昇進命令だったので少し嬉しかった。あれだ、初めてバイトして給料をもらった時のような嬉しさだ。まあ、まだ働いた事のない人は、自分が社会に出た時に楽しみにしとくといいよ。

「おめでとう不動准将。貴殿も、此からが大変だぞ。若者を導くのは、老骨の勤めだ。何かあったら聞きなさい。貴殿の力になろうぞ」

「ありがとうございますデラーズ閣下。何分まだ若僧ですが、指導よろしくお願いいたします」

パチパチと周りから拍手が贈られる。なんだか少し恥ずかしかったが、悪くない気分だった。

「そうだ、ハマーン事務総長1つも提案があるのですがよろしいですか？」

「うん？なんだ？」

「実は戦術機に搭載されている、ＯＳの事何ですが、ＭＳに比べたら余りに遅く、また自由度が無いので新たなＯＳを世界に発進したいのですが、よろしいですか？」

顎に手を当てて考えるハマーン総長。彼女の頭の中で新ＯＳのメリット、デメリットを考えているのだろう。

「新ＯＳを造ったとして、一体どうするつもりだ？」

「ハマーン総長も知っての通り、人類は今ユーラシア大陸からＢＥＴＡによって、ほぼ叩き出されました。これ以上戦線の後退が進むと、アメリカが考えている新型爆弾（Ｇ弾）による地球の焦土作戦が現実味を帯びてきてしまいます。其を食い止める為にも、新ＯＳで戦術機の性能を向上させ戦線のを押し上げる必要があります」

「確かに。アメリカは何処の国でも良いから新型爆弾（Ｇ弾）を、

使おうとしているな。新ＯＳでアメリカを牽制しつつ、戦術機の性能アップで戦力強化を狙うのか。だが、感じんのＯＳをどうするつもりだ？」

俺は自分のポケットから、アイ○ォーンを取り出しＯＳの欄を選択する。すると、ア○フォーンにいろいろなＯＳが表示される。

「この、神様から貰った生産プラントのデータの中に、ＯＳの生産が可能になっているので、その中から使えるやつでＣＰＵユニットの交換とＯＳの書き換えで済むシリーズで、この世界に丁度良いのがあったのでそれで行きたいと思います」

ア○フォーンからのデータを、近くのプリンターに繋ぎプリントアウトする。１枚をデラーズ閣下に渡して、もう１枚を女性オペレーターに渡してハマーン事務総長のパソコンにデータを、送る用に指示する。暫くＯＳの説明書を読んでいた、二人が顔を上げる。

「やるじゃないか。現在のＯＳに比べ即応性が６０パーセントもあがり、先行入力、キャンセル、コンボを搭載しているなんて。現在のＯＳがゴミに見える仕様じゃないか」

「確かに。これ程のＯＳならば、ＭＳ程ではないが戦術機でも十分活躍できるように、なるでわないか」

お二人とも、納得がいった感じだ。

「良いじゃないか。ならば、このＯＳは私から世界中に発進しておこう。なに、ＣＰＵユニットはお前たちが生産するのだから、かな

り儲かるぞ。これなら暫くの間、あの俗物が悔しがるのを楽しめるぞ。ハッハッハ」

何やら、素敵な笑顔で笑っておられるハマーン事務総長。正直黒いオーラが怖いです。

「して、このＯＳの名前はどうする？考えてあるのだろう？」

「はい。ＭＳＸＯＳなんてどうですか？世界中が知りたがっているＭＳのＯＳが、このくらいのレベルだと思わせれば、儲けものですから」

「フ。かつての、ＭＳ開発計画の名前にするとはな。まあ、構わないさ。所詮分かるなは我々位だからな」

「ええ。まあ、ＭＳに乗っている我々のパイロット達にすれば、一発で分かるでしょうが、戦術機のパイロットたちは、元の由来など分からないでしょう」

「まあ、仮に我々と戦闘になったとしても、我々の相手にはならんだろうな」

デラーズ閣下もかなり余裕の表情だ。このあと、幾つかの細かい案件についてやり取りをして、通信は終了した。その後、ハマーン国連事務総長から、世界に向けて新ＯＳの発表があった。世界中に激震が走り、我先にとコンタクトを取る電話や訪問が相次いで来たと、後日ハマーン事務総長から、伝えられるのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第七話（後書き）

うーん。難産だった。

第八話（前書き）

今回はかなりのご都合主義満載です。本文をどうぞ。

第八話

世界中に新ＯＳＭＳＸが公表され、世界中に波紋をよんだ。光州作戦での活躍もあり、その性能の良さは世界に知れわたり、世界が自国の戦術機開発がいかに遅れているかが分かり、特に戦術機開発や生産で強大な富を得ている国は、自国の利益の防衛に走り、前線国家や国をＢＥＴＡに奪われた人々は、新ＯＳの性能に歓喜した。

アメリカｓｉｄｅ

ホワイトハウスのある一室に、この国の中枢を司どる人間達が集まっていた。

「諸君まずは、集まってもらってすまない。緊急に会議しなければならない事案が発生した」

「何があったのです？大統領以下軍の将軍まで集める程の事が起きたのですか？」

空軍の軍服を着た将軍が訪ねる。彼以外にも何故いきなり呼ばれたのか分かっていない人々は、首を捻った。

「まずは、此を見てくれたまえ」

部屋のモニターに、戦術機が戦闘している映像が映しだされる。白い角の生えたモノアイの戦術機がＢＥＴＡを、殲滅している。

「何ですがこの機体は？我々の主力戦術機とは、違うようですが？」

「この映像は、光州作戦の時に撮られた映像だ。パイロットは、国連事務総長直轄部隊メビウスの不動悠斗准将だ。この機体はＭＳ－０７Ｂ－３グフ・カスタムと呼ばれる新型ＭＳだ」

「なんですと！あのリボンつきの死神と呼ばれる不動悠斗大佐ですか！」

周りがざわめく。この中にいる人なら誰でも知っている。今最も優秀な戦術機のパイロットであり、技術者である彼を知らない訳がなかった。

「不動准将だ。彼は光州作戦の戦果で昇進した。更に、新型ＯＳの開発にも成功した。国連事務総長のハマーン・カーン氏から、世界中に発表された」

「新型ＯＳ？バカな！現行のＯＳだって最新型なのに！」

両手を広げやれやれと、いった態度を取る陸軍将軍。彼自身かつては、戦術機のパイロットをやっていたので、新しいＯＳなぞ大したものでないと思っているようだ。

「そう思うか？新型ＯＳの即応性は、現行のＯＳの６０パーセント増しだそうだ」

「な！あ、あり得ん！現行のＯＳですら我が国の技術の粋を集めて造り上げたのですぞ！」

ダン！と、机を叩く陸軍将軍。叩かれた机が揺れる。

「ああ、彼は１個人で凌駕するＯＳを組み上げた。更に由々しき事に、その生産をするのは我々の国ではなく、メビウスの連中がすることにある。このまま行けば、我が国の軍事産業に大打撃になりかねん」

「なるほど。それで我々を、緊急召集したのですな？」

「そうだ。副大統領。この事態に対し有効な手立てを、考え無ければ私達に議員の席が無くなるかもしれん」

「こんな情報を、何故調べられなかったのだ！ＣＩＡは何をやっていたんだ！この無能が！」

海軍将軍が、怒鳴り散らす。いきなり振られたＣＩＡ長官は、困惑していた。彼自身全くこのようなＯＳを開発しているなんて話は、１度も聞いた事はなかったからだ。

「将軍、失礼ですが我々ＣＩＡはこのような情報を、全く掴んでおりませんでした。掴んでいれば、早期に工作するなり、破壊するなどの対策を取っております。かなり情報を絞っていたのでしょう。今回ばかりは、我々の負けです」

「冷静になっている場合か！そもそも」

「いい加減にしないか！我々が、言い争っている場合か！今は、この新型ＯＳに対する対策会議をしているのだ。良い案を考えるのが

先決だ」

大統領の一声で、場が鎮まる。彼等は此から夜通しで対策会議をする事になった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

各国の代表が席につき、モニターに映しだされる映像に見とれていた。次々と殺されていくＢＥＴＡ達。彼等の前に立ちはだかるのは、一機の戦術機だけだ。映像が終了し、モニターに何も映らなくなってから、各国の代表は、重い口を開けた。

「以上が光州作戦の時に撮られた映像だが、正直化け物以外の何者でもない」

西ドイツ代表から、発せられる言葉に各国の代表達も声を上げる。

「確かに。かの機体程の優秀な戦術機は、見たことがない。
我々が新たに開発中の新型戦術機に技術提供を頼みたい位だ」

イギリス代表からも声が上がる。現在欧州ではイギリスが実質的な開発国となって、ＥＦ－２，０００の先行量産型が試験部隊に引き

渡しされたばかりであった。

「それも去ることながら、この新型ＯＳは、まさに世紀の大発明だぞ！ＢＥＴＡ戦争が始まって以来の快挙だぞ！」

「そうですな。イタリア代表の言われる通り、現行のＯＳを遥かに凌駕するＭＳＸＯＳ。このＯＳが全軍に行き渡れば、欧州奪還とて夢ではありませんぞ」

「そうですな。しかし、この新型戦術機と新型ＯＳを開発したのは誰なのですか？」

フランス代表から発せられた一声が、会場のざわめきを呼ぶ。

「確かに。これらは誰が開発したのですか？」

西ドイツ代表も、これ等を開発した人間を知らなかった。必然的にイギリス代表に視線が集まる。会議を召集したのは、イギリスであり西ドイツはあくまで司会役に過ぎないからだ。

「まさかですが、第５計画の連中ではありませんよね？」

「大丈夫だ。此を開発したのは、リボンつきの死神だ」

「な！あのアラビア半島撤退作戦の英雄！不動悠斗大佐ですか！」

会場が再び騒がしくなる。事、欧州戦線で彼を知らない者はいない。アラビア半島撤退作戦。スエズ運河防衛戦等で、輝かしい戦果を上

げ欧州連合の戦力低下を阻止した英雄だからだ。

「彼は今、准将に昇進したよ。彼が作ったこのＯＳを、我々が有効活用しなければならない。欧州奪還の為に」

辛うじて国を維持しているイギリス。他の国々は、既にアフリカ等の植民地に逃げ国土を失っている。故に欧州奪還は目下最大の目標なのだ。

「そうですな。しかし何処にこの新型ＯＳを配備しますか？数に限りが有るでしょうに」

フランス代表の配備の配分をどうするかの発言から、欧州各国の新型ＯＳを手に入れる為の駆け引きが始まった。夜は更けていった。

欧州連合ｓｉｄｅｏｕｔ

巌谷榮二ｓｉｄｅ

国防省技術廠第壱開発局副局長巌谷榮二は、自室にてとある映像を見ていた。手には、一纏めにされた紙の束を持って画面を血眼になりながら睨み付けていた。彼の顔には、大きな傷跡が有りたたでさえ怖そうな顔が睨み付けていることで、更に怖くなっていた。彼が今見ているのは、光州作戦の時に帝国軍の衛士が持ち帰った映像だ。

「凄まじいな。敵で有るＢＥＴＡが、気の毒に見えるな」

彼自身、かつてはテストパイロットとして、８２式戦術歩行戦闘機瑞鶴の開発に関わった一流の衛士だ。だが、彼ほどの衛士に凄まじいと言わせる程の優秀な衛士は、なかなかいない。ましてや曾ては、自分の事を叔父さんと呼んでいた等とは思えない程の腕前になっていた等とは。コンコンコンとドアが叩かれた。

「失礼します巌谷中佐」

美しい黒い髪と整った顔をした美しい女性が入ってきた。

「ご苦労だ、篁中尉。いきなり呼び出してすまなかったな」

「いえ大丈夫です。丁度ミーティングを終えた所ですから」

「まあ、堅苦しい会話は此くらいにして、唯衣ちゃんを呼んだのは、此を見て欲しかったからだ」

「い、巌谷中佐！今は任務中ですので、その呼び方はさすがに」

顔を赤くして恥ずかしがる篁中尉。

「ワッハハハ、二人きりなのだから昔みたいに、巌谷の叔父様って呼んでくれても構わんよ。唯衣ちゃん、この映像を見てくれ」

中央に置かれたモニターを二人で見る。先ほど見ていた光州作戦の戦闘映像が映しだされる。丁度白い機体と青い機体が、ＢＥＴＡ相手に切り込んで行くシーンだった。

「この機体は我が軍の機体では、有りませんね？」

「そうだ。青い機体は、ＭＳ－０７Ｂグフと呼ばれる新型だ。白い機体の方はＭＳ－０７Ｂ－３グフ・カスタムと呼ばれる新型機のカスタム機だ。どちらも、同じ人物が造った新型のＭＳと呼ばれる機体だ」

「ど、同一人物が造ったのですか！このグフと呼ばれる機体は、明らかに戦闘機とは違います！更に格闘戦に特化した機体ではありませんか！」

グフのヒートサーベルが、要撃級を切り裂くシーンが映しだされ、グフ・カスタムもガトリングシールドを発射し要撃級を蜂の巣にしていた。

「そうだ。我が帝国の得意とする格闘戦に特化した機体は、我が国以外ではまだ生産されていない。唯衣ちゃん、ここを見てみな」

映像を一時停止して、グフ・カスタムの左肩のエンブレムを拡大する。花束をリボンで巻いたエンブレムが映しだされた。

「う、嘘。まさかこの機体を造ったのは？」

「そうだ。唯衣ちゃんの幼なじみで、１２歳の時に国連軍に入隊した不動悠斗くんだ」

篁中尉の顔が、驚愕に染まる。口を開けパクパクと魚が口を動かす用に口が動いていた。

「なんで、悠君がこんな機体を造っていたなんて」

「いや、実は彼は一昨年にＭＳと呼ばれるザク？の開発に成功していたんだ。更に去年には、ザク？と呼ばれるザク？の改良型の開発もしている。アラビア半島撤退作戦の話は、聞いた事有るだろ？」

「はい。悠君から着た手紙には、作戦に参加した位だとしか書かれてませんでした」

少し、悲しげな顔で返事をする篁中尉。本人に全くこのような話は、していなかったのがショックだったのだろう。

「まあ、彼の開発した機体は高コストが原因で一般には、出回ってない。しかし、機体は非常に優秀で第３世代機と評価されているよ」

「では、このグフと呼ばれる機体は、ザク？の派生ですか？」

「ああ、そうだ。我々が不知火の改修に悩んでいる内に彼は第３世代機を凌駕する機体を造りあげた。しかも、新型ＯＳも開発して世界中に発信したよ。国連事務総長を、通じてな」

篁中尉は、目に見えて落ち込んでいた。彼女の欠点は反省癖が強い事だ。そこは、亡くなった彼女の父親にそっくりだった。

「唯衣ちゃん。自分を責めちゃいけないよ。唯衣ちゃん自身は、しっかりと任務をこなしているから。責める必要はないよ」

白く綺麗な手に爪が食い込んで手の内側が赤くなっているのが見えた。

「しかし巌谷中佐！同い年の彼はしっかりと人類に貢献しているのに、私は、私は何一つ結果を残せていません」

彼女の頬を一滴の涙が伝う。いかに頑張っていようと結果が世の中全てで有る事を彼女自身が知っているからだ。

「なら、篁中尉に一つ任務を与える。不動悠斗准将が造ったこの新型ＯＳを使いこなして欲しい」

今まで自分が持っていた、資料を渡す。受け取った篁中尉は、すぐさま泣き止み資料に目を通す。　再び驚愕した顔になった。

「巌谷中佐。この新型ＯＳは、本当なのでしょうか？即応性が現行のＯＳの６０パーセント増だとは、信じられません」

「信じられないかも知れないが、此がＭＳのＯＳと同じ物だそうだ」

「だとしたら、世界中の戦力を押し上げる事になりますよ。このＯＳが世界中に広まれば、戦死者の数が一気に減り死の八分が過去の物になります」

「そうだ、多くの衛士達が突破出来なかった死の八分が過去の産物になるのだ。この任務引き受けてくれるな？」

「はい！必ずや自分の物にしてみせます」

とても元気な返事と敬礼が返ってきた。

巌谷榮二ｓｉｄｅｏｕｔ

篁唯衣ｓｉｄｅ

今私は訓練を終了しミーティングを終えた所で、叔父さんである巌谷中佐に呼び出してを受けた。　ノックして室内に入ると、巌谷中佐にある映像を見て欲しいと言われて、モニターを見ると見たことの無い、戦闘機が戦闘していた。青い機体は剣て要撃級を切り裂き、白い機体は盾にガトリング砲が付いており、ガトリング砲から発射された銃弾で要撃級を蜂の巣にしていた。

「この機体は我が軍の機体では、有りませんね？」

少なくとも私は見たことが無い新型の機体だと思った。何でも同一人物が造った新型のＭＳと呼ばれる機体らしい。巌谷中佐は、映像を一時停止すると白い機体の方のエンブレムを拡大した。

「う、嘘。まさかこの機体を造ったのは？」

あのリボンのついたエンブレムのパイロットは、私の幼なじみでずっと一緒に育てられてきた悠君のエンブレムだ。彼は１２歳という若さで国連軍に入隊した、経歴の持ち主だ。軍に入隊してからは、手紙のやり取りだけだったが、たまに自分の写真を入れて成長していく姿を見ていくことができた。彼は歳を重ねるごとにかっこよくなっていった。１２年も一緒にいた悠君が居なくなった時は寂しくて、泣いたこともあった。彼と一緒に居ることが当たり前過ぎて居

なくなってから、気づいた。彼はこんなにも私の心に、深く食い込んでる事に。彼の事を思い出すと心の中が暖かくなる。こんな気持ちが私の中に有ったなんて知らなかった。久しぶりに見た映像が戦闘映像なのは、残念だったけど、それよりも彼がこの新型の機体に乗っているのはなんで？その考えが頭をよぎる。

「なんで、悠君がこんな機体を造っていたなんて」

巌谷中佐が説明なさってくれる。私との手紙のやり取りの中にはその様な事は、一切書かれていなかった。しかも同い年の彼はどんどん結果を出しているのに、私何も結果を出せていないことが、悲しくなって涙が出てきてしまった。そんな私の心中を察してか巌谷中佐から、新たな任務を与えられた。渡された資料を読んで驚きを隠せなかった。現行のＯＳを嘲笑うかの様に新型ＯＳを開発し、しかも世界中に輸出するのだということだ。巌谷中佐は、私に新型ＯＳのテストパイロットを命じてくださった。今度こそ結果を出して見せる。彼に近づく為に。彼の造ったＯＳを、物にして彼と肩を並べて戦える様になるために。私は力強く返事と敬礼をした。

篁唯衣ｓｉｄｅｏｕｔ

香月夕呼ｓｉｄｅ

私は今、自分の研究室にて世界中に発信された新型ＯＳＭＳＸのデータを見ていた。正直な話私の失敗作よりも圧倒的に効率の良いＣＰＵユニットを組み込んだＯＳですって？バンと机を叩く。

「ふざけないでよ！天才である私を凌駕するですって！なんなのよ！」

辺りに怒鳴り散らすも、この怒りは簡単には収まる気配はなかった。私が新型コンピューターの並列処理能力の論文に悩んでいる時に、簡単に私が目指している物に近い物を造り上げた奴が居ることが癪に触った。しかも第４計画の権力を持ってしても、その制作者を呼ぶ事は出来ない。仮にできたとしても、世界中から非難を浴びるのは目に見えていた。

「不動悠斗准将。彼を味方に引き入れられれば、なんとかなるのに！まだ私は地獄に落ちる訳にはいかないの！必ず世界を救ってそれからなら、いくらでも地獄に落ちてやる」

私は再びパソコンにかじりついて新理論を考えた。

香月夕呼ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

今俺は、イルマ中尉と二人で執務室にてデスクワークをしていた。なんでイルマ中尉と一緒に仕事しているかと言うと、俺が昇進した

ことによって、将官になったためジオン公国時代では、将官には秘書官がついたからで俺にも付くのが慣例らしいが、今の時代は佐官でもつく人はつくらしいです。まあ、俺はどちらでも良かったんですが、そうしたらイルマ中尉が秘書官を勤めたいと言ってくれたので、今はパイロット兼秘書官もしてくれています。ちなみに、ランバ・ラル大尉も昇進して、少佐になりました。まあ、実力あるかたですから昇進するのは当たり前な気がしましたけど。

「よーし。此で全部終わったな」

手を組んで上に伸びる。長時間のデスクワークは、しんどいです。

「はい。今日の執務は全部終わりました。今コーヒーを入れますね」

自分の席を立ちコーヒーを入れる準備をするイルマ中尉。彼女自身のスキルの高さは、非常に助かる。前世でいくらやってたと言っても、所詮はしがない平社員の俺は、上に立つのは初めてだったから、最初の頃は大変だったけど今は慣れて、早く終わるようになってきた。コンコンコンとノックの音がした。

「あたしだ。入るよ」

シーマ中佐が訪ねて来た。訓練の後なのだろう、シャワーを浴びた髪の毛が僅かに濡れていた。

「ご苦労様ですシーマ中佐。シャワーを浴びたら、きちんと髪の毛は拭いた方が風邪引かなくてすみますよ」

「おや?拭くのが甘かったかい?まあ、後で拭くさ」

俺は、立ち上がりクローゼットを開けて、バンドタオルを取りだしシーマ中佐の髪の毛を、優しく拭き取る。

「シーマ中佐、髪の毛は大事にケアしないと直ぐに傷むんですよ。女性にとって髪は大事にするものなんですからね」

「あ、ああ。そうだね」

なにやら顔が赤いが、きっと訓練の後で火照っているのだろう。俺は気にせずに髪の毛の水分を拭き取った。

「コーヒーが入りましたよ不動准将」

なにやら、物凄くいい笑顔で怒っていらしゃるイルマ中尉が現れました。俺なんかしたか?ともかく殺気が半端じゃなかった。真面目に戦場にいるきがしたよ。

「どうしたんだい?イルマ中尉?そんなに怒っちゃってさ?悠斗准将に髪の毛を、拭いてもらってるのが、羨ましいかい?」

何故か、挑発気味に言うシーマ中佐。

「なんだ?イルマ中尉は、頭を撫でて欲しいのか?」

「あ!」

イルマ中尉の頭の上に右手を乗せゆっくりと、頭を撫でてあげる。すると、先程までの殺気は消えトロンとした表情になり気持ちよさそう目を閉じている。暫く撫でてから手を離したら、少し寂しげな

表情になった。

「シーマ中佐の髪も拭き終わったから、のんびりコーヒーブレイクしますか」

「そうですね。ゆっくり休みますか」

俺達は、来客用のソファーに腰掛けコーヒーをのんだ。ブラックコーヒー特有の苦味が口に広がり心地よい感じになった。

「そういや、二人とも何の仕事していたんだい？」

俺の目の前に座り足を組んでいるシーマ中佐。右側にイルマ中尉が座っている。

「うん？ああ、ＭＳＸの教導を行う為の書類をまとめていたんだよ」

「ああ、戦闘機の新型ＯＳの教導かい。どの国に行くんだい？」

「まあ、公表してから3週間たったからそろそろ慣れてきたやつらもいるだろうから、俺は帝国に教導しに行くんだ。他にも何人か連れて行くし、他の前線国家にも派遣する人選はきまったよ。まあ、アメリカには当分の間売るつもりはないから除外して、いいんだけどね」

まあ、あの国に売るのは一番最後まで絶対に無いけどね。

「そうかい。ならいいんだけどね。まあ、アメリカには売る必要な

んかないよ。あんな汚い連中なんかに、売るのはもったいないよ」

「まあ、そうなんだけどね。まあ、今はアメリカに売ることよりも教導する事で戦力アップに勤めるのが仕事だからな」

二人とも頷いていた。このあとは、他愛もない話をしながらコーヒーを楽しんだ。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第八話（後書き）

主人公の二つなは、エースコンバット４から持ってきました。

第九話（前書き）

ご都合主義、若干のキャラ崩壊があります。では本文をどうぞ。

第九話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は今太平洋の上空を、ガルダ級空母アウドムラに乗って飛行しています。目的地は日本帝国厚木基地。１２・５事件の時に陥落して、クーデター軍に航空戦力を奪われた基地だ。今現在、日本で数少ないガルダ級空母を着陸させることの出来る滑走路がある基地だ。まだ、この時代には白陵基地はそこまで大きくないので、厚木基地に着陸する事になった。今回日本帝国を、訪れるのはＭＳＸＯＳの教導がメインだからである。ちなみに、教導官は黒い三連星。ガイア大尉。マッシュ大尉。オルテガ大尉の三人に、ソロモンの悪夢。アナベル・ガトー少佐。ケリィ・レズナー大尉。カリウス少尉。シーマ・ガラハウ中佐。真紅の稲妻。ジョニー・ライデン少佐。白狼。シン・マツナガ少佐。の方々になっています。まあ、教導官が有名なエースパイロットだから、俺はやること無いんだけどね。そんなことを考えていると、ガイア大尉が俺の目の前に座った。

「不動准将。我々が教導する事になっている帝国をの衛士達の腕前は、どんなもんですか？」

「そうだな。筋は悪くないだろうが、新型ＯＳにどのくらい慣れているかは、見てみないとわからんな」

実際この世界の衛士達は、動作行動を一回づつ入力するのが当たり前になっているから、多分先行入力やキャンセルそれにコンボの使い方は、分かっていないと思うんだよな。それだと、デラーズフリ

ートの新兵より弱いと思うな。
「余り弱いと、教導にすらなりませんよ？」

「そうですな。弱いのなら、弱いのなりに気骨の有るものでなければなりません」

ガイア大尉の横にいつの間にか座ったシン・マツナガ少佐も、頷いていた。てか、いつの間に来ていたんですか？気付かなかったんですが？

「しかし、気骨が有っても腕前が無ければ、機体の性能を生かせぬまま死んでいくだけです」

「確かにな。まあ、可愛女の子が居れば俺は文句ないぜ」

アナベル・ガトー少佐にジョニー・ライデン少佐がマツナガ少佐の隣に座った。対面に座ってるのが男ばっかりで残念です。ジョニー・ライデン少佐、貴方はそんなに軽い男でしたっけ？

「大丈夫だよ悠斗。私が居るから。必要なら海兵隊式の訓練でも叩きこんでやるよ」

俺の左隣の席に座り足を組んでいるシーマ・ガラハウ中佐。扇子を優雅に扇いでコーヒーを飲んでます。

「不動准将。コーヒーですよ」

普通にコーヒーを皆さんに出しているイルマ中尉。何ら違和感が無いのが不思議です。

「いいなー。准将ばっかり女にモテて。俺にも分けてくださいよ」

「ライデン少佐。俺は別にモテてなんかいないぞ」

「不動准将。本気で言ってるんですか？」

ん？なんか、変な事を言ったか？周りの男性陣からは、「鈍感だな」とか「鉄壁だ」等と聞こえる。また、シーマ中佐はため息をイルマ中尉は落胆とした表情になっていた。

「不動閣下。もう少し女心を勉強した方が宜しいかと」

ガトー少佐が苦笑いしながら言ってきた。

「ん？まあ、いつか必要になったら勉強しよう」

「不動准将。それじゃあ結婚できませんよ？若いんですから、もっと積極的に恋愛した方が良いですよ」

「ガイア大尉。まだ俺は結婚する気はないよ。俺が結婚を考えられるのは、オリジナルハイヴを落とした後さ」

まあ、白銀武が来れば良いんだけどね。そうすれば、桜花作戦までは確実に進むから、オリジナルハイブは落とせるんだけど、白銀ハーレムのヒロイン達は誰も死なせないからな。ゲームの時には死んでいくんだけど、そうすると武が報われないから嫌なんだよね。まあ、個人的な考えだけどね。

「まあ、不動准将にその様な決意があればこそ、我々が頑張って行かなくてはいきませんな」

「そうだな。マツナガ少佐の言う通りだな。まあ、俺は帝国の可愛女の子をナンパするけどな」

ライデン少佐。貴方はそんなに黄色い声援が欲しいのかい？なんなら、幾らでも呼び出してあげるよ？まあ、人それぞれだからな。

「不動准将。我々の乗る機体は、何を使うのですか？」

「おお！そうだったな。伝えるのを忘れていたな。ガイア大尉達は、ザク？（黒い三連星仕様に、チートチューンアップ済）だ」

この機体は、機動戦士ガンダム～めぐりあい宇宙～の外伝黒い三連星のルートの中で出来た機体だ。まあ、チート仕様になっているせいで、第三世代戦術機位では、相手にならないんだけどね。まあ、教導と言う事なので造ってみたんだ。

「ザク？ですか。懐かしい機体ですな。まあ、教導ならそれくらいで丁度良いでしょうな」

「なに、黒い三連星が１個師団に相当すると思ってるから、あえて古い機体にしてみたんだ。必要なら、ザク？Ｒ－１型も持ってきてあるから、乗り換えても構わないぞ」

「大丈夫です。そこまで言われて乗り換えたら、軍人の恥じですわ」

やはり、ジオン公国時代キシリア・ザビの下で戦果を上げ続けた一流の戦士だけはある。旧式の機体に何一つ文句を言わない辺りが、一流だな。

「俺が乗る機体はなんですか？」

「ライデン少佐は、三日前に授与したばかりの新型ザク？Ｒ－２型に乗ってもらう。僚機は、シン・マツナガ少佐と一般兵だ。マツナガ少佐はザク？Ｒ－１型。一般兵はザク？Ｆ２型だ」

「俺は新型ですか？まあ、俺は構いませんが良いんですか？新型を周りの連中に見せても？」

まあ、普通新型の御披露目は世界に発信してからなんだけど、今回俺はもう一機新型を御披露目するつもりだ。

「まあ、Ｒ－２型に関しては四機しか、生産する気はないから問題ない。大体コストが掛かりすぎて、確実な腕のパイロットにしか渡せないよ」

実際は、ガンダムの世界でも四機しか生産されなかったから、合わせただけなんだけどね。

「そうすると、ガトー少佐達はザク？Ｒ－１型ですか？」

「そうだよ。イルマ中尉はＣＰ（コマンドポストオフィサー）将校を担当してもらう。シーマ中佐は俺の護衛をしてもらう」

「「了解（だよ）」」

「操縦席から、機内の人員へ間もなく本艦は帝国厚木基地に着陸します。各種搭乗員は、座席に座りシートベルトを着用してください。繰り返します」

そうこうしているうちに、帝国についたようだ。アウドムラが着陸体勢に入る。イルマ中尉も俺の隣に座りシートベルトを着用する。ゆっくりとアウドムラの速度が落ちて滑走路に進入していき、キキーと音が響き少しして機体が止まる。無事に着陸出来たようだ。

「当機は、日本帝国厚木基地に到着致しました。またのご利用、お待ちしています」

なんだか、民間の飛行機に乗って旅行に来たみたいな。まあ、沖縄なら行きたいけどな。今の時期だと、本州寒いし。なら秘密基地のある気候に近い沖縄がいいな。

「不動准将。外の準備が出来ております。出る準備が済しだい、出口に来てください」

マツナガ少佐が外の確認を行い、準備が完了した事を伝える。

「分かった。直ぐに出るぞ。皆準備は、て来てるな?」

俺の問いかけに皆が頷く。其を確認すると、俺は立ち上がり身なりを整えて、出口の前に立つ。ドアが開いているので、そこから外に出ると、将兵達が左右一列に並び俺に敬礼した。俺は階段を降りる。地面には、赤い絨毯が敷かれていた。その上を歩いて進むと、俺の出迎えに来た日本帝国の人達が待っていた。一人は帝国軍の将官の制服を着ていた。恐らく厚木基地の司令官だろう。その後にいるのは、帝国軍の制服に身を包んだ巌谷榮二中佐だ。更にその後には、TEのメインヒロインでこの世界の俺の幼なじみの篁唯依中尉が居た。

「どうも初めまして。

この度帝国軍にて教導をする事になりました、国連事務総長直轄部隊メビウス所属不動悠斗准将であります。よろしくお願いいたします」

「これはこれは、私は厚木基地司令官の井上大佐と申します」

井上大佐が、握手を求めて来たので笑顔で握手する。まあ、モブキャラの貴方はどうでも良いです。井上大佐と握手を交わし、その後ろに居る巌谷中佐の方に進む。

「お久しぶり振りです、巌谷中佐。八年前に送り出して頂いた以来ですね」

「久しぶりですな、不動准将。この度は、教導に来ていただき感謝しています」

巌谷中佐とも握手を交わす。すると、巌谷中佐の横に篁中尉が来る。

「久しぶりだね、唯依ちゃん」

「不動准将、幾ら幼なじみでも任務中にその様な呼び方は、遠慮していただきたい」

相変わらずお堅い性格の様ですね。まあ、彼女はオルタの世界では非常に真面目な軍人だったから、しょうがないけどね。

「相変わらずお堅いね。そんなに肩肘張る必要は、ないよ。出来ればもっとフレンドリーに接してくれると、嬉しいけどね」

「ですが、不動准将は上級将校です。失礼な態度をしないのが普通かと」

流石軍人の鏡だね。だが、今の台詞は駄目だね。この世界の設定だと、幼なじみだから人目が無いところなら、フレンドリーに話してくれることを、期待するしかないな。クソーなかなか大変だぜ。

「まあ、こんな所で立ち話も何だから、基地の中でゆっくり話そうじゃないか」

「そうですね。此処では少々風が冷たいですから、女性達が風邪を引いたら大変ですからね」

俺は、巌谷中佐に勧められるまま厚木基地の中に入って行った。イルマ中尉達は違う入口から、基地に入って行く姿が見えたので、同じ基地内にはいるようだ。

巌谷中佐に、案内された部屋に入る。ソファーに座るよう勧められたので腰掛ける。俺の前に、巌谷中佐と篁中尉が座る。

「まずは、久しぶりだね悠斗君。八年前に軍に君を送り出す時に会った以来だね」

にこやかに、笑う巌谷さん。顔の傷が無ければかなりのダンディーな人なんだけどな。

「久しぶりです巌谷さん。相変わらず元気そうで、何よりです」

「なーに、今は俺に話す事よりも、違う人に言うことがあるだろう？」

ニヤニヤしながが、俺を見る。この人俺で遊ぶきだな？

「そうでしたね。唯依ちゃん、久しぶり会ったけど元気そうで、良

かったよ」
笑顔で篁中尉の方を見ると、なにやら頬を赤くした篁中尉がいた。

「いえ、私の方こそ久しぶりです。最後に手紙をもらってから一月以上経ちましたが、忙しかったのですか？」

おい！この世界の俺は、篁中尉と手紙のやり取りをしていたんですか？流石に知らなかったな。適当に話を合わせよう。

「ゴメン。
ＭＳＸ関係の仕事で時間が取れなく、本当なら日本に帰ってくる前に手紙を出して置けば良かったね」

頭を座げる。誠意を込めて謝る。何が有ったとしても、自分が悪いと言わなけれならないのが男だ。

「ゆ、悠君！頭をあげてよ」

アワアワと、慌てる篁中尉。中々レアなシーンだなぁと考えていた。取り敢えず頭を上げる。少し顔の赤さが増した篁中尉が居た。何だか、可愛いなと思った。てか、悠君て言ったよな？つまり、この世界俺は悠君と呼ばれていたんだな。なら、此れからはそう呼んで貰いますか。ニヤリと笑ってしまった。下手すると悪人顔をしてるんじゃないか俺？「悠君？」いかん、やっと篁中尉にそう呼んで貰えたんだ、このチャンスを逃がす訳にはいかない。

「やっと、昔みたいに呼んでくれたね唯衣ちゃん。八年振りに会ったけど、凄く綺麗な美人の女性になったね」

カァーと顔が赤くなるなり、俯いてしまった。なんか変な事を言っ

たか？

「フハハハ！相変わらず、自覚がないようだな？」

「巌谷さん。何の話ですか？」

「本当に気がつかないのは、ズジ金いや鋼入りの様だね」

やれやれと、言った感じの表情をする巌谷中佐。なにが、鋼入りなんだ？

「そ、そうだ！悠君は、どれくらいの間、日本に居られるの？」

いきなり復活した、篁中尉が尋ねてきた。

「俺かい？そうだな、ＭＳＸの教導に来たとは言え、そんなに長くは日本に居ないな。精々二週間位かな？」

あんまり長くは日本に居られないよな。秘密基地に戻って、来るべきＢＥＴＡの日本進行に備えたいし。俺が社長の民間の会社が有るしそこに、ＭＳＸの流通事業だけでなく、一般的な物にも事業展開していきたいんだよな。幾ら表向きには、メビウスが開発と製造しているとはいえ、輸送や販売は民間の会社にやらせているのさ。軍が民需を潰してはいけない。だからわざわざ、民間の会社を設立したんだからな。ちなみに、従業員は全員創造の力で呼んだ、ジオン公国の諜報員達（ギレンの野望より）だから、凄い優秀だよ。あの広い地球連邦の基地や作戦やらを全部調べてくる位だから、この世界のありとあらゆる情報が、入ってくる。彼等の強みは、民間人の振りをして調べるから、民需の状態を調べるなんて、訳がないのさ。

「そうですか。では、その間で暇な日はありますか？」

「うん？まだ、分からないけど唯依ちゃんからのお誘いなら必ず行くから大丈夫だよ」

此処で仲良くなっておけば、アラスカ行ってからも唯依ちゃん一人で、孤立する事はないだろう。ユウヤ・ブリッジスは、日本嫌いで最初の頃は、激しくぶつかるだろうし、大変な事になるだろうから、俺がクッションがわりに、馴れれば良いんだけどな。

「そうなの。ありがとう。出来たら一緒にお墓前りに行って欲しいと思ってね。悠君の事を両親に報告したいから」

そう言えば、篁中尉の両親は既に鬼籍に入ってるんだったな。忘れていたぜ。

「分かった。時間を調節しておくよ」

「うん。よろしくね」

ハニカミながらの笑顔をくれた篁中尉。正直めっちゃくちゃ可愛いです。だから、ついつい頭を撫でてしまいました。

「やっぱり、唯依ちゃんは笑顔が似合うよ。真面目な顔も凛々しいけど、笑顔は凄く綺麗だからね」

やっぱり、篁中尉の笑顔は最高です。やっぱり、ユウヤ・ブリッジスには、勿体無いよな。まあ、唯依ちゃんの心を掴めるかは、彼しだいなんだけどね。そんな事を考えながら篁中尉の頭を撫でる。顔が真っ赤なトマトみたいになっていた。

「ゆ、悠君!?う、嬉しいんだけど、は、恥ずかしいから出来れば止めてくれると助かるのだけれど」

そう言われて、手を離す「あ!」と言う声が聞こえたが、よほど恥ずかしかったのだろうか、耳まで真っ赤になっていた。

「ゴメン。ついつい、撫でたくなっちゃってさ。嫌なら、もうしないからさ」

「い、嫌じゃないよ!ただ、恥ずかしかっただけだから」

どうやら恥ずかしかっただけらしい。しかし、なんで俺に撫で癖が有るんだ?この世界の俺は、撫で癖があったのか?よくわからないのであった。

「いやはや、二人とも熱いことで。これなら、俺は早い内に孫の顔が見れるかな?」

「い、巌谷中佐!何を、言っておられるのですか!」

「いや、二人の空間を作っていたから、早い内に孫の顔が見れると思ってな。なーに、唯依ちゃんだって、まんざらじゃないんだろ?」

何だか、しどろもどろになっている篁中尉。孫の顔がどうとか、言っているがまだ篁中尉は、結婚する気はないんだろ?また、巌谷中佐の暴走か?

「巌谷さん。余り唯依ちゃんをからかわない方が良いですよ。唯依ちゃんだって、結婚するかはまだ分からないでしょうに」

何故か、ため息をする巌谷中佐。更に俯く篁中尉。

「唯依ちゃん。相手は鉄壁だよ。攻略は難しいぞ」

「はい巌谷中佐。かなり大変だと、思いますって！違います！まだ私は「あーと、俺は他の仕事があったんだ。後は唯依ちゃんに任せた！じゃあ悠斗君後は宜しく頼むよ。唯依ちゃんをよろしく頼む」って、巌谷中佐！」

そう言って、巌谷中佐は白い歯をキラリと輝やかせ、スタッと立ち上がり風の様に部屋を出ていった。ぶっちゃけ、どうしろと？取り敢えず頭を篁中尉を、落ち着かせるか。

「唯依ちゃん、取り敢えず落ち着いてくれ」

今にも、巌谷中佐を追いかけて行きそうな篁中尉を止める。まあ、追いかけもらっても良いんだか、巌谷さんが大変なことになりそうなので、止めとく。

「あ、はい。すいませんでした」

慌てて、俺に謝る篁中尉。いや、本当なら追いかけてもらっても構わないんだけど、まだ明日の演習の打ち合わせしてないから、流石に居なくなると困るな。

「いや、落ち着いてくれたなら構わない。明日の演習の件何だが打ち合わせしてないから、したいんだけと良いかな？」

「あっ！そうでしたね。その件なんですが、本当ならこの厚木基地の演習場で行う予定だったんですが、急遽変更になりまして富士第一基地にて行う事になりました」

富士第一基地と言うと、富士教導隊がいる基地ですね。何か作為的な物を感じるな。

「そうか。遠くになるが、問題ないないな。そうすると、戦うのは富士教導隊かな？」

「はい。それと帝都防衛第１師団第１戦術機甲連隊の沙霧尚哉中尉の率いる第１中隊です」

な！沙霧かよ！マジか？誰が仕組んだんだよ？この面子は、クーデターを起こした連中じゃないか。裏で動いているのは、アメリカか！やってくれるじゃないか。今は、国連事務総長直轄部隊に格下げになっている、俺に対する嫌がらせか！これは、ハマーン・カーン事務総長に相談する必要があるな。最悪の事態も考えてをく必要があるな。其から幾つかの打ち合わせをして、お開きになった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

唯依ｓｉｄｅ

私は、不動准将との打ち合わせを、終えて厚木基地にて用意された部屋で、休んでいた。八年振りに再開した彼は、八年間と言う時間を感じさせないくらい昔の様に接してくれた。彼はこの八年で大き

く成長し、並々ならぬ実力で若くして国連軍准将と言う立場まで上がった。対して私は、斯衛軍中尉止まりだ。比べる必要もないくらい、差がある。家の身分は同じ山吹でありながら此処まで差がついてしまった。幾ら幼なじみでも、軍と言う組織の中に入ってしまえば、階級がものを言う社会だ。本来なら、任務中であればあれほど馴れ馴れしく、話してはいけない。でも、悠君は違った。幾ら階級が上でも身内だけになったら昔の様に名前で呼んでくれた。しかも、綺麗だと言ってくれたのだ。

「悠君」

彼の名前を呼ぶたびに、心の奥の方が暖かくなる。目を閉じると、彼の笑顔が浮かぶ。笑っていた顔は凄く魅力的だった。彼が日本に居られるのは、二週間程だ。出来ることなら、もう少しお話出来ると言う良いな。等と考えている内に私の意識は、闇へと落ちていった。

唯依ｓｉｄｅｏｕｔ

第九話（後書き）

かなり、難産だった。次回は戦闘まで行きたいです。

第十話（前書き）

久しぶりの戦闘シーンです。あんまり、上手く書けませんでした。
それでは、本文をどうぞ。

第十話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は今、富士第一基地の指令部に来ている。既に各部隊は準備が出来ているので、後は開始時間を待つばかりだ。ちなみに模擬戦の組み合わせだが、第一試合が、黒い三連星対富士教導隊。第二試合がガトー少佐、ケリィ大尉、カリウス少尉達対帝都防衛第１師団第１中隊。第三試合がジョニー・ライデン少佐、シン・マツナガ少佐達対厚木基地第一中隊と、なっている。

「不動准将。後少しで開始時間です」

イルマ中尉が、開始時間を知らせてくれる。まあ、非常に落ち着いて見られるので、楽なんですけどね。周りを見てみると、巌谷中佐と篁中尉が此方に向かって歩いてきた。

「おはようございます巌谷中佐。篁中尉」

「おはようございます不動閣下。ガラハウ中佐。テスレフ中尉」

「おはようございます不動准将。ガラハウ中佐。テスレフ中尉」

二人とも敬礼をしたので、俺達三人も返礼した。

「巌谷さん。富士教導隊は、この模擬戦何分持つと思う？」

そう訪ねると、巌谷中佐はニヤリと口元を動かした。

「失礼ながら、たった3機のＭＳで富士教導隊に勝てるとは正直思えないな。ましてや、旧型のＭＳでは、話にならないと思うよ常識的に考えて。と、答えるのは性能を過信している奴が言う台詞さ。実際は何か仕掛けが有るんだろ?悠斗君?」

「まあ、見ていてください。戦術機やＭＳの性能差が戦力の決定的な差てないと言う所を見せてくれるはずですよ」

「フハハハ。そうだよな!私もかつては瑞鶴でイーグルを落としたのだからな。しかし、それは一対一だから出来たのであって、三対十二ではかなり厳しいと考えるが?」

「まあ、見ててくださいよ。模擬戦が始まりますよ」

俺がそう告げると、全員中央モニターを見た。俺はただ勝利を確信していた。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ガイアｓｉｄｅ

俺達は模擬戦開始から即座に散開して、個々に敵を倒している最中

だ。俺は、機体をビルの間に隠しながら、1機めのロシアンカラーの不知火をロックオンした。「もらった！墜ちな！」

ザク・バズーカから弾が発射される。音で此方に気づいた不知火が回避行動に入るも間に合わずに直撃する。命中した不知火が黄色く染まる。

「うわ！しまった！」

「八号機致命的損傷大破」

オペレーターの管制が、聞こえてくる。

「へっへっ。墜ちな」

「おう！墜ちちまいな」

マッシュとオルテガの声も聞こえる。どうやら、二人とも敵を見つけたらしい。

「うわ！うわーー！」

「嘘だろ！」

「四号機コックピットに直撃致命的損傷パイロット死亡戦闘不能。十一号機両足損傷及び、頭部損傷戦闘不能により大破」

オペレーターの管制を聞きながら、前進する。レーダーに2機の反応が感知される。まだ、彼方は気づいていないようだ。左側の不知火が先行し右側の不知火がバックアップをするようだ。

「隊長機か?なら、落とさせてもらう」

ブーストダッシュで一気に左側の不知火に接近する。此方に気づいた不知火が反撃を試みるも、即座に上に飛んで回避する。

「ホラよ。お土産だ」

左手に持っていたクラッカーを投げる。此方を射とをとしていた。不知火に当り爆発した。その結果左側の不知火は、頭部と腹部辺りまで黄色に染まった。

「六号機致命的損傷大破」

「へっへっ!格闘てのはこうやるんだよ」

「ショルダーアタック!」

続々と撃破報告が入る。俺は残っていた、もう1機の不知火に上空からヒートホークを抜き、ブーストダッシュで一気に近づき斬りかかる。相手も74式近接戦闘長刀を抜き構える。お互いの武器がぶつかり合う。鍔迫り合いになるが、此方の熱で段々長刀の方が溶け始める。

「ぬう。でりゃあ!」

「く!ハアーー!」

お互いに打ち払い一旦距離をとる。

「なかなか、骨のある奴がいるじゃないか!」

「そちらも、やるではないか」

バズーカに持ち変えて、不知火をロックオンする。バズーカから弾が発射される。相手の不知火も87式突撃砲を此方に射つ36?弾が大量に発射されるが、当たることはない。ブーストを吹かし後方に下がる。先程の敵機を落とせなかったのが、残念だが自分が落とされるよりはましだ。

「うお!やるじゃねえか!だが、甘いんだよ」

「バカヤロウが!その程度で出てくんじゃねえよ!」

無線から声が聞こえる。マッシュとオルテガは敵機を撃破したらしい。

「一号機致命的損傷大破。二号機爆発炎上大破。十号機致命的損傷大破。十二号機頭部損傷戦闘不能」

マッシュとオルテガに任せた小隊は終わったようだ。残りは、俺の倒していない2機だけだ。

「マッシュ。オルテガ。此方に合流しろ」

「「了解」」

マッシュとオルテガが、此方に向かって来るまでにもう1機落としておくか。前進を再開すると、右から銃弾が飛んでくる。

「おっと！危ないな。墜ちろ」

左にバックジャンプして、銃弾を回避しその姿勢のまま、ビルの間を縫う様にバズーカを射つ。

「そんな！ばかな！」

ビルの間から、射って来るとは思わなかったのか、不知火は回避することも出来ずに直撃し黄色に染まった。

「五号機致命的損傷大破」

残るは、先ほど逃がした隊長機の不知火だけだ。マッシュとオルテガのザクが到着した。３機編成で俺が前衛マッシュとオルテガが後衛のアローフォーメーションを組む。陣形を維持したまま前進していると、開けた場所に出た。反対側には隊長機の不知火が右手に長刀左手に９２式多目的追加装甲を持って待っていた。

「ほう！マッシュ、オルテガ。前方の敵にジェットストリームアタックを仕掛けるぞ」

「おう！」

「了解」

３機が一直線に並ぶ。敵から見たら前方の１機しか見えない。３機でブーストダッシュする。敵は盾を前に出してガードするつもりだ。

「おらよ」

バズーカを射つと、敵機は回避行動でジャンプしてバズーカを避ける。そのまま此方に向かって突撃してくる。

「おりゃあ！」

俺の上からマッシュのザクが飛び出してマシンガンを放つ。とっさに不知火は、盾を出してガードするも間に合わずに右腕に弾が当たる。

「七号機右腕部損傷右腕部使用不能」

「もらった！」

オルテガのザクがマッシュのザクを飛び越してヒートホークで不知火を一刀両断する。不知火はガードすることなく、そのまま破壊された。俺達のザクは1列になりそのまま通り過ぎた。

「七号機致命的損傷大破。富士教導隊全機全滅。黒い三連星の勝利です」

オペレーターの管制から、勝利を報告される。

「全く相手にならんかったな」

「そうだな。この程度の相手なら1個大隊来ても話にならんな」

「おうよ。ただ俺達三連星が強すぎるだけだ」

「マッシュ、オルテガ。このまま帰投するぞ」

「「了解」」
そのまま、ハンガーに向かって帰投した。

ガイアｓｉｄｅｏｕｔ

巌谷ｓｉｄｅ

私は夢でも見ているのだろうか？富士教導隊と言えば帝国軍の中でも精鋭中の精鋭。しかも、こと対人戦に関しては並ぶもの無しと言われる程の腕前を持つ衛士だ。だが、今行われた模擬戦は彼等の腕前でも、話にならないと言わんばかりとの結果となった。

「凄まじいな。富士教導隊の不知火が、全く相手になっていない」

「そうでしょうね。黒い三連星は１個師団に相当する腕前ですから」

悠斗君がそう言うが、その顔には絶対の自信が窺える。まあ、あれほどの一方的な戦闘を見せつけられれば、１個師団相当の評価も妥当かもしれん。旧型のＭＳで我が国が誇る第三世代戦術機十二機を叩き潰したのだからな。これは、二戦目もただじゃすまないな。此れから戦う衛士達に健闘に期待するしかなかった。

巌谷ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私は現在第二戦目の戦闘予定地で待機している。設定では、私達は後方から追撃してくる的部隊を迎撃しながら、安全ライン間での脱出が任務だ。

「懐かしいですな、ガトー少佐」

「何が懐かしいのだ？カリウス」

「かつて、ソロモンから脱出するときの様ではありませんか」

確かに、言われて見ればかつて私が殿をしたソロモン脱出戦の時を思い出す。あの時は無我夢中で、友軍の撤退を支援したな。

「そうだな。ならばソロモンの悪夢と呼ばれた戦いを見せてやるか。カリウス、ケリィ、両者は敵に手を出すな。私が全て沈める」

「分かったガトー。君のやりたい様にやれ」

「ガトー少佐。かしこまりました」

二人とも敵に一切好戦させずに逃がしてみせる。

「ガトー少佐。もうすぐ模擬戦の開始時間になります。準備はよろしいですか？」

「テスレフ中尉。問題ない」

「分かりました。カウントダウン、１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１、０。戦闘開始」

テスレフ中尉の顔が消える。模擬戦が始まった。

「ケリィとカリウスは、脱出ラインまで一気に後退しろ。殿は私がする」

「分かった。行くぞカリウス」

「ガトー少佐。ご武運を」

ケリィとカリウスのザクが、ブーストダッシュして一気に離脱する。私がの機体のみが残る。レーダーに反応か写る。まずは４機の敵機が迫る。

「アナベル・ガトー出撃する」

私はブーストジャンプで上空に飛びブーストダッシュで敵機に高速で近づく。

「沈めーーー！」

バズーカを構え一番前のロックオンした敵機の不知火目掛けて発射する。此方に気づくも、ロックオンされた不知火は回避出来ずに直

撃する。

「一号機致命的損傷大破」

そのままの速度で、左側にいる不知火に左手に持ったヒートホークで、横に流し切りをする。そのまま、その後ろにいる不知火の背後に周り、ヒートホークで、真っ二つにする。

「三号機コックピットに致命的損傷パイロット死亡大破。四号機致命的損傷大破」

最後に残った不知火が、３６?突撃砲を射ってくる。

「あたれ！」

「おっと」

スラスターを吹かし、後ろに一旦下がり、距離をとる。即座に不知火が長刀を抜き此方に突撃してくる。

「くらえ！」

「当たらん」

左にクイックブーストして、突撃をかわす。背後ががら空きになった不知火にバズーカをおみまいする。

「沈めー！」

「しまっ」

バズーカの弾が背後に直撃して、不知火が黄色く染まる。

「二号機致命的損傷大破パイロット死亡」

まずは４機。倒した敵に背を向け再びブーストダッシュで前進を開始する。レーダーに敵機の反応が写る。今度は８機残り全機でアンブッシュ（待ち伏せ）していたようだ。彼方のレーダーに私はまだ写っていないはずだ。私は右に周りこみ、１機ずつ仕留めて行く事にしよう。最初のターゲットになったのは、一番右端にいた不知火だ。まだ、此方に気づいていないようなので、背後からヒートホークで斬りかかる。上に出来た影で気づいたようだか、遅かった。

「墜ちろー！」

「きゃー」

そのまま、不知火を一刀両断する。それに気づいた２機が此方に向かって来る。１機が此方に１２０?滑腔砲を射ってくる。

「フォックス２」

「当たらんよ」

１２０?滑腔砲を上空にジャンプして回避しバズーカを射つ。不知火は、回避するもそれは予測済みだったので、クラッカーを回避した場所に投げる。此方のクラッカーを撃ち落とそうと、突撃砲を構えるも先にクラッカーが爆発して、機体を黄色く染める。

「馬鹿目が。戦場では、撃ち落とすことが、不可能な場合は回避し

ろ」

「十二号機致命的損傷大破。九号機致命的損傷大破」

地面に着地すると、残っていた不知火が長刀で斬りかかるが、ヒートホークで受け流し、相手の頭部にバズーカを撃ち込む。

「まだまだ、甘いな」

「し、しまった！」

「十号機頭部に致命的損傷大破」

残りの残敵数は、５機だ。だが、まだ敵の指揮官を撃破していない。どんな作戦を立てようとも突破してみせる。ブーストダッシュで前進し再び敵機を探した。暫く進むとレーダーに反応が有った。２機の不知火が左右から此方に向かってくる。

「なに？フラットシザーズ（平面機動挟撃）だと？だが、当たらんよ」

「「フォックス３」」

２機の不知火が一斉に３６？弾を射ってくるも、私は上空にブーストジャンプして回避する。

「なに！」

「くそ！やられた！」

挟撃してきた不知火の攻撃を避けて、右側の機体にバズーカを発射する。咄嗟に反応するも、回避が間に合わず直撃する。上空に飛んでいる私に左側の不知火が長刀を持って斬りかかってくる。それを避けて背後に周りながらヒートホークで腰の辺りを切断する。切断された不知火は、そのまま地面に落下して、ズドーンと大きな音をたてる。実機訓練とは言え、実際には、切れていないとはいえモニターの映像にそう映るとは、不思議なものだ。まあ、実戦では幾らでも人を殺している私がそう感じるのも変なのだがな。

「五号機致命的損傷大破。十一号機腰部切断により戦闘不能パイロット生死不明」

戦闘中に他の事を考えている場合ではない。即座に思考を切り替えて敵を探す。すると3機の不知火が此方に向かってきた。

「フラットシザーズ（平面機動挟撃）か！芸のないやつらめ！」

3機の不知火が、又もフラットシザーズ（平面機動挟撃）を仕掛けてきた。だが、先程の奴らと違い今度は桁違いに上手い。

「フォックス2」

「フォックス3」

「あたるか！」

まず、2機の不知火が左右から攻撃を仕掛けてきた。私は今度はブーストを吹かして後退して、攻撃を避けた。

「沈めいーー！」

バズーカを、２機のが重なる瞬間に射つ。

「あ、悪魔か！」

「こ、これは、夢でもみているのか？」

２機ともバズーカの爆風で黄色く染まる。残るは１機のみ。

「七号機致命的損傷大破。八号機致命的損傷大破。」

レーダーで周りを確認してみると、７００メートル先に反応が写る。そちらに機体を向けてブーストダッシュで前進する。　バズーカをしまいヒートホークを右手に持って突撃する。不知火の方も突撃砲をしまい長刀を両手で握りしめて突撃してきた。お互いの中間辺りてぶつかり合い、激しい鍔迫り合いになる。ギシギシと武器の軋む音がする。

「なかなか、やるではないか」

「そちらこそ、日本人でもないのにこのような近接戦闘を挑んで来るとはな」

一旦離れて再度ヒートホークを右から左に払うも、相手も長刀を払いヒートホークを切り払った。

「上手い。このように格闘戦を出来る者がいるとはな」

「ちい！短いオノを振り回す割にはやるではないか」

互いに距離を取り向き合う。

「貴様名はなんと言う？」

「沙霧尚哉中尉と申します。貴官はなんと申す？」

「アナベル・ガトー少佐だ。なかなか良い腕前をしているな」

「そちらこそ、日本人でもないのにこのように近接戦闘を望んでくるとは、舐められたものです」

不知火が新しい長刀を持って両手に握りしめて構える。

「違うぞ。此方の機体の性能上格闘戦でも、充分行けるからだ」

右手のヒートホークを握り直す。

「「いざ！」」

ブーストダッシュで不知火に向かって突撃する。不知火も此方に突撃してくる。お互いの間合いに入る。先に不知火が長刀を振り落とす。左に機体を傾けてギリギリの所で回避して、すれ違い様にヒートホークで腹部を切り裂く。

「私の勝ちだ」

「私の敗けか」

そのまま、不知火はそのまま崩れ倒れこむ。

「六号機腹部に致命的損傷大破。帝都守備連隊第一中隊全滅。アナ

ベル・ガトー少佐の勝利です」

オペレーターの管制が聞こえてくるが、気にせずに語りかける。

「貴殿の腕前は、とても良かった。貴殿達と次に会うときは戦場で共に戦いたいな」

「私達を難なく倒した、アナベル少佐にそう言って頂けたのなら、まだまだ私の腕も捨てた物ではないようですね。次に会うときは共に戦場でＢＥＴＡを倒しましょう」

機体を操作して、ブーストダッシュでハンガーへと戻った。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

唯依ｓｉｄｅ

たった今の戦いは夢でしょうか？たった１機のザクに帝都の守備を司る精鋭部隊が一つ帝都守備連隊第一中隊の１２機の不知火が全滅しました。

「ゆ、夢か？」

「夢なら、覚めてくれ」

「あ、悪夢だ。悪い夢をみているのだ！」

周りの人達から声が上がる。佐官の一人が言った悪夢。そう。悪夢としか言いようがない戦いだ。たった1機の敵機を傷つけることすら、出来ないまま一方的に叩き潰された。

「こ、これがＭＳの力何ですか？」

私は思わず、考えたことが口から零れでてしまった。

「そうだ。確かにＭＳの力もあるが、パイロットの腕前が機体の性能を余すことなく引き出したからこその結果だ」

悠君が、私の呟きに答えてくれた。彼はＭＳの性能だけでなく、パイロットの腕前がいかに機体を生かせるかが大事だと言う基本的な事を思い出させてくれた。

「次の試合は、ただの消化試合にしかならんだろうな」

「何でですか？」

「今までの試合を、模擬戦に出る衛士達全員が見ているだろう？なら、士気はがた落ちだ。やるだけ無駄だからな。イルマ中尉、ライデン少佐に繋いでくれ」

「かしこまりました。ライデン少佐、不動准将から通信です。繋がりました」

中央モニターに、金髪のスラリとした青年が映る。

「どうしました？何かありましたか？」

「ライデン少佐、マツナガ少佐に伝えてくれ。第三試合は無しになった。変わりにザク？Ｒ－２のデモンストレーションをしてやってくれ」

「はあ？どうしてですか？」

「前の２試合での戦いぶりで、帝国軍側の士気が下がり過ぎた。これ以上叩くのは、失礼に値する。日付を変更して、後日時間があれば行う事とする。よろしいですね？巌谷中佐」

「分かりました。後日時間があれば第三試合を行う事としましょう」

「と、言うことだ。分かったな」

「了解しました。では、デモンストレーションの変則機動を見せて来ますよ」

「では、頼んだ」

そう告げると、モニターに何も映らなくなった。あの新型のザクの戦いは、後日確りと見せて頂いた。正直自分が対戦相手でなくて良かったと、心の底から思う戦いだった。

唯依ｓｉｄｅｏｕｔ

第十話（後書き）

黒い三連星やアナベル・ガトーさんは、もっと強いような気がするんですが、作者の力量不足であんまり、強そうに書けませんでした。
申し訳ありません。

第十一話（前書き）

やっと出来ました。書けば書くほど駄文だ。今回はキャラ崩壊、ご都合主義満載です。では本文をどうぞ。

第十一話

悠斗ｓｉｄｅ

模擬戦終了後、俺達三人は指令部を離れ、別室に案内された。

「此方らで、暫くお待ちください」

「分かった。案内ご苦労」

案内してくれた、兵士が下がる。中に入ると広さ二十畳程の部屋の中にソファーとテーブルが、置かれていた。ソファーに腰かける。右側にシーマ中佐が座り左側にイルマ中尉が座った。

「何で私達を、此方に移動させたのでしょうか？」

「簡単だよ。ザクの性能を見せ付けられた挙げ句に、自慢の精鋭連中をボコボコにされたんだ。何かしら、技術提供しろって言ってくるに決まってるのさ」

「それだけなら、大した事とないのだがな。嫌な予感がするな」

「嫌な予感とは？」「まあ、相手が来てからじゃないと分からんからな」

何だか、背中の辺りがヒリヒリとするんだよな。何て言えば良いかな、こ～、ニュータイプの勘が凄くヤバイ空気を伝えてくれるんだ

よな。多分、俺関係なんだよなきっと。
ハァ～と、深いため息をして相手が来るのをまった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

私は今とある方から、頼まれた任務の為に富士第一基地に来ている。
今日此処で行われている、メビウスによるＭＳＸの教導の一環として模擬戦が行われているのを別室で、観戦していた。

「なんなんだあの機動性は！」

「同じＯＳなのに、こんなに違いが出るのか！」

「此れが、ＭＳの力なのか！」
周りの観戦者達から、声が上がる。皆私よりも階級が上な方たちばかりだ。私とて、声を上げたいが斯衛の意地が有るために、声に出さずにいるのだ。

（なんなんだあの性能は！我が帝国が作り上げた不知火が、まるで相手になっていないではないか！）

今まさに不知火が、１機のザク？Ｒ－１型と呼ばれる機体に落とさ

れた。　不知火の衛士は、帝都守備連隊の精鋭の中の精鋭　沙霧尚哉中尉率いる第一中隊だ。あの帝国軍将軍派筆頭の彩峰萩閣中将の愛弟子だ。衛士の腕なら帝国軍の中でもトップクラスと言われる腕前だ。なのに、相手はたった1機で一個中隊を手玉に取っているではないか！

私の感情の中に嫉妬にも似た感情がしてくる。忌々しい。我が帝国が作り上げた第三世代機が、項もあっさり破れるとは。新型ＯＳで、戦力の大幅強化が出来たと思った矢先に来て、浮かれている我等を叩き潰す。嫌なやり方だが、確かに良い手である。一度本気で潰された者達は、更に強くなろうと訓練する。その者達が頑張れば、周りも必然的に頑張る様になる。よく考えているものだと、感心させられる。

（しかし！日本に帰ってくるなら、連絡の一つも寄越さないとは、何事だ！まさか、私達との約束を忘れているのか？此は問い詰める必要がありますね）

ククと、黒いオーラを纏いながら笑う私を周りの観戦者達は、何事だと言わんばかりに見ていた。一人の男性将校が近づいてきた。

「大尉どうしたのかね？」

「此は、彩峰中将。どうしたとは？何の事でしょうか？」

「いや、先程のから何か笑い出したから、何か気が触れたのかと思ってな」

「いえ。特に何もありません」

真顔で彩峰中将に返事をする。私は至って普通ですよ。ただ、ちょ

っと一人Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩしたい人がいるだけですから。

「そ、そうかね？なら、良いんだがな」

何故そんなに、挙動不審なんですか？額に汗までかいてますよ？

「大尉。此れから私は不動准将と会うつもりなのだが、良ければ大尉も如何かな？」

「よろしいのですか？」

「構わないよ。大尉も不動准将と、積もる話も有るだろうしな」

此は気を使ってもらってしまいましたか。なら、お言葉に甘えますか。

「では、お供させて頂きます」

待っていなさい聞きたい事が、沢山有るんだから。

黒いオーラを全身から隠すことなく放出し続ける大尉であった。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

別室に案内されてから、暫くの間三人で他愛もない話をしていた。コンコンコンと、ドアを叩く音がした。談笑を止めて、入室を促す。

「失礼します」

ドアが開き、青年が入室してきた。更に後ろから帝国軍の制服をきた細身の初老の男性将校が入る。その男性の後ろから赤色の斯衛軍の法衣を着たライトグリーンの髪の毛をおろしメガネをかけた女性が入ってきた。マジですか！沙霧尚哉と彩峰中将は、なんとなく予想してたけど、まさか月詠真耶さんが此処に来るとはな。即座に立ち上がり敬礼する俺達３人。

「は！お疲れさまです。私は国連事務総長直轄部隊」

「メビウス所属の不動悠斗准将だろう。名乗りの途中て遮ってすまないな」

「いえ。大丈夫です彩峰萩閣中将。光州作戦の時以来ですね」

俺達の敬礼に３人とも返礼をしてくれた。彩峰萩閣。本来なら光州作戦の時敵前逃亡の汚名をかけられ処刑された彩峰慧の父親。クーデターの原因の元の一つになった人物。将軍派筆頭であり、沙霧尚哉の師でもある。軍人として汚名を被り榊首相秘密の説得を笑顔で受けいるた人である。その帰り道に榊首相が車の中で涙を流したのは余談である。沙霧尚哉。言わずと知れた、クーデターを引き起こした人物。彼は日本の腐敗に我慢が出来ずに立ち上がった人物だ。結果的に国益を優先する国に操られて立ち上がったのだが、クーデターは失敗に終わり国益優先国は戦力を悪戯に消耗させ、政治体制の移行に繋がったがな。まあ、あの国の連中に日本人の考えて方な

ど理解出来んだろうがな。また、衛士としての腕前なら超一流である。旧ＯＳでありながら新ＯＳ搭載の白銀の乗る吹雪を追い詰める程である。また最新鋭のラプターすら、相手にならない程の実力者だ。この世界では、ガトー少佐に負けたけどね。

月詠真耶。斯衛軍赤の法衣を纏う名家の女性だ。御剣冥夜の護衛をしている第１９独立警備小隊の月詠真那さんの従姉妹である。オルタでは登場せずに、ＡＦで悠陽の世話がかりとして登場した人だ。切れるとメガネを外してヤンキー口調になるのは、従姉妹と言えど変わらないのが月詠家だ。この世界だと、幼なじみだから非常に怖いです。もしかして、俺が感じた嫌な予感って真耶さんが来るってことかよ！

「不動准将。私は沙霧尚哉中尉と申します。先程の模擬戦では、准将閣下のお造りになったＭＳに、全く相手になりませんでした」

「沙霧中尉か。先程の模擬戦なかなか良い腕前だったぞ。君の腕は悪くない、寧ろ誰よりも良かったぞ。其所は誇って良いぞ」

沙霧中尉に右手を差し出し、握手を求める。沙霧中尉も近づいて右に手を出して握りしめた。

握手した手を離してもらい、月詠大尉と向かいあう。

「お久しぶりです真耶さん。お元気そうで何よりです」

取り敢えず笑顔で、話かけることにした。すると頬をほんのり赤くした真耶さんがいた。

（なんで、そんなに貴様はカッコいい笑顔なんだ？）

「久しぶりですね不動准将。そちらも息災そうで、何よりです。日

本に来るなら幼なじみの私達に連絡の一つも繰れても良かったのではないですか？」

真耶さんから、半端ないプレッシャーを感じる。なんて言うか、真耶さんからどす黒いオーラを感じる。もしかし、怒ってるて奴ですか？篁中尉に続いて月詠大尉も、連絡がなかった事に怒ってる様です。

「スミマセン真耶さん。ここ暫くは、忙しかったので連絡することを忘れていました」

「其くらいは、分かっている。私としては、最初に連絡をくれなかった事が許せないだけだ。大体お前は、」

メガネに指を掛けながら怒る真耶さん。彼女にメガネを外させたら終わりだ！誰かヘルプ！ヘルプ！ピンチなんです！
周りの方々に助けを求めて目線を、動かす。
沙霧中尉と目があった。

（沙霧中尉。助けてください！）

（不動准将、無理です。私では、助けられません。力不足ですいません）

沙霧中尉に目を逸らされた。次に目線を動かして、彩峰中将と目を合わす。

（彩峰中将。助けて頂けませんか？）

（うーん。まあ、自業自得だと思うぞ）

（そんな～、何とかなりませんか？）

（まあ、君には光州作戦の時に世話になっているからな。今回だけだぞ）

（ありがとうございます。マジで助かります）

この間目線だけで、会話しています。所要時間は１０秒だ。

「まあまあ、月詠大尉。積もる話は、また今度にしてくれないかな？」

「であるからと、そうですね。失礼しました」

彩峰中将の言葉でお説教を止める月詠大尉。マジで助かりました。

「さて、立ち話も難だから、座りましょうか」

彩峰中将の言葉で皆が、ソファーに座る。俺の目の前に彩峰中将。俺から見左側に月詠大尉。右側に沙霧中尉が座った。

「まずは、不動准将。光州作戦の時は、本当に助かった。改めて礼を言わせてもらう。ありがとう」

頭を下げる彩峰中将。

「彩峰中将、頭を上げてください。私はただ軍人として、成すべき事を成しただけです。それに、私がしなかったら彩峰中将が、部隊

を動かしたでしょう」

まあ、実際には彩峰中将が部隊を動かしたら、国連指令部が陥落して、前線が大混乱に陥るんですけどね。

「そうかね。そう言って頂けたのなら幸いだ。しかし、不動准将は自ら友軍を下げて避難誘導に兵を割いたな。あれこそ、賭けだったのではないのかね？」

まあ、普通に考えれば賭けですけど、俺の愛機のグフ・カスタムはチート機体ですから、ちっとも賭けにすらなりませんよ。寧ろＢＥＴＡを殺す事が出来て良かったし、彩峰中将が処刑されるフラグをへし折る事が出来たから問題ないしね。

「いえ、あの程度の数なら四個中隊が入れば、難なく倒せる範囲内でしたから。寧ろ、周りに友軍が居ない方が機体の性能を生かしやすかったですから、下げただけです」

「ふう。実際、不動准将の言うとおりにＢＥＴＡを倒せれば、我々人類は此処まで負けてはいないよ」

ため息をつき、苦笑いする彩峰中将。まあ、実際問題、チート機体ばかり戦場にでてたら人類最初の方で、ＢＥＴＡに勝っていただろうしな。

「それで、私達をわざわざ別室に案内してまで話たかったことは、先の作戦の感謝を述べる事が目的だったのですか？だとしたら、用が済んだのなら私達は退席させて頂きたいのですが？」

まあ、このやり取りは小手先の確認の為だろうな。この程度のやり

取りをするくらいなら、指令部でも問題無いからな。

「待ってくれ、不動准将。此れから、本題に入るつもりだったのだよ」

そうですよね。じゃないと、俺が呼ばれた意味が無くなりますからね。

「不動准将。君に頼みがある。出来れば最後まで聞いて欲しい」

彩峰中将が、やや前のめりになって話してくる。顎に手を置き、頷いて話を催促する。

「実は、我が帝国軍の不知火の改修計画の件なのだが、君も知っての通り不知火は、量産機でありながら余りにも突き詰められた設計をされており、前線から上がってくる要望すら、満足に実現出来ない現状だ。更に、斯衛軍の８２式戦術歩行戦闘機瑞鶴も老朽化が進んでおり、新型の戦術機が必要な状態になっている」

まあ、周りくどい言い方だな。ささっと技術協力をして欲しいと言えば良かろうに。日本の技術力では、不知火を改修しても馬鹿みたいに使いずらい機体になるだけだし、斯衛の新型戦術機は、高性能だけど１機当たりのコスト高がネックになるから、全体には配備するのが難しいからな。

「言いたい事は分かりました。技術協力をして欲しいと言いたいのですね？」

「うむ。早い話がそうなのだ」

相づちを打つ彩峰中将。まあ、本来貴方は技術分野の方ではないですからね。

「残念ながら、それは出来ません」

「な、何故、ですか！不動准将！貴方は日本人でありましょうに！」

沙霧中尉が机を両手で強く叩き立ち上がり、俺に怒鳴り声をあげる。見るからに納得がいかない顔をしている。

「沙霧中尉。今私は、彩峰中将と話しているのだ。黙っていろ」

「いや、出来ません！貴方程の方が何故、何故手を差し伸べてくれないのですか！貴方は、斯衛の生まれであるのですから、殿下に忠義を捧げているのでは、ありませんですか！この日本の戦闘機開発の危機に対して、何故ですか！」

どんどん、声を荒らげる沙霧中尉。この頃から既に、熱い漢でしたか。熱血過ぎで、女性陣は引いてますよ。まあ、シーマ中佐は、相手から見えないように、何時でも武器を出せる様にしていますから、警護に関しては大丈夫ですな。月詠大尉は、黒いオーラ全開で俺を睨んでいるしね。マジで怖いです。

「尚哉！止めないか！」

彩峰中将の叱責が沙霧中尉に飛ぶ。

「申し訳ありません不動准将。尚哉は殿下に関わる事が出てくると直ぐに熱くなるのでな。今の失礼は、私に免じて許してやって貰えないか？」

再び頭を下げる彩峰中将。沙霧中尉、あんた尊敬する師に何度も頭を下げさせるなよ。まあ、怒ってる訳では無いからいいですし、さっき月詠大尉のお説教から助けて頂いた件もありますからな。

「頭を上げてください。私は全く気にしていません。寧ろ沙霧中尉の、殿下に対する忠義の高さがよく分かりましたから」

「そう言って貰えて良かったよ。尚哉お前も、頭を下げなさい」

「は、はい。すいませんでした。年下とは言えど上官に対する態度では、ありませんでした」

立ったまま頭を下げる沙霧中尉。また、綺麗なお辞儀な事で。

「良いよ。それより座ってくれないか？何故拒否するのか理由を話したいから」

「は！ありがとうございます」

再び席に座る沙霧中尉。

「では、断った理由ですが、私達メビウスは自分達の技術を一国だけに、提供することは出来ません。此はメビウスの設立当初から全く変わっておりません。此は一人勝ちだけをさせないためです」

「うん？どう言う事ですか？」

「真耶さん。俺達の技術はある意味進んでいるが、それがもし何処か一つの国だけに、供給されたら他の国が黙っているかい？」

「そう言うことか。自分達だけで、守っている技術が他国に流れたら他の国々も技術を欲しがりそれこそ、戦争の引き金になりかねないからかか」

「そうです。例外的に、全世界に均等に供給出来る物については、出していますけどね」

そう。新型ＯＳは金さえ払えば何処の国にも、買える様には表向きなっている。まあ、アメリカには売らないけどな。

「成る程な。だから日本一国だけに、便宜を図る訳にはいかないのだな？」

「はいそうです。しかも、戦闘機等の技術関連の交渉は、本来巌谷中佐が行うべきなのでは？」

普通に考えても、彩峰中将より技術廠の副部長の巌谷中佐が交渉を行うのが良いと思うのだが。

「本来なら、そうなのだが不動准将と巌谷中佐では、流石に階級差があるので私がすることになった」

「そうですか。なら、立ち会うだけでも居た方が良かったのですがね」

苦笑いする彩峰中将。はて？変な事を言ったか？

「まあ、今頃篁中尉に殴られているだろうな」

「なんでまた？殴られているですか？」

「まあ、なんださっしといてやってくれ」

いや、流石に意味が分かりませんよ。また、巌谷中佐が篁中尉をからかったのかな？

（まあ、不動准将が関係しているんだけどな。鈍いのは、大変だぞ不動准将）

「まあ、今回の交渉は残念だったが、君に助けられた恩は忘れないからな。もし、力が必要になったら連絡をくれたまえ」

「此方こそ、彩峰中将に会えた事が最大の成果ですから。もし、日本が有事の際にはメビウスは全面的に支援をすることを、約束致します」

「ありがたい。その時は是非力添えを願いたい」

お互いに立ち上がり、握手を強く交わす。その後、彩峰中将と沙霧中尉は部屋を退室した。残されたのは、月詠大尉と俺達だけだ。月詠大尉が、俺の前に座り直した。

「真耶さんは俺に用が有るんだよね？」

「そうだ。悠斗が私達との約束を忘れて、他の女と遊んでいることについてな！」

え？何のことですか？この世界の俺はどれだけ約束事してるんですか？全く分かりませよ！まて、達て言ったよな！他にも誰かに言っ

てるのか？

「真耶さん、どんな約束したっけ？」

「なに？忘れたとか言うのか？」

真耶さんからどんどん黒いオーラが発生する。マジで危険だ！

「いや、確認したかっただけですよ。間違えてたら嫌ですから」

「そうか。疑って済まないな。約束の事だが、私達と結婚することだ」

え？今なんて言いました？結婚て、聞こえた気がしたんですけど？聞き間違えたかな？

「え？今結婚て今言いませんでしたか？」

「うん？そう言ったが何か間違えだったか？」

いや、そんなに堂々としないでください。左右から嫉妬のオーラ全開なんですが。

「まあ、お互い良い年になったから、そろそろ真面目に考えて欲しいがな」

「あら、小娘が私の悠斗を横取りしようってのかい？」

シーマ中佐が、月詠大尉に噛みついた。

「中佐殿は、黙って頂きたい。此は私と悠斗との問題ですから」

「それは、許せませんね。悠斗さんは、私と結婚する予定なのですから」

イルマ中尉も乱入したよ！しかも、いつから結婚する事になっているですか？

それから、女3人達の仁義なき戦いが始まった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第十一話（後書き）

う〜ん。やってしまった感が否めない。こんな駄文にお付き合いありがとうございます。仕事が忙しくなってきたので、ページ数が減ると思います。

第十二話（前書き）

いつの間にか、１６万アクセス突破しました。こんな駄文に、此れだけのアクセスが有ったことに感謝しています。
今回もご都合主義、キャラ誰？などが、満載です。本文をどうぞ。

第十二話

悠斗ｓｉｄｅ

模擬戦後の修羅場から、十日余りたった。
あの後、月詠大尉は俺を眼鏡を外したヤンキー口調でマジギレするは、シーマ中佐からは夜に酒を飲んで絡まれるは、イルマ中尉に至っては既成事実を作ろうとするは、散々だった。
今日は、やっと取れた休みで唯依ちゃんと約束していた、帝都京都にある篁家のお墓参りに来ていた。

「叔父さん。叔母さん。なかなか、お墓参りに来れなく申し訳ありません。叔父さんが守ろうとした、日本もついに前線国家になってしまいました。しかし、見ていてください。必ずやＢＥＴＡを、地球から叩き出して見せますので、天国から唯依ちゃんを守ってください」

お墓に線香を置いて、手を合わせる。
このお墓の中には、ＢＥＴＡとの戦いで亡くなった唯依ちゃんのお父さんと、唯依ちゃんが小さい頃に亡くなった、お母さんが眠っている。
この世界の俺は、篁家との交流関係が有ったらしい。
残念ながら、二人の顔は分からないが、お世話になっている筈なので、確りと手を合わせる。

「父様。母様。今年は悠斗君も、一緒に来てくれました。次は何時来れるか分かりませんが、天国から見守っていてくださいね」

俺の隣に立ち、両親に報告する唯依ちゃん。服装は、帝国軍の制服ではなく、斯衛軍の山吹色の制服を着ている。ちなみに、俺も斯衛の制服を着ている。

お墓参りに来る前に、唯依ちゃんに「帝都に行くんですから、斯衛の服を着てください」と、言われて渡されたので、着替えました。あんまり似合うとは、思えないんだよな～。あと、腰に刀を差しています。刀の名前は、氷刃「雪月花」。モ〇ハ〇セカ〇ドGの太刀なんですよ。神様から、貰ったチートの能力で、出せるか試してみたら、出せました。本来は太刀なのに、何故か脇差しの大きさに変化しました。まあ、多分太刀の大きさに戻せるでしょう。

「お墓参りも、終わったし帰ろうか」

「そうですね。行きましょうか」

唯依ちゃんの両親の、お墓に背を向けて墓を去る。暫くで歩いていると、空から雪がちらついてきた。

「うん？雪が降ってきたな」

「そうですね。まだ、2月の初めですからね」

二人して空を見上げる。まだ、京都の町は戦火に巻き込まれていないため、綺麗な街並みが残っている。この京都の美しい街並みも、あと半年程したら灰塵に帰るのだからな。

「そう言えば、悠君は実家に戻らないんですか？」

「実家には、戻らないよ。あくまでも今日は、唯依ちゃんの両親の、

お墓参りに来ただけだから時間が無いからね」

この世界の俺の実家なんて、全く知らないし興味も無いから、行くつもりもない。

「なら、少し散歩しませんか？まだ、帰りの時間まで余裕がありますし」

腕時計を見ると、まだ、帰りの時間まで余裕がある。唯依ちゃんとのプチデートだと思って行きますか。

「そうだね。ならお茶にしようか」

「なら、私のお勧めのお店があるので、行きましょう！」

「ちょっと待って」

唯依ちゃんの隣に並び、右手を俺の左手で優しく握る。唯依ちゃんの顔が赤くなった。

「え、えっと？」

「うん？迷子にならない為だけど、嫌だったかな？」

「い、いえ！構いません」（悠君の方から、握ってくれたよ／／／／嬉しいな／／／）

何だか、唯依ちゃんが真っ赤になってるけど、風邪かな？今日は寒いから、お墓参りの間に冷えちゃったかな？だとしたら、早めにお店に行こうかな？

「唯依ちゃん、顔が赤いけど大丈夫？なんなら、早めに迎えを呼ぶけど？」

「え？あ、だ、大丈夫です。それより、お店に行きませんか？」

（せっかく悠君が、時間を作ってくれたんだから、大事にしなくちゃ）

まあ、唯依ちゃんが大丈夫なら問題無いか。

「じゃあ、案内をお願いするね」

「はい。ついて着てくださいね」

唯依ちゃんと、手を繋ぎながら案内されたお店に向かって、歩く。

暫く歩くと、和菓子屋さんが見えてきた。

甘味所「ヤシマ」と書いてある。

「此処の和菓子は、美味しいんですよ。特に餡蜜が美味しいんですよ。たまに雨宮中尉と一緒に来るんです」

「へえ～、唯依ちゃんがそう言うなら、楽しみだね」

暖簾をくぐりドアをあけると、女性店員が出てきた。

「何名様ですか？」

「二人です」

「なら、此方の席にどうぞ」

女性店員さんについて行く。なんか、店員さんが誰かに似ている気がするな。

「此方の座席になります。ご注文が、決まりましたら声をかけてください」

そう言って、店員さんは去っていった。とりあえず二人とも座る。ちなみに手は、お店に入る前に離しています。その時の唯依ちゃんは、何となく寂しそうだった気がした。多分気のせいだろうな。

「唯依ちゃんは、何にする？」

手元にある、メニュー表を二人で見ながら話す。

「そうですね。私はやはり、餡蜜を食べようかと。悠君は、どうします？」

「うーん。俺は、どうしようかな？」

真面目に、悩んでいます。わらびもちにするか、餡蜜にするか、みたらし団子にするか悩みます。

「決まった。みたらし団子にするよ」

「お団子ですね。すいません、注文お願いします」

「はい。只今伺います」

先程の女性店員さんが、注文を受けに来てくれた。唯依ちゃんが手慣れた様子で、注文する。店員さんが唯依ちゃんと、小声で話して

いたが、俺は違う事を考えていたので、全く聞こえていなかった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

唯依ｓｉｄｅ

私は今、良く来る甘味所で悠斗君と二人で食べにきた。常連の私と中のよい店員八洲みらいに、注文を頼んでいた。

「餡蜜とみたらし団子を、ください」

「分かりました。唯依は、今日は雨宮さんとじゃなくて、彼氏と一緒なのね」

「ち、違います！彼は幼なじみです」

「あら？そうなの？彼の方を見ているから、てっきり彼氏かと思ったわ」

確かに、悠君が彼氏なら凄く嬉しくのだか、残念なことに私は幼なじみとしか、見られていない気がする。確かに彼の側に居ても、不思議ではないが一人の女としては、悲しいな。悠君は、顔はカッコいいし、性格は優しい。家柄だって、名家の生まれだし、軍人としては二十歳と言うのに准将という地位にいる。衛士としての腕前も

一流である。しかも、本人はそんなことを鼻に掛けることなく、プライベートであれば普通に誰とでも接してくれるのだから、凄いのだ。

「唯依。貴女本気で狙っているなら、自分から積極的にいかないと駄目よ。多分彼は、ものすごい鈍感だから。ちょっとのアプローチじゃ、気づかないはずだから」

「ちょっと！みらいさん！なに言ってるんですか！」

顔が熱くなる。多分赤くなっているだろう。

「まあ、私は応援してるから、頑張ってね」

そう言って、みらいさんは奥に消えて行った。

悠君を見ると、目を瞑って何か考えているのだろう。少し難しい顔をしていた。彼は同い年なのに、准将まで上り詰めた英傑だ。休みと言えど、頭の中は忙しいんだろう。みらいさんに言われた事を、考えてみる。私は悠君と一緒に居たい。昔は当たり前の様に、一緒だったけど、彼が居なくなってからは、何もかもが変わってしまった。

一緒に居るのが当たり前だったから、居なくなってから、彼が私の心の中にこんなにも、大きく占めていたことに気づいた。

（そうよ。もう一度失うなんて、嫌！なら、もう少しだけ自分の心に、素直になろう！）

もう一度決心しなおす。後悔は後で幾らでも出来る。なら、全力で頑張って行こう。そう誓った。

唯依ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

うーん。あの店員さんが誰なのか、未だに思い出せない。誰かに似ているんだけどな～等と、下らない事を考えていると、店員さんがやって来た。

「お待たせしました。餡蜜とみたらし団子になります。ごゆっくりどうぞ」

そう言って、店員さんは奥に去っていった。

「来たな。とりあえず食べようか」

「そうですね。いただきましょう」

みたらし団子を取り、口に運ぶ。甘い餡と団子のモチモチとした食感が最高だ。

「団子は、美味いな」

「そうでしょう。餡蜜も沢山の果物が入っていて、美味しいですよ」

美味しそうに、餡蜜を食べる唯依ちゃん。幸せそうな表情で食べているので、つい撫でてしまった。

「／／／あの、悠君何で撫でるんですか？／／／」

「うん？唯依ちゃんが、可愛いかったから」

何だか、見ていて和めたからついやってしまった。

「／／／か、可愛いなんて。と、取り敢えず周りの人が見ているので、止めてもらうと嬉しいのですが／／／」

「え？おわ！ご、ごめんね」

周りのお客さんや、店員さんからそれはもう、暖かい目で見られました。一部からは、嫉妬と殺意が混じっていたけど。

「い、いえ。気にしないでください」

（撫でもらえて、嬉しかったなんて、言えないよ／／／）

「そ、そうか。なら、良いんだけどね」

それから、二人でのんびり話ながら食べていると、店員さんがやって来た。

「あの、すいません。今お店が混んでいて、相席をお願いしたいんですけど、よろしいでしょうか？本来は、お武家様に頼むのは失礼だと、ご存知なのですが」

言われて、周りを見ると先程よりもお客さんが、いて大繁盛してい

た。他の店員さんも、慌ただしく働いていた。

「俺は構わないけど、唯依ちゃんは？」

「私も構いませんよ。普段良く来ますから、大丈夫ですよ」

「すみません。わざわざお武家様に、迷惑をかけてしまって。本当にありがとうございます」

そう言って、店員さんは入り口で待っている、お客さんの元に行った。少しして、店員さんがお客さんと、一緒にやって来た。お客さんの方を見てみると、赤色の斯衛の服に身を包んだ女性が、やって来た。てか、真耶さんだった。

「すみません。此方で相席になります」

「構わない。て、悠斗と唯依じゃないか！なんで、二人ともこんな所に、居るんだ！」

此方を見て、驚く真耶さん。真耶さんの、驚く顔を見れたのは、ちょっとラッキーだった。

普段は、めちゃくちゃお堅い表情しかしないから、驚き顔はレアだから。

「え？相席の相手が、真耶さんなんですか？」

驚いている、唯依ちゃん。まあ、なかなか有り得ないパターンだからな。俺か？入り口で顔が見えたから、驚く程でもなかった。

「まあ、立っているのも何だし、座りませんか？」

「そうだな。済まないな。ああ、何時ものをお願いする」

「はい。かしこまりました」

注文を受けて、店員さんは、奥に去っていった。そして、何故か俺の隣に座る真耶さん。唯依ちゃんの隣じゃないんですか？

「あの、真耶さん。何故俺の隣に座って居るんですか？」

「なんだ？将来を約束した相手が、隣に座ってはいけないのか？」

ゆっくりと、俺に近付いてくる真耶さん。

唯依ちゃんの方を見てみると、そこには黒いオーラ全開で居る、唯依ちゃんがいました。

「真耶さん。私の悠君に、何をしようとしてるんですか？」

笑顔なんですけど、目が笑っていませんよ！全く安心出来ないです。周りの人達も、怯えています。

「なんだ？唯依は、嫉妬か？残念だが、悠斗のことは、私に任せて早く違う男を、探しなさい。ああ、安心してくれ。悠斗は　私が幸せにするから」

まさかの爆弾発言！唯依ちゃんから、放たれるオーラが、倍増したよ！！

「ふざけないでください！悠君は、真耶さんの様な、二面性の性格をした、女性より私のような、おしとやかな女性の方が、良いに決

まってます！」

「なに？それは、どう言うことかな？」

二人とも立ち上がり、今にも殴りあいをしそうな、勢いだ。

「二人ともやめないか！此所は、一般のお店だぞ！民間人に迷惑を、かけてどうする！斯衛の名に傷が付くぞ！」

取り敢えず、二人をなだめる。流石に此処で、喧嘩されたら店側が迷惑だからな。

「う！す、すいませんでした」

「あ！も、申し訳ない」

二人とも、頭が冷えたのか、周りに謝りながら席に座った。

「皆さん、迷惑をお掛けしました。すみませんでした。店員さんも、申し訳ありません」

周りにの人達に頭をさげる。皆さんも、また食事を再開し始めた。

「全く。二人とも勘弁してくれよ。此所は甘味所なんだから」

席に座りながら、二人を注意する。全く、店側からしたら営業妨害にしか、ならない。

「ご、ごめんなさい」

「す、すまなかった」

俺に、頭を下げる二人。まあ、被害がなかったから、良かっけど。
奥から、店員さんがやって来た。

「おまちどおさま。もう、二人とも喧嘩は、勘弁してよね」

餡蜜を持ってきた、みらいさんに怒られる二人。

「すみませんでした」

「本当に、申し訳ない」

「まあ、良いけどね。まあ、餡蜜食べてリラックスしなさいよ」

それだけ言って、奥に去っていった。

「まあ、菓子を食うか」

「そうですね」

「ああ、そうしよう」

3人で和菓子を、食べ始める。みたらし団子が、やはり美味い。二人は餡蜜を食べている。
唯依ちゃんの食べる姿は、和む感じだけど、真耶さんは、凛とした感じがするな。

「そう言えば悠斗は、もうすぐ日本を去るのか？」

「うん？ああ、元々二週間程度しか、居られない予定だったからな」

そろそろ、秘密基地に戻って、色々な準備がしたいしな。ＢＥＴＡの日本進行まで、半年切ったしな。

「そうか、寂しくなるな」

「なに、生きていればまた、会えるさ」

悲しげな表情をする、真耶さんの頭を撫でる。なんだか、落ち着くな～

「こ、こら！恥ずかしいじゃないか／／／」

「うん？嫌なら止めるよ」

「あ！」

手を頭から、離して団子を、食べる。なんか、真耶さんが寂しげな表情を、したように見えた気がした。

「次は、いつ頃また日本に、来てくれるんですか？」

「うーん、夏くらいには、来れるかも知れないな」

まあ、ＢＥＴＡの日本進行の際にでる、亡くなる人を減らすのが、目的だからな。

「その時は、きちんと連絡をくださいね」

「分かってるよ、唯依ちゃん。今度はするから、安心してね」

まあ、出来るかは分からないが、約束はしておこう。

それから、他愛もない話をして、甘味所を後にした。ちなみに、支払いは俺が奢りました。まあ、高くないから構わないけどね。

「それでは、此処までだ。また、会おうな悠斗」

「ああ、またいつか和菓子を、食べにいこうな真耶さん」

「また、日本にくるときは、連絡くださいね」

「おう！じゃあな唯依ちゃん」

二人に敬礼してから、迎えの車に乗り込む。二人は、敬礼で見送ってくれた。基地に戻ると、イルマ中尉が出迎えをしてくれた。そのまま、基地の中に入って、部屋に帰って速効寝ることにした。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

神様ｓｉｄｅ

ワシは今、ヴァルハラ（神々の居るところ）から、多次元観察をし

ておる。

ワシが間違えて、殺してしまった、不動悠斗を観察しておる。

「なんじゃ、あんまり原作ブレイクしておらん用じゃの」

せっかく、奴に内緒で恋愛原子核を着けてやってあるのに、余り有効活用しておらんのう。

「父様何を、見ているのですか？」

何時の間にか、娘のアテナが側に来ていた。

「なに、ワシが殺してしまった、人間の生きざまを見ているのだよ」

「そうなんですか？しかし、この人間はまともな部類の様ですね」

「そうなのじゃ。原作ブレイク出来る力をくれてやったのに、ほとんど原作と変わらんように動いておる」

全く、これではつまらないじゃないか！

「むしろ、これはこれで良いような気がするんですが？」

むう。確かに変にブレイクするより、少しづつ流れを変えるのもありかもしれん。

「まあ、またちょっと干渉するかの」

「また、父様の悪い癖がでてます。まあ、彼くらいの人間なら、も

う少し位なら干渉してもいい気がします」

よし！娘も許可を出してくれたし、奴に内緒で干渉しよう！

「けど、程々にしておいてくださいよ。あと、浮気したらヘラ様に、言い付けますからね」

「なに！アテナ！それは、勘弁してくれ！流石にキツすぎるぞ！」

「駄目です。父様の浮気癖は最悪ですから、言い付けるのは、当たり前です」

ワシは、ガックリと崩れ落ちた。浮気が出来ないなんて、生きる意味がないのと同じだ！

それから、ワシは悠斗に内緒で干渉と能力追加して、娘の説得に当たるのだった。

能力追加だけは、アイ○ォーンにメールをしておいた。気付くと良いんだけどな。

神様ｓｉｄｅｏｕｔ

第十二話（後書き）

次回からは、また秘密基地生活になります。
ああ、早く明星作戦まで、行きたいな。

第十三話（前書き）

１８万アクセス突破！こんな駄文を読んでくれて、ありがとうございます。今回はかなり、短いです。では、本文をどうぞ。

第十三話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は今、自分の執務室に居る。日本帝国での教導を、終えて秘密基地に帰還してから、一月がだった。季節は変わり、３月の暖かい空気が流れている。
日本帝国での、ＭＳＸＯＳの教導は、大成功で幕を閉じた。これで、少しは戦力上昇になっただろう。やはり、日本帝国軍の衛士は、有能だ。
僅かな期間で、ＭＳＸＯＳの能力を把握してしまった。
特に、沙霧尚哉中尉等の一部衛士は、異常な程の腕前になった。これなら、来るべきＢＥＴＡの、日本進行でもかなりの戦果が、期待できる。
まあ、ＭＳＸＯＳの数は全体的に、不足しているのだけどな。

「やはり、数が少ないうえに、生産が間に合わないか」

まあ、原因は分かっているんだけどな。
ＭＳなんかを優先して、生産しているせいで、ＯＳに廻す生産ラインが足りてないんだ。

「まあ、ＢＥＴＡの日本進行には、介入する予定だから、日本は大丈夫だけど、シベリアは戦線を下げるだろうな」

史実だと、中ソ連合軍がシベリア防衛を破棄するんだよな。

「まあ、今は来るべきＢＥＴＡの日本進行に、備えますか」

今は、戦力増強に集中しながら、民需を活発化させて、儲けますか。民間に販売する商品は、基本的に薄利多売のやり方を、ベースにしている。売る国によって、商品を変えている。例えば、アメリカや南アメリカ大陸なんかの、後方国家には高級な嗜好品なんかを、メインにして売り出している。逆に前線国家には、弾薬や食料品を安く売ることで、恩を売るようにしている。

また、難民キャンプには無料で服を配布したり、炊き出しをしている。また、孤児なんかは本人の同意のもと、俺の秘密基地の南部ある町の孤児院で、育てている。中には、優秀な子供もいて、そういった子供には特別に配慮して、進学させたりしている。

確りと草の根活動をして、わが社の名前を広める事が、大丈夫だ。更に、社会に貢献している姿を、アピールするのも大事だ。清潔感ある会社に見せるのを、忘れてはいけない。

「民衆の力は偉大だからな。その力で、国を倒した事など歴史上では、幾らでもあるからな」

そう。民衆の力によって、倒れた国や王国それに独裁者なんかは、歴史の教科書に幾らでものって居る。

机の上に備え付けてある、電話機が光る。受話器を耳元に、持ってくる。

「私だ、どうした？」

「不動准将。頼まれていた、グフ・カスタムの改造が、完了しました」

「そうか。報告してくれ」

電話をくれた相手は、整備班長だ。今回、俺のグフ・カスタムやエースパイロットの機体改造を担当している人だ。

「はい。まず、准将のグフ・カスタムですが、ムーバルフレームに変更して、軽量化に成功しました。コックピット周りにサイコフレームを搭載し全周囲モニターにしました。更に、ゼロシステム、バイオコンピューターを搭載して、質量を持った残像と、未来が見えます。フェイズシフト装甲と、ナノスキン装甲は其のままに、基本の装甲は、ガンダリウム合金に変更しました。また、ミノフスキードライブを2機装備し、アポジモーター４６機装備してあります。まあ、機動性能は最早通常のＭＳでは、ありませんね」

「そうか。改造計画道理に進んでいるな」

顔がニヤけているのが、分かる。グフ・カスタムを魔改造して、明星作戦で大暴れするのが、楽しみだ。

「はい。予定通り進んでいます。また、ヒートサーベルは、従来型に比べて、１０倍の威力を出すことに成功しました。此により、温度は、４０００度に達するので、突撃級を正面から真っ二つに出来ます」

ヤバすぎだろ！従来の比じゃねえぞ！ＢＥＴＡの装甲なんか、溶けたバターみたいなもんだ。この機体だけで、ハイブ攻略出来るんじゃないのか？

「そうか、分かった。引き続き改造を頼む。後で、私の名前で最高級の酒を届けさせる。皆で飲んでくれ」

流石に、チートプラントで生産したオプションパーツを、グフ・カスタムに付けるのは、苦労するしな。整備兵の皆には、まだまだ頑張ってもらわなければ、ならないからな。

「それは、ありがとうございます。部下達も喜ぶでしょう。それでは、これで失礼します」

「ああ、ご苦労様だったな」

受話器を一旦置いて、直ぐにイルマ中尉に、連絡を入れる。

「はい。不動准将。如何されました？」

「済まないイルマ中尉。整備班に、私の名前で最高級の酒を届けくれ。至急にな」

「分かりました。整備班の方々にですね」

「そうだ。頼むよ」

「かしこまりました。失礼します」

受話器を置いて、椅子に深く座り背もたれに、背中を預ける。

「ふう。まさか、此処までだ早く完成させるとはな。流石に凄いな」

俺が、日本に行く前に改造計画を頼んだのに、まさか一月で完了するとわな。流石、家の整備班。

アイ○ォーンを、胸ポケットから取り出す。画面を見るとメールの、

着信が一件有った。

「何故メールが、来ているんだ?」

このアイ○ォーンは、神様から貰った物だ。当然ながら、この世界に携帯電話など、存在しない。つまり、この俺のアイ○ォーンに、メールを送れるのは、一人しか居ない。

「神様か。一体何の用だ?」

メールを開き読んでみる。神様、あんた何してくれてるんですか!!まあ、簡単に言えば、神様の愚痴が九割、俺に必要な事が、1割て内容だ。

「浮気すると、妻が怒って怖いとか、しるか!しかも、娘も浮気を妻に密告するから大変だ?お前が、浮気しなけりゃ良いだけだろ!!」

ハアハア、つい声を上げて怒鳴ってしまった。

「しかも、俺にくれた能力が、武器を呼び出すのと、ある特別室の追加と、ガンダムファイターだと!意味が解んねえよ!」

今さら、生身でBETA相手に、無双でもしろってのか!良いぜ、ならやってやる。

頭に思い浮かべるのは、あの方だ。ドモン・カッシュの師匠であり、元キングオブハート、東方不敗マスターアジア。

光に包まれた中から、東方不敗マスターアジアが、出てくる。俺の目の前にたった。

「小僧、貴様が私を呼んだのだな？」

「はい。東方不敗先生を、お呼びしたのは俺です」

「この世界の状況は分かっておる。貴様が私を呼んで一体何を、させたいのだ？」

「はい。俺を東方不敗マスターアジアの、弟子にしてほしいのです」

「ほう？何故だ？貴様は充分強いではないか？」

「幾ら肉体が強くても、技や心構えを知らなければ、意味がありません。それに、俺にはやらねばならない使命がありますので」

東方不敗マスターアジアと、眼線を合わせる。俺には地球上からＢＥＴＡを、抹殺すると言う使命がある。

「貴様の眼の中にある、確かな決意を、見せてもらった。ならば、我が流派東方不敗を教えてやろう。だが、修行は厳しいぞ！覚悟しろ！」

「はい！師匠！分かりました。では、早速部屋を変えて修行を、お願いします」

「部屋を変えるとな？室内で修行をするつもりか？」

「いいえ、取って置きの部屋が有るので、ついてきてください」

俺は立ち上がり、師匠共に部屋を出る。基地内のとある部屋の前に立つ。プレートには、こう書かれている。

多次元多目的訓練室と。

「師匠。この部屋の中は、外の世界との時間の流れが、違います。具体的には、外での1分が中の世界の一年間になります」

「何だと！そんな空間が存在するのか！」

そう。先程まで、存在しなかった部屋だ。新しく神様が勝手にくれた部屋だから、この際使わせてもらう。簡単言えば、ネギまの、エヴァンジェリンが使っている、別荘と同じかんがえだ。時間の流れが段違いだがな。しかも、歳を取らないから最高だ。老けないのに体は強くなるのだから、不思議だけどな。

「はい。では入りましょう」

ドアを開けて、中に入ると、なにもない殺風景な部屋だ。

「何もないでわないか」

「師匠お待ちください。今から、訓練に相応しい場所に変わります」

次の瞬間、何もない部屋が、ジャングルに変わった。

「なに?行きなり部屋がジャングルに、なったでは、ないか！」

そう。最初の部屋はスタートの部屋で、中で自動的にその人物が、どんな場所を求めているのか、判断されてその人物に、相応しい場所に移動させられるように、なっている。

「師匠！此所は、幾ら暴れても問題ありません。ここならば、思いっきり修行ができます」

「そうだの。家もあるし、山野もある。ここならば、修行には丁度よいだろう。ならば、着替えてから、修行を開始する」

「はい。師匠。着替えてまいります」

そう言って、家に入る。家の広さは、３ＬＤＫだ。電気、水道、ガス、何でも来ている。冷蔵庫の中には、常に新鮮な食材が入っている。

なを、酒や煙草と言った、嗜好品は一切ない。あくまで、修行するための場所なのだ。

一番手前の部屋に入り、置いてある服に着替える。服は、ドラゴンボールの、悟空達が着ている胴着だ。着替えて、師匠の居る外にでる。

「来たか。此れより、修行を開始する」

地獄の様な修行が開始された。

だが、必ず強くなってみせると、心に誓った。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第十三話（後書き）

雪国は、辛いです。また、雪かきしなきゃ。次回をお楽しみに。

第十四話（前書き）

２０万アクセス突破！！こんな、駄文を読んでくれる皆様に感謝をｍ（＿＿）ｍ
では、本文をどうぞ。

第十四話

ハマーンｓｉｄｅ

私は今、ニューヨークの国連本部の執務室にいる。現在私には、此れから行われる会議に出席しなければならない。
机の上に置いてある、資料を取る。今日行われる、会議の議案だ。

「まったく。自国の利益しか、考えられない連中め」

議案を見ると、最初の議案にこう書かれている。
国連事務総長直轄部隊メビウスの扱いについて。そう、紙に書いてある。

「軍事参謀委員会の連中は、余程グズしか居ないのだな」

委員会の連中は、不動悠斗准将が、キレたらどのように動くか、全く理解出来ていないようだな。

「あいつに不可能は、無いからな」

コロニーレーザーなり、コロニー落としなり、アクシズを地球に落とす事など、簡単に出来るのだからな。

「なんにせよ、メビウス解散だけは、回避しなければならないな」

もし、強制的に解散なんかさせようものなら、人類の滅亡は確定す

るな。　あの男は、他人の手の内で動く奴では無い。寧ろ相手を絶望のどん底に叩き込むだろうな。

コンコンコン！

ドアがノックされる。

「開いているぞ」

「失礼します。ハマーン事務総長。軍事参謀委員会の会議の時間です」

「分かった。今行く」

秘書官の男が、入って来て会議の時間だと告げる。私は机の上の資料を持って、部屋を出る。

暫く歩くと、軍事参謀委員会の会議室に着く。ドアをノックして、入室する。

「おはようございます、ハマーン事務総長」

「おはようございます、アメリカ代表」

部屋に入ると、私以外の各国代表が円卓の席についていた。挨拶を返して空いている席に座る。

座る途中に各国代表と、挨拶を交わす。

今回の会議に出席しているのは、アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、統一中華戦線、日本帝国、オーストラリア代表達を合わせて８人だ。

「さて、諸君。朝早くから集まって持って、済まない。今日集まってもらったのは、資料にも書いてあるとおり、現在事務総長直轄部隊になっている、メビウスの処遇についてだ」
司会役のアメリカ代表が、挨拶もそこそこに、議題を出してきた。

「各国代表もご存知の通り、現在このメビウスと言う組織は、事務総長直轄部隊になっています。しかし、バンクーバー協定よって、成り立つ国連軍の定義では、メビウスは何処にも当てはまらないでは、ありませんか？」

「確かに、当てはまっていないが、元々は独立試験部隊のはずだが？」

「そうですな。アメリカ代表の言い分も分かりますが、イギリス代表の言う通り、独立部隊でした。今は、独立権限を返還して、事務総長直轄部隊になっているだけですね」

アメリカ代表の発言に対し、各国代表が発言をする。また、難癖をつけてきたな。

（アメリカめ、俗物のくせに、何を考えている？）

「そうですな。ですが、今は国連事務総長の私設部隊に成り下がっている有り様です。ならば、いっそのこと解散させたらどうでしょうか？」

私の方を見て、ニヤリと笑うアメリカ代表。

（俗物め！その薄汚い眼を此方にむけるな）

「幾らなんでも、横暴ですぞ！メビウスが居たおかげで、助かった国々や作戦は、沢山ある。また、民間会社を立ち上げ、商売をしたり難民キャンプに炊き出しをしたり、孤児を育てたりしている。メビウスに感謝すれど、恩を仇で返す理由はない！」

ドン！

机を叩く日本代表。頭に血が昇っているのか、語尾が荒くなっている。

「確かに、日本代表の言う通りだな。我がフランスは、スエズ運河防衛戦で、メビウスには返せない程の大恩がある」

「そうですな。フランス代表の申す通り、イギリスも大恩があります。女王陛下直々に、勲章を与えた不動悠斗准将には、寧ろ事務総長直轄独立部隊で動いて欲しい」

欧州の覇者の2国も、日本に賛成を示す。

「我等統一中華戦線も、不動悠斗准将率いるメビウスには、何度も助けて頂いた。先の光州作戦にも、参加して民間人救出に多大な影響を与えたのは、記憶に新しい。ならばこそ、事務総長直轄独立部隊にしておいて、世界中で戦ってもらう方が、人類の為にもなる。寧ろ解散させようなら、世論が我々を許さないだろう」

「中国の仰る通りだ。我等が偉大なるソビエトは、メビウスの事務総長直轄独立部隊であることを、歓迎する」

統一中華戦線、ソ連も賛成に廻る。アメリカ代表が、私を睨んでくるが、関係ない。メビウスが、やって来た事を考慮しない、アメリ

カ代表が悪い。自国が戦火に巻き込まれていない国では、前線各国の気持ちなど、分かるはずも無い。

「私は、不動悠斗准将にメビウスを率いてもらい、独立部隊として戦ってもらう方が良いですな。寧ろ独立権限を彼に返さなければなりません」

奴は今迄持っていた、独立指揮権を私に返還した。しかし、今の私にはメビウスを効率良く運用出来ない。ならば、再び悠斗に渡して動いてもらう方が良い結果に繋がる。

苦虫を噛み潰した様な顔で、私を睨んでくるアメリカ代表。貴様らに悠斗の持つ、技術をくれてやるものか！

「だが、技術を独占するのは困る！せめて、技術位は各国に還元すべきだ！」

各国代表も、アメリカ代表の意見に頷く。どの国とて、メビウスの技術は欲しい。だが、敵に廻すのは危険過ぎるから、味方でいる。

（どの国の代表達も、自国の事しか考えていない、俗物ばかりめ！だが、此れはチャンスだな。独立指揮権を悠斗に返す為にも、少し位の技術協力をさせるべきか）

頭をフル回転させて、悠斗に損害が出ない案を考える。アラスカで行われる予定になっている、プロミネンス計画に参加させる様にすれば、問題無いだろう。上手く行けば、他にも何個か権限を勝ち取れるはずだ。

「では、現在アラスカにて、準備が進められている、プロミネンス計

画に参加させましょう」

「なに？」「本当か！」等と、各国代表達が騒ぎだす。アメリカ代表は、まさか技術提供するとは思っていなかったらしく、口を開けてぽかーんとしている。余りの、アホずらに笑えるな。

「ハマーン事務総長。本当に宜しいのですか？」

「くどいぞ！私が必ず不動准将を説得してみせる」

私の一言で、聞いてきたイギリス代表が下がる。まあ、悠斗に言ったら笑って承諾するだろうがな。ぽかーんとしていた、アメリカ代表が私の一言で、正気に戻る。

「そ、そうですか。ならば、解散の話はなかった事に致しましょう。皆さんそれで宜しいですか？

アメリカ代表の問いかけに、私以外の各国代表達は首を縦に降る。

「では此方の要求を、飲んで貰おうか」

私は、自分の体からありったけのプレッシャーを放つ。各国代表の顔色が、どんどん悪くなる。

さて、私の手を煩わせるのだから、覚悟しろ！

そのあとの会議は、とても良い笑顔をした、ハマーン事務総長のＯＨＡＮＡＳＩとＳＥＴＴＯＫＵで、会議室に悲鳴が響いたそうだ。

ただ、中から、「ハマーン女王様。ハアハア」等と聞こえたとか聞こえなかったとか。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

悠斗が、特別サバイバル訓練に出てから一週間がたった。私は、自身の執務室で旧友のユーリー・ハスラーとノイエン・ビッターとコンスコンらと、コーヒーを飲みながら、談笑していた。

「そう言えば、コンスコンは最近孤児院によく行くそうじゃないか。また、足長おじさんかい？」

「うん？ああ。私と妻の間の子供達は、幼くして亡くなってしまったから、随分寂しい思いをしたからな。そのせいか、親のいない子供達を見ていると、可哀想で仕方なくてな。自分の家では育てるのに、限界が有るのでな。その為に、孤児院に寄付金を持っていってるのだよ」

そう言って、コーヒーを飲むコンスコン。

そう言えば、コンスコンは子供が好きだったからな。自分の子供を育ててあげられなかったのが凄く寂しいと、公国軍時代　酒の席では言っていたしな。

「そう言えば、そうだったな。済まないな嫌な気分にさせて」

ユーリーが謝り、頭を下げようとすると、コンスコンは手でそれを静止させる。

「構わんよ。昔からの友人に、頭を下げられる方が嫌だからな。それに、孤児院の子供達は私の第2の子供だよ。私は、子供達の笑顔が一番の楽しみだからな。そう言う意味では、世界は違えどもう一度呼んで頂いた事には、感謝している。このような人生もまた、楽しいからな」

ニヤリと笑うコンスコン。確かに公国軍時代では、考えられないほど、肩の力を抜いていられるのだからな。

「確かに、コンスコンの言う通りだな。目的はハッキリしているし、物資や人員に困る事は無いからな」

「そうだな、ノイエン。皆の士気は高いし、食糧に困ることも無いし、神経を磨り減らすことも、少ないからな」

残党を率いて、逃げ延びる生活はかなりの負担に、なっていたからな。

あのシーマさえ、今は普通に女の顔をするように、なったくらいだからな。

「ああ、まさに悠斗様々だな。神様に違う世界で戦って欲しいと、言われた時には悩んだが、今は来て良かったと思うぞ」

まだ、悠斗は甘い所が有るが、それは追々我等が指摘して、直して行けばよい。直す所を直せば、彼はまだまだ伸びる。

今時、奴ほどの男はなかなかいないだろうな。

しかし、奴には致命的な弱点が有るのだがな。

「悠斗の奴が、もう少し女心を分かっていてくれれば、安心出来るのだかな」

どうやら、口から出てしまったらしく、3人とも首を縦に降って、同意してくれた。

「本当に悠斗の鈍感さには、驚かせされるからな」

「ああ、あやつは、戦闘や政治等ではかなり優秀な反面、恋愛関係には、本当に心配に成る程鈍感だからな」

「本当に結婚出来るか、怪しいと思うぞ」

3人ともそれぞれ、悠斗の将来を気に掛けている様だ。

執務用の机の上の電話機がなる。立ち上がり、受話器を取る。

「私だ。何かあったか？」

「デラーズ閣下、執務中に失礼します。国連事務総長のハマーン・カーン氏から、衛星通信が入っております。いかがいたしますか？」

ハマーン事務総長から、連絡とは珍しい。不思議に思いながらも、返事を秘書官にする。

「分かった。私の執務室に繋いでくれ」

「分かりました。お繋ぎ致します」

受話器を置いて、執務席に座り、大型モニターを降ろすボタンを押

して、3人の方を見ると、全員が立ち上がり、私の席の後ろに立つ。
モニターが降り終わると、画面に椅子に座ったハマーン事務総長が、映し出される。

「久しぶりだな、デラーズ中将。まさか、ユーリー・ハスラー少将やノイエン・ビッター少将さらにコンスコン准将まで一緒とはな。皆息災か？」

「ハマーン事務総長。皆、元気でやっております。本日は、どう言ったご用件ですかな？」

「ああ、不動准将はいないのか？」

「悠斗なら、今は特別サバイバル訓練に参加していて、此方には居ません。本日中には、戻る予定になっていますが」

そう告げると、ハマーン事務総長の額にシワがよる。先程より、不機嫌になられたようだ。

「そうか。まあ、仕方がないか。ならば、伝えて欲しい用があるのだか、頼めるか？」

「はい。どの様な事ですか？」

「先程、軍事参謀委員会が、安全保障理事会にメビウスの独立指揮権を与える決議案を、提出した。近日中に国連安保理に提出され、議決されて可決される予定だ。それに伴い、メビウスの所属が変わる。今は、事務総長直轄部隊だったのが、議案　可決後は、国連軍外郭独立機動戦隊に変わる」

「な！本当ですか？それでは、我々の制約が取り払われるのですか！」

「そうだ。新たな独立機動戦隊には、かなりの権限と制約解除等多くの事が、増えた。

先ずは、独立介入権限。此れは、世界中のありとあらゆる国に事前許可なく、進軍又は戦闘に介入することが、出来る。又は独自に作戦を行っても各国は、これを妨害してはならない。

次に、指揮権優先権限。

此れは、世界中の各国軍隊及び国連軍の指揮権及び階級は、メビウスが最優先とされる。まあ、戦局に応じた采配が取りやすくなったな。

次に、独自指揮権限。

メビウスに所属する人間は、通常の国連軍指揮下には入らずに、メビウス独自の指揮経路を持つことが出来る。

次に、不干渉権限

如何なる組織又は計画又は個人又は国家でも、メビウスに干渉することを禁じる。これにより、完全なる中立を維持することが出来る。

次に、人事異動権限

各国軍隊及び国連軍から、人材を引き抜くのに、各国軍隊及び国連軍からの許可を取る必要はない。事後承諾で後で、書類を送ればよい。

次に独自技術防衛権限

メビウスが使用している技術を各国又は計画は、接収してはならない。全て、メビウスに返還しなければならない。ただし、メビウスが許可を出している技術に関しては、例外とする。

まあ、他にも後１００以上の権限や、制約解除があるが、それは書類を送るので、そちらで確認してくれ」

「は、はい！かしこまりました」

ついつい、生返事をしてしまった私は、悪くないはずだ。今上げられた権限だけでも、凄いと言うのに、他にも１００以上の権限や、制約解除があると言われたのだから、驚かないはずがない。私自信も空いた口が塞がらないのだからな。

「しかし、一つだけ悠斗に参加してもらわなければならない、計画が有るのでな。それに参加させるのを、約束してしまったから、此だけの権限を勝ち取れたのだからな」

やや、疲れた表情をされるハマーン事務総長。各国代表の馬鹿どもを、相手取りながら此だけの権限を勝ち取った彼女の、手腕は素晴らしいの一言に尽きるな。
しかし、どの様な計画に参加させるのかが、非常に気になるな。

「ハマーン事務総長。一体どの様な計画に、参加するのですか？」

「なに、国連軍司令部が提唱した、プロミネンス計画に参加して、各国に大なり小なりの技術提供をする事だ。本来なら私が悠斗を説得するつもりだったのだか、いないなら後日行うさ」

「なに、そんなことだけでよければ、参加してやるぜ」

いきなり、悠斗の声が聞こえた。声がした方を見てみると、入り口に軍服を着た悠斗が立っていた。此方に向かって歩いてくる。私の席の机の前に立つと、モニターの方を見る。

「ハマーン事務総長。お疲れ様です。プロミネンス計画に参加するのは、構いませんよ。流石に直ぐには参加出来ませんが、独立指揮権が返していただけるなら、安いものです。安心してください」

爽やかな笑顔を、ハマーン事務総長に向ける。

「そ、そうか。ではたのんだぞ／／／」

よく見ると、ほんのりハマーン事務総長の頬が赤くなっていた。

「はい。かしこまりました」

「では、議決成立後にまた、連絡するからそのつもりで。では、失礼するよ」

ハマーン事務総長からの、通信が切れる。残された我々は、悠斗を問い詰める事にした。

「悠斗よ、特別サバイバル訓練は、ご苦労であった。しかし、良いのか？プロミネンス計画に参加して、技術提供などして？」

「大丈夫ですよ。我々の使い終わった、技術を提供してやれば、良いのですから。我々に取って旧式の技術でも、この世界の連中にとっては、最新技術になりますからね」

私を見て、ニヤリと笑う。１週間前と同じ人物とは、思えない程のオーラを纏っている。いったいどんな訓練をしたら、人は此処まで、変わるのか考えずにはいられなかった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

時間を少し遡る。

俺は今多次元訓練室で師匠の東方不敗マスターアジアと共に１万８０年の歳月を修行している。
今は、重力負荷を１０００倍にした空間で８０年間修行している。
今は、師匠との手合わせをしている、最中だ。

「師匠！」

「悠斗！」

二人の男が唸りをあげながら、殴りあいをしている。俺が、１秒間に１２００発の拳撃を放てば、師匠はそれを軽々と受け流しながら、それ以上の拳撃を放ってくる。
俺達の周りには、拳を繰り出す度に真空刃が、発生してしまい更地と化しているか、受け流した拳が地面に当たった衝撃で、クレーターだらけになっている。

「この、馬鹿弟子が！次の我が最強の一撃で決めてやろう！」

「ならば、私も最強の一撃を放つだけです！！」

両者が、一旦距離を取る。二人が構える。

「「流派！東方不敗が最終奥義！石破天驚拳！！！」」

二人の男から、流派東方不敗の最終奥義が、放たれる。どちらの気弾も中央でぶつかり、大爆発を起こした。

「ゲッホゲッホ。師匠！ぶじですか！」

周りは砂埃でまるで、見えない。俺は立ち上がり師匠を、探す。少し進むと倒れている人影があった。

「師匠！大丈夫ですか？」

「う、うう。悠斗か？ワシとした事が、爆発の衝撃で飛んできた岩の破片を、避け切れんかったわい。不覚だな。まだまだ、修行が足りんかったとはな。慢心が仇となったわい」

師匠に駆け寄ると、直ぐに意識を取り戻した。

「師匠無事で良かったです。しかし、師匠に勝つにはほど遠いですね」

「馬鹿弟子が、まだまだ、お主に負けてやる訳にはいかんのだよ」

「そうですね。しかし、時間が来たようなので、私は此で失礼します」

「うむ。ワシはもう少し修行をしたら、外にでる。悠斗よ、修行をけして怠るでないぞ！」

「はい。師匠！ありがとうございました」

師匠に別れの挨拶をしてるうちに、最初の部屋の風景に周囲が変わる。服も、いつもの軍服になっていた。ドアを開けて外に出ると、身体がやけに軽く感じた。

「そうか。地球の重力は、軽いんだな」

重力１０００倍の部屋にいたから、全く分からなかったが、今の俺なら生身で要塞級な楽々倒せるななどと、考えながらデラーズ閣下の執務室に向かった。

執務室のドアを開けて、中に入るとデラーズ閣下達が、衛星通信で話していた。

「なに、国連軍司令部が提唱した、プロミネンス計画に参加して、各国に大なり小なりの技術提供をする事だ。本来なら私が悠斗を説得するつもりだったのだか、いないなら後日行うさ」

（やった！何だが知らないが、ＴＥ介入ができる！たかが、技術提供位なら安いもんだ！）

だから、つい深く考えないで言ったのさ。

「なに、そんなことだけでよければ、参加してやるぜ」

俺の存在に、皆さん気付いていなかったのか、びっくりしている。その後、ハマーン事務総長と、少し話をして通信が切れる。俺は、デラーズ閣下と向き合った。

「デラーズ閣下。不動准将特別サバイバル訓練より、帰投致しました」

「ご苦労だったな。しかし、１週間前と見違える程、変わったな」

「そうですかね？自分では、余りの変わったとは思えないんですが」

せいぜい、筋肉が付いた位にしか思えないんだが。

「そうか。まあ、悠斗がそれなら、構わんか。しかし、本当にプロミネンス計画に、参加しても良いのか？」

「ええ、寧ろ好都合ですから」

デラーズ閣下達は、知らないだろうが、俺はＴＥに介入して、日本でも量産出来る不知火・弐型を作って、佐渡島攻略戦に参加してもらうつもりだ。

（さて、此れからが、忙しくなってくるな。取り敢えずＭＳ－０９ドムの量産を始めておくか。後は、水陸両用ＭＳの開発もしなくてはな）

デラーズ閣下達と話ながら、そんなことを考えていた。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第十四話（後書き）

今回の話の、国連外郭独立機動戦隊の設定は、感想に書いてくださった、ドン・ヴェスパーさんの意見を参考にさせて、頂きました。
コンスコン准将の子供好き設定は、オリジナルですので、宜しくお願いします。
ハマーン様の設定も、オリジナルですので、ご了承ください。
感想お待ちしています。　カミソリレターは、ご勘弁ください。作者は、テンションが下がると、書かなくなって、しまうので。

第十五話（前書き）

ウーン。女性の心理描写が上手く書けないです。では、本編をどうぞ。

第十五話

イルマｓｉｄｅ

私は今、不動悠斗准将の執務室で、不動准将とシーマ・ガラハウ中佐と共に、執務を行っています。国連安全保障理事会で、メビウスの独立指揮権が、４月１日付けで新たに与えられてから、今までより遥かに多い量の書類が、不動准将の元に来ます。

「しかし、凄い量の書類ですね」

不動准将の机の上は、書類の山が出来ていて、顔が全く見えない。

「仕方ないさ。ハマーン事務総長に、骨を折ってもらったんだから、覚悟はしていたんだが、これ程とわな」

手を動かしながら、答えてくれる不動准将。
不動准将の左側が、私が仕事をする机があり、右側の机で、シーマ中佐が仕事を手伝っている。

「悠斗。この事案は、どうするんだい？」

「うん？どれどれ」

シーマ中佐から、書類を渡され確認する不動准将。普段の仕事量なら、真剣な横顔を見れるのだけど、ここ最近は書類の山があるせいで、見ていない。

私の仕事中の、数少ない楽しみなのにな。

「この事案は、エリオット・レム中佐に廻してくれ。彼の開発中の兵器に関するものだからな」

「分かったよ。なら、部下に届けさせるよ」

そう言って、シーマ中佐は、電話機に手を伸ばし電話をかける。

「ああ、コッセル。あたしだよ。悠斗の執務室にきな。なに?そんな事、後にしな。さっさときなよ!いいね!」

そう言って、受話器を置く。また、別の書類に目を通すシーマ中佐。しばらくすると、何やら、大きな足音が聞こえてきた。

「失礼します!デトローフ・コッセル大尉であります。シーマ様に呼び出されて、出頭しました」

中に入ってきた、コッセル大尉が敬礼して、不動准将を見る。

「ご苦労だ、大尉。シーマ中佐は、隣に居るぞ」

「コッセル!此方だよ!早くきな」

「シーマ様。なにようですかい?」

シーマ中佐の席に向かうコッセル大尉。書類の間から、シーマ中佐が見える。

「この書類を、エリオット・レム中佐に届けておくれ」

「え？この山の様な書類ですか？」

コッセル大尉が、戸惑うのも分かる。私やシーマ中佐は、不動准将に比べればかなり少ないが、それでも少しは、山になっているのだから。

「そうだよ。その右の山の上から中央位までの、赤色の書類だよ」

「はあ～。分かりやした。エリオット・レム中佐に届ければ良いんですね？」

「そうだよ。コッセル頼んだよ」

「頼まれました。シーマ様！じゃあ持っていきます。悠斗の若旦那、シーマ様をよろしくお願いします」

「コッセル！なに言ってるのさ！」

「じゃあ、失礼しました」

言われた書類を持って、逃げていく様に部屋を出ていった、コッセル大尉。おそらく、不動准将は分かっていないだろう。

「コッセル大尉は、何を言っていたんだ？全く聞いていなかったんだが？」

「なに、悠斗が気にする必要はないさ」

顔が少し赤くなった、シーマ中佐が自分を扇子で扇ぎながら、答え

た。

「そうか。なら仕事を続けるか」

そう言って、不動准将は仕事を再開した。

それから2時間後。

「ううーん！終わった！」

腕を上に上げて、背伸びをする不動准将。

2時間前にあった、書類の山はその姿を消し、残る書類も不動准将が、たった今終わらせたのだ。

「お疲れ様です。不動准将。今、コーヒーを入れますので」

「待ってくれ、イルマ中尉」

私が立ち上がるよりも先に、不動准将が、止める。

「悪いが、この書類をコンスコン准将に届けてくれないか？」

不動准将から、書類を渡される。私は其を受け取り立ち上がる。

「分かりました。では、届けて来てから、コーヒーを入れますので」

「ああ。済まないが頼んだよ。シーマ中佐には、こっちの書類をデラーズ閣下に届けてくれないか？」

「分かったよ。じゃあ行ってくるかね」

シーマ中佐も立ち上がり、部屋を出ていく。私もその後に続いて部屋を出ていった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

イルマ中尉とシーマ中佐が、部屋から出ていった。俺は、ポケットからアイ○ォーンを取りだし、ＭＳ生産ラインを選択する。

「よし！ドムシリーズを造ろう！先ずは、ＭＳ－０９ドムだ！生産数は、５０００機。日産、１５０機。オプションパーツは、フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザー無効にしますよ）で、いいか。次に、ＭＳ－０９Ｆ／ＴＲＯＰドム・トローペン。生産数は、５０００機。日産、１５０機。オプションパーツは、フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザー無効にしますよ）、無限シュツムルファウストで、いいな。次、ドム・キャノン（機動戦士ガンダムターゲットインサイトより）ＭＳ－０９Ｋ－２生産数は、５０００機。日産、１５０機。オプションパーツは、フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザー無効にしますよ）無限弾薬回復システムだな。水陸両用ＭＳは、ＭＳＭ－０３ゴッグ。生産数は、６０００機。日産、３００機。オプションパーツは、フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザー無効にしますよ）、ヒートクロー機能追加。無

限弾薬回復システム。ビーム兵器無限回復機能（エネルギー切れにならない。オーバーヒートにならない）くらいかな？
あと、ＭＳＭ－０７ズゴック。生産数は、３０００機。日産、１００機。オプションパーツは、ゴッグと同じていいや」

ＢＥＴＡの日本進行で、水陸両用ＭＳは使用するし、これくらいいれば、四国と中国地方の海岸線で、民間人の避難する時間は、確保出来るだろう。まあ、陸上ではザクやグフ、それに帝国軍の戦術機や戦車などの支援車両なんかもいるから、何とかなるかな？

「あと、民間人の輸送車両か。ホバーカーゴトラックを追加で、２０００台生産して、６１式戦車を追加で３０００台生産して、マゼラ・アタックも３０００台生産しよう。神様が、残した置き土産と同じ仕様でいいや」

アイ○ォーンを操作して、生産開始ボタンを押す。ホバーカーゴトラックは、日産、２５０台。マゼラ・アタックと６１式戦車は、日産、３００台だ。
俺はア○フォーンを、ポケットにしまい立ち上がる。

「おっと？」

立ち上がると、目眩がした。ここ数日書類仕事があったせいで、ほとんど寝ていない。

「ヤバイな？これは、流石に少し寝るか」

部屋に備え付けてある、来客用の長ソファーの上に乗り、横になる。脚がハミでるが、頭を柔らかいソファーに置くと、途端に睡魔が襲ってくる。俺は、その睡魔に抗うこと無く、眠りに付いた。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

「失礼しました」

敬礼をして、コンスコン准将の執務室から出る。不動准将から、頼まれた書類を、コンスコン准将に手渡し、不動准将の執務室に戻る。

「失礼します。あら？」

部屋に入ると、先程まで席に座っていた、不動准将がソファーの上で、横になり眠っていた。

「お疲れですものね」

ここ数日は、メビウスに関係する書類が、山の様に送られてきて、その処理に追われていたせいで、ほとんど寝ていないと、言っていた。

私は、仮眠室から毛布を持ってきて、不動准将の身体にかける。行くら春先とは言え、まだ少し寒い。基地には、空調が効いているが、

もし風邪を引かれては困る。

「ふふふ。本当可愛い寝顔ね」

普段はキリとした、お顔をされているが、寝顔はまだまだ可愛い。

「柔らかくて、すべすべな髪の毛ね。羨ましいは」

不動准将の頭を撫でる。　男性でありながら、女性の私より髪質が良いのは、羨ましかった。

「悠斗、好きだよ」

眠っている悠斗の頭を撫でながら、小さく呟く。私は、悠斗が好き。この気持ちに、偽りはない。最初の切っ掛けは、家族を助けてくれたことだった。絶望の淵に居た、私を助けてくれた人。　この基地に来てからは、一番側に居て、私と過ごす時間が長い人。いつも、凛々しい姿を見せているのに、笑うととても素敵な人。
優しくて、頼もしくて、カッコよくて、可愛くて、でも何処までも恋愛に鈍い人。だから。

「悠斗。大好きだから」

私は、寝ている悠斗の唇に私の唇を、重ね合わせた。

「ん・・」

悠斗は、一瞬反応したが直ぐに、安らかな寝息をたてる。

（良かった。ぐっすり寝ているのね）

私は、一度唇を放し、再び悠斗の唇に重ねる。僅かに空いた、悠斗の口の隙間に自分の舌を入れる。
ねちゃねちゃと、唾液が混ざり合う音が執務室に響く。

「ふーう。ふふふ。悠斗の唇美味しかったは」

互いの唇を放し、キスの痕跡が残らないように、ハンカチで、悠斗の口の辺りを拭く。綺麗に拭き取ったあと、もう一度頬に、優しいキスをする。

(悠斗。私は、貴方が好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き大好き。だから、早く私の気持ちに気付いてね)

私は立ち上がり、自分の席に座り、書類整理に取りかかるのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第十五話（後書き）

ああ、早く戦闘が書きたいが、まだ先だ。
感想待ってます。

第十六話（前書き）

ＰＶ２５００００アクセス突破！ユニーク３００００突破！
誠にありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ皆様の熱いご声援を受けて、作者は頑張って行きたいと、思います。では、本文をどうぞ。

第十六話

悠斗ｓｉｄｅ

現在俺は、秘密基地の会議室で、将官クラス会議（大佐以上の階級の人間が、出席する会議）を、行っている。
今の議題は、宇宙軍の創設と、宇宙要塞の確保である。
ちなみに出席者は、俺、エギーユ・デラーズ中将、ユーリー・ハスラー少将、キリング・Ｊ・ダニガン中将、ユーリ・ケラーネ少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン准将、フォン・ヘルシング大佐、ロイ・ジェーコフ大佐、ギニアス・サハリン大佐、シャア・アズナブル大佐、ノリス・パッカード大佐と、なっている。

「では、報告を聞こうか」

デラーズ閣下が、話を進める。

「はい。デラーズ閣下。我々が打ち上げた、人工衛星からの情報によると、ラグランジュ・ポイントのＬ－５空域に、巨大な資源衛星が有ることが、確認されました」

ギニアス大佐が、報告書を読み上げる。

「なに?資源衛星?」

コンスコン准将が、眉間に皺を寄せる。

「はい。衛星からの映像を出します」

ギニアス大佐が、リモコンを操作して、スクリーンに映像が、映しだされた。

「「「「「な！こ、これは！」」」」」

何人かが、声に出して驚く。まあ、俺も声に出してないけど、滅茶苦茶驚いています。

「はい。間違いなく、ソロモンです」

はい。宇宙要塞ソロモンが、映しだされたました。

なんで、有るか激しく知りたいですが、取り敢えず説明を聞きますか。

「まさか、宇宙（そら）にソロモンが、有るとは思いもよらなかった」

「そうだな。デラーズ閣下の言う通りですね。この、ソロモンの存在に、他国が気付いたようすは？」

「いえ、ハスラー少将。ありません。今現在で、知っているのは、我々だけです」

ギニアス大佐の、説明を受けて、皆がホッとしたようだ。

しかし、ソロモンがあるなら、真面目に宇宙軍設立した方が、後々使えるだろうな。

今季節は、５月に入ったばかりだ。明星作戦まで、１年３ヶ月はあるから、軌道艦隊の準備は、充分間に合うな。まあ、ザンジバル級を使って爆撃、ＨＬＶを使用して軌道降下だけどね。

そんなことを考えていると、会議が進んでいた。

「やはり、此処は宇宙艦隊を設立して、早急にソロモンを手に入れるべきだ！」

コンスコン准将が、熱弁をふるいながら、机を叩く。

「確かにそうですね。しかし、まだあれがソロモンだと、確定した訳ではありません。先に、調査部隊を送ることを、提案致します」

ユーリ・ケラーネ少将が、コンスコン准将の意見に賛同しつつ、ベストな案を提言してくる。

「そうだな。不動准将、貴殿はどう考える？」

おっと？俺に話が廻って来ましたよ？

「はい。早急に偵察艦隊を派遣して、確認次第、部隊を送ることを、提案致します」

「分かった。皆もそれで良いな？」

デラーズ閣下の、発言に会議に出席している、将校全員が頷いて、賛成の意思を示す。

「よし。しからば、不動准将、貴殿は早急に偵察艦隊を編成してせよ！人選は任せる」

「は！かしこまりました。ならば、早急に編成致しますので、少々お待ちを」

俺は、頭の中で創造を開始する。

（ザンジバル級巡洋艦１０隻、ラコック大佐、ノルド・ランゲル少将、トワニング准将、ラカン・ダカラン大尉、マシュマー・セロ大尉、キャラ・スーン大尉、ゴットン・ゴー大尉、グレミー・トト中尉、イリア・パゾム少尉、デザート・ロンメル少佐）

ザンジバルは、打ち上げた基地に、ロケットブースター装着済みで配置した。会議室中央に、呼び出した人達が、現れる。

「悠斗よ、この者達が、先見艦隊の乗員か？」

「はい。まあ、あとはザンジバル級を１０隻、マスドライバーに配置済みです」

「そうか。ならば良い」

デラーズ閣下が、納得した表現をされる。

「不動准将。求めに応じて参りました。しからば、我々はいかがすれば、よろしいのでしょうか？」

「ああ、済まないトワニング准将。貴殿以下数名は、スクリーンに映っている、資源衛星に調査を行って欲しいのだ」

全員が、中央にあるスクリーンを見る。すると、全員が驚いたようだが、直ぐに納得した表情になった。

「分かりました。ならば、直ぐに出発準備を始めます」

「頼んだぞ。先見隊の報告次第で、我々は宇宙での活動も、視野に入れて作戦を、展開出来る様になるのだからな」

「はい。かしこまりました。ならば、失礼させて頂きます」

俺に頭を下げて、下がるトワニング准将達。だが、全員に下がられては、困るので声をかける。

「待て、マシュマー・セロ大尉、キャラ・スーン大尉、グレミー・トト中尉、イリア・パゾム少尉は残れ。話がある」

俺に呼ばれた隊員は、再び俺の前に、集まる。

「不動准将。マシュマー・セロ大尉以下４名出頭しました」

「楽にして良い。さて、何故お前達を呼んだかと言うと、確認しておきたい事が、あるからだ」

まあ、この面子を考えれば、分かる通り強化人間かどうかなんですよね。

「マシュマー・セロ大尉、キャラ・スーン大尉、二人とも強化人間か？」

「いえ、其がどうも違う様なのです」

「どう言う事だ？話してみろ」

「はい。キャラ・スーン大尉は、分かりませんが、私はどうやら強化人間だったはずなのですが、何故かＮＴ（ニュータイプ）になっている様なのです」

「な？それは本当か？」

「はい。キャラ大尉は、どうですか？」

「ああ、私もどうやら強化人間から、ＮＴ（ニュータイプ）になっているようだ」

胸元が、やたら空いた軍服で胸を張る、キャラ・スーン大尉。横に座っている、ユーリ・ケラーネ少将が、その胸元をガン見していた。あんた、少しは自重しろよ。キャラ大尉の後ろで見てる、イリア・パゾム少尉が、ゴミを見るような目で見てるよ。ちなみに、俺はキャラ大尉の顔しかみていない。だって、失礼じゃないか。

「ふーん。私の胸を見て、全く気にしない不動准将は、堅物ですね。隣のユーリ・ケラーネ少将は、ジーと見ているのに」

「ち、違うぞ！わ、わざとじゃないんだ！」

慌てて、視線をキャラ大尉の胸元から、外すユーリ・ケラーネ少将。ああ、イリア少尉のユーリ・ケラーネ少将を見る目が、絶対零度まで下がったよ。

「まあ、私は相手と話す時は、キチンと目を見て話すのが、当たり前だと思うのだがな」

まあ、大切な話をするときは、相手をキチンと見ると思うんだけどな。

「まあ、聞きたかった事は、其だけだ。イリア・パゾム少尉と、グ

レミー・トト中尉は、ＮＴだな？」

「は！我々は、ＮＴのままであります」

「はい。ＮＴの能力を、持っております」

二人とも前に出てきて、返事をする。二人とも原作通りの様だ。

「グレミー・トト中尉に聞きたいが、またクーデターを起こすか？」

「いえ！それは、あり得ません。この世界にザビ家はなく、ＢＥＴＡと言う化物どもと、戦っていると知っております。ならば、ＢＥＴＡを地球上から、根絶やしにしてから、新しいお嫁さん探しの旅に出ます」

「そ、そうか。ならば、下がって良いぞ」

「は！失礼致します」

敬礼して、会議室を去っていく四人。なんか、若干原作と、キャラが違うぞグレミー！まあ、彼がその考えに至ったなら、それでも良いけどね。

「不動准将。本当にあの面子で良いのか？」

ダニガン中将が、流石にあれだけ濃い面子で、本当に大丈夫か心配そうに、訪ねてきた。

「いえ、ロンメル少佐は、地上部隊ですね。マシュマー・セロ大尉以下４名も地上部隊に、配属します。代わりに、サイクロプス隊を宇宙に廻します」

ラカン・ダカランは、宇宙でも問題ないだろうけど、他の連中は駄目だな。まあ、サイクロプス隊のシュタイナー大尉達なら問題ないだろう。まあ、先見艦隊だから、暫くしたら地上に戻って来てもらうしな。

「そうか。ならば、良いのだ」

胸を撫で下ろす、ダニガン中将。まあ、あんな濃い連中は、１年戦争には、居ませんでしたからね。

「よし、まとまったな。まず、資源衛星には、調査部隊を送ること。確認が済み次第、資源衛星をソロモンと命名すること。最後に、宇宙軍設立と編成を行う事だ。良いな？」

参加者全員が、深く頷いた。

「よし。ならば、次の議案に移るとしよう」

そうして、会議は滞りなく進んで行った。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

キャラｓｉｄｅ

私は今、会議室から出て、四人で格納庫まで歩いている。

「しかし、不動准将か。かなり若いが、やり手と言う感じかしたな」

マシュマーが、そんなことを言ってきた。

「そうであろう。彼は、このメビウスの総司令なのだから」

グレミーが、当たり前だと、言わんばかりに言う。

「ええ。とても素敵な方でしたね」

イリアも、かなりの好評かだ。

確かに、私の服装なら、普通の男なら胸元に目が行くのに、不動准将は全く気にしていなかった。私に、色気がないはずはない。事実隣に座っていた、ユーリ・ケラーネ少将や、金髪のマスクをした大佐は、胸元を見ていた。

「フフフ。良いね。不動准将は、良い男だよ」

不思議と、彼の事が気に入った様だ。自分自身何故かは、分からないけどね。

（あの、男を落として見せるよ。この、猫目のキャラ様に、落とせない男なんがいないんだからね！）

そんなことを考えながら、格納庫まで歩いていった。

キャラｓｉｄｅｏｕｔ

イリアｓｉｄｅ

何やら、キャラ大尉は、考え事をされている様だ　。
私は、先程あった不動准将の事を、考えていた。キャラ大尉の、あれだけ強調された胸元に、全く興味を示さず、ただ仕事をこなした方だ。
横に座っていた、ユーリ・ケラーネ少将は、胸元をガン見していたし、その隣の金髪の大佐は、チラチラ見ていた。
流石に、ユーリ・ケラーネ少将の露骨な目線は、引いてしまった。
むしろ、ハマーン様に習って、言うのであれば、「俗物め」て感じでした。
だから、不動准将態度はむしろ、好意的に感じました。

（うーん、キャラ大尉に比べると、余り胸は有りません。まだ、大きくなるのでしょうか？）

もしかしたら、不動准将は、小さい方が好みなのでしょうか？しかし、私も平均位の大きさは、ありますから、何とも言えません。むしろ、私を見たときの、優しい笑顔は忘れられません。
ただ、見送る時に少し微笑んだだけなのに。

（もう少し、彼に関する情報が欲しい。出来れば、彼の好みなんかの情報が！）

自分では、全く分からないけれど、不動准将に引かれ始めていたとは、この時の私は、気づく事はなかった。

イリアｓｉｄｅｏｕｔ

第十六話（後書き）

今回は、かなりの難産でした。真面目に、誰を出そうか悩み抜いた末に、彼等になりました。本当は、プルやプルツーを出したかったのですが、キュベレイを出す予定がまだ、たって居ないために、今回は出ませんでした。

第十七話（前書き）

やっと出来ました。寝落ちして、なかなか書けなかったから、大変でした。では、本文をどうぞ。

第十七話

悠斗ｓｉｄｅ

ソロモン発見から、一月がたちました。今、季節は日本なら、梅雨でしょうね。

あれから、先見隊を派遣し調査させたところ、やはりソロモンであることが、確認されました。

調査隊の報告によると、中には、大量のＭＳと宇宙艦が、死蔵されていることが、分かりました。　ああ、因みに俺は今、宇宙（そら）に来ています。ザンジバル級巡洋艦リリー・マルレーンに乗って、ソロモンから迎えとの合流場所（ランデブー・ポイント）向かっています。

「シーマ様。合流地点まで、あと少しですぜ」

「ああ、了解だよ、コッセル。悠斗、あと少しで合流するよ」

「分かりました。しかし、不思議ですね」

「うん？何がだい？」

シーマ中佐が、首を傾げる。まあ、シーマ中佐達みたいに、宇宙で暮らしていた人なら、疑問にならないのでしょうけど、俺からすれば、地球が見えるのは、バリバリ違和感ありますね。

まあ、ユウ・カジマの肉体のおかげが、恐怖を感じないのは、助かりますけど。イルマ中尉は、未だに椅子から、立ち上がりませんからね。まだ宇宙の感覚に、戸惑っているのでしょうね。

「いえ、まさか宇宙から、地球を見るはめになるとは、思いもしなかったからな」

「そうかい？まあ、悠斗は宇宙で暮らしたことが、ないんだね。まあ、暫くすれば、慣れるさ」

椅子に座って、艦の指示を出しながら、シーマ中佐が答えてくれる。

「シーマ様。前方に、迎えの部隊を確認しました。しかし、見たことのない船のようです」

「なんだい？この、赤色の船は？」

中央モニターに、合流地点に来ている、４隻の船が映しだされる。

「ああ、ムサカ級巡洋艦だ。あの大きいのは、レウルーラ級戦艦レウルーラだ。まさか、あんな物まで死蔵されているなんてな」

まさか、迎えにきた艦隊が、第二次ネオ・ジオン抗争の時に活躍した、ムサカやレウルーラが、来るなんて思わないよ！

まあ、コッセル大尉やシーマ中佐が、知らないのは当たり前ですね。

「へえ～、悠斗は知っているって事は、少なくとも後継機艦か」

「そうだ。まあ、ソロモンに行けば、もっと情報が手に入るだろう」

「シーマ様。前方の艦から、通信が入りました」

「よし。通信を繋ぎな」

中央モニターに、トワニング准将が映しだされた。どうやら彼は、レウルーラに乗っているようだ。まあ、一様グワジンからの派生艦だから、ザビ家縁の彼が乗っていても、不思議じゃないが、やはり個人的には、シャア・アズナブル大佐に乗ってもらいたいな。彼の方が、似合うしな。

「お久しぶりです、不動准将。お迎えに来ました」

トワニング准将が、頭を下げながら、出迎えてくれる。

「ああ、お久しぶりですね。先見隊しての任務ご苦労です。して、ソロモンの状態は？」

「はい。ソロモンの状態は、ソーラー・システムで、焼かれる前のソロモンの状態です。また、我々が調べている途中なのですが、内部にはまだ、沢山の宇宙戦艦やＭＳ等が、有ると思うのですが、何分人材不足でして、遅々として進んでおりません」

「そうか。ならば、まだ完全に稼働出来る訳では、ないのだな」

「はい。残念ながら、先発隊だけでは、とても無理です」

申し訳なさそうに、頭を下げるトワニング准将。まあ、先発隊なんて、２０００人位しか送ってないから、しょうがない。

「まあ、気にしないでソロモンに、向かいましょう」

「はい。かしこまりました。不精、トワニングがエスコートさせて、頂きます」

敬礼して、艦隊陣形を指示するトワニング准将。　レウルーラが、先頭に立ちリリー・マルレーンを、ムサカ級が3隻で取り囲む。陣形が整った所で、艦隊が出発した。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

私は今、宇宙に来ています。私の座席から青く輝く星が見えます。
そう、私の住む地球です。
何故私が、宇宙に居るのかと言うと、一月程前にあった、将官クラス会議が、事の発端でした。
何でも、宇宙衛星が発見した、巨大な衛星が有ると言う事で、先見隊を送った所、宇宙軍の基地に使えるとの事で、不動准将が自ら、視察に赴くとの事で、秘書官の私も一緒に行く事になりました。
しかし、いざ宇宙に来てみると、無重力下での移動訓練なんて、受けて居ないので、当然動けないので、今は椅子におとなしく座っています。

（はあ～。まさか、宇宙に行くて聞いていたけど、無重力空間が、此処まで動きにくいなんて。しかも、不動准将は立ち上って、シーマ中佐と何か話しているみたいだから、話し相手もいないし、宇宙を眺めるしかないなんて）

少し力加減を間違えたら、立ち上がるための反動で、天井まで行ってしまいそうで怖いので、立ち上がらずに外の景色を、眺めるのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

コッセルｓｉｄｅ

迎えにきた艦隊に合流してから、２時間位たったな。相変わらず、シーマ様と悠斗の若旦那は、楽しげに話をしている。
まあ、俺は艦の指揮をとりながら、デブリを艦に当てないように、回避行動をとっている。

「コッセル大尉。右舷から、デブリが接近しています」

「あと、何分後に艦に接触する？」

「２分後です。そこそこな大きさです」

シーマ様達をチラッと見る。丁度悠斗の若旦那が、シーマ様の真ん前に立っている。

「よし。回避行動。だだし、少し強めに揺らせ」

操舵手に小さな声で伝える。幸い二人は気付いていないようだ。

俺の意図を、理解した操舵手が、小さく頷いた。

（さて、どうなるかな？）

シーマ様が、どんな反応をするか、内心楽しんでいた。

コッセルｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

シーマ中佐と話をしていると、行きなりリリー・マルレーンが、大きく揺れた。

「うわ！」「な！」

行きなり揺れたので、バランスを崩して、前のめりになり、そのまま前に居るシーマ中佐にぶつかってしまった。

「コッセル！！なに下手くそな操作してるんだい！」

「すいません。右舷から、デブリが急速接近したんで、回避行動をとったんです」

どうやら、スペースデブリが、原因らしい。シーマ中佐にぶつかった俺は、今柔らか物に包まれて前が見えない状態だ。　とりあえず、首を左右に動かす。

モゾモゾ

「あ、ゆ、悠斗、動かないでおくれ／／／」

何やら、色っぽい声が聞こえるが、とりあえず息ができないため、更に首を左右に動かす。

モゾモゾ、モゾモゾ

「あ、や、はぁ、悠斗ちょっと、待っておくれ」

（ヤバい、い、息ができない！）

今の俺には、とてもじゃないが、窒息しそうで、周りの声など聞こえていなかった。

（まてよ?上に顔を上げれば、息できるんじゃないか?）

左右に動かすのを止めて、顔を上にあげると、息ができたので、深呼吸する。

スーハー

「ふう。死ぬかと思った」

「はぁはぁ」

改めて状況確認してみると、顔を赤くし息遣いの荒い、シーマ中佐が居た。どうやら、俺を抱きしめてくれたらしく、頭を確り固定されていた。

「あ！」

どうやら俺は、シーマ中佐の胸に頭を挟まれたらしい。

（やばい？セクハラじゃないか！は、早く謝らなければ！変態て言われてしまう！）

そう。俺は、あくまで変態と言うなの紳士なのだ。ただの、変態ではなく紳士であることが、重要なのだ！

「す、済まないシーマ中佐。女性の胸に頭を埋めて、動かしてしまった。本当に申し訳ない」

「い、いや。いいさ。不慮の事故だからね／／／」

顔を紅くして、許してくれる。

「「・・・」」

互いに見つめあったまま、言葉を発する事ができない。

（何故か、シーマ中佐から、目を外せない）

（おや？今考えたら、これはチャンスじゃないか！）

無言のまま、シーマ中佐の顔が、近づいてくる。　俺の顔を上に持ち上げ、ゆっくり顔を近づける、シーマ中佐。
あと、数センチで唇が、重なってしまう距離だ。

シーマ中佐の、息遣いが、聞こえる。潤んだ瞳から、目線を外せない。
紅い唇が、重なりそうになる瞬間。

「シーマ中佐、貴女は何をしようと、してるのですか？」

とてつもない、黒いプレッシャーが、俺とシーマ中佐を襲う。

「うわ？」

「なに！」
慌てて、俺を放すシーマ中佐。突き飛ばされて、そのまま、コッセル大尉の座席にまで、飛ばされてぶつかる。
正直痛いです。

「シーマ中佐？ここは、貴女の艦ですが、不埒な行いをする場所では、ありませんよ」

声のした方を見ると、とてもとても、良い笑顔したイルマ中尉が、黒いオーラを全開にしていた。　他の兵士達は、皆震えていた。

「ちっ。良いところだったのに、邪魔するんじゃないよ！」

「なんですって！今貴女は、不動准将にキスをしようと、したでしょうが！」

「悠斗みたいな、良い男には、イルマみたいな小娘より、私みたいな淑女の方が、似合うのさ」

「なんですって！シーマ中佐みたいな、三十路過ぎの方より、私の様な若い女の方が、不動准将に相応しいんです！」

「なに！言ってはいけない、事を言ったね！！」

言い争う二人。二人を止める為に、ブリッジに居た他の兵士達が、止めに入る。

「シーマ中佐。落ち着いてください！」

「放しな！邪魔するんじゃないよ！」

「イルマ中尉も、落ち着いてください！」

「放してください！シーマ中佐とは、本気でケリをつけたいんです！」

暴れる二人を、引き剥がしてそれぞれ距離を、とらせる。

「悠斗の若旦那？大丈夫ですか？」

「すまんな、コッセル大尉。全く、困ったものだな」

立ち上がり、二人の側に歩みよる。

「二人とも止めないか！」

大声を出すと、二人ともビックリして、動きが止まる。

「全く。二人とも、美人なんだから、喧嘩なんかするな。綺麗な顔に、シワができるぞ」

まあ、美人の喧嘩ほど怖い喧嘩は、ないですからね。事実、一部兵士は脅えてますからな。俺は、この時、普段よりも、真剣な顔つきをしていた。

「え、は、はい。分かりました」

（やった。不謹慎だけど、不動准将に、美人て言われた／／／しかも、普段なかなか、しない凄い真剣な表情が、凄くカッコいいです／／／）

「う、しょうがないね。顔にシワがよるから、止めてやっただけだからね」

（ああ悠斗。出来れば、その真剣な表情で、二人きりの、ベッドの上で、好きだよて言ってくれないか／／／）

二人とも、喧嘩を止めてくれて、一安心だ。

何やら、乙女二人は、全く違うことを、考えていたが、知るよしもなかった。

「シーマ様。不動の若旦那。ソロモンが、見えましたぜ！」

コッセル大尉に言われて、中央モニターを見ると、ソロモンが映し出されていた。

「よし。ソロモンにつき次第、内部の視察に向かう」

段々と、ソロモンに近づいていく。

（よし。内部の確認作業の為に、人員を大量に呼ばなければな。あと、アメリカあたりに、バレると面倒だから、ミラージュコロイドで、隠すか）

そんなことを考えながら、ソロモンに到着するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第十七話（後書き）

ミラージュコロイドの案は、感想に書かれた意見を、参考にさせていただきました。

m（＿＿）m

第十八話（前書き）

ＰＶ三十万人突破！
この作品を、読んでくださる皆さんに、感謝を。ｍ（＿＿）ｍ
では、本文をどうぞ。

第十八話

悠斗ｓｉｄｅ

ソロモンに到着した我々は、現在中央司令部に来ている。俺は、部屋の中央に有る椅子に座り、現在のソロモンの状態を確認していた。アニメ版だと、ドズル中将が座っていた席だ。

「稼働率が、まだ1割にしか、満たないのか」

「はい。現在の人員の状態では、とてもソロモンを、本格的に稼働させるのは、不可能です」

ラコック大佐が、答えてくれる。流石にまだ、頭に髪の毛が、きちんと生えています。Ｚガンダムだと、禿げていますからね。

「先ずは、人員増員から、始めるか」

ソロモンは、元々ジオンの、宇宙前線基地だったから、かなりの人数が必要だ。連邦軍の、大部隊が簡単に収まる位だから、本格稼働には、人員が必要だ。
俺は、創造を開始する。

（デラーズ・フリート兵百万人（パイロット、整備兵等）ネオ・ジオン兵（第二次ネオ・ジオン抗争時、艦長、パイロット、整備兵）三十万人だな）

とりあえず、此くらい呼んでおけば、問題ないはずだ。ソロモンに入った時に使用した、宇宙戦艦ドック（隔壁閉鎖済み）に、創造しておく。
確か、トワニング准将が、まだ居たはずだから、彼に任せよう。

「不動閣下、コーヒーをどうぞ」

「済まない、ラコック大佐」

さりげなくコーヒーを、出してくれる。こう言う気遣いが、出来る彼だからこそ、ドズル中将の出撃後の、ソロモンの指揮を任されたのだろうな。事実、ドズル亡きあと、ソロモンから脱出するように、全軍に指示を出しているしね。

「しかし、まさか地上基地と、同じ生産プラントと、無限原子炉発電が有るとはな」

コーヒーを飲みながら、手元に有る、報告書を読む。因みに、此処は重力があるので、コーヒーが飛散する事は、無いよ。

「はい。プラントは、現在は食糧生産ラインのみ、稼働させております」

「しかも、資源はある意味無限か」

そうなんですよ。宇宙空間では、資源衛星さえ見つけて、使用すれば良いので、初期から有る資源なんて、ほとんど関係無いなんて、羨ましいわ。
しかも、地上プラントと資源量は、共同なので地上で、無理に資源回収するよりは、宇宙で資源回収した方が、楽でいいです。

「とりあえず宇宙軍は、資源回収が、当面の任務になるな」

「そうですね。ならば、そのように指示を出します」

「あと、ソロモンに、ミラージュココロイドを展開させて、我々メビウス以外の、組織に発見されるな。バレると、面倒事になるからな」

特にアメリカとか、ヨーロッパとか、日本とか、ソ連とかです。

「はい。かしこまりました。総員、ミラージュココロイドを展開するぞ」

ラコック大佐の指示のもと、ソロモンにミラージュココロイドが、展開される。何故か、このソロモンには、ミラージュココロイドが装備されていました。

（まあ、十中八九神様の、アフターサービスなんだろうけどな）

まあ、有ることに越したことはないから、良いんだけどね。

「不動閣下。ミラージュココロイドの、展開完了しました」

「ご苦労。此れからは、隠密行動が基本になる。決して、各国に気取らない様にな」

「は！お任せください」

ラコック大佐は、敬礼して返事をする。うん、頼もしいね。

俺は、机の上にある資料を、手に取る。現在ソロモンに死蔵されて

いる、ＭＳ、宇宙戦艦等の、現在確認されている、在庫を示した資料だ。

「ふむ。まだ、一部なのに、此れだけの数が有るのか

資料には、こう書かれていた

ＭＳ－０６ＦＺザク？改　（フリッツヘルム装備）

神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）無限シュツルム・ファアスト、無限ハンド・グレネイド装備。在庫数、現段階で、６０００機。

ＭＳ－０９Ｒリック・ドム、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）を装備。在庫数、現段階で、２０００機。

ＭＳ－０９Ｒ２リック・ドム？（ツヴァイ）、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）、無限シュツルム・ファアストを装備。在庫数、１０００機。

エンドラ級巡洋艦、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）を、装備。

ＭＳ搭載可能数、一個連隊（１０８機）、在庫数、８００隻。

ムサカ級巡洋艦、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールドを、装備。

ＭＳ搭載可能数、二個連隊（２１６機）、在庫数、４００隻。

レウルーラ級戦艦、レウルーラ。神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールドを、装備。

ＭＳ搭載可能数、一個師団（４３２機）、在庫数、１隻。

サダラーン級機動戦艦、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）を、装備。ＭＳ搭載可能数、３個連隊（３２４機）。在庫数、１隻。ドロス級超大型空母、神改造済み（フェイズシフト装甲、Ｉフィールド）を、装備。ＭＳ搭載

可能数、３個師団（１２９６機）、同時離着陸可能数、１０８機。
在庫数、１隻。

うん。どんだけこの、ソロモンの中に、入っているんだよ！！！
しかも、まだ一部だぞ！全部調べたら、どんだけの数になるんだよ！

「はあ～、神様の置き土産て、マジで凄いな」

ため息をつく。神様の置き土産は、あり得ない位改造されていた。

「しかも、ご丁寧に武器まで、改造されてる」

資料を捲る。次のページには、武器の状態が記されていた。

ヒートホーク、ヒートサーベル、絶対折れない、欠けない、エネルギー切れにならない。
１２０？マシンガン、装填数３００００発。
ＭＭＰ－７８マシンガン、装填数３００００発。下部グレネードランチャー、装填数２０００発。ＭＭＰ－８０マシンガン、装填数５００００発　。ジャイアント・バズ、装填数３０００発。
ザク・バズーカ（２８０？バズーカ）、装填数２０００発。

うん。素晴らしいね。戦術機の武装が、可哀想に思えるね。しかも、見た目全く変わってないから、凄いよね。

「どんだけなんだよ！あり得ないよ。しかし、これは参考になった」

資料を机の上に置き、ポケットから、ア〇フォーンを、取り出す。
武器生産ラインを、表示させる。

「まあ、現在ある武器も、一緒に改造しよう！」

神様が、ソロモンに残した武器の通りに、改造してから、生産させる。現在有る武器は、オプションパーツで、追加改造した。

「とりあえず、ソロモンで出来ることは、したよな？」

ふと、考えてみる。まだ、何かしていない気がする。

「ラコック大佐。あと、何かに必要な事って、あったか？」

「不動閣下。再突入殻を、生産していません。なおかつ、宇宙軍の医療品も生産も、されてません」

ラコック大佐が、俺のしていなかった、事を教えてくれる。

そうだ！宇宙軍作るのに、神様の置き土産に驚いていて、やること忘れてたよ。

再び、ア○フォーンを手に取り、生産ラインを表示する。先ず、食糧をとりあえず毎日プラントに、生産させる。（人数分。人が増えたら、増えた分だけ自動で増産する）

弾薬も、全軍が十年間戦える分、生産させる。

医療品も、全軍の人数分、生産させる。

「さて、再突入殻は、Ｉフィールド（レーザーなんか、きかんよ）だけを、装備させておけば、大丈夫だな。あと、１２機搭載可能（１個中隊）にしとけば、良いだろう。運用は、エンドラ級にでも、させればいいや」

たしか、再突入殻だけは、何故かＢＥＴＡから、迎撃されないんだよな。もし、されても良いように、Ｉフィールドだけを、装備させ

ておこう。

「さて、生産数は、使い捨てたがら、２００００個あれば、足りるな」

ア○フォーンを、操作して、設定する。画面にこう、表示された。日産、５００個。予定数量、２００００個。

「さて、やることが終わったし、昼寝でもするか？」

椅子から立ち上がろうとすると、ドスンと、書類が置かれた。

「ラコック大佐。これは、なんだ？」

机の上に置かれた、大量の書類を、指差ししながら、尋ねた。

「なんだと、言われましても、不動閣下が、７月１０日に予定している、メビウス独自の作戦、鉄原ハイブ間引き作戦の、提出書類ですよ」

「え！あれは、宇宙に来る前に、終わらせてきたぞ！」

「はい。これは、追加分の書類ですね。地球の基地に着くまでに、終わらせてください、との事です」

そう。俺は、ＢＥＴＡの日本進行に、介入するために、わざわざする必要のない、間引き作戦を、提出したんだ。

日本帝国に、許可を貰わないと、戦艦やＭＳの一時的な中継基地を、借りれないからだ。主に、関西、特に中国、四国地方に、中継場所を借りている。九州地方にも、借りているがな。

「まさか、また書類と、戦うのか」

ガックリと、項垂れる俺。書類仕事は、本当に飽きます。

「大丈夫です。今日の夕方までに、終わらなければ、帰りの艦の中でも、やっていただきますから」

俺に、死刑宣告を下す、ラコック大佐。鬼畜だよ！どんだけ、書類仕事ばっかりさせるんだよ！ああ、このイライラは、ＢＥＴＡにぶつけてやる！必ず、オリジナルハイブを、叩き潰す。

そんな、八つ当たりな、事を考えながら、目の前の書類に、挑むのであった。

追記。何とか、帰る前には終わりました。ラコック大佐や、調査から帰ってきた、シーマ中佐とイルマ中尉にも、手伝ってもらいました。

ただ、シーマ中佐と、目が合う度に、何やら熱い視線を何度も、感じました。しかも、そのたびにイルマ中尉の身体から、黒いオーラが、発生しました。

ラコック大佐は、シーマ中佐達が、仕事を手伝ってくれ始めてから、「若いな。俺も、嫁が欲しい」等と、終始言っていた。

最後に来た、トワニング准将は、苦笑いをしていた。

因みに、帰りはサダラーンに、乗って秘密基地に、帰りました。

リリー・マルレーンも、一緒に帰って来ましたよ。あっちには、シーマ中佐達が、乗って来たからね。

さて、いよいよＢＥＴＡの、日本進行だ。これからが、大変なんだよな。ＢＥＴＡの、日本進行の際の、被害軽減計画を考えながら、ソロモンを、後にするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

神様ｓｉｄｅ

今日も、妻に内緒で浮気してきました。

「今日の子は、なかなか良かったな」

うん。やはり、妻以外の女性は沢山おるから、口説くのが、楽しくて止められんな。

「さて、何時もの日課を見るかの」

多次元観察を、始める。悠斗の奴は、どうやら、ワシのプレゼントに、気がついた様だな。早速調査に、向かっておるわい。

「チッ。惜しいな。もう少しだったのに」

悠斗の奴め、なんでそこで、自分から行かんのじゃ！ワシなら、ＧＯするぞ！

「何が惜しいんですか？」

「あと少しで、ｋｉｓｓじゃたんじゃよ」

「そうですか。誰が誰とですか？」

「それはのう」

何やら、誰かが相づちを、入れてくれるので、振り返ってみると、そこには、嫉妬神と化した、妻ヘラが、どす黒いオーラを、全開にして立っていた。

「で？誰が誰と、ｋｉｓｓしようと、したんですか？」

「ま、待て、待ってくれヘラ、誤解だから！」

「言い訳なんか、聴きません。Ｏ・ＳＩ・Ｏ・ＫＩ・です」

凄く良い笑顔をした、ヘラが近づいてくる。

「待ってくれ、勘弁して、あーーーーーーーーー」

そのあと、半端ないＯＳＩＯＫＩを、半日ほどされるので、あった。

神様ｓｉｄｅｏｕｔ

第十八話（後書き）

ザク？改のフリッツヘルム装備を見ると、何処となく、ギラドーガに見える作者です。まあ、個人的には、どちらの機体も好きですけどね。

感想、待ってます。

第十九話（前書き）

やっとできました。かなり、難産でした。
では、本文をどうぞ。

第十九話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は今陸戦艇ビックトレーバターン号に乗って、日本帝国舞鶴海軍基地に向かっている。
このバターン号は、レビル将軍がオデッサ作戦の際に、乗っていた艦だ。
今回舞鶴基地に向かっているのは、７月１０日に予定している、メビウス独自の間引き作戦の為に、日本帝国から終結場所として、許可を貰った基地の一つだからだ。

「不動閣下。もう間もなく、日本帝国舞鶴基地に到着致します」

いつの間にか、近くに来ていた、ギニアス大佐が、そう告げる。

「そうか、早いな。秘密基地を出発したのが、６月２９日明朝だろ？」

「はい、そうです。今日が、７月１日ですから、４日間で日本帝国に、到着しましたね」
「そうだよな。まあ、大部隊を動かしてるんだからな。たしか、俺達が最後だな？」

先発隊は６月２５日に出発したので、俺の部隊が最後の筈だ。

「そうです。まあ、秘密基地の戦力の半分を、出撃させましたから

ね」

そうなんです。この間引き作戦は、表向きはただの間引き作戦だが、俺からすれば、ＢＥＴＡの日本進行に、介入するための、ダミープランなのだ。

「そうだな。まあ、鉄原ハイブには、行くことはないだろうからな」

「そうですね。しかし、此れだけの大部隊を、良く受け入れましたね」

ギニアス大佐の言う通りだ。まあ、此れだけ大部隊を受け入れられる、日本帝国の基地も、凄いがな。

だって、ビックトレー１０００隻だぞ？まあ、四国地方、中国地方、九州地方、関西地方の、各エリアに、２５０隻も駐屯するんだから凄い事だよ。因みに、潜水艦艦隊は日本海から、対馬海峡の辺りの水中深くで待機している。

潜水艦は、ユーコンが１００隻、マッドアングラーが、５０隻だ。因みに潜水艦艦隊は、全艦が出撃している。搭載ＭＳはゴックが６０００機、ズゴックが３０００機となっている。すべて、水中での戦闘しか参加しない。陸上に上がることは、絶対に無い。ＢＥＴＡに、水中でしかメガ粒子砲を、射てないと判断させるためだ。

「まあ、戦車やホバートラックやガンタンク？なんかはガルダ級で日本帝国に輸送は完了していますから」

「そうだったな。間引き作戦に行くためには、ビックトレーに再度積み込むと言ってあるしな」

まあ、ホバーカーゴトラックは補給コンテナを各地に配備して、空

になったら民間人を脱出させる、緊急輸送車両になるから良いけどね。まあ9，６００両程、持って来ている。一両あたり、１００人から１５０人位しか乗せられないが　、それでも無いよりはましだ。まあ、ビックトレーにも民間人を乗せて脱出させるけどね。

戦車は、６０００両ほど、ガンタンク?も６０００機ほどしかないが、遅滞作戦で、ＢＥＴＡの足止めをしてもらったり、砲撃支援が目的だから問題ない。

「ＭＳも、かなりの数を用意したんだ。あとは、民間人の犠牲を最小限に押さえるのが、我々メビウスの腕の見せどころだ」

「そうですね。ザク?Ｆ2型だけでも、９０００機。ザク?Ｒ－１型１０００機。ザクキャノン、３０００機。グフ、４００機。グフ・カスタム、１５０機ですからね。此れだけあれば民間人が後方に居ても、被害を押さえられるでしょう」

ギニアス大佐も、連れてきた兵力を考えて、犠牲を減らす事を第一と判断したようだ。

「不動閣下。ギニアス大佐。舞鶴基地が、見えて来ました」

オペレーターの女性が、そう伝えてくる。
外を見てみると、いつの間にか陸上が近づいてきていた。

「あそこが舞鶴基地ですか。大きい基地ですね」

「そうだな。一応帝国海軍の、主力戦艦達の帰航基地だからな。それは、大きいさ」

そう。佐渡島ハイブ攻略作戦（甲２１号作戦）の時に、活躍した帝国連合艦隊、第２戦隊と第３戦隊が所属しているんだからな。大規模基地じゃなければ困るよな。戦艦かなりデカイしな。

「機関停止。不動閣下。本艦は、舞鶴基地に入港しました。基地指令部からの、管制に従い陸上に上陸し、待機場所に到着しました」

「分かった。ご苦労だった」

「は！ありがとうございます」

操舵手に礼を言うと、元気に敬礼してくれた。

そのまま自分の席に座る。ギニアス大佐が、秘書官に珈琲を出すように、指示をしている。

「さて、日本帝国に着いたが暫くは待機かな？」

「そうですね。先ずは、メビウスの将官クラス会議を開かなければなりませんよ」

「はあ。休みは無しですか」

ハア～と、ため息を着く。また会議ですか。まあ、大切な事なんだけど、少し位は休んだって良いじゃないか。

ギニアス大佐は、苦笑いをしている。

そこに、先程のギニアス大佐の秘書官が、珈琲を持って此方に近づいてくる。

「不動閣下。珈琲をどうぞ。ギニアス大佐も、珈琲です」

「ああ、ありがとう」

「ああ、すまないね」

「いえ、どういたしまして。では失礼します」

秘書官さんは、敬礼して下がっていった。

珈琲を飲む。口一杯に、苦味が広がる。

「そう言えば、不動閣下。この基地の司令にも挨拶に行かなければ、行けませんね」

「そうだな。しかしまだ、指令部から上陸許可がこないから、挨拶にも行けんよ」

「そうですね。まあ、もう少ししたら、許可が下りるでしょう」

ギニアス大佐も、珈琲を飲む。まあ、なんと様になってるんでしょうか。流石は、サハリン家の跡取りだけはあるね。貴族だからこその、優雅さだね。

「不動閣下。今回の人員の件なんですが、三十万人の兵力で足りますかね？」

「うん？ソロモンから帰って来て、すぐに呼び出したが、多分足りると思うぞ」

そう。ソロモンから、帰還後人員不足と判断したから、デラーズフリート兵（パイロット、整備兵、艦長など）を、三十万人程、呼び出したんだ。

流石に、宇宙の突撃機動軍と地上軍の、兵力差が余りにも酷いので、増員しました。

「まあ、流石に宇宙突撃機動軍と、比較したら少ないけどな」

「そうですね。宇宙突撃機動軍は、ソロモンの防衛と、資源確保が今現在の任務ですからね」

まあ、宇宙突撃機動軍は、過剰戦力な気がするけどな。

ウィーン、ガチャ。

誰かが、ブリッジに入って来たようだ。

タタタタ。

何やら、小走りで誰かが近づいてくる。

「悠斗！オッハヨー！」

俺の椅子の右側から、オレンジ色の髪の毛の、少女が顔を出す。

「ああ、おはようプル。確り眠れたかい？」

「うん！朝までぐっすり眠れたよ！」

はい。エルピー・プルちゃんです。いや、元気があって良いですね。彼女は、ソロモンから帰還後、マシュマー大尉やキャラ・スーン大尉等を、呼び出した時に、強化人間にならなかった事を踏まえて、彼女と妹はどうなるのか、気になったので呼びました。

カツカツカツ。

「全く。プルはなんでそんなに元気なんだ」

左側から、妹が出てくる。やれやれと、言った表情だ。

「おはようプルツー。まあ、元気な事は、良いことだよ。なあ、ギニアス大佐」

「ふふふ。そうですね。プルツー、私はもともと、体が弱く病気持ちだったのだよ。今は、病気を完治させて日常生活を普通に過ごせる様になったが、其れまでは薬無しでは生きられなかったのだよ」

まあ、そうですね。最後の方は、完全に狂ってましたからね。

「そうなのかい？そんな風には、見えないがな」

「それは、病気を完治させたからですよ。だから、体が健康なのは良い事なんですよ。特に、元気な事は素晴らしい事です」

「ふーん。まあ、プルの場合はうるさいだけだけどね」

「むうぅぅぅー。うるさくなんかないもん！元気なだけだもん！」

大きな声を出して、否定するプル。周りの兵達が、驚いて此方を見る。

「それが、うるさいって言うんだよ。周りの迷惑も考えな」

確かに、プルツーが言っている事が正論だな。周りの兵達も、やれやれて顔をしてるしな。

ギニアス大佐は、ふふふと、笑っているしな。

「はい、二人言い争いは、終わりにしなさい」

「え～！でも？」

「デモも、ストライキも関係ありません。プルが元気な事は良くわかってるから、良い子にしてくれ」

「うーー。分かったよ」

渋々ながら、我慢してくれた様です。まあ、まだ子供ですからね。

「我慢できた、プルを撫でてあげよう」

「えへへ／／／」

プルの頭に手を置いて、ゆっくりと撫でてあげる。気持ち良さそうです。さらさらとした髪の毛が、柔らかいです。

「ふん。プルは子供ぽいな」

「なんなら、プルツーも撫でてあげようか？」

隣で、ふんと、鼻を鳴らすプルツーにも、撫でてあげようか聞いてみた。

「いや、あたしは遠慮しておくよ」

「そうか。なら、なんか飲むか？」

「じゃあ、紅茶をくれないか？」

「分かった。頼めるか、ギニアス？」

「分かりました。君、紅茶を二人分頼む」

「かしこまりました」

近くに居た秘書官に、指示を出すギニアス大佐。　俺の秘書官？まだ、休んでるよ。イルマ中尉だって、船旅で疲れてるだろうしな。

「お待たせしました。ミルクと砂糖は、お好みでお入れください」

「ああ、ありがと。いただくよ」

「わーい。ミルクティーだ！」

二人とも、仲良く紅茶を飲みはじめた。プルは、ミルクティー、プルツーは、ストレートティーに、砂糖一つだ。

「うん。甘くて美味しい」

「丁度いい、甘さだ」

やはり、まだ二人は子供だなと、思いながら俺も珈琲を飲む。なんか、俺の珈琲が甘い。甘い、ひたすらに甘い。

「なんで、珈琲が甘いんだ？」

「えへへ。悠斗の珈琲にも、砂糖いれたよ。３個ほど」

どうやらプルがミルクティーを作る際、俺の珈琲にも砂糖を入れたらしい。気がつかなかったよ。

「なんでさ」

思わず、某赤い髪の毛の少年の口癖みたいなことを、言ってしまった。

「まあ、不動閣下。甘いでしょうが、飲んでくださいね」

「はあ、しょうがない」

ギニアス大佐に、残さない様に言われたので、残っていた珈琲を一気に飲んだ。ただ、異常に甘い珈琲だった。

「あ、甘い。果てしなく甘い。珈琲はブラックが丁度いいな」

「ふふふ。まあ、その意見には賛成ですね」

「そうかい？あたしからしたら、なんでそんな苦いもんが、飲めるのか不思議だけどね」

まあ、プルツーももう少し、大人になれば分かると思うな。

「そう言えば、不動閣下にお聞きした事が、あったのですが」

「うん？なんだ？」

ギニアス大佐が、いきなり違う話題を振ってきた。

「基地の格納庫で、在庫の確認作業をしていた時に発見したのですが、あの大型の戦艦は、何ですか？少なくとも、ジオン系の戦艦ではありませんでした。二つのカタパルトに、真ん中についた、２連装砲２門。全長５００メートルは、ありましたが」

「ああ、あれか。まだ、暫く使う事のない戦艦だ。時期が来れば教えるから、気にするな」

まあ、あの戦艦を使うのは、桜花作戦のとき位だろう。あの戦艦の艦長は、もう決めてあるからな。

「分かりました。戦艦については聞きませんが、同じ場所にあった、５体のＭＳはなんですか？青色をベースに、肩を赤くしたモノアイが１機に、それの同型の青と紫が、使われている機体が１機。青色をベースの、ジオン系ではない、機体が１機に、同型機で、肩が赤色の機体が１機、青く塗装がされていない機体が１機。何に、使う積もりなんですか？」

ああ、そう言えば、あの機体たちは作ってから、倉庫の中だったな。まだ、使わないけど２００１年になったら、使う機体だな。

「そいつらは、プロミネンス計画のときに使う機体だな」

「我々メビウスが、独立指揮権と引き換えに、行かなければならなくなった計画ですか？」

「そうだ。各国の最新技術が、集まる場所さ」

「そうですか。なら、何もお聞きしません。余計な詮索をして、申し訳ありません」

「よい。気にするな。ギニアス大佐が、職務に対して真剣に取り組んでいる証拠だ」

うん。真面目に仕事するのは、大事なことだよ。

「不動准将。舞鶴基地から、出迎えの準備が整ったので、艦から降りて来て構わないそうです」

女性オペレーターが、そう伝える。

「じゃあ、行きますか。ギニアス大佐、後はまかせたぞ。プル、プルツー、行ってくる」

「かしこまりました。気をつけて行ってください」

「悠斗行ってらっしゃい～」

「ああ、頑張ってきなよ」

3人に、見送られてブリッジを出て、ビックトレーの出口に向むかった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ギニアスｓｉｄｅ

不動閣下が、舞鶴基地の司令に挨拶に行かれた。先程、不動閣下に格納庫にあった機体について、尋ねてみた。そしたらなんと、プロミネンス計画に参加する際に使用される機体であることが、判明した。
本音を言えば、他にも死蔵されている機体や戦艦も尋ねてみたかったが、いつか教えてくださる筈だから、今回はそれ以上尋ねなかった。

「まあ、今は考えて事より、職務を全うしますか」

これ以上考える事を止めて、ブリッジ要員達に指示をだすのだった。

ギニアスｓｉｄｅｏｕｔ

プルｓｉｄｅ

悠斗がブリッジを出て行っちゃった。
私は悠斗に呼ばれて、この世界に来たんだ。元居た世界だと、ジュドーを庇って死んじゃったんだ。肉体を失って、精神だけが宇宙にいたら、神様？が来て、違う世界に行かないか？て、尋ねてきたの。ジュドーは、もう私がいなくても大丈夫そうだったから、神様？に連れてってもらったら、悠斗が居たんだ。
悠斗も、私と同じＮＴ（ニュータイプ）だったんだ。とても、優しくてジュドーと違う感じの人。
あの、サイコガンダムマーク？と戦ってたときの、やさしい人とも違う、暖かいひとだ。

「ジュドーがいないけど、悠斗がいるから良いんだもん！」

また、帰って来たら、頭を撫でて欲しいな。

プルｓｉｄｅｏｕｔ

プルツーｓｉｄｅ

悠斗が、仕事をしにブリッジを、出ていった。
あいつは不思議な男だ。ジュドーを導いて死んだあたしを、神と名乗るジジイが、違う世界に行かないか？て、尋ねてきたのさ。前の世界では、もう出来ることはなかったから、もう一度戦えると思っ

て了承したら、悠斗が居たんだ。
悠斗は、あたしたちを大事にしてくれる。
グレミーのお馬鹿なんかとは大違いさ。
よく、プルが頭を撫でてもらっているのを見ると、ちょっと羨ましかったりする。べ、別に悠斗に、撫でて欲しいわけじゃないんだ。
勘違いするなよ?別に、撫でたければ、撫でてもらっても、構わないだけさ。
話がそれたね。様は、家族の様な感じだよ。
ジュドー達とは、あんまり長く一緒に居られなかったから、悠斗と一緒に居ると、落ち着くんだよね。まあ、暖かい人てことだよ。
さて、悠斗は暫く帰って来ないだろうから、プルと二人でお風呂にでも、入ろうかな。

プルツーｓｉｄｅｏｕｔ

第十九話（後書き）

ソ連の姉妹に対抗して、ニュータイプ姉妹で、行きたいと思います。
感想待ってます。

第二十話（前書き）

風邪を引いて寝込んでしまい、投稿が遅れました。まだ治っていませんが、なんとか投稿しました。ご都合主義満載です。本文をどうぞ。

第二十話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年７月４日

日本帝国に着いてから、３日が経ちました。
舞鶴基地の司令に挨拶に行ったら、原作の甲２１号作戦の時に居た、小沢艦長、安部艦長、田所艦長、井口艦長達も居ました。
まあ、簡単に挨拶をしておきました。
まあ、まだ本格的にお世話になることも有りませんからね。

今俺は、帝都城に車で向かっている。理由は簡単だ。
煌武院悠陽殿下が、激励の言葉を送りたいとのことだ。まあ、要は謁見だな。

殿下の使者が昨日、舞鶴基地に駐屯している、俺の元に書状を持って来た。使者から書状を受け取り、丁重におもてなししてお帰り頂いた。
殿下からの書状を読んだ所、間引き作戦の前に激励をしたいたい為、７月４日に帝都城に来て欲しいと、記されていた。
まあ、二つ返事でＯＫを出したがな。
今朝、舞鶴基地に斯衛軍からの迎えの車が来たので、車に乗り込んで今に至る。

「8年振りか」

「うん？何か申されましたか？」

「なに、ただの独り言だ」

運転手が返事をしてくれる。斯衛の黒い制服を着ている。彼が舞鶴基地に迎えに来てくれた。

そう。この世界の俺は、8年前に日本帝国を去り、国連軍に入隊したことになっている。

（まあ、帝都城の中に入るのは初めてなんだよな。地図事態は、頭の中に叩き込んであるから、大丈夫だけどな）

そんなことを考えながら窓の外を見る。

楽しそうに遊ぶ子供達や、買い物をしている主婦。　汗まみれになりながら、働くの中年のお父さん。のんびりとしているおじいちゃん。

誰もが、変わらない日常を送っている。

誰もが、平和を謳歌している。3日後には、その平和が打ち崩されるとも知らずに。

（まだ、日本帝国には危機感が薄い。帝都ですら、まだ大丈夫と言った雰囲気か。まあ、仕方のないことか。ＢＥＴＡ何てのは、大陸の話だと思っている市民は、大勢いるしな。国会議員ですら、日本帝国は大丈夫だと思っているし、軍も自分たちだけで、国を守れるとタカを括っている有り様出しな）

その軍の慢心が、日本を脆弱させ大本営の暴走を許し、将軍を傀儡に貶めた原因なんだかな。

（今の煌武院悠陽殿下の力では、どうにもならんがな。五摂家の連中も、もう少し考えろよな。
双子は忌み子なんて、古い風習を未だに信じてる辺りが、馬鹿すぎる。
そのせいで、とある姉妹が離ればなれにされて、有るべき絆が無いなんて悲し過ぎるだろ。
しかも、どちらも分かっていながら赤の他人の振りをして生きるなんて、理不尽すぎだ。本来なら仲良く暮らせたはずなのにな。
まあ、今の俺に言えた義理はないがな）

斯衛軍に入らず国連軍に入隊した事で、少なからず俺を憎んでいる連中が居るのは分かっているからな。特に技術的な分野ではな。

（まあ、あくまでも神様から貰った力だけどな）

元々この世界の人間ではないからな。転生させられただけだからね。
チート能力付きで。まあ、感謝してるけどね。

「不動閣下。帝都城が見えて来ました」

前方にバカみたいにデカイ城が見えてきた。

「ああ、そうだな。あと、どれくらいだ？」

「１５分程で、着きます」

「そうか。分かった」

そう返事をして、再び窓の外を見る。

暫くすると、車が止まる。運転手が窓を開ける。

「身分証と通行許可書を提示してください」

「ああ、これだ」

「はい。確かに。後ろの方の確認をさせてください」

窓を開けると、銃を持った兵士が居た。どうやら、入口前の検問のようだ。

「身分証を、お願いします」

「ああ、分かった」

ポケットから、身分証を取りだし兵士に渡す。

「はい。失礼します。不動准悠斗准将ですね。あれ？」

身分証を受け取った兵士が固まる。なにか不備があったか？

「おい、どうかしたのか？」

他の兵士が近づいて来る。

「ん？なにか不備があったか？」

「し、失礼しました！メビウスの不動准将とは知らずに、身分証を提示させてしまうとは、申し訳ありません！」

身分証を、受け取った兵士がいきなり敬礼して、そんなことを言ってきた。
俺は、そんなに有名人なのか？↑お前が気づいてないだけだ！（神様）
ん？なんか電波を拾ったような？まあいいか。
「行っていいか？」
「は！構いません！身分証を、お返しします！」
兵士から、身分証を受け取りポケットに入れる。
「出してくれ」
「はい。かしこまりました」
運転手にそう言って、車を発信させて帝都城の中に入れるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

真耶ｓｉｄｅ

今日はひさしぶりに、空が晴れた。異常気象による台風が近づいてるとは思えない位、綺麗な青空が広がっている。
私は今帝都城にいる。今日悠陽殿下に謁見する、不動悠斗を待っている。あやつが、帝都城に来るのは８年振りだ。

（フフフ。今思い出すと、あの時は本当に早まった事を言ったな。いくら決まった事とはいえ、納得など出来なかったからな。まあ、そのおかげで悠斗と結婚の約束ができたんだがな／／／）

そう。あの日は、今日の様に良く晴れた天気だったな。

１９９０年のある日。

今日は悠斗が国連軍に入隊する為に、家を発つ日だ。私と真那と唯依の３人で、不動家に押しかけて行ったんだ。

「不動のおじ様、お久しぶりです。悠斗はいますか？」

「おお！真耶ちゃん、真那ちゃん、唯依ちゃんじゃないか。悠斗なら、部屋で身支度しているよ」

私達を出迎えてくれたのは、悠斗の父上である不動元少将だった。見た目は、悠斗をかなり老けさせて、眉間や額にシワがよって白髪にした感じだ。
（簡単に言えば、創聖のアクエリオンの不動司令を、白髪にした感じかな）

「そうですか。では、お邪魔します」

「「お邪魔します！」」

「はいどうぞ。今日悠斗は、国連軍に入隊する為に日本を出国する。あと1時間程で、家を出るからね。其まで別れを惜しんでやってくれ」

不動のおじ様は、そう言って家の奥に引っ込んだ。

玄関から上がり、悠斗の部屋に向かう。

他の二人も続いて来る。　3人とも話をせずに、悠斗の部屋に着いた。

「悠斗。私だ真耶だ。入るぞ」

障子戸越しに声をかける。

「ああ、構わないよ」

障子戸を開けて中に入る。部屋の中は既にかたずけてあって、綺麗になっていた。

「やあ、3人とも。わざわざありがとう。大した持て成しはできないけど、どうぞごゆっくりしていってくださいな」

「前置きはいい。それより、本当に国連軍に行くのか？」

悠斗が、前置きを言って挨拶するが、それを無視して本題に入る。

他の二人も真剣な眼差しを向けている。

「うん、親父が五摂家を説得して、押し通したからね。覆す事なんて出来ないよ」

「しかし」

「真那。これは、政治取引なんだよ。俺が行けば全て丸く収まり、日本帝国にとって、より良い選択になるんだ」

このまま斯衛軍に入隊すれば、確実にトップエースとして活躍するだろう。

それくらい将来を、期待された子だ。

それゆえに、今回の国連軍行きには斯衛は勿論、帝国軍、帝国議会などで激しい論争になるほどだ。最終的に、五摂家の勅命にする事によって、表向きの政治的決着をつける事になった。全ての発端は、とある国が難癖を付けてきたのが原因だった。

日本帝国も、国連の一員ならば斯衛から、国連軍に人を出すべきではないかと。結果日本帝国は、大混乱に陥るはめになったがな。

暫く悠斗達と話をしていると、障子戸から声がかかる。

「若様。出発の時間でございます」

「分かった。今いきます。皆、出発の時間だ。外に行こう」「「「うん」」」

悠斗と共に、不動の廊下を歩き玄関に移動して外に出る。

外には、黒い車が1台止まっていた。周りには、悠斗の父上と母上、不動家に使える使用人の方々。それと、巌谷榮二大尉が待っていた。

「別れはすんだか？」

「はい父上。しかと済ませました」

「そうか。ならばよい。悠斗よ国連軍に行っても、負けるでないぞ。斯衛の誇りを見せつけてくるのだ！よいな」

がっしりと悠斗の両肩を押さえて、話す不動のおじ様。

「はい父上。頑張って参りたいと思います」

「うむ。ならば、ワシから言うことはない」

両肩から、手を放すおじ様。悠斗はそのまま、前に進み不動京さんの前で、止まる。こう言わないと酷いお仕置きに会うからだ。今だ、若いお姿のままなのが不思議でならないが、歳は・・。歳の事を考えた瞬間、殺されるかも知れない程の殺気に襲われた。不動のおじ様も、顔を青くして震えている。各言う私も、震えが止まらない。きっと唯依や真那も震えているだろう。しかし、悠斗は何処吹く風の様に普通にしていた。大物だな。姿は、悠斗と同じ青い髪の毛に、花の模様をあしらった髪止めを着けている、ショートカットの方だ。（マジ恋の椎名京の、髪の毛の色を、悠斗と同じにした感じ）

「悠斗よ、何処に行っても母は、貴方の事を見守っていますよ」

「はい母上。母上に要らぬ心配をかけないように頑張って参ります」

「私の大事な悠斗を、国連軍に行かせるのは忍びないでずが、頑張って来るのですよ」

京さんが、悠斗を抱きしめる。悠斗も同じく抱きしめた。少しして、お互いに離れた。

「悠斗くん。良いかな？」

「はい巌谷さん。お待たせしました。行きましょう」

車に乗り込もうとする悠斗。しかし、私はそれを黙って見ている訳にはいかなかった。

「悠斗！」

ピタリと止まる悠斗。車に乗らずに此方に向く。

「必ず生きて帰ってこいよ！」

「分かった。約束するよ」

「悠斗。私とも約束しろ」

真那も、ちゃっかり入ってくる。

「何をだい？」

「生きて帰って来たら、私の婿になれ！」

な！何を言ってるんだ真那。流石に其に驚いて、皆が固まる。

「ああ、良いぜ。ならいい女になて待ってな」

しかも、悠斗！貴様もちゃっかり、許可をだすな！なら、私も遅れをとるわけには行かない！

「悠斗！真那だけずるいぞ！私の婿にもなれ！」

私は、何を言ってるんだ！真那張り合うなんて、何を考えているんだ。

でも、悠斗の事を想うと胸が苦しくなる。

何時も一緒だった悠斗が、居なくなる事を考えると、夜も眠れなかった。なら、後悔するよりこのまま、勢いでも良いから言ってしまえ。

「良いぜ。父上だって、側室がいるんだからな。あれ？けど婿養子の場合、俺が側室の扱いになるのか？まあ、いいや」

「悠くん。手紙を出してね！絶対だよ！」

「あいあい。分かったよ唯依ちゃん。必ず手紙を出すから楽しみにしててな」

今度こそ、車に乗り込んだ。巌谷さんも車に乗り込んだ。

そして車が、発進して行った。

車の窓から、悠斗が体を半分位出した。

「じゃあな！皆元気でな！必ず生きて日本に帰ってくりからな！」

両手を大きくふっている悠斗。

「悠斗頑張ってこいよ！」

「悠斗。元気でな！」

「悠くん。手紙待ってるからねーーー」

皆が、車が見えなくなるまで、手をふり続けた。ついに車は、見えなくなってしまった。

唯依は、大粒の涙を隠す事なく、泣き続けていた。暫く唯依を、あやしていると、泣き疲れたのか眠ってしまった。

使用人の方が、客間に布団を敷いてくれたので、そちらに唯依を寝かせると言って、連れて行ってくれた。

「しかし、悠斗もやるな。こんな可愛い子達を、虜にするなんてな」

不動のおじ様が、行きなりそんな事を言い出す。

「全くですね。若い頃の貴方に、そっくりですね」

冷や汗を、大量に流す不動のおじ様。心辺りが、あるのだろうな。

「オホン！しかし、良いのか家の愚息で？月詠家ならば、男など引く手数多だろうに？」

「不動様。ご子息様程の男児は、このご時世なかなか、おりませんよ」

「そうですよ。悠斗は年下ではありますが、非常に良い男です。むしろ、あやつ以外の男と結婚しろと言われたら、自害する覚悟はあります」

「ハア～。月詠家の者は、皆意志が固いからの～。ワシが説得しても無駄な様だしな」

不動のおじ様が、またため息を一つ吐いた。

何やら、哀愁が漂っていた。

「まあ、良いじゃない。悠斗が月詠家に婿入りなんて、良い縁談よ。それに、当人同士で了承してるんだから、親が文句を言ったてどうしょうもないわよ」

京さんが、間に入ってくる。義母様と、呼ぶ日が来るのだろう。今から、言っておくか？

「ハア～。ワシから月詠家の当主に話をしておく。真耶ちゃん、真那ちゃんは、仕事に戻って良いよ。護衛の仕事があるんだから」

「分かりました。其れでは失礼します」

「ありがとうございます。其れでは失礼させて頂きます」

私と真那は、二人に別れの挨拶をして、不動家を後にした。

（今思えば、良い思い出だな。しかし、悠斗の奴は何時になったら、祝言をあげるつもりなんだ？）

そんな事を考えていると、１台の黒い車が近づいて来た。

「やれやれ。やっと来たか」

車が私の前で、止まった。運転手が降りてきて、後部座席のドアを開く。車から悠斗が降りてきたのだった。

真耶ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

帝都城内に入って、暫くしたら車が停止した。
運転手が降りて、俺の座っている側のドアを、開けてくれた。

「不動准将、着きました。此方からどうぞ、降りてくださいませ」

「ありがとう」

車から降りると、月詠真耶大尉が出迎えてくれた。

「お久しぶりです、不動准将」

「久しぶりだね真耶さん」

敬礼して、出迎えてくれる月詠大尉に、笑顔で返事をする。

「そ、其れでは案内させて頂きます／／／」
（くう～。相変わらず笑顔が、素敵過ぎるだろう）

「よろしく頼むね」

「では、着いてきてください」
月詠大尉の後ろをついて行く。駐車場から、ハンガーを通る。何気なくハンガーの方を見ると、不知火が置いてあった。

（はて？斯衛軍は、第３世代機は武御雷のはずだ！何故不知火がハンガーにあるんだ？）

歩みを止めて、不知火を見る。良く見ると、所処不知火と違う部分がある。

「どうしました？」

月詠大尉が戻って来て、訪ねてきた。

「何時から、斯衛は不知火を正式採用したんだ？」

「ああ、この機体か？この機体は不知火の改修機で、不知火・壱型丙と言う機体だ」

（ああ、ＴＥで登場する不知火の改修機か。確か突き詰めた設計が仇となって、改修が遅れてた機体だな。性能が向上した代わりに、稼働時間が大幅に低下して、専用のＯＳが必要になった機体か。確か１００機しか生産されなかった機体か）

「なんで、そんな機体が此処にあるんだ？」

斯衛軍では確か、白い牙中隊（ホワイト・ファングス）が、試験運用を行っているだけのはずだが？

「斯衛軍で、先日トライアルを行ってみたが、ピーキー過ぎて使い

物にならないから、採用は見送るだろうな。帝国軍では、既にトライアルが済んでいるから、調達中止は確実だな」

「そうか。なら行こうか」

「良いのか？何か、気になったんじゃないのか？」

（流石に、過去の変化がないか確かめたかっただけなんだよな。不知火・壱型丙には、用事はないからな～）

「なに。てっきり斯衛が、不知火を正式採用したかと思っただけさ」

「確かに、瑞鶴が旧式下しているが、不知火を正式採用するとは聞いたことがないぞ」

（だろうな。そうしないと、アメリカが圧力を強めてくるからな。あの国は今、俺の会社のせいで、軍事産業に打撃を受けてる最中だからな。そうなれば、巌谷中佐のＸＦＪ計画に食い付いてくるはずだ。まあ、そこを奪い取るつもりだけどな）

「そうか。ならば行こう。謁見の時間が近づいている」

「そうだな。行こうか」

俺達は、戦術機のハンガーを後にした。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十話（後書き）

まだまた、寒い季節ですので読者の皆様も、風邪を引かない様に気よつけてください。

第二十一話（前書き）

や、やっとこ出来た。相変わらず風邪が治らないですが、更新だけは出来ました。ご都合主義満載です。口調がちょっとおかしいかも知れません。では、本文をどうぞ。

第二十一話

悠斗ｓｉｄｅ

帝都城の中を、真耶と二人で奥へと進む。帝都城の内部は広く、通路のあちらこちらに調度品や書それに日本画等が、置いてある。

「広いな」

「それは、そうだろう。将軍の住む場所なのだぞ。それに、斯衛の所属する城内省も有るからな。
その関係もあって、ある程度の広さが必要なのだろう」

確かに城内省が帝都城の中に在るとは言え、此れだけの広さが有る廊下は、無いと思うぞ。
対人戦闘になったとしても、簡単に防衛陣地くら確保出来るぞ。
まあまず、帝都城の中で対人戦闘になる可能性なんか、無いだろうがな。　まず、城門突破から不可能に近いからな。
１２・５事件の時のクーデター軍ですら、当時東京にあった帝都城を陥落させることが、出来なかったのだからな。
まあ、城内省が帝都城の中に在るとは言っていたから、多分この世界に居た事になっている自分なら、こんなことを言うだろうな。

「ああ。お前が居なくなって８年たったが、帝都城の中は変わらないよ。変わったとしたら、照明の配置や引退された方々位なものだよ」

月詠大尉が歩みを止めた。俺は、月詠大尉の横に移動して向き合った。

「違うぞ真耶さん。８年経って、真耶さんは昔に比べて、美人になったよ」

多分８年前の月詠大尉なら、かなりの美人さんだったと、思うんだよな。具体的な年齢は明かされてないけど、多分今の俺の五歳か六歳位歳上なんだろうな。

「う！そ、そうか。そう言って貰えて嬉しいぞ／／／」（やった！悠斗に美人になったと言ってもらった。真那より、一歩すすんだぞ！）

何やら、月詠大尉の顔が赤くなっている。空調は効いているが、もしかしたら暑いのかも知れないな。

コツ

何やら、物音がした。

素早く俺は気配を辿る。ホルスターに手をかけて、銃を抜く準備をする。警戒を怠らずに、廻りを確認する。左前方の柱の後ろから、人の気配を感じる。

「どうした悠斗？」

「真耶さん気よつけろ。誰か、物影に居るぞ」

「なに！侵入者か？」

月詠大尉も警戒体制を取る。まさに、一触即発の空気になる。

「ッ！まさか、ワシの存在に気付くとわの」

柱の後ろから、人が出てくる。髪の毛が、左右に3つの突起上になっている、非常に特長的な髪型だ。また、背の高さも二メートルは優にある、赤色の斯衛軍の服装をした、大男が出てきた。

「な！紅蓮醍三郎大将ではありませんか！」

月詠大尉が、驚いた表情になる。口をポカーンと開けている。ちょっと珍しいと思った。

（紅蓮醍三郎？ああ、マブラヴサプリメントに出てくる、冥夜の師匠だったな。確かオルタ本編では、名前すら出なかったけど、まさか帝都に居たとわな）

意外な人が、隠れていたもんだな。

「悠斗よ、8年振りじゃのう」

（えーと、俺は紅蓮醍三郎大将と知り合いなんだよな。となると、当たり障りの無い返事をしておくか）

「お久しぶりです、紅蓮大将殿

「なに畏まっておる？昔のように、紅蓮師匠と呼んで構わんぞ」

「では、紅蓮師匠様、お元気そうでなりよりです」

「ハッハハハ！当たり前よ！まだまだ、若いもんには負けんよ。しかし、悠斗よ、貴様はかなり変わったのう」

いきなり豪快に笑い出したかと思いきや、急に真剣な表情になる紅蓮大将。

「服の上からでも見て分かる筋肉。隙の無い動きに、無駄のない足さばき。そして、隠しているがワシが辛うじて感じとれる、気の力。かなりの修練をした者だけが扱える、気の力を習得したな」

（おや？隠していた気の気配すら気付く辺りは、流石は斯衛の大将だけは、あるな。生きる伝説と、呼ばれるだけはあるな）

曰く、素手でＢＥＴＡの装甲を貫くとか。
曰く、嵐を発生させることが、出来るとか。
曰く、雷を操る事が出来る等と、言われているからな。また、衛士としての腕前は、超一流だと言われている。
しかし、この世界だと、俺の師匠もしていたらしいな。とんだ化け物に、鍛えられていたらしいな。良く、この世界の俺は耐えたな。人外レベルの人間に鍛えられたら、普通は死ぬぞ。↑お前も充分人外レベルだからな！（神様）

なんか、電波を感じた。

「はい。修行だけは怠りませんでしたから。気については、とある流派に弟子入りして、習得しました」

「そうか。なら、弟子入りした師匠が、良かったのだろうな。普通の人間では、気を操る事など出来んからな」

まあ、東方不敗マスターアジアに、弟子入りしましたからね。普通に、殴るだけでデスアーミーを、粉砕するほどの力を持っているかたですから。

「紅蓮醍三郎大将。そろそろ、お時間がありません」

「おお！もう、そんな時間か」

月詠大尉が、時間が無いことを教えてくれる。そろそろ、謁見の時間に近づいているのだろう。

「悠斗よ。共に着いて参れ」

「はい。分かりました」

紅蓮大将と月詠大尉と共に、歩みを進めるのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

紅蓮ｓｉｄｅ

ワシは今、帝都城の廊下にある、柱の後ろに隠れておる。

今日８年ぶりに、帝都城に顔を出す馬鹿弟子を、驚かすためじゃ。

奴は、無現鬼道流の基礎を叩き込んだ所で、極めて政治的な要因で、日本を去って行ったのじゃ。そんなあ奴が、どれ程強くなったか楽しみじゃった。十五分程待っておると、月詠の気配を感じた。もう一つ、懐かしい気配を感じた。恐らく奴だろうな。

コツ

おや？足が、柱にあたってしまったようじゃな？

「真耶さん気よつけろ。誰か、物影にいるぞ」

「なに！侵入者か？」

ぬお！ワシとしたことが、まさか存在を気取られるとわな。仕方ないから、表に出るかの。

ワシは月詠達の前に姿を表した。

「な！紅蓮醍三郎大将ではありませんか！」

案の定月詠は、大層驚いておるわ。しかし、悠斗の奴は、待って驚いておらんかった。ちょっと、残念じゃな。しかし、対峙して分かったが、こやつは昔と比べて、全く隙がなくなったわ。

冥夜と比べる必要も無いほど、強くなりおった。恐らく、相当の修羅場を潜り抜けたのだろう。

本人はが、意図的に隠しておるのだろうが、僅かながらに気の力を感じる。恐らく、気の使い方も完璧に修得したのだろう。悠斗に聞いたら、修行をつけてくれた、師匠がおったそうだ。良い師に恵まれたようじゃな。

今ワシが悠斗と仮に戦ったとしたら、恐らく負けるであろうな。

それくらい強くなった。しかし、あ奴はこんなにも鈍い男だったか？

月詠が向けている熱視線に、全く気付いておらん。まあ、良いか。
当人同士の問題じゃしな。
少しの間、悠斗と話をしておった。

「紅蓮大将。そろそろ、お時間がありません」

「おお！もう、そんな時間か」

月詠がそう言うまで、すっかり忘れておった。悠斗は、煌武院悠陽殿下に呼び出されて、帝都城に来ておるんじゃった。

「悠斗よ。共に着いて参れ」

「はい。分かりました」

悠斗達と共に、歩みを進める。暫く進むと、大きな扉が見えてくるのだった。

紅蓮ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

紅蓮大将、月詠大尉と共に、帝都城を更に進むと、大きな扉が見え

てきた。恐らく、あの扉の向こうが謁見の間なのだろう。扉の前まで進み、一旦止まる。

「着いたぞ。此処が、謁見の間じゃ」

「ッ」

流石に緊張するな。オルタ本編では、相当凛々しい感じだったからな。

何せったって、クーデターを起こした、沙霧を自分で斬りに行こうとする位の方ですからね。

「武御雷をもて！」て、言うシーンは、マジで驚いたよ。

「悠斗、余り緊張するでないぞ。自然体で行くのじゃぞ」

紅蓮大将に、気を使われてしまった様だ。

（確りしろ！帝都城の雰囲気に飲まれて、どうする！）

危うく、ガチガチになるところだった。

「ありがとうございます。大丈夫です」

「行くぞ」

大きく扉が開け放たれる。謁見の間に入ると、奥の方に階段が有り、その一番上に大きな椅子がある。その椅子の上に、原作通りクーデター終了後にしていた簪（かんざし）を、頭に着けた正装で座って居る、煌武院悠陽殿下が居た。煌武院悠陽殿下の元まで進み、方膝を着いて臣下の礼をとる。因みに、月詠大尉と紅蓮大将は、階段の前で左右に立

っています。中に入るときは、一緒でしたが入ったら護衛の為に、左右に立って待機しています。

「煌武院悠陽殿下。此度の拝謁の栄誉を賜り、真に恐悦至極にございます」

「面を上げてよい」

「はっ」

煌武院殿下に言われた通り、顔を上げる。殿下の隣に、原作に居た従順長が立っていた。

「不動悠斗准将、此度は鉄原ハイブの間引き作戦に向けて、準備がお忙しい所をお呼び出しして申し訳ありません」

「殿下、その様なお言葉私めには、勿体ないお言葉であります」

「不動准将。その様な、堅苦しい言葉使いをせずに、昔のように悠陽と呼んでくださいませ」

そう言えば、煌武院殿下は幼なじみだったな。しかし、馴染みが無いとはいえ政威大将軍は、この世界では日本帝国の国務全権代行だったはず。安易に呼び捨てして良いのか、判断に悩む。

「殿下、戯れは其ほどに。私めは今は、国連に属する者です。その様な者が殿下を呼び捨てして、良いわけがありませんか」

流石に国連所属の人間が、日本帝国全権代行である、政威大将軍を呼び捨てしたら、怒られるじゃすまないだろう。

「悠斗殿、どうか殿下の言われた様に、呼び捨てしてもらえませんか？」

横に居る、従順長までそう言ってきたよ。

（あれ～？確か、クーデターの時には呼び捨てした白銀に、無礼者扱いしたのに何で今は良いんだ？）

「悠斗よ。今はワシと殿下と従順長と月詠しかおらん。安心せい」

紅蓮大将からも、擁護するような発言を受けた。

（ああ。俺が国連所属であることに、気をつかっていると思われているのか。なら、お言葉に甘えますか）

下手に拗らせて外交問題になったら、それこそ大変だからな。だから、ネズミ掃除はしないとな。

「分かりました。ですが、その前に確認したいのですが、今この部屋には私を含めて、５名ですよね紅蓮大将？」

「うむ。５名だけだ」

良し。言質は取った。ならば、掃除をするか。

俺は臣下の礼を解き立ち上がる。左手の中に短刀を、創造する。無論皆に見えない様にする

「どうされました？」

殿下の問いに答えずに、短刀を壁に向かって投げる。

ヒューン

カツ

「ッ！」

短刀が刺さった壁が捲れて、トレンチコートを着た男が現れた。

「こう言うことです」

「まさか、私の存在に気付くとは流石だね」

「「「「な?!、よ、鎧衣課長!!」」」」

帝国情報省外務二課長鎧衣左近さんです。神出鬼没で有名でマイペースな性格なんだよな～。こう言う渋い大人になりたいもんだね。

「しかし、何故私の存在に気が付いたんだい？」

「この部屋に入ってから、視線を感じてな。其れで気付いたんだよ」

「ハハハ！まさか、私の視線に気付くとは、恐れ入った」

「鎧衣。何故この場に居ったのですか?この謁見は内密に行う予定でしたのに」

「いやはや、偶々廊下を歩いて居たら、偶然聞こえましてな。なら次いでに、不動悠斗と言う、人間を見ておこうと思いまして、講し

て内密に隠れて居まし」

鎧衣課長がこうなった理由を説明するが、全員あり得んなと言った、表情だ。

「鎧衣、此処で話す話は、他言無用ですよ」

「分かっております殿下。流石に帝国に害になるような事は、話しません」

流石は鎧衣課長。帝国が不利になるような事はしないか。

「申し訳ありません、悠斗兄様。臣下の者が迷惑をかけました」

「良いですよ悠陽。最後に会ってから、9年位になるのか」

いや、実際は知りませんけどエクストラ編の3歳時の冥夜が、あれだけ可愛いのだから、六歳時の悠陽殿下だって可愛いに決まってる。

「そうですね。悠斗兄様がまだ日本に居られた時に、煌武院家でお会いして以来ですから」

「あの頃の悠陽は小さくて可愛かったが、今の悠陽は大きくなって、美人になったね」

「嫌ですわ悠斗兄様／／／。そんな事など言っては、真耶さんに怒られますよ」

「いやいや、悠陽が美人になった事を誉めただけで、真耶さんが怒るとは」

「悠斗？貴様は私の婿になる男なのに、殿下まで口説くのか？」

黒いオーラを全身から発生させて、とても良い笑顔を真耶さんが居た。

「「（（（（（（。д。；）））））ガクブル」」

他の男たちは震えていた。

「おいおい。妹みたいな悠陽の成長を誉めただけで、口説いてなんかいないぞ」

いくらなんでも言いがかりだ！煌武院悠陽殿下に失礼だろ。大体悠陽は、白銀ハーレムの一員だから守る対象であって、恋愛の対象にならないからな！

「あら、残念ですわ。私こう見えても一途な女ですのに、悠斗兄様は私とはお遊びだったのですね？」

行きなり泣き真似をする悠陽。月詠大尉からの黒いオーラが更に増える。

「そこ！勘違いされる様な事を言うな！そして真耶さん！その物騒な物をしまってくれ！」

「何が、物騒な物なのだ？」

いや、真耶さん。貴女の右手に持っている銃は明らかに、物騒な物ですよね？しかも、俺の額に照準が向いてますよね！

いやまあ、避けられますけど殿下の前で、刃傷沙汰はご法度なのでは？

「悠陽殿下、お時間がそろそろ近づいております」

「まあ、もうその様な時間ですか。楽しい時間は過ぎるのが、早いのですね」

どうやら、煌武院悠陽殿下の、次の予定が近づいているようだ。
月詠大尉が銃をしまう。俺は煌武院悠陽殿下の方に向きなおす。

「悠斗兄様。お時間が近づいておりますので、簡単に申し上げます。此度の間引き作戦のご成功を、お祈りしております。作戦の成功が帝国の平和に繋がりますので、どうかご武運を」
「は！ありがたきお言葉を頂戴致しましたので、私のもてる全ての力をもって、必ずや勝利をお届けします」

再び臣下の礼をとる。

「悠斗兄様、また日本に来られる時はどうか、顔を見せに来てください。悠陽めは、たまには悠斗兄様に、会いたいと思いますので。では、失礼致します」

煌武院悠陽殿下は脇のドアから退室されて行った。

「では、私も仕事に戻るとしよう。所詮しがない貿易会社の社員だからね」

鎧衣課長も帰るようだ。

「鎧衣課長も気よつけて、帰ってくださいね」

「ハッハハハ。不動准将も、後ろから刺されないようにな」

「いや、刺される理由が分かりませよ？」

ハアーと、鎧衣課長がため息を吐いた。

「君はどうやら、鋼入りの男のようだね。月詠大尉も大変だな」

「ええ。とても大変です」

何やら、二人は分かりあっているようですが、俺は全く分かりません。紅蓮大将は、苦笑いしているだけですしね。

「それでは、また何処かで会おう」

それだけ言って、鎧衣課長は出ていった。

「なら、俺も基地に帰るとしよう」

「なら、基地まで送らせよう。待っていてくれ」

月詠大尉が運転手を、呼びに行こうとします。

「待て月詠よ。ワシが手配しておこう。貴様は悠斗を出口まで連れて行ってくれ」

「よろしいのですか？」

「構わぬ。悠斗よ、また今度来るときはワシと勝負しようぞ」

「分かりました。今度帝都城を訪れるときは、是非とも手合わせ願います」

紅蓮大将とは、一度手合わせしてみたかったんだよね。マスターアジア師匠並に強いはずだから、楽しみだな。

「良い返事じゃ。じゃあワシは失礼する」

紅蓮醍三郎大将も出ていった。残ったのは、俺と月詠大尉の二人になった。

「とりあえず、出口に向かおうか」

「そうだな。そうしようか。ただし」

行きなり真耶さんが、俺の左腕に抱きついた。ふくよかな膨らみが、腕に当たります。

「此れくらいは、良いだろう？／／／」

顔を赤くした真耶さんが居た。真耶さん見たいな美人に抱きついてもらえるなんて、役得ですね。

「良いですよ。では、行きましょう」

そのまま、謁見の間を後にした。俺の腕に抱きついた真耶さんは、出口に着くまで終始ご機嫌だった。なんか、良いことがあったのかな？

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十一話（後書き）

やっと次回から戦闘が書けます。感想待ってます。

第二十二話（前書き）

地震や津波で亡くなられた方たちに、ご冥福をお祈りします。

第二十二話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年７月７日

帝国海軍舞鶴基地、ビッグトレー艦内不動准将の寝室。

ゆさゆさ

ゆさゆさ

俺は体か揺すられる感覚で、目が覚める。

「う、うん？誰だ？」

「おはようございます、不動准将。鉄原ハイブから、師団規模のＢＥＴＡが進軍を開始しました」

「なに！ＢＥＴＡが進軍を開始しただと！」

ベッドから飛び出し、急いで軍服を着る。イルマ中尉が見ているが、今はそれどころではない。

「ッ！／／／」

ばさ、ばさ↑寝間着を脱いでパンツ一致になっている。

（す、すごい体つき！軍人だからって言っても、こんなにも凄いなんて！たまらないわ／／／）

具体的に言うと、極限まで無駄を排除し鍛え上げられた肉体。所々マスターアジアとの修行で付いた傷痕が残っている。いくら仕事で見慣れているイルマ中尉ですら、魅了する肉体美なのである。

「良し。準備完了だ！どうしたイルマ中尉？顔が紅いぞ？」

「え？は！い、いえ、大丈夫です！」

いきなり挙動不審になる、イルマ中尉。朝が早かったから、寝不足なのか？

「そうか。それよりブリッジに移動しよう。情報が集まっているのだろう？」

「はい。既に不動准将を除く指揮官たちは全て、集まっております」

「そうか。ならば早く行かなければな」

寝室を出て、ビッグトレーのブリッジに向かう。

ウィーン、ガチャ

ブリッジに入ると、イルマ中尉の言った様に、既に皆が集まっていた。

「諸君おはよう。早速だか情報報告を」

自分の椅子に座り報告を受ける。

「はい。今朝鉄原ハイブから出撃を開始したＢＥＴＡ群は、挑戦半島を南下し、対馬島に上陸を開始しました」

「帝国の動きは？」

「はい。帝国本土防衛線、通称防人ラインに配置された帝国本土防衛軍の部隊が、現在対馬島にて防衛戦を繰り広げています。また、同日に日本に上陸した超大型台風が、九州・沖縄地方を直撃し帝国連合艦隊の展開が、不可能な状態です」

「ちぃ！帝国軍の隙を突かれたか！」

いくら、原作知識が有っても実際に聞くと、凄く歯痒いな。

「不動准将。落ち着いてください。防人ラインを守る帝国本土防衛軍の部隊は、精鋭部隊ばかりです。更に九州地方には、デラーズ中将率いる第一師団が居ります。また、日本海から対馬までの間には、ドライゼ中佐率いる潜水艦艦隊が展開しておりますのでご安心を」

ギニアス大佐に宥められる。言われてみれば、日本に着たときに既に、手わ打ってあるんだったな。

「済まない。少々熱が入り過ぎたようだ。続きを報告してくれ」

其れから暫く報告を受けるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

榊是親ｓｉｄｅ

私は今内閣総理大臣官邸に、閣僚を呼び出して緊急会議を開催している。

「状況はどうなっている？」

「はい。現在ＢＥＴＡは、対馬島に上陸しました。また、長崎、佐賀にも師団規模級のＢＥＴＡが、上陸したとの事です」

秘書官が状況報告をする。

「なんだと！バカな！まさか、ＢＥＴＡが日本進行を開始しただと！」

閣僚の一人が怒鳴り付ける。

「ハイブの建設時期からして、来年の初頭ではなかったのか？！」

違う閣僚から声があがる。今までのＢＥＴＡの動きらかして、来年の初頭を予想していた、政府、軍、官僚からしてみれば、まさに晴

天の霹靂だ。

「軍は、何をやっている?!この事態にまさか、反応できていないと言うのか!」

また、違う閣僚から声がが上がる。そう、軍の対応が遅れれば、その分民間人が危険にさらされるのだ。

「今現在分かっている情報では、防人ラインの対馬で、帝国本土防衛軍が戦闘を続けています。更に九州地方では、先に展開を完了していた国連外郭部隊メビウス所属デラーズ中将が率いる第一師団が、長崎、佐賀、で戦闘を開始しています」

「なに?メビウスが迎撃しているのか?」

「はい。そうです。少々お待ちを」

ドアが開き、違う秘書官が入ってきた。説明している秘書官に耳打ちをすると、私の横に来て耳打ちする。

「榊首相。メビウスから先ほど、連絡がありました」

「なに?何かあったのか?」

流石にメビウスの動きは読めない。元々彼等は、鉄原ハイブの間引き作戦を予定していたら、今回の大規模ＢＥＴＡの進撃にまきこまれたのだ。いきなり完全撤退とか、言い出さなければよいが。

「して、内容は?」

「はい。メビウスは、ＢＥＴＡの日本進行に対し協力を惜しまないと、連絡がありました」

これは驚いた！まさか、不動准将率いるメビウスが、協力してくれるとは。在日米軍と本土防衛軍の戦力を動員すれば、帝国は守りきれるだろう。しかし、この時私は知るよしもなかった。この後に、帝国を揺るがす事があるとは。

「分かった。メビウスに感謝する旨を伝えてくれ」

「かしこまりました。あと、メビウスから一つだけ榊首相に、お願いがあるとのことです」

お願い？不動准将程の方が私に頼みごとは？不可思議なと思いながら、秘書官に話を促す。

「何が、必要なのだ？」

「はい。民間人に対する避難命令を、政府から発令してほしいとの、ことです」

な！まさか避難命令を、要請してきたか。しかし、九州北部地方には出ているから問題にならないはずでは？

「何処を指定しているのだ？」

「九州地方全体と、中国・四国地方を含む西日本各地です」

「な！！！」

さ、流石にそれだけ大規模に人を動かすとなると、人口流動による影響で経済活動が停止し、帝国経済における経済損失は、計り知れない。其れを、求めると言うのか！

しかし、民間人の人命を軽視したと成れば、流石に不味い。今政権が倒れれば日本に政治的空白が生まれる。かの目ざとい国なら確実に横槍を入れてくる。よもや私に、これ程の難題がのし掛かる羽目になるとはな。仕事を優先し過ぎて、家庭をかえりみない私がこんな逆境に陥るのも、無理はないか。ふと、脳裏に娘の顔が浮かぶ。父親らしい事など全くしてやれない私だ、ならば国の為に散ってこそ礎になれるだろう。私が悩んでいる内に、秘書官が報告を続けるのであった。

「不動准将は、何を考えておるのだ！民間人を避難させるにしても、超大型台風が、九州・沖縄地方に上陸して船が近づけないうえに、時間も人も足りないのだぞ！！」

また、閣僚から声が上がる。他の閣僚達も彼と同じような意見の要だ。

「それに関してですが、九州地方から民間人を脱出させる為に、ビッグトレーを使用するそうです」

ビッグトレーを使用する。確かにあの陸上戦艦は確か、ホバークラフトで移動するから、荒れた海の上でも移動する事が出来るな。

「な！！本当なのか？」

「はい。帝国政府から避難命令を発令して頂けば、四国に待機しているビッグトレーも動員して、民間人の避難に従事する準備が有るとのことです」

よもや、不動准将がそこまでの用意が出来ているとはな。ならば、私も腹を括るか。

「皆聞いたな。これより政府としての公式見解を、マスコミ各社に対して報道する。内容は、ＢＥＴＡに進行を受けている、九州を含む西日本の民間人に対する避難命令を、発令する事についてだ」

全員の視線が私に集まる。閣僚全員が、やる気に満ち溢れている表情だ。

「西日本の各市町村に通達せよ、民間人に対して避難命令が発令されたと。また、メビウスから避難船が救助活動にあたるため、各市町村及び軍は、連携して民間人の避難にあたれ」

「分かりました。早速手配致します」

まず官房長官が動き始めた。

「ならば、避難民達を受け入れられる場所を、手配しなければなりませんな。早速手配しましょう」

内務大臣がそう言って、部屋を後にした。他の大臣達も、己が職務を全うするために、各関係省庁に向かった。私は、記者外見を行う会場へと、向かうのだった。

榊是近ｓｉｄｅｏｕｔ

ドライゼｉｄｅ

私は今ユーコン（チート改造済み）で、日本海の水中の中で、潜水艦艦隊の指揮を執っている。

「ＢＥＴＡの進軍速度に、以前変化ありません！」

「ドライゼ艦長。鉄原ハイブより、進軍を開始したＢＥＴＡ群は、現在対馬島にて戦闘を開始しております。また、同じく鉄原ハイブから進軍を開始した、第二陣が、佐賀、長崎に向かっております。このままの進軍速度ですと、我軍の艦隊が丁度、側面から攻撃が可能です」

部下達が、ひっきりなしに報告を寄越す。おかげで司令部は大忙しだ。

「ＢＥＴＡ群の第二陣を確認しました！」

オペレーターから、報告が入る。遂にお客さんがきたか。

「よし！ＭＳ隊を発進させろ！ＭＳ隊が展開を完了するまでの間、魚雷による面制圧を行う！良いか！師団規模より減らすなよ！」

不動准将にお聞きしていた規模より、減らしてはならないと通達が

先ほど来た。これも、正史道理にしなければならないらしい。まあ、地上には既に、デラーズ中将の部隊が展開を完了しているからな。問題など無い。

「魚雷装填完了！何時でも射てます！」

「発射口開け！」

「発射口開門。注水完了」

「全艦準備が完了しました！」

展開中の潜水艦艦隊が、魚雷の発射準備を完了した。後は、私の指示を待つだけだ。

「良し！魚雷発射！！」

近隣に展開していた、ユーコンやマッドアングラーから、一斉に魚雷が発射される。目標は水中を移動するＢＥＴＡだ。

「弾着まで、１０秒、９、８、７、６、５、４、３、２、１、弾着今」

ズドドドーーーン！！

爆発による衝撃で、艦が大きく揺れる。かなり大規模な衝撃だった。だが、水中では爆発が水によりかなり相殺されてしまうため、余り数を減らせていないだろう。

「状況報告！魚雷全弾命中！凡そ３０００体のＢＥＴＡを撃破はし

たと、思われます！」

（チッ！やはり、水中では威力が抑えられるな。だが、３０００体倒せたなら上出来か）

通常ＢＥＴＡとの戦いで迎撃作戦を行う場合、水中ではなく上陸した湾岸線の陸地で迎撃を行うのが、最も効率が良いとされる。これは、水中では爆発の威力が水により、緩和されるからである。陸上では、爆風等にも巻き込む事が可能だが、水中ではそれが見込めない。それ故、基本的に水中戦闘は考慮されず、海底等に機雷や地雷を設置するのが、一般的である。なので、水中で魚雷だけで３０００体ものＢＥＴＡを倒したと成れば、凄まじい戦果なのである。

「ドライゼ中佐。ＭＳ部隊展開を完了しましたした」

「良し！例のＭＡも出撃したな？」

不動准将に渡された、あの不可思議な形をしたＭＡ。マッドアングラーの下腹部に収用するのが、やっとだったな。

「はい。フラナガン・ブーン大尉が乗って出撃されました」

ユーコン級の艦長をしている、彼が乗って出撃したのか。まあ、無事を祈るしかないな。そんなことを考えながら、指示をだす。

「よし。これより、潜水艦艦隊はこの海域から、後退する。ＭＳ部隊は、師団級より、減らさない様に注意しながら、戦闘を開始せよ！」

部下に指示をだす。我々は、戦闘海域から後退するのであった。

ドライゼｓｉｄｅｏｕｔ

ブーンｓｉｄｅ

俺は久し振りに、ユーコン級の艦長ではなく、かつての愛機ＭＡＭ－０７グラブロに乗って、日本海を進行中のＢＥＴＡを、追撃している。このグラブロは、かつてのグラブロと違い、量産されれば装備される予定だった、メガ粒子砲を装備している。クローの真ん中の部分に左右合わせて２門が装備されている。ようは、ズゴックみたいな感じだ。

「ブーン大尉！前方にＢＥＴＡ群を、確認しました」

随伴する、ズゴックのパイロットから通信が入る。潜水艦艦隊の魚雷命中から、１分で追い付いた。

「良し！各機は、分散してＢＥＴＡを減らせ！間違っても師団規模より減らすなよ！」

部下どもにきちんと言っとかないと、こいつらは簡単に任務を忘れるからな。

「では、行かせてもらうとするか！」

グラブロのエンジンを、おもいっきり吹かして、戦闘速度で側面から、ＢＥＴＡに突撃する。

「墜ちろ！」

7連装水中ミサイルランチャーを、一斉に発射する。発射されたミサイルが着弾して爆発する。付近にいた突撃級や戦車級が爆殺される。

「へへ！このグラブロをなめるなよ！」

水中戦なら、ガンダムすら圧倒出来るのだからな。僚機のズゴック達が、ＢＥＴＡ相手に奮闘している。

「そらよ。くらいな！」

「へ！やってやる！」

ズゴックから発射されたメガ粒子砲が、要撃級を数体巻き込んで撃破する。命中したＢＥＴＡは、体に大きな風穴が空いていた。

「やるな、お前達！俺も負けていられんな！」

要塞級に一気に近づき、フレキシブルアームを前に出し、クローで要塞級の頭を勢いが付いたまま掴み、そのまま引きちぎる。頭を引きちぎられた要塞級は、そのまま絶命した。引きちぎった頭を捨てて、反転して重光線級に向かって、新たに装備されたメガ粒子砲を、発射する。

「くらえ！化物どもが！」

グラブロの両方のフレキシブルアームから、戦艦に負けない位の大きさの、メガ粒子砲が発射された。

ドゴッーーーン

命中した重光線級達は、跡形もなく撃破された。

「よし、野郎共！このまま無理はするなよ」

「了解ですよ！」

分かりました。ブーン大尉」

それから、長崎、佐賀に向かう各ＢＥＴＡを、一万体程まで減らして、撤退するのだった。

ブーンｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

長崎に展開していた我々の元に、師団規模のＢＥＴＡが上陸をして

きた。

「やはり、悠斗の言った通りになったか」

今回のＢＥＴＡの進軍を、悠斗は知っておった。正史との流れを激しく変えない要に、あやつは手を打っておった。

「砲撃開始。ＢＥＴＡを、海岸から先には行かせるな！」

ビッグトレーの３連装４０センチ砲と８０センチ砲から、砲撃が開始される。展開している全てのビッグトレーから、一斉に砲撃が開始された。

「砲弾迎撃率０％。現在光線級の存在は、確認されていません」

オペレーターから、報告が入る。光線級の存在が無いのは、ありがたい。ＡＬ弾に切り替えるには、１分程の時間がかかる。その間、面制圧による支援砲撃が、出来なくなるのは厳しい。戦場では不測の事態に備えて、様々な手段をとれる要に、しておきたい。そう言った観点から、光線級の存在が無いことはありがたい。

「デラーズ閣下。ドライゼ中佐さから、通信が入っております」

金髪ポニーテールの女性オペレーターが、ワシに伝えて来る。

「よし。通信を繋げ」

中央モニターに、ドライゼ中佐が映しだされる。

「ドライゼ中佐、ご苦労であった。して、何か有ったか？」

「は！デラーズ閣下。ＢＥＴＡとの水中戦で、可能な限り、光線級を排除致しました。なので、光線級が上陸する可能性は、ほとんどありません。それを報告しようと思いまして、連絡をさせて頂きました」

水中戦で、光線級を全滅出来たのは、ありがたい。

「そうか！ご苦労だった。諸君らも、ゆっくり休んでくれ。残りは此方で、処理しよう」

「ありがたいお言葉です。では、ご武運をお祈りします」

ドライゼ中佐が、敬礼をしたのち、モニターの画面が消えた。

「諸君。潜水艦艦隊が光線級を排除してくれた！お膳立ては済んでおる。陸上部隊が、お飾りと呼ばせるでないぞ！」

各クルーに激を飛ばす。　先程より、動きがかなり良くなった。

そのまま、各ビッグトレー、戦車隊、ガンタンク？、ＭＳと連携してＢＥＴＡを、撃破したのだった。帝国本土防衛軍が、戦場に到着したときには、既に戦闘が終了した後だった。

その後、後処理を帝国本土防衛軍に任せ、民間人の避難任務にあたるのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

第二十二話（後書き）

停電等の影響で、携帯が充電できずに投稿が遅れました。申し訳ありません。ｍ（＿＿）ｍ

第二十三話（前書き）

ようやく投稿が出来ました。まだまだ、余震等が絶えませんので読者の皆様も、気よつけてください。

第二十三話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年７月９日

帝国軍舞鶴基地。ビッグトレーバターン号

今俺は、民間人の避難状況の報告を、ギニアス大佐から受けている。

「現在九州地方の避難状況は、デラーズ中将率いる第一師団と、ユーリー・ハスラー少将率いる第三師団の援軍のおかけで、避難率は８１％まで進んでおります」

まあ、原作では九州地方は、避難はできないし援軍は来ないから、九州に居た本土防衛軍は、絶望的な戦闘を続行する羽目になるんだよな～。更に民間人を巻き込んでの戦闘に、軍が躊躇して迎撃ができなかった事が災いして、内陸部にＢＥＴＡの進行を許すはめになったんだよな。

「そうか。九州中部に、部隊は展開しているか？」

まあ、デラーズ閣下なら問題無い気がするがな。

「はい。デラーズ閣下は、九州中部に本隊を置いて、指揮を執って

おります」
流石デラーズ閣下だな。与えた情報を元に、民間人を避難させながら、迎撃できる準備までしている辺りが、素晴らしい。原作違い、作戦に幅を持たせられる様にしたんだから、多分九州に居る帝国軍の連中も、生き延びれるだろう。

「分かった。四国の方はどうだ？」

「はい。正直遅れ気味です。九州地方からの避難民を受け入れていますから、避難率は、６０％位に止まっています」

まあ、難民をピストン輸送しているビッグトレーが、目に浮かぶ。第一、第三師団の連中は、大変だろう。仕方のない事だがな。ＢＥＴＡの日本進行が予定どうり、佐渡島ハイブが完成したら、真っ先に秘密基地に戻ってもらい、休ませてやろう。それくらいは、してやらなきゃならんだろう。ギニアス大佐の、報告は続く。

「また、山陰地方ですが、ノイエン・ビッター少将率いる第二師団が、避難誘導に当たっていますが、５０％に止まっています」

やばいな、そろそろＢＥＴＡが九州中部と山陰地方に、上陸を開始する頃だ。流石に、手を打つか？まず、九州地方の残りの避難民は、沖縄に逃がして、九州に居る帝国軍は、四国に逃がす。そうして、四国の防衛を堅めつつ、避難民を本州に逃がして、神戸でメビウスの戦力で迎撃しつつ、京都の防衛準備の時間を稼ぐか？だったら、姫路で帝国軍や在日米軍と合流して、迎撃した方が無駄な弾を撃たなくて済む。まあ、帝国軍の連中は助けてやるけど、在日米軍はどうでも良いしな。どうせ、裏切ってさっさと逃げるしな。そんなことを考えていると。

ウウウーーーンーーーーン
ブウウウーーーーン

基地内に、警報が鳴り響く。どうやら、お客さん方が来たようだ。

「帝国軍から、緊急入電！本日午前１０時２２分に、鉄原ハイブから出撃したと思われる師団規模級のＢＥＴＡ群が、山陰地方に上陸しました！」

銀髪ロングヘアーの女性オペレーターが、声を上げる。ブリッジが慌ただしくなってきた。

「なに！帝国軍の展開状況は、どうなっている？」

ギニアス大佐が、オペレーターに問い合わせる。

「更に、緊急入電！デラーズ中将からです！重慶ハイブから、出撃したと思われる師団規模級のＢＥＴＡと、九州中部地方で戦闘を開始したとのことです」

やはり、原作道理の展開になったか。ならば、動きますか。

「オペレーター。デラーズ閣下に入電だ。避難民は、四国に逃がすのではなく、沖縄に廻すように伝えてくれ。また、ユーリー・ハスラー少将にも入電せよ！四国に居る民間人を、可能な限り、本州に避難させよと。

また、四国の防衛を堅めて置くように伝えてくれ」

ビッグトレーの、航行能力なら、問題なく沖縄に行けるし、この際九州の防衛は諦めて、四国に兵を廻そう。そうすれば、姫路に増援を送れる。半日以上は、持つだろう。その後、様々な指揮を執り続けるのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私は今、私専用機のカラーリングに塗装された、ザク?Ｒ－1型に搭乗して発進準備をしている。

「師団規模級のＢＥＴＡ群が、先程九州中部に上陸しました」

カチカチ

スイッチの電源を入れる。着々と出撃の準備を整える。先程から、金髪ポニーテールのオペレーターが、情報を伝える。聞きながら、準備を急ぐ。

「それで?何処を守ればよいのだ?」

「ガトー少佐は、出撃の後遊撃部隊として、各戦闘地域の援護に向かってください」

「了解だ」

「先程、民間人を乗せ脱出したビッグトレー２０隻が、沖縄に向かいました。彼らの安全の為にも、ＢＥＴＡの防衛ライン突破を許さないでください。ご武運を」

ザク？Ｒ－１型を移動させて、カタパルトから発進準備を完了する。

「アナベル・ガトー、出撃する！」

カタパルトから、一気に射出されビッグトレーから、飛び出す。スラスターを吹かしながら、戦闘地域まで飛び続けた。

１５分後

ビッグトレーから、出撃した私は、戦闘地域に到着した。前方では、友軍の帝国軍が奮戦していた。

「ちくしょう！ＢＥＴＡどもが！」

「ヘイロー３、前に出すぎだ！青島、下がれ！」

「う、うわー！戦車級が、取り付いた、あ、脚が、やられた！く、くるなー！」

オープンチャンネルで、流れてくる通信を聞いていると、思わず、ギリッと、歯を強く噛み合わせてしまった。

（所詮戦場だ。誰かが死ぬのは当たり前なのだ。なら、私は今出来る最大限の戦いをしよう）

「ＨＱ（ヘッドクォーター）、此方はメビウス所属アナベル・ガトー少佐だ。指示を頼む」

通信回線を開いて、指示を待つ。

「此方ＨＱ。アナベル・ガトー少佐ですね。援軍感謝致します。エリア０５４が苦戦中なので、援軍に向かってください」

「了解だ。向かわせて頂く」

スラスターを吹かして、一気に担当エリアに向かう。エリア到着すると、友軍がかなり押されていた。

「ウオーーーー沈めーーーー！」

ザク？Ｒ－１型のバズーカで、突撃級をマルチロックして一斉発射する。一つのバズーカかの発射口から、大量の弾が発射される。

ドーカーンドーカーンドーカーン

バズーカの弾の爆発と爆風が、突撃級、要撃級、小型種を巻き込んで撃破する。

「流石に数が多いな。しかし、私は負けん！貴様らと違い、義によって立っているのだからな！！」

上空を飛びならがら、バズーカでＢＥＴＡを巻き込みながら、接近する。要撃級が、尻尾を振りましてくるが、難無く回避してヒートホークで一閃。真っ二つに斬れて絶命する。

「そこのザク、大丈夫か？今、援護に行く！」

黒い不知火の中隊が、近付いてくる。どうやら、この地区の防衛を担当していた、帝国軍のようだ。

「こちらは、メビウス所属アナベル・ガトー少佐だ。貴方らの所属は？」

ヒートホークで、突撃級を真っ二つにしつつ、バズーカで、纏めてＢＥＴＡを倒す。一向に減る気配がない。

「帝国本土防衛軍、光の牙（シャイニング・ファングス）中隊所属部隊長不動光牙大尉です」

「なに！！」

（まさか、不動閣下の親族か？）

ＢＥＴＡを撃破しつつ、通信画面を見ると、優しげな顔をした青より黒に近い髪の色の青年が映っていた。

「貴方に尋ねたいことがある　。貴方は、不動准将の親族か？」

通信画面には、苦笑いしている光牙大尉が映っている。

「ええ。悠斗は弟ですよ」

「そうであったか。不動と聞いてもしやと思ったが、その通りでしたか」

まさか、こんな所で会うと等とわ。しかし、そんなことを気にしている場合ではない。今は、ＢＥＴＡに集中しなくてわ。

「悪いが、話は後だ。今は戦闘に集中しろ」

「了解しました。では、援護に入ります」

そのまま、共闘してＢＥＴＡを迎撃するのだった。

ガトｌｓｉｄｅｏｕｔ

光牙ｓｉｄｅ

ＢＥＴＡの進撃が止まらない。我々本土防衛軍は、九州北部で迎撃を繰り返していた。二日前の師団規模級のＢＥＴＡ群が長崎、佐賀に上陸したさいは、展開が遅れて戦闘に参加出来なかった。迎撃したのは、たまたま日本に来ていたメビウスの連中だった。我々本土防衛軍が来る前に、師団規模級のＢＥＴＡを全滅させた。正直あそこの連中は化物だ。そんなことを考えながら、進軍をしていると部下から、通信が入る。

「不動隊長。急ぎましょう。他の部隊が押されています」

はっ！として、考えを止める。今は、戦闘中だ。余計な事を考えていたら、死んでしまう。頭を二～三回振り雑念を振り払う。頭の中を真っ白にして、落ち着く。

「そうだな。急がねばならんな。あそこの防衛部隊が全滅してしまう。全機ブーストジャンプで、ショートカットするぞ」

「了解」×１１

ブーストジャンプでショートカットして、戦闘地域に到達すると、既に友軍は全滅していたが、青と緑のカラーリングをした、ザク？が１機で戦線を維持していた。

「す、すげえ！化物かよ！」

部下の一人が、そう呟く。私とて、目を疑いたくなる光景だった。バズーカを射てば、突撃級を巻き込みながら要撃級や小型種を倒す。格闘戦に持ち込めば、あのオノで真っ二つにする。あの機体の周りにはＢＥＴＡの死体しか無い。夢か何かと、勘違いしてしまいそうだ。

「あ、あれは、間違いない！そ、ソロモンの悪夢だ！」

部下の一人が、声をあげる。４月から、富士第一基地から移動してきた部下だった。

「なんだ？シャイニング・ファング１０？知っているのか？」

「はい！知ってます。２月にあった、メビウスとの模擬戦でたった１機で、帝都守備連隊第一中隊を全滅させた、パイロットです。機体のカラーリングが、そのままですから間違いありません！」

部下から、聞いた話は私も耳にした事がある。化物的なテクニックを駆使して戦うって噂だ。

実際見てみると、噂以上だったがな。

対人戦なら相手にしたくないな。命が幾つあっても足りないな。

「まあいい。助けに行くぞ！エレメントを崩すなよ！」

「了解」×１１

全機陣形をくんで、助けに向かうのであった。

光牙ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

「沈めいいいいい！」

バズーカで、要撃級や戦車級を巻き込みながら倒す。既に倒したＢ

ＥＴＡの数は、一万体を越えただろう。しかし、ＢＥＴＡの数が減っている気がしない。

「フォックス２」

「フォックス２」

「フォックス３」

「フォックス３」

援護に駆けつけた不知火が、８７式突撃砲を射ち弾幕を張る。しかし、余りにも数が多い為、余り効果がない。

「こちら、ＨＱ。エリア０５４の友軍機に次ぐ。帝国本土防衛軍は、防衛ラインを下げる事を、決定した。宮崎県まで後退せよ。繰り返す」

オペレーターからの通信は、受け入れがたい命令だった。しかし、最早防衛ラインを死守しているのは、我々だけだった。

「チッ！今頃下がれって言うのかよ！」

シャイニング・ファングスの隊員が、愚痴る。

まあ、その気持ちが分からん訳ではないがな。

「結局１時間以上防衛して、残ったのはアナベル・ガトー少佐を含めて５機だけか。しかも、ガトー少佐は最初一人で防衛されていた。我々より長時間戦っておられるのに、無傷であるから最早、機体の性能差だけではない。腕が違うと言うことですね」

「そうだ。どんなに良い機体であっても、生かす腕が無ければ意味がない。それよりも、撤退命令が出た以上此処に居ても無駄だ。引こう」

こうして会話をしている間にも、ＢＥＴＡを倒すのは止めない。動きを止めれば、待っているのは死だけだ。

それは、長年戦場に出ていれば嫌でも分かる。生き延びれば生き延びるほど、死に対する恐怖と戦う時間が増えるのだ。

いくら、帝国軍の衛士が精神的に強くても、戦闘時間を考えると限界が近い。また、そろそろ長期間の戦闘によって、戦術機が限界だろう。

いくら外見上に損傷が無くても、関節部分は金属疲労が蓄積されている。これ以上は、此処での戦闘は無意味だろう。

「そうですね、ガトー少佐。撤退したいのは山々ですが、光線級をどうにかしないと脱出は、不可能でしょう」

不動大尉が言う通り、後方に入る光線級の正で、戦術機は撤退出来ないだろう。ならば、私が道を開けば良いだろう。

「ならば、私が光線級を排除しよう。不動大尉の部隊は、光線級の危険度が下がったら、すぐに脱出するようにな」

「な！き、危険です！再考をお願いします！」

不動大尉の問いかけを無視して、ブーストジャンプで空を飛ぶ。アラートが五月蝿いがこの際無視して、一気に光線級の群れに向かって突っ込む。

「ふん！モニターが真っ赤か。だが、あたらん！」

光線級のレーザーが一斉に掃射される。私は更にブーストを強く吹かして左右上下に動きながら、レーザーを回避する。

「な！レーザーを、避けている！！」

「うそだろう！！」

「す、すげえ！！」

「奇跡だ！！」

光線級のレーザーが、掃射が終わりインターバルに入る。その間に光線級を、排除する。

「じゃまだぁぁぁぁぁ！」

光線級（ルクス）に上空からクラッカーを投げ、小型の光線級を排除する。大型の重光線級（マグヌルクス）に近ずき、ブーストジャンプをして、頭の上まで上がり、ヒートホークで真っ二つにする。

「私の邪魔をするなーーー！」

バズーカかで、周りの光線級達を巻き込みながら、撃破する。５００体は倒しただろう。危険度が低下した今なら、帝国軍の衛士達が撤退出来るだろう。ゆっくりと近付いてくる要塞級にバズーカをおみまいして、絶命させる。頭や体をバズーカで吹きとばされた、要塞級は、ドバーと体液を溢れ流しながら倒れる。下に居た、小型種も踏み潰される。

「今だ！不動大尉、脱出しろ！これは、命令だ！」

後方で奮戦している、不動大尉達に、撤退命令を下す。

「しかし、少佐がまだ中央で戦闘を！」

「構わん！行け！」

「く、分かりました。ガトー少佐、ご武運を。お前たち撤退だ！直ちに反転、ブーストジャンプを駆使して、撤退する」

「チッ！了解です」

「クッ！分かりました」

「・・・！了解」

４機の不知火が後退していく。それを確認して、私もブーストジャンプをして、上空に上がる。一気に戦場を離脱する。

（一先ず、デラーズ閣下の元に、帰還しよう）

そのまま後方から、発射されてくるレーザーを回避しながら、ビッグトレーまで帰還するのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

第二十三話（後書き）

毎日節電に協力するため、部屋の電気を消して作品を書いていたら、毎回途中で寝落ちするしまつ。被災地の方々に比べたら、断然良い環境に居るので節電に協力するのは、当たり前なのでずか、寝落ちする自分の意思の弱さにショックです。

感想待ってます。

第二十四話（前書き）

やっと出来た。若干のキャラ崩壊があります。
では、本文をどうぞ。

第二十四話

シャアｓｉｄｅ

１９９８年7月9日
山陰地方山口県

私は今、ノイエン・ビッター少将の乗艦しているビッグトレーから、出撃準備をしている。

カチ。カチ。カチ。

ザク？Ｒ－1型のコックピットで、機体の電源を入れる。各モニターに通電され、映像が写しだされる。
私の機体の前を、ザク？Ｆ２型が歩いてカタパルトに向かって行く。
カタパルトに着いたザク？Ｆ２型が射出され出撃して行った。

「シャア大佐、カタパルトまでどうぞ」

茶髪のヘアバンドをした女性オペレーターが、モニター画面に映る。

「了解した」

私はザクをカタパルトまで移動させる。

ガチャンガチャンガチャン

カタパルトに到着して、通信回線を開く。

「状況はどうなっている？」

「現在ＢＥＴＡ群は、下関から上陸を続けています。同地区から民間人は既に脱出していますが、そこから更に２０キロの地点に、まだ民間人が取り残されています。現在帝国軍が、避難誘導に当たっております。また、コンスコン准将の部隊と帝国軍が応戦しておりますが、民間人を巻き込む恐れがあるため、支援砲撃を射てない状況になっております」

（やはり、まだ民間人の避難が完了していないのが、痛いな）

尚も、オペレーターから状況説明が続く。

「シャア大佐は本艦から出撃後、コンスコン准将の部隊と帝国軍と共に、民間人脱出の為の時間稼ぎをお願いします」

「了解した。シャア・アズナブル、ザク出撃する」

オペレーターと通信を終え、カタパルトから射出される。射出された勢いを生かしながら、ブーストを吹かして一気に、戦場に向かうのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

帝国軍衛士ｓｉｄｅ

現在我々帝国軍は、山口県で民間人の避難誘導を行っている。
下関から上陸したＢＥＴＡを迎撃している最中だ。

「クソ！ＢＥＴＡめ！」

８７式突撃砲を、迫りくる要撃級に射つ。３６?弾が要撃級に赤い花を咲かせる。
友軍機も奮戦しているが、戦線はどんどん後退している。

「ＨＱ、支援砲撃による面制圧を求める」

「こちらＨＱ。現在支援砲撃は、民間人を巻き込む恐れがあるため行えない。　現状の戦力で応戦せよ」

「クソったれ！何時になったら、支援砲撃がくるんだよ！」

先程から支援砲撃を求めても、返ってくる返事は全く同じものだった。

「隊長！まだ支援砲撃は、再開されないのですか！」

流石に部下達も奮戦しているが、民間人を巻き込む訳にはいかないので、面制圧が行えないの繰り返しでは、我々ももたない。

「本部の連中は、現状の戦力で応戦せよだとよ！俺達を見殺しにするつもりか！」

既に中隊規模で出撃した俺の部隊も、今や半分まで低下している有り様だ。このままでは、全滅も時間の問題だ。

「しかし、凄いですな隊長。あのＭＳて奴わ」

部下言う通りだった。我々と同じエリアで戦闘を続けているＭＳ部隊を見る。青い機体、確かグフだったかな？が、ヒートサーベルと言う剣で、突撃級を真っ正面から、真っ二つに切り裂いていやがる。あれだけ切れ味が良いのが、羨ましいぜ。我々と一緒に戦っているのが、ヴィッシュ・ドナヒュー大尉て方だ。

盾に眼帯をした、ドクロを書いているから驚きだ。普通は、そんなものを描いたりはしないからな。

「墜ちろ！」

また、ヴィッシュ・ドナヒュー大尉の部隊の連携は、素晴らしいな。誰一人エレメントを崩す戦闘しない。完全に連携を組むように、動いている。また、グフて奴が要撃級をヒートサーベルで撃破した。

「我々も負けていられませんね、隊長」

「そうだな。今我々に出来るベストを尽くすか」

メビウスの部隊は、我々より更に前に進んで行く。そのせいか、我々に向かってくるＢＥＴＡの数が減っている。

「お前達、メビウスの連中に何時までも面倒をかけるな！我々が日本を守るのだ！良いな！」

「了解（です）」×５

我々も負けずに前に出る。一人の部下がＢＥＴＡの攻撃を回避するため、上空に跳躍した瞬間だった。

一閃まさにそれだけだった。

「お、大島！！」

部下の激震の管制ユニットは、ドロドロに溶けていた。中に居た衛士は、痛みすら感じる前に溶けて死んだだろう。

「隊長！光線級が出現しました！」

光線級。我々人類から空を飛ぶ事を奪った存在。絶対に味方を誤射しない最強の移動砲台が、戦場に出現した。

「ちくしょう！大島の敵！」

「止せ！今跳躍すれば、レーザーの餌食になるぞ」

「ＨＱより各機へ、防衛ラインに光線級の存在を確認した。また、要塞級の存在も確認した。各機は光線級に注意しながら、戦闘を続行せよ」

「クソ！本部は俺達を、捨て駒にするつもりか！」

ＨＱに通信回線が開いたまま、嫌みを愚痴る。

光線級のレーザーが、再び上空に発射された。

「え？誰か上空に飛んだのか！？」

「いいえ！我々は誰も跳躍していません！前方で戦闘している、メビウスの部隊も誰も撃墜されていません！」

ＢＥＴＡの不可解な行動に、首を傾げながら空を見ると、レーザーの中に何やら黒い影が見えた気がした。

「！！！た、隊長！レーダーに反応有り！上空です！」

「なに！！？馬鹿な、光線級が外す事など、有り得ないんだぞ！レーダーの故障じゃないのか！？」

光線級のレーザーを掻い潜って、空から此方に向かって来るなどまず無い。長期間戦闘をしている正で、計器の故障じゃないのか疑った位だ。

「いえ！ＩＦＦ（敵味方識別装置）に友軍反応！は、速い！３機接近して来ますが、真ん中の１機は左右の機体の３倍は速いです！」

光線級のレーザーが消えた。今なら、光線級がインターバルに入ったから、その間だけ跳躍が可能になった。

近づいて来る戦車級を、８７突撃砲で射殺しながら、上を見ると凄い速さで近づいて来る、赤い機体が見えた。

通信仕様と回線を開いて見ると、近づいて来る機体からオープンチャンネルで何かが、聞こえてきた。

「・・・！・・・！」

何やら、人の名前のようだが？

「フフン！フ～ン！」

「な！？赤い機体の衛士、戦場で歌を歌ってやがる！」

ふざけるな！俺はそう思った。今まさに、死ぬか生きるかの瀬戸際で此方は戦っているのに、光線級のレーザーを気にしないで空から歌いながら来る戦場を知らないヒヨッ子を怒鳴ってやろうと思った。しかし、それは出来ないと思った。
光線級が三度目のレーザーを上空に掃射したからだ。

「あの衛士、死んだな」

わざわざ自分から、危険な空を飛ぶ馬鹿野郎だと思っていた。死ぬ確率がはね上がる空を飛ぶ何てことは、どれだけ危険か何て訓練兵でも知っている。だから、俺は無意識の内に舐めていたんだろう。
あんな事になるなんて思いもしなかった。

「レーザー照射が空を切る」

なんと、光線級のレーザー掃射を全て避けて、光線級に接近していく赤い影を見たんだ。

「「「「「な！？」」」」」

全員がハモった。赤い機体がレーザーを回避して、光線級の懐に入

って行く姿を見ていた。

「光線級の狙いわ俺がターゲット」

赤い機体が、手に持っていたマシンガンを構えて発射する。そこにいたＢＥＴＡ達が赤い血の花を咲かせていた。

帝国軍衛士ｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

「フ～フフ～～ン！」

現在鼻歌を歌いながら光線級を排除している。

１２０？マシンガンの弾が、光線級や重光線級の体を蜂の巣にしている。ゆっくりと、周りのＢＥＴＡが近づいて来る。

ある程度光線級を、排除してブーストジャンプして、再び上空に行くと残っていた、光線級や重光線級からレーザーを発射される。それを見切りながら回避しつつ、周りのＢＥＴＡを歌いながら、攻撃する。

「当たらなければ～どうと言う事わない～」

左手のヒートホークで、重光線級を真っ二つにしつつ、右手で１２０？マシンガンを連射して、近づいて来る要塞級の頭を蜂の巣にし

て、倒す。
要塞級は、立ったまま絶命したようだ。

「レーザーなんか当たるかよ～」

まあ、歌ってて思ったが一人で敵の上空に居るならターゲットに私が最優先されるな。僚機は、地上に降りながら回避してるし。

「雲を裂く～赤い彗星～」

さて、歌も歌い終わったから通信回線を開くか。そう思って、スイッチに指を掛けるとスイッチがＯＮになっていた。しかも、オープンチャンネルで。私は固まった。まさか、独りで無線の電源を落として歌っていたつもりだったが、まさか全員に聞こえていたとわ。気を取り直して、近隣に居る部隊に通信をする。

「此方はメビウス所属シャア・アズナブル大佐だ。そこの帝国軍、まだ戦闘は可能か？」

「はい。まだ戦闘は可能ですが、大佐殿戦闘中に歌を歌うのは、如何なものかと」

やっぱり皆さん聞いていたんですか。
まあ、もう歌わないから気にしなければ良いか。

「スマンな。しかし無理せずに戦闘しろ。もうすぐ避難民の撤退が完了する。それまでの辛抱だ！」

僚機のザク？も、ようやく此方に来る。
マシンガンで近づいてくる、戦車級を射殺する。足場を作りそこに

着地した。

「分かりました。我々は、此処に展開したまま、戦闘を続行します」

「頼んだぞ」

そこで、帝国軍との通信を終える。既に此所までＢＥＴＡを倒しながら、進んで来たＭＳ部隊に通信を繋ぐ。

「私は、シャア・アズナブル大佐だ。貴方は？」

「俺は、ヴィッシュ・ドナヒュー大尉であります。まさか、赤い彗星と共に戦えるとなど、思いませんでした」

眼帯をした隻眼の男だった。確か、荒野の迅雷と呼ばれている人物だったな。

「そうか、なら光栄だな。もうすぐ避難民の撤退が完了する。そうしたら、此方も撤退する事になる。それまで、頑張ってくれたまえ」

「了解しました」

そう言って、別れる。

ドナヒュー大尉達が、倒してこなかった要塞級等が、既に集まって来た。

「見せてやろう！ＭＳの性能を！」

僚機が、要撃級等をマシンガンで射殺する。

私は、ブーストジャンプで上空に上がり、右足を前に出しブースト

を吹かして、要塞級の顔面にキックをかます。
ブチャと鈍い音と共に、ザクの右足が要塞級の頭を潰す。
スラスターを逆噴射して、足を抜きマシンガンを射つ。要塞級は、体内に光線級等の小型種がいることも有るため、念のため蜂の巣にしておく。

「アンディ！リカルド！無理はするなよ」

「分かってますよ」

「了解です、シャア大佐」
アンディは、マシンガンで要撃級を蜂の巣にする。
リカルドは、ヒートホークで要塞級の足を切り裂き、バランスの崩れた要塞級にバズーカを射って吹き飛ばす。
かなりのＢＥＴＡが、巻き込まれたのか、一面が荒野になってしまった。

「ＨＱより、各機へ。民間人の脱出が完了した。司令部は、姫路まで後退し、防衛ラインを構築する。各部隊は、姫路まで後退せよ。繰り返す」

どうやら、帝国軍は山口県での防衛を諦めたらしいな。各友軍部隊が、後退行動にはいった。

「シャア大佐、後退命令が下りましたね」

「そうだなアンディ。我々も、後退しなければならんな」

何時の間にか、近くまで二人が来ていた。後退する友軍反応をレーダーで見ると、まだ後退していない部隊がいた。ヴィッシュ・ドナ

ヒュー大尉の部隊だった。

「なに！まだ後退していないのか？」

「ヴィッシュ・ドナヒュー大尉て言えば、殿軍を好んでする方だと聞いてます」

「助けに行くぞ。友軍を見捨てる程、腐っていないからな」

「「了解（です）」」

ブーストジャンプで、奮戦するヴィッシュ・ドナヒュー大尉の元に向かうのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

ヴィッシュｓｉｄｅ

司令部から、後退命令が出たは良いが、部下のザクが要撃級のパンチをコックピットにくらい、気絶してしまった。部下を見捨てる訳にもいかず、僚機の部下にザクを肩で抱えながら、撤退しているが思う様に進まない。

「チッ！まだまだ、ＢＥＴＡが来るか！」

ヒートサーベルで、迫り来る要撃級を切り裂く。しかし、何体倒してもキリが無いのだ。終わる事のないＢＥＴＡの波に、私は苛立ちを隠せなかった。

「ク！お前達だけでも、早く逃げろ！」

「隊長。それは、無理な話です。我々が隊長を置いて行く様な部下ですか？」

「そうですよ。部下を見捨てない隊長だからこそ、我々は付いて来たんです。だから、我々も隊長を置き去りになんか出来ません」

部下から返ってくる返事は、やはり予想した通りの返事だった。私は良い部下に恵まれたようだ。部下達は、死なせない！ならば、私が囮になれは部下達を逃がせるかもしれない。

そんな、作戦を考えながら撤退戦を続けていると、通信が入った。

「ヴィッシュ・ドナヒュー大尉無事か？」

「シャア大佐ですか！私は無事ですが、部下か負傷しています」

シャア大佐のザクが、近くに着陸した。僚機の２機のザクが、私の前に立ちＢＥＴＡを迎撃してくれる。

「コックピットハッチは、開かないのか？」

「駄目です。どうやら、中のフレームが歪んだようです」

「いつまでも此処には、居られんからな。仕方ない2機のザクで、抱えて連れて行ってやれ。リカルド」

「大佐、どうしました？」

バズーカで、ＢＥＴＡを吹き飛ばしているザクのパイロットが、返事をする。もう1機のザクが、クラッカーを投げて小型種のＢＥＴＡを、爆殺する。

「バズーカで、一気にＢＥＴＡを吹き飛ばしてくれ。その隙に此処を、脱出するぞ」

「了解です」

「大尉、聞いていたな？」

「分かりました。抱えて連れて行け」

「はい、分かりました」

「了解です」

気絶したパイロットのザクを、部下の2機のザクが左右から腕を肩の下に入れて抱える。脱出の準備が完了した。

「行けます」

「よし！リカルドやってくれ」

「分かりました」

リカルドが上にジャンプして、バズーカを乱射する。バズーカの弾幕でＢＥＴＡが吹き飛んだ。

「今だ！行け！」

「「「「「了解（です）」」」」」

ブーストジャンプして、上空に飛び上がる。

そのまま、一気に戦闘地域を脱出した。

ヴィッシュｓｉｄｅｏｕｔ

榊ｓｉｄｅ

私は今、総理大臣官邸の応接室で、在日アメリカ大使達と会議を行っている。

「それでは、本日はどのような御用件でいらっしゃったのでしょうか？」

私の向かい側に座る、アメリカ大使に向けてそう言い放つ。

「榊首相、現在日本帝国は非常に危険な状況に、陥ってます」
「そうですな。現在帝国本土防衛軍がメビウスと共に、防衛と民間人の避難誘導に当たっておりますな」

先程受けた報告では、山口、広島の2県で民間人の脱出を完了したと、報告を受けた。また、来島海峡大橋、瀬戸大橋の両橋を爆破して、ＢＥＴＡの四国進行を防いだとの報告も受けている。

「そうです。しかし、ＢＥＴＡの上陸が続く長崎、熊本、山口と、広島に到達したＢＥＴＡ郡を撃破するためには、核兵器ないし我国が新開発した新型爆弾を使用することを、提案いたします」

私は考えてみた。核兵器を使用した場合長期間その地域は、人の住めない環境になるだろう。
また、アメリカが開発した新型爆弾の威力が、どの程度の威力なのか分からない。しかも、その爆弾が核兵器と同じ位置付けと言うことは、もしかしたら何か人体や土地に悪影響を、もたらす可能性が有ると言うことだ。　アメリカは今、メビウスによって軍事産業にダメージを受けている。そのマイナスポイントをカバーするために、新型爆弾を日本国内で使用して、威力をアピールするつもりなのかもしれん。
更に言えば、守勢に於ける広域制圧兵器の非有効性は中ソ連合軍が、この２０数年に渡る歴史が証明している。
ならば、答えは一つだ。

「大使」

「は、はい？何でしょうか榊首相？」

いきなり黙りこんだ私に、声をかけられた事に驚きつつも、返事を

するアメリカ大使。

「日本政府としての見解をお伝えします。日本政府は、アメリカ政府の提案を拒否致します」

「な！なんですと！」

私の発言に、目を限界まで見開いて私を見るアメリカ大使。まるで、このような回答をしてくるなど、思っていなかったようだ。

「し、しかし現状では、ＢＥＴＡに進行を、許すだけですよ！」

「それは、重々情緒しています。しかし、私は核兵器等を自国内で使用するつもりはありません。自分達の住む国を汚す訳には、いかないのです」

毅然とした態度で、アメリカ大使に言い放つ。愛する祖国の大地を、自らの手で人の住めない環境にするなど、決してしたく無いからだ。私の決意が固いと見た、アメリカ大使は肩を落とした。

「分かりました。本国には、日本帝国政府の意志は固いと伝えます。しかし、アメリカ政府は日本帝国政府に対して、支援を惜しみませんので、どうかそれだけはお忘れなく」

「分かりました。そのお言葉は、忘れません」

お互いに握手を交わして、アメリカ大使は、部屋を去って行った。代わりに、私の元に秘書官が駆け寄ってくる。

「よろしかったのですか？多分彼方は、此方に対して不信感を持っ

たのでわ？」

「仕方あるまい。自国内で核兵器など、世論が許すまい。それに、大使は支援を約束して言ったから、大丈夫だろう。それより、ＢＥＴＡの進行はどうなった？」

「はい。それは・・・」

また、執務室に戻り対応に追われるのだった。

榊ｓｉｄｅｏｕｔ

アメリカ大使ｓｉｄｅ

会議を終えた私は、車に乗り、大使館に向かっている。運転手は私の腹心だ。此処で言った事は、外部に漏れる心配は無い。

「気に入らんな」

そう。先程まで日本の首相との会議を行っていたのだが、日本政府は我々の提案を拒否したのだ。

「フン！古臭い考えで、我が偉大なるアメリカの提案を拒否するな

ど、馬鹿な首相だ」

そう。迫りくるＢＥＴＡなど、Ｇ弾で全て凪ぎはらえば良いのだ。メビウスごときには、作れない最強の兵器なのだからな。

「焦る必要は無い。まだまだＢＥＴＡの進行は、終わらんのだからな。いつかあっちの方から泣き付いて来るに決まっている。所詮島国の人間なのだ、逃げ場が無い以上必ず我々アメリカに媚びを売ってくるだろう。それまで、待てば良いのだからな！ハッハハハハ！」

高笑いをしたまま、車で大使館に戻るのであった。

アメリカ大使ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十四話（後書き）

アンディとリカルドは、機動戦士Zガンダムのアポリー中尉とロベルト中尉です。若き彗星の肖像に本名が登場しています。余震が多いので、皆さん気をつけてください。

第二十五話（前書き）

そろそろ終わりが見えてきた、京都防衛戦です。では、本文をどうぞ。

第二十五話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年7月12日
帝国軍舞鶴基地。ビッグトレーバターン号

「以上で報告を終了致します」

「分かった。ご苦労だったな下がって良いぞ」

「は！失礼します」

たった今の報告で、九州に残った帝国軍は鹿児島まで後退して、応戦を続けているとの事だ。
デラーズ中将率いる第一師団も、共に迎撃に当たっているが、脱出を視野に入れて戦闘を続けているとの事だ。
デラーズ中将には、7月末に九州を放棄して沖縄に脱出するように、連絡を入れてある。残存する帝国軍の部隊も脱出させるようにさせた。
四国に展開させていた、ユーリー・ハスラー少将率いる第三師団は、四国に架かる三つの橋を全て爆破して、ＢＥＴＡの進行を防いだ。
また、四国に居る民間人を完全に退避させるのに成功したのは、良い結果だった。
正史では、日本帝国の人口の３０％に当たる3，６００万人の人間が、亡くなったのだから、歴史の介入の成果は大きい。

第三師団は、九州や四国の民間人を岩手、宮城、福島、栃木、千葉、の各東日本から太平洋側の東北地方にかけて、輸送活動を継続している。

太平洋側の各地には、メビウス傘下の会社を通じて買い取っていた、大規模の土地に仮設住宅を建設してあるので、避難民達には其処で生活してもらう予定だ。

ちなみに、傘下企業は４社ある。まず、総合技術メーカーの、アナハイム・エレクトロニクス社。下請けの、ツィマット社。同下請けの、Ｍ、Ｉ、Ｐ社。アナハイムの子会社、モルゲンレーテ社の４社だ。

この４社の日本法人に命令して、各県の土地を買収するように命じた。

表向きは、新しい工場を作るために大規模な土地買収を行わせ、裏では今回のＢＥＴＡ日本進行で死ぬはずだった、民間人達の住む場所を提供するつもりだった。案の定、ＢＥＴＡ日本進行で、大量の難民が発生したが、難なく受け入れに成功したのは、本当に良かった。

「しかし、アメリカは本気でＧ弾を使いたいらしいな」

「そうですね。首相官邸での榊首相とのやり取りは、既に報告されていますからね」

先程まで、通信をしていたギニアス大佐が、隣に立っていた。

「イルマ中尉」

「はい。何でしょうか？」

近くで、作業していたイルマ中尉を呼ぶ。インカムを付けたまま、此方に来た。

「済まないが、コーヒーを二人分頼めるか？」

「かしこまりました。少々お待ちください」

そう言って、コーヒーを注ぎに行った。

「先程の通信は何だった？」

「はい。第二師団のノイエン・ビッター少将からでした。現在、姫路防衛線にＢＥＴＡ群の先鋒と帝国軍が、戦闘状態に入ったとの事です」

「民間人の避難状況は、どんな具合だ？」

いくら、防衛に当たっている帝国軍や、第二師団の部隊が優秀とは言うものの、民間人達がいたらその能力を遺憾無く発揮出来るか、分からないからな。

「ビッター少将からの話では、完全退去が間に合うか微妙だそうです」

「そうか。間に合うと良いのだがな」

今現在迄に、民間人の犠牲者が０なのは凄いよな。正史なら、大量の犠牲者がでる羽目になったのだから、それに比べたらだいぶ良い結果なんだよな。しかし、帝国軍の部隊は、果たして防衛線を維持出来るかが、鍵となるな。

「コーヒーを、お持ちしました」

俺とギニアス大佐に、コーヒーが渡される。渡されたコーヒーを、口に含む苦味が口いっぱいに広がり、頭が冴えてきた。
「コーヒーは旨いな。ギニアス、第二師団は姫路防衛線から、民間人の脱出を最優先させろ」

「宜しいのですか？帝国軍が壊滅したら、我々も出撃する事になりますが？」

「構わん。民間人を死なせるな。民が生きていれば、また帝国は立ち上がるだろう。その為にも、此度の戦いで無闇に犠牲者を出させないのが、最善の行動だ」

「分かりました。オペレーター、ノイエン・ビッター少将に入電してくれ」

「かしこまりました」

ギニアス大佐が指示を出す。女性オペレーターが指示された通りに、ノイエン・ビッター少将に入電するのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

コンスコンｓｉｄｅ

ワシは今、姫路防衛線に避難してくる民間人達を、ビッグトレーに誘導して、避難させるように指示を受けた。

「まだ、民間人の避難は終わらんのか？」

「はい！現在、最優先で民間人避難を行っておりますが、ＢＥＴＡの進行が速く、民間人の脱出が間に合うか微妙な所です」

ブリッジで椅子に座って、部下の報告を受ける。今だ、台風が九州に大規模な被害を与えておる。　外は、激しい雨と強い風が吹いておる。

ワシの艦に避難してきた、民間人の受け入れ限界も近い。

「他のビッグトレーは、まだこんのか！」

ドン

椅子の肘掛けを強く叩く。最前線に近い場所で、民間人を受け入れていた、他の数隻のビッグトレーは、既に離脱している。ワシの艦が満員になったら、収容出来なくなった他の民間人達は、歩いて後方まで行かねばならん！その間にどれだけの人命が失われるか、他の連中は分かっているのか？

「現在、ノイエン・ビッター少将の部隊から、増援部隊が此方に向かっております。もう暫くはかかるとの事です」

秘書官が冷静に報告をするが、イライラする現状は変わらない。

「ええい！ＭＳ部隊は、何をやっとるのだ！」

「此処より、五キロ先の地点で帝国軍や在日米軍と共に、迎撃任務をしています」

秘書官は忠実に職務を行うが、ワシの機嫌は一向に良くならない。

「コンスコン准将！本艦より後方から、増援のビッグトレー３隻が来ました」

オペレーターより、報告が入る。ようやく増援が来たことで、ホッと一安心した。

「ふ～、これで民間人は確実に脱出させられるな」

「そうですね。一安心しました」

ホッとした表情を見せる秘書官。ワシの機嫌も良くなったしな。

「援軍のビッグトレーから、通信が入りました。モニターに映像を繋ぎます」

中央モニターに、柄の悪い男が映る。軍服の上着の腕の長袖の部分を切って半袖にし、襟を立てて胸元を開けている。これで正規軍の制服なのだから、溜まったものではない。無意識のうちに、頭を押さえてしまった。

「コンスコン准将、お待たせしました。ノイエン・ビッター少将から援軍を命じられ参りました、ユーリ・ケラーネ少将であります。コンスコン准将は、民間人を連れて戦域を脱出してください。他の

民間人は、我々が受け持ちます」

「ケラーネ少将、援軍感謝する。此方はもうすぐ定員に達する。定員になりしだい脱出する」

「了解しました。後はお任せください」

互いに敬礼して、通信を切る。椅子に座り直す。

「オペレーター、脱出定員に達したか？」

「はい！達しました」

「よし！艦転進！戦闘地域より撤退する」

「了解」×多数

民間人を乗せ、戦闘地域を離脱するのだった。

コンスコンｓｉｄｅｏｕｔ

シュタイナーｓｉｄｅ

我々サイクロプス隊は、現在姫路防衛線で帝国軍や在日米軍等と、共闘しつつＢＥＴＡを迎撃している。俺が乗っているのは、ソロモンから持ってきたザク？ＦＺ（フリッツヘルム）だ。部下達も全機ザク？ＦＺ（フリッツヘルム）で統一している。

「隊長～、ヒック！どうするんですかい？」

この酔っぱらっているのは、ミーシャだ。戦闘中にも関わらず、酒を飲む奴だ。

「ミーシャ程々にしておけ。お客さんが前から来るぞ」

「了解しやした～。さて～来いよ化け物ども！蜂の巣にしてやるよ！」

「へっへへ。ミハイルの旦那。自分が蜂の巣にされないように気いつた方がいいぜ」

通信画面に、バンダナを巻いた男が映しだされる。隊では二番目に若い、ガルシアだ。口は悪いがパイロットとしての、腕は一流だ。

「なんだと～！よし見てろ！俺が光線級のレーザーを避けてやる所を」

「ホントに止めんか！来たぞ！」

前方から、時速１００キロのスピードで突撃級のＢＥＴＡが此方に向かって来る。

「全機跳んでやり過ごすぞ！バーニィ、しくじるなよ！」

「だ、大丈夫ですよ隊長！」

隊では一番若い優男の、バーニィにカツをいれる。戦闘経験は浅いが、呼び出されてからは、徹底的に訓練させたから、かなりの腕前のパイロットになったのだが、いかせん気が弱いのが玉に傷だ。

「よし！今だ、飛べ！」

ブーストジャンプして、突撃級を回避する。そのまま、突撃級は前進するが背後の弱点が丸裸になっている。

「今だ、鉛玉のプレゼントをしてやれ」

ダンダンダンダンダン

ＭＭＰ－８０？マシンガンから大量の銃弾が発射され、突撃級の背面に命中して血が飛び散る。

絶命した突撃級が、ビルに突っ込み止まる。

大きな音をたてて、ビルが崩落する。

「おら、死にな！」

「へっへへ、甘いんだよ」

「チッ！雑魚が！」

「うおーーー当たれーー」

ミーシャ、ガルシア、アンディ、バーニィ達のＭＭＰ－８０？マシ

ンガンから、大量の銃弾が発射され突撃級に容赦なく襲いかかる。
辺り一面に赤い血の花が咲き、血溜まりの池ができる。

「よーし！突撃級は倒した！要撃級を潰しに行くぞ！俺に続け」

「了解だ～、隊長」

「へい！分かりました」

「ハイよ！」

「了解です。シュタイナー隊長」

ブーストジャンプで再び上空に飛び、要撃級いる地点まで近付く。

ダンダンダンダンダン

ＭＭＰ－８０？マシンガンで、足元にいた要撃級を射殺する。空いた地面に着地して、シュツムルファウストを左手に取りだして発射する。

ドカーーーーン

シュツムル・ファウストの爆発に、かなりのＢＥＴＡが巻き込まれた。
辺りにＢＥＴＡの残骸や肉片が飛び散る。

「ゴク、ゴク。ふぱーー。酒は旨いな～。これだけは、止められねえぜ」

ミーシャのザクが、ヒートホークで要撃級を切り裂く。切り裂かれた要撃級から赤い血が飛散する。ミハイルのザクが赤く染まった。

「へ！逝っちまいな！」

ガルシアのザクが、ＭＭＰ－８０？マシンガンで、要撃級を蜂の巣にした。

「墜ちな」

アンディは、ヒートホークで突っ込んで来た突撃級を、回避しつつ流し切りで真っ二つにした。

「お、俺だって出来るんだ！」

バーニィは、マシンガンを乱射して戦車級を射殺するが無駄弾がある。もう少し無駄射ちしないよう頑張って欲しいもんだな。

「う、うわーーー助けてくれ！」

「お、俺の足が戦車級に」

「死にたくない！死にたくなーーい！！」

近隣の部隊の通信が混線する。どうやら、ＢＥＴＡに取り付かれたらしい。

「隊長！右前方を見てください」

「なに？」

ガルシアに言われて右前方を見ると、先程の無線に入ってきた声の部隊を見つけた。しかし、既に手遅れだった。

「隊長！助けに行かなきゃ！」

「よせバーニィ。もう助からん。見てみろ」

バーニィを制止して、右前方を見させる。３機の激震には、既に戦車級がかなりの数で取り付いており、助ける事が出来ない状態だった。

「た、助・・・・」

「い、いやーーー！」

ドカーーーン

戦車級に取り付かれていた、激震がいきなり大爆発をした。爆風が此処にもくる。

「チッ！何でいきなり爆発したんだ?!」

「あーん?機体がかなり揺れるな。酔いが回ってきたか?」

「危な！」

「ガード！」

「え?」

咄嗟にシールドガードしなかった、バーニィのザク?が吹っ飛んだ。
幸い一番後ろにいたので、問題はなかった。

「バーニィ大丈夫か?」

「く?痛~いてえ~。な、なんとか行けます」

バーニィを見ると、外傷は無いようだ。大方倒れた時に、背中を打ち付けてむち打ちになったんだろう。

「馬鹿野郎!戦場で気を抜いたら殺られるて、訓練でも習っただろうが!」

「す、すいませんガルシアさん。油断してました」

「いいか!お前一人のミスが、隊全体に迷惑をかけるんだぞ!お前がくたばるのは勝手だが、俺達迄巻き込まれたら、洒落に何ねえんだよ!!忘れんな?戦場に次は無いんだからな!」

ガルシアの説教を受けて、落ち込むバーニィ。俺が言うつもりだった事を、ガルシアが嫌われ役になって言ってくれた。
生きて帰ったら、酒位は奢ってやるか。

「しかし、何でいきなり爆発したんでしょうか?」

「分からんが、もしかしたらSー11を搭載していたのかもしれん」

「はあ?待ってください。民間人が巻き沿いになるかも、知れないんですよ?」

ガルシアやバーニィは、首を傾げている。
俺とて分からないが、推測で話を続ける。

「もしかしたらタイマーセットにして、地雷の代わりにしようとしたのかもしれん。まあ。推測でしかないがな」

「確かに、有り得ない話しじゃありませんね。幸いこの地区には、民間人が居ませんから、ＢＥＴＡの足止めをするには、最適な場所です」

Ｓ－１１には、指向性を持たせることも出来るから、ある程度爆発の方向さえ決めておけば、自分達に被害がくる確率は、低くなる。後は、友軍にさえ知らせて後退すれば、問題はなくなるからな。

「まあ、良い。起きてしまった事は、どうしようもない」

そんな事を話していると、無線に通信が入ってきた。

「ＨＱより各機へ、姫路防衛線が突破された！残存部隊は、急ぎ撤退せよ。繰り返す」

通信回線から、防衛線をＢＥＴＡに突破されたと、通信が入った。バーニィを除く、全員の顔に緊張が走る。バーニィは、顔を青くして少し震えている。

「全員聞いたな。防衛線が突破された。これ以上此処に居ても無駄だ。我々は此処より脱出する」

全員が頷く。バーニィを除けば皆退却戦が如何に辛いかよく知った

隊員達だ。この先の地獄を、予想しているのだろう。

「先頭三人は、ガルシアとアンディそれにバーニィ。殿はおれとミーシャで引き受ける」

「りょ～～かい～～」

「了解です」

「了解しました」

「り、了解です。シュタイナー隊長」

「よし！なら行け！5分後には合流する」

ガルシアとアンディのザク?がブーストジャンプして、後退を開始する。

「バーニィ遅れるな！行け！」

「は、はい！」

バーニィが遅れて二人を追いかけて行った。

「やれやれ。酒が切れちまった。さっさと倒して、帰えって一杯やりませんか?」

「そうだな。たまには一緒に飲むか」

近づいてくるＢＥＴＡ群を相手にしながら、そんな会話をする。し

かし、手を動かすのは止めない。シュツムル・ファウストを要塞級に放つ。

ドカーーーン

直撃を受けた要塞級の体が吹き飛ぶ。肉片が辺りに飛び散り血しぶきを上げて倒れる。無数の小型種が下敷きになるが、一向に減る気配がない。

「くらいな！」

ミーシャのザク？から、ハンドグレネードを投げる。バババンと爆発して小型種を吹き飛ばすも、数が減る気配がない。

「ミーシャ時間だ！撤退するぞ」

「了解ですよ」

ブーストジャンプして、その場から飛び立ち戦場を脱出した。

シュタイナーｓｉｄｅｏｕｔ

第二十五話（後書き）

なかなか上手く戦闘描写が書けない。感想待ってます。本文を一部修正しました。

第二十六話（前書き）

京都防衛戦がこれで終りです。本文をどうぞ。

第二十六話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年８月１５日
京都、ビッグトレーバターン号

「以上で報告を終わります」

「ご苦労だ、イルマ中尉」

俺は今、イルマ中尉から報告を受けていた。
既にギニアス大佐は、東北地方で難民達の仮設住宅等の受け入れ等の、任務に当たっている。
俺が現在京都に残って居るのは、斯衛第二連隊と共に殿部隊として京都を守っているからだ。
やはり正史通り、７月１４日から、帝都防衛第一師団、斯衛第二連隊と俺が率いる第四師団が防衛戦に参戦する。帝国軍はメビウスのおかげで、民間人の誤爆の可能性が無くなったことから、今まで投入を躊躇していた、艦砲射撃、軌道爆撃などの支援を受けて総反撃を開始する。一時は、大阪まで進行したＢＥＴＡ群を、押し戻す程の戦果をあげる。
しかし、７月末に九州方面部隊が、弾薬が底をついたため戦闘続行不能になり、メビウスの第一師団と共に沖縄に脱出することとなる。この時帝国軍は、貴重な人材を多く逃がせることとなり、結果として大規模な戦力低下を免れた。

尚、第一師団は沖縄に帝国軍部隊を避難させた後、日本帝国から撤退して、太平洋上で先に撤退していた潜水艦艦隊と合流後、秘密基地に帰投した。被害は一切なかった。　総反撃が開始された頃、帝国政府とアメリカ政府の間で、防衛線を巡る話し合いがあったらしいが、結局どちらの国も折り合いがつかず、決裂に終わったらしい。

（まあ、京都は単なる首都だけではないからな。皇帝や五摂家など、日本の象徴の方々いる神聖な場所たがら、帝国政府も本気で守もろうとしたのだからな。まあ、アメリカからすれば、防衛に向かない土地で戦って、極東の島国で兵を死なせる方が、無駄だって言いたいんだろうがな）

ひと悶着あったおかげで、両政府の関係が悪化したのは、間違いなかった。

８月１０日には、すでに東京に退去を完了していた、帝国政府が先の会談でアメリカ政府からの意見を採用して、琵琶湖運河ライン以東に帝国軍の撤退を命令した。これに先立ち、帝国政府は在日米軍、国連軍に京都破棄と東京への正式な遷都を通達した。

この通達を受けた在日米軍や国連軍も、琵琶湖運河ライン以東に撤退を開始した。

「やはり、皇帝や五摂家はやはり京都を離れるのを、拒んだか」

「はい。最初は、京都で散華するつもりのようでしたが、半日以上の話し合いの末に、京都破棄及び皇帝と五摂家の京都撤退に同意したようです」

「その話し合いの時間稼ぎの為に、撤退戦の貴重な時間が失われたかを、考えて欲しいものだ」

「はい。十数時間の時間があれば、今頃京都は灰塵になっていたでしょう。一部の政治家などからは、政治的なパフォーマンスと揶揄されています」

確かに、政治的なパフォーマンスと受け止められても仕方がないな。しかし、民草からしてみれば、日本の象徴である皇帝等がいなくなれば、それこそ帝国の再興は不可能になるな。
それくらい大切なんだよな国の象徴ってやつわ。

「まあその話は置いといて、殿に参加するうちのビッグトレーは二隻だけだな？」

「はい。ビッグトレー2隻に、ＭＳ2個大隊だけです。第二師団と第三師団は、民間人を輸送完了後　日本から撤退して、秘密基地に帰投しました。第四師団は、ビッグトレー２５０隻の内、日本に３０隻を残し撤退しました。此処にある2隻以外は、ギニアス大佐と共に東北地方で、避難させた民間人達の為に炊き出し等の活動を、行っております」

報告書を読み上げるイルマ中尉。現状では、俺も出撃した方が良さそうだ。俺は、椅子から立ち上がり斜め前の席に座って指揮をとっている、副長の元に移動する。

「少佐」

「はい？どうかしましたか？」

少佐が此方を見る。金色の瞳が綺麗で、尚且つ銀髪ツインテールで可愛い美少女だ。

「俺は出撃する。後の指揮を頼んだぞ」

「分かりました。無理はしないように」

「分かってるよ」

少佐の頭の上に手を置いて、撫でる。髪の毛がスベスベしてて、触り心地が凄く気持ちいい。

「・・・・／／／／か、閣下。嬉しいのですが、戦闘中ですので／／／／」

「そうだったな。では、出撃する。後を頼んだぞ」

少佐から手を離し、ドアまで移動する。

「イルマ中尉」

「（羨ましいな～）は！はい！」

「管制、頼むぞ」

ニッコリと微笑んでイルマ中尉に、管制を頼む。イルマ中尉の管制能力はピアティフ中尉程ではないが、充分な管制の能力を持っているから、俺の専属オペレーターになってもらっている。

「・・・は！はい！お任せください／／／／」

（その微笑みが、カッコ良すぎですわ／／／／）

「じゃあ行ってくる」

敬礼してドアをくぐり、艦内通路を走って格納庫に向かう。ノーマルスーツに着替えずに、格納庫に着いた。
急いで自分の機体に乗り込み、機体の電源を入れる。

カチカチ、カチカチ

ブォォォォと音がして、機体の電源が入りコックピットが閉まり、全周囲モニターが映しだされる。丁度、ＭＳが出撃して行く所だった。

「ジョニー・ライデン、出るぞ！」

真紅のザク？Ｒ－２型がカタパルトから射出されて出撃していった。
待っていた、次のザクもカタパルトに移動した。

「白狼のシン・マツナガ、出撃する」

真っ白で肩のシールドに白狼のマークを入れた、ザク？Ｒ－１型が出撃していった。

モニターに、イルマ中尉の顔が映る。

「不動准将。現在の状況をお伝えします。斯衛第二連隊の部隊が、京都手前地点で防衛線を引いて、応戦を続けていますが余り長く持ちそうにありません。急ぎ救援に向かってください」

「了解した」

グフカスタムをカタパルトに乗せる。

「ご武運を」

イルマ中尉の顔が消える。何時でも出撃出来る状態になった。

「不動悠斗。グフカスタム、ヴァイス・ローゼ出撃する！」

カタパルトから一気に射出された。ブーストジャンプとブーストダッシュを行い、戦闘地域に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

真那ｓｉｄｅ

「でりゃゃゃゃぁぁ！」

近付いてきた、要撃級を７４式近接戦闘長刀で、真っ二つにする。どのくらいのＢＥＴＡを殺したか分からない位周りは、血の池になっていた。私の乗る瑞鶴は、機体の色が赤いので分からないが、恐らくかなり真っ赤になっているだろう。また、ＢＥＴＡが近付いてくる。

ババババ

左手に持った、87式突撃砲で要撃級を蜂の巣にする。全くキリがない。

「月詠中尉！無事ですか？」

通信回線から、男の顔が映しだされる。白の瑞鶴の衛士だ。

「大丈夫だ。そちらは、どうだ？」

「此方はなんとか防いでいますが、陽動部隊の不動少佐の部隊が、かなり劣勢になってます」

京の都にＢＥＴＡを侵入させないために、不動少佐が陽動を引き受けてくれたおかげで、此方にくるＢＥＴＡの数は少なくなっだが、陽動部隊は絶望的な状態で戦闘を続行している。

「誰か援軍に行けないか？」

「無理です、月詠中尉。現状でやっとの状況なんですよ。友軍部隊が完全撤退するまで防衛しなければなりませんから、救援は不可能です」

部下の意見は最もだ。しかし、同じ斯衛としてなんとか助けに行きたい。仲間を見捨てることは、出来ないからな。

「月詠中尉、聞こえるか？」

画面に男性が映しだされた。青い髪の毛で、キリッとした目が特徴の方だ。私が仕える、御剣冥夜様と同じ色だ。煌武院家の血が流れ

るお方である。色こそ山吹であるが、由緒正しい家柄である。また、家は軍の名門であるので軍事に置いては絶大な信用があるお家柄の方だ。現在は、陽動部隊を率いてＢＥＴＡを誘き寄せて、奮戦されている最中だ。

「不動冬馬少佐。ご無事で何よりです」

「無事か。私を残して部下は皆死んでしまった。私の機体も、長刀が折れ突撃砲の弾も尽きかけている。こうなった以上、私はＢＥＴＡを巻き込んで自決する！一体でも多く道連れにしてくれる！」

決意の宿った瞳で私を見る不動冬馬少佐。有無を言わさぬ眼光の力が宿っていた。

「分かりました。恐らく説得しても意志は変わらなそうですね」

「すまないな月詠中尉。これは、私なりのケジメだ。部隊長である私がのうのうと生き残っては、死んでいった部下達に、会わせる顔が無くなってしまうからな」

「分かりました。後はお任せください。我々が必ずＢＥＴＡを、この日本から追い出してみせます」

「ああ。すまぬが日本を頼んだぞ！我が魂！日本の礎になろう！必ずや、若人達が我等の仇を取ってくれると信じて！」

ドッッッカァァァーーーーーーーーーーン

通信回線が切れ、南の方角で大きな爆発が起こる。不動冬馬少佐が、

ＳＩ１１でＢＥＴＡを巻き込んで自決なされたのだ。

「月詠中尉！この爆発の方角は、陽動部隊が戦闘を行っている方角です！」

「見れる者は、見ておけ！不動冬馬少佐の武人としての生きざまだ！」

今は戦闘中だ。私は、思考を切り替え直ぐに戦闘に集中する。

（悲しむのは、後ですればよい。
今は生き残る事を、考えねばならん！）

８７式突撃砲を連射して、要撃級を射殺する。
先程の不動少佐の自決で、かなりの数のＢＥＴＡが巻き込まれたようだ。此方に向かってくるＢＥＴＡの数が少なくなってきた。

「月詠中尉！ＢＥＴＡの数が減少してきました。これなら行けますよ！」

「お前達、不動少佐の死を無駄にするな！一気にＢＥＴＡを殲滅するぞ！」

「了解」×７

部下を激励して、周りを確認する。他の部下達は、問題なく戦闘を続行していた。

「月詠中尉！左です」

「え？」

何時の間にか、要撃級の接近を許していた。迎撃するために、長刀を構えようとするも、要撃級の前腕衝角が目の前に迫っていた。

「クッ！間に合わん！南無三！」

まさに当たるその瞬間だった。突如として、要撃級の体から赤い血しぶきが上がった。

「大丈夫か？真那？」

八年前に聞いてから、久しく聞いていない懐かしい男の声が聞こえた。

「ああ。大丈夫だ悠斗」

純白の機体が、私の横に着陸する。盾に薔薇の花束をリボンで包んだ、エンブレムが目に入る。

国連軍外郭独立機動戦隊所属、不動悠斗准将だ。私の婚約者であり、一番会いたかった人だった。

真那ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

ビッグトレーから出撃後、南の方角で爆発が起きた。

「Ｓ－１１による自爆か！間に合ってくれよ！」

恐らく、誘導を行っていた部隊が自爆したのだろう。原作通りだと京都防衛戦では、斯衛第二連隊の生き残りは、８機だけだったはず。月詠真那中尉も参戦していたはずだから、生き延びてもらわなければならない。

ブーストを吹かして、京都の街並みを通り越すと、前方に戦っている部隊が見えた。１機の赤い瑞鶴が要撃級の攻撃に当たりそうになっていたため、ガトリングシールドを構えて発射した。

ダンダンダンダンダン

発射された弾丸は、要撃級に命中して絶命させた。上空から、赤い瑞鶴に通信を繋げる。恐らく月詠真那中尉だろう。

「大丈夫か？真那？」

「ああ。大丈夫だ悠斗」通信画面に、月詠真那中尉の顔が映しだされる。エクストラと同じく、髪をお団子にしている。あくまで、戦術機に乗るときだけお団子にするのであって、普段はおろしているのである。まあ、どちらも似合う人だから、問題無いんですけどね。機体を月詠中尉の隣に着陸させる。

「久しぶりだな、真那」

「ああ！八年ぶりだぞ！どうして日本に来たとき、会いに来てくれなかった！！真耶から聞いたぞ、私や冥夜様を除く他の方とは会ったと！ましてや、篁唯依とは逢い引きしていたとな！」

いきないり、大量の質問が飛んできた。

ガトリングシールドで、ＢＥＴＡを射殺しながら答える。

「日本に来たとき会いに行きたかったが、真那の仕事の邪魔をしたくなかったから、行かなかったのさ。あと、唯依ちゃんとは、逢い引きなんてしてないぞ？唯依ちゃんの両親の墓参りに、行っただけだ」

「嘘を申せ！じゃあ、なぜ和菓子屋で二人で茶をしていた！」

７４式近接戦闘長刀で、要撃級を真っ二つにしつつ、文句を言ってくる月詠中尉。だがいに背中を合わせながら、戦闘を続ける。

「あの時は、帰る迄に時間が余ったから、和菓子を食べに行く事になったから、食べに行っただけだ」

「フン！口では調子の良いことを言っても、どうせ私を除け者にするのだろう？」

やたらと突っかかる月詠中尉。何でこんなに突っかかるんだ？

「真那、どうしてそんなに突っかかるんだ？」

「フン！貴様の胸に聞いてみろ！」

ヒートサーベルで要撃級を切り裂き、頭部バルカン砲で戦車級を蜂の巣にする。月詠中尉は、１２０?滑空砲で要撃級を、吹っ飛ばした。

「ウ～ン、分からんな。真那機嫌を直せよ。俺に出来ることならなんかしてやるからさ」

「！！本当か?！」

「ああ。本当だ！ただし、俺に出来ることの範囲だからな」

「その約束忘れるなよ！」

「おう！」

ニッコリりと笑って、返答をする。

「／／／約束したからな！忘れるなよ／／／」

「大丈夫だ。約束は守るからな」

そんな会話をしながが、ＢＥＴＡを倒していると、通信が入った。

「不動准将、京都に火の手が上がりました」

「なに?！」

イルマ中尉からの、報告を受けて京都の方を見ると、街全体に火の手が廻っていた。

「遂に、火の手が上がったか。京都の美しい街並みが焼けていく」

月詠中尉の言葉に、周りからも「我々は護れなかった」「くそ！我等の故郷が！」など、様々な声が上がる。

「不動准将。友軍部隊の撤退が完了しました。戦闘地域から脱出してください。繰り返します」

イルマ中尉から、撤退するように求められる。

「全員聞け。友軍部隊の退却が完了した。我々も京都を脱出する」

「クッ！了解しました」

「了解」×7

斯衛軍の衛士達は、しぶしぶながら従ってくれた。ブーストジャンプして、上空に上がり京都の街並みが見える山の上で止まる。ついてきた斯衛軍の衛士達も近くに着陸した。

「不動准将？どうなされた？」

月詠中尉の瑞鶴が、隣に着陸する。

「見ろ。京の都が燃えてゆく様子を」

「ええ。美しかった京都の街並みが、燃えていきます」

既に火の手がかなり上がっている。帝都城にも火の手が回っているのか、大きな火柱を上げて城が燃えている。

誰も喋らずに、京都が燃えていく様子をただ見つめることしかできなかった。
ここに、1，２００年の歴史を持つ世界有数の古都は、炎に包まれその歴史に幕を下ろした。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十六話（後書き）

花粉症て、厄介ですね。作者は花粉症で鼻水が止まりません。皆様も、気をつけてください。

第二十七話（前書き）

やっと出来た。今回は少し強引なやり方をしてしまったような気がする。では、本文をどうぞ。

第二十七話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年１０月１０日　宮城県仙台市

俺はとある場所に向かって車を運転している。この世界において最も重要な人物に会うためだ。

「不動准将。一体何処に向かっているのですか？」

助手席に座っている、イルマ中尉が話かけてくる。ちなみに、後部座席にはシーマ中佐が座っている。

なに？普通運転手は、階級の低い奴が運転するだって？気にしないでくれ。ただ運転したかっただけだから。

「第四計画の司令部が横浜から、此方に移動した。その最高責任者に会いに行くのさ」

「横浜から？ああ。佐渡島にハイブが建設されたから、避難してきているのかい」

シーマ中佐の言った通り、佐渡島にハイブが建設された。

８月に京都防衛戦が繰り広げられ、京都を蹂躙したＢＥＴＡ群の進行は止まらず、北陸地方を蹂躙して日本海に進み佐渡島に再上陸を行った。

そして、佐渡島にＨ２１（甲２１号目標）が建設されてしまった。

この影響で、近畿と東海地方に避難命令が発令され、２５００万人が避難を余儀なくされた。
正史であれば、日本の人口の３０％にあたる３６００万人が亡くっている。しかし、俺の介入のおかげで、西日本側の死者は軍人を除く民間人だけの場合、被害は０と言う輝かしい事になった。
現在は、佐渡島ハイブが建設されたこともあり、ＢＥＴＡの進軍は長野県付近で停滞している。
「その最高責任者のお名前わ？」

「香月夕呼博士さ」

「香月夕呼博士？」

イルマ中尉やシーマ中佐が首を傾げる。まあ、余り認知されているはずがないからな。あくまで知っているのは、第四計画や第五計画に関わっている人間や、一部の政治家や軍人または企業の人間くらいだろうか。まあ、斯衛軍の一部や政威大将軍は、知っているだろうけどな。

「そうだな、一言で言うなら『天才』さ」

「天才ですか？」

そう。彼女は天才だ。最後の最後まで諦めずに世界を救う為に、己れの手を汚し、策略を練り、巧みな話術で相手を翻弄して、たった１人戦い続け抗い続けた女傑だ。２００１年１０月の段階では、追い詰められていた香月夕呼博士だが、まだ１９９８年の段階なら、追い詰められていないから今のうちに、接触しておく必要がある。

「１９９１年当時、若干１７歳の若さで、帝都大学応用量子物理研

究室に編入した、物理学の天才なのさ」

「なぜそんな学者さんに、会いに行く必要があるんですか？」

「現在香月博士が進めている、次世代並列処理回路に興味があるのさ」

「「はあ？」」

イルマ中尉やシーマ中佐が首を傾げる。まあ、技術者じゃなければ、興味が無いだろうな。

それに、香月博士の元には第三計画の遺児トリースタ・シェスチナ。いや、社霞が居る。香月博士は彼女のリーディング能力を使い、交渉や話し合いを有利に進めるのがやり方だ。しかし、リーディングには弱点もある。読み取りたい相手が、高速で不要な事を考えていれば、心理層の深い部分は分からないのである。

（様は、リーディングされても分からない様にしていれば、問題無いって事だな）

何時のまにか二人は、俺が物思いに耽っている内に、二人で仲良く話をしていた。

交差点の信号が赤になり止まる。俺は、二人の邪魔をしないように小さく歌を歌う。

信号が青に変わり、アクセルを踏み車を発信させる。

のんびり歌いながら、目的地を目指す。車を運転していると、やはり歌を歌いたくなってしまう。

「綺麗な歌声／／／」

「ああ。全くだ／／／」

この時俺は、気づいていなかった。二人が実は話すのを止めて、俺の歌を聴いていたことを。

普通に運転しながら、ノリノリになってきた俺は、知らず知らず声のボリュームが上がっていた。そのまま、歌いながら目的地に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

私は仙台のとある研究室に居ます。香月博士から今日来るお客さんの説明を受けました。彼の名前は、不動悠斗。　国連外郭独立機動戦隊メビウス総司令であり、今回のリーディングの対象です。博士のお話では、彼とコネクションか協力関係を築けるかで、今後の計画に影響が出るらしいです。渡された写真を見てみると、青い髪の毛が特徴の人でした。

「何、社？彼に興味あるの？」

「・・・分かりません」

香月博士に尋ねられましたが、私は彼に興味があるのでしょうか？生まれてから、何かに興味を持ったことは余りありません。

「・・・ただ」

「ただ？どうしたの？」

「会ってみたいです」

「珍しいわね。社がそんな事を、言うなんて！」

驚いた表情をする香月博士。普段他の事に興味を示さない私が、こんなことを言ったからでしょうか？

「まあ、今回はお互い顔合わせ的な要素が強いから、無理に交渉するつもりは無いから、最初から一緒に居ても構わないわ」

「分かりました」

「まあ、もう少ししたら来るからゆっくり待ちましょう」

それだけ言って香月博士は、研究資料に視線を戻しました。

私も、椅子に座りパソコンを操作することにしました。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

歌を歌いながら目的地にたどり着きました。
駐車場に車を停めて外に出ると、金髪の女性が出迎えに来ていた。

「不動悠斗准将ですね」

「そうだが、君は？」

「香月博士の秘書官をしている、イリーナ・ピアティフ臨時中尉です。お迎えに参りました」

敬礼をするピアティフ中尉。

「そうか。出迎えご苦労。案内をよろしく頼む」

笑顔で敬礼する。

（なんて素敵な笑顔／／／）

何やらピアティフ中尉の顔が赤くなったような気がする。

「ピアティフ中尉、どうかしたか？」

「い、いえ！大丈夫です！では、案内をさせていただきます。ついてきてください／／／」

ピアティフ中尉の後ろ追うように歩く。後ろでイルマ中尉とシーマ中佐が「「あれは、堕ちたね」」と言っていたが、俺には聞こえなかった。

暫く敷地内を歩くと、研究所にたどり着いた。ピアティフ中尉が、ＩＤカードを端末に通し、ドアが開く。そのまま中に入り廊下を歩く。この間誰も喋らずに歩いている。

（ウ～ン。気まずい雰囲気は苦手だな）

（もう少しで、応接室に着く。もう少し不動准将と話がしてみたいけど、話せるような雰囲気ではないわね）

（ピアティフ中尉も、不動准将を狙うようになるわね。ライバルがいくら増えても、悠斗の恋人は私がなるんだから）

（かたっくるしい雰囲気の建物だね。イルマは、ピアティフをライバルに入れたようだし、ますます悠斗が狙い難くなるね。まあ、最後に笑うのは、このシーマ様なんだからね。小娘ごときに、悠斗は渡すつもりはないからね）

色々な事を考えて歩いていると、ピアティフ中尉がドアの前で止まる。

「こちらです。中にどうぞ」

ピアティフ中尉がドアを開け、中に入る。

後に続いて中に入ると、紫色の髪の毛で凄い髪形をしている、白衣を纏う美女と、銀髪のウサ耳を着けた美少女がいた。

「初めまして香月夕呼博士。私は、国連外郭独立機動戦隊メビウス所属不動悠斗准将と申します。本日は忙しい中、お時間を取らせてしまいまして申し訳ありません」

自己紹介をして、右手をスッと差し出す。

「ええ、初めまして不動准将。貴方の噂はよく耳にしますよ」

香月博士も右手を差し出し、握手を交わす。今回はお互い顔合わせ的な要素が強い。だから交渉事になる可能性は低いだろう。

「そちらのお嬢さんは？」

「私の部下です。社、挨拶しなさい」

「社霞少尉です」

ぺこりと頭とウサ耳を下げる。生で見ると、凄く不思議に感じるな。

「よろしく社少尉」

俺も頭を下げる。

「不動准将。そちらのお二人は一体誰ですか？」

香月博士が、イルマ中尉とシーマ中佐を見る。

「こちらの二人は部下です。二人とも挨拶してくれ」

イルマ中尉とシーマ中佐に挨拶を促す。一歩前に出て、自己紹介を始めた。

「私はメビウス所属シーマ・ガラハウ中佐だ。普段は、パイロットだが不動准将の護衛も兼ねている」

「イルマ・テスレフ中尉です。不動准将の秘書官兼オペレーターを、担当しています」

二人は敬礼して、後ろに下がる。

「それで、本日はどう行ったご用件でしょうか？生憎此方も引っ越して間もないので、忙しいのですが？」

「いや、挨拶に来ただけだが？」

「「え？」」

香月博士とピアティフ中尉が驚いた表情になる。まあ普通、挨拶の為だけにアポイントを取る人はいないよな。

「本当に挨拶に来ただけなの？」

「ええ」

社少尉を見て確認をする香月博士。しかし、社少尉が縦に首を振るかと思っていたら、横に振りました。なんでだ？

「香月博士。不動准将は読めません」

「え?!社、本当なの?」

「はい。嘘ではありません」

二人にしか聞こえない、小さな声で会話する社少尉と香月博士。
それが聞こえた俺は俺で、訳が分からなかった。

(あれ?社霞って、ＥＳＰ能力は生まれた世代の中でも、トップの筈なのに俺の思考が読めないって、どう言う事だ?)

自分の能力を思い出してみるが、リーディング防止能力なんて頼んだ覚えがなかった。

「すいません不動准将。出来れば、貴方を含めた三人で話がしたいのですが、よろしいですか?」

「ええ。構いませんよ」

香月博士から急に、三人での話し合いを提案されたが、特に問題があるわけでも無いので、提案を受けた。

「ピアティフ。二人を別室に案内してちょうだい」

「かしこまりました。二人とも此方にどうぞ」

ピアティフ中尉がドアを開けて外に出る。シーマ中佐が俺を見たので、頷ずく。それを確認すると、二人とも部屋を出ていった。

「それで、話とは一体何ですか？」

「不動准将、貴方は社の事を何処まで知っているの？」

「彼女の本名ですか、トリースタ・シェスチナでしたね。第三計画の生き残りでしたね。それが何か？」

何やら苦虫を食ったような表情で、俺を見る香月博士。いやおかしいな、敵対するつもりは無いんだけどな。

「そう。なら、貴方は社のリーディング能力を知っていたのね。それで、今日来た本当の目的は何？挨拶に来たなんて冗談は、１回だけで充分よ」

本気で、俺を睨み付けてくる香月博士。あれ？あれ？なんか、どんどん印象が悪くなってる気がするんですけど。

「本当に、挨拶に来ただけなんですが」

極めて落ち着いた表情で、返事をする。
しかし、次の瞬間俺は銃を突き付けられていた。なんでさ。

「いい加減にしなさい。冗談は嫌いなの」

銃口を俺に突き付ける。　しかし、全く怖くなかった。今の俺なら、銃弾処か、光線級のレーザーを受けても無傷で居られる程強くなっているから、問題なかった。ましてや、ロックが掛かっている銃など、玩具に等しかった。

「まあ、強いて言うなら俺の目的は達成されたからな」

「どう言うこと？」

「俺と香月博士が接触したことで、第五計画の連中に牽制になれば良いからな」

実際、俺は中立を維持しているが第五計画、特にG弾を使う事に反対だからな。別に今回の訪問は挨拶が主目的なだけで、俺と香月博士が接触したことで、何らかの取引が有ったと勘ぐる連中がいるだろう。特に俺の正で、軍事産業が冷え込んでいる大国がな。

俺の答えを聞いて、安堵する香月博士。

銃を下ろし片付けた。

「そう、申し訳ないわね、わざわざ気を使ってもらって。ある情報筋から、私の命を狙っている奴がいるから、気をつけろって言われてね。もしかしたら、不動准将が狙っているのかと思ったから今みたいなことを、してみたのよ」

「なら、社少尉は別室居てもらい、リーディングの対象を見てもらって、無線で返事をもらうようにした方が良いだろう」

原作の白銀にしたようにな。そっちの方が手っ取り早いし、安全だからな。

「本来ならそうするわ。今回は引っ越して間もないから、部屋が足りなかったから一緒に居るの。それに不動准将ならまず、私と敵対する理由がないですからね」

椅子に座り脚を組む香月博士。かなりフレンドリーに接してくる。

「まあ、良いさ。用事は住んだから、失礼させてもらおうかな」

「あら？随分お早いお帰りで？もう少しゆっくりされていってわ？」

「なーに、艦に戻れば書類の山と戦わなくてはいけないのでね。早めに戻りたいのですよ」

まあ、嘘だけどな。もうすぐアメリカ政府が日米同盟を一方的に破棄するからな。その後の対策を練る時間が欲しいだけなのさ。そんなやり取りをしていると、突然ドアが開いて、ピアティフ中尉が駆け込んできた。

「大変です！アメリカ政府が日米同盟を一方的に破棄しました！理由は、帝国軍の度重なる命令不服従だそうです」

部屋の中の空気が一気に張りつめる。先程までの、楽しげな空気は吹き飛び、戦場のような雰囲気に変わった。更に、イルマ中尉も飛び込んできた。

「ホシノ少佐より緊急入電です！ＢＥＴＡ群が、東進を再開しました！」

「な、なんですって！！」

「イルマ中尉、本当か？」

香月博士が大声を上げる。アメリカ軍が撤退した挙げ句にＢＥＴＡ群も東進を再開したとなると、防衛ラインを構築している、帝国軍の戦力では防ぎきれない恐れが出てきた。

「はい。先程、長野県付近で停滞していたＢＥＴＡの活動が再び活発化して、東進を再開しました！」

「急いでビッグトレーに戻るぞ！車を出せ！」

「シーマ中佐が既に待っています」

「分かった。すぐに行く。すまない香月博士。ＢＥＴＡが進行を再開した為、指揮を取りに戻る。今回はこのような事態でろくに話もできなかったが、次回会える様ならゆっくり話しをしましょう」

香月博士に向かい合う。

「状況は分かりました。今回はこれ迄にしましょう」

「すまない。失礼させてもらう」

一礼して、イルマ中尉と共に部屋を後にするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

香月ｓｉｄｅ

不動准将が部屋を去るのを見送り、話を始める。

「それで、ピアティフ現状はどうなっているの？」

自身の有能な秘書に尋ねる。彼女は、非常に有能だ。冷静な判断力に、卓越した事務能力。私にとっても大事な部下だ。

「はい。先程入手した情報では、佐渡島ハイブ建設で停滞していた、進行が再び再開しまし。帝国本土防衛軍は各所で必死に防衛に当たるも、ＢＥＴＡの進行を止められないでいます。また、在日米軍が撤退したことによる兵力不足も一因になり、防衛ラインの死守に限りが見えています。おそらく、埼玉県辺りまで防衛ラインが下がるでしょう。また、今回の米軍の撤退で、日本国内では反米感情が一気に高まるでしょう」

「そう。分かったわ。引き続き情報収集に当たってちょうだい」

「かしこまりました」

敬礼して部屋を出ていった。社と二人きりになる。沈黙が部屋を支配する。

（様は、アメリカが自分達の衛士を無駄死にさせたくないから撤退したら、ＢＥＴＡが進行してきた。いくら何でもタイミングが良すぎるわね。けど、ＢＥＴＡが人間の考えが分かるはずがないから、偶然か。ともかく、何か手を打たないと帝国が滅亡する可能性が高くなるわ。不動准将が動くとは言え、此方も手を打てるようにしないと）

私は立ち上がりドアに手を開けて部屋を出て、研究室に向かうのだった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

社ｓｉｄｅ

私は今日会った不動准将の事を、考えています。香月博士に言われてあの人をリーディングしてみたら、全く読めませんでした。私のリーディング能力は、人の感情を色で表して、読み取る事ができます。初めて香月博士に会った時には、複雑に色が混じりあい読み取る事ができませんでした。しかし、あの人からは色すら感じ取れませんでした。

「不思議な人でした」

何の色すら感じられないあの人が、また会いに来てくれるそうです。私の能力を知りながら普通に接したあの人が、不思議で仕方ありません。

今度来たときは、私の能力が怖くないか聞いて見たいと思います。もしかしたらあの人もまた、私と同じような人なのでしょうか？

そんなことを考えながら香月博士と共に、研究室に足を進めるのでした。

社ｓｉｄｅｏｕｔ

神様ｓｉｄｅ

「やはり、内緒でリーディングフルブロック付けといてよかった！不思議系少女社霞ちゃんが、困った表情が堪らない！いやー、良かったわ」

今日もヴァルハラで、悠斗の活躍を見ているゼウスじゃ！今日悠斗を覗いていたら、不思議系ウサ耳少女と会ってはおった。

「いやー、可愛かったのう。将来美人になるぞー。そしたら、口説きにいこう！」

「へえー。口説きに行くんだ？」

「誰じゃ！」

後ろを振り向くと、釘バットを持った我妻ヘラがいた。

「ちょ、ま、待つんじゃヘラ！今のは」

「問答無用です！少しは反省しなさい！！」

「アーーーーーー！」

ワシは、意識を失った。

神様ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十七話（後書き）

毎日花粉が飛散して、鼻水が止まりません。花粉症は辛いです。

第二十八話（前書き）

今回はちょっとグロいかもしれません。では、本文をどうぞ、

第二十八話

悠斗ｓｉｄｅ

香月博士との会談を急遽切り上げた俺は、会議室を出てシーマ中佐が出口の前に止めた車に乗り込み、急いでビッグトレーに戻った。ビッグトレーに着いた俺達は、ブリッジに駆け込んだ。

「すまない。遅くなった」

ブリッジ内に入ると、マスターアジア師匠が居られた。

「おお！悠斗か。遅かったでは、ないか」

「申し訳ありません。これでも急いで来たのですが。それより、状況は？」

師匠に謝るのもそこそこに、状況を知りたいのですぐに尋ねた。

「ワシに聞くより、中央モニターを見よ」

「こ、これは！！かなり大変な状況だな」

モニター画面に映し出される映像の数々。各所の防衛ラインがＢＥＴＡにより、突破されているのが分かる。帝国軍も奮戦しているが、やはり米軍が撤退したことによる、兵力不足の影響は大きい様だ。まあ、反米感情が高まるのは構わないがな。逆に俺達メビウスの支

持派が増えるからありがたいことだ。

「ホシノ少佐！状況報告を頼む」

指揮を取っているホシノ少佐の隣まで歩いて行く。

「不動准将。現状は最悪な状況です。東海地方から進行を再開したＢＥＴＡ群と、長野県付近で停滞していたＢＥＴＡ群が進行を再開。既に西関東を制圧しつつ、前進を続けています。「緊急入電！」何事ですか！」

女性オペレーターから、緊急入電を伝える声が上がる。不測の事態が発生したようだ？」

「ＢＥＴＡ群が帝都を目前に控えて、謎の転進を行いました！」

「なに？ＢＥＴＡ群は、何処に行った！」

「伊豆半島を南下しています！」

女性オペレーターからの入電は、ＢＥＴＡ群が転進をしたことを伝えた。つまり、正史道理に行けば此処でＢＥＴＡの進行が一時的に停滞する事になる。そして、横浜ハイブ建設に繋がる訳だ。

「悠斗よ、どうする？」

「急ぎ救援に向かいましょう。今は少しでも戦力がある方が、帝国軍にはありがたいでしょう」

まあ、戦力を投入するにしても、我々の戦力は限られているからど

うしょうもない。事実、今動かせる戦力は俺のバターン号ともう一隻しかない。他のビッグトレーは、東北地方の防衛に参加するし、避難民の炊き出しなんかに出ていて緊急出動（スクランブル）に反応出来ない艦があるからだ。

「ホシノ少佐。現状で動かせる戦力は、ビッグトレー二隻にＭＳ二個大隊だけか？」

「はい。我々メビウスの部隊で、東北地方から割ける戦力はそれくらいが限度です。それに、大軍で動くと速度が落ちますから、少数精鋭で行くしかありません」

ホシノ少佐にも確認を取る。やはり広域に部隊を展開させたのが、痛かったようだ。まさに、メビウスに兵無し状態だ。
そんな会話をしていると、オペレーター達が慌ただしくなった。

「うん？何事ですか？」

「伊豆半島に南下していた、ＢＥＴＡ群の活躍が停滞しました！」

「何？どう言う事だ？」

「分かりません。しかし、ＢＥＴＡ群の進行が停滞したのは、事実です」

やはり、正史道理になったか。ならは、近い内にＢＥＴＡ群の分隊が横浜を制圧するだろう。しかし、此処で黙って動かないのは、俺らしくない。白銀武と鏡純夏は助ける事が出来ないが、他の民間人は助けられる。ならば、一刻も早く民間人を助けに行かなければ、ならないな。

「ホシノ少佐。バターン号ともう一隻が全速力で進軍したら、横浜までどのくらいの時間がかかる？」

「そうですね。現在通常速度で移動していますが、その速度で移動して千葉県と東京都の県境付近ですので、全速力で進軍すれば、１０分以内に着きます」

ホシノ少佐の意見を元に、量腕を組んで考える。部隊の進軍速度は、常識を無視するほどの早さで進軍している。普通の軍隊では、まず不可能な早さだ。寧ろ、仙台から横浜迄を僅かな時間で行けるなら、新幹線を遥かに凌駕しているぞ！

しかし、一刻も早く民間人救出に当たりたい。

やはり、グフ・カスタムで出撃した方が早く到着できる事に気がついた！

「ホシノ少佐。グフ・カスタムは出撃可能か？」

「なんだ悠斗よ、一人で先行するつもりか？」「ええ。民間人の避難誘導に当たろうと思いまして」

実際、マッハ１０ぐらい余裕で出せる位改造しているから、そっちで行った方が早いと思ったんだ。

「残念ながら、不動准将の機体は出撃不可能です」

「なんだと？！どうしてだ？！」

「現在改造中の為ですよ。朝、香月博士に会いに行く前に、整備班の方々に改造を頼んでいたじゃないですか。書類も有りますよ」

「そうだった！やってしまった～」

額に手を当てて、ため息をする。朝改造を頼んでいた事を、忘れていた。

「悠斗、やってしまったね」

「不動准将。忘れていたのですね」

シーマ中佐とイルマ中尉に、「ドンマイ（です）」と、肩に手をおかれ優しく叩かれる。正直その優しさが痛いです。

「まあ、悠斗のミスは置いと「た、大変です！」次はなにがあったんだい！？」

シーマ中佐が話をしようとしたタイミングで、オペレーターが声をあげた。

「伊豆半島で進行を停止していた、ＢＥＴＡ群が別れて2分隊になり、離れた分隊が再び帝都に向けて進行を開始しました！」

「「「なんだって！（じゃと）」」」

シーマ中佐、イルマ中尉、マスターアジア師匠が驚く。俺は、声にこそ出さなかったが、内心かなり驚いている。ホシノ少佐は、眉がピクリと動いただけだった。

「落ち着いてください。それで、帝国軍の対応は？」

「は、はい！現在2分隊のＢＥＴＡ群の内、帝都に向けて進行をしているＢＥＴＡ群に対して、帝国軍が応戦しています。しかし、ＢＥＴＡの進行を防ぐ事が出来ないもようです」

「そうですか、仕方ありませんね。ＭＳ部隊を発進させてください。帝国軍が防衛ラインの引き直しができるまで、時間稼ぎをするように」

「あいよ！シーマ海兵隊が、先陣を行かせてもらうよ！」

「よろしくお願いいたします」

シーマ中佐がブリッジを出ていった。

「クソ！俺は、見ているしかできんのか？」

拳を握り、パチンと両手を当てる。自分の機体が出撃出撃できないため、苛立ちを隠せないでいた。

「悠斗よ！何をボサッとしておる！出撃の支度をせんか！」

「し、師匠！出撃したいのは山々ですが、愛機のグフ・カスタムが出撃出来ない以上、俺は出撃できませんから」

「この馬鹿弟子が！」

「ぐは！」

マスターアジア師匠の、右フックが俺の頬に当たり、地面にぶっ飛ばされた。

「真の武道家たるもの、ＭＳが無くとも、己が体で戦えるわ！そんなことすら、忘れたか！」

師匠が拳を握り、俺に渇を入れる。

（そうだった！そんな初歩すら忘れていたなんてな。やはり、師匠を越えるにはまだまだ修行が足りないな）

俺は立ち上がり、師匠と視線を合わせる。本気の殺気を師匠にぶつける。師匠はフッと笑う。

「うむ。漸く目が覚めたようじゃな。ならば、行くぞ悠斗よ」

「はい師匠！行きましょう。ホシノ少佐、後は任せる」

「分かりました。指揮はお任せください」

「不動准将。御武運を」

ホシノ少佐とイルマ中尉が、敬礼する。

「では、行ってくる」

二人に返礼をして、師匠と共にブリッジを出て、上部甲板に出る。

「悠斗よ、準備はよいな？」

「はい師匠！何時でも行けます！」

「ならば、行くぞ！」

「はい！！」

俺と師匠は空を飛び、一路横浜へと向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄ

不動准将が、マスターアジアさんと共に生身で、戦場に向かって行きました。私は、不動准将の代わりに部隊の指揮を取っています。

「ＭＳの発進準備は済みましたか？」

部下のオペレーターに尋ねる。一刻も早く戦場に到達して、不動准将の援護をしなくてはなりません。

「はい。シーマ中佐率い海兵隊は準備完了しています。また、シン・マツナガ少佐、ジョニー・ライデン少佐の部隊も出撃できます」

「分かりました。機関出力最大。全速力で戦場に急行します。目標地点は横浜」

「了解しました！機関出力最大！全速力にて横浜に進行！」

操舵長が復唱して、舵を取り進路を変更する。

「副長大変です！！」

「何事ですか？」

戦場では、刻一刻と情勢が変わります。オペレーターが慌てて報告します。またもや、何かあった様です。

「二つに別れたＢＥＴＡ群の分隊が、横浜で進行を停止しました！どうやらハイブを建設するもようです！」

「・・・・・」

ブリッジの空気が氷ました。まさか、恐れていた事態が発生するとは。

皆がポカーンとしている中、私は直ぐ様脳をフル稼働させる。先ずは、この事態を不動准将にお伝えしなければ！

「イルマ中尉！」

「は、はい！」

行きなり私に呼ばれた事に驚いた様だ。

「不動准将に連絡してください。ＢＥＴＡが横浜にハイブを造るつもりだと」

「は、はい！わかりました！」

私の指示を受けて、イルマ中尉がインカムで不動准将に連絡をする。今のやり取りを見て、ポカーンとしていたブリッジクルー達が元に戻り、自分達の職務に戻った。

「副長！後7程で、戦闘地域に到着します！」

「分かりました。本艦が戦闘地域に到着後、歩兵部隊を投入して民間人の救出に当ててください。ＭＳ部隊は、２分後に出撃させてください」

「了解（しました）」×多数

一路横浜に向かって進軍するのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

現在空を飛んでいます。もう少ししたら横浜に着きます。先程、帝都城（東京）を通り過ぎました。

そしたら、いきなりイルマ中尉から通信が入りました。なんでも、ＢＥＴＡが横浜にハイブを建設してるとのことです。正史道理になりました。イルマ中尉との通信を終えて、師匠に話しかけます。

「師匠。大変な事になりました」

「どうした悠斗よ？」

「はい。ＢＥＴＡが横浜にハイブを建設してるとのことです」

「なんじゃと！」

驚いた表情になる師匠。流石にハイブ建設迄は、予想外だった様だ。

「悠斗よ急ぐぞ！」

「いえ、師匠。もう着きました」

「む！そのようだな！」

ビルの屋上に降りて、街を見ると彼方此方で火の手が上がっている。戦っている戦術機が突撃砲を射っているのか、凄まじい音がする。パニックになりながらも、人々が逃げ出しているのが見える。帝国軍の歩兵部隊が避難誘導に当たっているが、パニックになった民間人が我先にと逃げているため、上手く誘導できていないのが見て分かる。

「悠斗よ行くぞ。よいな？」

「はい！師匠！」

「うむ。ならばついて来い！」

「はい！」

勢い良くビルから飛び降り、地面に着地する。丁度下に居た帝国軍の兵士達が、上から落ちてきた　俺と師匠を見て驚いている。目の前の兵士の階級を見ると曹長の階級が服に付いていた。恐らく部隊長だろう。

「曹長。君が小隊長か？」

「え？は、はい。自分が小隊長ですが、貴方は誰ですか？」

目を丸くした曹長が、質問してくる。周りの部下たちも呆気に取られているようだ。

「メビウス所属、不動悠斗准将だ」

「ふ、不動准将！！け、敬礼！！」

慌てて曹長達が敬礼してくる。

「敬礼は必要ない。それより、状況はどうなっている？」

「は、はい！！現在ＢＥＴＡが進行してきたことで、街は大混乱に陥っています。各所でＢＥＴＡに対して戦闘を行っておりますが、一向に好転する気配がありません。我々歩兵部隊は、民間人の救出作戦に来ていますがＢＥＴＡがすぐそこ迄迫って来ているせいで、逃げ遅れた民間人を救出出来ない状況です」

「他に近隣で、救助活動に従事している部隊はあるか？」

俺の質問に曹長は、首を横に振った。つまり、他の部隊とは連絡が取れない様だ。

「待ってください！三キロ先に、まだ部隊が居ます！」

若い兵士が声を上げ、此方に近付いてくる。

「鈴木二等兵！何処の部隊が居ると言うのだ？」

「歩兵第１３６小隊の連中がまだ、戦闘しています！今ほど、通信が入りました！民間人がまだ沢山いるので、援軍が欲しいとのことです！」

鈴木二等兵の背中を見ると、通信機を背負っていた。成る程、確かに通信兵が言うなら間違いない。

「クソ！白陵基地のＨＱとは、連絡が取れないと言うのに」

地面に落ちていた、空き缶を蹴る曹長。カランカランと空き缶が転がって行った。

「師匠聞きましたか？」

「うむ。聞いたぞ」

「ならば、助けに行きましょう！」

「うむ。行くぞ悠斗よ！」

「曹長。我々が援軍に向かうと、伝えておいてくれ！」

「え？何を言って「じゃあ行ってくる」ちょっと、待ってください？！」

俺と師匠は、風の如く土埃を上げながら、駆け出して援軍に向かった。その際、後ろで曹長が何か叫んでいたが特に気にしなかった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

帝国軍兵士ｓｉｄｅ

ダンダンダンダンダンダンダ

自分が持っている、アサルトライフル（突撃銃）から、大量の銃弾が発射される。兵士級のＢＥＴＡから大量の血が吹き出し、絶命する。

「軍曹！これ以上は持ちません！撤退の判断を！」

「馬鹿野郎！まだ、民間人が残って居るんだぞ！俺達帝国軍人が退けるか！」

既にあちこちから、ＢＥＴＡが出てきている。正直此処を防衛するより、後退して戦力を建て直したいが、民間人がまだ残っているため、後退出来ずにいた。

「ギャアァァァァァ！」

叫び声が聞こえた。聞こえた方を見ると兵士級のＢＥＴＡが民間人を食っていた。

「クソ！射て、射て！」

部下達が一斉に銃を射つ。銃弾が兵士級をミンチに変える。先程、食われていた民間人は、体が半分食われて血まみれになりながら、死んでいた。

「クソ！民間人の避難はまだ終わらねえのか！！」

中年の部下が悪態をつく。正直俺も悪態をつきたいが、隊長である以上規律を守らなければいけない立場なので出来ないがな。

「隊長。そろそろヤバイですよ。逃げる民間人の為に防衛陣地を築くのは良かったんですが、そろそろ弾薬が持ちません」

「後どのくらい有る？」

「突撃銃の弾薬が一人二個分と、機関銃の弾薬が一個。手榴弾が一人三個だけです」

部下から伝えられる情報に頭を痛める。我々が逃げる最中に必要な

弾薬のデッドラインまできていた。つまり、これ以上此処を防衛することは、不可能に近いのだ。だが、今だ民間人が逃げる為に此処を通っている。我々が退けば、此処を通って逃げている民間人の命が更に危険になる。しかし、部下の命も大事だ。せめて、援軍さえ来てくれればよいのだか。

「隊長。どうやら、お客さんのお出ましですよ！」

顔を上げて、前方を見ると、兵士級は勿論闘士級（ウォリアー）の団体が此方に向かって来る。

「クソ！佐藤！民間人に走って逃げるように伝えろ！」

「はい！分かりました！」

部下の一人が、後ろを通って逃げている民間人に、走って逃げるように指示する。

「皆構えな！お客さん達に銃弾をプレゼントしな！」

「了解（です）」×多数

全員が銃を構えて、射てる準備を完了したその時だった。

「「石破、天、驚、拳ェェェェン！！」」

何やら、聞こえたと思ったら光の塊が飛んできて、ＢＥＴＡに当たったかと思ったら、ＢＥＴＡが消滅していた。

「大丈夫か？」

何時の間にか、武道家らしき男と軍服を着た男が居た。

帝国軍兵士ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

師匠と共に逃げてくる民間人と、反対側に向かって進む。空中を走っているが、誰も気に止めなない。ひたすら逃げるだけで精一杯の様だ。

「クッ！酷い有り様ですね」

「そうじゃの。悲惨な状態じゃな」

泣き叫ぶ子供。我が子を抱いて逃げる母親。我先にと人を倒して逃げる男。彼方此方に人に踏まれて死んだ死体や、崩れたビルの壁に押し潰された人の血の跡。所処で火の手が上がっている。まさに、戦場と言った所だ。

「悠斗よ、居たぞ！彼処だ！」

師匠の指を指した方を見ると、大量のＢＥＴＡが此方に向かって来ていた。その前方に銃を構えた人達が居た。
彼等が先程、鈴木二等兵が言っていた部隊だろ。　しかし、彼等だけではあれだけのＢＥＴＡを殺すことはできないだろう。

「悠斗よ構えよ！石破天驚拳を放つぞ！！」

「はい！分かりました師匠！」

丁度彼等が守っている陣地の真ん中に静かに降りる。誰も気づいていない様だ。俺と師匠は構えた。

「「流派！東方不敗派、最終奥義！！」」

「「石破、天、驚、拳ェェェェン！！」」

拳の形をした気弾がＢＥＴＡを飲み込み殺す。
気弾が通った後にはＢＥＴＡの死体すら残らなかった。

「大丈夫か？」

近くにいた軍人に声をかける。男は酷く驚いた表情をしたが、直ぐに元の固い表情に戻った。

「今のはあんた達が？」

「そうだ、軍曹」

「あんたらは一体何者なんだ？ＢＥＴＡを光が飲み込んだかと思ったら、いつの間にか消えてるし。一体何をしたんだ？」

軍曹が聞いて来る。周りの兵士達も睨みながら俺と師匠を見る。正直睨らまれるだけウザイので、さっさと名前と所属部隊を名乗ったら、全員の態度が一変したよ。全員敬礼するし、軍曹は顔を真っ青にして若干震えていたし。まあ、処分なしって言ったらホッとしてたよ。

部隊を撤退させる様に指示を出して帝国軍兵士達を逃がす。先程のＢＥＴＡの大群が来たことから、今まで防衛していた場所より先に民間人は居ないと判断した。最初は拒否を示したが、到着したメビウスのＨＱに連絡をさせて確認を取ったら、案の定人間の反応がなかったので、渋々後退していきました。

俺と師匠は、現在殿をしているよ。

「でりゃゃゃ！！」

拳を握り右ストレートを兵士級の頭にぶちこむ。兵士級の頭が、パーンと弾けて、血と肉片が辺りに飛び散る。

「ハアァァァ！」

師匠が手拭いを使い、マスタークロスを放つ。

戦車級の体が真っ二つになり、斬れた断面がら血が吹き出す。

「師匠！無事でですか？」

「うむ。ワシは問題ない。しかし、ＢＥＴＡの数わ減らんな」

「そうですね。そろそろ引き際だと思います」

左腕を振り抜いて、真空刃を発生させる。真空刃は真っ直ぐ飛んで

行き、ＢＥＴＡの集団を真っ二つにす。体を真っ二つにされたＢＥＴＡが、血を吹き出しながら、絶命する。しかし、直ぐに新しいＢＥＴＡ達がやって来る。

「悠斗よ構えよ！奥義を放った後、脱出するぞ！」

「わかりました！」

俺と師匠は横に並び構える。

「「行くぞ！流派！東方不敗流！奥義！石、破、天、驚、拳ェェェェン！！」」

拳の形をした光の塊が、ＢＥＴＡに当たり大爆発を起こす。

「今だ！引くぞ悠斗よ！」

「はい！師匠！」

煙が晴れる前に、俺と師匠は戦場を離脱した。

俺達が脱出に成功した後、日本政府は大変だった。衛星偵察により、世界で２２番目のハイブが建設されたことが、確認された。帝国軍は多摩川を挟んで２４時間体制で間引き作戦を展開する事になったのだ。

また、香月博士がＨ２２横浜ハイブの攻略を提案して、帝国政府と一致するなど、世界は激動の様相を見せるのであった。因みに、俺と師匠の生身でＢＥＴＡとの戦闘映像が、近くで戦闘していた帝国軍の戦術機に残っていたため、帝国政府からハマーン国連事務総長に渡り、世界中に発信されてしまい、世界各国で大きな影響を及ぼすことになるとは、思っても見なかった。

悠斗sideout

第二十八話（後書き）

花粉症が辛いです。本当に勘弁して欲しいです。

第二十九話（前書き）

ね、眠いです。深夜に何とか書き上げました。では、本文をどうぞ。

第二十九話

ハマーンｓｉｄｅ

私は今、国連本部ビルにある私専用のオフィスで、書類を読んでいる。
この間、オルタネイティヴ第４計画の総責任者香月夕呼博士が提案した、横浜ハイブ攻略作戦関連の書類だ。

「やれやれ。保守派の連中は即時承認しただけでは飽きたらず、メビウスも参加させろだと？俗物どもが！！」

大体帝国軍はＢＥＴＡの日本進行の際に、メビウスのおかげで戦力を余り失わずに済んだだろうに。確かに、国連主力の米軍が日本に介入するのは、国民感情からして宜しくない。大東亜連合に参加を要請している様だが、恐らく米軍の介入は避けられまい。
だからと言って、メビウスを第５計画への牽制の保険扱いするのは、止めてもらいたいものだ。もし悠斗が切れたら、日本とアメリカが地図から消滅する事になるだろう。まあ、私からすればどちらの国が滅びようと関係ないからな。所詮悠斗の力を見誤った馬鹿どもの末路だからな。
読み終わった書類を机の端に置き、次の書類に目を通す。
次の書類は、横浜防衛戦の際に撮られた生身で戦闘する悠斗の戦闘能力に関する書類だった。
帝国軍から回収された映像を、私が世界各国に配信したのだ。

「世界中の国々が、驚いているのが目に浮かぶ。さぞ、滑稽だろう

な」

生身でＢＥＴＡを滅ぼして行く悠斗の姿は、世界中の国々にはどう写るのだろうか？少なくとも、私なら絶対に怒らせない様にするがな。

各国の反応を考えながら、書類を読むのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

アメリカｓｉｄｅ

ホワイトハウスの一角に、この国の中枢を預かる者たちが集まって話しあいをしていた。

「以上が日本帝国で、我が軍が受けた損害になります」

スーツ姿の大統領補佐官が、報告書を読み上げる。

「些か、損害が多いですな」

空軍の制服を着た男が、資料を机に置く。どうやら、日本帝国で受けた損害がお気に召さない様だ。

「あの、イエローモンキーどもが！我がアメリカの言うことを聞いていれば良いものを、それをしなかった正で、在日米軍の兵士達が余計な損害を受けたわ！」

陸軍の制服を着た大柄な男が、ドン！と机を叩く。机が揺れて、資料が散らばる。

「閣下。机を叩くのは結構ですが、資料を散らばらせるのは如何かと？それにしても、今回受けた陸軍の損害は馬鹿になりませんな。兵力の補充を急がなければなりませんね」

海軍の制服を着た眼鏡をかけた男が、陸軍の将軍に苦言を言う。しかし、陸軍の将軍はイライラしながら、腕を組んだ。

「ふん！分かっとるわ！大統領！陸軍の損害が甚大なので、優先的に補充をお願いします！」

体を前のめりにして、大統領を見る陸軍の将軍。しかし、大統領はコーヒーを飲みながら、優雅に返答する。

「分かった分かった。まあ、慌てずにコーヒーでも飲んで落ち着きたまえ。陸軍の補充に関しては、最優先で行うから安心したまえ」

「おお！そうですか！ならば安心ですわ。ハッハハハ！」

大統領から言質を取れたことにより、機嫌が良くなった陸軍の将軍が、大笑いする。他の将軍たちは、彼の笑い声がうるさいので耳を塞ぐ。

ガチャン

ドアが開き、一人の男性秘書官が慌てて部屋に入ってきた。彼の手には、何やらディスクが握られていた。

「ハアハア。だ、大統領大変です！」

「どうした？息を切らす程急いで？何かあったのか？」

大統領が声をかける。会議室に居る出席者達の視線が秘書官に向けられる。

「フウ。大丈夫です。取り敢えず、この映像を見てください」

秘書官がプロジェクターに移動して、秘書官の入ってきたドアの横に有る、中央モニターに国連の紋章の映像が映し出された。

「今から見ていただく映像は、ハマーン国連事務総長が世界中に配信した映像です。この映像が撮られたのは、日本帝国の横浜にハイブが建設された時、近くで戦闘していた戦術機から撮られた映像です」

秘書官がスイッチを押す。国連の紋章が消えて、戦闘映像が映し出された。最初は普通に衛士が、戦闘している映像だったが途中から、違うのがメインになった。

「な！？」×多数

出席者達の目が、釘付けにされた。出席者は信じられない光景を目にしている。そう、メビウス所属不動准将が生身でＢＥＴＡを殺しているのだ。

「あ、あり得ん。夢でも見ているのか？」

「バ、バカな！生身でＢＥＴＡを滅ぼしているだと！！」

「メ、メビウスの不動准将は、化け物か！」

「それもそうだか！この爺は、更に凄いぞ！」

「せ、戦車級をタオルで真っ二つにしただと？！」

出席者達から声が上がる。皆一様に、戦闘している映像を食い入り様に見ている。やがて、映像が終わり中央モニターには、なにも映らなくなる。椅子に深く腰掛けて、コーヒーを口に運ぶ。冷えてしまったが、苦味が増して頭をスッキリさせてくれる。

「さて、今の映像を見た率直な感想を言う。今、不動准将は新型ＢＥＴＡと言われたら、私は納得するだろう。それくらい、激しい衝撃を私は受けた。他の者達はどうだ？」

私の発言の後、会議室はシーンと静まり返る。先程見た映像を、振り替えって考えている様だ。一人の将軍が重い口を開いた。

「言いたくはありませんが、不動悠斗准将は化け物としか、言いようがありません。ＭＳの腕も超一流でありながら、技術者としても世界トップクラスの頭を持ち、生身でＢＥＴＡを余裕で殺害する肉体を持っていることを考えますと、彼を怒らせたら最後、怒らせた国が完全に消えるまで滅ぼすでしょう。不動准将と戦わないことが、国を守ることに繋がるでしょう」

海軍の将軍がそういい放つ。皆同じことを考えていたのか、反論が一切出てこないかと思われた。

「あり得ん！たかが一個人が国家を凌駕するなど！我らがアメリカ合衆国が、戦わずして敗北を喫するなど断じてあり得ん！」

陸軍将軍が立ち上がり、怒鳴り声で海軍将軍が言った事を否定した。

「では聞くが、もしメビウスと敵対して戦闘になった場合、どうやって勝つつもりかね？」

「簡単だ！G弾だ！G弾を使えば、例えメビウスのMSと言えどその威力の前に、ひれ伏すだろう！」

空軍将軍の問いに陸軍将軍は、我がアメリカ合衆国の新型爆弾G弾の使用を提案してきたのだ。

確かにG弾の威力を見せれば、世界各国がアメリカを支持するだろう。それに、第４計画やメビウスにも良い牽制になるだろう。ならば、丁度良い機会が有るではないか。

「よし！君達の意見は分かった。ならば、世界に見せつけてやるのだ！我らが作り上げたG弾の威力をな！丁度第４計画の連中が、横浜ハイブを攻略しようとしている！ならば、その時にG弾の威力を世界中に見せつけるのだ！」

「は！了解しました！」

G弾神話を信じているアメリカ合衆国の連中は、横浜ハイブ攻略作戦のにどのくらいの戦力を投入するか、話し合いをするのであった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

とある一室に、欧州連合に参加している国々の代表者達が集まり会議を、行っていた。
出席した代表達は皆、モニターに映しだされる映像に見いっていた。
やがて映像が終わり、画面が真っ暗になり部屋に静寂が訪れた。

「・・・・・」

誰も口を開こうとしない。いや、開けずにいた。たった今見た映像があまりにも衝撃的だったのだ。

「ふう。空気が重いではないか。そう思わないかね？諸君？」

イギリス代表の何気ない問いかけに、各国の代表達は重い口を開く。

「そうですな、イギリス代表。しかし、あの映像を見た後では仕方ないのでは？」

「確かに、イタリア代表の言う通りだ。些か衝撃的な映でしたな。まさか、メビウス所属の不動准将が生身でＢＥＴＡを殺しているの

を見たときは、流石に冗談かと思ったよ」

「そうですな。フランス代表の言う通りですな。不動准将の武勇は、まさに人外でしたからな。それも衝撃的でしたが、我が西ドイツとしては、ＭＳの性能の方が素晴らしいと思いましたな」

不動准将の生身でＢＥＴＡを倒す姿は、欧州連合内では武勇伝として扱われ、この場の話のメインはＭＳに移行して行った。

「そうですな。西ドイツ代表の言う通り、ＭＳの性能は疑います用のない戦果でしたな」

「確かに、イギリス代表の言う通り、ＭＳの連携は戦術機の非ではありませんでしたな」

「左様。前衛をグフ又はザク?が行い、後衛からザク・キャノンが重火力を持って制圧する映像は、圧巻でしたな」

「やはり、我々もＭＳの用な新型機の開発を、急ぐべきかと」

討論に熱が入り始め、段々議論の内容が新型機開発に移行し始めた。

「諸君落ち着きたまえ。新型機開発云々は、不動准将がプロミネンス計画に参加してからで、良いでわないか?」

「イギリス代表の言う通りだ!今は、新型機開発の話より、香月博士の提案した横浜ハイブ攻略作戦について、話し合おうではないか?日本帝国を、我らが欧州の二の舞にさせぬ為にも!」

イギリス代表とフランス代表が、強引に話題を返る。特にイギリス

は、新型機戦術機を開発したばかりで、資金難の状態なのだ。プロミネンス計画に不動准将が参加する以上、余計な事をして不動准将から、技術提供を拒否されても困るからだ。誰も、不動准将の機嫌を損ねて、損はしたくは無いのだ。
議題が横浜ハイブ攻略作戦に移ってからも、会議は夜を徹して行われた。

欧州連合ｓｉｄｅ

日本帝国ｓｉｄｅ

帝都城の一角に、政威大将軍派の者達が集められて、会議を行っていた。

「以上が、世界各国の動きになります。概ね予想道理の動きですね」

トレンチコートを着た男、鎧衣左近が報告をする。

「そうですか。わざわざ危険な橋を渡らせましたね鎧衣」

「ハッハハハ。日本帝国の為ならば、この程度の事など苦労に入りませんよ殿下」

苦労を労う煌武院悠陽殿下に、笑って答える。彼からしてみれば、帝国の存亡に関わる大事な時期に、危険な仕事をするのは何ら苦労に入らないのだ。

「鎧衣よ。ご苦労だったな。殿下、やはり香月博士の提案した横浜ハイブ攻略作戦の国連軍の主力は、アメリカ軍になりますな」

煌武院悠陽殿下の座る椅子の、右側に立っていた、紅蓮醍三郎大将がいい放つ。

「香月博士が危惧していた事が、現実味を帯びて来ることになろうとわ。嘆かわしい事です」

よもや、一方的に同盟を放棄したアメリカに、再び頼る事になる事に不安が募る。今度は、自分達が被害を被らない様に、何かしてくると容易に予想ができるからである。今だ、お飾りにされている彼女は、ただ無力の自分に嘆くしかできないのだ。

「大丈夫ですよ殿下。攻略作戦の指揮権は、我々帝国にありますからアメリカと言えど、容易に自分に有利になるような事ばかり出来ませんから」

「しかし」

「それに、メビウスが日本帝国に駐屯していますから、恐らくハイブ攻略作戦に参加してくれるでしょう」

「言質は取れているのですか？鎧衣？」

「いいえまだですが、此れから取りに行くのですよ」

帽子をかぶり直して部屋を出ていこうとする、鎧衣課長。

「鎧衣」

「はい、何でしょうか？」

振り向いて、殿下の方を見る鎧衣課長。

「決して無理をしない様に」

「はい。かしこまりました殿下」

頭を下げて、鎧衣課長が部屋を出ていった。

「殿下。今は、鎧衣課長を信じる他に有りませぬな」

「ええそうですね紅蓮。恐らく不動准将なら、力を貸してくださると思うのですが」

「今は、鎧衣課長からの報告を待ちましょう」

ただ、鎧衣課長の交渉が無事に行くことを祈るしか出来なかった。

日本帝国ｓｉｄｅｏｕｔ

第二十九話（後書き）

夜遅くまで起きているのが、辛いです。

第三十話（前書き）

やっと完成しました。
本文をどうぞ。

第三十話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年１１月１１日

香月博士の提案した、横浜ハイブ攻略作戦にメビウスも参加して欲しいと、帝国軍から要請がきた。また、秘密りに煌武院悠陽殿下の使者として、鎧衣左近課長が接触してきた。鎧衣課長から、殿下が参加して欲しいとの意向を伝えられた。返答は直ぐに出来ないと伝え、帰って頂いた。

因みに、鎧衣課長は宮城に駐屯している俺が乗っているビッグトレーに侵入を試みたが、我がメビウスの警備は未来の横浜基地のザル警備では無く、完全武装した兵士達が２４時間体制で警備しているため、捕まった。完全武装した兵士達の服装は、男性はＭ○Ｓ２に登場する、アウターヘイブンの兵士達の服装だ。　女性は、同じくＭ○Ｓ４に登場する、ヘイ○ン・ト○ーパーの格好だ（死んでも黒く燃え尽きない）。因みに、兵士達の服装の性能は、切れない、破れない、ダメージを受けない、溶けない、千切れない、等他多数の強化改造をしてある。また、武装も魔改造してある物ばかりだ。例えば、アサルトライフル（突撃銃）は、１発の銃弾で戦車級を１０体殺害できる威力を持っているし、ロケットランチャーなら、１発で防御している重光線級を撃破できる威力がある。他にも、パワードスーツ等の強化ウェポン等も沢山有る。また、兵士達の訓練の指導はマスターアジア師匠が行っているから、気配探知なんて朝飯前

だ。兵士曰く、「師匠の訓練はとても厳しい」との事だ。まあ、そんな厳しい訓練を受けた兵士達に捕まった鎧衣課長から殿下の御意向を聞いたのは、鎧衣課長が捕まっている営倉であった。まあ、鎧衣課長曰く「メビウスの施設には、二度と隠密潜入はしたくない」との事だ。

なら、普通に会いに来れば良いのに。

まあ、日本に居たときに有ったことはこんな位だ。今俺は、秘密基地に帰還しているからだ。

俺が、秘密基地に帰還する際に引き継ぎはしてきた。新たに日本帝国に駐留するのは、キリング・Ｊ・ダニガン中将を筆頭に、ロイ・ジェーコフ大佐、エリック・マンスヒィールド中佐等だ。ビッグトレー、ＭＳ等は、先に帰投していた俺の第４師団から、ビッグトレー４０隻、ＭＳ１，４４０機、６１式戦車３００両、マゼラ・アタック３００両だ。ダニガン中将達に後を任せて、俺は秘密基地に帰還した。

そして俺は今、中央司令部に居る。ハマーン国連事務総長と連絡を取るためだ。

「悠斗。時間だよ」

「分かった。オペレーター、ハマーン国連事務総長に通信を入れてくれ！」

「はい」

シーマ中佐に約束の時間になった事を伝えられ、オペレーターに指示をだす。中央モニターに椅子に座っている、ハマーン事務総長が映し出された。

「久しぶり振りだな不動准将。日本帝国での活躍は、聞いているぞ。

随分派手にやったそうじゃないか」

ニヤリと笑うハマーン事務総長。その綺麗な顔立ちもあって、見惚れてしまいそうになる。

「ツゥ！」

いきなり俺の体に痛みがはしる。隣を見るとシーマ中佐が笑顔で俺を見ていた。よく見ると、足を踏まれていた。

「？どうした？」

「いえ！何でもありません。しかし、ハマーン事務総長が言うほど、派手に動いてはいませんよ？」

精々、死者を減らすようにしたくらいだ。

ハアと、ハマーン事務総長がため息をついた。

「全く気づいていないのか？先の帝国本土防衛戦では、京都陥落までの間に民間人の死者が０名なんだぞ。普通、民間人がいる場合の撤退戦及び防衛戦は、非常に難しいものだ。民間人を守りながら戦う場合、実行できる作戦等が大幅に制限されるんだぞ？！そんな状況下で戦闘をしつつ民間人の脱出を同時に行い、尚且つ死者を出さない様に戦うのは、不可能なんだぞ！なのに貴様は、それをいとも簡単に成し遂げたのだぞ。それに、横浜ハイブ建設の際に生身でＢＥＴＡを倒していたではないか。それだけやっておいて、派手に暴れていないと言うのか？」

ハマーン事務総長の言う通り、普通に考えてみたら出来ないだろうな。まあ、ＭＳの性能と戦術機の性能は天と地の差があるからな。

それに、民間人を死なせない様にしたのは、日本帝国の国力を低下させない為なんだけどな。まあ、軍事物質工場の集中していた東海から関西地方が壊滅したのは、帝国政府からしたら痛いだろうが、メビウスの傘下企業の４社が東関東から東北にかけて、大工業地帯を作ったからその分のカバーはしてあるし、青函トンネルを帝国政府に許可を貰って現在掘っているから、直に北海道に往き来が出来るようになる。そうすれば、青函連絡船は不要になる。より、人と物の流通が良くなるからな。

「まあ、派手かどうかは良いとして、帝国に力が残るのは良いことです。それより、例の作戦プランは読んで頂けましたか？」

ハマーン事務総長が、真剣な表情に変わる。

「ああ、読んだぞ。しかし、本当に行うのか？」

「はい。各国が横浜ハイブに注目が集中していますから、今なら出来ると判断しました」

ハマーン事務総長が、右側に置かれていた書類を手に取った。書類を目に通すと、ふぅとため息をして俺を見た。

「まさか、チェンバロ作戦を月に対して行うのか。そして、作戦決行日が１９９９年1月3日か」

「ええ。かつての連邦軍の作戦名を借りて、一年戦争の開戦日に作戦を敢行します」

まさに、皮肉だな。ジオン独立戦争の開戦日に合わせて、連邦の作戦名で作戦を開始するのだからな。まあ、この世界に連邦もジオン

もないからな。ただ、分かりやすくするためにした作戦名だからな。

「戦力は大丈夫なのか？」

「はい。全部調べた結果、ザク？改が２４０００機。リック・ドムが８０００機。リック・ドム？が４０００機。エンドラ級が３２００隻。ムサカ級が１６００隻。レウルーラ級４隻。ドロス級が４隻。ザンジバル級が１隻。サダラーンが１隻。有りました。その他に、後から大量の戦力を増産しましたから、今言った戦力以上の戦力が宇宙にあります」

流石にハマーン事務総長も驚いたらしく、眉をピクリと動かした。

「そうか。なら、切り札も有るようだな？」

「ええ。ソーラーシステムを投入します。更に、ドズル閣下の最後の機体も投入します」

「フフフ。そうか、分かった。なら、存分にやってこい。な～に、五月蝿い諸外国は黙らせておいてやるさ」

「申し訳ありませんハマーン事務総長。そちらの方は、お任せします」

「なに。結果を出せばそれで良いさ」

「ありがとうございます。では、失礼します」

俺は笑顔でハマーン事務総長に、感謝の言葉を言う。

「そうか／／／ならば、頑張ってくれたまえ／／／」

通信が切れて中央モニターが、真っ暗になった。俺は、シーマ中佐に向かい会う。

「リリー・マルレーンの出港準備の状況は？」

「明日の明朝には完了するよ」

イルマ中尉が休暇で、家族の元に帰っているが戻って来るのが、明日の朝だから昼にソロモンに向かえば良いか。既にデラーズ中将なんかは、ソロモンに到着して準備を進めているから焦る必要は無い。

「なら、明日の昼にソロモンに向けて出発する」

「分かった。その様に伝えとくよ」

シーマ中佐は、そのままオペレーター達に命令して、出発時間の通達を行った。その後ろ姿を見つつ、腕時計を見ると時間は、夜の八時を回った所だった。指示を出し終わったシーマ中佐に、お酒を飲まないか誘ったら、二つ返事でＯＫが出たので、そのままお酒を飲みに行くのだった。

因みに、何故か誘ったらシーマ中佐が凄く嬉しそうだった。きっとお酒が飲みたかったのだろうな。そんなことを考えながら、中央司令部を出るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

ハマーン事務総長との会談が終わり、明日の出発準備の打ち合わせを悠斗として、オペレーター達に指示を出し終わって悠斗の側に行ったら、飲みに行くのに誘われた。
私は、二つ返事でＯＫを出して悠斗と共にバーに向かっている。

「フフフ。久しぶりに悠斗と酒が飲めるなんてね」

「そう言えばそうだな」

「今夜は楽しい酒が飲めるね！」

「余りハメを外すなよ？二日酔いなんて、部下に示しがつかないからな」

悠斗が苦笑いする。私だってそれくらい気をつけるさ。ちょっと悠斗を困らせてやろうと、空いている悠斗の左腕に右腕を絡ませて抱きつく。ついでに胸も当たるようにする。大抵の男は此で狼狽する。

「うん？どうしたシーマ？いきなり抱き付いてきて？」

悠斗は、全く気にする素振りも無く普通に歩く。やっぱり、悠斗は鋼入りだけあって簡単にはいかないか。

「なに、別に良いだろう？」

「まあ、シーマが良ければ良いけどな」

悠斗は嫌がることも無かった。私は、女として少し傷ついたが悠斗に抱き付いていることで我慢する事にした。

（フフフ。悠斗、必ず私に振り向かせてやるからね！）

胸のなかで決意を固めながら、バーに向かうのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

第三十話（後書き）

青函トンネルを作った方が、帝国軍や帝国政府にとってプラスになるの事が、多いのに何故掘らなかったのか疑問に思った作者です。

やはり、コストが掛かるんですかね。有れば、便利だと思うんでせけどね。オルタの世界なら尚更。

第三十一話（前書き）

難産でした。久しぶりに原作キャラがでます。
本文をどうぞ。

第三十一話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年１２月１６日　宇宙要塞ソロモン

リリー・マルレーンで、秘密基地からソロモンに移動して、一月程がたった。現在ソロモンでは、チェンバロ作戦（月攻略作戦）に向けて、準備が進められている。

現在俺は、ソロモンにて　将官クラス会議を行っている。出席者は、ちなみに出席者は、俺、エギーユ・デラーズ中将、ユーリー・ハスラー少将、ユーリ・ケラーネ少将、ノイエン・ビッター少将、ノルド・ランゲル少将、コンスコン准将、トワニング准将、ラコック大佐、フォン・ヘルシング大佐、ギニアス・サハリン大佐、シャア・アズナブル大佐、ノリス・パッカード大佐と、なっている。

「全員の出席を確認した。これより、月攻略の会議を始める。ホシノ・ルリ少佐、説明を頼む」

「はい。かしこまりました」

デラーズ閣下の第一声により、会議が始まった。ホシノ少佐が、中央モニターの正面に出てきた。

「此れから、説明をさせて頂くホシノ・ルリ少佐です。よろしく。

では、現在の月の状況を説明させて頂きます」

中央モニターに月の映像と、ハイヴの位置と規模が映し出された。

「モニターを御覧ください。現在月にあるハイヴの規模は、最も小さくてフェイズ６。最も大きいのは、月のオリジナルハイヴ、サクロボスコハイヴのフェイズ９です」

「なに？そこまで大きいのか！」

「小さくてフェイズ６！？地球上のオリジナルハイヴクラスではないか！」

各将軍から声が上がる。　事前に知らされていたと言っても、やはり実物を映像で見せられたりすれば、驚くのも無理はない。

「皆さんお静かに」

会議室のざわめきが治まり、静かになった。

「では、続けます。今回の月攻略作戦の最大目標になる、サクロボスコハイヴの大きさですが、地表構造物の大きさが３，０００ｍ。地下茎構造物の水平到達範囲は３０００？。最大深度は、８０００ｍとなっております」

「な！かなりの大きさですな」

「これは、かなりの大きさですな」

再び会議室がざわめく。会議に参加した者達が、彼方此方で話をす

る。此処までの規模になっているとは、思っていなかったようだ。

「皆の者、静粛にな」

デラーズ中将の一声で、再び会議室が静かになる。ホシノ少佐が、説明を再開した。

「現在の月のハイヴの規模を考えますと、正攻法で攻めれば物量に押されてしまいます。そこで、今作戦には秘密兵器が投入されます」

中央モニターの映像が変わり、秘密兵器が映し出された。

「こ、これは！」

「まさか！」

「この、ソロモンを焼き払った！」

「「「ソーラ・システム！」」」

各将軍や大佐達から、声が上がる。今回月攻略作戦に使用される秘密兵器の一つだ。

「はい。ソーラ・システムです。本作戦には、これが投入されます。ミラーパネルの展開を最大限広げた結果、月の半分を射程内に納める事が出来ます」

ホシノ少佐の説明を、出席者達が真剣な表情で聞く。俺は、ボールペンを指で回しながら聞いていた。また、中央モニターの映像が切り替わった。緑色の大型兵器が映し出される。

「な!?この機体は!」

「ド、ドズル閣下の最後に搭乗された機体ではないか!」

「はい。ＭＡ－０８、ビグ・ザムです。ソーラ・システムの射程外の、ハイヴ攻略部隊に配備されます。本機の弱点であった、活動時間の問題は解決されてあり、フル稼働で戦闘を続けても、１週間はエネルギー切れにはなりません。また、フェイズシフト装甲とＩフィールド（レーザーなんか効かない）が装備されております。武器のメガ粒子砲の威力も格段に強化されてあります。正面の大型メガ粒子砲の威力は、一撃で深さ２，０００ｍ、直径５０ｍの大穴を開ける事が出来ます。左右に有るメガ粒子砲は、半径３０００ｍの射程を誇ります。まあ、大型化しすぎて、全長が１００ｍ越えてしまいましたけど」

「な?!たった、一機で機動要塞に匹敵するではないですか!!」

ビグ・ザムの性能に驚く、金髪マスクの大佐。唾が俺に飛んでくるのは、勘弁して欲しいです。

「しかし、活動時間の問題が解決したと言っても、１週間が限界ですか」

隣に座っている、ユーリ・ケラーネ少将が発言する。

「問題ありません。これは、あくまでも強化パーツを装備していない状態での、スペック情報ですから。現在は強化パーツの無限エネルギー回復装置を装備させている最中ですからエネルギー切れになることは、ありません」

「そうですか。なら問題ありませんね」

ユーリ・ケラーネ少将の懸念も解消されたので、会議は進む。

「次は、各エースパイロットに支給する機体について、説明させて頂きます。まず、ザク？Ｒ－２型を配備されているパイロットは、宇宙様に改造してそのまま、使用する事になります」

ホシノ少佐の説明の内容を言うと、ジョニー・ライデン少佐、ギャビー・ハザード中佐、ロバート・ギリアム大尉、エリオット・レム中佐達、４名は新型機は授与されない事になるな。

そんなことを考えながら、説明を聞く。

「また、ザク？Ｒ－１型を授与されているパイロットの中には、エース専用リック・ドムより、Ｒ－１型の方が良いとの声も有るので、パイロットの意思を尊重する事になりました」

この場合、シン・マツナガ少佐はＲ－１型に乗り続ける事になるな。

彼は、リック・ドムに乗らなかったからな。

「エース専用リック・ドムのスペック情報は、こうなっています」

中央モニターに、リック・ドムのスペック表が映し出される。

「ドムの弱点で有る、宇宙空間での活動時間の問題を改善してあります。不動准将による、魔改造が行われており、ジェネレーターの出力不足等が改善されております。また、一部のパイロットには試験的にビームバズーカを配備します。ビームバズーカが配備されないパイロットには、通常のジャイアント・バズを装備してもらいま

す。また胸部拡散ビーム砲、つまり目潰しのビーム砲は、有人にこそ有効ですが、ＢＥＴＡには効果が有りませんので、改造によってジェネレーター出力の増加に成功しましたので、追加装備として胸部拡散メガ粒子砲を装備させました。また、ヒート・サーベルは不動准将のグフ・カスタムと同じレベルの物を使用します」

「なに！ドムにビーム兵器を装備させるのか！」

「よもや、これ程の機体を授与されるとは、羨ましい限りですな」

シャア・アズナブル大佐が驚きの声を上げ、ノリス・パッカード大佐は、感慨深そうに頷く。やはり、現場のパイロット達はビーム兵器使用したかったのだな。

まあ、作れるのに作らなかったのは、俺が躊躇してたからなんだけどな。　ただ、このドムの弱点はザク？Ｒ－２型に負けないくらい、コストが掛かる機体なんだよな。はっきり言えば、量産には適してない。多分５０機作れば良い方だな。

「悠斗よ、このリック・ドムは、どのくらい配備するのだ？」

「はい、デラーズ閣下。凡そ５０機程を予定しています」

デラーズ閣下の質問に答える。因みに、声をかけられる前にペン回しは、止めていた。

「随分少ないではないか？」

「確かに、少々少ない気がしますね」

「デラーズ閣下やギニアス大佐の言う通り、機体数は少ないです。

しかし、この機体は量産には適していないのです」

「何故かね？」

「まず、機体その物のコストが異常に高いのです。次に乗れるパイロットが、少ないのです。機体テストの為に、ランバ・ラル少佐にテストしてもらった所、ランバ・ラル少佐からは、「余りにも、ピキー過ぎる。だが、良い機体」と、言われました。正直他のテストパイロット達からも、同様の意見が届いておりますので、エースパイロット達には丁度良いのですが、一般パイロットには少々荷が重い為、大量生産しない事にしました」

俺の説明を受けて、納得された表情になるデラーズ中将。流石に、ハイスペック過ぎる機体は、使いこなせなければ意味が無いからな。

「悠斗よ、子細は分かった。ならば、その生産数で良い。しかし、悠斗よ、貴殿の機体はどうするつもりだ？よもや、宇宙に来てまでグフ・カスタムとは、言うまいな？」

俺を心配してか、デラーズ中将が宇宙で使用する機体を訪ねてきた。流石の俺も、宇宙空間でグフ・カスタムには乗らないな。出席者全員の視線が、俺に集中する。正直、宇宙で使う機体は考えて有るから大丈夫だ。

「大丈夫です。宇宙で使う機体は決まってますから。それに、それを言ったら、ノリス・パッカード大佐もグフ・カスタムのパイロットですよ？まあ、大佐にはエース専用のリック・ドムに乗ってもいますが」

「おお！それもそうであったな。悠斗に一本取られたわ」

ハッハハと笑うデラーズ中将。いや、覚えておいて欲しいですね。元々、グフ・カスタムのパイロットはノリス・パッカード大佐なんですからね、元々彼の機体を量産して、乗っているだけですからね。

「それで悠斗よ、貴殿の機体は決まっておるのか？」

「はい。決まっています。『？（スリー）』に乗るつもりです」

「？（スリー）？三号機と言うことか？」

「解釈はお任せします。この機体は、今現在改造中ですのでデータを御見せすることは出来ませんが、月攻略作戦には御披露目出来ます。」

流石にまだ、完成していない機体を見せる訳にはいかないからな。まあ、強化パーツは付けるのが決まっているから良いけど。俺の説明に苦笑いするデラーズ閣下。まあ、無理に聞くつもりは無いようだ。

「分かった。ならば、月攻略作戦の時に見せてもらうぞ悠斗よ」

「はい。一騎当千の活躍をすることを、お約束致します」

互いにニヤリと笑う。その後、会議は攻略作戦の具体的な進行プランの内容に移行して行った。

因みに、ビグ・ザムの生産数は、５０００機だそうだ。整備兵達が整備するだけで、過労死しまう恐れが有るため、強化パーツのナノスキン装甲を追加して、整備しなくて済むようにしました。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

悠陽ｓｉｄｅ

私は今、帝都城の執務室で仕事を行っております。例年なら私の誕生日は、盛大にお祝いするのですが、今年はＢＥＴＡの日本進行を受けて、帝国領内に二つのハイヴが建設された影響で、中止となりました。私としても、帝国の危機に誕生祝いをしてもらうよりも、そのような行事に使う資金で民の為になるように使ってもらいたいです。

「悠陽殿下、休憩になされませんか？」

「従事長。もう、その様な時間ですか？」

「はい、悠陽殿下。ハイヴが出来てから、余り殿下には余裕が有りそうに見えませんから、少し執務を休みましょう」

私の側に来て、テキパキとお茶を煎れてくれる。私のは机の上の道具を片づける。私の前に、従事長が煎れてくれた日本茶が置かれる。

「どうぞ。粗茶ですが」

「いただきます」

従事長の煎れてくれたお茶を飲む。日本茶特有の香りが鼻腔に広がる。

「美味しいですね。流石、従事長が煎れてくれたお茶です」

「ありがとうございます。本来なら、今頃悠陽殿下の誕生を祝う式典が有ったのですが」

「良いのです。今の帝国の状況を鑑みれば致し方の無いことです」

コンコンコン

扉をノックする音がする。私と従事長は扉の方を見て声を掛ける。

「誰ですか？」

「は！月詠真耶でございます。悠陽殿下にお届け物が有ったため、持って参りました」

「どうぞ、入ってください」

扉を開けて真耶さんが、手に小包を持って入って来た。

「失礼します。悠陽殿下、不動悠斗准将よりお手紙と小包が、届いております」

中に入って来た真耶さんから、手紙を受けとる。手紙を開いて読んで見ると、悠斗兄様から誕生日のお祝いの言葉か書かれていました。

「なんと書かれていますのですか？」

「従事長。悠斗兄様ったら私の為に、わざわざプレゼントを送ってくださったのです」

「そうなのですか！ならば、開けた方が良いですね」

「真耶さん」

「は！」

「小包を開けてくれませんか？」

「畏まりました」

真耶さんが、手に持っていた小包を開ける。中から小さな小箱が出てきた。小箱を真耶さんが、手に取り私の前で開ける。中には指輪が入っていました。

「これは、また凄い指輪ですね～」

「あら？従事長は指輪に付いている宝石が、何なのか分かるのですか？」

非常に綺麗な緑色の宝石の様ですが、生憎私はこのような宝石とは、縁が無かったので分かりません。真耶さんを見ると、何やら怒っている感じがします。何か有ったのでしょうか？

「はい。この宝石はエメラルドです。しかも、天然石でこの大きさの物は、初めて見ました」

「確かに指輪の大きさにしては、かなり大きいですね」

縦横5？の大きさです。しかも、今では貴重な宝石です。悠斗兄様は、何処でこのような指輪を手にいれたのでしょうか？

「フフフ。悠斗め、覚えていなさい。悠陽殿下に指輪をプレゼントしていて、私には何もないのですから、覚悟していなさい！」

黒いオーラを全快にしている真耶さん。その後、従事長と二人で真耶さんを宥めるのに苦労するはめになってしまいました。因みに、指輪のサイズはピッタリでした。何故、計ってもいないのに悠斗兄様は、分かるのか不思議でなりませんでした。従事長から、宝石の意味を聞いたら希望と言われました。悠斗兄様は、私が帝国の希望と仰るのでしょうか？そんなことを考えながら、真耶さんを宥めるのでした。

悠陽ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

私は今、部屋で勉強に励んでいる。一時間程前までは、紅蓮醍三郎師匠に稽古を着けて頂いていた。本日は私の誕生日だ。師匠からは、

お祝いの言葉を頂いた。祖父からも、同様にお祝いの言葉を頂いた。今日は、もう一人あの方の誕生日でもある。幼少の頃に別れてしまった、姉上の誕生日だ。いや、姉上ではない。煌武院家の方だ。現在の政威大将軍で有らせられる、悠陽殿下の誕生だ。私は幼少の頃、御剣家に養子に出されのだ。今は御剣を名乗り生活している。例え離ればなれになっていても、その心だけは共に在りたい。私はそう思っている。

コンコンコン

障子戸がノックされる。

「何方か？」

「月詠でございます。冥夜様」

「月詠か。入って良いぞ」

障子戸を開けて、月詠が中に入って来た。何やら、小包を持ってきた。

「失礼します冥夜様。不動悠斗様より、お手紙と小包が届いております」

「なに！悠斗兄上から手紙だと！」

「はい。此方になります」

月詠から、手紙を受けとり読む。悠斗兄上からの手紙は誕生日のお祝いの内容が記されていた。

「私は、幸せ者だな。非常に忙しい悠斗兄上から、わざわざお祝いの手紙を頂けるとは」

もう長年お会いになっていない、悠斗兄上の顔が浮かぶ。何時も私に優しかった。共に遊んだり稽古をした記憶は、楽しい思い出だ。

「月詠」

「はい、冥夜様」

「悠斗兄上がくれた、小包を開けて見よう」

「はい。畏まりました」

月詠が小包を開けてくれると、中から小箱が出てきた。それを更に開くと、中から指輪が出てきた。美しいスカイブルーのような色をした宝石が付いている。

「これは何の宝石何でしょうか？」

「うむ。手紙にはアクアマリンと書いて有った。宝石の意味は勇敢と書いてあったな」

きっと悠斗兄上は、私に勇敢な心を持つ武士になって欲しいのだな。ならば、更に精進有るのみだ！

「悠斗。今度会ったら、徹底的に問い詰めてやる。冥夜様にプレゼントが有って、私には手紙すらない理由をね」

「つ、月詠？如何した？」

「いえ何でもありませんよ。オホホ。では、失礼させて頂きます冥夜様」

「うむ。ご苦労であった」

月詠が部屋を出ていった。私は、悠斗兄上より頂いた指輪を嵌めてみた所、何故か丁度よく嵌まった。その事を、不思議に思いつつ指輪を外して丁寧に仕舞い、勉強を再開するのだった。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

第三十一話（後書き）

宝石の意味はｗｉｋｉで調べました。

第三十二話（前書き）

更新が遅れました。仕事が忙しく時間がとれませんでした。では、本文をどうぞ。

第三十二話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９８年１２月１７日宇宙要塞ソロモン

昨日の会議で月攻略に、新兵器ソーラ・システムを使用する事に、何等問題なく承認されました。俺は、現在パソコンに向かい生産ラインの状況を確認している。
画面には、現在のソーラ・システムのパネルの生産数が表情されている。

「フム。６０パーセントまで、完了したか」

月の半分を焼き尽くす事の出来る、ソーラ・システムの生産は、滞りなく進んでいる。マウスを操作して、次の画面に切り換える。輸送艦パゾクの生産状況が表示された。此方も、滞りなく進んでいる。次のページに切り換える弾薬の生産ラインの状況と、宇宙戦闘機ガトルの生産ラインの状況が表示された。ガトルの生産数３００００機だ。本来宇宙空間では、戦闘機などＢＥＴＡの前では役には立たない。しかし、あえて生産しているのには、訳がある。ガトルは、大型ミサイルが搭載可能な戦闘機なのだ。俺がアイ○ォーンで、武器弾薬の生産可能な物を確認してる時に偶々見つけた兵器、ＡＬ（チート）弾だ！通常のＡＬ弾なら、重金属雲を発生させる事で、光線級からのレーザーによる被害を減らす事が目的だ。しかし、今回俺が見つけ

たＡＬ（チート）弾は一般的に使用されている、ＡＬ弾ではなくＡＬ（アンチレーザー撹乱幕）弾だ。こいつは、通常のＡＬ弾とは違い、光線級に迎撃されなくとも搭載したミサイルを自爆させて空間に散布すれば、謎の粒子の効果により一定時間、光線級、重光線級のレーザー照射を完全に無効か出来る兵器だ。（イメージ的には、ビーム撹乱幕と同じような感じ）

無論、宇宙軍の宇宙艦全てにＡＬ（アンチレーザー）撹乱幕を散布する機能が装備されている為、月攻略作戦の際に月からレーザー照射が有っても、事前に散布しておく事で、何等問題が無くなる。

また、各宇宙戦艦には、Ｉフィールド（レーザーなんか効かない）も装備されているので、ＢＥＴＡのレーザー対策は完璧なのだ。

「流石に、使用したことの無い兵器だしな。月攻略作戦で有効性が証明出来れば、地球上でも使用するか」

もし、地球上で光線級のレーザーが完全に無効かされたら、各国が狂喜乱舞するだろうな。

ウィーン

ドアが開いた様だ。誰かが室内に入ってきた。

「失礼します」

「失礼します」

「入るよ」

視線をパソコンの画面から、入口に向けると、イルマ中尉、ホシノ少佐、シーマ中佐が居た。

「ご苦労。態々呼び出してすまないな」

「いいえ、私は秘書官ですから構いませんよ」

「問題ありません」

「なに、訓練ばかりしていて、暇だからから構わないさ」

「そうか。なら良かった。ホシノ少佐、悪いが此方に来てくれ。二人は休んでてくれ」

「分かりました」

ホシノ少佐が机を回り、俺の隣に来る。シーマ中佐は、ソファーに座り寛ぐ。イルマ中尉はコーヒーを淹れに、備え付けのコーヒーメーカーに向かった。

「ホシノ少佐、先ずはこれを見てもらえないか」

パソコンの画面を切り換える。ホシノ少佐が、俺の左隣に来る。パソコンの画面を食い入る様に見つめるホシノ少佐。余り表情の変化は見られないが、多分内心驚いているだろう。俺が見つけた時だって、驚いたからな。

「不動准将。これはもしかして」

「ホシノ少佐の気づいた通り、月にある全てのハイヴの内部マップだ」

そう。何故か神様仕様のパソコンの中に入っていたんだ。しかも、リアルタイムで更新され続けているし、ＢＥＴＡの数や場所、何処を抜ければ最短かどうかまで表示されている。月編、地球編、火星編に別れている。

「何でこんな物が有るのですか？」

ホシノ少佐が俺を見る。その金色の瞳には、何故？と言う疑問が宿っていた。

「俺にも分からない。ただ」

「ただ？」

「女好きな神様がしてくれた、気まぐれだな」

初老の姿で笑うゼウスが脳裏に浮かぶ。神様なら、これくらいの事ならいとも簡単にやってのけるだろう。

「まあ、頂いた物ですから有効活用しますか」

「そうだな。オモイカネを経由して、全軍にデータリンク出来るか？」

「余裕で出来ますよ」

何故か、右手でピースを作り俺に向ける。取り敢えず、訳が分からないが左手で頭を撫でてあげる。サラサラとした髪の毛の触り心地が良かった。

「ッ！／／／なんで、撫でるのですか？」

少し頬が紅くなっている様に感じたが、恐らく照れているのだろう。

「さあ？何と無く撫でたかったからかな？」

「何と無くで頭を撫でるとは、不動准将は不思議な方ですね」

「そうか？」

少なくとも、ホシノ少佐よりは不思議な人間では無い気がするんだがな。

「そうです。そうやって無意識の内に女の子を、虜にしていくなんて（ボソボソ）」

「なんか言ったかい？」

「いいえ。何も言ってませんよ」

なんか、ホシノ少佐がボソボソ言った気がしたが、気のせいだったようだ。

「不動准将。休憩になさいませんか？」

イルマ中尉が、笑みを浮かべながら俺に休憩を勧めて来る。腕時計を見ると大分時間が経っていた。

「そうだな。休憩にしよう」

イルマ中尉の提案に、笑顔で答える。何やら皆、顔が紅くなっていた。風邪でもひいたのかな?

「では、ソファーにお掛けになってお待ちください／／／」

イルマ中尉に勧められ、自分のデスクから立ち上がり、ホシノ少佐と共にソファーに腰掛けて、コーヒーを待つのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ルリｓｉｄｅ

不動准将に呼ばれて、彼の執務室にシーマ中佐とイルマ中尉と共に入室する。中に入り、簡単な挨拶を交わしたのち、私は不動准将の隣に行き、パソコンのモニターを見ると、リアルタイムで更新されている画面が映し出されていた。私は少し驚いたが、これが何なのかは直ぐに分かった。

月に有る全てのハイヴマップと、赤く動く光点がＢＥＴＡの物です有ることを。

不動准将に、何故こんな物があるのか聞いてみたが、彼も分からない様だ。何故か、頭を撫でてもらいました。不動准将の大きな手は温かったくて、優しかったです。私が撫でられている間、シーマ中佐とイルマ中尉が、羨ましそうに見てました。やはり、不動准将は

不思議な方です。これだけの、好意の視線を受けているのに全く気づかない辺りは、有る意味アキト並みに鈍いです。
イルマ中尉に勧めてられて、ソファーに移動して、コーヒー頂く事になりました。不動准将の後ろを歩きます。

「早く気づいてくださいね（ボソ）」

周りに聞こえないように、こっそりと呟きました。アキトとユリカは、二人とも結婚して幸せそうでした。あの時、私の淡い恋は終わりました。だから、二度目の恋は諦めません。だって、彼の隣は空いてますから。
ソファー着いて、不動准将の隣に座りコーヒーを頂くのだった。

ルリｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

不動准将がホシノ少佐の頭を撫でているのを見たときは、正直微笑ましかった。
不動准将は子供好きだ。彼と結婚して子供が出来たら、きっと可愛がるだろう。四人でソファーに座りコーヒーを飲みながら、頭の中で未来図を描くのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

四人でソファーに腰掛けて、コーヒーを飲みながら談笑していた。
私の正面に悠斗が座り、悠斗の隣にルリ。私の隣にはイルマが座っていた。
横目でイルマを見ると、違う世界に旅立っていた。恐らく妄想でも、しているのだろう。悠斗に視線を戻すと、何時の間にかルリが膝の上に座っていた。

「ホシノ少佐？何で悠斗の膝の上に座っているんだ？」

「なんとなく落ち着くからです」

まあ、見た目父親に甘えている子供にしか、見えない。

「まあ、いいさ」

こんな小娘位居たって、私の恋のライバルにはならない。

「そういえば、不動准将ってどんな人が好み何ですか？」

いきなりルリが爆弾を投下してきた。妄想の世界に旅立っていたイルマが、一瞬で帰ってきた。全員の視線が悠斗に集中する。

「そうだな。好きになった人が好みなんだろうな」

ルリの頭を撫でながら、答える。ほんのりとルリの頬が紅く染まっている。

「そうなんですか。分かりました」

ルリが何かを考えている様だ。私も悠斗を振り向かせる為に、もっと頑張る必要があるね。そんな事を考えながら、コーヒーを飲むのであった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

第三十三話（前書き）

やっと更新が出来ました。遅れてすみません。では、本文をどうぞ。

第三十三話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１月３日
月衛星軌道上第四師団機動艦隊旗艦サダラーン

年が明けて新年になり、俺達メビウスは月攻略作戦、通称チェンバロ作戦を決行した。宇宙要塞ソロモンから昨年１２月２９日に出発し、先に出発した先遣艦隊と月衛星軌道上にて合流した。因みに、出撃した部隊の内訳はこうだ。　まず戦艦だが、エンドラ級巡洋艦６４００隻、　ムサカ級巡洋艦３２００隻、レウルーラ級戦艦４隻、サダラーン１隻、ドロス級空母１０隻、パゾク級補給艦２００００隻だ。次にＭＳだが、ザク?改４００００機、リック・ドム２０００機、リック・ドム?１５０００機、エース専用リック・ドム５０機、ＭＡビグ・ザム５０００機、ガドル宇宙戦闘機３００００機。これが今回の、チェンバロ作戦に参加する総戦力だ。
俺は艦隊旗艦サダラーンのブリッジで、指揮を執っている。

「作戦開始時間まで後、どのくらいだ?」

「はい。あと、１０分程です」

イルマ中尉が返事を返す。今ブリッジは、大忙しだ。まず、ホシノ少佐が月を見張っている衛星を、オモイカネを使用してハッキング

してコントロールを奪い、地球に対してダミー映像を流している。これで、地球の連中にバレる恐れは無い。ソロモンから出撃する際には、ミラージュコロイドを使用して出撃したから、バレることはない。てか、今も実は使用したまんまなのだ。ホシノ少佐が衛星を管理下に置くまでは、万が一を考えて使用していた。まあ、チェンバロ作戦開始と共に解除するから問題無い。

「デラーズ中将の部隊はどうしている？」

「はい。我が艦隊の反対側で、ソーラ・システムの準備を行っております」

「予定通りか」

ソーラ・システムのコントロールは、デラーズ中将の艦隊にお任せした。俺達の部隊が攻める方面には、ソーラ・システムによる月を焼き払う照射攻撃が無い代わりに、ビグ・ザムを投下して、門まで戦線を一気に押し上げて突入し、反応炉を破壊して制圧するプランになっている。ソーラ・システムの照射攻撃が有る方面の部隊は、照射攻撃で月表面を完全に焼き払い、ＢＥＴＡの居なくなった隙に門から内部に進行して、反応炉を破壊して制圧する。全てのハイヴの反応炉破壊後、残ＢＥＴＡを徹底的に排除してチェンバロ作戦の完了となる予定だ。

「ふぅ」

ため息をつく。つきたくないけど、出てしまうものはどうしょうもない。

「どうかしましたか？」

イルマ中尉が、頭に?マークを浮かべる。

「なに、未だに世界各国がＢＥＴＡに対して一致団結して戦えていないこの時代に、我々メビウスが出来ることといえば、人類の安全の為に月を攻略して、危険を排除しておくこと位だ」

「・・・」

ブリッジに静かにしかし、確実に響きわたる様に呟く。

「寒い時代だと思わんか」

ふっと、鼻で笑う。今の人類は未だＢＥＴＡに対して、一致団結出来ていない。更には、来るか分からない戦後を見据えて足を引っ張りあう始末だ。そんな分かりきった事に、今更毒づいても仕方のない事なんだがな。

思考を切り換える。今はチェンバロ作戦に集中しなければいけない。腕時計を確認すると、作戦開始時間１分前になっていた。

「時計合わせ入ります！３０、２９、２８、２７、２６、」

女性オペレーターが、カウントを読み上げるいよいよ、チェンバロ作戦が開始される。周りに目を向けると、皆緊張した面持ちで黙々と自分のすることをしていた。

「４、３、２、１、０！作戦スタートです！」

チェンバロ作戦がたった今、開始された。

「ミラージュコロイド停止！ビグ・ザム及びＭＳを発進させろ！メガ粒子砲チャージ開始！これより攻略目標は月サクロボスコハイヴ！！チェンバロ作戦開始する！」

一斉に指示を出す。即座にブリッジ要員達が動き出した。

「ビグ・ザム、ＭＳ各機、順次出撃していきます！」

「メガ粒子砲チャージ完了しました！何時でも射てます！」

各オペレーター達が指示をこなし、報告をする。彼女達は大忙しだ。

「よし！メガ粒子砲射てぇぇぇ！！」

サダラーンの大型メガ粒子砲２門に連装メガ粒子砲１２門から、一斉にメガ粒子砲が放たれた。周りにいるエンドラ級わムサカ級からも、メガ粒子砲が発射され月に向かって突き進む。
メガ粒子砲が着弾し、沢山いたＢＥＴＡの反応が消えた。

「ビグ・ザム、ＭＳ各機は、予定通り降下作戦で月に着陸しています」

「ミサイル発射口開け！ミサイル一斉発射だ！」

ガッコンガッコン

サダラーンやムサカ級のミサイル発射口が開かれミサイルが一斉に発射される。

「ＢＥＴＡ地表に出現してきます！」

再び月の重光線級からレーザー照射が来る。レーザー撹乱幕の展開範囲を越えたミサイルが迎撃される。

「ミサイル第一派損耗率９８％！残り２％が月に到達しました！」

ダダダダーーーンン

ミサイルが大爆発を起こす。サクロボスコハイヴ地表に居たＢＥＴＡを殲滅する。

「不動准将！デラーズ中将の艦隊が、ソーラ・システムを照射するそうです」

「分かった。各員これからが本番だ気を抜くな！」

「はい！」×多数

俺はそのまま、指揮を執るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

ワシは今悠斗達の反対側月衛星軌道上からかなり離れた地点で、旗艦レウルーラに乗り指揮を執っておる。

「ソーラ・システムの準備はどうなっておる？」

「は！現在パネルの展開率は、９５％まで完了しております！不動准将率いる第四師団が、陽動を開始後５分後に展開率１００％になり、照射可能になります」

部下が報告をする。今現在予定通り作戦が進んでいる。後は、照射するタイミング次第だ。

「デラーズ閣下。不動准将の艦隊が攻撃を開始しました！」

「分かった。各員不動准将が予定通り陽動作戦を開始した。ソーラ・システム照射可能になり次第照射し、月のハイヴを攻略する！」

「は！」×多数

部下達が返事をする。モニターに視線を移すと、月が映しだされていた。

（よもや、月とはな。ワシもつくずく縁が有のを）

曾ては、月にコロニーを落とそうとして連邦艦隊を誘き寄せる罠にした月を、今度は取り戻す戦いになるとは思いもしなかった。感慨に耽っていると、オペレーターが声をあげる。

「デラーズ閣下！ソーラ・システム準備完了致しました！何時でも射てます！」

「よし！ソーラ・システム照射！目標は月だ！」

「了解！ソーラ・システム照射まで、５、４、３、２、１、０、照射」

ミラーパネルに光が反射する。全てのパネルが光り、月を焼き払いだす。　月の半分が焼かれ、地表及び地上付近に居たＢＥＴＡを焼き払って行く。

「おお！凄い！」

「ＢＥＴＡを焼き払っている！」

我がメビウスの使用するソーラ・システムの太陽光を反射して、相手を溶かす際の温度は通常のソーラ・システムの温度とは、余りにも違う。

通常のソーラ・システムは、岩すら溶かすが我々が使用しているソーラ・システムは、摂氏４０００度迄上昇するため、月の表面は無論ＢＥＴＡすら、容易に溶かせるのだ。月を焼き払った光が消えてゆく。照射可能時間を過ぎたのだ。月の地表にあったモニュメントは全て無くなり、跡形もなく消滅していた。熱によって溶けた地表が有るだけだった。

「ソーラ・システム照射終了しました！次の発射可能時間までは、１時間かかります」

「分かった。ＭＳを発進させろ！」

部下に指示をだす。カタパルトから次々とＭＳが発進して行く。いくらモニュメントが無くなったとは言え、ＢＥＴＡ事態が全滅した訳ではない。即座に反応炉を破壊して制圧する必要がある。

「ＢＥＴＡが地表面に出現！！軍団規模で出現してきます」

溶けた地表にＢＥＴＡが地下から再び姿を表した。地表を再び埋め尽くす勢いだ。ここに来て、ソーラ・システムの弱点が露呈した。ソーラ・システム照射する場合、第２派照射に時間がかかりすぎるのだ。ソーラ・システム事態非常に強力な兵器な反面、速射ができないのがネックだ。使い捨て兵器の意味合いが強い。

（やはり、使い捨て兵器か。まあ、第１派照射で大分数を減らしただろうからよいか）

「アンチレーザー撹乱幕展開完了しました！」

「良し！全艦最大全速、ソーラ・システムを放棄し、月に一気に攻めこむ！ガトル隊発進！大型ミサイルで、地表に出てきたＢＥＴＡを徹底的に叩くのだ！！」

「了解。ガトル隊に入電！ガトル隊各機は、大型ミサイルをどんどん放て！月地表のＢＥＴＡを殲滅せよ」

レウルーラが進軍を開始すると共に、第一師団艦隊全艦が月に向かって進軍するのだった。

デラーズsideout

第三十三話（後書き）

ウ～ン月攻略後の明星作戦のことを悩んでます。鳴海孝之の扱いに悩む。原作道理にするか、それとも生きていてもらうか。真面目に悩みます。

第三十四話（前書き）

久しぶりに予約投稿できた！では、本文をどうぞ。

第三十四話

ガトーｓｉｄｅ

月裏側衛星軌道上ドロス級空母ドロワ

私は今、空母ドロワから出撃する為に不動准将から授与された私専用のカラーリングにしてある、リック・ドムのコックピットの中で、待機している。ドロワから大量のＭＳが出撃して行く。モニター画面にカリウスが映しだされる。

「どうした？カリウス？」

「少佐。もうすぐ我々の発進の順番です」

「分かった。カリウス、貴様は私と共に反応炉を目指すぞ！」

「はい！少佐。微力ながら援護させて頂きます」

「なに、案ずる事はない。たかがＢＥＴＡごとき、執るに足らん相手だ」

「そうだな。ガトーの言う通りだな」

新たにケリィがモニターに映しだされる。

「ケリィ。そっちの機体はどうだ？」

「問題ない。ＭＳで有っても問題なく操作できる」

「そうか。ならば良い」

ふと、外を見るとリック・ドムとザク？改が出撃して行った。どうやら次が我々の番の様だ。
カリウスとケリィが、モニター画面から消えて、金髪のオペレーターが映しだされた。

「ガトー少佐。出撃可能になりました」

「分かった。カリウス、ケリィ！出撃だ！」

「は！」

「ああ！」

「アナベル・ガトー、リック・ドム出撃する」

ドロワのカタパルトから打ち出され、私達は出撃した。
ブースターを吹かし、月地表を目指す。
ＢＥＴＡから何ら迎撃を受けずに月地表に到達する。

「ふ。先ずは貴様たちを叩き潰しておく！」

ビームバズーカを構える。かつて一年戦争で使用したビームバズーカとは違い、格段に使いやすいと聞いている。

突撃級、要塞級にマルチロックする。

「沈めぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

トリガーを引きビームバズーカを発射する。次々とビームが突撃級の体に穴を開けて絶命させる。周りにいた他の大型種も巻き込まれて絶命する。要塞級は周りにいた他の小型種を巻き込んで消滅して行く。

「凄いですな！少佐！」

カリウスの驚いた表情が、モニターの端に小さく映しだされる。

「ああ。まさかこれ程とは。だが、これなら反応炉を破壊出来るぞ！」

「そのようだな。漸く月の地表面だ。気を抜くなよ！」

「ああ。分かっているさケリィ」

ジャイアント・バズで、地表にいるＢＥＴＡを吹き飛ばすケリィとカリウス。いよいよ月の地表に到達する。すると、地表にＢＥＴＡが大量に出てきた。恐らく偽装横坑（スリーパー・ドリフト）から出現したのだろう。師団クラスのＢＥＴＡの出現で、レーザーマップが真っ赤になる。

「師団規模ＢＥＴＡが、出現しました。近隣の部隊は突入部隊の援護に向かってください」

オペレーターから通信が入る。果たして、友軍は来てくれるか？まあ、来れなければ来ないで充分突破は出来る。殲滅するなら、友軍

の援護が必要なだけだ。

ドカーーン

カリウスのリック・ドム?のが、シュツルム・ファウストを放つ。
爆発で地表にいたＢＥＴＡが吹き飛ばされたお陰で、降りる場所が出来た。

「カリウス、ケリィ。今出来た場所に降りるぞ！」

「了解です！」

「了解した！」

爆発で出来た場所に降下して、月の地面に到達した。だが、突入する予定の門から、少し離れた所ですんだ。

「カリウス、ケリィ！門まで進むぞ！」

「了解しました！」

「おう！」

ビームバズーカを発射する。突撃級に当たり、貫通したビームが容赦なく後方のＢＥＴＡに当たり絶命させていく。

「ウオォォォ！沈めぇぇぇ！」

「墜ちろ！」

「くたばれ！」

ヒートサーベルを左手に持ち、近付いてきた要撃級を真っ二つする。

ドカーーン

カリウスはジャイアント・バズを射って、ＢＥＴＡを吹き飛ばす。

ケリィは、胸部拡散メガ粒子砲を放ち、ＢＥＴＡを絶命させる。３機でＢＥＴＡを殲滅させながら進軍する。門まで半分位の距離まで進軍したが、だんだんＢＥＴＡの数が増えてきた。

「ＢＥＴＡの増援を確認。ガトー少佐、地下から更に軍団規模のＢＥＴＡが進行してきます」

オペレーターから、通信が入る。各地で友軍部隊が戦闘を行っているが、まだ誰もハイヴ内部に突入した部隊はいない。

「了解した。カリウス、ケリィ！軍団規模のＢＥＴＡの増援が来るぞ！」

「クッ！早く門から内部に突入しなければならないのに！」

「カリウス、慌てるんじゃないぞ。我々が暴れればその分ＢＥＴＡが此方に来て、他の部隊が門から内部に突入出来る時間稼ぎになる」

話をしながらも、ＢＥＴＡを倒す事を誰一人止めない。ビームバズーカを発射する。要塞級の頭と体をビームが貫通する。

「そちらはアナベル・ガトー少佐ですか？援護はいりますか？」

いきなり通信が入る。この現状で友軍の援護が来たのはありがかった。

「こちらは、アナベル・ガトー少佐だ。援護をお願いしたい」

「了解しました。微力ながらが援護します！」

上空から、一個師団のＭＳが援軍に来てくれた。

ゴゴゴゴーーーン！！

地下からＢＥＴＡが現れた。丁度来た援軍部隊は、上空にいたため被害はなかった。

「ＢＥＴＡ軍団規模の増援です！少佐気をつけてください」

「了解した。全機ＢＥＴＡを一気に叩くぞ！」

「了解です！」

「分かった」

「了解」×多数

援軍部隊が来てくれたこともあり、戦局は一気に我々に傾いた。飛び交う弾幕の嵐。ザク？改のマシンガンが弾幕の雨を降らせ、リック・ドムのバズーカで地面を抉る。何時の間にかあれほど大量に居たＢＥＴＡは、全滅していた。

「門（ゲート）周辺確保しました！」

「ガトー少佐。何時でも突入出来ます！」

援軍で来たザク？改のパイロット達から、門を確保したと通信が入った。

「分かった。援護感謝する。ケリィ、カリウス！突入するぞ！」

「分かった。ガトー！」

「了解です、ガトー少佐！」

私達は、門から内部に突入した。ブースターを吹かして横坑を進む。レーザーマップに最短ルートが表示されているため、迷う事はない。周りには、他に突入してきた５個大隊のザク？改やリック・ドム、リック・ドム？が援護としているため、安心して進行出来る。また、補給部隊も共に進行しているため、友軍の弾切れの心配も少ない。

「ガトー少佐！前方から、師団規模ＢＥＴＡが来ます！」

「分かった。カリウス、ケリィ及びＭＳ２個大隊は私に続け！反応炉を目指すぞ！」

「了解（です）」×多数

ビームバズーカを構えて前方から来る、突撃級めがけて発射する。

「沈めぇぇぇ！」

突撃級数体を纏めて倒す。隙間を作り足場にして、ＢＥＴＡを無視

して奥へと進む。

「各員、ＢＥＴＡは最小限の撃破で構わん！奥に進む事だけを考えろ！」

「了解（です）」×多数

ザク？改やリック・ドム等が、最小限ＢＥＴＡを倒しながらついて来る。更に奥に進む。漸く中層の広場（ホール）に到達した。

「く！漸く中層の広場に到着か」

「そうだな。しかし、流石はフェイズ６ハイヴだけはある。まだまだ先が長いな」

「その通りですね。偽装横坑から、ＢＥＴＡ旅団規模の増援が近付いてきます！」

やはり、ＢＥＴＡは我々を休ませてくれるつもりは無いようだ。

「各員聞いたな？ＢＥＴＡは我々を、休ませてくれるつもりはないようだ。まだ中層だ！諦めずに行くぞ！良いな！」

「了解です！」

「まだまだ、弾薬に余裕は有りますから大丈夫です！」

「此処まで、来たんだＢＥＴＡ達を歓迎してやりましょう！」

各ＭＳのパイロット達の士気は未だに衰える事はない。リック・ド

ムの部隊がジャイアント・バズを構える、一斉射撃でＢＥＴＡを全滅させるつもりだ。

「射ってぇぇぇぇぇぇ！」

ジャイアント・バズから弾が発射される。突撃級に当たり大爆発を起こす。此方に向かっていた旅団規模のＢＥＴＡが全て消滅した。

「良し！道は開けた！反応炉まで一気に進むぞ！」

「オオォォォォ！！」×多数

ＢＥＴＡを蹴散らした道を進む。

更にそれから１時間ほど下に向かって進軍を続けた結果、遂に最下層の大広間（メインホール）目前にまで来た。

「もうすぐ大広間だ！各員最後まで諦めるな！」

此処まで来るのに、どれだけのＢＥＴＡを撃破したか分からない。上では友軍部隊が奮戦して門を守ってくれている。他にも陽動をしてくれている仲間達の為に、我々は反応炉を破壊しなければならない。

「皆、ガトー少佐の言う通りだ！後少しだ！奮起するんだ！」

「そうだ！諦めるな！」

カリウスやケリィが激を飛ばす。

「そうですな。少佐の言う通りだ！」

「あと少しで反応炉だ！もうひと踏ん張りだ！」

皆満身創痍の中、士気を上げる。一路大広間を目指してブーストダッシュで駆け抜ける。

「ガトー！前方からＢＥＴＡだ！師団規模だ！」

レーダーを確認する。前方から師団規模のＢＥＴＡが向かって来ていた。

「く！私の邪魔をするなーーー！」

ビームバズーカを構えて、ＢＥＴＡに突撃する。

「沈めぇぇぇぇぇぇ！！」

ＢＥＴＡをマルチロックして、空中に飛びビームバズーカを発射する。突撃級をビームが貫き要撃級や要塞級、小型種を巻き込んで倒す。

「墜ちろ！ＢＥＴＡ！！」

ケリィのリック・ドムが拡散メガ粒子砲を放つ。突撃級や要撃級を貫通して体に穴を開ける。開いた穴からＢＥＴＡの体液が吹き出る。

「沈め！」

カリウスのリック・ドム?がシュツルム・ファウストを上に放つ。上から来ていたＢＥＴＡを纏めて吹き飛ばす。上からＢＥＴＡの残

骸や体液が飛んでくる。共に進軍していた、ザク？改の部隊がシュツルム・ファウストを放つ。前方から来ていたＢＥＴＡ群を纏めて吹き飛ばす。

「くう！」

爆風を回避するため、近くにあった要塞級の残骸に隠れてやり過ごす。爆風が過ぎてから、機体を移動させる。師団規模で進軍してきたＢＥＴＡは、跡形もなく消滅していた。

「良し！全機大広間に向かって進め！」

「了解！」×多数

それから、少し進軍して遂に大広間にたどり着いた。大広間の真ん中で反応炉が不気味に発光していた。

「フン！不気味な空間だな」

「ええ。嫌な感じがします」

「早く破壊しよう」

「そうだな。ザク？改は、周辺の警戒に当たれ。リック・ドムの部隊はバズーカを構えろ。弾が無い機体は、シュツルム・ファウストを構えろ！一気に破壊するぞ！」

指示を出して準備させる。全機準備が完了した様だ。

「射てぇぇぇぇ！！」

全弾が反応炉に命中して大爆発をおこす。煙が晴れると反応炉は、跡形もなく消滅していた。

「ガトー少佐！残ＢＥＴＡ群が撤退していきます！」

「分かった。残弾に余裕があるものは、追撃してＢＥＴＡを叩け」

「了解しました！ザク？改の部隊で、残弾を確認して余裕が有るものは追撃を仕掛けるぞ！」

「了解！」×多数

ザク？改の部隊が、残弾を確認して追撃戦を開始して行った。

「カリウス。本隊と連絡は取れたか？」

「はい。本隊に通信が届きました。代わりの部隊が来るそうです。その部隊が到着次第、帰投してよいそうです」

「分かった。なら、警戒にあたる。何かあったら通信をくれ」

「了解です」

そのまま、周辺警戒にあたるのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

「デラーズ閣下！ガトー少佐の部隊が突入した、ハイヴから反応炉の反応が無くなりました！」

「なに？本当か！」

ガトーの奴めが成し遂げたか！

「はい。カリウス少尉から通信が入りました！」

「よし！ならば、撤退するＢＥＴＡに追撃を仕掛けよ！ＢＥＴＡの数を減らすのだ」

「了解！レウルーラより、各機へ」

オペレーターが友軍部隊に追撃命令をだす。地表に出てきたＢＥＴＡを、戦艦のメガ粒子砲で掃討し取り逃がしたＢＥＴＡを、ＭＳで追撃するのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

サダラーンにて指揮を執っていると、デラーズ閣下のレウルーラから通信が入った。

「不動准将。デラーズ閣下から入電です」

「ホシノ少佐。何かあったのか？」

「どうやら、アナベル・ガトー少佐がハイヴを攻略したようです」

「そうか。なら負けてられんな」

ガトー少佐がハイヴを落とした以上、俺も後方で指揮を執るより前線に出るか。

「更に入電です。ギャビー・ハザード中佐の部隊も反応炉を破壊に成功したようです」

「ほう。流石中佐だ。俺もうかうかしてられんな」

ホシノ少佐が、報告を上げる。更にこのあと、二つのハイヴが攻略されたと報告が入った。

「ホシノ少佐！指揮を頼む。俺は出撃準備をする」

「了解しました。後は、お任せください」

俺はブリッジを後にして、出撃準備を開始するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第三十四話（後書き）

月攻略作戦は、暫く続きます。

第三十五話（前書き）

ウ～ン。スランプ気味です。では本文をどうぞ。

第三十五話

シーマｓｉｄｅ

私は今ザク？Ｒ－１に乗り、月地表面にて門確保の任務に当たっている。

「墜ちな！」

１２０？マシンガンを要撃級に射つ。弾丸が命中して要撃級から体液が吹き出し絶命する。

「オラよ！」

「くたばれ！化物が！」

僚機のザク？Ｆ２型が、ハンド・グレネイドを投げる。ドドーンと爆発を起こしてＢＥＴＡを撃破する。

「お前達、無理するんじゃないよ！」

「分かってます、シーマ様！」

「大丈夫です。シーマ様！」

部下に気を配りながら、周囲を警戒する。さっきの爆発であらかたのＢＥＴＡは撃破したが、増援が来る可能性がある。

ゴゴゴゴの音と共に大地が小刻みに揺れる。

「シーマ様！ＢＥＴＡが地下から来ます！」

「分かってるよ！皆、飛びな！」

ブーストジャンプで、上空に避難する。ドッバーーンと言う音と共に、地面が吹き飛び増援のＢＥＴＡどもが現れた。

「チッ！また増援かい！たく、キリがないね」

悪態を吐きつつ、ＢＥＴＡをマルチロックする。

ドキューーーーーー

光の塊が通りすぎた。

次の瞬間には、地下進行してきたＢＥＴＡ達が消え去っていた。

光の塊が来た方を見ると、ビグ・ザムが立っていた。

「シーマ様！御無事で？」

ビグ・ザムのパイロットから、通信が入る。

「私は大丈夫だよ。それより、そっちは大丈夫なのかい？」

「はい。大丈夫ですよシーマ様。この、ビグ・ザムて機体は凄い機体ですよ！」

「分かってるよ！そんな事は」

事実、増援で現れたＢＥＴＡを一撃で全滅させたじゃないか。まあ、このビグ・ザムの一撃で、大体のＢＥＴＡが消滅するから、私らが無理する必要が無いのは、ありがたい。

「海兵隊全機無事かい？」

「はい。シーマ様、海兵隊１個連隊全員無事です！」

「ビグ・ザムの部隊２０機も、損害有りませんシーマ様！」

部下の確認をしてみると、一人の離脱者もいなかった。周囲を警戒しながらレーダーを見ると、友軍部隊が此方に向かって来ていた。

「シーマ様！レーダーに友軍部隊の反応です！」

「あいよ！見てるさね！ハイヴの内部に突入する部隊だよ！」

モニター画面を見ると、真っ赤なザク？が此方に向かって来ていた。

「おお！赤い彗星だ！赤い彗星のシャア大佐が来たぞ！」

部下の一人が、オープンチャンネルで話す。すると、真っ赤なザク？から通信が入った。

「ちがぁぁぁぁぁうぅぅ！！赤い彗星じゃない！真紅の稲妻、ジョニー・ライデンだ！」

「ああ。キマイラ隊隊長のジョニー・ライデン少佐かい？」

よく見たら、頭部の所にユニコーンの紋章が入っていた。まあ、所

謂勘違いってやつだね。

「そうです。そちらは、シーマ海兵隊隊長のシーマ・ガラハウ中佐ですね。今回の門確保、お疲れ様です」

機体を操作しながら、軽く笑い敬礼をするジョニー・ライデン少佐。普通の女性なら、その整った顔立ちと甘いマスクで一ころになるだろう。

まあ、私には悠斗がいるから関係無いけどね。

ジョニー・ライデン少佐の後方から、大量のＭＳとビグ・ザムが向かって来る

「ライデン少佐。門は私ら、海兵隊が守ってやるから、反応炉は任せたよ！」

「了解です。任せてください」

互いに敬礼する。

ジョニー・ライデン少佐の乗ったザク？の後ろに、ライデン少佐の部下達が来る。

「ライデン少佐。ＭＳ二個連隊、及びＭＡビグ・ザム１０機配置につきました！」

「よし！突入するぞ！目標はハイヴ最下層の反応炉だ！全機気を引き締めて行くぞ！」

「了解（です）」×多数

ジョニー・ライデン少佐の真紅のザク？が、門を通り内部に突入し

た。次々とＭＳやビグ・ザムが内部に突入して行った。ゴゴゴゴと、地面が細かく揺れる。

「シーマ様！大変です！」

部下の一人が血相を変えて、通信を寄越した。

「どうしたんだい？何かあったかい？」

「ＢＥＴＡの地下進行です！３方向から、師団規模のＢＥＴＡが来ます！」

「分かってるよ！２方向にビグ・ザムを廻しな！残りの一方向にＭＳ二個大隊が向かうよ！」

「分かりました！」

部下達が指示に従い、各方面に散った直後、ドッーーーンと言う音と共に、ＢＥＴＡ達が地表に現れた。

「お前達行くよ！」

「了解です、シーマ様！」×多数

ブーストダッシュでＢＥＴＡ群に接近する。
前方から、突撃級が雪崩の様に突っ込んでくる。

「チッ！墜ちな！」

ブーストジャンプで、一旦上空に回避し突撃級が走りさり、がら空

きになった背中に１２０?マシンガンを射つ。

ダンダンダンダンダンダ

柔らかい背後に銃弾を浴び、体液を撒き散らしながら絶命する。一個大隊のザク?Ｆ２型が、マシンガンやバズーカを放ち、ＢＥＴＡ群を迎撃する。もう一方の、リック・ドムの大隊もジャイアント・バズを射って、ＢＥＴＡ群を吹き飛ばした。

「お前達無理するんじゃないよ!厳しくなったら、後退して距離をとりな!」

「シーマ様!危ない!」

部下が声を上げる。機体を振り向かせると、要撃級の前腕部が迫っていた。

「フ!この、シーマ様の上の枚を跳ねようてかい?甘いんだよ!」

即座にクイックブーストをして、距離をとりマシンガンを射つ。要撃級は、前方に１２０?マシンガンの鉛弾を食らい、蜂の巣になった。

「御無事ですか?シーマ様!」

「大丈夫だよ。あの程度の事なら、問題ない」

マシンガンを放ちながら、部下とそんな話をしていると、私らの上空を3機のザク?Ｆ２型が通り過ぎた。

「オシ！いっちょ派手に殺るか！」

「リョーコちゃんは元気だな」

「まあ、卑猥なことで」

3機のザク？F2型のパイロット達の、会話が聞こえる。奴らオープンチャンネルだって事に、気づいていないのかい？

「お前ら！真面目にやれ！」

「そいじゃ殺るよ！」

「優しくしてね（ポッ）」

1機のザク？F2型が、後ろに下がる。残った2機がマシンガンを放ちなBETAを撃破しながら、要塞級に突撃していく。

「お前ら真面目にやれぇぇぇぇ！」

2機のザク？F2型が周りの、要塞級をマシンガンで蜂の巣にして、最初に下がった隊長機のザク？F2型が、スパイクシールドで要塞級の頭をぶん殴る。要塞級から大量の体液が噴出する。隊長機は、それを被る前に後方噴射して距離をとった。周囲を確認して見ると、大部分のBETAが撃破されていたが、少数大型種がまだ残っていた。そちらにロックオンすると、大型メガ粒子砲が上から飛んできて、残っていた大型種を飲み込み、消滅させていた。

「ハッハハハ！ビグ・ザムが量産されたあかつきには、BETAなどあっという間に叩いて見せるわ！」

オープンチャンネルで、うるさい位バカ笑いするパイロットの声が聞こえる。

（何で、私の部下は馬鹿ばかりなんだろう？）

私は、レーダーで周囲の安全を確認した後、先程のザク？Ｆ２型のパイロットに、通信を入れた。

「そこのザク。所属はどこだい？」

「え？オレらの事ですか？」

「他に誰が居るってのさ？あんた達の事だよ」

隊長機のザクのパイロットから、通信が返って来る。通信画面に緑色の髪の毛の女が映しだされた。

「あの？貴女は何方ですか？」

今度は、ニコニコ笑うメガネの女も映しだされた。

「私かい？第４師団所属シーマ海兵隊隊長シーマ・ガラハウ中佐さ」

「え！シーマ・ガラハウ中佐！し、失礼しました！お、オレは、第４師団サダラーン所属、スバル・リョーコ中尉であります！先程は、失礼しました！」

慌てながら自己紹介する、スバル中尉。

「し、失礼しました。同じくアマノ・ヒカル少尉と」
「マキ・イズミ少尉であります」

片目を髪の毛で隠した、雰囲気の位女が映しだされた。全員が揃って敬礼する。私は返礼して、話をする。

「それで、何であんた達は此処にいるんだい？サダラーン所属なら、此方は作戦空域じゃないはずだろう？」

「いや、それが、その、」

歯切れの悪い返事をする、スバル中尉。二人の少尉はクスクスと笑っている。

「だって、シーマ中佐。スバルちゃんは、作戦空域を間違えちゃったんですよ」

「猪突猛進。猪だね」
「うるせー！勘違いしてただけだよ！」

3人で、口喧嘩を始めた。どうしようか考えていると、部下から通信が入った。

「シーマ様。不動の若様が出撃なさるそうです」

「なに？悠斗がもう出るのかい？」

「はい。反対側でガトー少佐がハイヴを攻略したので、出撃なさるとの事です」

「分かった。私らは、現状維持の間まで行くよ！」

「分かりました！失礼します」

部下との通信が切れる。３人はまだ喧嘩していた。

「３人共！いい加減におし！！」

私の怒鳴り声が響く。口喧嘩していた３人は、ピタリと静かになる。周りの部下達は一瞬動きが止まるが、すぐに元に戻り警戒に当たる。

「全く。悠斗が出撃するそうだよ。あんた達は、本来なら不動准将の出撃するハイヴに居なきゃならないんだが、仕方ないから私らの管轄で戦闘を続行しな」

コクコクと頷く３人。驚きが強かったのか、未だに声が出ていない。

「まあ、悠斗には私から言っとくから安心して、戦闘に励むんだよ。分かったね！」

「「「はい！シーマ中佐！」」」

元気な返事をする３人。そのまま、門確保の任務を継続するのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

リョーコｓｉｄｅ

オレらは今シーマ中佐の部隊の戦闘空域で、門確保の任務に当たっている。

「リョーコちゃん。さっきのシーマ中佐怖かったね」

「ああ。そうだな」

キレたシーマ中佐は、本当に恐ろしかった。ああ言う人は、怒らせたらいけないと肌で感じるはめになった。

「でも、漫画のネタには使えそうだよ！」

ヒカルは、どうやら余り懲りていないようだ。

「止めとけ。また怒られるぞ」

「ブー！リョーコちゃんの意地悪」

「意地悪で結構。シーマ中佐に怒られるよりは、ましだよ」

そんな事を話ながら、周囲警戒を続けると、ゴゴゴゴと音がした。

「ヒカル、イズミ、どうやら来るぞ」

「うん。そうだね」

「来た」

ゴゴゴゴーーーンと言う音と共に、ＢＥＴＡ群が地表に出現した。

「行くぜ！」

「行くよ！」

「行く」

オレらは、フォーメーションを組んでＢＥＴＡ達に、突撃して行った。

リョーコｓｉｄｅｏｕｔ

第三十五話（後書き）

ヤバイ。腰が痛すぎて、シャレにならん。しかも小説も思い浮かばなくなりそうだ。

第三十六話（前書き）

やっと更新出来ました。今回で月攻略作戦はおしまいです。では、本文をどうぞ。

第三十六話

悠斗ｓｉｄｅ

俺はブリッジを出て、更衣室で白を基調にしたパイロットスーツに着替え、エレベーターに向かっていた。

（フム。予定より早くハイヴが墜ちたな）

移動しながら、頭の中で再度ハイヴ攻略のシュミレーションをする。ガトー少佐のハイヴ攻略を皮切りに、各地で反応炉が破壊されハイヴが攻略されている。予定より早い速度でハイヴが陥落している。

（まあ、所詮はシュミレーションはシュミレーションに過ぎんか。良い方向に作戦が進んでいるから、問題ないか）

思考する事を止める。曲がり角が見えてきた。曲がり角を右に曲がる。エレベーターが見えたと思ったら、エレベーターの入り口の前に一人の男性が待機していた。俺はそのまま、エレベーターの入り口前まで進む。

「不動閣下。お待ちしておりました」

「マツナガ少佐。出迎えご苦労」

そう、白狼のシン・マツナガ少佐が俺を待っていたのだ。互いに敬礼して、エレベーターに乗り込む。格納庫のある階に向かう様に、

マツナガ少佐がパネルを操作する。
エレベーターが起動し、目的の階に向かって移動し始めた。お互いに向かい会う。マツナガ少佐が、チューブ付きの袋が6個入ったカゴを寄越した。

「不動閣下。これをお持ちください」

「うん？戦闘食か。大丈夫だ。いらんよ」

手を振り、いらないと合図する。

「いえ、持っていってください。今回の作戦は長時間に至るのは明確です。ならば、艦に戻って来れるか分かりません。だからこそ、戦闘食を機体に積んで欲しいのです」

マツナガ少佐が、左手に持ったカゴを付き出す。

「ハア。分かった。なら貰うよ。だが、マツナガ少佐の分は有るのか？」

右手でカゴを受け取り、そのまま腰に右手を当てる。今俺が、マツナガ少佐から貰った事で、マツナガ少佐の分が無いのは困る。

「大丈夫です。ほら、此方に」

右手を背中に廻す。影から、同じカゴが出てきた。

「なんだ有るのか。そう言えば、俺の護衛をわざわざマツナガ少佐が担当するのか？」

そう言うと、マツナガ少佐が苦笑いする。

「いえ、実は私が担当する予定では無かったのですが、いろいろ有りまして担当する事になりました」

「どう言う事だ？」

「はい。本来担当する予定だった部隊が、間違って出撃したあげく戦闘空域も間違ってしまい、たまたま出撃前の私に白羽の矢が立ったのです」

そう言うって、後頭部をかくマツナガ少佐。
運が無かったとしか、言えないな。
てか、担当する予定だった部隊の隊長は何やってんだ？勘違いにも程があるだろうに。

「そうか。わざわざ済まんなマツナガ少佐」

「いえ、大丈夫ですよ。それに、不動閣下と共に出撃すると聞いた時に、曾てドズル閣下と共にソロモンを脱出する部隊の為の、時間稼ぎをした事を思い出しましたから」

少し、視線を落とすマツナガ少佐。本来の彼が居たＵＣ（ユニバーサルセンチュリー）の時代では、ドズルを兄貴分の様に慕っていたマツナガ少佐。その、ドズルを死なせる事になった戦いに、彼はドズルと共に出撃しているからな。
俺と出撃する事で、俺が同じ様にならないか心配しているのだろう。
マツナガ少佐の肩に手をポンと置く。

「安心しろマツナガ少佐。俺は死なんよ」

「不動閣下」

「俺が死なないなんて、ＢＥＴＡ日本進行の時に散々間近で見ただろう？」

「しかし、万が一の事があったら！」

マツナガ少佐の両肩に手を置く。

「安心しろ！ソロモンの時と違い我々が勝っている。恐れる事は何もない。それに、俺を死なせないようにマツナガ少佐がいるのだろう」

「ッ！そうでした。必ずやこの白狼の紋章に賭けて御守りします！」

即座に敬礼するマツナガ少佐。俺も両肩から手を離し、返礼する。

チーン

エレベーターが止まり、扉が開く。

「期待しているぞ、マツナガ少佐。だが、俺は単機でハイヴ内部に突入するから、入口迄護衛してくれれば良いからな」

「分かりました」

エレベーターを出て、格納庫のドアを潜る。格納庫内に出ると、出撃するＭＳが準備をしてカタパルトが空くのを待っていた。マツナガ少佐と別れ、格納庫の一角に有る、俺は自分の機体に向かう。自分の機体のハンガーを見る。其処には、白を基調に背後の大型スラ

スターと左腕に装備された、シールドの一部が青く塗装された中世の騎士を思わせる機体が待機していた。

「やっぱり、宇宙でハイヴ攻略するならこいつだよな」

どこぞの火消し風さんが乗っていた機体だしな。コックピットに乗り込み機体の電源を入れて、ＯＳを立ち上げる。機体の点検を始める。

「各種オールグリーンだな」

「当たり前だよ。俺達整備班が、全力で整備したんだからな」

声がしたので、顔を上げるとノーマルスーツを着たアストナージ整備主任がコックピット前にいた。

「おお！アストナージさんか！忙しいなか来てくれたのか！」

「おうよ！不動閣下が乗る機体だって事で、整備班がの総力を結集して、最高のコンディションにして置いたんだぜ！」

グッと親指を立ててウインクするアストナージ整備主任。ウインクは、いただけ無いが整備して貰った事には感謝している。

「ありがとう。このコンディションなら、全力で戦闘出来る！」

「そうかい。しかし、本当にリミッターを外して良かったのかい？」

「ええ。構いません」

まあ、この機体のリミット解除状態のスピードなら、確実に普通のパイロットならブラックアウトになるだろうが、マスターアジア師匠と共に重力１０００倍下の元で訓練してきた俺には、問題が無いレベルだった。

「まあ、気を付けてくれよな。あと、言われた通りの改造になっているから安心してくれ」

「何から何まで無理を言って、スミマセンね」

「な～に、良いって事よ。俺達整備屋からすれば、これだけ弄りがいのある機体は、そうそう無いからな」

そう言って、笑うアストナージ整備主任。本当に整備班の皆さんには感謝だな。俺の魔改造＋強化パーツの正で、整備するのに大変な機体になってしまったからな。（強化パーツのおかげで、コックピット周りしか整備しない）

ちなみに、この機体の強化パーツは、フェイズシフト装甲、Ｉフィールド（レーザーだって無効に出来る）、無限エネルギー回復システム、無限弾薬回復システム、スーパーナノスキン装甲（ナノスキン装甲の４倍の回復力）、ゼロシステム、ＥＸＡＭシステム、フルサイコフレーム等を付けている。また、魔改造により最高速度は測定不能となっている。（リミッターが掛かっていても測定不能だった）まあ、普通のパイロットなら確実に死ぬ事が確定してしまった機体になってしまった。

まあ、俺の為のワンオフの機体だから問題無いんだけどね。

「良し！準備が完了した」

「お！じゃあ、気を付けてくださいよ。機体は壊れても代えが有り

ますけど、パイロットには代えが無いんですからね」

「ああ、分かっている」

互いに右手を付きだし、拳をコンと当てる。アストナージ整備主任が、機体から離れる。俺はコックピットを閉める。

「不動閣下が出撃するぞ!!カタパルト射出準備だ!!」

アストナージ整備主任が、カタパルトを開ける指示を出す。俺はそのまま機体を動かし、カタパルトの前まで進む。

「白狼のシン・マツナガ出撃する!」

真っ白なザク?R-1型がカタパルトから射出されて、出撃して行った。俺は機体を動かし、カタパルトに足を着ける。

通信が入ったて来て、イルマ中尉がモニターに映し出される。

「不動閣下。今回は不備があって申し訳ありません」

「護衛の件なら構わん。それより、戦局はどうなっている?」

「はい。戦局は我軍が優位に立っております。先程新たに、黒い三連星がハイヴを攻略しました。また、その少し前にランバ・ラル少佐がハイヴを陥落させました」

「そうか。デラーズ閣下の方はどうなっている?」

「はい。彼方は、ソーラ・システムを使用しただけあって、シャア・アズナブル大佐やロイ・グリンウッド少佐が、ハイヴを攻略しまし

た」

「そうか。分かった。なら、止めを刺してくるさ」

「不動閣下。御武運を」

互いに敬礼する。モニター画面から、イルマ中尉が消える。

「不動悠斗。トールギス？出撃する！」

カタパルトから射出され、宇宙に飛び出した。慣性の法則により真っ直ぐ進む。俺は大型スラスターに火を入れる。ペダルを軽く踏んだだけで、一瞬にしてマッハ５まで到達する。常人なら耐えられないＧが俺を襲う。

「うん？まあ、こんなもんか」

一気に月に近ずく。マツナガ少佐のザク？Ｒ－１型を見つけた。逆噴射してスピード落とし隣に着く。

「不動閣下！その機体は新型ですか！それより、何てスピードですか！」

「コイツは、トールギス？。俺の専用機だよ。速いのは背後の大型スラスターのおかけだよ」

「そうですか。では、月まで護衛をさせていただきます」

「良し！頼むぞ！」

「ハッ！お任せください」

マツナガ少佐のザク？Ｒ－１型と共に、月に向かう。サクロボスコハイヴが見えてきた。

「マツナガ少佐、止まれ」

「どうされました？」

「なに、まずはＢＥＴＡに挨拶がわりに一発おみまいするのさ」

マツナガ少佐のザク？Ｒ－１型が少し距離をとる。俺はトールギス？のメガキャノンをサクロボスコハイヴにロックオンして構える。エネルギーをチャージさせる。メガキャノンの砲身の間にエネルギーが収束していく。

「エネルギー収束率、９５、９６、９７、９８、９９、１００！」

メガキャノンのエネルギー収束率が１００％になった。

「メガキャノン、ファイヤ！」

ドキューーーンンン

収束された、ビームが光の奔流となって進む。

サクロボスコハイヴを、ビームが貫く。ビームが消えた後には、直径百キロ、深さ５キロに渡る深いクレーターが出来ていた。

「まあまあの威力だな」

メガキャノンの威力に満足した俺は、月に向かって進もうとした。

「不動閣下。些か、威力が強すぎるのでは？」

「そうか？こんなもんだろう。ビグ・ザムだって、フルパワーで射てば此くらいは出来るから、同じだよ」

凄く納得のいかない表情のマツナガ少佐。まあ、普通のＭＳがこれだけの威力のある兵器を積んでいる事が、あり得ないからな。納得出来ないのも無理はない。

「まさか、不動閣下はこれを試す為に、ＭＳにサクロボスコハイヴを攻撃せずに、他のハイヴを攻略するように指示を出していたのですね」

「そうだ。友軍を巻き込みたくないからな」

ハアと、ため息をはくマツナガ少佐。顔が疲れきっている。

「これだけの威力のある兵器を積んでいるいるんですから、護衛は返って迷惑になりそうなので、私は他のハイヴ攻略に廻ります！」

「分かった。マツナガ少佐の武運を祈る」

「ハッ！御武運を」

マツナガ少佐のザク？Ｒ－１型が離脱する。それを見送って、大型スラスターを吹かして、ハイヴの内部に突入する。ハイヴの半分近くが、先程のメガキャノンのおかけで消滅しているため、中層付近からの攻略になった。モニターに映し出された、ハイヴマップに従

い進んでいくと、全方から軍団規模のＢＥＴＡが向かってきた。

「まずは、武器の試験と行きますか」

大型スラスターを吹かして要塞級に接近する。

「くらいな！」

左腕シールドに装備された、ヒートロッドが伸びる。そのまま、ヒートロッドが要塞級の頭から真っ直ぐ貫通し、体液を撒き散らして絶命する。

「貫通能力に問題なし。なら、横に振ってみるか」

ヒートロッドを今度は、横一閃に振るう。要撃級や突撃級を切り裂く。要撃級は体を横に真っ二つにされ、突撃級は柔らかい側面から硬い前方の装甲を切り裂かれて絶命した。

キュルリーーーン

ニュータイプのカンが危険を知らせる。即座にスラスターを吹かして横に回避し、機体を反対に振り向かせ頭部バルカンを放つ。

「やはり、要撃級か！」

先程いた場所に、後ろから要撃級の前腕が迫っていた。頭部バルカンの直撃をうけ、体液を巻き治し絶命した。

「良し！最後はビームサーベルだな。ガンダムエピオンみたくやってみるか」

シールドからビームサーベルを抜く。ガンダムエピオンがバルジを真っ二つにしたように、俺は一旦後方に下がり距離を取ってから、ビームサーベルにエネルギーをチャージする。
ビームサーベルの刀身がどんどん伸びてゆく。
かなりの高さまで伸ばし、横に振るう。

一閃

軍団規模で迫っていたＢＥＴＡを全て切り裂く。軍団規模のＢＥＴＡから体液が吹き出し、壊れたスプリンクラーの要に体液が飛び散り、辺り一面ＢＥＴＡの残骸だけが残った。

「ビームサーベルの威力は問題無しだな。後は、反応炉を叩くだけだな」

ビームサーベルをシールドに納める。
大型スラスターを吹き出し、一気に最下層を目指して突き進む。
１５分程すすむと、サクロボスコハイヴの大広間に到着した。

「居たな！重頭脳級（ブレイン）！」

大広間の真ん中に、反応炉とが有りその上に重頭脳級が居た。重頭脳級から触手が迫ってくる。
ビームサーベルを抜き、触手を切り裂く。尚も大量の触手が迫ってくる。

「チッ！貴様らから感じるのは、汚ならしい感情ばかりだ！！不愉快だ！」

頭部バルカンで迎撃し、メガキャノンをチャージする。迫ってくる触手をヒートロッドでも、切り裂く。

「ゼロシステムが教えてくれる。貴様の未来は消滅だとな！」

メガキャノンのエネルギー収束率が、２０％を越えた。充分重頭脳級と反応炉を破壊出来る。

「墜ちてもらう！メガキャノン、発射！」

右腕に装備された、メガキャノンを放つ。重頭脳級と反応炉をメガキャノンのビームが包む。ビームが消えた後には何も残っていなかった。

「此方、不動悠斗だ。サダラーン聞こえるか？」

「此方サダラーンオペレーター、イルマです」

「イルマ中尉か。サクロボスコハイヴ、反応炉及び重頭脳級の撃破を完了した」

「はい。此方でも確認しました。お疲れ様です。警戒任務に二個師団が行きますので、不動准将はそのまま他のハイヴ攻略に向かってください。

「了解した」

イルマ中尉との通信を終えると、ザク？Ｒ－１型の部隊がやって来た。

「不動閣下、お疲れ様です。後は、我々が引き受けますので、閣下は他のハイヴ攻略に向かってください」

「分かった。後は頼む」

そう言って、ザク？Ｒ－１型の部隊に警戒任務を任せ、大型スラスターを吹かして地表に向かった。それから、１日を費やして月にある全てのハイヴを攻略し、チェンバロ作戦が完了するのだった。チェンバロ作戦の完了に伴い、人類は約３０年振りに月を取り戻したのであった。尚、このチェンバロ作戦を知るものはメビウスのメンバーを除くと、国連事務総長である、ハマーン事務総長以外は誰も知らない、極秘作戦であった。

１９９９年1月3日に行われた本作戦は、人類にとって大きなターニングポイントとなるのであった。新年が明けたばかりである。激動の時代の歯車は、ゆっくりとしかし確実に動いて行く。一人の男がオルタネイティヴ（その他の可能性）を広げて行くのであった。今、『あいとゆうきのおとぎばなし』の歯車が少しずつ動きだす。一人の少女と一人の青年の為の物語が、一人の男の手によって、悲劇から幸せになる為の物語になるように脚本を書き換えられた。その脚本を持った男は、果たしてどうするのか？まだ、誰も知らない。

ただ、広量たる宇宙の中で、星が美しく輝いているのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「タ・・・・ケ・・・・・ル・・・・チャ・・・・・ン・・・・ア・・・イ・・・タ・・・イ・・」

何処かで薄気味悪く何かが光るのだった。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

第三十六話（後書き）

月攻略終了したから、漸くゲーム本編のプロローグにあたる、明星作戦が書ける！まあ、暫くは宇宙がメインになると思いますけど。

第三十七話（前書き）

やっと出来た。ちょっとスランプ気味な作者ですが、頑張りたいとおもいます。では、本文をどうぞ。

第三十七話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１月１０日
宇宙要塞ソロモン

月攻略作戦。通称チェンバロ作戦は目標であった月を取り戻す事に成功した。１月３日から４日にかけて行われた本作戦は、１名の戦死者を出すことなく完了した。
月攻略を完了した俺達は、艦隊にミラージュコロイドを展開させソロモンに全艦帰投した。
そして今日は、月を奪還した事による祝勝会が開かれていた。
デラーズ閣下がグラスを片手に乾杯の音頭をとる。

「皆、ご苦労であった。先の月攻略に置いて、貴殿貴女らの活躍が有ってこそ月を取り戻す事が出来た。束の間の間世俗を忘れ、おもいっきり羽を伸ばしてくれ。では、乾杯！」

「乾杯！」×多数

カチンカチン

出席者達がグラスを当て乾杯する。

ゴクンゴクン

グラスの中に入っていた、ワインを飲みほす。

「フゥ。旨い」

今日の祝勝会に出ている酒や食べ物は全て最高級の物ばかりだ。まあ、チートプラントで大量生産して用意させたんだけどね。空いたグラスを、近くにいたウェイターのトレイに置き、新しいワインを手に取り、会場を見渡す。

「取り敢えず何処に行こうかな？」

周囲を見渡すと、先ほど乾杯の音頭を取っていたデラーズ閣下が居た。

人を避けつつデラーズ閣下に近ずく。

「デラーズ閣下。お疲れ様です」

「おお！悠斗か！貴殿もご苦労だったのう」

軽く会釈し、デラーズ閣下の隣に移動する。

「先の月攻略作戦が上手く行って、本当良かったです」

「うむ。先の月攻略作戦は、一歩間違えば大打撃を受ける可能性もあったからのう」

「これも、デラーズ閣下の部隊が最初にハイヴを攻略して下さったからです。最初のハイヴ陥落の一報で、兵達の士気は大いに上がり

ましたから」

そう言って、デラーズ閣下に頭を下げる。
デラーズ閣下に頭を上げる様に言われ、頭を上げる。

「なに、ワシはソラー・システムを射っただけだ。何より、悠斗の部隊が陽動をしてくれていたおかげで、ＢＥＴＡが地表に出てきて居たからこそ、大打撃を与えてハイヴを攻略出来たのだ」

「そう言って頂ければ、幸いです」

「うむ。堅苦しい話しはこれくらいにして、祝勝会を楽しもう」

「ええでは」

「うむ」

「「乾杯」」

カチン

グラスを軽く当てデラーズ閣下と乾杯する。

ゴクンゴクン

口一杯にワインの味が広がり、芳醇な香りが鼻を抜ける。グラスから口を離すと、デラーズ閣下が近くに冷してあったワインボトルを手に持っていた。

「うむ。なかなか良い飲みっぷりよ。では、もう一杯」

「あ、どうも申し訳ありません」

トクトクトク

グラスに再びワインが注がれる。デラーズ閣下から、ワインボトルを受け取りデラーズ閣下にも、返杯する。

「ささ、デラーズ閣下もどうぞ」

「うむ。頂こう」

トクトクトク

デラーズ閣下のグラスにも、ワインを注ぐ。
ワインボトルを近くのテーブルに置く。

「そう言えば悠斗よ。貴殿に聞きたい事があったのだ」

「うん？と、失礼しました。それで聞きたい事とは？」

ワインを飲んでいる最中に話しかけられた為、素の返事をしてしまった。デラーズ閣下は、特に気にした様にはなかった。

「なに、簡単な事よ。いつ結婚するのだ？」

「！ゲッホゲッホ」

いきなりなに言ってるんですか！デラーズ閣下！ワインを吹き出しそうになって、飲んだら気道に入ってむせましたよ！

呼吸を整えながらデラーズ閣下を見ると、ニヤニヤと笑っていた。

「ゴホン！失礼ですが、質問の意図が分かりませんのですが？」

「なに、ワシとしては不動准将がそろそろ結婚を考えても良い年だと思っての、それで聞いたのだ」

デラーズ中将がそう言った瞬間、近くに居た女性陣の視線が不動准将に集中する。

「（はて？視線が集まった気がした様な？気のせいか？）いや、まだ恋人すら居ないのに結婚と言われましても」

「（ふむ。此れだけの女性陣からの好意の視線に、気付かない辺りは鋼入りだのう）では、好きなおなごは居るか？」

デラーズ閣下の問いかけに、腕を組んで考えてみる。が、特に思い当たる節はなかった。

「いや、今の所居ませんね」

「なに？いないと申すか？」

非常に驚いた顔をするデラーズ閣下。別に、変なことを言ってはいないはずだ。

（きた！まだチャンスがある！）×大多数の女性陣

（ふう。まだ、私の気持ちには気付いてくださらないのですね悠斗）↑元米軍の衛士

（クッ！やはり、前に宇宙に来たときのチャンスを、生かすべきだった！）↑海兵隊指揮官の中佐

（・・やはり、アキトさん以上の鈍ちんです。計画の再考の必要があります）↑電子の妖精

（チッ！やっぱり、接点が少ないのは厳しいね。大丈夫！まだ、挽回出来るさ）↑某猫目の巨乳さん

（う～ん。やはり、もう少し積極的に行った方が良いのでしょうか？）↑褐色肌のピンク髪さん

祝勝会の会場に入る女性陣はそんな等を、考えていた。そして、遠く離れた地球でも今の話を感じ取るものがいた。

バキ

室内に何かが折れる音が響く。その物音に気付いた女性秘書が、書類から視線を外して音のした方を見ると、事務総長がボールペンを握り潰していた。

（フフフ。悠斗よ。貴様は私の者なのだから、誰にも譲らんからな）

何やら、笑う事務総長が怖くて秘書は、見なかった事にして仕事に戻るのだった。

そんなことを女性陣が考えているなど知らずに、俺はデラーズ閣下とワインを飲みながら話を続ける。

「しかし、貴殿は結婚願望は無いのか？」

デラーズ閣下が、ワインを注ぎながら聞いてくる。俺は近くのテーブルにあった、クラッカーを頬張る。サクとした音がする。

「う～ん。そんなことなど、考えたこと有りませんでしたね」

「何故だね？」

「今まで、そんな余裕が有りませんでしたから」

この世界に初めて来たときは光州作戦だったし、それが終わったらＢＥＴＡの日本進行だったからな。それが済んだと思ったら、横浜ハイヴ建設だったな。そして最後に月攻略作戦ですからね。

この世界を救う事に頭が一杯だったから、恋愛なんて考えている余裕がありません。そんなことを考えていると、デラーズ閣下が俺の肩に手を置いた。

「悠斗よ。まだ貴殿は若いから焦る必要は無いかも知れんが、もう少し女心を知るように努力するのだな」

「は、はあ？」

「では、悠斗よ。祝勝会をゆっくりと楽しむのだぞ」

そう言ってデラーズ閣下は、俺から離れて行くのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

悠斗と別れてから会場を移動して、ガトーがいるテーブルに着く。

「デラーズ閣下。お疲れ様です」

「うむ。ガトー、貴殿の活躍は誠に大義であった」

ガトーがワシに気付いて敬礼する。ワシも返礼してガトーと向き合う。

「して、閣下は不動准将と何を話していられたのですか？」

「うむ。悠斗に好きなおなごがいるか、訪ねてみたのだ」

「それで、不動准将の返事は？」

やはり、ガトーも気になっていたようだ。

「残念ながら、いないそうだ」

ワシはそう言って、手に持っていたグラスのワインを飲む。年代物のワインだけあって旨かった。

「やはり、そうですか。帝国に演習に行った時に聞いてみましたが、

あの時から変化なしですか」

額に手をあてて、ため息を吐くガトー。やれやれと言った表情をしている。

「まあ、ワシからも女心を勉強する様に言ってはみたから、あの鈍さも改善されれば良いがの」

「ええそうですね。ワインをお注ぎします」

「おお！すまんなガトー」

トクトクトク

空のグラスにワインが注がれる。再びワインを飲みつつガトーと、話を続けるのであった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

デラーズ閣下と別れた俺は、会場を散策していた。あちこちで兵士達が酒を酌み交わしている。

それらを横目で見つつ、移動すると前方のテーブルに、ジョニー・ライデン少佐とグレミー・トト中尉のイケメン二人組がいたので、近づいていった。二人とも俺に気付いて敬礼する。俺も返礼する。

「ライデン少佐。ハイヴ攻略ご苦労だったな」

「いえ、光線級のいないハイヴ攻略なんて、楽なもんでしたよ」

グラスを片手に、ハイヴ攻略を余裕と言って笑うライデン少佐。

「グレミー中尉も、ご苦労だったな」

「いえ、大した事ありませんでしたよ。あんな見た目が汚ならしい化け物どもなど、いくら来ようと私の相手にはなりません」

そう言ってグラスに入っていたワインを飲みほすグレミー中尉。よくみると、二人ともかなり顔が赤くなっていた。

「二人とも、随分飲んでいるんじゃないのか？」

「全然大丈夫ですよ！こんなの酔ってる内に、入りませんから！」

「そうですとも！私にかかれば、酒などどうと言うことはありません！」

二人の周囲を確認してみると、大量のワインの空きビンが転がっていた。明らかに飲みすぎだ。

「まあ、二人がそう言うなら止めはせんが、程ほどにな。そう言えば、二人は何を話していたんだ？」

「なに、大した事じゃないんですがね」

「はい。モテるにはどうしたら良いか、話しあっていました」

俺は、ズッコケそうになった。俺が話しかける前まで、真剣に話し合いをしていたと思ったら、そんな内容だったんですか。

「二人ともイケメンで、モテている様に思うんだが？」

「「甘い！甘いですよ！不動閣下！」」

ビシと音がしそうな勢いで、二人が俺を指差す。

「良いですか！いくら顔が良くたって、女にモテなきゃ意味が無いんですよ！」

「そうですよ！男は、モテてナンボなんですよ！不動閣下の様に女性から普通にモテるなら良いですが、そうでない我々は努力しなければならないのです！分かりますか？」

「いや、俺はモテて無いしな」

俺がそう言った瞬間二人から、嫉妬で人が殺せる位の視線を受けた。

（あれ？もしかして、地雷踏んだかな？）

「良いですか！不動閣下、大体貴方は」

ガシ！

ライデン少佐が俺を説教しようとした瞬間、誰かがライデン少佐とグレミー中尉の肩に手を置いた。

「「ん？誰だ？」」

二人が振り向いた瞬間固まった。振り向いた先には魔王がいた。

「ちょっと、頭冷そうか」

そう言って某管理局の白い魔王の様な台詞を言って、数人の女性がライデン少佐とグレミー中尉を、引張って外に出て行った。

「ちょ、待って！た、助けて！」

「な？何故私まで？」

「「アーーーー！！」」

何やら二人の断末魔が聞こえた。だが、誰も気にすることなく祝勝会は進んで行くのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第三十七話（後書き）

後、1話ほど祝勝会が続きます。感想などがあれば、どうぞ。

第三十八話（前書き）

祝勝会終了。では、本文をどうぞ。

第三十八話

悠斗ｓｉｄｅ

ジョニー・ライデン少佐とグレミー・トト中尉達が、女性達に連れていかれてしまったので、再び会場内を散策する。移動するたびに、いろんな人達から月攻略作戦の成果を誉める言葉や、作戦中に助けた礼を言われたりした。そのたびに、グラスに酒を注がれて飲むのが大変だったが、無下にする事も出来ないのでキチンと飲みました。

（ふう。感謝されるのは良いことなのだが、あまり飲まされるのもキツいな）

今日の祝勝会には、階級や年と言った堅苦しい縛りがないので、皆楽しそうに酒を飲んでいる。会場を見渡してみれば、肩を組酒を飲む者。楽しげに歌う者。戦禍を自慢する者等、多種多彩な祝勝会になっていた。

（皆、楽しそうで何よりだ。まあ、今日くらいは羽を伸ばしてもらわないとな。また明日からは、大変な日々が始まるのだから）

月を攻略したことにより、宇宙で取れる選択の幅が広がった事が、今回の作戦での一番の成果だ。

（月ハイヴ内で、Ｇ元素の確保は成功した事により、此を交渉の道具に使うもよし。技術転用して兵器にするもよしだからな。まあ、俺はＧ元素には興味が無いからどうでも良いからな）

ぶっちゃけ、ビーム兵器が有れば、余裕でＢＥＴＡに勝てると言うことが、月攻略で証明された。　この、アドバンテージは非常に大きい。
実弾兵器で戦い続ける戦術機と違い、ＭＳにはビーム兵器を搭載出来るから、地球上の戦線を一気に押し上げる事が出来るのだ。

（やはり、明星作戦終了後にはゲルググを配備するか。しかし、地球上のオリジナルハイヴをまだ攻略するつもりが無いから、少数に絞るか。悩むな～）

頭を振り、雑念を払う。今は祝勝会なのだから今後の事を考えるより、祝勝会を楽しむのが先決だ。会場内を見渡すと、少し奥の方にホシノ・ルリ少佐が一人でボーッとしている姿を見つけたので、近づいて行く。

「やあ、ホシノ少佐。祝勝会を楽しんでいるかい？」

「ん？ああ、不動准将ですか。まあまあ、楽しんでいます」

ホシノ少佐の隣に移動する。彼女はまだ、お酒が飲めないのでジュースを飲んでいた。近くのテーブルから、ジュースのビンを取る。

「丁度グラスが、空になったようだね。オレンジジュースで良かったかな？」

「はい。大丈夫です。しかし、栓抜きが見当たりませんよ？」

「ああ、無くても問題ないよ。こうすれば良い」

ヒュン

ゴト

手刀でビンの頭の部分を切る。蓋が空いたのでホシノ少佐のグラスに、ジュースを注ぐ。

トクトクトク

グラスがオレンジジュースで、満たされる。

「ありがとうございます。しかし、栓抜きが無いからって手刀でビンを切るとは、凄いですね」

「そうかい？鍛え上げれば誰でも出来るさ」

実際、師匠は出来るしな。あの人の場合、滝すら切るしな。

「普通は出来ないと思います」

「まあ、良いさ。それより、何を見ていたんだい？」

手刀云々の話から、話題を変える。先程気になった事を聞いてみた。

「会場の人達を見ていました。簡単に言えば、人間観察ですね」

「それで、何か分かったかい？」

「はい。見ていてとても面白かったです。お酒を酌み交わして、笑う人。戦禍を自慢する人。祝勝会なのに悲しむ人等、沢山の感情が

溢れています」

そう言ってホシノ少佐は、オレンジジュースを飲む。何となく、小動物チック見えて可愛らしかったので、頭を撫でる。

「ん？どうして頭を撫でるのですか？／／／」

「うん？可愛らしかったからさ。嫌だったかい？」

「いえ。別に構いません／／／」

そう言ってホシノ少佐は、黙ってしまう。いつの間にか、俺の体にピッタリとくっついていた。別段気になる訳でもないので、指摘しないでおく。

（やはり、私ではまだ魅力が足りないのでしょうか？何の反応も有りません。残念です）

特に喋る事もないので、左手でホシノ少佐の頭を撫でつつ、右手に持っているグラスのワインを飲む。

「あ！ルリルリだ！」

「おい！ヒカル待てよ！」

「置いてきぼりの、行き遅れ」

「イズミ？ケンカ売ってんのか？」

ワインを飲んでいると、全方から3人組の女の子達が近付いて来る。

ホシノ少佐の頭を撫でるのを止める。

「あ！」

一瞬ホシノ少佐が、寂しそうな表情をしたように見えたが、気のせいかな？そんなことを考えていたら、いつの間にか３人組が側に来ていた。

「ルリルリお疲れ！」

「ルリじゃねえか？お疲れ様だな！」

「お疲れ様」

３人組がホシノ少佐に挨拶する。

「お疲れ様です、ヒカルさん、リョーコさん、イズミさん」

ホシノ少佐も、挨拶を返す。いつの間にか、俺から離れていました。

「それで、この人は誰なの？」

メガネをかけた女の子が俺を指差す。その瞬間、会場内から音が消えた。

「ヒカル、不動悠斗准将に指差すなんてやるね。確実に懲罰確定だよ。下手すれば銃殺刑もありうるよ」

「え？どう言うこと？」

「バカ野郎！！！呼ばれた時に会っただろうが！！」

「へ？そうだったっけ？」

普通にいい放つイズミに、首を捻るヒカルに、怒鳴るリョーコ。まさに、ナデシコかしまし娘である。要はうるさいのだ。

「申し訳ありません不動准将。部下が失礼をしました」

頭を下げるリョーコ少尉。後ろのイズミ少尉も頭を下げている。ヒカル少尉は、イズミ少尉に頭を押されて頭を下げているような格好をしている。

「なに、今日は祝勝会だから構わんよ。ほら、頭を上げて」

流石に誰扱いされたのは初めてだが、別に気にするほどの事でもないしな。

「皆さん、不動准将が許してくれてますから、大丈夫ですよ」

ホシノ少佐がそう言うと、３人とも頭を上げた。特にリョーコ少尉は、安堵の表情をした。イズミ少尉は、何時もと変わらず普通の表情。ヒカル少尉は、ずれたメガネを直していた。

「ホッ。良かったぜ不動准将が怒らなくて」

「おいおい、俺はそこまで器量の狭い人間じゃないぜ」

「あ！いえ、そう言う意味じゃ無くて！」

慌てるリョーコ少尉。表情がコロコロ変わって面白い。

「まあ、良いさ。それより、祝勝会を楽しんでいるかい？」

「あ、はい！楽しんでます」

「はい。美味しい物が沢山有って、食べきれません」

「はい。楽しいですが漫才が無いのが残念」

どうやら3人とも、祝勝会を楽しんでいて何よりだ。

「そろそろ俺は行くよ。皆、祝勝会を楽しんでくれ」

そう言ってホシノ少佐達から離れ、会場内を散策するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ルリｓｉｄｅ

不動准将が去ってから、四人で話をしています。　ヒカルさんが不動准将を指差しして、誰扱いした時は流石にドキリとしました。まあ、祝勝会と言うこともあり、笑って許してくれましたけど。

現在は、ヒカルさんにお説教の最中です。

「分かりましたか？ヒカルさん？」

「うぅ～。分かりました」

ちょっと落ち込み気味のヒカルさん。今回は不動准将が寛容だったから良かったですけど、普通なら上官侮辱罪で銃殺刑になっていてもおかしくなかったのですから、その事を確りと言っておきました。

「まあ、ヒカルもこれに懲りたら気をつけてろよ。俺らが所属するメビウスの、最高司令官なんだからな」

「うぅ～。分かったよ。アニメや漫画ばっかり見てないで、もう少し外を見るよ」

「まあ、気をつけて」

「そうですね。馬鹿ばっかではどうしようも有りませんからね。それに、リョーコさんも命令無視をしていますからね？」

私がそう言うと、リョーコさんが固まった。

まさか、おとがめ無しとでも思っていたのでしょうか？

「ルリルリ。もしかして懲罰があるのか？」

ギギギと錆びた機会の様な音を出して、此方を見るリョーコさん。

「当たり前です。シーマ中佐からお話は聞きましたが、護衛の任務は忘れるは、勘違いで出撃した挙げ句、戦闘空域すら間違うなら懲

罰は必須ですから」

まあ、不動准将と話し合いをしたら私に一任されましたから。

「あっちゃ～。リョーコどうするの？」

「大丈夫ですよ。ソロモンのトイレ掃除1週間ですから」

3人とも安堵の表情をする。果たして、誰か気付きますかね。

「ん？あれ？ルリルリ、もしかしてソロモン全部のトイレか？」

「はい。そうですよ」

「ま、マジか！どんだけ有ると思ってんだよ！！？」

リョーコさんが絶句する。まあ、沢山ありますからねトイレ。頑張って掃除して貰いましょう。

「明日から、3人でトイレ掃除1週間頑張ってしてくださいね」

絶句する3人を尻目に、私はオレンジジュースを飲むの。

「本当皆さん、バカばっかです。悠斗さんは、鈍ちんですしね」

そう独り呟いて、残ってジュースを飲み干すのだった。

ルリｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

「悠斗。はい、あ～ん」

「プルばかりずるいぞ。ほら、悠斗。あ～ん」

何故かプルとプルツーから、あ～んとされています。ホシノ少佐達と別れて、会場を散策していたらプルとプルツーを見つけたので、一緒に話しながら食事をしていたら、こうなりました。

なんでさ。

クスクス

周囲の人達から笑い声がする。見ていてきっと、微笑ましいのだろう。

「どうしたの悠斗？食べないの？」

「どうしたんだい悠斗？」

プルとプルツーが、フォークを持ったまま首を捻る。ちょっと可愛らしかった。

「いや、何でもないさ」

「そうなの？じゃあ、あ～ん」

プルがフォークに刺したフライドポテトを口に近付けてくる。

「あ～ん」

パク

モグモグ

ジャガイモの味が口に広がる。素材が最高級の者なので、味つけ無しでも全然美味しいです。

「美味しい？」

目をキラキラと光らせて、俺の感想を待つプル。

「ああ。美味しいよ」

「やったー！」

俺の感想が嬉しいらしく、元気いっぱいに喜ぶプル。

「姉さんばかりずるいぞ。悠斗私のも食べろ／／」

そう言って、一口ハンバーグを刺したフォークを俺の口に近付けてくるプルツー。少し恥ずかしいのか、顔が赤くなっていた。

「ほいほい。頂くよ。あ～ん」

パク

モグモグ

ハンバーグの肉汁が口一杯に広がる。素材が最高級品なのもあるが、料理人の腕が良いので焼き加減も最高だ。

「ど、どうだ？美味いか？」

上目遣いで俺を見るプルツー。かなり、可愛らしです。

「ああ。美味しいよ」

ニッコリと笑って答えた。

「そうか。なら良いんだ／／／」

そんなことをしながら食事をしていると、前方からキャラ・スーン大尉とイリヤ・パゾム少尉がやって来た。

「おや？不動准将ではありませんか？お疲れ様です」

「プルとプルツーが誰かと一緒かと思えば、不動准将と御一緒でしたか」

「二人ともお疲れ様。祝勝会を楽しんでいるかい？」

キャラ大尉とイリヤ少尉に、挨拶する。キャラ大尉はお酒を飲んでいるようだが、イリヤ少尉は飲んでいない様だ。

「ええ楽しんでいますよ」

「はい。楽しませていただいてます」

「なら、良かった。まあ、今日くらいは羽を伸ばしてくれ。月攻略作戦で、大分疲れただろうから」

「なら、私と一緒に羽を伸ばしませんか？」

キャラ大尉がそう言うと、俺の左腕に抱き付いて来た。二の腕にキャラ大尉の柔らかい胸が当たってます。

「あーー！ズルい！私も悠斗に抱きつく！」

キャラ大尉が抱き付いた事を、羨ましく思ったのかプルが正面から抱き付いて来た。

「キャ、キャラ大尉！！不動准将から、離れてください。う、羨ま。ち、違う！不埒ですから！」

何やら、慌てるイリヤ少尉。一部聞こえない部分があった様な？気のせいか？

「キャラ大尉。イリヤ少尉もああ言ってるから、離れてくれないかい？」

「う～ん、残念だね。仕方ないね」

そう言って左腕から離れるキャラ大尉。

「ほら、プルも離れなさい。もうすぐ寝る時間だからね」

腕時計を見ると。針が１０時に迫っていた。
成長期のプルやプルツーには、睡眠はとても大切だ。

「うーー！分かった」

そう言って俺から離れるプル。少し不満げなので、頭を撫でてあげた。

「ほら、寝る時間だ。部屋に戻ってゆっくり寝なさい」

「うん！分かった。プルツー行こう。皆お休み！」

「ああ、プル行くよ。それじゃあお休み」

「プル、プルツーお休み」

「お休み」

「お休みなさい」

プルとプルツーは、皆に挨拶して、二人して会場を出ていった。

「二人とも行きましたね」

「そうだな。夜更かしは余り良くないからな」

「まあ、私達には関係ないけどね」

グラスのお酒を飲むキャラ大尉。よく見ると顔が赤くなっていた。

「キャラ大尉も程ほどにな。二日酔いには、気をつけてな」

「分かっていますよ。このくらい、酔ってる内に入りませんから」

そう言って、空のグラスに再びワイン注いで飲む。どんだけ強いんだか。

「イリヤ少尉。キャラ大尉の事を、頼んだぞ」

「ハァ。分かっております」

ため息を吐いて項垂れるイリヤ少尉。残念だが、君にしか頼めんのだ。

落ち込むイリヤ少尉の頭を撫でてあげる。

「あ、ありがとうございます／／／」

「まあ、キャラ大尉の面倒を見るのは、大変だと思うけどよろしくね」

「はい。頑張ってみます」

イリヤ少尉にそう言って、俺は二人と別れた。

会場内から外に出て、宇宙が見えるラウンジの長いソファーに腰掛ける。

丁度地球が映っていた。

「宇宙から見ると、相変わらず綺麗な星だな」

ラウンジから地球を見ていると、誰かが近付いて来る。

「おや、悠斗？こんな所にいたのかい？」

「うん？ああ、シーマ中佐か」

声のした方を見ると、シーマ中佐が居た。
シーマ中佐は、そのまま俺の左隣に座った。

「どうした？祝勝会の方はいいのかい？」

「なに。私は充分楽しんださ。コッセル辺りはまだ飲んでいるだろうがね」

酒を豪快に飲むコッセル大尉が浮かぶ。彼位なら簡単には、酔いつぶれたりしないだろう。

「ねえ、悠斗」

「うん？なんだい？」

シーマ中佐の方に顔を向ける。すると、互いの顔が極端な近かった。
そして潤んだ瞳でシーマ中佐が俺を見つめていた。

「シーマ中佐。顔が近くない「悠斗。私は悠斗が好きだ」かい？なんだって？」

今、何て言いました？確か、好きとか言いませんでしたか？

「何度でも言ってやる。私は悠斗が好きなんだ！」

どうやら、好きと言うことらしい。まあ、人間的に嫌いでしたら仲良くなれませんからね。

「俺も、シーマ中佐の事は好きだぞ」

「え？本当かい！」

「ああ。シーマ中佐だけじゃない。イルマ中尉やキャラ大尉、イリヤ少尉にホシノ少佐。皆好きだぞ。大体俺は、嫌いな人間と仲良く出来ないからな」

だって嫌いな人間に無理して、仲良くなる理由はないからな。そう言う意味では、呼んだ人達みんな好きだぞ。

「いや、悠斗が考えている意味の好きじゃなくて、だ「何をしてるんですか？二人とも？」ってイルマ！」

いつの間にかイルマ中尉が、ラウンジに来ていた。全く気付く事が出来なかったのは、アルコールの正だろう。イルマ中尉が俺の右隣に座る。

「それで、二人は何をされていたんですか？」

何やら、イルマ中尉が黒いオーラを出す。ものすごい良い笑顔です。

「いや、シーマ中佐が好きと言ったので、俺も好きだと言っただけだ」

「はい？すみませんが、もう一度言って貰えませんか？」

「だから、シーマ中佐が好きと言ったので、俺も好きだと言っただけだ」

別に変な意味は無いからな。好きか嫌いか聞かれれば好きだと言えるぞ。人間的だけどね。

「ハアァァァ！！悠斗さんは、シーマ中佐にＯＫをだしたんですか！！！」

「ああ。だって人間的嫌いな人間を好きにはなれんだろう？そう言う意味ではシーマ中佐は好きだぞ。無論イルマ中尉も好きだぞ」

ガックリと肩を落とすイルマ中尉。なんか、あったのかな？

「シーマ中佐、まさに悠斗さんは」

「ああ、間違えなく」

「「鋼入りの鈍い人です」」

二人とも息ピッタリでそう言うのだった。

その後、３人で話をしながら自室に戻るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

祝勝会も中頃になってきた頃、たまたま悠斗が会場内から外に出て行くのを見た私は、部下達に先に戻ると伝え悠斗の後を追った。
悠斗は、ラウンジでソファーに座り宇宙を見ていた。

（二人っきりのチャンスだ！イルマには悪いが、悠斗に私の気持ちを伝えさせてもらうよ）

そんな思いを胸に悠斗の隣に座り、チャンスを待った。
そして、チャンスが来たので思いって告白したんだか、悠斗もアルコールが入っていて私の考えている好きと、悠斗が考えている好きの方向性が全く違ったのは、大誤算だった。しかも、途中でイルマがくるから結局うやむやになってしまった。

（焦ったら負けだよシーマ！まだまだ、チャンスは有るさ。今は我慢の時なのさ）

自分自身を鼓舞しておく。次のチャンスが来るまで、告白は我慢する。
けど、アピールは積極的にするつもりだ。

（小娘どもに、悠斗はくれてやらないよ）

そんなことを考えながら、眠りにつくのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

祝勝会の会場を抜け出して、のんびりしようと思いラウンジに向かったら、シーマ中佐と不動准将がいたので声をかけた。　そしたら、シーマ中佐が不動准将と何かを話していたので訪ねてみたら、シーマ中佐が告白したと言われた。
私は、凄いショックを受けたが良く聞いてみると、全く考えが噛み合っていなかったのだ。
恐らく不動准将は、大量のアルコールを摂取した正で、正常な判断が出来なかったのだろう。
それを聞いた私は、安堵した。と、同時に悠斗さんの鈍さを再認識するはめになりました。

（ヤバいわね。もし、シーマ中佐の告白がシラフの時だったら、私が負けてしまう恐れがあるは。もっと積極的に行かなくちゃ！）

そんなことを考えながら、シャワーを浴びるのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第三十八話（後書き）

ちょっと強引な展開だったかも。感想があればお待ちしています。

第三十九話（前書き）

み、短いです。では、本文をどうぞ。

第三十九話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年２月１１日
宇宙要塞ソロモン

祝勝会から一月が過ぎた。俺は、ソロモンにある執務室で書類と戦っている。まあ、毎日が戦いだな。

「不動准将。此方の書類は終わりました」

「分かった。ありがとうホシノ少佐」

ホシノ少佐に頼んでいた書類が終わったらしく、俺に渡してくれた。ホシノ少佐から手渡された書類に目を通す。チェンバロ作戦の推移を纏めた物だ。ハマーン事務総長に提出する物だ。手渡された書類に目を通す。不備などは見あたらない。

「ありがとうホシノ少佐。これでチェンバロ作戦の報告書は完成した。わざわざ、手伝ってくれてありがとう」

「いいえ。構いません。たいした事などしてませんから」

ホシノ少佐はこう言っているが、ホシノ少佐とオモイカネの能力は

凄まじいものだ。たった半日もかからずに、チェンバロ作戦に関する全ての報告書を完成させてしまったのだからな。これで、ハマーン事務総長に最終報告書を提出できる。

「不動准将。コーヒーが入りました」

イルマ中尉が机にコーヒーを出す。

「ホシノ少佐もどうぞ」

同じく、ホシノ少佐にもコーヒーを出すイルマ中尉。

「ありがとうイルマ中尉」

「ありがとうございます」

そう言って、書類を机に置きコーヒーを飲む。
天然物の良い香りがする。

「ホシノ少佐。砂糖をどうぞ」

イルマ中尉がホシノ少佐に角砂糖入りの、小瓶を出す。

「ありがとうございます」

ホシノ少佐は、角砂糖をコーヒーに入れてスプーンでかき混ぜる。
そしてスプーンを取り出し、受け皿に置きコーヒーを飲む。イルマ中尉も同じくコーヒーを飲む。

「甘くて美味しいです」

「フフ。ホシノ少佐にはまだ、苦いのは早いですからね」

「はい。まだ駄目ですね」

「大丈夫。歳をとれば味覚が美味しいと感じる様になりますよ」

二人がコーヒーを飲みながら談笑する。端から見ていると仲の良い姉妹に見える。

（まあ、実際イルマ中尉には妹がいるからな）

イルマ中尉の家族は、父親がＫＩＡになっていて、母親と妹さんの３人家族になっているんだったな。楽しそうに談笑する二人を横目で見つつ、机の上の書類の１つを手に取り、目を通す。

現在月に建設中のグラナダ基地と、Ｄ、Ｏ、Ｍ、Ｅ、の建設状況を纏めた報告書だ。

（ふむ。グラナダ基地は全体の３０％まで工事が進んでいるか。たが、Ｄ、Ｏ、Ｍ、Ｅの建設はマイクウェーブ装置の関係上、２０％までしか出来ていないないか。まあ、ファーストニュータイプの部分は生産可能パーツの中に、Ｄ、Ｏ、Ｍ、Ｅ、建設専用にファーストニュータイプの記憶と言う物があるから、それを付ければ良いだろう）

コーヒーを飲みながら書類をめくる。現場からの要望が記されていた。

まあ、いろいろあるが纏めるとこうだ。

１、人員を増やして。

Ａ、呼び出せば良いから問題なし。

２、物資が少し足りない。Ａ、大量に生産してパプア補給艦で纏め

て送る。
と、言った所だ。早速人員を想像する。

（デラーズフリート工作兵（月のグラナダ基地の建設に関わった人）１０万人。デラーズフリート兵２０万人（整備、警備、医療）を呼び出す。
場所は、ソロモン宇宙港（ハッチは閉まっている）に呼び出す。確か、ノルド・ランゲル少将が居たはずだから、彼に指示を任せよう。そんなことをしながら書類から視線を上げる。ドアが開いてシーマ中佐が中に入って来た。

「失礼するよ」
「お疲れ様です、シーマ中佐」

敬礼するシーマ中佐に、ニッコリと微笑む。

「（っく！ヤバイね。悠斗の顔を見ると、あの日の事を思い出すね。胸がドキドキするよ／／／）お疲れ様です、悠斗」

（シーマ中佐。やはり、祝勝会の日の事を思い出しているのね。でも、私はまだシーマ中佐の要に、告白する勇気が無いわ。相変わらず、悠斗の笑みは素敵だけどね／／／）

（シーマ中佐もイルマ中尉も、顔が紅いです。やはりそれだけ悠斗の笑みが、素敵と言うことですね。まあ、私も見惚れていますけど／／／）

何やら、シーマ中佐の顔が紅い様だが風邪でも引いたのかな？

「イルマ中尉。シーマ中佐にも、コーヒーを出してくれ」

「・・・・・」

「イルマ中尉？」

「・・・っ！は、はい？！今出します！」

慌てて、コーヒーを入れに行くイルマ中尉。

もしかして、強く言い過ぎたかな？

「はて？強く言ったつもりは無かったのだが、強く言ってしまったのか？」

（（ハア。違うんだよ（です）見とれていただけだよ（です））

周囲の考えと全く検討違いな事を考えている俺だった。

「まあ、悠斗。イルマは良いとして、月の件の書類は終わったのかい？」

「うん？ああ。ホシノ少佐が手伝ってくれたおかげで、予定よりもかなり早く終わったよ」

俺の予想では、俺の1週間の睡眠時間を2～3時間にしてやっと終わるかどうかだったから、本当にホシノ少佐とオモイカネには感謝するね。

「いえ、私は大したことしていません」

「ルリ、謙遜するんじゃないよ。悠斗が褒めているんだから、素直

に褒められておきな。次に何時褒めて貰えるか分からないからね」

「そうですね。分かりました。少し書類関係を手伝いました」

恥ずかしいのか、少しだけ頬を紅くするホシノ少佐。そんなホシノ少佐を、シーマ中佐は暖かい視線を送っていた。

（まあ、シーマ中佐とホシノ少佐の年齢差を考えると、娘と母お）

カチャ

「悠斗？失礼な事を考えなかったかい？」

とても良い笑顔をした、シーマ中佐が俺の眉間に銃を突き付けていた。

ホシノ少佐は、表情の変化は無いように見えるが、少し震えていた。

「うん？残念ながら、シーマ中佐が考えた様な事は、一切考えていないよ」

「そうかい。なに、嫌な感じがしたからついね」

そう言って銃をしまうシーマ中佐。彼女の前で歳の事を考えないと俺は、胸に誓ったのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

不動准将に言われて、コーヒーを入れに行く。不覚にも不動准将の笑みに見とれていたら、返事をするのを忘れてしまった。しかも、慌てて返事をした挙げ句、急いでキッチンに駆け込んでしまった。

ドクンドクン

先程のやり取りの正か、胸の鼓動が高なる。それを落ち着かせる為に、深呼吸を数回繰り返す。

スーハースーハー

大分鼓動が落ち着いた感じがした。落ち着いてからシーマ中佐のコーヒーを入れる。コーヒーをトレイに置き持っていく準備をする。

（ハア、せめて私にもシーマ中佐の様に、告白する勇気があればな〜）

シーマ中佐は凄い。不動准将に告白した挙げ句、求めていた答えと違う答えを貰ったのに、諦める気配が無いのだ。

（諦めちゃ駄目よイルマ！悠斗は私の旦那様になる運命なんだから。好敵手（ライバル）がいくら居ても、必ず最後に勝つのは私なんだから！）

胸に熱い誓いを立てて、コーヒーを持って不動准将の元に戻るのだ

った。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

ゼウスｓｉｄｅ

「ヤバいのう」

ワシはヴァルハラでそう漏らす。ワシが転生させた不動悠斗を見ておったのじゃが、ワシの予想を遥かに斜めを行く事になってしまっておった。

「どうしたのですか？貴方？」

後ろから声を掛けられる。声からして、ワシの妻のヘラのようじゃ。ヘラはワシの隣に座る。

「ヘラか。なに、ワシのミスで死なせてしまった男を見ておったのじゃ」

「ああ。アテナから聞いています。何でも、今時珍しいタイプの男だとか」

そう。悠斗は原作ブレイクをし過ぎない様にブレイクしておる。だからつい、ワシが内緒で着けた能力があるのじゃが、それがどうやらレベルを間違っていたようじゃ。

「実はの。奴に内緒で恋愛原子核を着けてやったのじゃよ」

「な、何ですって！貴方なんでそんなのを着けたのよ！！」

驚きを隠さず、ワシに尋ねてくるヘラ。まあ、普通は尋ねるわな。

「いや、奴に少しサービスをしてやっただけなんじゃよ。しかしまさか、ワシがミスをしてしまうとは、思わんかったのじゃよ」

「で！どんなミスをしたんですか？」

「いや、恋愛原子核は間違っておらんのじゃよ。ただ、レベルを間違えてしまっての」

「レベルを間違えた？！確か、あれは『強』が最強なレベルでしょ？それを何にしたのですか？！」

「いや、『極』にしてしまった」

「『極』ですって！恋愛原子核の上限を突破させたですって！！そのレベルだと、全ての女性を落とせるじゃない！どうするのよ！」

激しく怒りたてるヘラ。ワシは土下座するしか出来なかった。

「も、申し訳ございません。ほんの、遊び心だったんです」

「遊び心でするんじゃありません！！！大体貴方は！！！」

その後ヘラのお説教は半日以上続くのだった。

ゼウスｓｉｄｅｏｕｔ

第三十九話（後書き）

う～ん。久しぶりに神様登場。そしてスランプ気味だ。

第四十話（前書き）

最近短くしか書けない。　ヤバいなと感じる日々。　では、本文をどうぞ。

第四十話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年３月１３日
宇宙要塞ソロモン

俺はプラントの生産ラインを確認する部屋で、パソコンを操作して現在の資金と資源の残高を調べている。ＢＥＴＡを倒す度に資金と資源になるて言われてから、日本進行戦、月攻略作戦、等をしてきたからどれくらい増えているか、確認していなかったのだ。

（まあ、大体初期の資金が１０００京円、資源が１０００不可思議トンある時点で、困ること無いからな。まあ、自分の成果を確認する位はしておくか）

パソコンを操作して、ファイルを開く。
画面に現在の資金と資源が表示された。
それを見た瞬間、俺は固まった。

「・・・・！！？」

眼を擦り、もう一度画面を見る。やはり、変化はなく見間違いでは無かった。画面にはこう表示されていた。

資金、１０垓円（京の上の位、１０の２０乗の位）資源、８０００不可思議トンと、表示されている。

「ハッハハ。ハッハハハハハ！」

もう、笑うしか無かった。確かに大量のＢＥＴＡを撃破しまくったが、ここまで来るともう何でも出来るな。

（いっそ、今年の国連の予算を、全額メビウスが肩代わりしてやろうかな）

そうすれば、プロミネンス計画の時の予算の分配の際に、アメリカの１人勝ちになることは無くなるな。まあ、予算の肩代わりをしたら、アメリカの信用ががた落ち確実だな。アメリカに従属している国からも反発が来るだろうが、逆に前線各国や既にＢＥＴＡに国を奪われた国々からは支持をとれるだろうな。

（まあ、資金や資源は置いといて、明星作戦に向けての準備を進めるか）

マウスを操作して、ファイルを閉じて違うファイルを開く。現在のＭＳの在庫が表示される。俺は水陸両用ＭＳゴックとズゴックを選択する。在庫が表示された。

「ふむ。やはり水陸両用ＭＳの入れ替えをするか。ゴックを４００機解体して資源にして、新たにハイ・ゴックするか。強化パーツは、ゴックと同じで良いや。ズゴックも２０００機解体して新たにズゴックＥ（エクスペリメント）を新規に生産するか」

地上秘密基地の生産ラインを選択して、ズゴックＥとハイ・ゴック

を生産させる。ズゴックE、在庫０機、日産２００機、生産数２００機。
ハイ・ゴック、在庫０機、日産４００機、生産数４０００機。と表示された。マウスを操作して、違う生産ラインを表示させる。

（やはり巡洋艦や駆逐艦を作るか。てか、艦隊に空母と戦艦と巡洋戦艦しかいないしな）

現在地上秘密基地に待機している第一艦隊、第二艦隊には駆逐艦や巡洋艦は無い。むしろ空母と戦艦と巡洋戦艦が有るだけだ。これではちょっと厳しいので、駆逐艦や巡洋艦を生産する。あと、宇宙軍との人員差が余りにも激しいので、地球に戻ったら追加人員を呼ばなければならない。

水上艦の生産リストを見る。様々な巡洋艦や駆逐艦が表示させる。

（う～ん。必要なのは巡洋艦や駆逐艦だけなんだが、大量に表示されると悩むな）

表示されている巡洋艦、駆逐艦の種類は多種多様だ。また、イージス艦も有るため選ぶのは一苦労だ。

（とりあえず、イージス艦はガンダムＳＥＥＤシリーズに出てきた、オーブの奴で良いな。それをベースに、ミサイル巡洋艦や情報収集艦に改造して使用していこう！）

マウスを操作して、イージス艦を選択する。生産ラインを選択して生産を開始させる。また、改造を施してミサイル巡洋艦にしたり、情報収集艦に改造して生産ラインに入れて生産を開始させる。
イージス艦在庫０隻、日産３０隻、ミサイル巡洋艦、日産３０隻、

情報収集艦日産１０隻、と表示された。

（よし！後は、ガトー少佐の為にＧＰ０２Ａ（サイサリス）を造るか！）

マウスを操作して、魔改造を始めるのだった。

（あ！今日唯依ちゃんの誕生日だったな。まあ、プレゼントは送ったから、喜んでくれると良いな）

そんなことを考えながら、パソコンに向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私は訓練を終えてカリウスと共に、ＰＸに向かっている歩いている。先程からＰＸに向かう人が多い気がするな。そんなことを考えながら移動していると、何時の間にかＰＸ堂に着いた。

「ガトー少佐。何やら、食堂が騒がしですね」

「そうだな。何故か食事の時間では無いのに、人が多いな。何かあったのか？」

ＰＸの中に入ると、普段から騒がしＰＸが輪を掛けて騒がしくなっている。食事の時間では普通だが、今は違うので何かあったのだろうか？周囲を見渡すと一角に沢山の人だかりが出来ていた。

「カリウス。どうやら彼処が原因らしいな」

指をさしてカリウスに教える。カリウスもそちらを見ると納得した様だ。

「そうですね。向こうが騒がし様ですね。行ってみますか？」

「そうだな。行ってみよう」

私とカリウスは、騒ぎの場所に向かう。すると聞いたことのある声が聞こえてきた。

「さあさあ！最新のオッズが出たぞ！！１位は、イルマ中尉の１．２倍だ！追うシーマ中佐は１．３倍の倍率で迫っているぞ！更に、ダークホースでホシノ少佐が１．５倍で絶妙なポジションにいるぞ！誰が来るかは未だに分からないこのレース、大混戦は必須だ！！！皆よく考えて買ってくれ！」

「ガトー少佐。彼処で声を出して解説しているのは、ジョニー・ライデン少佐ではありませんか？」

「確かにそのようだな」

教壇の上に立ち、ホワイトボードに書かれたオッズ表を読み上げるライデン少佐。何をやっているんだ彼は？

「ガトーよ。貴公も買いに来たのか？」

後ろから声を掛けられたので振り向くと、そこにはデラーズ閣下が居られた。即座に敬礼する。

「お疲れ様です、デラーズ閣下。そして、買いに来たのか？とは、どう言うことでしょうか？」

「うん？貴公は知らなかったのか？これは、不動悠斗の恋人に誰がなるかを掛けるレースだ。名付けて、『恋のバトルロワイヤル！ＢＥＴＡの戦いでは味方だが、恋の戦いでは好敵手（ライバル）！昨日の友は今日の好敵手（ライバル）だ！』と、言う悠斗を掛けた女達の熱い戦いのレースだ」

これを説明された時、私は酷い目眩に襲われた。まさか、こんな事がメビウスの中で行われているとは思わなかったからである。

しかも、今の話を聞く限りデラーズ閣下は、前から知っていた様だ。

「デラーズ閣下。失礼な事をお聞きしますが、不動准将はご存知なのですか？」

私の聞きたかった事を、カリウスが代弁してくれる。もし、不動閣下が知っていて恋愛をしていたら、さぞ性根が腐っているとしか思えない。

「いや、あやつは知らん。これは、悠斗に内緒で行っておるからな。ただし、女性陣は一部を除いて本人の許可を貰ってある。また、悠斗と何か進展が有ったかどうかは、基本的には本人達の自己申告制になっている。それらを、オモイカネが総合的に判断してオッズが

決められている。きちんと、プライバシーには配慮しているから大丈夫だぞ」

「は、はあ？そ、そうでしたか」

困惑するカリウス。奴の気持ちは私も激しく分かる。しかし、そんなことをやっていて大丈夫なのだろうか？もうすぐ明星作戦が近付いていると言うのに。

「デラーズ閣下。こんなことをしていて、大丈夫なのですか？もうすぐ地球でハイヴ攻略作戦が開始されると言うのに、我らがメビウスがこんな事をして、堕落していて良いのですか！！」

「ガトーよ。貴公が申す事は、確かに事実である。しかし、気張ってばかりでは兵は付いて来んよ。ましてや、娯楽の少ない軍ではこう言ったことで、ガス抜きをしてやるのも大事な事なのだ」

「ッ！」

確かに娯楽の少ない軍では、こう言った恋愛事で話したりすることは、珍しい事では無い。ましてや、地球の前線部隊では下ネタなんかで笑いを取ったりする者もいる。
そう言った意味では、ガス抜き役にはぴったりな出来事だ。

「まあ、貴公ももう少し肩の力を抜け。働く時は馬車馬の如く動かねばならんからな」

「そうですね。分かりました。では、失礼させていただきます」

デラーズ閣下に敬礼して、ＰＸをカリウスと共に出る。

「ガトー少佐。訓練に戻りますか？」

「いや、デラーズ閣下の言う通り、私は肩肘を張りすぎていた。ここは訓練を止めて休むとしよう」

「分かりました。では、失礼します」

互いに敬礼して別れた。そのまま、私は廊下を自室に向かって歩く。

（ふう。久しぶりの休みか。たまにはゆっくり休んでみるか）

そんなことを考えながら、自室に向かうのだった。

ガトーｓｉｄｅ

唯依ｓｉｄｅ

私は訓練を終えてシャワーを浴び、巌谷中佐の元に向かう。何やら、私宛に郵便物が届いているとの事らしい。巌谷中佐の執務室に到着したので、ドアをノックする。

コンコンコン

「開いている。入って構わん」

中から巌谷中佐の返事が来たのでドアを開けて中に入る。巌谷中佐に敬礼する。

「篁唯依中尉参りました！」

「うむ。ご苦労。済まんな呼び出してしまって」

「いえ。構いません。それで私宛に郵便物が届いていると、言われて来たのですが？」

「うむ。ちょっと待ってくれ」

カザゴトと机の中を探し始める巌谷中佐。
そんなに小さい物なのだろうか？

「お！あったあった。これだよ唯依ちゃん」

机の上に厳重にされた箱が置かれた。

「い、巌谷中佐！今は勤務中ですから、その様な発言は控えてください」

「ハッハハハ！構わんさ。今は国中ピリピリしているから、こう言った時くらい肩の力を抜きな唯依ちゃん」

豪快に笑う巌谷中佐。相変わらず凄い人だ。

「それで、巌谷中佐。これは、いったい何なんですか？」

「おお！忘れるとこだった。唯依ちゃん、誕生日おめでとう。これは、私からでは無いのだがプレゼントが入っているよ」

「あ、ありがとうございます。この箱の中身は、巌谷中佐が用意した物ではないのですか？」

そう尋ねると、巌谷中佐が1枚の手紙を差し出してきた。それを受け取り封を開けて読む。手紙には、私の誕生日を祝う内容が書かれていた。差出人を見ると、悠君の名前が書かれていた。

「巌谷中佐！！開けます！良いですね？！」

「あ、ああ。構わないさ。それは、唯依ちゃん宛に来た郵便物だから」

何やら、驚く巌谷中佐を尻目に私は悠君が送ってくれた箱を開く。箱の中から、綺麗なネックレスが出てきた。

「ほう。悠斗君はなかなかやり手の様だな。今時アクアマリンを手に入れるのは、困難なのだがな。それを5？の涙の様な形にカットにして、ネックレスにするとはな。しかも、純度は最高な物とはな」

「ええ。今のご時世を考えますと、宝石なんて簡単には手に入らないのに」

「まあ、着けてみたらどうだい？」

「はい」

巌谷中佐に言われて、ネックレスを着ける。太陽の光を浴びてアクアマリンが輝きく。

「どうでしょうか？」

「ほー。とても似合っているよ唯依ちゃん。今年の誕生日は良い誕生日になったね」

「はい！悠君からのプレゼント、絶対大事にします！」

私は笑顔でそう答えた。

（う～ん。良い笑顔だな、唯依ちゃん。早く唯依ちゃんと悠斗君の式をあげてくれないか？是非孫の名付け親になりたいのだが）

巌谷中佐が何か考えているようだったが、私はただ悠君から貰ったネックレスを、大事見つめているのだった。

唯依ｓｉｄｅｏｕｔ

追記

オッズ表

イルマ・テスレフ　倍率１．２倍
シーマ・ガラハウ　倍率１．３倍
ホシノ・ルリ　倍率１．５倍
キャラ・スーン　倍率８倍
イリア・パゾム　倍率８．４倍
篁唯依（非公式）　倍率２．４倍
月詠真那（非公式）　倍率１０．２倍
月詠真耶（非公式）　倍率５．５倍
ハマーン・カーン　倍率９倍

となっております。

第四十話（後書き）

うーん、もう四十話です。早いな～と思う反面、本編開始まで何話かかるか分からないと感じる作者です。しかし、必ず完結させるつもりはあるので安心してください。

感想などあればどうぞ。

第四十一話（前書き）

ギリギリ完成しました。
今回は、キャラ崩壊?が起きています。
では、本文をどうぞ。

第四十一話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年４月２９日
地球秘密基地

俺は今月2日にソロモンから帰還して、明星作戦の準備をしている。
現在グラナダ基地に関する書類を読んでいる。先月末、月グラナダ基地が完成した。基地完成に伴い、追加人員を３００万人（デラーズフリート兵）召還して、グラナダ基地の稼働が始まった。
現在は、ソロモンで生産した艦艇やＭＳを配備して、月の防衛に当たらせている。　また、月のプラントも正式稼働が開始したので、直にグラナダ基地でも、ＭＳや艦艇の生産が始まるだろう。また、基地司令官はダグラス・ローデン大佐だ。秘書官にジェーン・コンティ大尉を召還してある。また、パイロットの追加人員として、マレット・サンギーヌ大尉（精神崩壊は起こしてない）、ユイマン・カーライル中尉、ギュスター・パイパー少尉、リリア・フローベール少尉、ガースキー・ジノビエフ中尉、ジェイク・ガンス少尉、オペレーター、ユウキ・ナカサト少尉、等を召還して火星からの、着陸ユニットの迎撃任務等を任せている。
書類から視線を上げて、書類を机の上に置く。

（やれやれ。グラナダ基地が完成したと思えば、次は明星作戦か。

忙しいな）

先日ハマーン事務総長に通信を入れたら、香月博士からの、明星作戦に参加して欲しいとの要請が2日に1回は有ると、文句を言われた。また、帝国政府からも同様の要請が再三有るとも言われた。まあ、ハマーン事務総長には参加するつもりはあるが、ギリギリまで返答しないでもらうように頼んでおいた。

（まあ、明星作戦ではアメリカ軍が国連軍の主体になってしまうから、帝国政府と国民は嫌だろうし、香月博士も自信の進める第四計画を妨害されたくないんだろうな）

だからこそ、メビウスに要請をしたんだろうな。　ちなみに、ハマーン事務総長に返答を待ってもらうように頼んだ際に、代わりに今度買い物に付き合う様に約束させられました。

（きっと、荷物持ちがいるような買い物が有るんだろうな～）

そんなことを考えていると、執務室のドアが開いて栗色の髪を束ね、キリッとした目をした女性が入って来た。

「失礼します。マリーダ・クルス中尉出頭致しました！」

そう。ＵＣに登場するクシャトリヤのパイロットマリーダ・クルスだ。

彼女はプルシリーズの唯一の生き残りだ。正史だと、娼館に売られてしまい数年に渡る娼館での仕事の正で、望まぬ妊娠と出産を強要されて、女性機能が破壊されてしまった悲しい過去がある。

今回召還したあと、直ぐに精密検査に行ってもらった。恐らく検査

結果を報告に来たのだろう。

「ご苦労様。精密検査は疲れただろう?そこのソファーに座ってくれ。今、紅茶を入れるから」

「はい。分かりましたマスター」

「おいおい。マスターだなんて呼ばないでくれ。普通に不動准将で構わんよ」

そう言って俺は椅子から立ち上がり、キッチンに向かい紅茶を入れる。マリーダ中尉は、ソファーに座って大人しくしている。

「はい。紅茶だ。まあ、まずは紅茶でも飲んでくれ」

キッチンで紅茶を入れて、マリーダ中尉の前に出す。

「ありがとうございます。頂きます」

そう言ってマリーダ中尉は、紅茶を口にする。

俺は対面に座り、自分の分の紅茶を口にする。

まあ、コーヒーと違い香りを楽しむのが紅茶なので、味気ない。まあ、リラックスするなら最適なんだけどね。カップを受け皿に置きマリーダ中尉と向き合う。聞かなければならない事が有るからな。

「マリーダ中尉。率直に聞くが、『身体』は大丈夫だったかい?」

マリーダ中尉が俺の目を真剣に見つめる。俺もマリーダ中尉から視線を外す事は無い。

彼女が身体に抱えている過去のトラウマ。女性の尊厳を踏みにじる様な事をされたのだ。それを男の俺が聞くのは普通なら不快に感じ

る所か、嫌われるな。まあ、嫌われる事は覚悟の上だがな。

「はい。私の身体は、極めて健康でした。女性機能も問題無いとの事です」

「そうか。済まなかったね失礼な質問をして」

ホッとした。この世界に召還したマリーダ中尉は、健康な状態で召還した事になる。つまり、マリーダ中尉は妊娠と出産がきちんと出来る様になったのだ。

「後、強化人間の能力の代わりにニュータイプになっています」

「そうか。まあ、それは前例が有るから問題無い」

やはり、キャラ大尉やマシュマー大尉の様に、強化人間から解放されてニュータイプになっていたか。

「マスター。どうかなされましたか？」

「いや、マリーダ中尉。何故俺を『マスター』と呼ぶんだい？」

流石に、マリーダ中尉にマスターと呼ばれる様な事をした事はない。

「いえ、マスターは私を「悠斗！入るよ！」から」

マリーダ中尉が何かを言おうとしたとき、プルとプルツーが部屋に入ってきた。

「悠斗何してるの？」

「うん？プルの妹に当たる、マリーダ中尉と話をしていたのさ」

プルが俺の膝の上に座り、尋ねてきた。プルツーは、俺の隣に座る。

「ふーん。私はプルだよ。貴女は何て言うの？」

「わ、私ですか？」

「ああ。そうだよ。ちなみに、私はプルツー。プルの妹さ」

いきなり呼ばれて驚くマリーダ中尉を尻目に、足を組み大胆な態度で自己紹介するプルツー。

「私は、マリーダ・クルス。嘗ての名は、プルトゥエルブと言います。プルシリーズの一員です」

「へぇ～。まさか生き残りがいたなんてな」

プルとプルツーは、驚いた表情でマリーダ中尉を見る。まあ、第一次ネオ・ジオン抗争で全員戦闘に出陣して、全滅したと思われていたからな。

「じゃあ、貴女は私の妹になるのね！」

「はい。その通りです」

「やった！悠斗私に、もう一人妹が出来たよ！」

「ああ。そうだな。ただ、見た目から言えばマリーダ中尉が姉で、プルとプルツーが妹に見えるがな」

まあ、生き延びた分マリーダ中尉が歳を重ねただけで、プルやプルツーも生きていればマリーダ中尉位の年齢だっただろう。

「ぶー！私がお姉ちゃんなんだもん！」

「はは、悪かったよ」

頬を膨らませて怒るプル。プルツーは、呆れ顔でやれやれと言った感じだ。マリーダ中尉は、ただ俺達のやり取りを見ていた。

「さて、マリーダ中尉に確認したかった事は終わったから、３人で仲良く遊んできな」

「悠斗は遊べないの？」

「済まないな。まだ、書類が残っているのでね」

「うん。分かった。プルツー、マリーダ、一緒に行こう」

膝の上から離れて、マリーダ中尉の右手を取り引っ張るプル。

「え、あ？はあ？」

「ほら、行くよ」

困惑するマリーダ中尉。今度は左手をプルツーに引っ張られ、渋々立ち上がる。

「じゃあお疲れ様」

笑顔で3人を送り出す。

「じゃあね悠斗！」

「ああ。じゃあな悠斗」

「し、失礼しましたマスター／／／」

3人とも部屋から去って行った。

（はて？マリーダ中尉の顔が赤くなっていたような？気のせいか）

そんなことを考えながら二人分のカップを片付けて、席に戻り書類に目を通すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

マリーダｓｉｄｅ

マスターとの謁見の後、私はプル姉様とプルツー姉様の3人であちこちを見てまわった。そして、今は3人でお風呂に入って居ます。

「プル姉様、シャワーで泡を流します」

「ありがとうマリーダ！」

シャヤャァァァ

シャワーの蛇口をひねり、温かいお湯が出てきた。それをプル姉様の上からかけて身体に付いた泡を流す。綺麗に流れたのを確認して、お湯を止める。

「はい。綺麗になりました」

「うん。じゃあ湯船に入ろうよ」

「はい。分かりました」

プル姉様と共に湯船に入る。プルツー姉様は、既に湯船に入っている。

「う～ん！良いお湯だね」

「そうですね」

「そうだな」

3人で湯船にのんびりと浸かる。非常にリラックス出来る。

「ねえねえマリーダ。聞きたい事が有るんだけど？」

「はい。どうしました？」

「マリーダは、悠斗の事が好きなの？」

「な！え、え！？いきなりどうしたのですか？」

私は驚いてしまい、変な返事をしてしまった。マスターが好きか嫌いか聞かれれば無論好きだが。

「あー！マリーダの顔が真っ赤だ！

「そうだな。真っ赤になっているぞ」

プル姉様とプルツー姉様に指摘される。私の顔はますます赤くなっただろう。

「う、そ、その。マスターの事はす、好きですが」

「ふ～ん。じゃあマリーダは、悠斗の恋人になりたいのかい？」

「いえ。私なんかがマスターの恋人になんて、なれません。こんな汚れた身体の私には」

お風呂の雰囲気が暗くなる。私の身体は汚れている。どんなに月日

が流れようと、私が娼館で働かせられた事実は消える事はない。たとえ、身体が治ろうとも心に付いた傷は消える事は無いのだから。

「ねえ、マリーダ。貴女は私達が戦った後、どうやって生きたの？教えてくれる？」

「ああ。私も知りたいな」

プル姉様とプルツー姉様が前に来て、私を見つめる。

（ああ。この二人は私が話すまで、絶対に譲るつもりは無いようだ）

二人の眼差しは真剣そのものだった。私は無駄だと判断して二人に私の過去を打ち明けた。そして、暫くの間お風呂に静寂が訪れる。

「マリーダ、貴女は大変だったんだね。男達に汚された挙げ句、望まない事ばかりされてきたんだね」

プル姉様が悲しい顔をされる。プルツー姉様は、黙ったままだ。

「だからこそ、貴女は幸せになるべきなんだよ！」

「いえ。私には幸せになる資格など」

パチーン

「え？」

いきなり私は右を向いた。いや、違う私はビンタされたのだ。

「フザケンじゃないよ！何が幸せになる資格がないだ！！お前はただ逃げているだけだろう！！私やプルが今、悠斗の元に居て幸せに生きているのに、同じあんたが幸せになれないなんて、あり得ないんだよ！！」

プルツー姉様が怒りを露にして私の前に立っていた。

「私は、ウジウジしているのが大嫌い何だ！マリーダ！貴女は、悠斗が好きなのか？それとも嫌いなのか？ハッキリさせな！」

「・・・・」

頭の中で葛藤する。私を助けてくれたマスター。二度目の生を与えてくれ、身体まで健康にしてくださったお方だ。今でも、あの笑顔を思い出すと胸が熱くなる。好きか嫌いかと聞かれれば間違いなく好きと言える。

「私は、『マスター』いえ、不動悠斗さんが好きです」

私は、姉であるプルツーを見る。彼女も私の目を見つめている。

「なら、その気持ちを貫けば良いんだよ！汚れた身体を理由に、諦めることなんて無いんだよ。悠斗は、受け入れてくれるはずたから。ただ」

「ただ？」

いきなり歯切れの悪くなるプルツー姉様。非常に気まずそうな表情をする。

「ただ、その、なんて言えば良いかな」

「悠斗に問題があるんだった」

「問題ですか？」

先程会った時に顔などは見たが、別に悪い所が有るようには見えなかったのだが。

「ああ。悠斗は鋼入りの鈍さなんだ」

「うん。あれは凄いよね。祝勝会の時にあれだけ、好意の視線が来ていたのにら全く気付いていなかったからね」

二人はうんうんと頷く。まさか、悠斗さんがそれほどまでに鈍いとは思わなかった。

「しかも、悠斗にはライバルが沢山いるよ！」

「え？ライバルですか？」

「うん。凄いよだって」

ガチャ

プル姉様が話している途中で、ドアが開く音がした。入り口を見る

と他の人達が入ってきた。

「おや?プルとプルツーじゃないかい。早いね。それとあんた、見かけない顔だね」

緑色のロングヘアーの女性が、此方に近付いてきながら話かけてきた。

「あ!シーマさんだ!一番乗りは貰ったよ!」

「ああ。お疲れさんです」

「は!本日より此方に来ました、マリーダ・クルス中尉であります」

私は素早く湯船から立ち上がり、敬礼をしようとする。

「敬礼は良いさ。ここは風呂なんだから、格式や形式事なんて関係ないからね。私はシーマ・ガラハウ。階級は中佐だよ。よろしく、マリーダ」

それだけ言って、シーマ中佐はシャワーを浴び始める。私は、自分の体に手を当てる。特に胸が負けていた。

「あれがシーマ中佐。ライバルの一人だよ」

「そうなのですか?!」

「うん。他にも沢山ライバルがいるんだよ。悠斗は、大人気だからね」

その後、プル姉様とプルツー姉様から、悠斗さんのライバルの話を聞きながら、再びお風呂に入いるのだった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

第四十一話（後書き）

感想にあったので、登場して頂きました。
しかし、プルツーのキャラが若干松岡になりかけて、何度も書き直すはめになりました。
しかも、マリーダさんも、キャラが違う気がするな。感想などあればどうぞ。

第四十二話（前書き）

相変わらず短いです。
では、本文をどうぞ。

第四十二話

ガトーｓｉｄｅ

１９９９年５月３０日
秘密基地

私は今、ジョニー・ライデン少佐とシン・マツナガ少佐と共にシミュレーターで、訓練を行っている。

「そら、墜ちろ」

「悪いが白狼に会ったのが、運の尽きだったな」

ライデン少佐が専用機のザク？Ｒ－２型の、ジャイアント・バズを射つ。　巡洋艦に命中して、爆発を起こして沈没していく。マツナガ少佐も専用機のザク？Ｒ－１型のマシンガンを射つ。
迎撃に出てきたストライクイーグルに命中して、爆発を起こして撃墜される。

「ウォォォォ！墜ちろ！」

ダンダンダンダンダン

他に迎撃に出てきたストライクイーグルが、私に向けて３６?突撃砲（ＡＭＷＳ－２１）を放って来る。

「ちぃ！邪魔をするなーーーー！！」

弾幕を回避して、バズーカを構えて発射する。

ビューオォォォーーン

ストライクイーグルは、上半身を消し飛ばされて撃墜される。中のパイロットは痛みすら感じる事なく死んだだろう。
更に敵艦隊に接近する。　巡洋艦や戦艦から砲撃が飛んでくる。

「ち！弾幕が厚いな。俺は右から攻めるぜ！」

「ならば私は、左翼から攻めるとしよう。ガトー少佐、中央突破を頼めるか？」

「お任せください！必ずや敵中突破をして空母を沈めてやります！」

「良し！散開だ！」

ジョニー・ライデン少佐の合図と共に散開する。　右翼にライデン少佐。左翼にマツナガ少佐が向かった。私は、そのまま敵艦隊に突撃する。

「クソ！弾幕を張れ！アパッチ隊、敵を撃ち落とせ！」

ＡＨ－６４Ｄ（アパッチ・ロングボウ）が此方に向かって来る。

「猪口才な！墜ちろ！」

ダンダンダンダンダン

頭部バルカン砲を放つ。ＡＨ－６４Ｄのコックピットに命中して、墜落する。

「へ！当たらないな！」

「当たりはせん！」

無線から二人の声が聞こえた。どうやら攻撃を回避した様だ。

（チィ！周りの艦艇が邪魔だな！）

右前方から巡洋艦が２隻迫って来ていた。ビームバズーカを構えて、ロックオンする。

「沈めぇぇぇぇ！！」

ビューオォォォン

ビームバズーカから放たれたビームは、２隻の巡洋艦の船体に大穴を開けた。巡洋艦は２隻とも爆発を起こして沈没していく。

「おら！墜ちな！」

「でぇりゃぁぁぁ！」

右翼と左翼から、爆発音が聞こえる。二人とも艦艇を撃破した様だ。

「此処で手間取っている訳にはいかんのでな！落とさせてもらう！」

ブースターを吹かして一気に戦艦に近付き、ブリッジの前に出る。

「おお！！」

敵の無線が混線して、ブリッジの会話が聞こえた。気にせずにビームバズーカを発射して、ブリッジを吹き飛ばす。

ドッカァァァーーン

ビームバズーカの直撃を受けた戦艦が、爆発をお越しならが沈んでいった。

ダンダンダンダンダン

「おっと！」

ＡＨ－６４Ｄのガトリング砲が火を吹く。
その砲撃を回避して、ビームサーベルを抜く。

ズッパーーン

ブースターを吹かして、ＡＨ－６４Ｄに接近して真っ二つにする。
真っ二つされたＡＨ－６４Ｄが、落下していった。

「そら！墜ちろ！」

「白狼に会ったら逃げる事だな」

ライデン少佐の方を確認すると、丁度ヒートホークで戦艦を真っ二つにしていた。
マツナガ少佐は、ヒートホークでストライクイーグルを、コックピットから横に真っ二つ切断していた。

（流石だ。私も負けていられれん！）

ブースターを吹かして、敵艦隊の中央を目指す。すると、通信が入って来た。

「ＨＱより、ガトー少佐へ。もうすぐ敵艦隊の中央になります。敵主力空母を全て撃破してください」

「了解した」

ＨＱからの通信に返事をして、更に機体のスピードを上げる。すると前方に敵ニミッツ級主力空母が３隻見えた。

（流石に展開が完了しているか。だが、負けん！）

ニミッツ級空母から離陸した、Ｆ－１８ホーネットが既に待ち構えていた。更に甲板には、ストライクイーグルが多数待ち構えている。
私は構わずに敵に突撃する。

「へっ！この数に単機で突撃するとは、バカなパイロットだな！撃ち落とせ！」

ダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダン

Ｆ－１８ホーネットが弾幕を張るが、私は当たる事なく接近してビームサーベルでＦ－１８ホーネットを切り裂く。

「う、うわぁぁぁぁ！！」

断末魔を上げて、ホーネットが撃墜された。

「や、やめてく」

近付いて来たホーネットに、頭部バルカン砲を放つ。コックピット部分に直撃して、ホーネットが墜落していった。

「くらえ！白い奴め！」

「墜ちなさい！」

２機のホーネットが、エレメントを組んで攻撃してきた。

「未熟！」

２機のホーネットの攻撃を回避して、ブーストダッシュで一気に間合いを詰めて、ビームサーベルを抜きコックピットを切り捨てる。

「ギャア！」

「きゃあぁぁ」

２機のホーネットは爆発を起こして吹き飛んだ。

「もらった！」

後からストライクイーグルが接近していた。

「チッ！殺られはせん！」

振り向いて迎撃しようとした所、ストライクイーグルに弾が命中して蜂の巣になって、水面に墜落して行った。

「危なかったな、ガトー少佐」

「マツナガ少佐！援護感謝します！」

左翼から抜けてきたマツナガ少佐が、ストライクイーグルを撃墜してくださった。

ドッカァァァーーン

いきなり爆破音が響いた。音のした方を見ると、先程までいた空母が爆破を起こして沈没していた。

「覚えておくんだな！戦場を駆ける赤い稲妻。そう、俺が真紅の稲妻ジョニー・ライデンだ！！」

爆破を回避したライデン少佐のザク？Ｒ－２型が側に来ていた。

「ＨＱより、各機へ。作戦目標の破壊を確認しました。任務完了です。お疲れ様でした。シミュレーター訓練を終了します」

オペレーターの管制と共にシミュレーターが暗くなり、コックピッ

トが開く。私はコックピットから出た。シミュレーターの外に出ると、ライデン少佐とマツナガ少佐の二人も出てきた。

「お疲れさん。悪いな最後は頂いたぜ」

ライデン少佐が片手を上げながら此方に近付いて来る。

「いえ。彼処で油断して、敵機に回り込まれた私が悪いのですから」

「いや、彼処はガトー少佐のせいでは有るまい。多数の戦術機が居る中で、あれだけ立ち回ったのだからな」

いつの間にかマツナガ少佐も側に来ていた。

「しかしよ、不動准将はなんでこんな訓練をするように命令をよこしたんだ?ましてや、相手がアメリカ軍だなんてさ」

「恐らく、アメリカを相手に戦う可能性が有ると言うことなのだろう。用心をしておく事に問題は無いのだからな」

確かにマツナガ少佐の言う通りだ。いつアメリカと刃を交える事になるかは、分からないからな。

「ガトー少佐は良いよな～新型機を授与されるんだろ?羨ましいぜ」

「いえ、そんなことは有りません。不動閣下曰く、一回限りの機体になるだろうとの事ですから」

「確か、ガンダム試作2号機とか言う機体だったな」

そう。先程のシミュレーターの訓練で使用してみたが、かつての機体とは全く違う次元の機体なっていた。見た目は全く変わらないのに、中味は化け物級の性能になっていた。

「あのビームバズーカのチャージした時の破壊力は、半端なかったな～」

「そうですな。地表にいたＢＥＴＡの３分の２が、消滅しましたからな。味方ならありがたいですが、敵からしてみたら最悪でしょうな」

「確かに凄い威力でしたが、不動閣下が月攻略の際に使用したトールギス?よりは、かなり弱いのでは?」

確か、レベル９ハイヴの半分を吹き飛ばしたと聞いている。

「そう言えば、マツナガ少佐は間近で見たんだよな?不動閣下が、レベル９ハイヴの半分を吹き飛ばす所をさ?」

ライデン少佐がマツナガ少佐に訪ねる。マツナガ少佐は両腕を組んで眉間にシワが寄り、非常に険しい表情をしている。

「左様だ。あれは、凄まじい破壊力だった。あれは、出来れば使わないに越したことはない兵器だった」

「おいおい。そんなに凄かったのかよ?」

「下手すればソロモンさえ破壊出来る威力だった。不動閣下も、宇

宙戦以外あの機体を使用するつもりが無いと仰る程だ」

マツナガ少佐の様な古参の兵士がそう言うならば、余程恐ろしい破壊力だったのだろう。

「まあ、何にせよ、この訓練の様な事が実戦で起こらない事を願うぜ」

「左様。味方に銃を向けねばならない様な事に、ならなければ良いのだがな」

「はい。この訓練が無駄足になることを、願うばかりです」

もし、アメリカが明星作戦中に銃を向けてきたら、その時は情け容赦無く倒さねば有るまい。

その覚悟は何時でも出来ているがな。

皆黙りこむ。辺りが静寂に包まれる。

パチ

ライデン少佐がいきなり、両手を叩いた。

「止めた止めた！辛気臭い話は終わりだ！それより、今日の訓練は終わりなんだから一杯飲みに行かないか」

手を動かして、飲み物を飲む仕草をする。たまには酒を飲みに行くのも悪くないな。

「ふふ。そうですな。たまには飲みに行きますか」

「ええ。行きましょう」

ライデン少佐の機転に感謝しつつ、３人で南部の街に飲みに行く話を決めながら、シミュレータールームを出てシャワールームに向かうのだった。

追記

街に出たライデン少佐は最初こそ３人で飲んでいたが、バーで見かけた綺麗な女性をナンパして先に帰って行った。次の日会ったら、少し痩せこけた様に見受けられた。何でも、朝方までハッスルしたとか。

まあ、私には関係の無い事だがな。そんな平和な１日だった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

第四十二話（後書き）

エースパイロット達の平和な1日を書いてました。やはり、悠斗以外の視点で書くのはちょっと苦手かな？
感想などあればどうぞ。

第四十三話（前書き）

やっとこ出来ました。
なんだか、キャラ崩壊がしている気がします。
では、本文をどうぞ。

第四十三話

ハマーンｓｉｄｅ

１９９９年６月１８日
ニューヨーク国連本部ビル

私は今、国連本部ビルの自分のオフィスで書類に目を通している。書類の内容はオペレーション・ルシファー（明星作戦）に関するものだ。

（やれやれ。国連軍を正式に投入する事になったのは良いが、国連軍の主力がアメリカ軍を中心にしているからな。日本帝国と香月博士は躍起になってメビウスの参加を要請してきたか）

書類には、メビウスの主力を参加させて欲しいと、要望が書かれていた。

（はぁ。全く、大東亜連合だけでは足りずにメビウスすら、自分達の権力争いの道具にするつもりか）

日本帝国主導のオルタネイティヴ第四計画と、アメリカ主導のオルタネイティヴ第五計画の争いが水面下で激化しているのは、周知の事実だ。
第四計画の思惑は悲願のＧ元素を手に入れて、計画の推進と主導する日本帝国の政治的劣性を挽回するつもりなのだろう。　第五計画

の連中は、ＢＥＴＡ由来の物質でできた新型爆弾、通称「Ｇ弾」の実証試験の場所にして、Ｇ弾の有効性と自国の推進する第五計画の優位性を示すつもりなのだろう。私は、書類を机の上に置き秘書が煎れてくれたコーヒーを飲む。芳醇な香りが鼻腔を刺激する。　口の中に適度な苦味が拡がる。

（まあ、既に賽は投げられた。後は各国がどう動くかだ）

私の予想では各国が互いに足を引っ張りあい、作戦が滞り多大な被害が出ると見ている。

（フ。下らん政治家どもの争いの正で、被害を受けるのは現場の兵士達だな。かつて、アステロイドベルトまで行った私が、地球の重力に引かれて戻って来たように、今の人類もまた地球の重力に引かれ続けているのだな）

かつてジュドーに言ったことを思い出す。死に際に言った言葉だ。

「戻って来て良かった。強い子に会え」

誰にも聞こえない小さな声で言う。ジュドーの奴は私の潔さをもっと上手に使えば、地球すら救えると言っていた事を思いだした。

（残念だが、この世界では幾ら潔さ良くても意味がない。寧ろ、手を汚しても己がやるべき事を最後までやり抜き通す事が大事なのだ）

そう。第四計画の責任者である香月博士の様に使える物は全て使う。要は結果を残す事が大事なのだ。

（しかし子供か。私も悠斗との子供が欲しいな／／／）

悠斗と二人の愛の結晶である、子供達に囲まれた生活を想像する。

（出来れば、子供は三人いや四人は欲しいな。男の子が二人に女の子が二人だな！家は郊外に建てて広い庭とプールが有る家が良いな！まて、その前に式はどうする？教会であげるか？いや、悠斗は日本人だから日本式に着物を着る式にするか？）

私は暫く仕事をそっちのけにして、明るい未来計画を考える。

「は、ハマーン事務総長？」

私が明るい未来計画の考え事ををしていると、秘書から声をかけられた。

「ん？どうかしたか？」

私は直ぐに思考を切り替える。明るい未来計画は後で考える事にしよう。

「いえ。非常に真剣に考え事をされている様に見えましたので、一応声をかけさせて頂きました」

どうやら知らず知らずの内に、真剣な表情をしていたらしい。

「（なに、明るい未来計画を考えていただけだ）書類の内容を考慮

していただけさ」

「そうでしたか。出過ぎた真似をして申し訳ありません」

秘書が頭を下げる。彼女には何の落ち度も無い。落ち度が有るとすれば、それは私の方だ。

「なに、気にするな。それとより、何か書類が来ているか？」

「あ、はい！此方が先程届いた書類になります」

秘書が持っていた書類を手渡す。それを受け取り目を通します。内容は新たにＢＥＴＡの東進によるＨ２３オリョクミンクスハイヴとＨ２４ハカンダハイヴが建設されたとの報告書だった。更に、それによるアメリカ各地での市民による大規模なデモ活動が起きているとの事だった。

書類を机の上に置き、背もたれに体重を預けて回り、窓の外を見る。雲一つ無い美しい青空が広がっていたが、対称的に私の頭の中は酷く雲っていた。

（はぁ。市民らが欧州の二の舞にしたくないのは分かるが、だからと言ってデモ活動による治安低下は勘弁してほしいものだな）

書類には、デモ隊の一部が暴徒化して商店などを破壊して、略奪等が起きていると記されていた。

（しかし、中ソ連合もシベリア防衛を諦めつつある様だな。戦力不足も有るだろうがこう易々とハイヴを建設されるとはな）

実際３０年近く戦争をしているのだ。今まで耐えたこと事態が凄い

のだ。

（恐らく明星作戦が、人類にとってターニングポイントになることはまず間違いあるまい。後は、各国の利権争いがより激化するくらいか）

今ですら、各国が激しい利権争いを繰り広げている。更に第四計画と第五計画の連中も加わってより、過激になりつつある。

（後、悠斗の月攻略完了の発表のタイミングだな。悠斗を准将ごときの階級で納めておく必要はあるまい。あやつには、より高みに昇ってもらわないとな）

地球上では、メビウスと私しか月が攻略された事を知らない。私の手元にある、月攻略に関する書類と記録映像を発表すれば悠斗の階級は上がるだろうし、世界の流れも大きく変わるだろう。

（後は悠斗次第か。まあ、私は私に出来る事をするだけか）

私は再び机に向かい、書類に目を通すのであった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

マリーダｓｉｄｅ

「師匠ぉーーーーーーー！！」

「悠斗ぉぉぉぉぉ！！！」

私達の目の前で、拳の嵐がぶつかりあう。
悠斗さんの師匠のマスターアジアと悠斗さんの拳がぶつかり合い、辺り一面を原っぱに変えて行く。

「マスターアジア頑張れ！！！」

「悠斗！負けるんじゃないよ！」

プル姉様とプルツー姉様が、二人を応援する。
私達が今居る場所は、多次元多目的訓練室と呼ばれる場所だ。此処では、外の世界とは違う時間の流れの中にあるらしい。　また、この部屋の中でいくら暴れても部屋の外には何ら影響が無いらしい。
また、度々場所が変わる不思議な部屋だ。
私達の目の前では、悠斗さんとマスターアジアさんが模擬戦をかれこれ2時間程続けている。
お互い激しく攻撃しあっているが、勝負がつく様子が無い。
互いに距離を取り構える。どうやら、決着をつけるつもりらしい。

「ハァァァァ！！！」

「ヌゥゥゥゥ！！！」

お互いに力を溜める。次の瞬間悠斗さんがマスターアジアの目の前に現れた。

「てりゃゃゃゃ！！！」

渾身の力を込めた右がマスターアジアに迫る。

「この！馬鹿弟子がぁぁぁぁぁ！！！」

マスターアジアも力を込めた右を放つ。

がぁぁぁぁんんん！！

両者の拳が互いの腕をクロスして、互いの顔面に当たっていた。所謂、クロスカウンターだ。

「凄い！クロスカウンターだ！！」

「勝ったのはどっちだ！？」

「わ、分かりません。全く見えませんでした」

プルツー姉様の問いかけに答える。私には少なくとも両者の動きは見えなかった。

「流石師匠です。最後の一撃は骨に染みまし」

「なに、悠斗の一撃の方がワシより重かったぞ」

二人はそう言って、互いの拳を放して此方に歩いてきた。

「お疲れ！どっちが勝ったの？」

「ああ。引き分けだよ」

「左様。もう少し悠斗の一撃が早ければワシが負けたがの」

「え！マスターアジア師匠の方が負けたのかい？」

プルツー姉様が驚くのも無理はない。私も驚きを隠せなかったからだ。普通弟子が師匠を越えるとは、並大抵の事では無いはずだ。

「何を、そんなに驚く？悠斗は既にワシを凌駕しておるのだよ」

「いえいえ。まだまだ俺など未熟者ですよ」

「フ。相変わらず謙虚な奴よのう。それより、ひと休みしようぞ」

「そうですね。では、場所を変えましょう」

悠斗さんがそう言うと、荒れ果てた大地から途端に海の見えるカフェテラスに場所が変わった。

丁度人数分の席があるので、悠斗さんとマスターアジアさんが対面に座り、マスターアジアさんの左右にプル姉様とプルツー姉様が座り、私がプル姉様と悠斗さんとの間に座った。因みに飲み物は、いつの間にか用意されていた。マスターアジアさんがお茶。プル姉様とプルツー姉様がトロピカルジュース。私がコーヒー。悠斗さんがア〇エリア〇だ。

コーヒーを飲む。口の中に適度な苦味が拡がる。お茶菓子に煎餅とクッキーがテーブルに出ていた。クッキーを1つ取り頂く。サクと

した食感と、ほどよい甘さが美味しいかった。

「して、悠斗よ。後半月後には7月に入るが、どうするつもりなのだ？」

「はい。7月に入る迄は師匠と共に修行に励み、7月に入ってからは明星作戦の為の本格的な準備に入るつもりです」

マスターアジア師匠の問いかけに、飲んでいたア〇エリア〇の入ったコップを置いて答える悠斗さん。日本帝国主導の明星作戦の開始日は、確か8月上旬だったはず。悠斗さんは今月中は、自身を鍛え上げる為に多次元多目的訓練室に籠り、来月から本格的な準備に取りかかるか。来月からは忙しい日々に変わるのだろう。

「ふむ。ならば良いのだ」

そう言ってお茶を飲むマスターアジアさん。何か思うところがあったのだろうか？

「ねえねえ、マスターアジア。また、昔のお話をしてよ～」

トロピカルジュースを飲んでいた、プル姉様がマスターアジアさんの過去話を聞きたいと言い出した。

「そうだね。私も聞きたいよ」

「ふむ。では、ワシが若い頃北極で修行していた時の話をしよう」

マスターアジアさんの過去の話が始まった。

「まだワシが若い頃、ワシは自分より強い奴と戦いたい為に世界を旅しておった」

プル姉様とプルツー姉様が真剣に話を聞いている。悠斗さんの方を見ると、既に席には居なかった。周囲を見渡して見ると、日陰のある芝生の上で横になっていた。

（あれ？何故あんな所に？）

3人をその場に残して、私は席を立ち悠斗さんが横になっている芝生に向かう。悠斗さんに近付くと綺麗な歌声が聞こえた。

「辿り着く場所さえも分からない、届くと信じて今、想いを走らせるよ」

悠斗さんの歌声は、ずっと聴きたくなる位綺麗な歌声だった。

「マリーダ中尉。そんな所に立ってないで、日陰に来れば良いさ」

歌うのを止めて、私に声をかけてくる悠斗さん。　私は悠斗さんの頭を持ち上げて正座して座り、頭を膝の上に置いた。所謂膝枕だ。

「おいおい！？重くないのか？」

「いえ。大丈夫です。それとも嫌でしたか？」

「いや、構わないけど。良いのか？俺なんかに膝枕をして？」

「はい。マスターが手を汚してしまうより良いです」

悠斗さんは、先程右腕を頭の下に置いて横になっていた。なら、腕を汚れさせるよりも、私の膝を使ってもらえば良い。幸い下は芝生だ。乾いているから、服が汚れても払えば綺麗になる。間違っても、私がしたかったからするわけでは無い。

「マスターか。悠斗って呼んでくれて構わないよ。　軍務中じゃないからさ」

「・・・なるべく、ど、努力してみます／／／」

流石にまだ、恥ずかしくて本人を目の前にして名前では呼べない。

「そうか。なら、気長に待つさ。そう言えば、此方でね生活には慣れたかい？」

「あ、はい。姉様達のおかげでかなり馴染みました」

かつての新生ネオ・ジオンと違い、食料や物資に困ることなく過ごせるのはありがたかった。かつてのネオ・ジオンでは、ＭＳの消耗部品すら満足に交換出来ずに苦労した。

此処では、一回実機演習を行ったら直ぐに部品を取り替えてくれた時は、本当に整備兵の皆に感謝した。私がそんな事を考えていると、したから寝息が聞こえた。

「眠ってしまったか」

膝枕された悠斗さんが、いつの間にか眠っていた。私は彼の髪の毛を優しく撫でる。サラサラとした感触が気持ち良かった。

「悠斗さん。私は貴方の隣に立てる様に頑張りますから、待ってい

てくださいね／／／」

そう言って悠斗さんの髪の毛を、優しく撫でるのであった。

（出来ればこの時間が、ずっと続けば良いのに）

私は悠斗さんが起きるまで、彼の可愛らしい寝顔を見ながら髪の毛を優しく撫でるのであった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

第四十三話（後書き）

何故かマリーダ中尉のターン！！
作者も書いていて何故こうなったか、分からない！！
本当なら、マスターアジアとプルとプルツーの昔話を書くはずだったのに。感想などあればどうぞ。

第四十四話（前書き）

やっとこ出来ました。
今回でほのぼの路線は終了です。では、本文をどうぞ。

第四十四話

香月ｓｉｄｅ

１９９９年７月７日
日本帝国仙台臨時研究室

トゥルルルトゥルルル

私は今電話をかけている。相手は国連事務総長ハマーン・カーンだ。
長いコール音が受話器から聞こえてくる。

（チッ！早く出なさいよ！私は暇じゃないんだから！）

内心で悪態をつく。長いコール音が漸く切れた。

「私だ。何の用だ、香月博士？私も忙しい身なのだが？」

「あら、それは失礼。では、時間が無いようなので手短にお話させて頂くわ」

ハマーン事務総長相手に腹の探りあいをしても、まず無駄だ。悔しいがあっちの方が腹黒い。更に言えば、話術も彼方が上だ。また、

メビウスとのパイプを持っているのは、現在は彼女だけになる。無闇やたらに敵を作る必要は無い。

「で？何の用だ？下らん話なら、直ぐに電話を切らせてもらう」

「いえ、メビウスの不動准将は明星作戦に参加していただけるのかしら？」

私からしてみれば、此れは最重要な事だ。幾ら帝国軍が戦力を回復させたとはいえ、まだまだ戦力不足な事には変わらない。また、大東亜連合が参加してくれるとは言え、アメリカ主体の国連軍を抑えられるとは言い難い。なら、手っ取り早く抑えられるメビウスを参加させたいのだ。

「また、それか。いい加減飽き飽きしてきたぞ」

「まあ？それは失礼しました。けど、此のような事で飽き飽きされるようなら、事務総長の仕事はさぞや楽なのでしょう」

でも、やられっぱなしは私の性には合わない。なら、少し位は此方のペースに持って来るくらいはしなくちゃね。

受話器越しにハマーン事務総長の威圧感が伝わってくる。

（流石に切れた様では無いようね。やはり、安い挑発には乗らないか）

内心この程度の挑発には乗らないと分かっていたが、先程から空気は重い。しかも、ハマーン事務総長は先程から黙ったままだ。

「フッ。流石に予算の無駄食いばかりしている研究者に比べれば、

まだ忙しいがな」

カチーン

流石に、少し頭に来た。しかし此処で挑発に乗ったら私の負け。だから、自分を落ち着かせる。

（頭はＣＯＯＬに、でも心は熱く。ムカつく小娘相手でも、直ぐに激情に流されては駄目よ！）

頭から血が降りていくのが分かる。ゆっくり深呼吸してから話をする。

「あら、オルタネイティヴ計画が無くなれば困るのは、寧ろ国連なのでわ？大国は煙たがっていますから、無くなれば大いに喜ぶのでは無いのですか？」

実際かの国は、国連等顔を立ててやる位にしか思っていない。しかも、オルタネイティヴ計画が無くなったとしても、第五計画位なら自分達で勝手にやるだろう。それこそ、各国の意思など無視して。

「別に結果を残せない研究に金を出すよりましさ。それに、不動准将率いるメビウスがある。かの国とて、メビウス相手には易々と喧嘩は売れまい」

ハマーン事務総長は、何ら臆すること無く言い切った。つまり、裏を返せばそれだけメビウスを、不動准将を信頼しているのだ。

「さて、皮肉はこれくらいにして本題だが、メビウスは明星作戦に参加するかは今だ不明だ」

散々焦らした挙げ句に、また変わらない答えが返ってきた。本当に連絡を取りあっているのか、疑いたくなる位だ。

「そう。分かったわ」

「なんだ?随分と殊勝じゃないか?」

「無駄話してる程、暇じゃ無いのですわ」

「そうか。なら、早く結果を出してもらわねばな。貴様の席は、何時までもあると思うなよ」

ツーツーツー

最後にそれだけ言って電話が切れる。私は受話器をおもいっきり叩きつけて置いた。

ガチャーーーン

「フザゲンじゃないわよ!!!あの小娘が!!何が、結果を残せない研究ですって?!!技術が追い付いていないだけじゃない!私の理論は完璧よ!!」

私はイラつきながらも椅子に座り、右手で顔を覆う様にする。

「良いわ!まずはハイヴを攻略して、更なる研究をするだけよ!!見ていなさい!必ず勝つのは私よ!!」

雨音が聞こえてくるが、そんなことなど気にも止めずに研究を再開

するのだった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

今日は7月7日、つまり鑑純夏の誕生日であり七夕祭りの日だ。今日の天気は晴れで綺麗な天の川を見ることが出来る。
今頃日本は雨だろう。彼女の誕生日は毎年必ず雨が降るからだ。
俺は今、七夕祭りの会場を散策している。秘密基地南部の街で七夕祭りが行われているからだ。
何故、秘密基地南部の街で七夕祭りが行われているかと言うと、メビウス主催の祭りだからだ。
明星作戦前の最後の息抜きの為に、5月中頃から準備を進めて来た。

「うん。大盛況で何よりだ」

周囲の屋台や出店はお客さんで大繁盛している。　子供は勿論、大人やカップル等が楽しそうに遊んでいる。

（皆、笑顔で何よりだ。彼等の笑顔を守る為にも、明星作戦は頑張らなきゃな）

そんなことを考えながら歩いていると、前方から浴衣を着た二人の女性が歩いて来た。
一人が俺に気付いて手を振ってきたので、手を振り気付いた事を合図して近付いて行った。

「やあ。お祭りを楽しんでいるかい？イルマ中尉、シーマ中佐？」

「ええ。とても楽しいですよ。日本式のお祭りなんて初めてですから」

「ああ。浴衣って言ったかな？この服は？初めて着たけど、なかなかいい服だよ」

改めて二人の浴衣姿を見る。イルマ中尉の浴衣は、白を基調に所に桜の花びらが薄いピンクで描かれている、シーマ中佐の浴衣は、同じく白を基調にしているが牡丹の花が描かれている。

「二人とも、浴衣が良く似合っているよ」

ニッコリと微笑みながら、二人の浴衣姿を誉める。

「あ、ありがとうございます／／／／（やったは！悠斗さんに誉めてもらったは！）」

「そ、そうかい。ありがとう悠斗／／／／（っつ！相変わらずカッコいい男だ。流石私が惚れた男だよ／／／／）」

二人が、何故か頬を紅くしながら見つめてくる。恐らく歩き回った正で、疲れが出たのだろうか？

「二人とも、これから何か予定は有るかな？」

「い、いえ。ありません！（もしかして、デートのお誘い？だとしたら、必ず行かなきゃ！）」

「べ、別に無いよ。（悠斗から、まさかデートのお誘いが来るなんて！！例え用事が有っても悠斗を優先するさ！！）」

どうやら二人とも無いようなので、俺が行きたい所に誘ってみよう。

「なら、短冊を書きに行かないかい？丁度、行く所だったからさ」

「短冊ですか？」

「ああ～。そう言えば、会場の奥で短冊を書く事が出来るんだったね。忘れていたよ」

イルマ中尉は首を傾げて、頭にエクステンションマークを浮かべる。シーマ中佐は思い出したらしく、相槌を打ってくれた。

「イルマ中尉は知らないかな？七夕では、短冊に願い事を書いて竹に吊るして置くと、願い事が叶うと言われているんだよ」

「そうなんですか。なら、行きます！！」

そう言うと、イルマ中尉が左手に抱き着いて来た。柔らかな胸が、浴衣越しに当たる。

「ちょ！イルマ中尉？行きなりどうしたんだ？」

「いえ。迷子にならない為にもこうした方が良いと思いまして。嫌でしたか？」

上目遣いに俺を見るイルマ中尉。まあ、迷子にならない為には手を繋ぐ事は最善の方法だから良いか。

「まあ、迷子にならない為なら良いか。手を離さない様に気を付けてくれ」

「はい。分かってますよ」

「なら、私もやろうかね」

そう言ってシーマ中佐も、右腕に抱き着いて来た。イルマ中尉より、更に密着するようにだ。

「し、シーマ中佐！？」

「あら？イルマは良くて、私は駄目だなんて言わないよね？」

「まあ、良いか。じゃあ行こうか？」

「「はい！」」

二人に腕を抱き着かれながら、短冊を書きに向かう。この時、俺は気が付かなかったのだか周囲の独身男性からは、視線で人が殺せたらな～と言わんばかりに睨まれていたらしい。

そんなことなど気にすること無く会場を奥に進んで行くと、開けた

場所に出た。短冊を書ける会場に着いたのだ。

「へ～え。此処が短冊を書ける場所かい」

「そのようですね。あちこちで皆さんが書いていますから」

周囲を見渡すと、彼方此方で短冊に願い事を書いている人達が沢山いる。　俺達はそのまま受付に行き、短冊とペンを受け取り願い事を書いて竹に吊るした。

「悠斗は、なんて願い事を書いたのさ？」

「うん？俺かい？」

「あ！確かに気になります！」

二人が俺を見る。別に大した事を書いた訳ではないから、言っても問題ない。

「な～に。世界が平和になります様にと、書いただけさ。二人はなんて願い事を書いたの？」

「私も、大した事を書いていませんよ（悠斗さんと、恋人に成れます様になんて、口が裂けても言えません！！／／／）」

「私も、大した事を書いちゃいないよ（悠斗の妻に成れます様になんて、死んでも言えないよ／／／）」

二人ともどうやら、ありふれた内容を願い事にしたらしい。きっと二人も平和的な事を書いたのだろう。

「じゃあ。もう少しだけ、夜店を周るかい？」

「ええ！喜んで！」

「私は構わないよ」

二人にＯＫをもらったので、短冊を書ける会場を後にして夜店を巡るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

ワシは今、七夕祭りの短冊を書ける会場に来ておる。悠斗が計画した七夕祭りは、大盛況の大にぎわいだ。ワシは書いた短冊を竹に結ぶ。

「そう言えば、皆はなんと願い事を書いておるのだろうか？」

ふと、頭によぎった疑問を口にして呟いてしまった。ワシは近くに有った竹に吊るされている短冊を見ることにした。丁度吊るす場所が無くなっており、周囲に人が居なかったからだ。

（大抵は、身近な事や世界平和的な事を書いておるだろうな）

ワシは手近な短冊を手に取り見る。するとこう書かれていた。

『女性陣からもっとモテますように。　真紅の稲妻』

此れはどうやら、我がメビウスのパイロットが書いた短冊の様だ。

（まあ、モテるかどうかは本人次第だな）

次に近くに有った短冊を見る。

『家名に恥じぬ戦果を上げる。　白狼』

（ウム。白狼程の武人なら問題あるまい）

短冊を離し、違う短冊を取り見る。

『サングラスをかけるか、オールバックの総帥にするか悩む。　金髪マスクの大佐』

（それは、個人的な悩みではないだろうか？）

なんとなく、金色に光る機体と地球に小惑星が落ちる気がした。

雑念を頭の隅に追いやり、違う短冊を手に取り見る。

『愛人との間に子供が出来ます様に。　青い巨星』

（それは、いかがなものかと思うぞ！まあ、本人達が合意の上なら

構わんが）

なんとなく、短冊に書く願い事ではない気がするな。また、違う短冊を手に取る。

『不動准将がロリコンになります様に。　電子の妖精』

ワシはズッコケそうになった。

（ま、まあ。ロリコンになれば恋人に成れる確率が上がるからな。しかし、それを普通短冊に願うかのう？）

ワシは引きぎみにその短冊を離し、違う短冊を見る。

『悠斗が巨乳好きになります様に。　巨乳の猫目』

（・・・・・愛されていると言うべきなのか？我がメビウスには、個性的な者が多いな）

今度は反対側に行き、短冊を見る。するとこう書かれていた。

『マスターともっと、お近づきになれます様に。　プルトゥエルブ』

（まあ、これくらないなら可愛らしい方じゃの。しかし、これはある意味本名じゃないかのう？）

まあ、分かる者は殆どいないだろうがな。

また、違う短冊を手に取り見る。

『不動准将ともっとお近づきになりたい。　褐色肌のピンク髪』

（まあ、さっきのと余り変わらないな）

此方側は、激しい内容は書かれてはいない様だ。ワシはこの時油断していた、まさか最後に大物が待っているとは知らずに。

（さて、これで最後にするか）

近くに有った白い短冊を手に取り見る。するとこう書かれていた。

『悠斗と幸せな家庭を作る！正妻は私の物だ！　　国連事務総長』

ワシはこの時ばかりは、本当に驚いた。何故か来ていない人物の短冊が吊るしてあったのだ！

（何故此処に有るのだ！？彼女は今は北米にいるはずだ！！）

ワシはえもいわれぬ恐怖に襲われた気がしたので、竹から離れて会場を後にして急いで自室に帰るのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

追記

後日聞いたら事務総長の短冊は、悠斗が数日前に本人に短冊を送り、当日の朝に届いた短冊を実行委員会に渡して、竹に吊るしてもらったとの事だった。

第四十四話（後書き）

次回からは明星作戦がメインになります。感想などあればどうぞ。

第四十五話（前書き）

なんとか出来ました。
短いですが。
では、本文をどうぞ。

第四十五話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年７月１４日
地球秘密基地

俺は今、会議室にて将官クラス会議を行っている。今回の出席者は、エギーユ・デラーズ中将、ユーリー・ハスラー少将、　ノイエン・ビッター少将　ユリー・ケラーネ少将、コンスコン准将、ギニアス・サハリ大佐、シャア・アズナブル大佐、ノリス・パッカード大佐、ホシノ・ルリ少佐となっている。

「皆揃った様だな。これより横浜ハイヴ攻略作戦に関する、会議を始める。ホシノ少佐。説明を頼む」
「はい。畏まりました」

デラーズ中将による開始の合図が入り、会議が始まった。ホシノ少佐が中央モニターの前に立つ。　中央モニターに横浜ハイヴと周辺の映像が映し出される。

「此方が明星作戦での攻略目標のＨ２２、横浜ハイヴです。現在の規模はフェイズ２です。しかし、モニュメント（地表構造物）こそ

フェイズ2ですがスタブ（地下茎構造）は、目下フェイズ4規模に相当します」

会場内がざわめき始める。

「なんとまた、不思議なハイヴですな」

「月の時とは違うようだな」

「確かに月のハイヴとも違う異質なハイヴのようだな」

会議の出席者から様々な意見が上がる。会場内が騒がしくなり始めた。

「皆、静粛にな。ホシノ少佐、説明を続けてくれ」

「畏まりました」

騒がしくなり始めた会場が、デラーズ中将の一声で静かになる。ホシノ少佐が説明を再開した。

「説明させて頂きます。まず、明星作戦（オペレーション・ルシファー）は１９９９年8月5日に決行となりました。元々は5月に行われる予定でしたが、様々な政治的要因が原因で8月迄縺れました。作戦の概要はこうです。多摩川沿いに展開した帝国本土防衛軍と、相模湾から上陸する国連軍とで横浜ハイヴのＢＥＴＡを南北に陽動をして、軌道降下兵団の突入による反応炉を制圧と言った流れです」

９０年代に確立された軌道降下戦術と水上部隊による制圧攻撃を組

み合わせた作戦だな。
オードソックス故に、作戦中に偶発的な問題が無ければハイヴ攻略が可能な作戦方法だ。

「近年確立された軌道降下兵団によるハイヴ突入ですか。外側から制圧しながら進行するより安全ですな」

「ユーリー・ハスラー少将の仰る通りですな。この方法なら通常兵器でも充分ハイヴ攻略が可能ですな」

「しかしコンスコン准将、ハイヴ内部では補給が難しい為、補給線の確保が重要になりますよ」

「確かにシャア大佐の言う通りですね。前線部隊にとって補給線の確保は最重要課題になりますな」

会議の出席者達から様々な意見が出る。特にハイヴ内部での戦闘は戦術機やＭＳのように、三次元軌道が出来る兵器に限られる。これは、パレオロゴス作戦で得られた教訓だ。特にハイヴ内部では偽装横坑（スリーパードリフト）からのＢＥＴＡの奇襲攻撃を受けたりして、補給線がズタズタにされたりする。仮に一時的に確保に成功したとしても、長時間に渡る戦闘の末に先行突入部隊の全滅や地上部隊の全滅等が起きれば補給線を放棄せざるを得ない状況になることも有り得るのだ。

「皆落ち着きたまえ。論議をする前に、説明を聞いてから論議に移ろうではないか」

会議の方向性が変わり始めた所を、デラーズ閣下が元に戻す。出席

者達は再び静かになる。

「では、静かになりましたので説明を再開します。　先程も申しましたが、多摩川沿いの北部に帝国本土防衛軍、南部の相模湾から国連軍が進行を開始します。なので、我々メビウスは旧横浜港から水陸両用ＭＳ及びホバーの出来るＭＳでの上陸作戦を提案します」

確かにそれならば各国の援護にもなるし、指揮系統に影響を及ぼす可能性は低いだろう。しかし、問題も有る。

「しかし、この方法の場合旧横浜港に近付く迄に艦艇に損害を被る可能性が高いな」

ユリー・ケラーネ少将がこの方法の問題点を上げる。そう、この方法だと横浜港に接近するためにかなり東京湾の中に入らなければならない。相模湾から上陸する部隊に比べて危険度も段違いで上がるのだ。

「はい、そうなのです。この方法を採用した場合、東京湾の内部に侵入しなければなりません。しかし、我々メビウスが所持している水上艦隊、水中部隊の力を最大限発揮出来るのは、この方法が一番なのです」

「うん。そうなんだよな～・・・・」

ユリー・ケラーネ少将も黙ってしまう。相模湾から上陸すれば安全だが距離が余りにも遠くなってしまう。逆に近付けば重光線級や光線級からのレーザー照射の餌食になってしまうが、ハイヴに近い分攻略はしやすくなると言った所だ。また、海には我がメビウス以外

に帝国連合艦隊や国連太平洋艦隊も居るため、東京湾の内部は無論浦賀水道も混雑するだろう。
皆が頭を悩ませている。　正直俺も悩んでいる。

（ドムシリーズの部隊は相模湾から上陸すれば良いが、水陸両用ＭＳは旧横浜港から上陸させると楽なんだよな。でも、東京湾の内部は帝国、国連の両方の艦隊で混雑するし、湾内は水深が浅いから迂闊に潜水艦を回せないからな。そう考えると水陸両用ＭＳ部隊は、潜水艦から発進して浦賀水道を通って東京湾の内部に進行して、旧横浜港から上陸すれば問題が無くなるな。強化パーツのＩフィールド（レーザーなんか効かないよ）を付けてやれば、重光線級や光線級からのレーザー照射の餌食にならなくて済むな）

自分の頭の中で攻略方法を考える。どうするか決まった。顔を上げるとデラーズ閣下と目が合った。

「悠斗よ。貴殿は何か浮かんだのか？」

「はい。具体的な案が浮かびました」

「なら言ってみてくれ」

出席者全員の視線が俺に集まる。

「はい。まず潜水艦艦隊は浦賀水道手前の太平洋で待機させて、そこから水陸両用ＭＳを発進させて旧横浜港から上陸させます」

「フム。確かにそうすればわざわざ東京湾の内部に潜水艦が入る必要は無くなるな」

「はい。そうして水上艦艦隊が東京湾に入り、帝国連合艦隊、国連太平洋艦隊と共に砲撃による攻撃を行えます。水陸両用ＭＳ部隊は海神（わだつみ）やイントルーダーと共に海から上陸して、海岸上陸拠点の確保に当たれば良いかと。また、確保に成功した上陸拠点からドムシリーズを投入してハイヴを目指せば良いと思います」

「なるほど。わざわざ狭い東京湾の中に潜水艦艦隊を進行させないでＭＳだけを戦力として投入するのか」

「はい。そうです。
また、本土には別動隊を配置して帝国本土防衛軍と共に北部からハイヴを目指し進行します。
そうすれば多方面作戦を展開出来ます。南部から国連太平洋方面軍、大東亜連合軍、メビウス。北部から帝国本土防衛軍、メビウス。側面部から帝国海軍、国連太平洋方面軍、メビウス海軍の部隊と言った具合になります」

「成る程な。それならば問題あるまい。皆異論はないか？」

デラーズ閣下が出席者立ちに意見を求める。

「確かに不動准将の意見が一番ベストな案だと思います」

「左様。ノリス大佐の言う通りだ。確かにそうすれば確実にハイヴを攻略出来るだろう」

「しかし、ノイエン・ビッター少将、気を付ける点も有りますぞ。アメリカがやたらと使いたがっているＧ弾に注意を払う必要が有り

ますぞ」

「コンスコン准将の言う通りですね。G弾には最新の注意を払う必要が有りますからね。そうなると国連軍の動きも注意しなければなりませんね」

各出席者立ちから意見が出る。誰も反論は無く、俺の提案で問題無いようだ。

「皆異存は無いようなので悠斗の案を我々メビウスの作戦方針とする」

満場一致で俺の提案は通った。その後どの師団を配置する等の話し合いが行われるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

私が執務室で仕事をしていると部屋に電話の着信音が鳴り響いた。

私は、書類を机に置き受話器を取る。

「もしもし私だが？」

「お疲れ様ですハマーン事務総長。国連外郭部隊メビウス所属不動悠斗准将です」

電話の相手は悠斗だった。時計をチラリと見ると3時前だった。丁度休憩しようか考えていたところだった。しばらく話しても問題は無い。

「10日ぶりだな悠斗。行きなりこんな時間に電話なんて、珍しいじゃないか」

「申し訳ありません。何分会議が終わったばかりでしたので」

どうやら会議終了後に直ぐに電話をくれたらしい。なかなか、忙しい様だ。

「で、何の用件なんだ?私の声が聞きたくなって電話した訳ではあるまい」

まあ、聞きたくなって電話してくるぐらいなら、実際に会いに来てもらった方が嬉しいがな。

「ハハ。残念ながら仕事の用件ですね。明星作戦の件で電話をさせて頂きました」

「そうか。それで、どうするつもりなのだ?」

時期的にはかなりギリギリになっている。作戦の決行日まで、既に一月を切っている。

「はい。メビウスは横浜ハイヴ攻略作戦に参加すると表明してくだ

さい」

「分かった。すぐに手配する」

「よろしくお願いいたします。では、作戦の準備に入りますので失礼します」

そう言って電話が切れる。私は受話器を置き、秘書を呼び出す。

「誰が居ないか！」

「は、はい！どうなされましたか？」

キッチンでコーヒーを出す準備をしていた女性秘書が出てきた。

「緊急発表だ！明星作戦に参加する国々の大使を至急召集してくれ！メビウスが参加する事を表明したと伝える！」

「は、はい！！分かりました！失礼します！」

秘書が執務室から慌てて出ていった。私は席に座り直し外を見る。

（さて、メビウスが動いたぞ。各国の反応が手に取る様に分かるな）

秘書が各国大使を呼び出している。呼び出された各国の大使は理由が分からないだろうな。まあ、直ぐに驚きの表情に変わるだろうな。

そんな事を考えながら、各国大使が来るのを待つのだった。

ハマーンsideout

第四十五話（後書き）

感想の中で厳しいご意見を頂きました。
私の作品で不快な思いをさせて申し訳ありませんでした。活動報告にも書きましたが此方にも謝罪分を書いておきます。
本当に申し訳ありませんでした。
感想などあればどうぞ。

第四十六話（前書き）

久しぶりに朝方投稿。
では、本文をどうぞ。

第四十六話

アメリカｓｉｄｅ

１９９９年7月１６日
ホワイトハウス

先日国連事務総長ハマーン・カーン氏から、メビウスがオペレーション・ルシファー（明星作戦）に正式参加する事が国連大使を通じて発表された。　ホワイトハウスの一室に　大統領以下軍の将軍とが集まり、対策会議を開いていた。

「さて諸君、緊急事態が発生してしまった」

会議室の一番奥の席に座る大統領が、両肘をテーブルに置き顔の前で両手を合わせて口元を覆い隠して話す。

「大統領、一体何が起きたのですか？」

宇宙軍の制服を着た将軍が、心配そうに声をかける。他の出席者達も心配そうな表情だ。

「メビウスが、不動准将がオペレーション・ルシファー（明星作戦）に参加すると表明した」

「な！なんですと！？作戦の決行日まで、一月を切っているのに！？」

会議室に激震が走る。

オペレーション・ルシファー（明星作戦）の決行日まで、既に一月を切っている。普通なら戦力を確保する事が出来ない。仮に確保に成功したとしても、各国との調整が間に合うとは思えない。常識的に考えた場合なら、不可能としか言い様がなかった。

「しかし、メビウスが今更参加を表明したとしても、既に手遅れですぞ。作戦の決行日まで時間は有りませんから、そう深刻に捉える必要はありませんよ」

空軍の制服を着た将軍が言い放つ。彼が言っている事は正しかった。普通ならばまず不可能なのだから。

会議室に安堵の雰囲気が漂い始める。

「そうですな。今更参加する等と表明した所で、何等我々の障害になり得るとは思いませんね」

海軍の制服を着た将軍が、コーヒーを飲みながらのんびりと言い放つ。

部隊を派遣する海軍の将軍からしてみれば、緊急会議と言われて来てみれ大したことの無い用件で、大事な休日を潰されただけの事だった。

「本当にそう思うかね？」

大統領は意味深げに言い放つ。両腕を組んで座っている陸軍の将軍が、ピクリと眉を動かす。

「大統領。何が仰りたいのですか？」

「なに、油断していると足元を掬われるかも知れんと言っているのだ」

大統領の発言に会議室の空気が硬くなる。しかし、陸軍の将軍が笑い飛ばした。

「ハハハハ！有り得ませんぞ大統領！我等が偉大なるアメリカが、たかだかイエローモンキーの若造ごときに足元を掬われる事など、まず有り得ませんな！！たかだかＭＳごときなどとは、比べ物にはならない秘密兵器が我々には有るのですからな！！」

「そうですな。確かにメビウスが使用しているＭＳは強力な兵器ですが、我々には切り札が有りますからな」

「将軍が仰る通りです。我々にはＧ弾と言うジョーカーが有るのですから」

陸軍の将軍の発言に、海軍の将軍と宇宙軍の将軍がそれを後押しする。

会議室空気は既に、Ｇ弾一色に染まっていた。

「それもそうだな。皆の言う通りだったな。私が少し弱気になっていたのかも知れんな」

大統領は椅子に深く座り直し、机に出されていたコーヒーを飲み始める。彼の顔には先程の悲壮感は既に無く、寧ろ各軍の将軍達の発言を信じきって安心している表情だ。

「まあ、大統領もお忙しいですからな。まあ、メビウスなんぞ気にする必要なんて有りませんな。
今回日本に派遣する陸軍、海軍の兵士達は皆、優秀な者を選抜しておりますから御安心ください。大統領はただ、勝利したとの報告書をお待ちするだけで決行ですので。大船に乗った気持ちでお待ちくださ い」

「では、大船に乗って待つさ。でも、その船がタイタニック号と言うのは勘弁してくれよ?」

「ハッハハハ!そんな事は有りませんよ」

大統領の返しに会議室は、笑いに包まれた。
いや、一人だけ内心苦笑いをしている者がいた。

(やれやれ。果たしてそう上手く行くかね?私としては母なる地球を汚す事になるG弾は、余り使って欲しく無いのだがな)

唯一内心で苦笑いをしている副大統領を、誰も気付く事はなかった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

榊首相ｓｉｄｅ

私は今、帝都城に来ている。此度、私が帝都城に来たのは煌武院悠陽殿下に謁見するためだ。
帝都城の長い廊下を、斯衛の白い制服を着た案内の者と共にしばらく歩いていると、前方に大きな扉が見えてきた。
その扉を斯衛の者達が開く。

「榊首相。どうぞお入りください」

「分かった。案内ありがとう」

礼を言い、私は扉を潜り前に進む。前方に煌武院悠陽殿下が椅子に座って待っておられた。
私は近くまで歩みを進め、臣下の礼をする。

「殿下、此度の謁見誠に恭悦至極に存じます」

「面を上げよ榊。此度の急な謁見は、何か有っての事なのでしょう」

煌武院悠陽殿下のお言葉に従い、顔を上げると椅子に座って居られる殿下。隣に立つ従事長。段下の右側に紅蓮醍三郎大将。左側に月詠真耶大尉が　警護に当たっていた。

「して、榊首相。一体何が有って殿下に謁見を要請したのじゃ？」

「紅蓮大将。実は昨日夜に国連大使から緊急の通信が有ったのです」

「榊首相。その内容とはどんな事なのですか？」

全員の視線が私に集まる。国会で討論する時以上に神経が磨り減っていく。意を決して私は口を開いた。

「国連外郭部隊メビウス所属不動悠斗准将が、明星作戦に参加する事が発表されました」

「「「「な！なんだと（です）って！！」」」」

全員が驚きの表情に変わる。皆口を開いていた。

「榊首相。それは本当なのですか？」

いち早く回復した殿下から、真偽の有無の確認を確かめられる。

「はい。本当であります。ハマーン・カーン国連事務総長から、直接我が日本大使に申されたそうです」

「そうですか。榊首相、その事をわざわざ申しに来られた事は誠に感謝します」

煌武院悠陽殿下から労いのお言葉を頂戴した。私は深々と頭を下げる。

「その様なお言葉を頂戴するなど、恭悦至極に存じます。また、現在メビウスの受け入れなどの調整を行っております。近日中には受け入れ場所が決定すると思われます」

「分かりました。大変でしょうが帝国の未来の為に、頑張ってくだ

さいませ」
「は！御意に。それでは、再び総理官邸に戻りメビウスの受け入れなどの会議を開きたいと思いますので、失礼します」
私は立ち上がり謁見の間を出て、再び長い廊下を歩き正面玄関に出る。正面に着けた秘書官が運転する車に乗り、総理官邸に戻りメビウスの受け入れなどの会議を開くのだった。

榊首相ｓｉｄｅｏｕｔ

香月ｓｉｄｅ

私は今、仙台の臨時研究室である男と話をしていた。
「と、言うわけです」
「そう。それで各国の反応わ？」
このくそ暑い夏でもトレンチコートを脱ぐことをしない男。帝国情報省外部二課鎧衣左近とだ。
「国益に目敏い国では、余り重要な感じではありませんな。大東亜連合等では参加する事を喜んでいますな」

「そう。悪いわね。そう言えば、別件の方はどうなの？」

メビウスが参加する事を表明した事は、私にとって有利になる情報だった。そしてもう１つ鎧依課長な頼んでいた案件を尋ねる。

「そう言えば、ガラパゴス諸島に生息するダーウィンフィンチは、種の進化を研究する上で非常に役立つとの事で」

「はいはい。ダーウィンの進化論云々を討論するつもりなら、お帰りいただけるかしら？

おどけた様に驚く鎧依課長。正直かなりムカつくわね。

「おお～！怖いですな～。私は、博士の為に粉骨砕身の思いで職務に励んでいるのに」

「あっそ。で？どうなの？」

鎧依課長の言葉をあっさり切り捨てて、話を進める事にした。

「ＯＳの件ですが、正直廻す事は出来そうにありません。帝国軍の中でもなかなか配備が進んでいませんから。現在帝国軍で優先的に配備されているのは、斯衛軍と本土防衛軍のエースパイロットクラスぐらいですな。流石にそちらに廻すほど余裕がありません」

ＭＳＸＯＳに関してはやはり手に入りそうに無い。帝国ですら未だに足りていないのだ。いくら第四計画権限で手に入れようとしても

数が足りていない為、此方に廻って来ないのだ。

「そう。分かったわ。ご苦労さんね」

「博士にその様に言って頂けるとは、ありかだいですな」

ニコニコ笑う鎧依課長を無視して、机に置いてある電話の受話器を取って電話をかける。

「ピアティフ。鎧依課長がお帰りになるから、玄関まで送ってさしあげて」

「はい。分かりました」

ピアティフからの返事を聞いて、私は受話器を置いた。

「さて、では帰らせてもらうとしますか。家で息子の様な娘が待っていますからな」

「出口は反対よ」

「おお！これは失礼しました。では、失礼」

仮眠室のドアを開けようとして注意する。

わざとやっているんだが、それとも天然なのかいまいち分からない。

椅子に深く腰掛ける。

最近徹夜が続いている正か、疲れが抜けていない様だ。

（やっと私に流れが向いてきた！このチャンスを見逃すつもりはない！メビウスが参加する以上、ハイヴ攻略は確実な物になるわ！見

ていなさい必ず第五計画の連中に、一泡吹かせてやるんだから！）

そんなことを考えながら、再びパソコンに向かうのだった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

第四十六話（後書き）

原作のプロローグに漸くたどり着けそうだ。
てか、四十六話書いてやっとプロローグって。
感想などあればどうぞ。

第四十七話（前書き）

み、短いです。では、本文をどうぞ。

第四十七話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年８月１日
日本帝国千葉県メビウス臨時駐屯地ビック・トレーバターン号執務室

明星作戦の参加表明をしてから約３週間余りで、俺達わ戦力を整えて日本帝国に集結を完了していた。
戦力の内訳わこうだ。

第一師団

師団長　エギーユ・デラーズ中将

戦力

戦艦

オリジナル艦播磨級戦艦　１５隻

紀伊級改造戦艦　２０隻

巡洋艦

巡洋戦艦　３０隻

イージス艦　３０隻

ミサイル巡洋艦　３０隻

情報収集艦　１０隻

空母

タケミカズチ級空母　７０隻

と、なっている。ちなみに空母に搭載するＭＳはドムシリーズとＧＰ０２だ。第一師団は完全に水上艦隊が戦力になっている。第二師団

師団長　ノイエン・ビッター少将

陸上戦艦

ビックトレー　５０隻

戦車

６１式戦車　３００車両

マゼラ・アタック　３００車両

ガンタンク？　１０００機

ホバートラック　１０００車両

ＭＳ

ザク？Ｆ２型　１０００機

ザク・キャノン　５００機

ザクＲ－１型　１００機

グフ　５０機

グフ・カスタム　３０機

と、なっている。第二師団は国連軍や大東亜連合軍と共に相模湾から上陸して横浜ハイヴを目指す。

第三師団

師団長　ユーリー・ハスラー少将

陸上戦艦

ビック・トレー　１００隻

戦車

６１式戦車　５００車両

マゼラ・アタック　５００車両

ガンタンク？　２０００機

ホバートラック　２０００車両

ＭＳ

ザク?Ｆ２型　２０００機

ザク?改　１０００機

ザク・キャノン　３００機

グフ　１００機

グフ・カスタム　６０機

と、なっている。第三師団は多摩川から海沿いを帝国軍と共に進軍する。

第四師団

師団長　不動悠斗准将

陸上戦艦

ビック・トレー　２００隻

戦車

６１式戦車　６００車両

マゼラ・アタック　６００車両

ガンタンク？　３０００機
ホバートラック　３０００車両
ＭＳ
ザク？Ｆ２型　１０００機
ザク？Ｒ－１型　９００機
ザク・キャノン　５００機
グフ　２００機
グフ・カスタム　２００機
と、なっている。俺の師団は多摩川から内陸部を帝国軍と共に進軍する予定になっている。
第五師団
師団長　ドライゼ大佐
潜水艦
ユーコン級　１００隻
マットアングラー級　５０隻
ＭＳ

ゴック　１０００機
ハイ・ゴック　４０００機
ズゴック　１０００機
ズゴックＥ　２０００機

と、なっている。浦賀水道から水陸両用ＭＳ部隊を発進させて、旧横浜港から上陸させる予定だ。ＢＥＴＡの日本進行の時より戦力は少ないのには訳がある。
まず、正史に比べて帝国軍の戦力が整っているからである。次に、Ｇ弾が投下されると知っているので無意味に戦力を消耗したくないからだ。

（う～ん。まあ、フェイズ２ハイヴを攻略するには、過剰戦力なのは間違いないな）

月攻略作戦の時とは違い友軍がいるため、地上軍全軍を配備する必要は無いが、充分過ぎる程の戦力を動員している。

（まあ、ハイヴ内部に突入するつもりは無いからな。しかし、問題もあるな）

手に持っていた資料をめくって見る。今回派遣された国連軍の兵士達のリストだ。アメリカ軍に所属していた兵士が大半を占めている。
資料の中には上級将校の名前と顔写真がある。
それに目を通していると、ある将校の名前と顔写真を見つけ手が止まる。　備考欄を見ると第五計画派の上級将校だと分かる。

（まあ、第五計画派の好きにはさせんよ）

資料にはこう書かれている。アメリカ陸軍対外派遣軍バスク・オム中将と。写真の姿は、国連軍の制服を着てサングラスを着けたバスク・オムの姿だ。どうやら、作戦中はアリゾナ級戦艦ウィスコンシンに乗艦すると書かれている。また、備考欄には極度のG弾信者の為、作戦中は注意を払う必要があると書かれている。資料を机に置いて、背もたれに体重を預ける。

（やれやれ。未だに結束出来ないか。まあ、原作だと明星作戦の時に使われたG弾が原因で世界が二分されるんだよな）

実際、第四計画派と第五計画派の2つに別れた人類は最後の最後まで結束出来なかった。白銀武が来なければ桜花作戦は発動されず、人類は敗北していくしかなかった。
そんなことを考えていると机にコーヒー置かれた。

「何やら随分難しい顔をされていますが、大丈夫ですか？」

イルマ中尉がお盆ん両手で抱えて立っていた。

「ありがとうイルマ中尉。なに、この作戦が上手く行くか考えていただけさ」

イルマ中尉にニッコリと微笑み、コーヒー口元まで運ぶ。イルマ中尉の頬がほんのりと赤く染まった気がした。

（や、やっぱり悠斗さんの笑顔は素敵だわ）

イルマ中尉がそんなことを考えているとは知らずにコーヒーを飲む。

口の中に程よい苦味が広がっていく。

（既に、賽は投げられた。後は全力でやるしかないな）

そんなことを考えながら、コーヒーを飲み干すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

マリーダｓｉｄｅ

私は今、プルとプルツーとシミュレーターで訓練を行っている。乗っている機体はドムだが、背中のバックパックにサザビーの様にフィンネルが着いている。武装はヒートサーベルとＭＭＰ－７８マシンガンと胸部拡散メガ粒子砲だ。プルとプルツーも同じ仕様になっているが、所で違う部分もある。

「墜ちちゃえ！！」

プルの機体からファンネル２基が展開して、ファンネルのビームがストライクイーグルを貫く。貫かれたストライクイーグルが爆発する。

「邪魔なんだよ！！」

プルツーの機体から6基のファンネルが展開して、ホーネットを追い詰める。

「く、クソ！ど、どこから攻撃がきたんだ？！」

「た、隊長！う、うぁぁぁぁ」

ファンネルの攻撃により隊長機ホーネットの両手は無くなり、僚機は射ち落とされる。

「クソ！よくも仲間を！」

3機のストライクイーグルがホーネットの援護に来る。私はファンネルを全て展開して、残存敵機をロックオンする。

「墜ちてもらう！！」

ファンネル6基による一斉攻撃で、全ての敵機のコックピットを貫く。ホーネットとストライクイーグルが空中で爆発して海に落ちて行った。

「シミュレーター訓練を終了します。パイロットはシミュレーターから降りてください」

先程の敵機で最後の様だ。シミュレーターの映像が終わり、訓練終了のアナウンスが勧告される。　私はシミュレーターから外に出て、二人の所に向かう。

「お疲れマリーダ。さっきの訓練凄かったね」

「やるじゃないか。撃墜スコアは1位だよ」

プルとプルツーが私を誉めてくれる。

「ありがとうございます。でも、二人だって充分撃破してますよね」

先程の訓練の撃墜スコアを見ると、プルもプルツーも充分過ぎるほど撃破している。普通なら、勲章が貰える位だ。

「だって、敵が弱いんだもん！」

「やっぱり、戦術機じゃ相手にならないね」

「確かに手応えが無いですね」

確かに現在メビウス以外の部隊で主力の戦術機では、私達の相手にはならない。まず、性能が違い過ぎる。更にファンネルの存在すら知らない様では話にならない。

「でしょ！やっぱり、相手にならないよね～。早くこの機体を実戦で使いたいな～」

「まあ、格納庫にあるし整備中だからね。しかも、ファンネルの使用は悠斗が許可をくれなきゃ使えないからね」

「まあ、仕方ないですね。機密漏洩を防ぐ為ですから」

私達が乗る予定になっている、ドムサイコミュ試験型は3機が実験的にロールアウトされているだけだ。まあ、バックパックをファンネル搭載様の物に変更するだけで済むのだ。

「そんなことより、早くシャワーを浴びようよ！汗がベトベトして気持ち悪いし」

プルがシャワーを浴びたいと言ってきた。確かに汗をかいた為シャワーを浴びたいと思う。

「じゃあ、シャワールームに行こうか」

「そうですね。行きましょう」

3人でそのまま、シャワールームに向かいシャワーを浴びるのだった。

ただ、シャワールームに入った時に先に居た、キャラ・スーン大尉のバストを見たとき、自分のと比べてしまった私は悪くないはずだ。

少し、羨ましかった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

第四十七話（後書き）

ドムサイコミュ試験型はGジェネやってたら、　ギラドーガサイコミュ試験型て機体が有ったのでなんと無く、真似してみたオリジナルＭＳです。
感想などあればどうぞ。

第四十八話（前書き）

遂に原作のプロローグの作戦に突入です！
長かったです。
では、本文をどうぞ。

第四十八話

デラーズｓｉｄｅ

１９９９年８月５日
東京湾メビウス第一艦隊旗艦戦艦播磨ブリッジ

いよいよ明星作戦が開始される。ワシは播磨のブリッジで椅子に座り、作戦開始の時を待っていた。

「デラーズ閣下、煌武院悠陽殿下より全軍に向けて演説が行われます」

「分かった。映像を廻せ」

オペレーターから煌武院悠陽殿下から、映像が行われると伝えられた。
オペレーターに指示をだし、中央モニターに映像を映した。
煌武院悠陽殿下が、正装（クーデター終了後の演説した時の服装）の姿で映し出された。

「此れより戦場に赴く将兵の皆様方、どうか今しばらく私の声に耳を傾けてください。先のＢＥＴＡ日本進行にて、この美しい帝国の本土にＢＥＴＡの進行を許してしまいました。しかも、自国内に二つのハイヴの建設を許してしまいました。これにより我が帝国は、

国家の存亡の危機に立ってしまいました」

ワシはただ演説を聞き続けた。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

帝国本土防衛軍ｓｉｄｅ

悠陽殿下の演説が行われている時の帝国本土防衛軍のある中隊。

眼鏡をかけた短髪の男性衛士がモニターを食い入る様に見つめていた。

「しかし、我々は今日まで新たなる帝都にＢＥＴＡの進行を許す事なく耐えてまいりました」

（そうです。殿下の仰る通り、我々は耐えてきた！佐渡にハイヴを建設され更にアメリカの裏切りにより、横浜にもハイヴを建設されてしまう屈辱にも耐え、今日まで帝都を守り続けてきた！）

モニターを真剣に見つめていると、隣に眼鏡をかけた女性衛士が近寄ってきた。

「沙霧大尉」

「駒木中尉か。何か様かね？」

「そろそろ機体に搭乗してください。作戦開始時間になります」

「分かった。直ぐに行く」

眼鏡をかけた男性は、モニターから視線を外し自身が搭乗する不知火に向かって歩いて行った。
眼鏡をかけた女性もまた、先程の男性の後を追うように不知火に向かって歩いて行った。

帝国本土防衛軍ｓｉｄｅｏｕｔ

香月ｓｉｄｅ

煌武院悠陽殿下の演説を調布基地の中央指令部にて聞いていた。

「多くの者達がその命を賭けて守ってきた新たなる帝都に、ＢＥＴＡ牙は確実に迫っておりました。しかし、その牙に怯える日々は今日で終わりになるでしょう。
帝国本土防衛軍、国連太平洋方面軍、そしてメビウスの者たちが力

を集結してついに反撃の狼煙を上げる事となりました」

（ええ。やっと私の考えの通りになってきたのよ！だからこそ、この作戦は失敗なんでできないのよ！）

内心で色々と考えながら、殿下の演説を聞き続けるのであった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

「今こそ、私たち人類の底力をＢＥＴＡに示すのです！決して折れない私たち人類の力を！
将兵の皆様が、魔を払い帝国を護る剣となり勇敢に戦う事を信じて。
再び帝国に栄光を取り戻す事を信じております」

煌武院悠陽殿下の演説が終わった。すると、オープンチャンネルで何かが聞こえてきた。

「「「「「煌武院悠陽殿下、バンザイー！！日本帝国に栄光を！

！！」」」」」」」

どうやら、帝国軍の兵士達の雄叫びの様だ。先程の演説で帝国本土防衛軍の士気は大幅に高くなった様だ。

ワシは、オペレーターに指示を出す。いよいよ明星作戦開始のカウントダウンが始まる。

「時計合わせ入ります！明星作戦開始まで、後６０秒、５９、５８、５７、」

カウントダウンが進む。残り時間は半分を切った。ワシは、オペレーターにカウントダウンを続けさせ、オープンチャンネルを開かせた。

「全軍将兵に告げる。地球の命運はこの一戦に懸かっている。諸君らの健闘に期待する」

全軍将兵達に渇を入れる。ブリッジの空気が引き締まった。

「５、４、３、２、１、０！作戦スタートです！」

オペレーターのカウントダウンが終了した。

すぐさま指示を出す。

「主砲発射用意！射て！」

播磨の７６．１Ｃｍ三連装砲６基１８門から一斉に砲弾が発射された。

同時に、国連太平洋艦隊と帝国海軍連合艦隊からも砲弾が発射された。

砲弾が横浜ハイヴに飛んでいくと、砲弾が空中で爆発を起こした。
上空に向けて大量のレーザー照射が行われた。

「光線級、重光線級が出現しました！ＡＬ弾迎撃率１００％！重金属雲発生しました！重金属雲の濃度は戦闘濃度に達しました！」

オペレーターから、矢継ぎ早に状況報告が伝えられる。

「砲撃を怠るな！上陸部隊が陽動を開始している！軌道降下兵団が突入を開始するまでに、敵を減らすのだ！空母に入電せよ！ＭＳ部隊の発進準備を急がせよ！」

ワシはオペレーターに指示を出し続けるのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

小沢提督ｓｉｄｅ

砲撃音が辺りを包む。明星作戦が開始された。
私は大型巡洋艦最上から横浜ハイヴを見据えつつ作戦の指揮を取っている。

「重金属雲の濃度は、戦闘濃度に到達しました！」

「良し。海神隊を発進させよ！橋頭堡を確保せよ！」
オペレーターに指示を出す。多摩川から進軍を開始した部隊と、相模湾から上陸を開始した部隊がＢＥＴＡを南北に陽動を開始した。

（うむ。今現在は予定道理に作戦が進んでいるな）

オペレーターから伝えられる情報を精査しながら作戦の推移を見つめる。海上に８１式海神とＡ－６イントルーダーが浮上して攻撃を開始した。

「海神、イントルーダーが攻撃を開始ししました！メビウスより入電！此方も水陸両用ＭＳ部隊を発進させた、との事です！」

「了解した。海神、イントルーダーに入電せよ！ＩＦＦに注意を払うように指示を出せ！」

「了解しました！こちら、最上ＨＱより各機へ」

砲撃音が空を切り裂く中、私は指示を出し続けるのだった。

小沢提督ｓｉｄｅｏｕｔ

バスクｓｉｄｅ

イエローモンキーどもの下らない演説が終わり、作戦が開始された。戦艦ウィスコンシンから砲撃を行いつつ、オペレーターから伝えられる情報を聞いていた。

「イントルーダー及び海神が戦闘を開始しました。現在重金属雲の濃度は問題ありません」

「相模湾から上陸を開始した、ジャマイカンから連絡はまだか！？」

椅子の肘掛けを叩いて怒鳴る。ダン！と言う音がブリッジに響く。

「ジャマイカン大佐から入電来ました！我、上陸に成功せり。南部での陽動を開始しする、との事です！」

オペレーターから、ジャマイカンの部隊が上陸に成功して陽動を開始した事を伝えられる。

（フフフ。作戦は順調の様だな。まあ、仮に失敗しても我々には切り札があるからな。精々足掻くが良いさ、帝国のグズとメビウスの阿呆どもが）

内心で毒づきながら、作戦の推移を見守るのだった。

バスクｓｉｄｅｏｕｔ

シュタイナーｓｉｄｅ

俺は今、ズゴックＥ（エクスペリメント）に乗り部下と共に東京湾内を旧横浜港を目指して進軍している。ちなみに、俺とミーシャはズゴックＥ、ガルシアとアンディはハイ・ゴック、バーニィのみゴックだ。海上では、各艦隊や海神、イントルーダー等の戦術機等が橋頭堡確保に全力を上げて戦っている。俺達もまた、橋頭堡確保を支援するため海岸から上陸を敢行していた。海面が見えて着た。

「お前達、此れより戦場に出るぞ！バーニィ！ビビるなよ！」

「へっへへ。チビるんじゃねえぞ？」

「わ、分かってます！行けます！」

バーニィが少し、躊躇いながらも返事をしてきた。

「なら、戦場で見せてみなバーニィ！」

「そうだぜ。やって見せてくれよ！」

ガルシアとアンディが、バーニィをからかう様に励ます。

「お喋りは終わりだ！飛び出すぞ！」

「了解（だ、です）」

ブーストジャンプで全機海面から飛び出す。上空で両腕のメガ粒子砲を構える。前方からＢＥＴＡの大群が押し寄せて着た。

「殺らせてもらうぞ！」

両腕のメガ粒子砲をＢＥＴＡに向けて発射する。　突撃級を正面から数対貫通して要撃級を巻き込んで撃破する。

「へへ。死にやがれ！」

ミーシャのズゴックＥは、右腕のメガ粒子砲を放ちながら、ロケット弾を発射して突撃級や要撃級を撃破する。

「へ！くたばりな！」

「派手に爆発しな！」

ガルシアとアンディのハイ・ゴックの両手に装備された、ミサイルユニットからミサイルが発射される。ミサイルはＢＥＴＡ群を巻き込んで大爆発を起こした。

「い、いっけぇぇぇ！！」

バーニィのゴックから、腹部メガ粒子砲が発射される。後方に居た、要塞級の頭に直撃して頭と体を焼き付くした。要塞級はそのまま地面に倒れこみ下に居た兵士級や闘志級や戦車級を巻き込んで押し潰して倒れた。

俺達が上陸に成功すると、次々と水陸両用ＭＳ部隊が上陸を開始し

た。

「良し！このまま前進するぞ！各機遅れるな！」

「了解（だ、です）」

そのまま、他の部隊と共に前進を開始するのだった。

シュタイナーｓｉｄｅｏｕｔ

ビッターｓｉｄｅ

相模湾から上陸して、帝国軍、国連軍の部隊と共に前進を開始した。
既に上陸の際にＢＥＴＡ群と交戦に入り殲滅を確認した。

「ノイエン・ビッター少将！前方より、第２派の軍団規模のＢＥＴＡが来ます！先鋒部隊射程ない到達するまで、あと３０秒です！」

「ビッグトレー各艦は、砲撃用意！戦車隊も砲撃準備だ！」

ビッグトレーの三連装砲とドーラ砲（８０インチ砲）が発射準備に入る。
各ビッグトレーの周りに居た戦車隊が一列に並び砲撃の準備を完了

する。

「突撃級が射程ないに到達しました！」

「主砲一斉掃射だ！」

ビッグトレーの三連装砲とドーラ砲から砲弾が発射される。各戦車隊の砲撃も同時に発射された。上空に向けて、光線級のレーザー照射が行われたが重金属雲が発生しているため、レーザーが減退して砲弾が余り迎撃されず、前進してきた突撃級もろとも巻き込んで大爆発を起こして殲滅する。

「光線級の出現を確認しました！第２派中衛射程ないに到達しました！」

「砲撃を怠るな！ＭＳ部隊を発進させろ！横浜ハイヴから、ＢＥＴＡどもを引きずり出せ！」

オペレーターからの状況報告を受けながら指示をだす。現在は何も問題は発生していない。

（この戦い、長丁場になることは間違いない！となると国連軍の部隊は、補給にやや不安が残るな）

実際、ビッグトレーにはＭＳの弾薬は満載だが、戦術機の弾薬はＭＳに比べて半分程しか積んでいない。

（まあ、戦術機の部隊が何処まで生き残れるかだな。いや、生き残ってもらわなければならないな）

そんなことを考えながら、指揮を取るのだった。

ビッターｓｉｄｅｏｕｔ

国連軍衛士ｓｉｄｅ

相模湾から上陸した俺達は、横浜ハイヴからＢＥＴＡを陽動するため旧鎌倉市周辺で戦闘を行っていた。

「隊長、ＢＥＴＡの奴等がまた来ますよ！」

「分かってる！全機データリンク！残弾数の少ない機体から補給に入れ！」

「了解」×１１

既に上陸開始から1時間程が経過した。軌道降下兵団の奴等が突入を開始するまでまだ時間がかなりあるが、此方が全滅してしまいそうな位のＢＥＴＡの大群と交戦している。

「隊長。前方の部隊の連中凄い活躍ですよ」

「そうだな。流石メビウスと言った所か」

我々の部隊の左前方でザ?の部隊の連中が、ＢＥＴＡを撃破している。
あの、ザク?て機体は凄いぜ。マシンガンを射てば突撃級の硬い装甲を正面からぶち抜くし、ヒートホークとか言う短いオノで切れば、硬い装甲をバターを切るように滑らかに切りやがる。
戦術機の短刀じゃ相手にならないだろうな。
そんなことを考えていると、通信が入る。

「隊長、補給に入ってください。後は隊長だけですよ」

いつの間にか部下の補給が終わっていた。部下のストライクイーグルが補給コンテナを持ってきてくれていた。

「分かった。補給に入る」

補給コンテナを開けて弾薬を補給する。前方の部隊がＢＥＴＡを撃破しているお陰で安心して補給が出来る。１分もかからない内に補給を完了した。

「良し!全機このまま、前方の部隊の援護に向かうぞ!」

「了解」×１１

部下の返事を聞いて、前進してザク?の部隊の援護に入る。すると、青い色のザク?から通信が入ってきた。

「此方はメビウス第２師団所属、ロバート・ギリアム大尉だ。援軍感謝する」

「は！此方は国連太平洋方面軍所属、ジョン・リーフ大尉であります！これより、援護に入ります！」

「了解した」

通信が切れる。すると、ギリアム大尉が乗る青いザク？が上空にジャンプした。

「戦闘力・・・たった5か。ゴミめ！悪いが貴様らでは相手にならん！消えな」

いきなりＢＥＴＡに罵声を浴びせるギリアム大尉。彼の乗るザクがバズーカを発射する。此方に向かってきた要撃級や小型種を巻き込んで爆発する。今の一撃で、３００体位のＢＥＴＡを撃破した。

「く！お前達！ギリアム大尉だけに、いい格好させるな！ＢＥＴＡを射ちまくれ！」

「了解！」×１１

俺は、前に出てＡＭＷＳ－２１を構える。先程の爆発に巻き込まれなかった要撃級が此方に向かって来た！

「墜ちやがれ！」

トリガーを引いて、要撃級に３６？弾をプレゼントする。
要撃級から赤い液体が飛散する。要撃級はそのまま体から赤い液体を撒き散らして絶命した。

「ＦＯＸ３！」

「ＦＯＸ２！」

部下が３６？突撃砲を放ち要撃級を撃破する。

僚機のストライクイーグルも、１２０滑空砲で要撃級を仕留めた。

「ほう！お前達、ストライクイーグルに負けていられんぞ！ＢＥＴＡどもを撃破せよ」

「了解（です）」

ギリアム大尉の部隊と共にＢＥＴＡを撃破していくのだった。

国連軍衛士ｓｉｄｅｏｕｔ

第四十八話（後書き）

今回の戦闘から擬音を無くしてみました。
感想に書かれたので止めてみました。
感想などあればどうぞ。

第四十九話（前書き）

早めに出来ました。まだまだ明星作戦が続きます。では、本文をどうぞ。

第四十九話

ユーリー・ハスラーｓｉｄｅ

Ｈ２２横浜ハイヴより４０キロ地点ビッグトレーブリッジ

明星作戦開始しから既に三時間が経過した。
作戦開始と共に予定通り多摩川を越えて海沿いに進軍を開始した。
先程第５派めになるＢＥＴＡ群を全滅させたばかりだ。

「横浜ハイヴより進軍して来たＢＥＴＡ群を確認！第６派です！」

女性オペレーターから情報を伝えられる。ＢＥＴＡは我々を休ませてくれるつもりは無いようだ。

「規模はどのくらいだ！？」

「待ってください。解析完了しました。旅団規模です！」

先程は師団規模だったが今度は旅団規模だ。少なくなったとは言え、未だにＢＥＴＡの数の暴力には限りが無いように思える。

「ＭＳ部隊、戦術機部隊、双方を安全圏にを下げさせろ。退避完了後、主砲一斉発射だ！」

「了解しました！此方にＨＱより各機へ。砲撃支援を行う。各機は安全圏に退避せよ。繰り返す」

女性オペレーターが、ＭＳ、戦術機双方に退避勧告を行う。旅団規模のＢＥＴＡが此方に向かって進軍してきていた。

「主砲発射用意！ガンタンク？、戦車隊はタイミングを合わせよ！」

部下に指示をだす。ＢＥＴＡが更に近付いて来る。

「戦術機、ＭＳ双方安全圏に退避完了しました！」

「良し！今だ！一斉発射！」

ビッグトレーの三連装砲とドーラ砲（８０インチ砲）から砲弾が発射される。また戦車隊からも戦車砲が発射される。

ガンタンク？からは１２０？キャノン砲が発射された。

上空に向けて光線級のレーザー照射が行われるが重金属雲が発生している為余り撃ち落とされずに地面に着弾して大爆発を起こす。

「前方から向かって来た旅団規模ＢＥＴＡ群の殲滅を確認しました！」

オペレーターがＢＥＴＡの殲滅を報告する。だが私は気を抜かずに指示を出す。

「各員！監視を怠るな！今の砲撃で震度計が逝かれてＢＥＴＡが地下から進行してきても、戦術機の部隊は分からないぞ！」

「待ってください！ホバートラックより緊急入電！ＢＥＴＡ地下進行を確認したとの事です！出現予定場所は本艦より一キロ手前です！」

近隣に展開しているホバートラックから情報が伝えられた。ＢＥＴＡは今度は地下から進行して来た。

「全速後進せよ！ガンタンク？隊、戦車隊にも後退指示を出せ！ＭＳ、戦術機隊双方は前に出せ！ＢＥＴＡを近付けるな」

「了解！ＨＱより各機へ」

素早く指示を出し後退を開始するのだった。

ユーリー・ハスラーｓｉｄｅｏｕｔ

沙霧ｓｉｄｅ

「はぁぁぁぁ！！」

不知火を操り７４式長刀で、要撃級を切り裂く。切り裂かれた要撃級から体液が吹き出し倒れる。　既に明星作戦開始から、体感時間で戦闘時間は３時間以上経っているはずた。しかし、未だにＢＥＴＡが減る気配が無い。　正面から迫ってくる要撃級に斬りかかる。

すると右方向から要撃級の前腕が迫ってきていた。

（しまった！直撃する！？いや、避けられる！）

咄嗟に回避行動を入力する。斬りかかるモーションがキャンセルされ回避行動に移った。右方向から来た要撃級の前腕は空を切る。

私は直ぐに機体を立て直し、左手に持った８７式突撃砲を射つ。

２体の要撃級の体に穴が開き、赤い血飛沫の花が咲いた。

（やはりこのＭＳＸＯＳは素晴らしい！動作の途中で任意のタイミングで動作がキャンセル出来て次の動作に移れるとは。これが全軍に配備されれば、帝国はＢＥＴＡに負けはしない！）

そんなことを考えていると通信が入る。

モニターに眼鏡をかけた女性が映しだされた。

副官の駒木中尉だ。

「沙霧大尉ご無事ですか？」

「此方は大丈夫だ。そちらは？」

「沙霧大尉が前に出過ぎている以外は問題ありません」

内心でうっ！としてしまう。確かに私は部隊の者達より前に出て戦闘をしていたからだ。

「いくら新ＯＳを搭載しているとは言え、余り迂闊に前に出ないでください」

「すまなかった。しかし、メビウスのＭＳ部隊だけに頑張ってもら

う訳にはいかんだろう」

私は前方を見る。そこには地面をホバー移動するＭＳが3機で戦っていた。

「マッシュ、オルテガ。たかだか旅団規模のＢＥＴＡだ。遅れをとるなよ！」

「おう！任せな！」

「任せといてくれ！」

3機のホバー移動するＭＳが別れる。聞こえてくる通信から、昨年厚木基地で模擬戦を行った時のガイア大尉達の3人だと分かった。

ガイア大尉の乗るＭＳがバズーカを構えた。

「そら。墜ちな！」

バズーカから発射された弾が要撃級に命中して爆発を起こす。命中した要撃級を含めて２００位のＢＥＴＡがレーダーから消えた。僚機の2機もガイア大尉に負けじと、ＢＥＴＡを撃破して行く。

「そうですね。彼等だけに頑張ってもらう訳にはいきませんね。なら、大尉！指示をお願いします」

そう言って駒木中尉が、指示を求める。私は指示を出す。

「各員エレメントを崩さずにＢＥＴＡを撃破せよ！ＭＳ部隊を援護

する」

「了解！」×１１

「駒木中尉」

「はい。何でしょうか？」

「背中は任せる」

「分かりました」

跳躍ユニットを起動してそのまま中隊でガイア大尉達を援護しに向かうのだった。

沙霧ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

明星作戦開始から既に五時間が経過した。既に日は傾き始めている。あと１時間もすれば戦場が闇に包まれるだろう。多摩川を渡り横浜ハイヴを目指して進軍しているが、３０Ｋｍ手前で進軍を停止して

いる。
軌道降下兵団がハイヴ内部に突入するまで後、３０分も無いが未だに門（ゲート）を確保出来ていない。これには訳がある。突入に使用する門（ゲート）がハイヴに近いため、確保が困難なのだ。
また、第１師団のＭＳ部隊は水陸両用ＭＳ部隊が撤退したため、現在は橋頭堡地点の防衛に終われている。戦術機部隊は突入口を確保するべく前進を試みているが、ＢＥＴＡの大群が押し寄せて来るため前進が困難な状況だ。
まあ、此方も横浜ハイヴから無尽蔵に出てくるＢＥＴＡ群を相手にしているため、進軍停止を余儀なくされているのだ。

「前方より師団規模のＢＥＴＡ群を確認しました！第１１派です！」

イルマ中尉が状況を報告してくれる。先程から思うのだがＢＥＴＡが減っている気がしないな。

「主砲発射！ＢＥＴＡ群を近付けるな！ＭＳ部隊を前面に出せ！ビッグトレーにＢＥＴＡを近付けるな！（くそ！流石に厳しいな。俺も出撃するか？）」

ビッグトレーから砲撃を続けているが、ＢＥＴＡの数が減っている気がしない。共に進軍してきた帝国軍の戦車隊は砲身過熱で砲身が融解し始めたので、調布基地まで後退して整備にあたっている最中だ。
戦術機部隊も損耗が激しくなってきている。
既に帝国軍、大東亜軍の損耗率は全体の２割に迫っていた。
国連軍も全体の１割弱の部隊が壊滅していた。

「しょうがない。予定より少々早いがやるしかないな。イルマ中尉

！デラーズ中将に通信を繋いでくれ」

「は！分かりました！」

イルマ中尉に指示を出してデラーズ中将に通信を繋ぐ。中央モニターにデラーズ中将が映しだされた。

「どうした悠斗よ。何か不測の事態が発生したか？」

「いえ。問題はあるのですが今はそれよりも、軌道降下兵団の為の門（ゲート）確保をどうするかですね」

まあ、問題と言ってもＢＥＴＡの数が余り減っていないことなんだがな。　デラーズ中将は顎に手を当てて考え込んでいる。

「その件か。
先程ＭＳ部隊を門（ゲート）確保に向かわせたから大丈夫だ。直ぐに吉報が来るだろう」

「そうでしたか。いえ、間に合わなければバルフィッシュに出撃してもらおうかと思っていましたので。杞憂で何よりです」

もし、門（ゲート）の確保が間に合わなければ出撃してもらいＢＥＴＡを殲滅してもらうつもりだったが杞憂で済んで何よりだ。

「ＭＳ、戦術機部隊が門（ゲート）の確保に成功しました！」

イルマ中尉から報告をうける。流れが此方に向いてきたようだ。

「どうやら間に合ったようだな。悠斗よ。そちらも無理はするなよ」

「分かっております。では、デラーズ閣下も御武運を！」

モニターから映像が消える。俺は椅子に腰掛け直し指揮を取るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

机の上の電話機がトゥルルルトゥルルと鳴る。私は受話器を取る。ある男からの電話だった。

「私だ」

「お疲れ様です大統領。今、大丈夫ですか？」

「ああ。腹心達しか居ないから大丈夫だ。それで？何か問題が発生したのか？」

「いえ。問題は発生しておりません」

なら、何でわざわざ電話を寄越したのだろうか？　彼は今、戦闘中で忙しいだろうに。そんなことを考えながら話を進める。

「ならどうしたのだ？今は作戦中だろう？」

時計をチラリと見る。時間的には、オペレーションルシファー（明星作戦）が開始されてからかなり経っている。そろそろ軌道降下兵団が降下する予定の時間だ。

「はい。先程軌道降下兵団が降下しました。現在は軌道降下兵団が地下茎構造（スタブ）を進行して主縦穴（メインシャフト）及び反応炉到達を目指して進軍をしている最中です」

「なら、何故連絡を寄越した？」

「大統領。今、そちらにある映像を送りますので見てください」

パソコンを見ると、あるメールが送られて来た。それをクリックしてファイルを開く。すると、そこにはＭＳが戦闘している映像が映しだされた。

「こ、これは！」

「大統領。いかがですか？この映像は？」

そう、見たことのないメビウスの新型ＭＳがＢＥＴＡを蹴散らしていた。１機はホバー移動しながらＢＥＴＡを撃破しているしかも、レーザー兵器を使用している。他の２機はミサイル等を射ちながら、此方もレーザー兵器を使用している！我がアメリカ、いや、世界中

の国々すら兵器化出来ていない物を使用していた。これは、我がアメリカにとって由々しき問題である！

「あり得ん！我がアメリカが、メビウスの様な連中に遅れを取るなど許される事ではない！なんとかサンプルを確保出来るか？」

「青い丸い機体は既に撤退しているため無理ですが、スカートの付いたホバー移動の機体なら恐らく可能かと」

「ならば構わない。如何なる犠牲が出ようとも必ず捕獲せよ」

この機体を捕獲して解析すれば、メビウスの技術を我々も手に入れる事が出来る。そうすれば、我がアメリカがメビウスに遅れを取る事など無くなるのだからな。

「海兵隊を1個大隊程使用します。よろしいですか？」

「言った筈だ。如何なる犠牲を払ってでも捕獲せよとな。使える物は全て使って構わん」

「分かりました。必ずや成功させて見せます」

「頼んだぞ」

そう言って受話器を置いた。腹心の者達が集まって来る。

「宜しいのですか？海兵隊の人材はかなり優秀な者ばかりです。犠牲が出れば大変な事になりますが？」

「構わん。此度のオペレーションルシファー（明星作戦）は、G弾

の威力の証明と我が軍の強さを示す戦いだ。海兵隊の1個大隊位で捕獲出来るだろう」

「そうだと良いのですが」

「いくらメビウスのＭＳが良い性能でも、数には勝てんよ」

「そうですな。数には勝てませんな。後はG弾の運用テストは如何しますか？」

「それは軌道降下兵団が攻略に失敗した時に使用する。なに、日本帝国ごとき国が少し汚れるがＢＥＴＡのハイヴを攻略出来るならば安い者だろう」

「そうですな。後は、事の推移を見守るだけですな」

（まあ、精々足掻くが良いさ。勝つのは我々アメリカなのだからな！）

内心でそんなことを考えながら吉報を待つのだった。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

第四十九話（後書き）

何故かスランプなのにさくさく浮かぶな～。
感想などあればどうぞ。

第五十話（前書き）

五十話に到達しました。未だに原作の片鱗すら見えて来ないですけど。
今回は哀戦士をＢＧＭにどうぞ。

第五十話

ガイアｓｉｄｅ

俺は今、横浜ハイヴより２０Ｋｍの海岸線沿いでマッシュ、オルテガと共に戦闘を行っている。俺達は3人共ドムに乗っている。

「ホラよ！墜ちろ！」

ジャイアント・バスを発射する。前方から接近してきた要撃級に命中して爆発を起こす。今の爆発で要撃級を含むＢＥＴＡが１００体位は死んだな。

「へっへへ！コイツを貰うぜ！」

「邪魔するんじゃねえよ！」

マッシュ機が突撃級をヒートサーベルで切り裂く。切り裂かれた突撃級から、赤黒い体液が飛び散る。オルテガ機は胸部メガ粒子砲で大型種、小型種もろとも吹き飛ばす。　５０体位のＢＥＴＡがメガ粒子砲が命中して体のあちこちに穴が開き、体液を撒き散らしながら絶命した。
今の戦闘で此処にいた大隊規模（３００～１０００体）のＢＥＴＡ群を撃破した。

「マッシュ、オルテガ！機体に損傷はないな？」

「おう！大丈夫だ」

「へへ。あんなノロマの攻撃なんざ、当たらないぜ」

マッシュ機、オルテガ機に損傷は無く戦闘続行に問題は無いようだ。
俺はＨＱに指示を仰ぐ。

「此方、メビウス所属ガイア大尉だ。ＨＱ、次は何処に向かえばいい？」

「此方、ＨＱ。ＢＥＴＡの殲滅を確認した。ガイア大尉達はそのまま、・・・・・に・・・・・え」

いきなり通信にノイズが混じり始めた。

「おい！ＨＱ、どうした？」

「・・・・ざ・・・・・き・・・・・・ない・・・・・！・・・・・・ジャ・ミ・・・・・・ング・・！」

プツリとＨＱとの通信が切れた。マッシュとオルテガにも通信をさせてみる。

「駄目だ！反応が無いぜ」

「クソ！重金属雲のせいか？」

確かに重金属雲が通信を阻害するが、今の濃度はそこまで高くない。

「いや、重金属雲のせいじゃ無いだろう。恐らく、人工的なやり方

だ」

「となると、誰かがジャミングフィールドを発生させているってことか？」

「なんで、そんなことする必要があるんだ？」

３人で話しているその時だった。いきなり機体からロックオンの警報が鳴り響いたのわ。

「マッシュ、オルテガ！ロックオンされているぞ！各機散開！緊急回避だ！」

「おう！」

「クソ！なんだ？」

先程居た場所から散開して距離を取る。すると其処が爆発を起こした。

レーダーを見ると周りを既に囲まれていた。

ＩＦＦ（敵味方識別装置）を確認すると、アメリカ海兵隊のＦ－１８Ｆ／Ｅスーパーホーネットが３０機いや、３２機映っていた。４機だけアンノーンがあった。

（３２機のスーパーホーネットだと？！分からんが、今の攻撃から察するに明確な殺意が有るようだ。ならば、敵機と見て良いようだな。ならば、アンノーンの４機が恐らくＥＣＭ（電子妨害手段）を搭載した機体と見て間違い無いな）

通信回線をオープンチャンネルにして開く。一応通信して相手方の

反応を確認してみる。

「其処の所属不明機、此方はメビウス所属のガイア大尉だ。そちらの所属と名前と階級を名乗れ。繰り返す」

所属不明機にオープンチャンネルで呼び掛けてみるも反応は無かった。

スーパーホーネットは、手に持っていたＡＭＷＳ－２１を此方に向けてきた。どうやら、本気で殺りあうつもりらしい。

ＩＦＦを切り替えて、所属不明機を敵と認識する。オープンチャンネルから切り替えて、マッシュとオルテガに通信を入れる。

「マッシュ、オルテガ！所属不明機を敵と認識する！殲滅するぞ！」

「了解だ！」

「おう！久しぶりの対人戦だ！」

二人に通信を入れると、所属不明機の部隊が此方に向かって攻撃を仕掛けてきた。俺はドムの高速移動を行い突撃砲の弾幕を回避しながら、敵機との距離を詰めていく。

「ホラよ！堕ちろ！」

ジャイアント・バスを発射する。所属不明機の中隊が攻撃を回避するため散開した。ジャイアント・バスの砲弾は先程敵機が居た中心地点で爆発を起こした。

爆風の正で土煙が発生するが、構わずに敵小隊に接近する。

散開して一番近くに居た４機に攻撃を仕掛ける。　着地したばかりで、次の動作に移る前の段階の硬直を狙い、再びジャイアント・バスを発射した。

「な！」

「ぎぁや！」

「そ、そんな？」

「アメリアーーー！」

４機のスーパーホーネットを仕留める。やはり、旧ＯＳでわ余りにも相手にならなかった。

「へっ！死にな！」

「くたばれよ！」

マッシュとオルテガからの通信が聞こえる。二人とも所属不明機を撃破しているようだ。

「なら、負けてられんな！殺るぞ！」

左側から攻撃をしてくる所属不明機のスーパーホーネットの３６ｍｍ突撃砲の弾幕をホバーによる高速移動で回避しつつ、再び接近しながらジャイアント・バスからヒートサーベルに持ちかえる。

「ほらよ！くらえー！」

胸部から拡散ビーム（光）を放つ。４機のスーパーホーネットが片腕を前に出して光を防ごうとする。

「もらった！」

その隙に一気にブーストダッシュで、ヒートサーベルの間合いに接近して一番前に居たてスーパーホーネットのコックピットを切り裂く。

「ギャャァァァ！」

スーパーホーネットは、横に真っ二つされて崩れ落ちる。恐らく中に乗っているパイロットも真っ二つだろう。

更に後ろに居たスーパーホーネットのコックピットに、ヒートサーベルを突き刺す。

「あ、熱い！熱い！死にたく！」

そのまま、数秒コックピットにヒートサーベルを突き刺す。スーパーホーネットの電源が落ちて、機体から突撃砲が落ちた。ヒートサーベルを抜くと反動で機体が倒れた。

「クソ！貴様！！」

「死ねぇぇぇぇ！」

残って居た2機が仕掛けてきた。後衛のスーパーホーネットが１２０ｍｍ弾を発射してきた。それをホバー移動で回避すると、前衛のスーパーホーネットがジャンプして上からＣＩＷＳ－１Ａ（短刀）で攻撃をしてきた。

「甘いんだよ！格闘てのわ、こうやるんだ！」

スーパーホーネットの短刀を後ろに下がり回避する。そして、ブーストダッシュで肩からスーパーホーネットに体当たりを喰らわせる。そのまま、スーパーホーネットは反動で機体が吹き飛ばされて倒れた。

「死にな！」

倒れたスーパーホーネットを助けようとした僚機をヒートサーベルで縦に切り裂く。直ぐに距離を取る。

切り裂かれたスーパーホーネットは爆発を起こした。

倒れたスーパーホーネットは立ち上がりはしたものの、先程の体当たりのせいで機体に損傷が発生したせいで、思うように動かせないようだ。

「恨むなら、自分の愚かな行いを恨みな！」

「クソ！なんで勝てない」

動きの鈍いスーパーホーネットのコックピットにヒートサーベルを突き刺して、パイロットを焼き殺す。機体から電源が落ちて両腕がダランとした。ヒートサーベルを抜くと地面にうつ伏せに倒れた。

「オラ！弱いくせに出てくんじゃねえよ！」

「オルデガハンマー！！」

マッシュとオルテガも敵機を撃破している様だ。　レーダーを確認すると、いつの間にか残機が１２機になっていた。

スーパーホーネット達が、１ヶ所に集まり始める。どうやら、中隊

規模にまで低下した戦力を建て直して再度攻撃を仕掛けてくるつもりなのかもしれん。

「マッシュ、オルテガ！奴らにジェットストリームアタックを仕掛けるぞ！」

「了解だ！相手さんの中にまだ、ＥＣＭ（電子妨害手段）装備の機体が残ってやがる！恐らくそいつを倒さない限り通信が回復しないだろう」

「おう！ミノフスキー粒子散布下の戦場に比べたらたかだか長距離通信が使えない戦場なんざ、屁でもねえよ！」

マッシュ機とオルテガ機が合流した。俺達は３機１列編成で敵スーパーホーネット中隊に向かって接近する。

１２機のスーパーホーネットがＡＭＷＳ－２１を構えて、３６ｍｍ突撃砲と１２０ｍｍ弾の弾幕を張ってくる。

俺達は弾幕を掻い潜り散開して各小隊に突撃する。マッシュ機が左翼、オルテガ機が右翼に突撃した。俺は中央の小隊に突撃する。

「オラ！墜ちろ！」

ジャイアント・バスを脇に抱える様に構えて発射する。３機が緊急回避して難を逃れるが、反応が遅れた１機に直撃して爆発を起こした。

「嘘だ！」

直撃したスーパーホーネットが大爆発を起こした。マッシュ機とオルテガ機が合流した。俺達は３機１列編成で敵スーパーホーネット

中隊に向かって接近する。
１２機のスーパーホーネットがＡＭＷＳ－２１を構えて、３６ｍｍ突撃砲と１２０ｍｍ弾の弾幕を張ってくる。
俺達は弾幕を掻い潜り散開して各小隊に突撃する。マッシュ機が左翼、オルテガ機が右翼に突撃した。俺は中央の小隊に突撃する。

「オラ！墜ちろ！」

ジャイアント・バスを脇に抱える様に構えて発射する。前に居た３機が緊急回避して難を逃れるが、反応が遅れた後ろの１機に直撃して爆発を起こした。

「嘘だろ」

直撃したスーパーホーネットは大爆発を起こした。ジャイアント・バスからヒートサーベルに持ちかえる。残った３機に接近する。

「墜ちてもらう！」

３機のスーパーホーネットが平面機動挟撃（フラットシザース）を仕掛けてきた。手に持っていたＡＭＷＳ－２１から３６ｍｍ突撃砲弾のマズノズルフラッシュが光る。

「遅い！」

左側挟撃しようと接近してきたスーパーホーネットを、すれ違い様にコックピットからヒートサーベルで横一文字の様に切り裂く。更に振り抜いたままのヒートサーベルで円を描くように右側から挟撃しようと接近してきた僚機も真っ二つにする。残ったのはあと１機だ。

「へへ。終わりだ！」

「話にならねんだよ！」

マッシュ、オルテガの二人も敵機を撃破したようだ。レーダーで確認すると残機は俺と対峙している機体だけになっていた。

「マッシュ、オルテガ！ジェットストリームアタックを仕掛けるぞ！」

「了解だ！」

「おう！」

3機が1列に並ぶ。敵機からは1機にしか見えないだろう。ブーストダッシュで1機に接近する。

「ふ！」

スーパーホーネットに拡散ビーム砲を発射する。スーパーホーネットはたまらず上にブーストジャンプした。更に追い討ちをかける。

「墜ちな！」

マッシュ機がジャンプしてジャイアント・バスを発射する。スーパーホーネットは辛うじて最初のブーストジャンプが強かった為回避出来た。しかし、其処にオルテガのドムが止めを差す。

「くたばれよ！」

ヒートサーベルで縦に真っ二つに切り裂かれるスーパーホーネット。これで全部撃墜を完了した。ジャミングフィールドも消えた為、通信が回復した。再びＨＱに通信を入れる。

「此方はガイア大尉だ。ＨＱ聞こえるか？」

「此方、ＨＱです。良かった。漸く通信が回復しました。何か問題が発生しましたか？」

「先程通信が途絶した間にアメリカ軍に襲われた。敵機は全滅させたが、機体が残っているのでデータ回収をお願いしたい」

「少々お待ちください」

オペレーターが誰かに指示を仰いでいる。１～２分待っているとオペレーターから通信が帰ってきた。

「了解しました。ＭＳ部隊を派遣しますので、彼等と合流後帰投して下さい」

「了解だ！」

オペレーターとの通信が切れた。その後友軍部隊が到着するのを待つのだった。

ガイアｓｉｄｅｏｕｔ

バスクｓｉｄｅ

戦艦ウィスコンシンのブリッジでコーヒーを飲んでいると、ジャマイカンから通信が入った。

「バスク閣下、大変な事態が発生しました！」

「落ち着けジャマイカン。慌てて居ては話にならんぞ」

酷く狼狽するジャマイカン。一体何が発生したのだ？深呼吸して落ち着くジャマイカン。冷静さを取り戻した。

「ゴホン！失礼しました。先程新型ＭＳを捕獲しに行った海兵隊が全滅しました」

「な、何だと！敵機はたかだか３機ではないか！それに破れたと言うのか！」

ジャマイカンから伝えられた報告に今度はワシが狼狽してしまう。精鋭中の精鋭で集められた海兵隊の部隊が全滅したとわ。未だに信じられなかった。

「我々が犯人だと分かる、証拠になる様な物は残って無いだろうな？」

「恐らくは無いと思いますが・・」

ジャマイカンの語尾が小さくなる。

其処にオペレーターからの報告が入った。

「ハイヴに突入した軌道降下兵団が全滅しました！また、地上部隊も門（ゲート）確保が困難なため、後退始めました！」

オペレーターからの一方は、まさに此方に流れが向いてきた証だった。

「聞いたなジャマイカン。私は大統領に連絡を入れる。貴様は指示を待て」

「了解しました」

ジャマイカンの映像がモニターから消える。

（軌道降下兵団によるハイヴ攻略は失敗した。ならば、G弾を使いハイヴを攻略する！そうすれば、世界中から称賛を浴びるだろう！」

ワシは大統領に連絡を入れるのだった。

バスクｓｉｄｅｏｕｔ

第五十話（後書き）

まだ終わらない明星作戦。長いな～。
感想などあればどうぞ。

第五十一話（前書き）

やっと出来ました。明星作戦もそろそろ佳境に入って参りました。
では、本文をどうぞ。

第五十一話

香月ｓｉｄｅ

１９９９年８月６日午前５時調布基地総司令部

明星作戦が開始されてから、既に日付が変わって日が昇って居た。。軌道降下兵団が全滅したとの報告を受けてから司令部の空気はピリピリしたものに変わった。突入した軌道降下兵団が入手したハイヴのデータが私達の予想を遥かに上回っていたのだ。

現在行われている緊急会議では、僅かな可能性を信じて再びハイヴに地上部隊を突入させるか、此処は完全撤退して再起を計るかで押し問答が続けられている。

「此処は、全滅した軌道降下兵団に代わり地上部隊を突入させてハイヴを攻略するべきだ！」

「今撤退したら、ＢＥＴＡどもに力を蓄えられてしまい、よりハイヴ攻略が難しくなってしまうだろうが！叩くなら今しかないのだ！」

「確かに今撤退すればハイヴのフェイズレベルは上がり攻略が難しくなりますが、現状の戦力ではもう一度門（ゲート）を確保する余裕がありません。ならばこそ、此処は今一度撤退して戦力を建て直し、再度攻略作戦を建て直すべきです！」

両将軍の意見は平行線のままだ。此処で悪戯に時間をかけて話し合

いを行ったとしても、余計に戦力を疲弊させるだけだ。

（チッ！予定外ね。まさか横浜ハイヴがフェイズ２規模にもかかわらず、主縦坑（メインシャフト）と最大深度がフェイズ４レベルだなんて。未だ人類が到達していない境地よ！しかも、それが判明してから撤退か再進行かで意見が真っ二つになってから、遅々として作戦が進まない。しかも、メビウス所属の将軍はさっきから黙ったままだし）

言い争いを続ける将軍達を他所に、未だ沈黙を保ったままのメビウス所属の将軍に視線を向ける。　ちょび髭を生やした、おデブな将軍だ。

（確か、コンスコン准将だったかしらね？よくまあ、沈黙を保ったままでいられるわね）

周りがこれだけ激論を交わしているのに、彼は悠々とコーヒーを飲んでいるる。他の将軍達とは違い余裕すら感じられる。

（もしかしたら、何か解決策か何かがあるのかも知れないわね）

すると其処にピアティフがやって来た。何かあったのだろうか？

「ピアティフ？何かあったの？」

「はい。香月博士。戦線が横浜ハイヴから３０Ｋｍ迄後退しました。いよいよ瀬戸際かと」

遂に戦線が再進行するか撤退するかの、デッドラインまでＢＥＴＡが来てしまったのだ。

「後、どのくらい持ちそうかしら？」

「恐らく、２時間と言った所でしょうか」

「そう。分かったわ。ありがとう」

ピアティフに返事をして私は、激論を交わしている将軍達の元に向かう。

「両将軍閣下、小田原評定をしている余裕が無くなりました」

帝国軍、国連太平洋方面軍、メビウスの各将軍が私に視線を向ける。

「ほう？香月博士。我々の議論が小田原評定とは、一体どう言った事でしょうか？」

「国連軍将軍閣下、そのままの意味ですわ。最早議論を交わしている程の余裕がありませんよ。先程連絡がありました。既に戦線が後退をし続けた結果、３０Ｋｍ地点まで後退してしまいました。これ以上此処で悪戯に議論を続けている余裕がありません。早急に進軍するか、撤退するかの結論を出しませんといけません」

「なに！バカな！もう、そこまで戦線が後退したと言うのか！ありえん！」

帝国軍の将軍があり得ないと言うが、現実に起きているから大変なのだ。そこらへんを分かってもらいたいものだ。

壁に背を預けてコーヒーを飲んでいた、コンスコン准将が此方に来た。流石に彼も危険と感じたのだろうか？

「香月博士。戦線はまだ崩壊していないから、ギリギリまで議論する余地が有ると思うが？」

「お言葉ですがコンスコン准将、もし仮に再度攻略を仕掛けるならこれ以上戦力の損耗を続けるのは、よろしくありません。だからこそ、此処で結論を出すべきなのです」

私の説明に各将軍達は黙る。しかし、コンスコン准将はやはり落ち着いていた。其処に通信が入った。

「香月博士。メビウスのデラーズ中将から通信が入っております」

「っ？！回線まわして頂戴！（このタイミングで通信を寄越すなんて、何を考えているのかしら？）」

調布基地司令部の中央大型モニターにメビウスのエギーユ・デラーズ中将の姿が映し出された。

「忙しい所すまない。総司令部の判断は決まったのだろうか？」

「残念ながらまだです。もう少しかかりますわよ」

どうやら、デラーズ中将も作戦が継続なのか撤退なのかの判断を、待っていられなくなったのだろう。

「そうですか。ならば、メビウス独自の作戦を開始します。よろしいですな？」

「どうするおつもりですか？まさか、友軍を置き去りにして撤退等

とは言いませんよね？まさか、メビウスが尻尾を撒いて逃げるなんて事はないですよね？デラーズ中将？」

皮肉たっぷりに挑発しながら会話を続ける。デラーズ中将は暖簾に腕押しと言った感じで、全く反応がない。逆にコンスコン准将の方が頭にきている感じだ。

「ハッハハハ。残念ながらメビウスは撤退するつもりはないな。寧ろこれからＭＳだけで再度攻略を仕掛けるつもりなのでな」

司令部の将軍達が驚く。まさか、判断が出ていないからって再度攻略を仕掛けるなんて思っても見なかったからだ。

「本気ですか？まだ、総司令部すら決定しておりませんのに？」

「うむ。先程メビウスの将軍会議で決定したのでな。これより、メビウスはオペレーション『スターダスト』を開始する。そのむねを伝えたのでな」

「分かりました。私には良いですが、日本帝国政府に通達されたのですか？」

「既に済んでおる。では、作戦を開始しするので失礼する」

司令部の大型モニターからデラーズ中将が消えた。各将軍達は議論を再開していたが私はその議論を気にする事なく思考に耽っていた。

（どうするつもり？いくらメビウスのＭＳが優秀でも、再度内部に突入出来るか分からないのに。しかも、デラーズ中将は自信ありげな表情だったし。なにか、切り札が有るとでも言うのかしら？）

チラリと議論している将軍達を見ると、今度はコンスコン准将も参加して議論を交わしていた。

（まあ、どう転んでも私に損は無いわね。成功すれば良し。失敗してもメビウスの戦力が低下するだけね。なら、暫くは様子見に徹するかしらね）

私は、思考するのを止めて作戦の推移を見守るのだった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？？ｓｉｄｅ

「そうですか。分かりました。では、予定通り投下します。はい。失敗は致しません。ご安心ください。では、失礼します」

受話器を置く。先程の電話で遂にG弾を投下する事を大統領から伝えられた。後は、光線級の数が減るのを待つばかりだ。

（フフフ。見ておれよメビウスの連中が！G弾こそが、人類に勝利を与える兵器だと教えてやるわ！）

ワシは勝利を確信して内心で高笑いするのだった。

？？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私は今、空母タケミカズチのＭＳ格納庫でＧＰ０２Ａサイサリスの最終確認を済ませ、コックピットの中で出撃の順番待ちをしている。次々とドムがカタパルトから射出されて行く。先程赤いドムが出撃していった。
恐らくはシャア大佐の機体だろ。。

「・・・少佐、ガトー少佐！聞こえていますか？」

私が物思いに耽っていると、オペレーターから声をかけられた。それに気付いて返事をする。

「すまない。考えて事をしていた。どうかしたのか？」

「カタパルトが空きましたので、移動をお願いします」

「分かった」

オペレーターに返事をして、機体を格納庫からカタパルトに移動させる。　丁度ドムがカタパルトから射出されて行く。

私はカタパルトに足を固定して、射出準備を完了する。其処に通信が入った。

「ガトーよ。聞こえるか？」

「デラーズ閣下！如何なされましたか？」

機体の右モニターに、デラーズ閣下が映しだされた。

「なに、出撃前の激励だ。ガトーよ。貴殿の機体が今回の作戦の要となる。心してかかるのだ。オペレーション『スターダスト』の成功を祈る」

「は！分かりました。このアナベル・ガトー、獅子奮迅の活躍をご覧に入れましょう！」

私はデラーズ閣下に敬礼する。デラーズ閣下も返礼してくださった。

「ならばガトーよ！意地を通して参れ！ＢＥＴＡどもに人類の力を思い知らせて参れ！」

「は！」

デラーズ閣下がモニターから消える。私は射出に備える。其処にオペレーターからの通信が入った。

「カタパルト、オールグリーン！ガトー少佐、発進どうぞ」

「アナベル・ガトー出撃する！」

私は空母タケミカズチから大空に打ち出された。　スラスターを全開にして陸地に向かう。光線級からのレーザー照射が来るが、それを回避しながら陸地にたどり着く。たどり着いた場所にはドムやザクが私の到着を待っていた。

「ガトー少佐！此処から２０Ｋｍ地点までお供します！」

「おお！カリウスか！すまんないが、援護を頼む」

カリウス達とは共に横浜ハイヴを目指して進軍を開始した。暫く進軍すると、友軍の通信が聞こえてきた。

「この風、この肌触りこそ戦争よ！」

「ラル少佐！ガトー少佐が通りますよ！」

左側前方で４機のドムがＢＥＴＡと交戦していた。

「此方はアナベル・ガトー少佐であります。露払いありがとうございます」

「おお！アナベル・ガトー少佐か！私はランバ・ラル少佐だ。此処は私達に任せて、君は君の任務を遂行したまえ」

「は！では、申し訳ありませんが行かせてもらいます！」

私はスラスターを吹かしてランバ・ラル少佐達から離れ、横浜ハイヴを目指して進む。

「ラル少佐！ＢＥＴＡの増援です！」

「フフフ。見てやろうではないか！この、ドムの性能を！グフとは違うのだよ、グフとは！」

ランバ・ラル少佐達から離れて更に横浜ハイヴに近付くと、右前方で戦闘している赤いドムを確認した。赤いドムはビームバズーカを連射して光線級を優先して叩いて入るようだ。

「ちい！当たらなければ、どうと言う事はない！」

赤いドムの通信が聞こえてきた。どうやら苦戦している様だ。よく見ると、僚機がいないのだ。

「ガトー少佐。援護に向かわせてください！お願いします！」

3機のザク？のパイロットから、赤いドムの支援の申し出が来る。

「構わん。同胞を見捨てる事など出来ん！直ぐに行ってくれ」

「「「了解」」」

3機のザク？が赤いドムを支援しに行った。すると、赤いドムから通信が入った。

「此方はシャア・アズナブル大佐だ。救援感謝する」

「此方はアナベル・ガトー少佐であります。赤い彗星のシャア大佐でしたか。無粋な真似をと、言われなくて良かったです」

なんと、苦戦を強いられていたのはシャア大佐だった。

「なに。僚機が補給に戻っていてな。それで、少々苦戦していたのだ」

「そうでしたか。我々は横浜ハイヴを目指して進軍を続けている所です」

「そうか。ならば、援護する！ガトー少佐達は進みたまえ！私が囮になろう」

「ありがとうございます。では、行かせてもらいます！」

シャア大佐は、私達にＢＥＴＡが向かわないように、派手に動いてＢＥＴＡを陽動してくださった。シャア大佐達の陽動を無駄にしないためにも、スラスターを吹かして更に進軍するのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

ギニアスｓｉｄｅ

オペレーションスターダストが開始された。私は不動閣下から頂いた私専用のビックトレーで、戦闘の指揮を執っていた。

「大隊規模クラスの増援を確認しました！バルフィッシュの方に向

かっております！」

「砲撃を続けよ！ガトー少佐達の元に近付けさせるな！僚艦にも入電せよ！砲撃の手を緩めるなと」

「了解しました。此方は」

明星作戦開始から既に1日がたった。兵達には疲労が溜まり続けて行く。　皆必死に溜まり戦い続けているが、やはり劣勢は否めない。この現状を打破する為にオペレーションスターダストが敢行されたが、ＢＥＴＡどもは何故か防衛目標のガトー少佐に向かって進軍して行く。そのたびに砲撃支援やＭＳの援軍を行っているが、そろそろ限界に近付いている。
そんな事を考えていると、金髪の女性が近付いて来た。

「お兄様。どうぞ。食事です」

「うん？アイナか。ありがとう」

妹のアイナが戦闘用非常食を渡してくれる。私はそれを食し始める。まあ、チューブ食ながらなかなか美味しいものだ。

「やはり、厳しい状況なのですね」

「ああ。だが、負ける訳には行かないのだからな。先程、ノリスも補給を済ませて再出撃していった」

「そうですか。無事だと良いのですが」

「なに、ノリスなら問題無いさ」

「ノリスなら大丈夫ですが、他に戦う兵士達も無事に帰って来てくれれば良いのですが」

そう言って、他に戦う兵士達の無事を祈るアイナ。私は非常に良い妹をもった様だ。そのまま、祈りを捧げるアイナを横目に私は指示を出すのだった。

ギニアスｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

横浜ハイヴまで後、２０Ｋｍ地点まで到達した。　最初に随伴していた部下達は、既に私から離れて劣勢に陥っている友軍の支援に向かったり、陽動をしてくれた。今や残っているのは、カリウスだけになった。

「ガトー少佐！ギリギリまで援護します！」

「いや、此処までで良い。カリウス貴様は離脱しろ！」

カリウスのドムがバズーカでＢＥＴＡを纏めて吹き飛ばした。

「分かりました。御武運を！」

カリウスのドムがスラスターを吹かして離脱して行った。

「私はただ駆け抜けるのみ・・・！」

私はスラスターを全開にして、ＢＥＴＡ群に突撃していく。機体を上下左右に動かしてＢＥＴＡを回避して行く。

（く！まだだ！まだ行ける！）

要撃級の尻尾が私に向かってくる。要撃級に頭部バルカン砲を射って蜂の巣にする。尻尾で攻撃しようとしていた要撃級が倒れた。

（ここだ！此処で上に上がる！）

上昇ポイントにたどり着いた私は、一気にハイヴモニュメントの上まで上昇する。そして、バズーカを準備する。

「待ちに待った時が来たのだ！

多くの英霊が無駄死にで無かったことの証の為に・・・

再び地球奪還の理想を掲げる為に！　星の屑成就のために！

ヨコハマよ！私は帰ってきた！！」

サイサリスの右肩がずれて連結部分が出てきた。シールドから砲身を取りだし連結する。

下にいる動きの遅い要塞級をロックオンする。

エネルギーのチャージ率が１００％になった。

「落ちろーーー！！」

ビームバズーカから高濃度に圧縮されたビームが発射された。ビームバズーカのビームはロックオンした要塞級もろともハイヴのモニュメントから南部の地域１５Ｋｍ地点までにいたＢＥＴＡを全て消し去ったのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

第五十一話（後書き）

感想などあればどうぞ。

第五十二話（前書き）

やっとこ完成しました。　もう少しで明星作戦終了です。では、本文をどうぞ。

第五十二話

香月ｓｉｄｅ

１９９９年８月６日午前７時５５分調布基地司令部

メビウスが開始したオペレーションスターダストは大成功だった。
謎のレーザー兵器によるＢＥＴＡの一掃。それによるハイヴ迄の道のりの確保が出来たのだ。
総司令部では、先程の強力な攻撃の戦果を受けて、ハイヴ攻略を再開するで一致した。

「では、内部に突入するのはメビウスを除く各軍でよろしいですね？」

「我が帝国は問題無い」

「国連軍も全力で援護しよう」

協議のすえ、メビウスの広範囲のＢＥＴＡ殲滅の方を受けて帝国軍、国連太平洋方面軍の双方がハイヴ突入を了承したのが１時間程前だ。
現在メビウスは南部地域では２０Ｋｍ地点で待機している。北部の部隊は３０Ｋｍ地点で陽動を仕掛けてＢＥＴＡをハイヴから引きずり出している。帝国軍、国連太平洋方面軍の双方がハイヴ迄後、５Ｋｍ地点まで戦線を押し上げた。現在は最も近い門（ゲート）を確保しに向か

っている。

（流石不動准将率いるメビウスね。此処まで来るまで切り札を取って置くなんて。しかも、ＢＥＴＡに壊滅的損害を与えられる兵器なんてね。やっぱり彼の協力が必要ね。今回の作戦でハイヴが手に入れば、私の研究が飛躍的に進むこと間違なし。尚且つメビウスの技術を手に入れられれば、第５計画の連中に一泡吹かせられるわ！）

私がそんなこと考えていると、ピアティフが急いで此方にやって来た。

普段から鉄面皮と呼ばれる彼女からは想像出来ないほど慌てていた。

「大変です！アメリカ政府からの緊急通達です！」

「どうしたのかね？アメリカ政府がなにかあったのか？」

「通告を読み上げます。アメリカ政府はG弾攻撃及び予測効果範囲からの即日撤退を要求する。なを、この通告を無視して損害を被ろうともアメリカ政府は一切の責任を負わないとの事です」

司令部に激震が走る。皆、予想もしなかった通告に驚きを隠せていなかった。

「ふざけるな！！アメリカめ！作戦が成功仕掛かっているのに何を考えているのだ！」

帝国軍の将軍が机をおもいっきり叩く。ダンと言う音が司令部内に響く。

「それで？日本政府の反応は？」

「はい。日本政府は榊是近首相がアメリカ政府に対して、もう抗議してG弾の使用停止と通告の即日撤回を求めています」

榊首相が抗議してもアメリカは恐らく聞く耳を持たないだろう。私の近くで帝国軍の将軍と国連軍の将軍が言い争いを始めた。

「貴様！知っていてわざと言わなかったのだろう！この、アメリカの手先目が！」

「知らん！私は本当に知らない！だいたい私は国連所属であって、アメリカ軍には属していない！国連軍とアメリカ軍を勘違いしないで欲しい！」

「ふん！口ではそう言えるが本音はアメリカに尻尾を振ってる口だろうが！」

「なに！言い掛かりもよしてほしな！私は国連軍の軍人として職務を全うしているだけだ！アメリカ軍とは何等関係ない！」

帝国軍の将軍が国連軍の将軍の胸ぐらを掴んだ。国連軍の将軍も負けじと胸ぐらを掴みかえした。　殴りあいが始まる寸前だ。

「両者止めんか！この馬鹿どもが！今すべき事は言い争いではなく、友軍を撤退させる事じゃ！」

コンスコン准将が両者の間に割り込む。回りの兵士達も両者を引き離す。

「今は言い争いをしている場合ではありません！直ぐに全軍に通達

しなければなりません！」

「そ、そうですな。我々が言い争っても何も解決する訳ではないですからな」

「うっ！そ、そうですね。香月博士の仰る通りですね。オペレーター！全軍に通達せよ！大至急通達範囲より退却せよと！」

両将軍も頭が冷えたのか、先程とはうってかわって即座に指示を出す。

オペレーター達が慌ただしく各部隊に通信を入れるのだった。

香月ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

アメリカ政府からの通告を受けて、バターン号の指揮をホシノ少佐に任せ愛機のグフカスタムで出撃し、友軍部隊の安全圏脱出の支援を行っている。

「不動閣下、この地域に居た友軍部隊の完全撤退を確認しました」

「了解だ。まだ、他の地域に逃げ遅れた部隊がいるかも知れん。引

き続き撤退支援を継続する」

「了解しました。ただ、もう時間がありませんので、お急ぎください」

「了解」

イルマ中尉に連絡を入れ　報告を済ませる。今頃宇宙で再突入駆逐艦が最終軌道調整に入っている頃だろう。

（流石にヤバイな。友軍部隊の撤退が間に合わないかも知れないな）

アメリカ側から通告された、投下予定時間まで残り１０分を切っていた。

「マスター。もう余り時間がありません。急がないと、我々も撤退が怪しくなります」

「悠斗、どうするの？逃げるの間に合うの？」

「悠斗。行くなら早くしないと、私達まで捲き込まれるよ」

マリーダ中尉、プル、プルツーから通信が入る。　３人が乗っているのはドムサイコミュ試験型だ。　まあ、元のモデル機体は　若き彗星の肖像に登場する、ハマーン専用のドムの改修機、シュネー・ヴァイスだ。まあ、此方の試験型は普通のドムにサザビーと同じファンネル　パックが背後に付いてるってだけだが。

「ああ。急ごう。捲き込まれるのはゴメンだからな。行くぞ」

「「了解」」

スラスターを吹かして更に奥に進軍する。残り時間は少ないが何とか友軍を救出しなければならない。そんなことを考えながら旧柊町付近まで進軍すると、友軍反応があった。

「マスター。友軍反応があります。此処からもう少し行った所になります」

「分かった。時間が残り少ない。今見つけた部隊を撤退させると同時に我々も撤退する。良いな？」

「「了解」」

そのまま、反応があった地点に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

要撃級が此方に向かってくる。俺は８７式突撃砲を発射して奴等に赤い花を咲かせる。

「ウオォォ！出ていけ！俺達の町から出ていけ！」

「孝之！撤退するんだ！もう、じかんがない！」

「そうだ！鳴海、平、撤退するんだ。こんな所で無駄死にするつもりか？！」

通信で真二や大尉が撤退しろって言ってくるが、今の俺には全く気にかけていなかった。ただ、自分が住んでいた故郷を取り戻す事しか考えていなかった。

「俺はもう、誰も死なせたくないんだー！！」

迫り来るＢＥＴＡに突撃砲を乱射する。弾幕を潜り抜けた要撃級の尻尾が、俺に向かってきた。

（避けられない！）

そう、思って目を閉じた。だが、いつまで経っても衝撃がこない。恐る恐る目を開いてみると、其処には純白な機体が立っていた。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

先程反応があった地点に到着すると、不知火が3機いた。カラーリングは全機青だった。

（あれ？ブルーの不知火って事はＡｌ０１連隊か。　そうなると、鳴海孝之と平真二と後誰だ？）

原作設定だと、両者は明星作戦の時に戦死している。今回はどうやら戦死する前に助ける事が出来た。もう一機の不知火は誰が乗ってるか知らないが、多分Ａｌ０１連隊の隊員なんだろう。一番前に出ている不知火に要撃級の尻尾が迫っていた。俺はガトリングシールドを発射する。要撃級の体に命中して要撃級は倒れた。俺は一番前の不知火の前に立つ。マリーダ中尉達も後ろの不知火2機の付近に着地した。

「後ろの不知火の衛士、大丈夫か？」

「え？は、はい！大丈夫です。ありがとうございます」

不知火から間の抜けた返事が返ってくる。声からして鳴海孝之だと分かる。

「感謝するより、何故命令に従わなかった？撤退命令が出ているのだぞ？」

「申し訳ありません。私が命令したのですが、鳴海少尉が著しく興奮状態でしたので、やむを得ず交戦し続けていたのです」

後ろの不知火から通信が入った。声は女性だが、何故か聞いた事の

あるような声だった。

（はて？聞いた事のあるような声だな。・・あ！伊隅みちる大尉の声だ！）

グフカスタムのモニターに伊隅大尉の顔が映しだされる。

「救援感謝します。危うくもう1名部下を失う所でした」

「そうか。理由は分かった。ところで君は誰かね？　名乗っていなかったが、俺は国連外郭部隊メビウス所属不動悠斗准将だ」

「は！私は国連軍特殊任務部隊所属伊隅みちる大尉であります。不動閣下が救援してくださったのが鳴海孝之少尉で、私の隣に居るのが平真二少尉です」

「鳴海孝之少尉であります。先程の援護ありがとうございます！」

「平真二少尉です。鳴海少尉とは同期でエレメントを組んでいます」

鳴海、平、両名の顔も映しだされる。生憎と挨拶をゆっくり交わしている時間が無いのが残念だ。

「挨拶は省略する。3人共至急脱出するぞ。行けるな？」

「う！す、すいません。俺の機体は無理です」

鳴海少尉が肩を落とす。彼の機体は目に見えてボロボロだった。てか、今まで良く戦ってたな。まあ、同様に平機、伊隅機もボロボロだ。恐らく不知火での脱出は不可能だろう。

「コックピットは開くか？」

「はい。それは開きます」

「ならば・・・プル、もう一人入るな？」

「うん！広いから行けるよ！」

プルが元気良く返事をする。因みに、プル達の機体も全周囲モニターでリニアシートだが、プルが小さいので鳴海少尉が下に座り、プルが上に座れば普通に操作可能だ。

「ならば、鳴海少尉は機体を破棄してプルの機体に乗れ。平少尉もプルツーの機体に乗り込め」

「あ、はい。分かりました」

鳴海機の隣にプルのドムが移動する。コックピットハッチを開けて鳴海少尉が出てきた。そのまま、プルのドムの手に乗りドムのコックピットハッチを開けて鳴海少尉が乗り込んだ。

「いえ、俺はまだ行けます！」

「押し問答をやっている暇は無い！命令に従え！」

G弾が投下されるまで後5分しかない。今から脱出してギリギリ間に合う位だ。

「了解しました」

「プルツー、頼む」

「分かってるよ。ほら、早く来な」

平少尉も鳴海少尉と同じように、プルツーのドムに乗り込んだ。

「伊隅大尉は俺の機体に乗れ。マリーダ中尉、先鋒は任せる。ＢＥＴＡが出現したら、最低限の撃破に止めて突破を優先するんだ」

「分かりました。マスター」

「り、了解です」

伊隅大尉の不知火に寄り、コックピットハッチを開る右手を不知火のコックピット前に置く。不知火から伊隅大尉が出てきた。そのまま、グフカスタムの右手に乗った。右手をグフカスタムのコックピット前に持ってきた。

「失礼します。あの、何処に座れば良いですか？」

「ああ。済まんが俺の膝の上に座ってくれ」

「・・・え？え、えええぇぇぇぇ！！」

いきなり伊隅大尉が叫び声をだす。俺がビックリしたよ。

「そんなに驚くことか？」

「え、いや、しかし！不動准将は将軍ですから、失礼になるかと」

やや躊躇い気味な伊隅大尉。俺としては伊隅大尉が膝の上に座ってくれれば操作等が楽なんだが。

「悪いがＢＥＴＡが迫って来ている。早く座れ！」

「了解！失礼します」

伊隅大尉が俺の膝の上に座る。互いの体が密着して伊隅大尉から仄かに良い香りがする。

（やべ！良い香りがするな～。って！そうじゃないだろ！先ずは脱出を優先しないと！）

俺は邪な考えを直ぐに追っ払い、コックピットハッチを閉める。

「全機、最大戦速で戦場を離脱するぞ！先頭はマリーダ中尉だ。行くぞ！」

「「「「「了解！」」」」」

マリーダ中尉を先頭に俺達は戦域離脱を図る。だが、ＢＥＴＡどもは俺達を逃がすまいと追撃を図ってくる。

「そこ！墜ちろ！」

「邪魔よ！消えて！」

「はん？甘いんだよ！」

マリーダ、プル、プルツーの3人が行く手を阻む要撃級を撃破する。

「邪魔をするな！」

俺は後ろから迫り来る突撃級をガトリングシールドを発砲して撃破する。徐々に前の3機との差が開いてきた。

「不動准将。このままではぐれてしまいます！」

「分かっているが、ＢＥＴＡは俺を逃がしてくれないようだ」

本当はもっと速度を出したいのだが、伊隅大尉の事を考えるとそれが出来ないのだ。いくら衛士強化装備とはいえ、俺のように鍛えているだけでマッハ１０の速度に耐えられる訳ではないので、どうしても速度を落とさざるを得ない。

「マスター！お急ぎください。このままでは、マスターの機体が脱出が間に合いません！」

「分かっているさ、マリーダ中尉。だか、どうやら脱出は無理そうだ。お前達だけでも脱出しろ」

「何故ですか！？」

「下から来るぞ！」

大地が大爆発を起こしたかの如く、地面が跳ね上がり粉塵が舞い上がる。そして大量のＢＥＴＡが穴から出現した。俺は即座に撃破にかかる。

「く！このタイミングで大隊規模の増援だと！」

「マスター！お逃げを！」

「マリーダ中尉。行け！貴様らだけでも退避しろ！」

「しかし！」

「しかしもくそもあるか！命令だ！脱出しろ！」

ガトリングシールドで接近してくる突撃級や要撃級を撃破する。マリーダ中尉が俺を助けようとするが、俺はそれを拒否して脱出命令の指示をだす。

「安心しろ。必ず生きて帰るから」

俺はＢＥＴＡを撃破しつつ、通信画面越しにマリーダ中尉に優しく微笑む。マリーダ中尉の表情は今だ冴えない。

「・・・分かりました。必ず生きて帰って来てください」

「マリーダ、良いの？悠斗を助けなくて？」

「プル、よしな。マリーダだって辛いんだ。それにこのままじゃ私たちも巻き込まれるよ。それじゃあ意味がないんだ」

マリーダ中尉の決定にプルは本当に良いのか訪ねるが、プルツーがそれを諭す。

「不動閣下、御武運を」

「ああ。そちらもな」

「悠斗！必ず生きて帰えってね！約束だよ！」

「プル！」

「分かってるよ。プル、プルツー。必ず生きて帰るからな」

「不動閣下！死なないでください！自分はまだ、きちんとお礼が言えてませんから！」

「俺もです！」

「そうだな。平、鳴海。生きて帰えったら聞かせてもらうからな。覚悟しておけ！」

皆で最後の会話を済ませる。３機のドムがスラスターを全開にして安全圏に飛び去って行った。

俺は、シールドからヒートサーベルを抜き突撃級を切り裂く。

「済まんな伊隅。俺の機体ではなく、マリーダ中尉の機体に乗せてやれば、こんなことにならなかっただろうに」

「いえ。そんなことありません。それに、不動閣下が必ず生き残ると信じていますから」

そう言って俺に体重を預ける伊隅大尉。先程より更に体が密着する。

「そうか。なら、その信頼に答えますかな！」

俺は迫り来るＢＥＴＡ達を相手に奮戦する。そして、マリーダ中尉達が安全圏に脱出してから１分後の事だった。　時刻は午前８時１５分。再突入駆逐艦から１発目のＧ弾が投下された。

「来るぞ！伊隅大尉。確り捕まれ！」

「はい！」

俺はＢＥＴＡ達の残骸に隠れた。無論シールドでコックピット付近はガードしている。まだ、ＢＥＴＡは迫って来ているが、最早どうにもならない。そして、Ｇ弾が爆発した。

「く！」

「きゃあ！」

辺り１面が閃光に包まれる。そして激しい揺れと共にコックピット内にけたたましい警戒音が鳴り響く。そして２発目のＧ弾が爆発するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

マリーダｓｉｄｅ

私達はかろうじて安全圏までの後退に成功した。私は近くにいたビッグトレーに収容された。そして急いでブリッジに向かった。鳴海少尉や平少尉は、プルとプルツーに任せた。私は直ぐにでも、バターン号に連絡を入れなければならない。
ブリッジに駆け込むと、其処ではユーリー・ハスラー少将が指揮を取っておられた。

「うん？どうしたのかね？マリーダ中尉？」

ユーリー・ハスラー少将が私に近付いて来る。

「大変です！まだ、不動閣下が安全圏に脱出出来ていません！」

「なに！本当かね！」

「はい。間違いありません！」

「オペレーター！至急デラーズ中将に連絡しろ！不動准将が脱出していないと！それと、各師団にも同様にだ！」

ユーリー・ハスラー少将が、オペレーターに指示をだす。オペレーター達が急いで連絡をする。
ユーリー・ハスラー少将が腕時計を見る。
次の瞬間、横浜ハイヴが光に包まれた。

「マリーダ中尉。見てをきなさい。あれが男達の魂の輝きを否定した光だ」

私はビッグトレーのブリッジから、G弾が爆発するのを見ていた。

（生きていてください。悠斗さん！）

祈るようにそう願う。そして、横浜ハイヴで2発目のG弾が爆発するのだった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

第五十二話（後書き）

鳴海孝之、平真二を生存させました。ちょっとした原作ブレイクです。

伊隅大尉に付いてはご都合主義ですので、ご了承ください。感想などあればどうぞ。

第五十三話（前書き）

やっとこ出来ました。
眠いですが投稿しときます。では、本文をどうぞ。

第五十三話

ガトーｓｉｄｅ

１９９９年８月６日
空母タケミカズチ

私はＧＰ０２Ａサイサリスのコックピットから G弾が爆発するのを目の当たりにしていた。２発目の爆発が終わり辺り一体が更地に変化していた。

「凄いですね少佐。あれだけいたＢＥＴＡも全滅しているでしょう」

「カリウス、気を抜くな。まだ、戦闘継続命令が発令中だ。総司令部が戦備体制解除の許可を出すまで、気を引き締めておけ」

「は！申し訳ありません」

カリウスを軽く戒めておく。改めて周囲を確認すると、モニュメント等が全て消え去っており、G弾の破壊力を見せつけられた。
そんなことを確認していると通信が入った。モニターにデラーズ閣下が映しだされた。

「ガトーよ！緊急事態だ！不動准将がG弾に捲き込まれた！」

「な、なんですって!!不動閣下が捲き込まれたんですか！なぜ？」

「どうやら、撤退中にＢＥＴＡの地下進行による増援に部隊を二つに寸断されてしまい、後ろから迫って来ていたＢＥＴＡと交戦になり撤退出来なかったらしい」

デラーズ閣下から伝えられた情報は余りにも衝撃が大きかった。まさか、不動閣下がＧ弾の爆発に捲き込まれるとは思いもよらなかった。

「不動閣下の捜索はどうなっていますか？」

「先程、シーマ海兵隊が捜索を開始した。今は第４師団の殆どが最後に反応があった付近の捜索を開始している」

既に捜索は開始されたようだ。一刻も早く見つかる事を祈るばかりだ。

それと同時に私の中に怒りが沸々と沸いてくる。　いくら事前通告があったにせよ、友軍部隊が入るにも関わらずＧ弾を投下したアメリカに対してだ。当然今回の作戦に参加している。恐らく、Ｇ弾の威力が証明出来て高笑いでもしているだろう。Ｇ弾に捲き込まれ死んでいった者たちの為にも、奴等に鉄槌を食らわさなければならない。

「デラーズ閣下。私は出撃します」

「行くのだなガトー。止めはせん。此度の戦いで命を掛けて祖国を世界を守ろうとした者たちの為に行って参れ。後の事は気にするでない」

私は、デラーズ閣下に敬礼する。デラーズ閣下はただ頷いた。私は機体を動かしてカタパルトに乗る。発進準備が完了した。オペレーターがモニターに映し出される。

「お話は聞いております。ガトー少佐、御武運を」

「ありがとう。アナベル・ガトー！出撃する！」

私はカタパルトから射出され、空に飛び出して行った。

（不動閣下はこの様な事を予測して、我々にあのようなシミュレーター訓練をするように命令しておられたのか。ならば、訓練の成果を特と御覧にいれよう）

そのまま私は、東京湾に展開している国連太平洋艦隊に向かって、スラスターを吹かして進むのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

バスクｓｉｄｅ

G弾の威力は凄まじいものだった。横浜ハイヴに展開していたＢＥＴＡ群が全て消し去られた。これは我がアメリカ合衆国が進めるG

ドクトリンが、間違っていなかった事の証明になった。

「フフフ。流石G弾だ。これで世界は統一される。我等がアメリカ合衆国の元にな」

「バスク中将。ジャマイカン大佐から通信が入っておりますが、如何いたしますか？」

「ほう。ジャマイカンからか。通信を繋げ」

「は！通信を繋げます」

中央大型モニターにジャマイカンが映しだされた。

「バスク閣下。G弾の威力は凄まじいものでしたな。流石は我等がアメリカ合衆国が開発した兵器ですな」

「ジャマイカン。貴様もそう思うか！良く分かってるではないか！これで各国は、我等がアメリカ合衆国の元に跪く事になるだろう。ワッハハハ！」

ワシとジャマイカンが高笑いする。ブリッジの中に笑い声が木霊する。

「そう言えばバスク閣下。吉報が有ったので、お伝えしなければなりませんでした」

「なに？吉報だと？」

ジャマイカンが真剣な顔付きをしてワシを見てくる。

（まあ、今は機嫌が良いから、大した事でもなくとも吉報にしてやるかな）

ワシは椅子に深く座り直す。ジャマイカンの吉報を聞いてやることにした。

「で？何が吉報なのだ？」

「は！先程Ｇ弾が爆発する前にメビウスの通信を傍受したのですが、どうやら不動准将が脱出出来ずに爆発に巻き込まれた要です」

「なに！？本当か！」

「はい。間違いありません。事実メビウスの第４師団の連中が必死の捜索活動を開始しています」

ジャマイカンから伝えられた報告はまさに我等がアメリカ合衆国にとって　紛れもない吉報であった。アメリカにとって、目障りな存在のメビウスの総司令官が戦死したとなれば、メビウスの力は一気に弱くなることが目に見えているからだ。

（フフフ。今日は本当にツイている日だ。Ｇ弾の有効性を示すだけでなく、目障りな存在だった不動准将まで消すことが出来たのだからな。祖国に帰れば勲章ものだな。
どうやら、天は私に味方しているようだ）

「そうかそうか。本当にワシは運が良いようだな。ジャマイカン。

貴様の報告は本当に吉報だったぞ！祖国に戻ったら昇進願いを出しておく。貴様も将軍の仲間入りだ。ハッハハハ！」

「本当ですか！有り難き幸せです」

ワシが大笑いしている時だった。ズドーンと言う鈍い爆発音が辺り一帯に響いた。ワシは笑うのを止めて即座に状況確認をする。

「な、何事だ！」

「本艦から少し後方に居た、ニミッツ級戦術機母艦１０番艦ケストレルの左舷から火の手が上がりました！ミサイルによる攻撃です！」

「なんだと！何処だ！何処から攻撃が来たのだ！？」

ワシは椅子に座りながら慌てて指揮を取るのだった。

バスクｓｉｄｅｏｕｔ

アンダーセンｓｉｄｅ

私が指揮する空母が現在攻撃を受けている。先程左舷に命中したミサイルにより、艦左舷前方から炎と煙が立ち込めている。ブリッジ要員達が急いで連絡を取り合っている。私はただ立って状況の推移

を見守っている。

「く！左舷前部に敵潜水艦からのミサイル命中！」

「第２派来ます！」

「弾着まであと１０秒！」

「弾幕を張れ！」

側面に付いているガトリング砲が起動して、迎撃を開始する。

「ダメです！迎撃間に合いません！」

「総員対ショック！」

ドッカーンと言う爆発音が鳴り響く。艦内に警戒を知らせる赤い警告灯が点灯する。

「左舷後部にミサイル命中！」

「ダメコン（ダメージコントロール）急げ！」

「敵機潜水艦からのミサイル、２発命中！浸水しています！」

「戦術機を発艦させろ！」

「ダメです！艦が傾斜していきます！」

オペレーターが無理だと断言する。事実艦は左に傾いて沈み始めて

いた。

「カタパルトか壊れても構わない。戦術機の発艦作業を続けさせろ！」

「でも・・・」

先程のミサイルの衝撃でずれた帽子を直しながら指示をだす。

「発艦だけは全うしろ！射出要員を除く全乗組員は退艦させろ」

「了解です」

オペレーターが通信で戦術機の発艦を命じる。既に乗組員達は救命胴衣を着て艦から脱出を開始した。

（やれやれ。本国の連中のツケを払わせられるとわな。恐らくメビウスは国連太平洋艦隊を全滅させるだろう。G弾を使用したツケなのだろう。手痛い出費だな。馬鹿なことをしなくても勝てた戦いだったのだがな。恐らく太平洋艦隊が完全に再建されるのに暫くは掛かるだろう。まあ、生き延びればまた再起は有るだろう。願わくば、余り死者が出ないことを願うばかりか）

最後の搭載された戦術機が射出されて行くのを確認して、ケストレルからの脱出をオペレーター達と共に開始するのだった。

アンダーセンｓｉｄｅｏｕｔ

ルリｓｉｄｅ

私達は今、G弾が爆発する直前の不動閣下が居た場所をビッグトレーにて徹底的に捜索しています。未だに不動閣下のグフカスタムの発見の報告は来ません。ブリッジは今焦燥感に満ちています。

「イルマ中尉。周囲に反応はありませんか？」

「いえ。未だ反応はありません。あるのは友軍戦術機の残骸ばかりです」

「そうですか。なら、捜索範囲を拡大してください。レーダーによる捜索範囲１０ｋｍ圏内から３０ｋｍ圏内までの範囲にしてください」

「分かりました。レーダーの範囲を拡大します」

レーダーの出力を上げて不動閣下のグフカスタムの反応を探す。

（まだ見つからないとなると、恐らく反応炉が緊急停止して救難信号を発信していない可能性もありますね。早く見付けないと、悠斗さんの生命が危ない！）

私はオモイカネと共にありとあらゆる可能性の検証を始めるのだった。

ルリｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

「沈めぇぇぇぇぇぇぇ！」

私は国連太平洋艦隊に攻撃を仕掛けていた。サイサリスのビームバズーカからビームが発射される。ロックオンしていた巡洋艦のブリッジに直撃して、巡洋艦から火の手が上がる。

「クソ！化け物め！」

「相手は動きが良いぞ！纏まってかかるんだ！」

Ｆ－１４トムキャットの一個中隊が私を包囲しようとしていた。

「邪魔だぁぁぁぁぁ！！」

ビームサーベルを抜き、右側にいたＦ－１４トムキャットの懐に飛び込む。

「当たれぇぇぇぇぇ」

ＡＭＷＳ－２１の３６ｍｍ突撃砲を乱射してくるが、私には当たらない。逆に頭部バルカン砲で牽制して相手に隙を作らせ懐に潜りこんだ。

「私の邪魔をするなぁぁ！」

「ギャアァァァ」

ビームサーベルで機体を真っ二つにして切り捨てる。

「よくも仲間を！！」

背後からＦ－１４トムキャットが３６ｍｍ突撃砲を発射してくる。私は機体を振り向かせて攻撃を仕掛けようとした時だった。

「悪いな。落ちてもらう！」

そう聞こえたと思ったら次の瞬間、Ｆ－１４トムキャットが爆発を起こして海に落ちて行った。
そこに通信が入った。

「此方はイアン・グレーデン中尉であります。アナベル・ガトー少佐の援護に当たります」

レーダーを確認してみると、海岸に友軍のザクキャノン中隊の反応があった。

「援護感謝する」（馬鹿な！海岸から此処まで１０ｋｍ近く離れているんだぞ！しかもピンポイントで戦術機に直撃させ等とは。彼は

もしや、ニュータイプなのかも知れんな）

イアン・グレーデン中尉率いザクキャノンの部隊が私を包囲しようとしていたＦ－１４トムキャットを次々と叩き落としていく。

「ガトー少佐！そのまま奥に向かってください。ガトー少佐の周りの巡洋艦や駆逐艦は此方で撃破します！」

「了解した。すまないが後を頼む」

私はスラスターを吹かして更に奥に向けて進軍して行く。進路の邪魔になる巡洋艦や駆逐艦を撃破して進む。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

イアンｓｉｄｅ

同時刻。海岸のザクキャノン中隊。

「ガトー少佐が行かれましたね」

「そうだな。まあ、我々は我々の戦いをするまでだ」

「了解です隊長！艦艇を叩きましょう！」

「そうだ。行くぞ！」

「オー！」×１１

ガトー少佐が進んだ後、ザクキャノン中隊が残っていた艦艇に総攻撃を仕掛けるのだった。

イアンｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私はイアン・グレーデン中尉の援護を受けて更に敵艦隊の中心に向かって進む。巡洋艦や駆逐艦から砲撃が放たれる。

「未熟！」

スラスターを吹かして私に砲撃をしてくる駆逐艦の船体をビームサーベルで真っ二つに切り捨てる。艦が真っ二つになり、炎と爆発音と共に沈んで行く。

「くそ！これ以上は進ませんぞ！」

「たった1機の敵に負けてられるか！」

2機のF－18ホーネットが36mm突撃砲と120?滑空砲を射ってくる。

「私を相手にするには未熟！」

ホーネットの攻撃を回避してビームバズーカを構えようとした。すると、いきなり目の前から2機のホーネットがいなくなった。

「なに?何処にいった?」

周囲を確認してみるが、何処にもホーネットの姿がない。寧ろ艦艇からの砲撃が飛んできた。
それを回避する。

（敵機が消えた?おかしい。レーダーには反応があるのだが?）

レーダーを確認しつつ、砲撃を回避していると敵の通信が聞こえてきた。

「う、うわー！！助けてくれー！」

「水だ！コックピットの中に水が入ってきた！俺は泳げないんだ！」

敵の悲惨な叫びが聞こえる。良く聞くと何かの力が働いているのか、ギギギと音がする。

「ボガ！ゴッハ！」

「い、息が・・・ゴッハ！」

どうやらホーネットのパイロット達は溺死させられたようだ。

「ガトー聞こえるか？ケリィだ」

「ケリィか！何処にいるんだ？」

「下だ下。水中にいる。ＭＡのグラブロに乗っているんだ。援護するぞ」

「有り難い。所でさっきのホーネットの通信はもしかしてケリィが機体ごと水中に引きずり込んだのか？」

「そうだ。クローで２機ともコックピット付近を歪ませて、水を満タンにさせて溺死させたのさ」

意外にえげつない殺しかたをするのだな。まあ、ビームバズーカで相手を蒸発させて殺している私の方が酷いか。

「そうか。ケリィ援護を頼む」

「任せてくれ」

ケリィに援護を頼み、敵巡洋艦に攻撃を仕掛ける。巡洋艦からＣＩＷＳによる迎撃がくるが、軌道を見極めて回避する。

そして側面部に取り付きビームバズーカを機関部に叩き込んだ。

「墜ちろぉぉぉぉぉ！」

巡洋艦の機関部にビームが直撃して、巡洋艦は爆発、炎上して沈んで行った。

「墜ちろ！」

ケリィのグラブロから、駆逐艦に向けて魚雷が発射される。駆逐艦はなんとか回避しようとするが、左舷前部と左舷後部に魚雷が４本命中して大爆発を起こして沈没して行く。駆逐艦の乗組員達が海に脱出していく。

「ガトー。もうすぐ敵艦隊の中心だ。此処は俺が敵を引き付けるから、敵の本隊を叩いてくれ！」

「分かった。ケリィ、死ぬなよ」

「分かっているさ。ガトー君も死ぬなよ」

「ああ。私はただ、駆け抜けるのみ！」

ケリィに残りの艦艇を任せて、スラスターを全開にして敵艦隊の中心に向かって進むのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

第五十三話（後書き）

空母ケストレルは本来マブラヴオルタネイティヴには存在しない架空艦です。また、ニミッツ級の空母に１０艦が存在しませんので。
もとネタはエースコンバットです。
感想などあればどうぞ。

第五十四話（前書き）

やっと完成。ご都合主義全開です。では、本文をどうぞ。

第五十四話

悠斗ｓｉｄｅ

「・・・か・・・っか・・・」

ゆさゆさと体を揺すられる。どうやら誰かが俺を起こそうとしている様だ。

「不動・・・か・・・！・・・・て・・・」

まだ、眠いのでもう少し惰眠を貪っていたい。

だが、起こそうとしている人物がそれを許さないようだ。先程より強く揺すられる。こうも揺すられては眠れないのでうっすらと目を開ける。

「う、う～ん？まだ、夜じゃないか？どうかしたのか？」

「気付いたのですね！不動閣下」

普段聞かない声の女性に起こされている様だ。

（はて？何故イルマ中尉じゃないんだ？あれ？俺って確か明星作戦に参加していたよな？）

まだ碌に動かない頭で思い出してみる。だんだん自分に何が有ったか思い出してきた。

（そうだ！G弾の爆発に捲き込まれたんだ！それを凌ごうとして1発目は何とか耐えられたが、2発目の爆発の時に反応炉が緊急停止してフェイズシフト装甲がダウンして、シールドで防いでいたが耐えられなくて吹き飛ばされたんだ）

自身が体験したことを思い出す。今置かれている現状が把握出来た。

「不動閣下。大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ伊隅大尉。伊隅大尉こそ怪我は無いか？」

「大丈夫です。私は不動閣下が下敷きになってくれましたから」

「そうか。大尉に怪我がなければ幸いだ。どれくらいの時間気を失っていた？」

「私も5分程前に目を覚ましたので、正確な時間は分かりません」

どうやら伊隅大尉も目を覚ましたばかりの様だ。お互いシートに固定されていたおかげで怪我をしなかったらしい。恐らく伊隅大尉はシートベルトを外して、俺を起こしてくれたのだろう。今は膝の上に座っている様だ。

（う～ん。機体の電源が入らないか。これは反応炉が停止してるし、再起動も駄目っぽいな。まあ、真っ暗で何も見えないからな）

色々なスイッチを押してみるがやはり反応が無い。この現状だと恐らく緊急時に発動する救難信号も起動していない様だ。

（アンリミデットの時の武と冥夜の様だな）

まあ、あの二人みたいなラブラブな展開は無いだろうがな。通信機も駄目になっているが一様ＯＦＦにしておく。左腕に着けた腕時計のボタンを押す。時計の部分が光時間が表示される。

（９時３０分を過ぎた所か。１時間以上経っているな。救助部隊が出ているだろうし気長に待つか）

さて、状況把握も済んだのでやることが無くなってしまった。特にする事が無いので伊隅大尉に話かける事にした。

「伊隅大尉」

「あ、はい。なんでしょうか？」

「時間は分かったぞ。爆発から１時間以上経っている。まあ、捜索部隊も出ているだろうから大丈夫だろう」

「そうですか・・・」

なんだか、伊隅大尉の元気が無いようだ。あれか、好きでもない男と二人っきりで閉じ込められたから嫌な気分なのか！？まあ、ちょっとショックだけど。

「どうした？元気が無いようだが？何かあったのか？」

「いえ。私事の事で少し悲しい事が有ったのを思い出してしまったので」

暗闇で顔が見えないが、恐らく俯いているで有ろう伊隅大尉。表情は見えないが言葉の節々に悲壮感が漂っている。

「もし俺で良ければ話を聞こう。話せば楽になるかも知れんしな」

「そうですね。聞いてもらえますか？」

「ああ。良いとも」

「私は・・・」

伊隅大尉がぽつぽつと自分に有った事を話始めるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

伊隅ｓｉｄｅ

私には姉妹がいる。私を含めた四人の姉妹だ。皆中の良い姉妹なのだか、少々困った事があった。そう。姉妹全員がある一人の男を好きになってしまったのだ。その男の名前は前島正樹。私達姉妹全員のアプローチに全く気が付かない鈍い奴だ。　私より少し年下ではあるが、鈍感なのを除けば良い男だ。今は帝国軍に入隊して佐渡島から南下してくるＢＥＴＡを迎撃する第２防衛線に配属されている。

今回の明星作戦には参加していない。
私は今回の作戦の前の休日に偶々正樹と休みが合ったので、とある場所に呼び出して私の長年の想いを奴に伝えたのだ。所謂告白だな。だが、私の想いは奴に届く事はなかった。

「みちるの気持ちは凄く嬉しいんだが、俺は既にやよいと付き合っているんだ。だからみちるとは付き合えない。ごめんな。もっと早く皆に言っておけば良かったのにな」

そう。想い人は既に姉のやよいと付き合っていたのだ。何でもそつなくこなす天才肌の姉だ。よく意見の食い違いでぶつかりあった事もある。私の様に努力して何とかなるような人間の考えを理解出来ないタイプの人だ。そんな姉に私はコンプレックスを抱いていた。

「そうか。なら幸せにな」

自身の心が砕け散り凄く痛いのに敢えて微笑んで正樹と別れた。悔しくて悲しくて何もかもが嫌になった。自宅に帰って泣いた。ひたすら泣いた。自分の好きな人が姉に取られた。彼の笑みを私には向けて欲しかった。私を見ていて欲しかった。　もっと早く勇気を出しておけば良かった。そうしたら、彼は私と付き合ってくれたかも知れなかった。後悔ばかりが頭を過っていった。それから1週間後に今回の明星作戦が開始された。私は空っぽだった。隊を任された私だか作戦前に受けた心傷は余りに大きかった。いつの間にか同期や部下先輩達は皆死んでいった。気が付いたら私だけが生き残ってしまった。再編しながら何とか戦ったが、最後まで生き延びたのは再編された時に合流したエインヘリャル隊の鳴海と平だけだった。最後まで部下の手綱を引けなかった。あの時不動閣下が来ていなかったら私も今頃あの世だっただろう。

「結局、失恋を引きずりながら戦った結果が今の私です。どうしょうもない人間なんです。軽蔑しますか？」

真っ暗な中なので不動閣下の表情は分からない。　ただ、黙っているだけだ。頭の上に手が置かれた。その手が私の髪を撫でる。

「それだけ好きだったんだろ？その男が。まあ、人間誰しも悲しい時は悲しいさ。それをキチンと割り切れる様になれば良い。それに、どんな状況下においても人が死ぬときは死ぬさ。それは伊隅大尉の正じゃないさ。俺とて仲間を失って今の地位にいるんだ。なら、生き延びた奴の使命は死んでいった奴等の事を後世に伝え忘れないことだ。真に人が死んだって言うのは忘れられた時だと思うからな。なら、生き延びた俺達は最後まで彼等の事を忘れてはならないんだ」

不動閣下が頭を撫でながら、子供をあやすように優しい声をかけてくれる。こうして頭を撫でられるのは久しぶりだ。不動閣下に撫でて頂くとなんだか不思議と落ち着いた気分になっていく。

「私を軽蔑しないのですか？」

「なんで伊隅大尉を軽蔑する必要がある？俺とて自分の非力さに何度も泣いたさ。部隊を3度も全滅させた事があるんだぞ。その度に泣いた。悲しみを引きずりながら戦った事だってある。だから伊隅大尉を悪く言う権利は俺にもない。寧ろ其所から這い上がって行って欲しい。悲しみをバネにして頑張って欲しいからな。まあ、失恋は簡単には拭い切れないだろうがただ過去を振り返るより、未来を見て生きて欲しいな」

俺はな。と言って更に強く優しく髪を撫でてくれる。

（本当に不動閣下は凄い人だな。彼の様な人を英雄と言うのだな。歳も余り変わらないと言うのに。　私も負けていられないな。見習わなくてわな）

「不動閣下。話を聞いてくださってありがとうございます。胸がなんだかスッキリしました」

「そうかい。それは良かった」

「不動閣下、私の事はみちると呼んでください」

「良いのか？」

「はい。そちらの方が呼ばれ慣れているので」

「そうか。ならみちるが良いならそうするさ。後、俺も軍務中以外なら悠斗と読んでくれ」

不動閣下にそう呼ばれた瞬間、なんだか胸の奥が熱くなった。どうしたのだろう？私は胸の熱さに悩み始めるのだった。
最後に不動閣下が言った事は耳に入っていなかった。

伊隅ｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

G弾が爆発してから2時間近く経った。あたし達は悠斗の機体の反応が有った地点から２０ｋｍ南の海沿い側を捜索している。未だ悠斗の機体の発見の報告は入っていない。

「シーマ様！此方にはありません」

「もっとよく探すんだよ！手を抜くんじゃないよ！」

「了解しました！」

部下達から定時連絡が入る。私は愛機のザク？Ｒ－１型に乗り捜索を続ける。ビッグトレーのコッセルからも発見の報告は来ていない。私は苛立ちを隠せないでいた。

（クッソ！2時間近く捜索してるってのに、未だに見つからないなんて！アメリカが勝手に使ったG弾のおかけで、あたし達の希望を失うなんて認めない！悠斗生きておくれよ）

私は機体を動かし海の方を見る。上陸作戦の際に撃破されたファントムや激震、イントルーダーや海神の残骸が辺りに散らばっていた。大半の機体にレーザー級の照射で打ち落とされて空いた穴があった。

（かなり殺られた様だね。帝国軍も国連太平洋方面軍も再編に時間がかかるだろうね。今は海上でガトー達が戦っているしね）

丁度私がいる位置からだとよく見える。ガトーの機体がまた１隻沈めた。　既に国連太平洋艦隊の半分位が沈んだ様に見うけられる。

（まあ、彼奴らには丁度良いね。悠斗を殺そうとした罪は命で払ってもらわなきゃねぇ）

沖合いでの戦闘を確認しつつ悠斗の捜索を続けるのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

伊隅大尉の独白を聞き終えてから暫くたった。
まあ、伊隅大尉の独白は彼女の失恋の話とそれを引きずったまま作戦に参加して仲間を死なせ過ぎた事による後悔の懺悔だった。だけど伊隅大尉は強い人だからまた立ち上がると思うな。

（確か、原作だとまだ告白すらしていなかったはずだけど俺の介入によって歴史が変化したのか？
まあ、なるようになるか。今回の明星作戦のおかけでG弾は使用されたから、武くんは来るはずだ。後は仲良く出来ると良いんだけどな）

そんなことを考えてながら自分の置かれている状況をかんがえる。
さて、いつまでも密室空間に若い男女の二人が二人っきりで閉じ込められているのは良いんだが、いい加減見付けてもらいたいな。

（う～ん。よく考えたらコックピットハッチを殴って開ければ脱出出来るよな？まあ、それは最終手段として何とかいい加減脱出しないとな。さっきからちらほら爆発音が聞こえるから残ＢＥＴＡ群との戦闘が続いてるのかもしれないな）

通常の人なら聞き取れない位小さな爆発音だ。

まあ、グフカスタムの防音機能が非常に優れているからまず伊隅大尉には聞こえないだろう。寧ろ聞き取れる俺が人間離れしてるんだろうな。

そんなことを考えていると何かが近付いてくる音が聞こえる。

（う～ん。音から察するとザク系の移動音だね。気付いてくれると助かるのだがな）

だんだんと此方に近付いて来る。どうやって見付けてもらうか考えていると、ザクの移動音が止まる。どうやら気付いた様だ。

「ＢＥＴＡが取り付いたの？！」

「いや、違うだろう。戦車級なら即座に噛み付くだろうが、未だにかじられた音がしないから友軍だろう」

ガタガタと物音がコックピットハッチ付近でする。どうやら開けようとしている様だ。少ししてコックピットハッチが開いて中に太陽の光がさす。　太陽の光が目に眩しい。

「悠斗！大丈夫かい？！」

コックピットハッチの外から聞いたことのある声がする。

「シーマ中佐か！助かった！今出る！伊隅大尉。どうやら助かったぞ」

「はい。そのようですね。出ましょうか」

伊隅大尉がシートから降りてコックピットから外に出る。続いて俺も外に出るとコックピット付近にザク？の手がありその手のひらに乗る。ザクの腕がシーマ中佐が乗っているコックピット付近で止まる。シーマ中佐がコックピットから出てきて出迎えてくれた。回りを見渡すと辺り一面残骸の山になっていた。

「シーマ中佐。ありがとうおかげで助かった」

「ありがとうございます。シーマ中佐のおかけで命びろいをしました。本当にありがとうございます」

「いや、私はただ運良く見付けられただけさ」

照れ臭いのか、やや頬を紅くして素っ気なく答えるシーマ中佐。俺は二人から視線を外しボロボロになった愛機のグフカスタムを見る。グフカスタムの状況は酷いものだった。フェイズシフト装甲がダウンしたため、機体のあちこちが大破している。右腕は無く左腕のシールドは融解しており、ガトリング砲の弾が爆発したのか左手は無くなっていた。左足も無くなっていた。残った右足だけでバランスがとれる訳がなく、ビルにめり込む様に機体が貼り付けになっていた。

（ナノスキン装甲が生きているから最低限の修復がされているが、パーツを総換えするか機体をスクラップにするかのどちらかだな。

済まんな相棒。お前をこんな風にしてしまって）

俺は愛機のグフカスタムに敬礼をする。今まで乗っていた最高の相棒だからこそだ。

「不動閣下」

「悠斗」

二人が声をかけてくる。敬礼を止めて二人に向き合う。

「相棒は後で回収してやるさ。それよりシーマ中佐。現状がどうなっているか教えてくれ」

「分かった。じゃあ一旦私のビッグトレーに戻るよ」

そのままシーマ中佐のザクの手に乗り、シーマ中佐のビッグトレーに帰還するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第五十四話（後書き）

伊隅大尉を悠斗のヒロイン候補にしました。作者が好きなので。後、グフカスタムが大破したが、乗せかえる機体をどうするか考えていないです。

感想などあればどうぞ。

第五十五話（前書き）

やっと出来ました。今回はかなり強引です。では、本文をどうぞ。

第五十五話

バスクｓｉｄｅ

ワシは今猛烈に追い込まれている。先程から交戦を続けているＭＳとか言う兵器に我々の艦隊が大損害を受けているからだ。

「右舷先頭、タイコンデロガ級巡洋艦ユイリン、敵ＭＳの砲撃が直撃！撃沈！」

「左舷同じくタイコンデロガ級巡洋艦ナッシュビル、ＭＳの攻撃を受け轟沈！」

オペレーター達から伝えられる報告で、確実に分かる事は艦隊の被害が確実に増えている事だけで我がアメリカが劣勢に陥っている事を証明していた。

「たかが１機の敵機に何を手間取っている？！！戦術機隊をぶつけろ！！敵地上部隊には砲撃を浴びせろ！主砲発射用意急がせろ！」

「了解しました。ＨＱより戦術機隊各隊へ」

ワシの指示を受け、オペレーターから空母に通信が入り戦術機が発進して行く。

「えぇぇぃ！まだ、敵機は落とせんのか？！」

「駄目です！先程戦術機１個中隊が交戦状態に突入しましたが、既に半数が殺られました！」

「なんだと？！」

「いえ、訂正します！Ｆ－１４トムキャット１２機全滅しました！！早すぎます！交戦から３分経ってません！」

「な、なに！ば、ばかな！１２機のトムキャットが全滅だと！？３分持たずにか？ば、化け物だ」

オペレーターから伝えられた報告は最悪だった。たった１機の敵に１個中隊の戦術機が全滅させられたのだ。しかも３分持たずにだ。死の８分よりも半分以上短いのだ。

「砲撃準備完了しました！」

「よし！！目標は海岸線沿いにいる支援ＭＳだ！撃ち方始めい！」

ウィスコンシンの主砲から砲弾が発射される。
地面に砲弾が着弾して爆発と土煙が立ち込める。　恐らく地上支援ＭＳ位は撃破出来ただろう。

「敵ＭＳ！巡洋艦サチヌワに接近！」

「なに？砲撃を浴びせよ！戦術機を前に出せ！仕留めよ！」

ワシはそのまま指揮を取り続けるのだった。

バスクｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

私は悠斗と伊隅大尉を手に平に乗せて自分のビッグトレーに帰艦した。
格納庫に入ると悠斗の生還を喜ぶ整備兵や補給の為に戻っていたパイロット達から歓声が上がった。悠斗は自分の無事をアピールしたあと、三人でビッグトレーのブリッジに向かって廊下を歩いている。ブリッジの扉が開く。中に入るとコッセルが余り上手くない敬礼で出迎えてくれた。

「悠斗の若旦那！よくぞ御無事で！」

「済まんなコッセル大尉。要らぬ心配をかけたようだな」

「へい。そりゃもう、シーマ様が心配して大変でしたよ」

「コッセル！馬鹿なこと言ってるんじゃないよ！」

悠斗の前で余計な事を言うコッセルを叱責する。　伊隅大尉はコッセルの姿が軍人らしくない事に驚いているのか、ポカーンとしている。まあ、普通初めてコッセルを見たら軍人より海賊かと思うよね。まあ、私や悠斗は慣れたけどね。

「はいはい。分かりましたよシーマ様。所でそちらの嬢ちゃんは誰ですか？」

「ああ。此方の女性は国連軍の伊隅大尉だ」

伊隅が悠斗の脇から前に出る。

「先程紹介がありました、伊隅みちる大尉です。よろしくお願いします」

「おお？！こりゃ失敬！シーマ様の部下のデトローフ・コッセル大尉と言いますわ！シーマ様が出撃した際は代わりに艦の指揮を取っていますわ。よろしく頼みますわ」

そう言ってお互い握手する二人。ガッハハと豪快に笑うコッセルにガチガチに固まる伊隅。まあ、暑苦しいがこれくらい慣れないと私の部下にはなれないね。

「さて、二人の挨拶も済んだ事だしコッセル大尉。　状況の説明を頼む」

「分かりやした！まあ、立ち話も何ですしシーマ様は席に座ってくださいな」

「ああ。分かったよ」

私はブリッジの自分の席に向かう。リリーマルレーンと同じ椅子にしてあるから二人は座れる。私は虎の毛皮の敷いてある右側に座る。悠斗達も入口付近からブリッジの中央に来る。

「伊隅大尉は此方に座ってくださいな」

「あ、はい。すいません」

伊隅はコッセルに案内された席に座る。まあ、ビッグトレーで会議する際に使う椅子なんだけどね。悠斗とコッセルは立ったままだ。

「悠斗は座らないのかい？」

「まあ、立っていても問題無いからね」

「なら、私が立っていますから不動閣下はお座りください」

伊隅が立ち上がり自分の座っていた椅子に座る様に進めてくる。

「いや、伊隅大尉は疲れているだろうから座っていたまえ。俺は立っているから大丈夫さ」

「しかし、いえ。分かりました」

渋々と言った感じで伊隅が席に座る。まあ、悠斗は上官だからね。逆らっても良いことは無いからね。

「おい！そこのお前！」

「え？あ、はい！なんですか？」

「シーマ様と悠斗の若旦那と伊隅大尉に飲み物を出さねえか！！ボサッとしてるんじゃねえ！」

「あ！はい！分かりました！」

「あと、悠斗の若旦那と伊隅大尉には食事を忘れんなよ！」

「分かりました！」

近くに居た兵士が慌ててブリッジを出ていった。　恐らく食堂に行って食事と飲み物を取って来るのだろう。

「すいませんね。今部下を走らせましたので少々お待ちください」

「いや、構わんよ。飲み物が来てから説明を聞こうか」

それから慌てて出ていった兵士が飲み物を持ってくるまで私達は待つのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

コッセル大尉の命令を受けて出ていった兵士が飲み物と食べ物を持ってきたので、それを頂きながらコッセル大尉から現状の報告を受

ける。因みに飲み物は俺とコッセル大尉がブラックコーヒー、シーマ中佐とみちる大尉が紅茶だ。食べ物は俺がホットドッグ、みちる大尉はサンドイッチだ。

「で？現状はどうなっているんだ？」

「はい。悠斗の若旦那がＭＩＡ（戦闘中行方不明）になってから大変でしたよ。まず、国連軍の連中がハイヴの中に突入していきました。それで悠斗の若旦那がＧ弾に捲き込まれたと分かってから、アナベル・ガトー少佐が出撃して国連太平洋艦隊と交戦状態に突入しやした」

「なに！直ぐに戦闘を中止させるんだ！」

まさか俺が気を失ってる間に戦闘を始めていたとわな。グフカスタムのコックピットで聞いた爆発音はガトー少佐の攻撃で被害を受けた船の爆発音だったなんて。まさか行方不明の間に面倒な事になっていたなんてな。

「いや、悠斗の若旦那が声明を出せば止まるでしょうが、デラーズ中将もガトー少佐を止めなかったんで他の部隊も賛同して戦闘に介入した正で、正直若旦那以外誰も止められないんです」

「そうか。ならば急いで戦闘を中止させなきゃな！コッセル大尉。通信をバターン号に繋いでくれ。ホシノ少佐に連絡を取りたい」

「分かりました！おい！通信を繋ぐんだ！」

コッセル大尉が部下に命令して通信を繋ぐ。中央モニターにホシノ少佐が映し出された。

「コッセル大尉。何事ですか？緊急通信を寄越すなんて？」

「ホシノ少佐！俺が用事が有るんじゃなくて、悠斗の若旦那が用事が有るんです！」

「悠斗さんは今行方不明です。それは大尉も知っているはずですが？」

「だから、悠斗の若旦那が生きていたんですよ！ほら、此方にいますから！」

ホシノ少佐のモニターに映るように移動すると、ホシノ少佐が珍しく僅かに驚いた表情をした。

「ゆ、悠斗さん！生きていたんですね！」

「ああ。心配かけたね。俺はこの通り無事だよ。そちらに被害はないか？」

「はい。ありません。生還されたならもっと早く連絡をください。どれだけ皆が心配したと思っているのですか？！ましてや悠斗さんはメビウスの総司令官なんです！立場をお考えください」

珍しくホシノ少佐が怒っている。余り表情には出ていないが語尾が強くなっているから間違いない。

「それについては謝るが、今はそんなことをしている場合じゃないんだ。ホシノ少佐。アメリカ軍の機密通信を傍受したか？」

「はい。G弾が発射された後の通信なら傍受して録音してあります」

「その中に俺の殺害をほのめかす様な記録はあるか？」

「少々お待ちください。調べてみます」

ホシノ少佐がオモイカネと共に傍受した機密通信の記録を解析し始めた。　少ししたらホシノ少佐が解析を終えた様だ。

「はい。悠斗さんの言った通り、ジャマイカン大佐とバスク中将の通信記録の中に悠斗さんが死んだかも知れないことで、喜んでいる部分がありました」

「なら、それを国連に提出して俺を殺害をしようとした罪で二人を逮捕して軍法会議に掛ければ、今行われている戦闘の件を不問に出来るだろうか？」

流石に行方不明の事とはいえ、流石にヤバい気がするしな。いくらハマーン事務総長が頑張ってくれても此方になんならかの影響が来るのは明白だ。なら出来る限りダメージを小さくしなくては。

「いえ。そんなことしなくとも第3師団から送られてきた報告によると、アメリカ軍の部隊が黒い三連星を襲ったそうです。恐らくドムを強奪しようとしたと思われます。また、証拠も残っていますから此方の件を国連で発表すれば、アメリカ政府も文句が言えません。そうすれば此方の活動に支障はでないでしょう。まあ、二人も逮捕しておけばより効果的ですね」

「分かった。じゃあ、通信をオープンチャンネルにしてくれ。即座に停戦命令を出す。コッセル大尉！信号弾での合図も出せ！」

「了解しやした！」

「悠斗さん！通信をオープンチャンネルに繋げます！」

俺は通信がオープンチャンネルになってからマイクを持って停戦命令を出すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

「クソ！接近させてもらえんな！」

敵艦隊の中央に近付くにつれて砲撃や戦術機の攻撃が激しくなる。私は弾幕を掻い潜り遂に敵旗艦戦艦ウィスコンシンの懐に潜り込み遂にブリッジ正面の砲撃出来ない正面に接近した。

「もらった！不動閣下の敵だ！」

ビームバズーカを構えチャージを開始したその時だった。オープンチャンネルが強制的に入ってきた。そして通信が聞こえてきた。

『国連外郭部隊メビウス総司令不動悠斗が命ずる。現在戦闘中の全ての部隊は直ちに停戦せよ。繰り返す』

そう。通信機から聞こえてきた声は行方不明になっていた不動閣下の声だった。

（悠斗閣下はご無事だったのだ！あの、G弾に見事耐えきったのだ！）

私はウィスコンシンの主砲の上に着地して、ビームバズーカをブリッジにロックオンしたまま不動閣下の演説に耳を傾けるのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

バスクｓｉｄｅ

遂に敵ＭＳが私の船の前に現れた。ワシは死を覚悟したその時だった。

なんとオープンチャンネルで不動准将が戦闘停止命令を出したのだ。

敵ＭＳは主砲の上に着地しおった。しかも、ブリッジをロックオンしたままだ。

「ば、馬鹿な！何故あやつが生きている！」

ワシは信じられなかった。よもや我等がアメリカ合衆国が技術の粋を集めて開発した兵器が戦術機と同じ兵器に耐えられるなど、信じられなかった。いや、認めたくなかった。我がアメリカが推し進めるGドクトリンが否定されてしまう可能性があるからだ。

『私はアメリカが投下G弾に捲き込まれたが、なんとか生還した。このG弾投下は明らかに日本帝国に対する内政干渉でありまた、メビウスの総司令である私を殺害する目的が有ったのは明白だ！更にアメリカ合衆国は我がメビウスのMSを秘密利に強奪して、自国の技術に転用しようとした。これは国際条約違反である。よって、アメリカ合衆国海軍所属のバスク・オム中将とジャマイカン・ダニガン大佐の2名を拘束せよ。両名は国連軍事裁判にかける』

「ふざけるな！何処にそんな証拠があるのだ！」

ワシは椅子の肘掛けをおもいっきり拳で叩きつける。ワシは内心焦っていた。

（まさか、あの一件がメビウスにバレているとでも言うのか！？我々のジャミングや証拠隠滅は完璧のはずだ！）

『皆も信じられないだろうが、これは真実であり此方には証拠もある。この映像だ』

すると大型モニターに我が合衆国の特殊部隊とメビウスのドムが戦闘している映像が映し出された。しかも音声付きでだ。

（馬鹿な！何故だ！何故あのジャミングフィールドの中で映像が撮影できるのだ？！我がアメリカ軍以外の機体には記録が残らない様にする最新技術が使用されたはず！）

ワシは自分の司令席で呆然としていると、ブリッジのドアが開いて中に完全武装した兵士達と一人の艦長が入ってきた。兵士達全員突撃銃を構えている。

「アンダーセン艦長か。貴様！自分が何をしているのか分かっているのか！」

「ええ。メビウスの不動准将の命令に従って貴方を拘束させていただきます」

帽子をかぶり直すアンダーセン艦長。自信の空母が撃沈されたので回収してやったのだ。それを仇で返しおった。

「えええぃ！貴様らそれでもアメリカ合衆国の軍人か！」

「シー・ゴブリン。バスク中将を拘束せよ。バスク中将、貴方は然るべき場所で裁きを受けてください」

「了解。バスク中将。御同行願います」

「クソ！アンダーセン！覚えていろ！」

ワシは海兵隊に椅子から引きずり下ろされブリッジから出され拘束されるのだった。

バスクｓｉｄｅｏｕｔ

アンダーセンｓｉｄｅ

バスク中将を海兵隊が拘束する。多少暴れたがそのまま海兵隊に連れて行かれた。もう１つ私にはやらなければならない事がある。

「オペレーター。通信回線を開いてくれ」

「・・・・・・！了解しました！」

バスク中将が連れていかれるのを見ていて唖然としていたオペレーターに指示を出す。海兵隊の隊員の一人が近付いてきた。

「アンダーセン少将。ジャマイカン大佐の拘束も完了したそうです」

「そうか。分かった。ありがとう」

「通信回線繋がりました！」

オペレーターから回線が繋がった事を知らされ、私はマイクを持つ。

「此方は栄えあるアメリカ合衆国海軍所属、ニコラス・Ａ・アンダーセン少将です。先程、不動准将が仰った指示に従いバスク中将とジャマイカン大佐の２名を拘束致しました」

オープンチャンネルで全ての兵士、部隊に聞こえるように発信する。

「了解した。アンダーセン少将。貴殿の働きに感謝する」

「どうもありがとうございます。不動准将。また、此方は先に命令された停戦命令に従います。これ以上人類同士で血を流す必要は有りませんからな」

「了解しました。メビウスもこれ以上戦闘を続行するつもりはない。アンダーセン少将。貴殿の英決に感謝する。聞いての通りだ。メビウス総員は直ちに所属の部隊に撤退せよ」

不動准将の命令が全域に発令される。ウィスコンシンの主砲の上に居たＭＳも離脱して行った。私はウィスコンシンのブリッジで、海に投げ出された船員やベイルアウトしたパイロット達の救助に当たるように指示を出すのだった。

アンダーセンｓｉｄｅｏｕｔ

追記

明星作戦で使用されたG弾の影響は世界中に波及した。まず、G弾を投下された日本帝国では、先の横浜ハイヴ建設の際に一方的に安全保障条約を破棄したアメリカ合衆国に対する国民感情がただでさえ悪化していたのに、G弾と言う新兵器を無通告で使用されたため

国民感情はアメリカに対して敵意の域にまで達しってしまった。また、G弾の残した影響は酷く原因不明の植生異常や謎の重力異常などの副次被害が発生した事などから、G弾驚異論を生み出してしまうこととなった。

また、アメリカ政府は新たに発見したG弾の効果によるメリットを大々的に宣伝する事で日本帝国が主張するデメリットを封殺してG弾攻撃の成功を世界に印象付けようとしたが、その目論見はメビウスによって完全に崩される。まず、G弾の威力と有効範囲が理論値より大幅に下回っていた事実を隠匿するも、メビウスに暴露される事となる。事実、不動准将が乗っていたグフカスタムがG弾に耐えきったからだ。　また、メビウスのMSを強奪しようとした事から世界中から非難を浴びる事となった。また、G弾がBETA由来技術に依存している未知の兵器という側面が露呈してしまい、以後、各国はアメリカが掲げるG弾戦略の是非を巡って激しい討論を繰り返す事となる。

また、ハマーン事務総長が全世界を震撼させる出来事を国連総会の場で発表した。そう、1月に行われたメビウスによる月攻略作戦である。未だ地球の国々がハイヴをろくに攻略出来ていないのにメビウスは既に月を奪還したと表明したのだ。
これを受けて、ハマーン事務総長は不動准将の昇進を提案。アメリカ合衆国は反対こそするも自国がしたことを言及されると何も言わず、決議を取るとアメリカと親アメリカ国は議決を欠席するも拒否権は使用しなかった。かくして不動准将の昇進は国連総会で認められ後日、本人に伝えられる事となった。
また、バスク・オム中将てジャマイカン・ダニガン大佐の2名は軍事裁判に掛けられ、2名とも極刑が下され即日銃殺刑になった。

国連総会でG弾を使用された日本帝国の首相の榊是近首相は演説で

こう言い放った。

『G弾がもたらした最大の被害は、人類の結束を二分したことである』

様々な思惑が入り交じった明星作戦は勝利こそしたが通常兵器でBETAに勝てる可能性があるのはメビウスだけと印象付ける形となった。

またG弾驚異論派の声を利用する形で、オルタネイティヴ第4計画の中心地を横浜ハイヴ跡地に建設を開始することとなった。かくして人類は二つに別れてしまった。

この先地球の命運はどうなるか分からない。

ただ、横浜ハイヴにあるシリンダーに納められた脳味噌が青白く光る。

「タ・・・・ケ・・・・・チ・・ャ・・・に・・ア・・・イ・・・・た・・・・い」

それは誰にも聞こえない何かの叫びなのか？

その名を持つものは果たして？何を思うのか！？

明星作戦編終了

第五十五話（後書き）

強引な終わらせ方で申し訳ありません。こうでもしないと終わらせ方が思いつかなかったので。

機体の意見は現在イフリートが一番多いです。

感想などあればどうぞ。　でも、批判は優しくお願いします。

第五十六話（前書き）

なんか出来たので更新しました。では、本文をどうぞ。

第五十六話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年８月１５日
地球秘密基地執務室

明星作戦が終わってから１週間がたった。
やはりＧ弾がもたらした影響は大きかった。
Ｇ弾推進派とＧ弾驚異派の大きな溝が世界に出来てしまった。
南北アメリカ大陸（アラスカはソ連の借用地のため除く）の国々はＧ弾でのＢＥＴＡ全滅こそが地球奪還に最も効果的であると主張する様になった。
逆に欧州やソ連、日本帝国等の前線国家の国々はＧ弾に頼らない方法（オルタネイティヴ第４計画）によるＢＥＴＡ全滅を行うべきだと主張して、互いに衝突する事になってしまった。

（やれやれ。原作通りに進めたつもりが、いつの間にかずれてしまったな）

俺が歴史に介入した正なのか原作と少し違う点が出てきたが、余りにかけ離れたものではないので想定の範囲内かな。

（まあ、伊隅大尉と仲良く慣れただけ良いとするか。しかし、鳴海と平が生き残ったからまた原作から離れたな。まあ、死ぬ運命の二

人を生かせたことも良かったけどな。ただ、代償がな）

鳴海と平と伊隅の３人を生かすために俺は愛機のグフカスタムを失ってしまった。相棒は明星作戦終了後回収しておいた。整備主任のアストナージさんに見てもらったんだが、彼曰く

「修理するより、新型のＭＳに乗り換えた方がいいですよ。直す方がコストが掛かりますから。しかも、不動閣下の機体は特別ですから直すらな整備班の連中が死んでしまいますよ」

との事だ。流石に整備班をこれ以上忙しくさせる訳にはいかない。ただでさえ明星作戦で使用されたＭＳの大半がオーバーホールに入っているんだから、これ以上仕事を増やす訳にはいかない。

（グフカスタムの修理は諦めたからな。結局スクラップにしてしまった）

愛機を失われたが命が助かっただけ良かったと思う。しかし、次に乗る機体も考えなければならないのが大変だ。だってこんなこと考えながら現実逃避しているんだぜ。

「悠斗さん。早く手を動かしてください。今日中に書類を終わらせますから」

「はい。ホシノ少佐。直ぐに取りかかります」

そう。俺は机の上にある大量の書類と格闘している最中だからだ。

「不動閣下。コーヒーです」

「ありがとうイルマ中尉」

イルマ中尉が俺とホシノ少佐に飲み物を出してくれる。まあ、書類仕事は枚数こそ多いけど明星作戦でアメリカが行った事にたいする報告書ばかりなので、あんまり面倒な物ではない。既にホシノ少佐が八割方終わらせているからこのまま行けば、午前中には方がつくだろう。

「やれやれ。書類仕事はめんどくさいな」

「諦めてください。本来なら不動閣下にはお休みして頂きたいのですが、書類がそれを許してくれませんから」

ホシノ少佐が高速で書類を終わらせていく。
俺も嫌々ながら、次の書類に取りかかるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

私は今不動閣下とイルマ中尉の３人で書類仕事をしています。

明星作戦の有った日から1週間がたちました。
悠斗さんはG弾の爆発に捲き込まれたと知った時は胸が張り裂けそうな程痛くなりました。
やはり、好きになった人を失う可能性があるのは嫌です。
悠斗さんは無事に生きて帰ってきた時は本当に嬉しかったです。
今も書類と格闘しています。キリッとしたお顔は格好良いです。

（他の人達に負けない為にも、そろそろ例の作戦を決行した方が良いかも知れません）
私は書類を片付けながらそんなことを考えるのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

悠斗が生きて帰ってきてから1週間がたったわ。　G弾に捲き込まれたって知った時は私は体から力が抜けていくのが分かった。あの時再確認させられた。私が悠斗を好きだと言うことをね。生きてビックトレーに帰ってきた時は思わず抱き付いて悠斗の頬にキスしゃった。悠斗は笑いながら頭を撫でてくれたけど、あの時は他の女性達は羨ましそうな眼で私を見ていたわね。明星作戦が終わってから基地に帰還して4日しかたっていないけど、悠斗は書類仕事に終われているわ。私はコーヒーを入れたり書類を纏めたりしている。

（悠斗。生きてて良かった。でも、まだ私の気持ちに気付いてくれないのね。ヤッパリもっと積極的に行った方が良いのかしら？シーマさんと相談した方が良いかも知れないわ！）

私は書類に集中する悠斗の横顔を見ながらそんなことを考えるのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

「終わっっっった！」

長時間に渡る書類仕事が終了した。俺は体をおもいっきり伸ばす。体のあちこちが固くなっていた。

「お疲れ様です。漸く終わりました」

「ああ。本当二人ともありがとう。おかげでホシノ少佐が言った通り午前中に書類が終わったよ」

いや、ホシノ少佐が俺にしか採決取れない書類を優先的に廻してホ

シノ少佐の権限で方のつく書類をやってくれたおかげで大分楽になったからな。

「悠斗さんはこれかどうしますか？」

「俺はまだ、やることが有るから二人は休んでくれて構わないよ」

「分かりました。では、これで失礼します（では、例の作戦の準備をしなくてわ）」

ホシノ少佐が部屋から出ていった。俺はイルマ中尉に書類を渡しデラーズ閣下に届ける様に頼んだ。イルマ中尉も書類を持って部屋から退出したので執務室には俺一人になった。俺は机の引き出しから諜報部より届けられた機密書類を取り出して眼を通す。

（やっぱり、今回はトカゲの尻尾切りで難を逃れたか。流石に大国だな闇は深いな。こう言った場合の態様が速かったな。まあ、支持率が大幅に下落したけどまだ止める程に迄はいかないか。しかし、再来年ある大統領選挙は与党は勝てる可能性が低くなったな。代わりに野党から出てくるビンセント・ハーリング上議会議員が大統領候補のトップにたったか。彼はG弾に対して余り好ましいと感じていない人か。なら、メビウスとの関係改善ができるかも知れないな）

そんなことを考えながら書類に眼を通し終わると書類を封筒に入れて机の引き出しにしまう。

（まあ、なんにせよまずは自分の機体を考えるか）

パソコンを起動させ、あるファイルを開く。

パソコンのモニターに倉庫に置いてある魔改造済みＭＳが表示され

た。
因みに今映して出されている機体はこうなっている。

ジムストライカー

ブルーディスティニー1号機

イフリート・ナハト改

イフリート改

ケンプファー

ゲルググ

ギャン

シナンジュ

サザビー

ザク？

ガンダムエピオン

トールギス？

ガンダムF90V

となっている。まあ、他にもたくさんあるがたまたまリストアップ

したこう出てきた。

（さて、何に乗るかね。　全部の機体がグフカスタムと同様に魔改造されているからね。全機光の翼が出来るな。まあ、グフカスタムの時は使わなかったけ）

自身のミスから失った愛機を思い出す。一年余りしか共に戦えなかったが最高の機体であることに間違いなかった。

（感傷に浸っている場合ではないな。1週間後にはアメリカに行かなければならないんだからな。今の内に次の機体を考えなければな）

ハマーン事務総長からの命令で国連本部ビルに行くことになっている。
恐らく軍法会議に俺がかけられるのだろう。

（まあ、軍法会議にかけられたら暫くはメビウスの活動を制約されるかな?まあ、行ってみれば分かるからな。それより機体を考えよう）

マウスを操作して機体を選択する。モニターに機体のスペック表と武装や特徴が表示された。
今映し出されたのはジムストライカーだ。

（え～と、一年戦争末期に開発された局地的かつ試験的に開発された機体で有ると。地球連邦軍の教導隊メネシスで運用された機体か。確か、漫画だと俺ら連邦〇連隊に登場した主人公機か。機体の特長は重装甲のヴェラブル・アーマーと高出力のスラスターによる機動力。また、メイン武装のツインビームスピアーの破壊力は絶大であらゆる敵を切り伏せる事ができるか。ただ、反面格闘に特化し過ぎ

たため近接戦闘では凄まじい機体になるが、遠距離装備が無いため光線級等のＢＥＴＡとは相性が悪いか）

ジムストライカーのスペック表等を見るが、愛機として使うには少々厳しい物がある。

「う～ん。良い機体何だけど俺が乗るより違う他のパイロットが乗った方が良いな。このまま倉庫に閉まっておこう」

マウスを操作して次の機体を選択する。次の機体はブルーディスティニー１号機だ。

（まあ、スペック表を見なくても分かるからな。こいつはプロミネンス計画の時に使うつもりだから倉庫に閉まって置かなきゃ）

マウスを操作して次の機体を選択する。次に表示されたのはイフリート・ナハト改だ。

（まあ、グフとドムの中間機だからな。インビジブル・ナイツが使用した機体だな。コイツの特長は格闘特化型の機体で有りながら優れたジャミング機能を搭載した機体であることだ。しかもこのイフリート・ナハト改は俺が昔造った時に、武装なんかが追加されてる機体だな。具体的には脚部にイフリート改と同じ８連装ミサイルポッドが装備されているのと、右腕にグフカスタムと同じヒートロッドが装備してあるんだよな）

確か、グフカスタムの予備機として造った機体だがら付いている強化パーツも同じ様にしてあるから直ぐに点検さえすれば使える機体だ。

（そうだな。コイツを使おう！強化パーツはグフカスタムの物と同じにしてあるから問題無いし、魔改造もしてある機体だしな。追加でミラージュココロイドも付けて整備させれば直ぐに使えるしな）

俺は机に備え付けてある電話の受話器を取り、短縮ダイアルを押して電話をかける。３コール程して相手が電話に出た。

「はい。此方整備班主任アストナージです」

「アストナージさんか。俺だ不動准将だ」

「どうしたんですか？こんな時間に連絡を寄越すなんて？」

「ああ。俺の愛機のグフカスタムが大破して使用不可能になっただろ。だから新たに使う機体を決めたから倉庫から出して整備して欲しいんだ」

「本当ですか！！それで何を使うんですか？！」

受話器越しに興奮するアストナージさん。彼は生粋のメカニックマンだから、新しい機体に触れるのが楽しみなのだろう。

「魔改造済み倉庫に保管してある、イフリート・ナハト改だ」

「え？あれですか！あれを使うんですか！？」

受話器越しに驚いた声を上げるアストナージさん。そんなに不思議か？

「そんなに驚く事か？」

「いや、今まで予備機として置いて有っただけですから、てっきり使わない機体だと思ってました」

確かにグフカスタムが有った頃は全く乗らなかったからな。アストナージさんが驚くのも無理はないか。

「まあ、グフとドムの中間機だかな。格闘特化型の機体だから俺向けの機体だと思ってな」

「確かに不動准将は格闘戦に比重を置いてますからね。分かりました。倉庫から出して整備しておきます」

「ああ。頼んだ」

そう言って電話を切ろうとするとアストナージさんが訪ねてきた。

「そう言えば予備機はどうしますか？イフリート・ナハト改がメインになるなら予備の二番機を決めないと駄目ですよ」

「予備機か。全く考えていなかったな」

寧ろメインにする機体しか考えていなかったしな。

「なら、ケンプファーなんかどうですか？強襲用の機体ですが不動准将なら余裕で乗りこなせますよ」

アストナージさんが提案　してくれたケンプファーについて考えてみる。

強襲用に開発された機体では有るが優れた性能を持つ機体で高出力

のスラスターによる優れた推進力と実弾武装メインの機体だな。

（確かに倉庫に有るから二番機として使うか。個人的にはかなり好きな機体だしな。色は白くしてもらうか）

「そうだな。アストナージさんが言った通り、二番機はケンプファーにするか。済まないが色は白にしてくれ。イフリート・ナハト改は原色の青と紫のままで良いかな」

「分かりました。なら直ぐに取りかかります！」

「ああ。頼んだ」

受話器を置き電話を切る。マウスを操作して生産ラインを開く。

（次の主力ＭＳのゲルググシリーズの生産を始めるか。強化パーツはフェイズシフト装甲と無限エネルギー回復システムと無限弾薬回復システムとＩフィールド（レーザーだって防げます）で良いな。あと、無限推進材回復システムも忘れちゃいけないな）

パソコンを操作して生産ラインを選択する。

モニターに生産数が表示される。

ゲルググ、日産３０機、生産数３００機。

ゲルググＪ（イェーガー）　日産２０機、生産数１００機。

ゲルググＭ（マリーネ）

日産４０機、生産数４００機。

高機動型ゲルググ
日産１０機、生産数１００機。
それらを確認すると、パソコンの電源を落として昼食を食べるために執務室をあとにするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

アストナージｓｉｄｅ

俺は今、不動閣下からの電話による指示を受けて整備班の中で余裕がある奴等と共に魔改造済みＭＳ格納倉庫からＭＳを運び出してハンガーに格納している最中だ。

「イフリート・ナハト改、ハンガーに収容しました！」

「良し！手の空いている奴等から直ぐに整備に取りかかれ！次の機体が直ぐに来るからな！」

「了解！」×多数

整備兵達が直ぐにイフリート・ナハト改点検と整備を開始する。
するとケンプファーが歩いてきて、イフリート・ナハト改の後ろに

ある空きハンガーに収容された。

「ケンプファーも収容完了しました！」

「ケンプファーは点検と整備が終わったら、塗装しなきゃならないから素早くやるぞ！」

「了解！」×多数

俺は新たにハンガーに鎮座したケンプファーの整備を始める。

（楽しみにしていて下さいよ。不動准将！最高のコンディションにして見せますから！）

整備班の連中に指示を出しながらケンプファーの整備に当たるのだった。

アストナージｓｉｄｅｏｕｔ

第五十六話（後書き）

読者の皆様からのご意見を元に今回悠斗が乗る機体が決まりました。
本当にご意見ありがとうございました。
感想などあればどうぞ。

外伝その１（前書き）

なんとなく酒の勢いで作りました。若干の誤字があるかもしれません。
本編とは何ら関係が有りませんので、ご了承ください。では、本文をどうぞ。

外伝その1

不動悠斗が違う世界に行ったらシリーズ。（転生かトリップです）

その1ネギま編

「悠斗よ。済まないけど、ちょっと他の世界を助けに行ってくれないかい？」

「まあ、良いけど」

「じゃあ、頼んだ」

「ちょっと待て神様！ノリが軽いな！どこの世界に行くんだよ！」

多目的訓練室で修行をしていたら行きなり辺りが真っ白になったと思ったら、神様が現れて違う世界に行ってくれだとさ。

「たしか、焼き鳥の世界だな」

俺が抗議しようとした瞬間足元が無くなりそのまま落とし穴に落ちて行った。

こんな軽いノリでネギまの世界に行きます。
因みに悠斗の強さはチート＋バグです。服装は軍服です（国連軍のBDUです）

落とし穴の先に光が見えてきた。
俺は重力に従い落下すると其所には見たこともないデカイ樹が生えていた。しかも、満月が出ている夜だ。しばくしてデカイ樹が生えた場所の広場に着地した。

「何だこの木は？随分デカイ樹だな。樹齢何年なんだ？」

何気なく目の前の樹を見ていると此方に向かってくる気配を感じた。

（デカイ樹だな。屋久島の杉とどっちがデカイだろうな）

そんなことを考えていると俺の背後まで来た。

「クックク。侵入者よ。今宵はついていなかった様だな。私が本気で戦える日に来るなんてな」

「マスター。彼方の方は気付いていないようですが？」

「ええぃぃぃ！いらん事を言うなボケロボが！」

金髪幼女とロボ娘との邂逅。そして戦闘。

「え～と、お嬢ちゃん。こんな夜更けに夜遊びなんかしちゃ駄目だよ。早くお家に帰りな」

「貴様！よくもこの私を子供扱いしたな！許さん！殺す！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！魔法の射手！」

黒いントを羽織った幼女から光の塊が発射される。ドドドンと俺に命中する。辺りに煙が発生した。

「ハッハハ！見たか！私を子供扱いするからこうなるんだ！」

辺りに幼女の笑い声が響く。だんだん煙が晴れてくる。

「マスター！相手は生きています！」

「なに?！馬鹿な事を言うな茶々丸。あれをくらって立っているわけ」

煙が晴れる。そこには先程となんなら変わることのない姿で立っている男がいた。

「たく。なんだいきなり?まあ、そっちがその気なら戦わざるを得んようだな」

「馬鹿な?何故無傷なんだ?魔法障壁か！?」

「魔法障壁?何を言ってるんだ?」

「貴様！とぼけるきか！ならば塵１つ残さずに消滅させてやろう！
リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来たれ氷精、闇の精！！闇
を従え吹雪け常夜の氷雪、闇の吹雪！」

私の手から闇と氷を纏った魔法が放たれる。侵入者に向かって一直
線に進む。

「む！」

よく見ると侵入者も何かの構えをしていた。
次の瞬間侵入者から想像出来ない程の闘気が放たれる。私は直感的
に感じた。

（この侵入者は私より強い！）

そして侵入者が何か言い始めた

「流派東方不敗流、最終奥義！石破天驚拳！！」

侵入者から放たれた気弾は私の闇の吹雪を飲み込んで私に直撃した。
そして私はそこで意識を失った。

こんな感じで金髪幼女を返り討ちにする。
その後幼女が目覚めるまで茶々丸と話をする。仲良くなる。茶々丸
からこの世界が俺の居た世界と違うことが分かる。
幼女起きる→自己紹介→学園長の所に行く流れになる。

その２

学園長室にて。

「爺、入るぞ」

「フォ！なんじゃいエヴァよ？こんな時間に？警備の仕事はどうしたんじゃ？」

「失礼します学園長」

「失礼する」

金髪幼女は頭の長い髭を生やした爺さんの問に答えずに来客用のソファーに座る。取り敢えず室内に入る俺と茶々丸。

「茶々丸。この世界では妖怪が学園を経営しているのか？」

「はい。悠斗さん。残念な事に妖怪が学園を経営しております」

「ワシ！妖怪じゃない！人間（ヒューマン）、人間（ヒューマン）だから！」

「まあ、どっちでも良いけどな。言葉が通じるから」

ＢＥＴＡと戦ってた悠斗からすれば言葉が通じることが分かれば、どんな生き物でも余り気にしません。その後、学園長に事情を説明する。

その3

世界樹広場に移動して腕試しをさせられる。

「じゃあ高畑君。相手をよろしくな」

「分かりました。それじゃあよろしく頼むよ。僕はタカミチ・T・高畑。タカミチて呼んでくれて構わないよ」

「不動悠斗だ。よろしく高畑さん」

やれやれと言った感じて苦笑いする高畑さん。互いに間合いを取る。凡そ五メートル程離れて向かい合う。

「じゃあ行くよ」

ポケットに手を入れたまま高畑さんが動く。

「どうぞ」

俺は体を僅にずらす。最初に立っていた場所を何かが通過する。

「え?」

「フォ!」

「フフ。やはりな」

何故か全員が驚く。

金髪幼女だけが何かを確信していた。

「まさか、居合い拳を初見で避けるなんて！」

「居合い拳？まあ、ポケットから手を出しているのなら欠伸をしながらでも見えるぞ」

「クッ！これは少し本気を出さないとヤバイかな！」

先程より速く数も増えて居合い拳が放たれる。

俺はただその場から体をずらしたりしながら回避に徹する。その攻防が5分ほど続く。

「やはり悠斗は強いな」

「マスターどう言う事ですか？」

「まあ、茶々丸には分からんか？悠斗をよく見てみろ」

「悠斗さんの勇姿なら超高性能カメラで録画しておりますから、ご安心ください」

「違う！そっちじゃない！まったく！何故そうなる？そして後で見せろ」

「分かりました。お任せください。余す事なく録画して見せます！」

何故か全然戦いと関係無い方向に目覚めた茶々丸。しかも主人も否

定しつつも見たいそうだ。

「まさか、回避に専念するだけじゃなく軸足を固定したまま避けるなんて。自信無くすな～」

「俺の師匠との組手の時はこんな風に制限を掛けながら修行したからな。癖でついついしてしまっただけだ」

「は？」

「へ？」

「フォ？」

「凄いですよ悠斗さん！」

「いや、茶々丸。そうでも無いぞ。師匠は更に強かったからな。俺などまだまだだよ」

3人が呆気に取られている中、茶々丸とのんびり話す。

「は？！馬鹿か貴様？！普通に癖とかあり得ないだろうが！！」

「いや、今俺が証明したからあり得るな」

「お前は子供か！！！！」

「幼女には言われたくない」

「だから私はお前より年上だぁぁぁぁぁ！！」

金髪幼女絶叫。悠斗は自己紹介されたが未だに幼女を年上と信じていない。賞金首に関しては気にしていない。

「く、癖で制限を付けているのに避けまくるなんて・・・でも、次は当てさせてもらうよ！」

高畑さんが居合い拳を放つ。狙いは俺の動かしていない軸足だ。

「まあ、当たるか」

俺の動かしていない軸足に高畑さんの放った居合い拳がドンと命中する。　全くダメージを受けなかった。

「え？まさか、ノーダメージ？」

「ああ。全く痛くも痒くもないぞ」

「あ～タカミチ。悠斗は私の魔法の射手を数本纏めて受けたが、全く効いていなかったから生半可な攻撃は効かないぞ」

「フォ！今日のエヴァは最も状態が良い日なのにか？信じられんわ」

「まあ、普通なら信じられないだろうが事実だ」

「ああ。あれはエヴァが悪いからな。先に手を出しのはエヴァだからな」

「悠斗が私を子供扱いしたからだろうが！」

「幼女を子供扱いするのが、何処が悪い？」

「全てにおいて悪いわ！」

「う、うん。そろそろ良いかな？」

なから空気にされていた高畑さん。咳払いして話を進める。

「ああ。済まない。戦いの最中だったな」

「エヴァの忠告も受けたから、僕は本気で行かせてもらうよ！」

高畑さんが両手を開いて何かを始める。腕が光始めた。

「左腕に魔力。右腕に気」

高畑さんが何か言いながら腕を胸元まで上げる。

「合成」

高畑さんを中心に衝撃波が走り、地面に敷かれた石畳を揺らす。高畑さんの胸元で何かが凝縮されていく。

「くらってもらいます！

豪殺居合い拳！！」

高畑さんから凝縮された気?が放たれる。放たれた気?は地面を軋ませながら俺に向かって直進してくる。そして命中した。辺りに土埃が立ち込める。

「フォ！タカミチ君。少々やりすぎじゃなかろうか？」

「さて、あれをくらって果たして立っているか？」

「マスター。計算してみましたが、１００％立っていると思われます」

３人が口々に感想を放つ。土埃が晴れてくるとそこにわ。

「まさか、無傷で立っているなんて」

そう。先程と何ら変わることのない姿で立っていたのだ。着ている服にすら傷がない。

「まあ、今のは少々驚いたな。まさか、あれほどの技を隠していたなんてな」

「ハッハハ！僕の切り札が全く通用しないなんて。本当に強いんですね」

「なに。先程の高畑さんの切り札に対して敬意を表して奥義で返させてもらう」

「分かりました。全力で受け止めてみせます！」

「行くぞ！流派東方不敗流、奥義！超級覇王！電・影・弾ぁぁぁん！」

中心に悠斗の顔だけが映し出され、高速で光の弾丸になりタカミチを包んで行く。悠斗が通りすぎたあと光がタカミチを包んでいた。

「爆発！」

タカミチを包んでいた光が爆発する。爆発の衝撃波が辺り一面に走り、石畳を吹き飛ばし土埃を発生させる。

「ゲッホ、ゲッホ。全く。もう少し手加減出来んのか？」

「マスター、ご無事ですか？」

「凄まじい力だのう～。タカミチ君は無事かの～」

辺りを覆っていた土埃が晴れてくるとそこには、タカミチが地面に平伏している光景が目に飛び込んできたのだった。

タカミチと手合わせ。悠斗の余裕勝ちで終わりです。このあと、昼は広域指導員、夜は警備員の仕事をすることになります。因みに住む家はエヴァさん家のログハウスです。

こんな感じで外伝を終わります。

外伝その1（後書き）

なんとなく、本編と関係無いのを書きたくなったから書いてしまった。

まあ、反省も後悔もしない（多分、酒が抜けたら後悔するだろうな）

てか、連日投稿じゃないかな？

感想などあればどうぞ。

第五十七話（前書き）

連日投稿～。何故か出来ました。ご都合主義です。では、本文をどうぞ。

第五十七話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年８月２２日
アメリカ合衆国ニューヨーク国連本部ビル

秘密基地からガルダ級大型空母に乗ってアナハイム・エレクトロニクス社の北米支社の実験基地に入りアメリカ合衆国入りして、陸路でニューヨーク国連本部ビルに来た。　今日わざわざ国連本部に来たのはハマーン事務総長から出頭命令が有ったからだ。
国連本部ビルの中に入り　エレベーターに乗りハマーン事務総長のいる事務総長室に向かう。暫く長い廊下を歩くと事務総長室とプレートが付けたれたドアの前に着いた。
コンコン・コンコンとノックを２回に分け、合計４回のノックをする。

「開いているぞ。入って構わん」

中から返事が返ってくる。俺はドアノブを回して中に入る。

「失礼します」

中に入りドアを閉める。そのまま一礼してハマーン事務総長の座っている机の前で止まる。

「国連外郭部隊メビウス所属、不動悠斗准将出頭しました！」

「ご苦労だったな。わざわざお前を国連本部ビルまで呼びつけてしまってな」

「いえ。問題ありません。それで、本日はどのようなご用件で？」

流石に軍法会議って分かっているけど、一応聞いておかないとな。最悪1日以上かかる事がざらにあるからだ。

「ああ、そうだな。悠斗には伝えていなかったな。ゴホン！不動悠斗准将。月ハイヴ攻略及び奪還作戦、本当によくやってくれたな。国連軍事委員会は先の作戦の戦果を考慮して、諸君に昇進を命ずる」

「は！ありがたきお言葉です！」

ハマーン事務総長から突然昇進を伝えられる。
即座に敬礼しつつ内心俺は焦っていた。

（あれ？軍法会議じゃないのか？なんで昇進なんだ？いや、確かに月は奪還したけどその件を差し引いても、明星作戦の件で軍法会議になるんじゃないのか？訳が分からない）

俺が戸惑っていると、ハマーン事務総長がしてやったりの表情を浮かべていた。

「フフフ。不思議そうだな。まあ、悠斗が戸惑うのも無理はない。

普通に考えたら軍法会議に出廷すると考えるのが当たり前だからな」

「なら、何故昇進するのですか？」

「なに、メビウスが月を奪還した事はマスコミを通じて世界中に公表された。
また、国連総会でも悠斗の昇進を議決した結果、　棄権こそ有ったが棄権した国以外は満場一致で可決されたからな。
今やメビウスは人類の希望なのだよ」

「確かに月は奪還しましたが、地球上のハイヴはまだ攻略していませんから　、人類の希望と言われても大袈裟なのではないですか？」

月は奪還したが、未だ地球上のハイヴは健在であり、人類がまともに攻略出来たハイヴは明星作戦で攻略した横浜ハイヴだけだ。それも、G弾を使用して漸く勝てた辛勝だけだ。

「そうでもないさ。今人類は敗北を重ねて日々戦線を後退させている。
そんな中でメビウスの月奪還は人類にとって、夢物語と言われ続けた月の奪還を現実に成し遂げたのだ。
それを希望と言わずになんと言うのだ？」

「・・・はあ。分かりました。まあ、人類の希望になれるか分かりませんが、自分に出来ることを最大限頑張っていきます。それで、昇進した階級はどうなるのですか？」

人類の希望は香月博士が成るべきなんじゃないのか？彼女は傷つき手を汚しながら高潔を保ち、人類の為に頑張っているんだし。
俺はただ、ＢＥＴＡを地球から排除して地球を救いたいだけなんだ

けどな。俺がそんなことを考えていると、ハマーン事務総長が机の引き出しからなにやら小箱を取り出し、その小箱を持って俺の前に来た。小箱を開くと中には階級章と勲章が入っていた。ハマーン事務総長はそれを取り出し、俺の軍服の左胸に付ける。

「不動悠斗准将を3階級特進させ、不動悠斗大将に任命する！」

「は！ありがとうございます」

「その地位に見合う活躍を期待する。確りと頼むぞ不動大将」

ハマーン事務総長に敬礼する。まさか自分が軍の最高階級にまで昇進するとは思わなかった。

（階級が上がった以上、これからは更に頑張らなくちゃな）

「さて、形式上の昇進式は終わりだ。流石に立ったまま話すのも何だ、此方で話そうか」

俺が内心で決意を新たにしていると、ハマーン事務総長に来客用のソファーに案内される。
俺は入口に近い下座のソファーに腰掛ける。

「悠斗はブラックで良かったか？」

「ええ。構いません。ありがとうございます」

テーブルにコーヒーが出された。ハマーン事務総長も向かい側に座りコーヒーを口にしていた。
俺も出されたブラックコーヒーを口にする。

ほどよい苦味が口の中に拡がる。

「さて悠斗よ。貴様にはこれから幾つか訪ねたい事がある」

「はい。分かりました。ですが、その前に質問しても良いですか？」

「ああ。構わない」

「まず聞きたいのですが、俺の軍法会議の件はどうなったのですか？」

そう。今回の出頭命令を考えるとただ昇進させる為にわざわざ国連に出頭させる必要はないはずだ。それこそ、口頭か書類による簡易な手続きで済むはずだ。なら、俺が行方不明中に起きた戦闘による責任追求があるはずだ。

「ああ。悠斗には言ってなかったな。アナベル・ガトー少佐が起こした件は今回は不問とするそうだ」

「不問ですか？理由を教えてもらえますか？」

「なに、どこぞの大国は不動大将を処罰するべきと訴えたが、他の安保理理事国が反対の意思を表明してな、それだけなら不問にはならなかったのだがメビウスに失った艦艇と戦術機を賠償させる事で、安保理理事国と米国の落とし所にしたのだ」

「え？」

ハマーン事務総長から驚愕の事実を突き付けられた。余りの衝撃に間抜けな返事をしてしまった俺は悪くないはずだ。

「なんだ？その想定外と言った顔は？まさか、おとがめ無しだと思っていたのか？」

「いえ、違います。てっきりメビウスが暫くの間活動を禁止されるか、俺の降格処分が来ると思っていたので」

「それこそ有り得んな。今メビウスを失えばG弾反対派が窮地にたたされるからな。そこら辺はかなり駆け引きをしたが大丈夫だ。たが、損失を埋めるのは容易ではないぞ」

確かに損失を埋めるのは容易ではない。巡洋艦にせよ戦術機せよ、途方のない資源と金がかかるのだから。

「因みにどのくらいの数ですか？」

「巡洋艦が１５隻。戦術機が７２機だ」

「分かりました。米国に引き渡せばよろしいのですね？」

「そうだ。だが、大丈夫なのか？」

「まあ、傘下企業を使いますよ」

北米にあるアナハイム社とモルゲンレーテ社の工場を使えば、どちらも2週間で納品出来るだろう。

（まあ、2社に出る赤字は全く使っていないポケットマネーを使って補填しておけば問題ないな）

高い出費であるが、処罰されないだけ良しと考えよう。そんなことを考えながらコーヒーを飲むのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

悠斗との会合を終えた私は、書類に目を通していた。悠斗は午前中で国連本部ビルを後にした。

（まあ、明日は休みだからな。悠斗とデートの約束を取り付けたしな。今日中に是が非でも仕事を終らせなければならない！）

私は普段の倍以上の速さで書類に採決をする。

机の上に置かれた書類の山はみるみる減って行く。

（フフフ。見ていろ小娘どもが。悠斗に相応しいのは私だからな）

一方その頃の秘密基地。ハマーン事務総長がそんなことを考えながら書類仕事をしていると同じ時刻。

「は?!悠斗は渡さないよ!私が一番相応しい女なんだから!」

「は？」

「へ？」

「シーマ様？いきなりどうしたんですか？悠斗の若旦那は今日は基地にいないですよ？」

「なんだか、言わなきゃならない気がしたんだよ」

海兵隊の訓練中にいきなり悠斗に相応しい宣言をするシーマ中佐。

海兵隊隊員達は不思議に思いながらも、訓練を続けるのだった。

中央指令部にて。

（悠斗さんを誰かに取られる！？）

指令部にてお仕事をしているホシノ少佐は、何か嫌な感じを覚えた。

（悠斗さんの身に棄権が迫っている？なにか、直感が警告してきます。オモイカネと共に調べてみますか）

ホシノ少佐はパソコンを操作して悠斗の安全を確認するのだった。

シミュレーター訓練室にて。

「悠斗さんの貞操が危ない！？」

「悠斗は私の男だよ！」

「不動閣下は褐色好きのはず！」

上からマリーダ中尉、キャラ大尉、イリア少尉の順です。

「二人とも今感じましたか？」

「ああ。ニュータイプの感に物凄く感じたよ！」

「はい。なんだか負けたような気がしました」

何故か訓練中に訓練に関係無い事を関知するニュータイプ3人娘。
嫌な感じを覚えつつ訓練に戻るのだった。

場所は再び国連本部ビルのハマーン事務総長に帰る。

「ハマーン事務総長。コーヒーです」

「ああ。ありがとう。頂くよ」

秘書が煎れてくれたコーヒーを受け取り口にする。悠斗に出したコーヒー豆よりグレードが少し低いコーヒー豆だが、普段飲みなれている味だ。

「しかし、今日のハマーン事務総長は凄いですね。　普段より多い書類の山をほとんど終らせるなんて」

「なに。私がその気になればこのくらい問題にならんよ」

秘書が私が処理した書類の山を見て驚いている。　アクシズで宰相の采配をしてた時に比べたらこの程度の書類など大した労力の内に入らない。

「まだ、急ぎの書類はあるか？あるなら先にかたずける」

「えっと、お待ちください。・・・今のところはありませんね。今ハマーン事務総長が取りかかっている書類が最後の急ぎの書類ですね」

「安心しろ。これはもう終わったよ」

秘書からコーヒーを受け取る前には終わらせていたかな。案の定秘書は驚いた表情をしている。

「え？もう終わったのですか？」

「ああ。終わったよ。あと残っている書類は急がなくて良いのだな？」

「あ、はい！特に緊急を要する書類はありません。殆どの書類が来週以降で問題ありません」

「そうか。ならあとは急がずにやろう」

再びコーヒーを口にする。秘書もコーヒーを飲んでいる。

「しかし、何故今日はこんなに速く仕事をかたずけるんですか？」

「なに、明日予定があってな。その関係で仕事を終わらせておきたいだけさ」

「それって、今日来た不動閣下となにか関係が有るんですか？初めてお会いしましたけど、笑顔素敵な方でした！あ～あ。不動閣下が私の彼氏になってくれないかな～」

秘書がなにやら夢見る乙女モードに入ってしまった。それに、悠斗で妄想している様だ。さっきから「子供は３人か４人で」　などと、言っている。

「さて、要らん詮索は己の身を滅ぼすと覚えておけ」

「は、はい！分かりました。申し訳ありません。申し訳ありません」

私はそれはそれはとても良い笑顔で秘書に笑う。　秘書がガクガク震えている。その後、コーヒーを飲み終えて書類に目を通すのだった。

後に秘書は語る。

「あの笑顔はとても怖かったです。今思い出しても震えます。あれは２度と見たくありません。ハマーン事務総長をからかうと死ねますよ」

そう語る秘書は自身を抱き締めながら職場の仲間にそう語ったとの事だ。

ハマーンsideout

第五十七話（後書き）

暑さと酒の勢いだけで連日投稿。そろそろきついです。
感想などあればどうぞ。

第五十八話（前書き）

ぎりぎり完成しました。　では、本文をどうぞ。

第五十八話

１９９９年８月６日に行われた明星作戦の影響は世界中に波及した。
更に国連総会で発表されたメビウスによる月奪還の影響も世界中に波及していった。

アメリカｓｉｄｅ

ホワイトハウスの一室にこの国の中枢を支配する者達が集まっていた。
皆一様に席に座りただ黙っていた。そして全員が揃った事を確認すると、大統領が口を開いた。

「さて、諸君。忙しい所わざわざ緊急召集して済まない。今日急遽集まってもらったのはオペレーションルシファー（明星作戦）の件でだ。諸君も知っているだろうが、先に行われたこの作戦で我が合衆国は大打撃を受けた。
それこそ、我が合衆国が進めるＧドクトリンを否定されかねない程にな。　諸君も知っての通り、バスク中将とジャマイカ大佐は軍法会議にかけられ銃殺刑になった。
彼等は優秀だった。その彼等を失った損失は計りしれない。そう思わないかい？」

「はい。大統領。特に我等が海軍は艦艇と優秀な人材を多く失いました。このままでは、太平洋における合衆国の威光が低下しかねません。早急に回復をお願いしたいと思います」

「海軍提督が仰る通りですな。海兵隊もバスク中将が作戦を見誤った正で特殊部隊を失いました。此方も早急に回復をしていたたがないと、合衆国が進めるGドクトリンに影響が出かねません」

海軍の提督と海兵隊の将軍が口を開く。両者は失った損失の補填を早急に求めた。今回のオペレーションルシファーに参加させた隊員達は選りすぐりのエリート達ばかりだった。ましてバスク中将が直接選んで連れていった精鋭だ。それを失った以上早期の兵力補充は必須だ。

「分かっている。成るべく優先的に補充させるから安心しろ」

「そうですか。しかし、失った艦艇や戦術機はどうするのですか？メビウスに撃破された物を含めてかなりの損害が出ましたが？」

「海軍は艦艇だけだが、海兵隊は多くの戦術機を失いました。どうするおつもりですか？」

海軍と海兵隊の将軍が大統領に詰め寄る。大統領は落ち着いた表情をして言い放つ。

「失った艦艇や戦術機の一部はメビウスに補償させることに成功した。ＢＥＴＡによる損害については補正予算が議会を通過しだい順次補充を開始させる」

「なんと！」

「メビウスに賠償させることに成功したのですか？！」

部屋に衝撃が走る。まさかメビウスが補償するとは、誰も考えつかなかったからだ。部屋のあちこちから驚愕の声が上がる。大統領はニヤリと笑っていた。

「しかし、今回のオペレーションルシファーの件で日本帝国との関係がかなり悪化しましたがよろしいのですか？仮にも極東の防衛線ですが？」

「フン。イエローモンキーどもの事など気にする必要もない。所詮榊が居なくなればどうにでもなる。あの国には我が合衆国に忠誠を誓う者が沢山いるからな。あの榊が居なくなればあのような国など我が合衆国の防衛ラインの１つにしかならんからな」

国防長官が大統領に疑問をぶつける。大統領からしたら日本帝国など、防衛ラインの１つにしか見ていない様だ。

「確かにあの国を支えているのは榊是近首相ですからね。彼が失脚すれば我々の思うがままに操れるでしょう」

「確かに国務長官が言う通りですな。他にも政威大将軍が降りますが、なにぶん小娘ですからね。飾りだけの将軍が居た所でなんら障害になりませんな」

「まあ、一刻も早く榊是近が失脚するのを願うばかりですな」

他の長官達が大統領の発言を擁護する。彼等もまた日本帝国を甘く

見ているのだ。

「そう言えば、オペレーションルシファーで攻略した横浜ハイヴ跡地に第４計画の基地を建設するらしいですな」

「そうだ！忌々しいことにあの雌狐にG元素を独占されてしまったのだ！」

「大統領。落ち着いてください。今残っているG元素だけでも充分G弾は作れます。あとはG弾を使用して攻略したハイヴから、G元素を確保すれば問題などありません」

やや熱が入った大統領を宥める陸軍の将軍。
大統領は溜め息を吐いたあと上に顔を上げて、ゆっくりと深呼吸した。

「そうだな。済まない。少々熱くなった様だ。将軍の言う通りだな」

「冷静になられて良かったです。ならば大統領。一刻も早くＦ－２２の量産体制を整えるべきです！　あれが量産された暁にはメビウスなどあっという間に叩いて見せましょう」

「流石陸軍将軍殿だな。しかし、メビウスとの交戦を考えるなら近接戦闘も視野に入れるべきではないかね？近接戦闘の能力を考えるならＹＦ－２３の再検討をするべきかと思うのだが？」

「ＹＦ－２３は我が国が進めるGドクトリンには合わない機体だ。よって再検討の余地はない」

空軍将軍の意見を一喝する大統領。今更ＹＦ－２３の性能試験を再

度した所で意味はない。それにした所で、大統領が進めるGドクトリンに変更はないのだから。

「そう言えば大統領。今我が国にメビウスの総司令の不動悠斗が来ております。我が国にいる内に彼を亡き者にするのは、如何でしょうか？幸い、優秀なスナイパー部隊は直ぐに手配出来ますが？」

「ＣＩＡ長官。それでは我が国がやりましたと言っていると変わらんよ。
我が国にいる内は手を出さない。やるなら他国に行った時にすればよい。　いくらＢＥＴＡを素手で殺せる男とはいえ、長距離から頭を射たれれば生きてられまい」

「お見逸れしました。流石大統領ですな。私の考えが些か足りておりませんでした」

「なに。ＣＩＡ長官の意見は間違っていない。ただチャンスが来るのを待つだけさ」

大統領はそう言ってコーヒーを飲む。他の将軍や長官達もやや冷めたコーヒーを飲むのだった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

とある会議室に各国の代表者達が集まっていた。　彼等は皆ある映像を見ていた。スクリーンに映された映像が終わり、蛍光灯が灯され室内が明るくなった。

「以上がオペレーションルシファー（明星作戦）の際に使用されたG弾の映像だ。さて諸君はどう思う？これをもし、我等が欧州に使用されたら欧州は人が住めない大陸になってしまうと思わんかね？」

「イギリス代表の言う通りだな。もしこれが欧州で使用されたら大変な事になるな」

「左様。イタリア代表が仰る通り、欧州で使用されたなら避難している国々の国民が激怒するだろう」

イギリス代表のG弾を危惧する意見を肯定するイタリア代表とフランス代表。他の欧州連合に所属する国々も似たような考えだ。

「ただでさえＢＥＴＡに祖国を追われ外国で生活を余儀なくされているんだ。G弾が欧州で使用されたら市民が激怒して、最悪の場合政権が変わる事になりかねん」

「西ドイツ代表の仰る通りだ。欧州を日本帝国の二の舞にはしてはなりませんぞ！なんとしても、G弾に頼らずに祖国の地を奪還するのです！」

「落ち着いてくださいスペイン代表。先ずは欧州を奪還するための

橋頭堡を確保しなければなりません」

「だが、ＢＥＴＡとの長年の戦いで戦力を大分消耗していますから、直ぐにハイヴを攻略するのは難しいですな」

「だが、もたもたしているとアメリカが攻略作戦を仕掛けてくるかも知れんぞ？」

「ならいっそ、メビウスに頼んでは如何かね？」

フランス代表の発言に会議室の空気が厳しくなる。欧州連合に参加している国々の代表の視線がフランス代表に集中する。

「フランス代表。何を考えておられるのですか？いくらなんでもメビウスがそう簡単に首を振るとは思えませんが？」

「先程君達も見ただろう？Ｇ弾を使用する前にメビウスのＭＳが見せたあの光を。更にメビウスは月を攻略して奪還した実績もある。メビウスに強くアプローチして共同作戦でハイヴを攻略すれば良いのだよ」

「確かにその方法なら、上手く行けばハイヴを攻略出来るでしょうが、果たして共同作戦を展開してくれるでしょうか？」

「なに、不動閣下とて男だ。王族の女性とお見合いさせて骨抜きにさせれば、此方の意向も聞いてくれるに違いない！」

「オオー！！」×多数

フランス代表の意見を聞いて驚きの声を上げる。　だが彼等は知ら

なかった。不動悠斗はとてつもなく鈍い男であり、自分の周囲にかなりの美女がいるにも関わらず、全く手を出していない事を。
更に会議は進む。

「まあ、フランス代表の意見は駄目として、誠心誠意頼んで行くことが一番よろしいかと」

「意義無し！」×多数

「まて、完璧な案だっただろうに？何故拒否されるんだ！？」

「不動閣下には許嫁がいますから、どう頑張っても無理だと思いますよ」

「だいたい、我がイギリスは日本帝国と深い関係があるのだ。そんなことして関係を拗らせたくないからな」

事実イギリスは最新の戦術機ＥＦ－２０００を開発する際に日本帝国から技術提供を受けている。そんな深い関係がある以上、下手に日本帝国の反感を買うつもりは毛頭なかった。

「まあ、冗談はさておき。本格的にハイヴを攻略するためにはやはり、各国が戦力を回復させていくしかありません」

「そうですな。あとはこれ以上ハイヴを大きくさせない為にも定期的な間引きを続けて行くしかありませんな。それでよろしいのですかな？」

「スペインは問題ありません」

「ポルトガルも右に同じく」

「ベルギーもです」

「オランダもです」

「スイスも問題なく」

「西ドイツも大丈夫です」

「イタリア代表は？」

「安心したまえ。イタリアはやる気に満ちておるから問題ないぞ」

「はい。では落ち込んでいるフランス代表は？」

会議に参加している国々の代表の視線がフランス代表に集まる。

フランス代表は下を見て、「完璧なんだけどな～」などとボヤいていた。

「フランス代表。フランス代表！」

「はい？どうかしたのか？」

「引き続き間引きを続けて行く事でよろしいですか？」

「ああ。フランスは大丈夫だ」

「なら、満場一致で方針が決まりましたな。少し休憩にしますか？」

会議で採択が取られ、引き続き間引き作戦を続ける事とメビウスに共同作戦を提案する事になるのだった。

欧州連合ｓｉｄｅｏｕｔ

日本帝国ｓｉｄｅ

帝都城のある一室にて会合が行われていた。
ある映像がモニターに映し出されていた。
映像が終わりモニターが消えて部屋に明かりが灯り明るくなる。

「真耶さん。これは誠ですか？」

「はい。悠陽殿下。この映像は本物にございます」

「まさか、悠斗兄様が既に月を奪還なされていたなんて」

「殿下の申す通りですな。今だ地球上のハイヴを攻略出来ていない我々に比べて悠斗は既に月を取り返していたとわな」

先の明星作戦で漸く本土を取り返したばかりの日本帝国からすれば、この映像は衝撃が大きかった。

「紅蓮大将の言われた通りです。まさか普通は地球より先に月を攻略するなんて考えつきませんですからね」

「あのソーラーシステムと言った兵器、単純な光の反射を利用した兵器と言えど月の表面を焼き去る程の威力は凄かったです」

皆ソーラーシステムの攻撃を思い出す。月の半分を光が包みこみハイヴのを含めて月の半分を焼き払ったのだから。

「もし、あのような兵器が地球に使われたら大変な被害が出ますな。それこそ、外道の所業ですがな」

「鎧衣。そなたは悠斗兄様が、その様な所業を行うと申すのですか？」

「殿下。いえ。可能性を指摘しただけでございます。仮にも元斯衛。その様な事などしないと思いますが一応」

参加者達は鎧衣課長の発言を考慮する。確かに使わないと願いたいが、反面使われたら対処のしようがないのだ。宇宙空間から放たれる光の奔流がもし地球に命中すれば、どの国も反撃のしようがないまま焼き払われるだろう。

「うむ。確かに用心するに越した事はないが、あの兵器は既に解体されたと聞いたが？」

「はい。紅蓮大将の仰る通りです。発表によるとソーラーシステムは既に解体され、太陽光発電のソーラーパネルに改造されたそうです。改造されたソーラーシステムは帝国を始め、アフリカや北米など様々な国で太陽光発電所として使用されています」

「そうですか。ならば、問題有りませぬな。ハハハ」

会議室に鎧衣課長の笑い声が虚しく響く。月を攻略するために使用された決戦兵器は既に各国の電力を補う為に使用されていたのだ。

「その件はそのくらいにして、先日まで行われていた西日本のＢＥＴＡ掃討作戦を報告すべきではないか？」

「不動中将の言う通りだな」

議題はメビウスの話から奪還した領土の話に移った。

「彩峰中将。報告をお願いします」

「殿下。畏まりました。先日まで行われていた西日本奪還作戦は無事に終了しました。また、九州、中国四国地方も奪還に成功しました。現在九州に大規模な基地の建設を開始しました。この基地が完成すれば大陸方面から来るＢＥＴＡを、九州地方にて迎撃することが可能になります」

「そうですか。基地建設の為にまた民に負担を強いる事になるのですね」

煌武院悠陽殿下の表情が曇る。いかに国を守る為とは言え、民に負担を強いるのは忍びない様だ。部屋にいる参加者の表情も曇る。

「殿下。これも国を守る為です。それに秘密りにですがメビウスの不動閣下が九州基地建設に際し、傘下企業を通じて資材等をある程度無償で提供するとの旨を伝えられました。明星作戦で多大な被害を出させた謝罪だそうです」

「悠斗兄様が？しかし、謝罪と言ってもG弾を使用したのは米国の筈。悠斗兄様が責任が無いのでは？」

「確かにG弾の発射した責任は米国にあります。不動閣下は多くの兵を失わせる事になった結果を受けての事だそうです」

確かに明星作戦では、帝国本土防衛軍が一番損害を受けたのは事実だ。

大東亜連合も被害を受けたが、恐らく何らかの方法で賠償が行われたのだろう。

「そうですか。なら悠斗兄様の心意気を無駄にせぬ様にするのですよ。先に散っていった者たちの挺身に報いるのです」

「は！」×多数

そして夜は更けて行くのだった。

日本帝国ｓｉｄｅｏｕｔ

第五十八話（後書き）

最近蒸し暑くて寝にくいから寝不足ぎみです。
扇風機だけだとそろそろしんどいです。
読者の皆様も熱中症や脱水症状に気を付けてください。
感想などあればどうぞ。

第五十九話（前書き）

やっと完成。ご都合主義満載だ！では、本文をどうぞ。

第五十九話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年８月２３日
アメリカ合衆国ニューヨーク

俺は今日アメリカ合衆国の最大の交差点タイムズスクウェアにてハマーン事務総長を待っている。　昨日国連本部ビルで会合のあと買い物に行く約束をしてた事をハマーン事務総長が覚えていたので今日はその買い物に付き添うのだ。
約束の時間は午前１０時だ。左腕に着けている腕時計を見る。約束の時間まであと１５分程時間がある。
暇なので周囲を見渡して見る。
あちこちに高いビルが立っており、電光掲示板等が光っている。
また、街を歩く人の人種も多種多様だ。

（流石米国だな。後方国家だけあって繁栄が著しいな。市民を見ても皆活気に溢れている。此処に入ると世界が今だＢＥＴＡと戦争を続けているなんて微塵も感じさせない。　いや、寧ろ戦争をしている事すら忘れそうだ）

周囲を何気無く見渡していると、近くを歩いていた男性にトンと肩が軽くぶつかった。

「ああ。済まない。ぶつかってしまった」

「ああ。気を付けてくれよな」

ぶつかった男性に謝り再び周囲を見渡す。
平和の空気が辺りに漂っていた。

（まあ、何れ世界中の国が米国の様に平和な国になるようにしなければな。やはり、次の攻略作戦を発動するべきか？まあ、その辺は仕事の時に考えるか）

そんなことを考えていると、前方から白いミニスカートに黒いジャケットを着たハマーン事務総長が此方に向かって歩いて来た。肩にはショルダーバッグを掛けている。色は黒だ。俺はハマーン事務総長に軽く手を振る。
ハマーン事務総長も気付いていたらしく、軽く手を振ってくれた。

「どうやら、待たせた様だな」

「いえ。先に来たのは俺の勝手ですから気にしないでくださいハマーン事務総長」

「悠斗よ。せめて外では呼び捨てにしてくれないか？プライベートまで事務総長は止めて欲しいからな」

「分かったよハマーン。これで良いかい？」

「ああ。そうして呼んでくれ（クッ！やはり、悠斗に呼び捨てにされると胸が熱くなる。昨日あれだけ準備したんだ耐えるんだ私！）

なにやらハマーンが頬を紅くしている。外が暑いから火照ったのだろうか？

「大丈夫かハマーン？今日は暑いからな。辛い様なら直ぐに涼しい場所に行こうか？」

「ああ。大丈夫だ。私は夏が好きな季節だから此くらいなら問題ないさ」

「そうかい？なら良いけど無理はしないでくれよ。　それで、今日は何処に行くのかな？」

「ああ。今日は服を買いに行くつもりだ」

確かに洋服は沢山買うと重いからな。ハマーンだけで持てる数も限られてくるしな。

「そうか。なら行こうか」

「そうだな。行くとするか」

そう言って俺の左手がハマーンの右手に握られた。所謂手を握るだな。

だが、いきなり手を握るのはなんでだ？

「ハマーン。何故手を握るんだ？」

「うん？良いじゃないか。それより早く行こうか」

そう言ってハマーンは、俺の手を引っ張って歩き始める。俺はよく分からないまま歩くのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

悠斗と共に手を握りながら街を歩く。今日は悠斗と買い物（デート）だ。今握っている悠斗の手は暖かく、男らしくゴツゴツした手だ。普段から鍛練を欠かさない悠斗らしい手だ。

（やはりシャアとは違うな。普通のパイロットの手はあまりゴツゴツしていないからな。悠斗が普段から武道家として鍛えているからこその手だな。しかし、想定以上にドキドキするな。やはり私は悠斗が好きな様だな）

手を繋ぐだけで胸が熱くなる。まるで初な少女時代に戻った様な感覚すらしてくる。

（悪くない感じだ。寧ろ懐かしい感じだな。悠斗はシャアと違い鈍感なのがいただけ無いがな）

確かにシャアは良い男だったが、彼奴は私から離れて行ってしまった。

（今はこんなことを考えている場合じゃないな。悠斗とのデートを楽しむとしよう）

「ハマーン。所で何処のお店に行くんだい？」

「ああ。私が普段服を買いに来るときに使う店にな。まだ少し歩くぞ」

のんびりと道を歩く。周囲の人間達から視線が集まる。

「あのカップル羨ましいわね」

「ええ。特に男性がカッコイイよね」

「おい！見たかよ！今のカップル。女の子の方が可愛かったぞ！」

「ちっくしょう！あんな可愛いい女の子とデートしてるなんて、なんて羨ましい男なんだ！」

皆口々に嫉妬や羨ましいさ等様々な物が交じった視線を向けてくる。

（フフ。俗物的な視線や思考はヘドが出るが、悠斗と私を羨ましいがる位は許してやろう。やはり私達はカップルに見える様だな。悠斗は視線を気にして無いようだな。なら）

私は繋いでいる手を一旦放す。

「ん？どうしたハマーン？」

「なに、握りかたを変えるだけさ」

悠斗の左腕に抱き付いて悠斗左指の間に私の右指を入れて手を握る。所謂恋人繋ぎた。

「ん。なんだろうな。ハマーンが寄り身近に感じる様な手の握りかただな」

「そうだな。私も悠斗が身近にかんじるよ。さあ行こうか（やってみると、恋人繋ぎとは恥ずかしが嬉しいものだな。好きな人を寄り側で感じられるのも悪くないな）」

恋人繋ぎとをしたまま、買い物に行く予定のブティックに向かって歩くのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

悠斗さんがニューヨークに行って3日かがたちました。私は中央指

令部からネットワークを使いメビウスの軍事衛星を使用して悠斗さんの安全確認をしています。いくら悠斗さんが強いとは言え、いつ何処で何があるか分かりませんのでこうして分からない位置から安全を確認するのです。
軍事衛星からの映像がリアルタイムで送られてきます。現在悠斗さんはハマーン事務総長と共にマンハッタン島を歩いています。

（むー。ハマーン事務総長が悠斗さんと手を繋いで歩いています。羨ましいです！私も悠斗さんとデートしたいです！）

更に送られてくる映像を見ていると、ハマーン事務総長が悠斗さんの左腕に抱き付いています。

（羨ま・・・違いました。危険です！このままでは悠斗さんをハマーン事務総長に取られてしまいます！）

映像を見ているとハマーン事務総長はとても綺麗な笑顔で笑っています。悠斗さんも楽しそうに笑っています。

「何しているんだルリ？」

背後から声をかけられる。いつの間にか、私の座っている席の後ろにシーマ中佐が立っていました。

「シーマ中佐ですか。もし良ければこの映像を見てください」

「ん？なんだい？て！これは！」

座っている私の右側からシーマ中佐が頭を下げてモニター画面を見ると、シーマ中佐が驚いた表情を見せた。かなり動揺している様に

見えた。

「悠斗がハマーン事務総長とデートしているだって!!小娘が私を出し抜くなんて!」

「シーマ中佐。落ち着いてください。此処で怒ってもどうしようもありません」

シーマ中佐が声を上げた事により、周囲の人達が此方を見る。イルマ中尉が此方に近付いて来た。

「シーマ中佐。どうしましたか?」

「ああ。イルマかい。どうしたもこうしたもないよ。其処に映っている映像を見な」

「はぁ?わかりました。ホシノ少佐、失礼します」

シーマ中佐に代わりイルマ中尉が隣に来る。イルマ中尉もまた、同じ様に驚いた表情をした。

「嘘、嘘、嘘でしょ?!悠斗さんがハマーン事務総長とデートしてるなんて?!」

「イルマ中尉も落ち着いてください。確かにデートしていますが、恐らく悠斗さんはハマーン事務総長と買い物しているとしか考えていないでしょう。悠斗さんの鈍さはお二人がよくご存知でしょう」

「「ああ~そう言えば、そうだった(です)」」

私の意見を聞いて、納得するお二人。まあ、悠斗さんの鈍さは鋼入りですからね。

「じゃあ、なんでルリは悠斗を見ていたんだい？」

「悠斗さんの安全を確認するためです」

シーマ中佐の問いに答える。

（実際にはただハマーン事務総長が悠斗さんとデートしているのが羨ましいかったからで、帰って来たら私もデートに誘うつもりでしたが）

まあ、私の野望は置いといて再びモニターの映像を見る。今は二人はブティックな入って行く所だ。

「お二人もそんな所で立ってないで、職務に戻られてはいかがですか？」

「じゃあ私は、ルリの仕事を手伝うとするかい」

「ええ。私もそうしましょうかしら」

二人が左右かモニターを覗く。私の座っている椅子以外無いので二人は立っていますけど。

そのまま3人で悠斗さんとハマーン事務総長のデートを監視するのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

ハマーンと共に色々な店を見てまわった。案外色々な店を廻って見るのは良いものだ。例えば余り高くない店に入って物を見てみると掘り出し物があったり、逆に高い店に行ってみるとそんなに良いのが無かったりと、意外と楽しかった。また、別の店では店員の応対が良かったり、細い路地に入ったら隠れ家的なお店を発見したりと有意義な時間だった。また、買い物途中にチンピラが絡んで来たが絡んできた奴を俺が殺気をぶつける前に、ハマーンが本気の殺気を叩き付けて追い払った。流石エースパイロットだな。いくら前線に出ていないとは言えその凄さは健在だったな。まあ、そんなアクシデント？を軽く流して散々買い物をした。まあ、俺はお土産を買った位だがな。そして今はカフェでのんびりとお茶をしていた。

「フフ。済まないな。悠斗のおかげで良い買い物が出来た」

「いやいや。意外と楽しかったよ。まあ、もともと荷物持ちはするつもりだったからな」

俺達が座っている席の足元には、今日ハマーンが買った服などが入った紙袋が５つ程置かれている。俺はアイスコーヒーを飲む。因みにハマーンはアイスティーでガムシロップを１つ入れている。　俺は無論ブラックだ。

「それには感謝しているさ。それでこの後の予定はどうするのだ?」

「この後か」

腕時計の時間を見る。今の時刻は4時を過ぎた所だ。

(まあ、ハマーンを家まで送って、そのあと俺もアナハイムの北米支社に戻れば良いかな。明日には基地に帰るしな)

「まあ、ハマーンを自宅に送って、それからアナハイムの北米支部に帰るかな。明日には秘密基地に戻るしな」

「明日戻るのは早いのか?」

「いや。特に時間は決めていないが。それがどうかしたのか?」

「そうか。なら私の自宅に来ないか?今日の買い物に付き合ってくれた礼がしたい」

いきなり自宅に招待するハマーン。買い物に付き合った礼がしたいらしい。断る理由が特に何も浮かばなかった。

「ああ。構わないよ」

「そうか。なら迎えを呼ぶから少し待っていてくれ。電話をしてくる」

そう言ってハマーンは立ち上がり電話機に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

私は今非常に機嫌が良かった。悠斗が帰る前に何としても他の女達より一歩先に進もうと計画を立てていた。そして案の定悠斗は私の誘いを断らなかった。

（フフフ。遂に私にチャンスが来たのだ。悠斗を今日こそものにしてみせる）

そんな事を考えながら店に置いてある電話機に金を入れて受話器を取り、自宅に電話する。３回目のコールが鳴ると家にいる使用人が電話に出た。

「はい。お待たせしました。カーン家でございます。どちら様でしょうか？」

「メイド長か。私だハマーンだ」

「ああ。ハマーン様でございましたか。如何なさいました？」

「済まないが迎えを頼む。場所は・・・・」

迎えを寄越す場所をメイド長に伝えたあと受話器を置く。私は再び悠斗のいる席に戻り、迎えが来るまでの間のんびりとお茶を楽しむのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

ハマーンと共にカフェでお茶を楽しんだあと、ハマーンが呼んだ迎えが来たので会計を済まして店を出ると、リムジンが迎えに来ていた。正直驚いたね。だってリムジンだぞ！元の世界なら絶対に乗れない車だかな！

そんな車に若干感動しながら乗ると、やっぱり内装も全然違いますね、シートはリクライニング可能の本革シートで対面式の後部座席。座席数は後部座席だけで４席。運転席と助手席を合わせると６席だ。また、後部座席には専用の冷蔵庫が付いていた。

車に乗って暫くするとマンハッタン島の高級住宅街に入った。

そして住宅街に入ってから少しして車が止まった。ドアが開いたので車から降りると、其処には大きな家が建っていた。

「これがハマーンの自宅なのか？」

「そうだ。さあ、中に入ろう」

ハマーンと共に家の中に入る。家の中に入ると広いエントランスホールがあり、メイドさんが出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ。ハマーン様。そして、いらしゃいませ不動様」

「ああ。メイド長か。出迎えご苦労」

「初めまして。不動悠斗と言います。お邪魔します」

「はい。不動様。よろしくお願いいたします。カーン家のメイド長でございます」

出迎えに来たメイド長さんと挨拶する。年齢は５０代辺りだそうです。長い間カーン家のメイドの仕事をしているそうです。メイド長の他にあと7人程メイドさんがいるそうです。執事さんも４人いるそうです。因みにリムジンを運転してくれたダンディーな男性が執事長さんだそうです。執事長も若そうに見えてメイド長さんと同じ年代の人だそうだ。

そんな会話をしながらメイド長さんに案内された部屋に入る。ハマーンは帰ってくるなり自室に戻って着替えてくるらしい。荷物は執事長がいつの間にか運んでしまった。俺は案内された客室のソファーに座る。正直疲れています。

（はぁ。最近忙しかったからな。眠いな。今日は戻ったら早く寝るか）

そんな事を考えているとドアがノックされる。

「空いてますよ」

「失礼します。不動様。夕食の準備が出来ましたので、ご案内させていただきます」

「分かった」

俺は立ち上がり、部屋に入ってきた綺麗なメイドさんに続いて部屋を出る。暫く廊下を歩く。突き当たりにある扉をメイドさんが開ける。

「中へどうぞ。ハマーン様がお待ちになっております」

「ありがとう」

案内してくれたメイドさんにニッコリと笑い感謝の言葉を伝える。なんとなく、メイドさんの顔が紅かったような?気のせいだな。そんなことを考えながら俺は部屋に入る。部屋の中にはテーブルと椅子が2つセットされていた。また、大きな窓があり夜のニューヨークの街を見ることが出来る部屋だった。

「待たせたな悠斗。まあ、座ってくれ」

「ああ。失礼するよ」

先に椅子に座っていたハマーンに促され椅子に座る。ハマーンの服装は買い物に出たときと違い、黒を基調としたドレスを来ていた。正直ハマーンは着痩せするタイプだと思います。今のドレス姿を見るとふたつ山が確り存在感を露にしています。寧ろ、もう少しハマーンが前屈みになったら見えそうです。(なにが?!)

（煩悩退散！煩悩退散！！要らん事を考えるな！）

自身を落ち着かせる。

ハマーンを見るとニッコリと笑みを浮かべていた。もしかして、考えてる事がバレた？

「フフ。悠斗、どうしたんだ？表情をコロコロ変えて？百面相だぞ。まあ私としては意識してもらえる方が嬉しいがな」

どうやらハマーンには考えた事がバレている様だ。俺は動揺を表に出さないようにゆっくりと呼吸をする。

「そうだな。普段着のハマーンも綺麗だったけど、そのドレス姿は更に綺麗だよ」

「そ、そうか。そう言ってもらえたなら、着替えた甲斐があった様だな。（く！悠斗め！真顔で綺麗だなんて言ってくれるなんて！凄く嬉しいじゃないか）

何故かニコニコしているハマーン。そんなにそのドレスがお気に入りだったのかな？

そんなことを考えていると、先程まで運転手をしていた執事長さんが、グラスにワインを注いでくれた。

「執事長（バトラー）今日のワインは何処の物だ？」

「はい。ハマーン様。本日のワインはシャトー・マルゴーの１９８０年に作られたワインでございます。この頃は、欧州戦線が後退の一途をたどっていた頃の物ですので、非常に貴重なワインでござい

ます」

よく知らない単語が飛び交う。残念な事に元小庶民の俺にはワインの銘柄はせいぜい、ボルドーワイン位しか知らないのだ。無論飲んだ事などないがな。ハマーンがワイングラスを持つ。俺もワイングラスを持つ。

「それでは、今日のお礼に乾杯」

「乾杯」

カチンとワイングラスを軽く当てる。俺はそのままワインを飲み干すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

悠斗共に夕食を楽しんでいる。料理長が作ってくれるコース料理に舌鼓しながら、他愛のない話をして過ごしていた。既に料理は下げられ二人でワインを本格的な楽しんでいた。

「なあ、悠斗。夜風に当たらないか？」

「うん？そうだな。少し飲み過ぎたしな」

お互い立ち上がり窓を開けてバルコニーに出る。夜風が火照った体に当り体の温度を下げてくれる。空を見上げると美しい星空が辺り一面に広がっていた。

「夜風は涼しいし、星空が綺麗だな」

「そうだな。こうして地球から夜空を眺めたのは久し振りだな」

アステロイドベルトにいた頃は、宇宙から地球を見るのが当たり前だったからな。

「そう言えば、ハマーンに贈り物があるんだ」

「贈り物？何かあるのか？」

悠斗がいきなりそんな事を言い出したかと思うと、おもむろにポケットから小さな箱を取り出した。

（なに！まさか悠斗は、私にプロポーズしてくるのか！いかん！胸がドキドキしてきた。全く心の準備をしていなかったぞ！）

心臓が早金の如く動く。　私はなんとか冷静を保つ様に努力する。

まだ、バレる訳にはいかない。

そんな事を考えているといつの間にか首の辺りに重みを感じた。

「はい。ハマーン。日頃の感謝の気持ちを込めてプレゼントだよ」

「こ、これは！ネックレスか？」

「はい。手鏡だよ」

悠斗から手鏡を受け取り確認してみると、スターサファイアのネックレスが首にかけられていた。

「良いのか？こんな高価な物を貰って？」

「うん。仕事で何かとハマーンには迷惑をかけているからな。それに対するお礼だから気にしないで貰ってくれないか？」

「ああ。分かった。大事にする。（なんだ。私としたことがなんたる勘違いをしているんだ！だが、悠斗からプレゼントは嬉しいからそれで良しとしよう）」

自分でも随分な早とちりをしたと後悔した。だが、悠斗から貰ってばかりでは少々気が引けてしまう。だから私は悠斗にある事をする。

「悠斗。私からもお礼があるんだが、受け取ってくれるか？」

「ああ。構わないよ」

悠斗から了承は獲た。私は一歩悠斗に近付いて悠斗の唇に私の唇を重ねた。私は悠斗に抱き付いた。悠斗は目を開き驚いた表情をするも、私を優しく抱き締めてくれた。
ほんの僅かな時間だが重ね合った唇を放して、互いに向き合う。

「なに。これは今日買い物に付き合ってくれたお礼だよ。気にしないでくれ」

「いや、かなり驚いたよ。まさか、感謝の気持ちがキスで帰ってくるなんてな」

悠斗の顔が紅いのはきっと酒の正だけでは無いだろう。いや、そうあって欲しい願望かも知れない。私は悠斗の手を握る。

「まあ、子供じゃないんだから今さらキスの1つも驚かないだろう？それより、体も涼しくなった事だし中でワインを飲まないか？（今は焦る必要はない。悠斗は必ず私の夫になるのだからな！）」

「そうだな。ワインの続きを楽しむか」

そう言って中に入り二人でワインを楽しむのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

第五十九話（後書き）

書いてて思ったが、こう言う描写は結構難しいですね。バトルとかだと簡単に思いつくのに恋愛関係はかなり思いつかないな。

感想などあればどうぞ。

第六十話（前書き）

完成しました。久しぶりに短いです。では、本文をどうぞ。

第六十話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年８月３１日
メビウス秘密基地執務室

国連出頭を終え、ハマーン事務総長の買い物を手伝い、夜は酒を酌み交わす一夜を終えた俺は現在執務室にて、ある人物を待っている。待っている人物は俺が行方不明中にアメリカ軍と交戦状態に突入させた、アナベル・ガトー少佐と、それを援護したケリィ・レズナー大尉とイアン・グレーデン中尉の３名だ。これらの人物がアメリカ軍と交戦に入るのを黙認したデラーズ中将は既に処分を伝えてある。まあ、デラーズ中将には減俸１ヶ月と月で上げた功績による昇進予定があったが、それを取り消す処分をくだした。まあ、本人は俺がなんで処分するか分かっていたので、笑って受け入れてくれたがな。コンコン、コンコンと２回に分けて計四回ノックがされた。

「開いている。入りたまえ」

俺がそう声をかけると扉が開き中に３人が入って来た。

「失礼します！アナベル・ガトー少佐出頭致しました！」

「同じく失礼します。ケリィ・レズナー大尉出頭しました」

「失礼します。イアン・グレーデン中尉出頭命令により出頭しました」

「ご苦労だったな。まあ、3人共に此方に来たまえ」

扉を閉めて3人が俺の前に並ぶ。全員なんで呼び出されたのか分かっている表情をしている。

「さて。本日諸君らを呼び出したのは他でもない。明星作戦の時に、俺がＭＩＡ（戦闘中行方不明）になっている際にアメリカ軍と交戦したことだ」

「閣下！もし処分なさるならば、その責任は全て自分にあります。どうか私1人だけを処分してください」

「まて、ガトー！君にだけ責任を負わせる事など出来るわけないだろうが！」

「そうですガトー少佐！自分達は己の意思で志願しましたから、責任は自分達にもあります！」

ガトー少佐が全責任を取ろうとして直訴してきたが、ケリィ大尉とグレーデン中尉の両名も自身に責任が有るとしてガトー少佐を止めに入る。

（う～ん。なんか3人とも勘違いしてないかな？俺は間違っても3人を銃殺刑にするつもるは無いんだがな）

目の前で行われている庇いあいの応酬を止めさせるために、俺はゴ

ホン！と咳払いをする。すると3人とも静かに直立不動になった。

「たく。貴様ら揃いも揃って庇いあうなよ。余計に処罰しにくいだろうが。　まあ、いい。先に処分を発表するぞ」

3人が息を飲む。恐らくこれから発表される処分について覚悟をしているのだろう。

俺は机に置いてある書類を手に取り読み上げる。

「まず、アナベル・ガトー少佐。貴殿は月攻略作戦及び明星作戦にて上げた戦果を考慮して3階級特進を命ずるが、明星作戦の際に命令違反による米軍との交戦を行った事により、2階級降格を命ずる。次にケリィ・レズナー大尉。貴殿は月攻略作戦及び明星作戦で上げた戦果を考慮して2階級特進を命ずるが、明星作戦の時に命令違反によるガトー少佐の援護を行った事により、1階級の降格を命ずる。イアン・グレーデン中尉もケリィ・レズナー大尉と同じ処分とする。以上だ。なにか質問はあるか？」

3人とも戸惑いを隠せない様だ。まあ、実質1階級の昇進だからな。対外的には降格してから昇進させた事にしてあるしな。

「不動閣下。これは素直に喜んで良いのでしょうか？」

「まあ、ガトー中佐の言いたい事は分かる。対外的には降格処分のち昇進だからな。一応処罰された事にしてあるから安心しろ」

「分かりました。正直言いますと銃殺刑を覚悟しておりましたから」

「私もだ。今回の出頭命令は本気で覚悟したからな」

「自分は死を覚悟しましたが、部下達だけは何とかして守るつもりで来ましたからね。ホッとしています」

やはり、3人とも死を覚悟していたらしい。

杞憂に済んでホッとしている。

「まあ、俺が行方不明中に起きた事だからな。そもそも、俺がG弾に捲き込まれなければ、こんな事にはならなかったのだからな」

実際、俺がG弾の爆発に捲き込まれなければガトー中佐達が米軍と交戦する事は無かっただろう。　だが、ギリギリまで粘った故に助けられた命もあるかな。これればかりは結果論だからどうしょうもない。

「不動閣下。我々は自身の保身などどうでもよいのです。あの時我々を突き動かしたのは、不動閣下への忠誠心ですから。どんな結果が来ても受け入れるつもりでしたから、気にしておりません」

「そうか。俺は本当に良い部下をもった様だな。ならば。アナベル・ガトー中佐。ケリィ・レズナー少佐。イアン・グレーデン大尉」

「「「は！」」」

「現時刻をもって、諸君らを昇進させる。以後、その階級に相応しい戦果を上げる事を望む。良いな？」

「は！必ずや、ご期待に答えてみせます！」

「は！戦果を楽しみにお待ちくださ」

「は！しかと心得ました！」

3人が敬礼してくる。俺も返礼したのち、3人に新しい階級章と任命書を渡し、部屋を退室させるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

不動閣下の執務室を後にして、私とケリィはＰＸに向かって歩いていた。イアン・グレーデン大尉は部下との自主訓練があるため途中で別れた。

「しかし、今回は少々やり過ぎた様だな。不動閣下に要らぬ迷惑をかけてしまったな」

「確かに、少々軽率だったかも知れん。しかし、後悔は微塵もしていないさ」

そもそも、あの局面で米国がG弾を使用しなければ何等問題なくハイヴを攻略出来たのだ。

「そうだな。後悔する位なら最初から動かなければよかっただけの話だ。まあ、なんにせよ部下たちに処罰が無かっただけ良かったと

思わなければな」

「ケリィの言う通りだな。共に忠誠心から動いた彼等に処罰が無かったのは幸いだ。私やケリィの様な隊長クラスで処罰が済んでホッとしているよ」

普通なら連帯責任で部下達も処罰される所ではあるが、不動閣下がその辺りの事を目を瞑ってくれたのだ。ケリィと意見を交わしながらまあ、ＰＸの中に入ると、沢山の人で賑わっていた。

「さあさあ！最新のオッズ表が出たぞ！！此処に来てハマーン事務総長が全員より一歩リードした！　さあ、誰が来るか分からない混戦の様相になってきたぞ！！」

「オォォォォ！！」

奥の方からジョニー・ライデン少佐の声が聞こえて来た。今の歓声は周囲が驚いた声だろう。

「全く。いくら娯楽が少ないとは言え、けしからんと思わないかケリィ？」

隣にいる友人に同意を求めるも、返事が返って来なかった。隣を見るとケリィは既に居なくなっており、奥のジョニー・ライデン少佐達の集まっている所に向かっていた。

「ハァ。ケリィもやっていたのか」

親友の背中を見送りながら額に手を当てため息をつく。私からすれば、なにが面白いのかイマイチ分からないがな。

「どうしたんだ？ガトー中佐」

「うん？おお！ランバ・ラル少・・・失礼しました！ランバ・ラル大佐！昇進おめでとうございます」

後ろから声をかけられたので振り返ると、其処には髭を生やした恰幅の良い男性。ランバ・ラル大佐が居られた。
つい先日昇進されて大佐になられたのだった。

「ハハハ。ありがとう。ガトー少佐も中佐に昇進した様だな。君のような将来有望な男はこの年寄りを乗り越えて、更に上に行きたまえ」

「自分には勿体ないお言葉をありがとうございます」
ガッハハハと笑いながら私の肩を叩くラル大佐。　いくら年を重ねようと衰えを感じさせない方だ。今なおＭＳを操り戦場を駆け抜ける御仁だ。

「それで、ため息なんて吐いてどうしたんだ？悩み事なら相談にのるが？」

「いえ。大したことではないんですが。あれの事なんですが」

私は皆が集まっている所を指差す。ランバ・ラル大佐が私が指差す方を見る。

「ああ。あれか。ガトー中佐は理解出来ないのか？」

「気持ちは分からない訳ではありませんが、賭け事にするには些か

不謹慎かと」

「フム。まあ、娯楽が少ない軍ならでわと割り切った方が楽だぞ」

ランバ・ラル大佐が言う通り、割り切ってしまえば良いのだがな。

「それより、ガトー中佐は命令書を確認したかね？書類の中に新型ＭＳの授与の書類があるのだが」

「いえ。まだ確認しておりませ」

「ならば、此方に来たまえ。私の部下が席を取っているから、そちらで確認しようではないか」

「では、お言葉に甘えて失礼します」

私はランバ・ラル大佐と共にＰＸの中を移動するのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

昼食を済ませた俺は、執務室のパソコンを操作して生産ラインを開

いて考え事をしていた。

（う～ん。戦車部隊からの要望どうしようかな）

現在メビウスの主力戦車は６１式戦車とマゼラ・アタックとガンタンク？だ。火力的には充分足りているのだが、流石にＭＳに比べて旧式化しているとの要望が有ったため次世代型の新型戦車を考えているところだ。

（やはり、大火力は欲しいよな。あと出来れば他国に販売もしたいからな。そうなると、整備と量産が簡単なヒルドルブが良いかな？）

ＹＭＴ－０５ヒルドルブ　。ジオン軍が開発した地球進行作戦の要になる予定だった大型戦車である。可変機能を持ち合わせており、変型すると人形に近い形になり近～中距離からマシンガンによる射撃が出来るのが特長だ。　また、戦車砲は３０インチ砲と大火力であり走行しながら発砲が可能で、どんな悪路だろうと走破出来る性能を持ち合わせている。更に整備が簡単に出来るため、現在前線国家である国々に販売しても問題ない戦車である。マシンガンの装填弾丸数は２００００発で、戦車砲の装填弾数は２００発だ。因みに前進の際の最高速度は時速２００ｋｍで、後退時は最大１５０ｋｍまで出せるし、車が運転出来る程度の適性さえ有れば子供でも使える様に改造します。量産と販売は傘下企業にさせれば問題ない。

（まあ、メビウスで使用するのには強化パーツを付ければ問題ないし、一般販売向けの方には動力はブラックボックス化させて解析不可能にすればいいな）

俺はマウスを操作して生産ラインを選択する。

ＹＭＴ－０５ヒルドルブ。目標数３０００。日産１００両。在庫数

０両。　とモニターに表示された。

（まあ、取り敢えずは性能を示さないとな。やはり、次の作戦を敢行するしかないな）

俺は机の上に備え付けてある電話機を取り、ある人に電話するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

追記

オッズ表

イルマ・テスレフ　倍率２．２倍

シーマ・ガラハウ　倍率１．８倍

ホシノ・ルリ　倍率２．１倍

キャラ・スーン　倍率６．０倍

イリア・パゾム　倍率６．４倍

マリーダ・クルス　倍率３．０倍

篁唯依（非公式）　倍率２．４倍

月詠真那（非公式）　倍率８．２倍

月詠真耶（非公式）　倍率５．５倍

伊隅みちる（非公式）倍率？？？

ハマーン・カーン　倍率１．１

と、なっています。現在ぶっちぎりで1位がハマーンさまです。

第六十話（後書き）

久しぶりにほのぼの系を書くと、なかなか辛い。　感想などあればどうぞ。

第六十一話（前書き）

やっとこ完成。ご都合主義満載です。では、本文をどうぞ。

第六十一話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年９月９日
メビウス秘密基地不動悠斗の寝室

朝日を浴びて俺はうっすらと目を開く。ベッドで寝ているので頭を右に動かして壁に掛けてある時計を見ると、まだ午前５時を過ぎた所だった。

（まだ、起床ラッパまで１時間あるな。もう少し寝るか）

朝の二度寝の誘惑に誘われて目を閉じ、掛布団を自分に掛けようとする。いくら９月に入ったとはいえ、朝は肌寒いものである。しかし、左腕を動かしたいのだが何故か腕が動かなかった。

（はて？なんか左側が暖かいんだ？）

俺はふとした違和感を感じた。普段キングサイズのベッドに１人で眠っているはずなのだから、暖かい物があるはずないのだ。当然俺には抱き枕を使う癖などない。

「うぅ～ん。すぅ～」

明らかに俺ではない声が聞こえた。俺は仕方なく目を覚まし、動く右腕でそっと布団を剥がすとなんとそこには、俺の左腕を枕にして俺に抱き付いて幸せそうに眠っているホシノ少佐がいた。しかも格好が黒いTシャツとチラリと見える白いショーツだけだ。

（え？え？どう言う事だ？何故ホシノ少佐が俺のベッドで眠っているんだ？）

俺は訳も分からないため　混乱してしまった。無論俺も横になったままだが。

（落ち着け悠斗。冷静に考えるんだ！まず、ホシノ少佐は俺の部屋には入って来れるのは間違いないが、何故一緒に眠っているのかが分からない）

俺の寝室は執務室の奥に有るため、執務室に入って来れる人間なら大体入って来れる。事実、朝はイルマ中尉が何故か起こしに来てくれる。自分で起きれるから大丈夫と前に断ったら、凄く悲しそうな表情になるもんだから、それ以来ずっと許可して起こしてもらっているのだ。

「う、う～ん。もう朝ですか？」

「おはようホシノ少佐。もうすぐ起床ラッパの時間だ。そして何で俺のベッドで眠っているんだ？」

俺が考え事をしていると丁度ホシノ少佐も目を覚ましたので、俺の疑問を尋ねてみた。

「昔はアキトさん達とよく一緒に寝ていたのを思い出したので、つ

い懐かしくなり来てしまいました。嫌でしたか？（悠斗を誘惑する作戦その1ですから。しかし、悠斗の反応を見ると私にはまだ、魅力が足りないのかも知れません）」

上目遣いで俺を見つめるホシノ少佐。金色の瞳には不安と悲しみが見て取れる。正直言いますとメチャクチャ可愛いです。　朝から、俺を萌えさせてくれて寧ろ感謝するよ。　おかげで、少し残っていた睡魔が吹っ飛んだよ。

（ホシノ少佐は両親の愛情を知らずに育ったからな。アキト達といた頃の事を思い出したと言ってるから、寂しくなったから俺の所に来たのかも知れないな）

俺はホシノ少佐を優しく抱き締めてあげる。ホシノ少佐は軽く、少し力を入れたら折れてしまいそうなほど華奢だった。

「ゆ、悠斗さん？どうしました？（悠斗さんに抱き締めてもらってます！？凄く嬉しいです！）」

俺はホシノ少佐の綺麗な髪を撫でながら話かける。ホシノ少佐の頬が若干紅くなっているような気がした。

「まあ、寂しくなったのなら仕方ないな。まあ、俺でよければ何時でも添い寝してあげるから、寂しくなったら来ればいいさ」

「すいません。我が儘を言ってしまって」

「別に良いさ。ホシノ少佐も年相応だって事さ。さて、そろそら起きようか」

時計を見るともうすぐ5時30分になる所だ。
もうすぐイルマ中尉が俺を起こしに来るだろう。　俺はホシノ少佐と共にベッドを降りる。
するとノックの音が部屋に響きドアが開いた。

「失礼します。不動閣下。お目覚め・・・で・・」

「おはようイルマ中尉。どうしたんだ?」

イルマ中尉が寝室に入ってきた。俺は挨拶を返すとイルマ中尉が驚いた表情で固まった。

「な、な、なんでホシノ少佐が此処にいるのですか!!?」

「ああ。それか。なんでも寂しくなったからだそうだ。まあ、別に問題が有るわではないからな」

「いえいえいえ。大問題ですよ!（まさか、ホシノ少佐に先を越されるなんて予想外にも程があるわ!?）」

イルマ中尉が近寄ってきて激しく俺の意見を否定する。そんなに問題か?　別にただの添い寝だぞ?俺がそんなことを考えているとホシノ少佐が、俺の前に出てきた。

「イルマ中尉。別にやましい事をした訳ではありませんから。大丈夫です。それに、悠斗さんは構わないと言ってくれましたから、何等問題ありませんよ。たまにプルやプルツーもしてますし」

「え?本当ですか悠斗さん?」

「うん？ああ。宇宙にいたときは自分で起きてたからな。イルマ中尉は知らなかっただろうけど、プルやプルツーとよく添い寝をしてたぞ。まあ、地球に帰ってきてからは無くなったけどな」

ソロモンにいた頃はよく3人で川の字になって寝てたからな。今は多分マリーダ中尉がいるから、姉妹仲良く眠っているだろうな。

「そ、そうなんですか。分かりました。悠斗さんが問題無いのであれば特に何もありません。失礼しました」

「イルマ中尉」

「はい？なにか？」

寝室から出ていこうとするイルマ中尉を呼び止める。イルマ中尉が此方を向いた。

「おはよう。今日も起こしに来てくれてありがとうな」

「い、いえ。私が自主的にしているだけですから。失礼しました（うー。悠斗の笑顔が素敵すぎ！私の顔が紅くなってるのが、自分でも分かるわ！胸のドキドキが止まらないわ）」

朝の挨拶をして日頃の感謝を伝えると、イルマ中尉は足早に寝室から退室して行った。

「さて、着替えるか」

「そうですね。着替えましょう」

俺はホシノ少佐に背を向けて、クローゼットを開き軍服（デラーズ中将等と同じ物）を取り出して着替える。どうやらホシノ少佐は軍服を畳んで持ってきていたらしくそのまま着替えている。俺は軍服に着替えると、クローゼットに付いている鏡を見ながら身嗜みを整える。　クローゼットを閉じて振り向くと、丁度ホシノ少佐も着替え終わっていた。俺は寝室の隣にある風呂場のドアを開けて、洗面台に立ち歯を磨く。ホシノ少佐も持参した歯ブラシで歯を磨いている。　歯ブラシを洗い、口を濯ぎ顔を冷水で洗う。タオルで顔を拭き終わるとタオルを洗濯に出すための篭に入れる。ホシノ少佐も終わった様だ。

「じゃあ行こうか」

「そうですね。朝食を食べに行きましょう」

俺達は寝室を出て執務室を通り、イルマ中尉と3人でＰＸに向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

私は今、悠斗の執務室で書類整理を行っています。　今日は朝から

大変な事が起こりました。そう！ホシノ少佐が悠斗のベッドの上で仲良く眠っていたのです。

（まさか、ホシノ少佐が大胆な行動に出るなんて。予想外にも程があるわ！　幸い、悠斗は特になんとも感じていないのが良かった所だけど、私が不利な状況であることは変わらないわ！どうにかして私もアピールしなくちゃ！）

チラリと横目で悠斗を見る。先程から悠斗は誰かと電話している。私は書類整理をしながら聞き耳を立ててみる。会話の内容が聞こえてきた。

「はい。そうですか。大東亜連合は良いと言ったのですか。それなら予定通り１０月の第一週を目処に調整をお願いします」

会話から察するとなにかの打ち合わせを行っているようだ。次の作戦の関係だろう。

「はい。では、お願いします。失礼します」

受話器を置いて悠斗は立ち上がった。

「ホシノ少佐。書類は出来てるかな？」

「はい。完成していますよ」

「済まないな。わざわざ頼んでしまって」

「いえ。なんの支障もありませんから」

そう言ってホシノ少佐が悠斗に書類を渡す。悠斗は素早く確認すると、私の方を見た。

「イルマ中尉！」

「あ、はい！なんですか？」

「済まないが、将官クラス（准将以上）会議を2時間後に緊急で行うと各将軍に連絡してくれないか？」

「分かりました。2時間後ですね」

「そうだ。俺は1時間程多次元訓練室で訓練をしてくるから、留守の間なにか有ったら連絡をくれ」

「分かりました。それでは失礼します」

私は悠斗から書類を受け取り、部屋を退室するのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

私は今、悠斗さんの執務室にいます。悠斗さんは先程までいたのですが、緊急の会議を開く関係で先程部屋を出て訓練をしに行かれました。イルマ中尉は悠斗さんに書類と会議の召集を頼まれて部屋を退室していきました。私は手元のパソコンを操作して先程の書類を確認する。

（Ｈ１７号目標、マンダレーハイヴ攻略作戦。作戦名震える山。旧ビルマ領にあるフェイズ５ハイヴであり、東南アジア戦線の最大攻撃目標。現在オリジナルハイヴを中心とするハイヴ郡の中で外周部分にあたるハイヴの１つです。１９９５年に建設されたハイヴですね。この頃にインド亜大陸がＢＥＴＡに制圧された事によりＢＥＴＡの東進が激化し、後退を重ねた結果ＢＥＴＡの占領下にされたビルマ領に建設されたハイヴですね。現在はタイの半分までが対ＢＥＴＡ戦線に組み込まれていますから、大東亜連合としては是が非でも攻略したいハイヴですからね）

事実、東南アジアの国々は奪われた祖国を奪還するために必死に戦っている。そこに、メビウスからハイヴ攻略作戦に参加して欲しいと打診が有れば渡りに船だ。

自分達の力でハイヴを攻略出来ないのであれば、他からの力を借りればいい。

また、東南アジア諸国はメビウスを支持している国々が大半を閉めていますから、お互いに軋轢を生むことはないだろう。

（流石に悠斗さんも良く考えていますね。米国の影響を受けにくい国々との共同作戦ですからね。

いくら米国が介入しようとしても、大東亜連合の様な多国籍軍相手なら簡単には介入できませんからね。また、大東亜連合は国連に編入されるのを嫌った国々が集まって出来ていますから、米国対する不信感が強いのも特長ですから）

改めて地球上のハイヴを攻略するのは大変だと思い知らされる。

（各国が戦後の利益と覇権を狙って虎視眈々と裏で暗躍していますからね。月とは違い、少々大変でしょうね）

そんなことを考えながらパソコンを操作して、違うファイルを開く。

悠斗さんを誘惑する作戦の次のプランが表示される。

（今日の反応を見る限り、Ｔシャツとショーツ姿ではダメなようです。やはり、イネスさんが昔言っていた通りスケスケのネグリジェで誘惑してみるしかありません！！しかし、タイミングが重要と言ってましたから良く考えてから行動しないといけません。当分はパジャマやワイシャツ等で反応を見てみましょう！）

私はパソコンの電源を落とし、悠斗さん誘惑作戦の次の手を考えながら執務室を退室するのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

「行くよ！超電磁砲（レールガン）！！」

「く！当たるか！」

俺は今多次元訓練室で修行を行っている。今日の修行の師匠はとある世界で、科学の力？を使いコインをマッハで射ってくる少女だ。射程は短いが俺を間合いに入れないように上手く超電磁砲（レールガン）を射ってくる。

「ふふ。どうしたの？攻めて来ないと勝てないよ！」

「なに？嘗めるな！行くぞ！流派東方不敗流！最終奥義！石破天驚拳ぇぇぇんん！！！」

俺の両手から闘気の塊が打ち出される。地面を抉り土煙を上げながら少女に向かって突き進む。

「ありゃ？これはヤバイかな？」

「たく！退いてろ！その幻想をぶち殺す！」

その声が聞こえた瞬間、俺の放った石破天驚拳が消滅した。消滅したその先には一人の青年が少女の前に立ち、右手を前に突き出していた。

「ほう。やるじゃないか」

「流石に次は出来るか分からねえよ。しかも、今の丸っきし手加減してたじゃねえか！」

「さすが、頼りになるね。さて、続きといきますか」

お互いに再び戦闘体勢に入る。一触即発の状態になるが、次の瞬間少女が膝を着いた。

「あ、あれ？電池切れだよ」

「おい！大丈夫か？」

「うん？どうやら今日の修行は此処までの様だな」

ツンツン頭の青年が、超電磁砲（レールガン）を操る少女に近付きお姫様抱っこをして立ち上がる。

「ごめんね。今日はもう戦えないね」

「すいません。今日の修行はこれで勘弁してもらえませんか？」

「構わないさ。俺もそろそろ行かなければならないのでな。今日は良い修行になった。感謝する」

俺は修行の相手をしてくれた二人に頭を下げる。

「いやいや、頭を上げてください！俺達の方が年下ですから！」

「そうだね。中途半端になっちゃったけど楽しかったよ。また呼んでね！」

「ああ。機会があればな。時間の様だ。さよならだ」

二人の姿が薄くなって行く。多次元訓練室で呼んだ人は元の世界に

帰る様になっている。まあ、修行の為に呼んだだけだから、二人は元の世界に帰るのだ。まあ、二人のいた世界では1秒しか時間が経っていないだろうがな。

「じゃあな！次は訓練以外だと嬉しいんだけどな」

「次こそ決着を着けるんだからね」

「じゃあな。二人とも仲良くな」

そう言って彼等は消えていった。その後、俺は多次元訓練室から出てシャワールームで、シャワーを浴びて軍服に着替えてＰＸに向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第六十一話（後書き）

最後の悠斗の修行は完全にネタです！キャラが完全に違うと思います。

とあるファンの方達には本当に謝ります。ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

感想などあればどうぞ。

第六十二話（前書き）

完成だ！最近なかなか書く時間が取れないから、大変です。
では、本文をどうぞ。

第六十二話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年９月２２日
秘密基地会議室

俺は今、会議室にて将官クラス会議（中佐以上）を開いている所だ。
出席者は俺、エギーユ・デラーズ中将、ユーリー・ハスラー少将、ユーリ・ケラーネ少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン少将（昇進）、フォン・ヘルシング大佐、ロイ・ジェーコフ准将（日本帝国より帰還後昇進）、ギニアス・サハリン少将（昇進）、シャア・アズナブル大佐、ノリス・パッカード大佐、ランバ・ラル大佐、シーマ・ガラハウ大佐（昇進）、ドライゼ大佐、アナベル・ガトー中佐、ジョニー・ライデン中佐（昇進）、シン・マツナガ中佐（昇進）、キリング中佐となっている。今日の議題はマンダレーハイヴ攻略作戦の説明だ。
ホシノ少佐が大型モニターの前に出てきた。

「出席者全員が揃いましたので、これよりＨ１７号目標マンダレーハイヴ攻略作戦の説明を始めます。司会進行は、私ホシノ・ルリ少佐が勤めさせていただきます」

「ウム。ホシノ少佐始めてくれたまえ」

デラーズ閣下の一声により、会場が静かになる。

「はい。説明を始めます。まず、此方の映像をご覧ください」

大型モニターに東南アジアの地図が映しだされた。地図には対ＢＥＴＡ防衛線も表示されている。

「此方が現在の東南アジア戦線の状態です。１９９５年に建設されたマンダレーハイヴからのＢＥＴＡ群により、戦線はタイの中央部にまで後退しています。現在は大東亜連合の奮起によりＢＥＴＡの南進を防いでいますが、このまま戦いが長引けばタイは元より周辺の国々、引いてはオーストラリア大陸にまでＢＥＴＡの進行を許してしまう恐れがあります。そこで、メビウスと大東亜連合の共同作戦が提案されました。それにより、マンダレーハイヴ攻略作戦の実施が決定しました。作戦結構日は１９９９年１０月７日に決定しました。これは、先に行った上級将校会議（准将以上）でも伝えられています」

「済まないが質問をしたいのだが？」

ジョニー・ライデン中佐が手を上げた。全員の視線がジョニー・ライデン中佐に集中する。

「構わぬぞ。ホシノ少佐。質問等があれば、答えてやってくれまいか？」

「デラーズ閣下。分かりました。それで、ジョニー・ライデン中佐はどんな質問なのですか？」

「なに、今回の作戦にはアメリカが絡んで繰るのですか？流石に、

明星作戦の時のようなのは御免ですよ」

ライデン中佐の意見に、あちこちから賛同する意見や声が上がる。皆流石に明星作戦の時のような悲劇は嫌なのだ。

「静かにせんか！！会議中だぞ！！ホシノ少佐。説明を頼む」

デラーズ閣下の一喝で、会議室に静寂が訪れる。皆、一様に黙って説明を待っている。

「デラーズ閣下。分かりました。ライデン中佐の質問ですが、今回の作戦はメビウスと大東亜連合の完全な共同作戦です。なので、米国が参加する事はありません」

「そうですか。それなら良いんですが　」

確かにライデン中佐の警戒する理由は分かる。明星作戦の際にはＧ弾を事前通告無しに投下する様な国だがらな。

「では、続けます。マンダレーハイヴ攻略作戦の全容ですが、第一段階が海上からの強襲上陸による橋頭堡確保。第二段階がハイヴ周囲を制圧。第三段階がハイヴ突入後制圧、残ＢＥＴＡの完全な掃討です」

大型モニターに作戦の推移を想定した予測図が映し出される。

「まず、第一段階ですが、洋上艦隊からの砲撃とビッグトレーからの砲撃でＢＥＴＡ群を排除します。また、水陸両用ＭＳ部隊が橋頭堡を確保します。第二段階は確保した橋頭堡から上陸したＭＳ部隊及び戦車部隊による周辺制圧になります。また、特に注意が必要な

のは周辺のハイヴからのＢＥＴＡの増援です。明星作戦と違い周辺には多数のハイヴが存在しますからＢＥＴＡの増援がかなり来ると予想されます」

「なに？ならば長期戦は必須か」

「確かにな。そうなると補給線の確保が非常に重要ですな」

ノイエン・ビッター少将とユーリー・ハスラー少将から声が上がる。確かに二人の言う通り、長期戦になればなるほど補給線を如何に確保するかが、勝敗を分ける事になるからだ。

あちこちから、「確かに補給線がものを言うな～」や「各兵士やパイロット、整備兵等の負担が増すだろう」等の意見が上がる。

「皆のもの静粛にな。まだ、説明が続いておるのだからな」

デラーズ閣下の一声で、会議室が再び静かになる。

「説明を再開します。第三段階ですが、ハイヴ内部に突入する事になるのは、戦術機とＭＳの部隊になります。なお、本作戦には軌道降下兵団による突入もあります。しかし、彼等だけでは必ずしも反応炉を破壊出来るとは限りませんので、海岸から上陸したメビウスのＭＳ部隊と、内陸部を進軍してきた大東亜連合の戦術機の部隊もハイヴ内部に突入する事になります」

「質問をよろしいだろうか？」

シャア・アズナブル大佐が挙手をして立ち上がる。

「はい。なんでしょうか？」

「内陸部を進軍してくる大東亜連合の部隊はメビウスと違い、長時間戦闘をしてからハイヴ周辺に展開するのであれば、我々以上に損耗率が高くなる可能性があるが、どうされるおつもりですか？」

シャア大佐が鋭い指摘をする。確かに普通に内陸部を進軍してくる大東亜連合軍と海上から強襲上陸するメビウスとでは、損耗率に顕著な差が出る確立はかなり高いだろう。無論手は打ってあるがな。

「その質問に対してですが、先に行われた上級将校会議でも指摘がありました。話し合いの結果、新たに新設された師団と共に進軍する事で、大東亜連合の負担を軽くすると決まりました」

「新設された師団ですか？初耳なのですが？」

シャア大佐が、やや表情を曇らせる。先の会議では大佐以下は出席していなかったからな。知ってる訳がないな。

「はい。新たに2つ増やされました。まず、第五師団。師団長はコンスコン少将です。副師団長はロイ・ジェーコフ准将です。次に、第六師団。師団長はギニアス・サハリン少将。副師団長はユーリ・ケラーネ少将です。
この新しい二個師団が、大東亜連合と共に陸路で進軍する事になっています」

「そうでした。ならば、私の発言はただの杞憂でしたな」

そう言って席に座るシャア大佐。参加者達も納得した様だ。

「話を進めます。作戦の第三段階ですが、軌道降下兵団と地上突入

部隊は反応炉の破壊を最優先事項とします。また、地上に残った部隊はＢＥＴＡの陽動を勤めます。突入部隊が作戦目標達成後、地上に残った部隊はＢＥＴＡの掃討が任務になります。この時残ＢＥＴＡ群を、他のハイヴに逃がしてはいけません。完全な掃討を行ってください」

仮に残ＢＥＴＡ群の中から他のハイヴに撤退した場合、即座に対応をとられてしまうからだ。そうなると、余計に内陸部のハイヴを攻略するのが大変になるからだ。
会議の出席者達は皆一様に頷いていた。

「以上が、マンダレーハイヴ攻略作戦の全容になります。作戦名は震える山です。これで説明を終了させていただきます」

ホシノ少佐がお辞儀をして説明が終了した。ホシノ少佐は下がって席に座った。

「厳しい戦いになるでしょうが、我々は負ける訳には参りませんからな」

「そうですな。ハスラー少将。しかし、此処でマンダレーハイヴを攻略する事で、オリジナルハイヴ攻略がより現実味を帯びてくる訳ですから、なんとしても勝たなければなりませんな」

「そうですぞ！ビッター少将の仰る通りです！我々がマンダレーハイヴを攻略する事で、人類に再び希望を与える事が出来るのです！」

ダン！と、机を叩くコンスコン少将。少々熱が入ったきたようだ。

「落ち着きたまえ、コンスコン少将。肩に力が入り過ぎておるぞ。皆もそれは分かっておるのだから、無用なプレッシャーを与えるな」

「む?デラーズ閣下がそう言うのであれば、私は何も言いませぬ」

そう言って、椅子に深く腰を掛けるコンスコン少将。その後会議は次の議題に進むのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

私は会議終了後、不動閣下より新型ＭＳを授与されたので格納庫を目指して廊下を歩いている。

「しっかし。新型ＭＳか。どんな機体なんだろうな?シャア大佐」

「ライデン中佐。口の聞き方を弁えた方がよろしいかと。シャア大佐が、怒りますよ?」

「なに、構わんよ。どうせ廊下を歩いているのは、我々四人だけだからな」

そう。現在私は、ライデン中佐。ガトー中佐。マツナガ中佐の四人で格納庫に向かっているのだ。　馴れ馴れしく話しかけてくるのが、ジョニー・ライデン中佐だ。私と同じく機体を赤く染めているそうだ。私をリスペクトしてくれているのだろう。ありがたい事だ。

「いや、ないから。寧ろ、誤認されて迷惑だからな」

「なに?私をリスペクトしているから、機体を赤くしているのではないのか?」

「違うから!シャア大佐の赤はピンク色系に近いだろうが!俺の機体の赤は血の色に近いんだよ!全然違うから!」

衝撃の事実が明らかになってしまった。まさか、ジョニー・ライデン中佐が私をリスペクトしていた訳では無かったのだ!

「いや、シャア大佐?そこまで驚く事なのか?私は不動閣下と同じパーソナルカラーだぞ?」

「確かに。マツナガ中佐のカラーは白ですからね。不動閣下も白をベースにされてますからね」

確かにガトー中佐の言う通りだ。良く考えると、この中でパーソナルカラーが被っていないのは、ガトー中佐だけではないか!(ランバ・ラル大佐は全身青だが、ガトー中佐は青と緑を使用するため一部被っていないだけ)

そんなことで盛り上がりながら歩いていると、いつの間にか格納庫

に着いていた。ハンガーを見ると、新型ＭＳゲルググが鎮座していた。

「これが新しい機体！」

「へぇ～。こいつが新型ＭＳゲルググね～」

「うむ。既に塗装も完了しているとわな」

「だが、所々違うようだぞ？」

一人一人、自機を見上げながら感想を言う。ゲルググを良く見てみると、１機、１機、異なる所が存在する。

例えば、マツナガ中佐のゲルググには、大型のプロペラタンクが増設されている。ライデン中佐のゲルググはスラスターが大型化していた。ガトー中佐のゲルググと私のゲルググには特に違いは見当たらなかった。

「あれ？皆集まってなにしてるんだ？」

「うん？アストナージ整備主任か。いや、新型ＭＳゲルググを見に来たんだ」

我々がゲルググを見ていると、丁度そこにアストナージ整備主任が通りがかった。

「まあ、皆さんが乗った事のある機体だからね。変わっている点は、スラスターの推進力とジェネレータの出力と追加武装位なもんだよ」

「なんだ。ヤッパリ外観に変化はねえのか」

「ライデン中佐。確かに外観に変化はないが、中身は桁違いの化け物さ」

アストナージ整備主任がやれやれと言った感じだ。ライデン中佐は、手すりにおっかかって機体を眺めている。

「それほどまでに、機体の性能が凄いのか？」

「ガトー中佐。言いたくは無いですけど、ガトー中佐のゲルググに装備される予定の大型ビームライフルは、フルチャージで発射した場合、ＧＰ０２のフルチャージビームバズーカに匹敵する威力を出せるんですよ！化け物以外の何者でもないですよ」

確かに。ゲルググでそれが出来るのなら化け物だな。私の機体はそう言った装備は無いがな。

「恐ろしいな。だが、仲間にそれほど強力な装備を持った者がいれば、頼もしいものだ」

「そうだな。要は、使い所を間違えなければ良いだけだからな」

どんな強力な兵器も、使い所を誤れば何の意味も無くなるからな。

「そうだ！皆、暇なんだろ？なら、コックピットの調整するから手伝っていけよ」

「うん？そうだな。私は構わないぞ」

「俺も良いぜ」

「私は構いません」

「私も構わぬぞ」

「良し！決まりだ！なら、早速機体に乗り込んでくれ！おぉーい！コックピット調整するから、集まれ！！」

アストナージ整備主任のかけ声に、整備兵達が集まって来る。
私達はそのまま機体に乗り込んで、整備兵達と共に機体の調整を行うのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

会議終了後、自分の執務室に戻り執務席に座り、窓の外を眺めていた。
既に太陽は沈み、美しい星空になっている。
お猪口に注がれた日本酒を飲む。日本酒独特の旨さが口に拡がる。

（ふむ。今宵は星が綺麗だな。さて、遂に正史に無かった展開になったな）

マンダレーハイヴ攻略。本来のあいとゆうきのおとぎばなしには、無かった作戦である。確かにマンダレーハイヴは、陽動が目的で攻撃された作戦はある。だが、それは本来のものがたりの最後、桜花作戦の時だ。

（まあ、今更だしな。月すら攻略してしまった俺が言えた義理はないか。あとは成すべき事を成すだけだ）

少なくとも大東亜連合の損害は、可能な限り最小限に止める必要がある。彼等にはマンダレーハイヴ制圧後、戦線を防衛してもらう必要があるからだ。

（さて、２０００年になったら次世代主力ＭＳの生産を始めなければな。既にパイロット達からはザク？以上の機体を求める意見が上がって来ているしな）

確かにザク？は、ジオン軍の傑作量産ＭＳだ。ゲルググの配備に制限を付けている以上、早期に次世代主力ＭＳを考えなければならない。

（ザク？にするか、バウにするか、ゼク・アインにするか、それともハイ・ザックにするか。なかなか難しいな）

頭を振り、浮かんできた考えを振り払う。

再び日本酒をお猪口に注ぎ、口にするのだった。

悠斗sideout

第六十二話（後書き）

大雨の正で大迷惑を被ってます。土砂崩れは起きるは、自宅が浸水しそうになるはで大変です。
読者の皆様も気を付けてください。
感想などあればどうぞ。

第六十三話（前書き）

完成しました。久しぶりに戦闘シーンがあります。では、本文をどうぞ。

第六十三話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１０月7日
インド洋沖ビッグトレーバターン号

俺は今マンダレーハイヴまで海上２０ｋｍ地点で艦隊を集結させて待機している所だ。
各師団の戦力は以下の通りだ。

第一師団　師団長エギーユ・デラーズ中将

戦力

オリジナル戦艦３０隻

紀伊級戦艦３０隻

巡洋艦

巡洋戦艦３０隻

イージス艦４０隻

ミサイル巡洋艦４０隻

情報収集艦１５隻

空母

タケミカズチ級空母２００隻

搭載ＭＳはドムシリーズとアナベル・ガトー専用ゲルググです。

第二師団　師団長ノイエン・ビッター少将

陸上戦艦

ビッグトレー１００隻

戦車

６１式戦車　３００車両

マゼラ・アタック　３００車両

ガンタンク？　１０００機

ホバートラック　１０００車両

ＭＳ

ザク？Ｆ２型　１０００機

ザク?改　　１０００機

ザク・キャノン　５００機

ザクＲ－１型　１００機

グフ　５０機

グフ・カスタム　３０機

となっています。海岸からの上陸部隊です。

第三師団　師団長ユーリー・ハスラー少将

陸上戦艦

ビック・トレー　１５０隻

戦車

６１式戦車　５００車両

マゼラ・アタック　５００車両

ガンタンク?　２０００機

ホバートラック　２０００車両

ＭＳ

ザク?Ｆ２型　２０００機

ザク?改　１０００機

ザク・キャノン　１０００機

グフ　１００機

グフ・カスタム　６０機

ドム　２００機

ドム・トローペン　２００機

ドム・キャノン　２００機

ゲルググ　１０機

ゲルググキャノン　１５機

ゲルググＪ（イェーガー）　２０機

ヒルドルプ　１０機

となっています。これも海岸から上陸します。

第四師団　師団長不動悠斗大将

陸上戦艦

ビック・トレー　２５０隻
戦車
６１式戦車　６００車両
マゼラ・アタック　６００車両
ガンタンク？　３０００機
ホバートラック　３０００車両
ＭＳ
ザク？Ｆ２型　１０００機
ザク？Ｒ－１型　９００機
ザク・キャノン　５００機
グフ　２００機
グフ・カスタム　２００機
ドム　１００機
ドム・トローペン　１００機
ドムキャノン　１００機
ヒルドルプ　３０機

ゲルググ　２０機

ゲルググキャノン　２０機

ゲルググＪ２０機（イェーガー）

となっている。海岸から上陸してハイヴ内部に第一師団のＭＳと第四師団のＭＳが突入する予定です。

第五師団　師団長コンスコン少将

陸上戦艦

ビック・トレー　３００隻

戦車

６１式戦車２０００車両

マゼラ・アタック　２０００車両

ガンタンク？　３０００機

ホバートラック　３０００車両

ＭＳ

ザク？Ｆ２型　１０００機

ザク？Ｒ－１型　１０００機

ザク・キャノン１０００機

グフ　１００機

グフ・カスタム　１００機
ドム　５００機

ドム・トローペン　５００機

ドム・キャノン　５００機
ゲルググ　１０機

ゲルググキャノン　１０機
ゲルググＪ（イェーガー）　１０機

ヒルドルブ　５００機

大東亜連合と共に陸路で進軍して、ハイヴ周辺に展開します。

第六師団　師団長ギニアス・サハリン少将

陸上戦艦

ビック・トレー　３００隻
戦車

６１式戦車２０００車両

マゼラ・アタック　２０００車両

ガンタンク？　３０００機

ホバートラック　３０００車両

ＭＳ

ザク？Ｆ２型　１０００機

ザク？Ｒ－１型　１０００機

ザク・キャノン１０００機

グフ　１００機

グフ・カスタム　１００機

ドム　４００機

ドム・トローペン　４００機

ドム・キャノン　４００機

ヒルドルブ　４００機

第五師団と同様に、大東亜連合と陸路で進軍して来るが、途中で陽動に入る。

潜水艦艦隊　艦隊司令ドライゼ大佐

潜水艦

ユーコン級　１００隻

マットアングラー級　５０隻

ＭＳ

ゴック　１０００機

ハイ・ゴック　４０００機

ズゴック　１０００機

ズゴックＥ　２０００機

となっている。水中から進軍して橋頭堡確保が最大の任務である。

俺はブリッジの椅子に座り直す。腕時計で時間を確認すると、作戦開始まであと2分程ある。

（既に第五師団、第六師団、大東亜連合の陸上部隊は移動を開始したな。あとは、ＢＥＴＡが移動を開始したら此方も砲撃を開始すればいいな）

そんな事を考えていると、ブリッジが騒がしくなった。

「マンダレーハイヴより、ＢＥＴＡ群の移動を感知しました！陸路部隊を狙っています！」

「第五師団より入電！！我進軍開始せり！です！」

オペレーター達が矢継ぎ早に情報をくれる。
即座に判断を下す。

「よし！マンダレーハイヴ攻略作戦を開始する！各艦に入電！戦闘開始だ！　主砲発射準備！」

「主砲発射準備完了しました！」

「射てぇぇぇぇ！！」

ビッグトレーの主砲と三連装副砲が放たれる。
各戦艦、巡洋艦、巡洋戦艦から砲撃が開始される。地表から上空に向かってレーザー照射が行われる。大量のＡＬ弾が迎撃される。

「ＡＬ弾、迎撃されました！重金属雲発生を確認！また、アンチレーザー撹乱幕の展開を完了！」

イルマ中尉が報告する。即座に次の指示を出す。

「ドライゼ大佐に入電！水陸両用ＭＳ部隊を発信させろ！橋頭堡を確保するんだ！」

「了解！こちら」

そのまま指示を出し戦闘を続行するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ロイｓｉｄｅ

マンダレーハイヴまで５０ｋｍの地点まで進行した我々第五師団は、現在大量のＢＥＴＡと攻防を繰り広げていた。
私はビッグトレーのブリッジで戦車隊の式を執っている。
「前方より第３派目のＢＥＴＡ群の増援を確認しました！ＢＥＴＡ群の規模は師団クラスです！」

「ＢＥＴＡを引き付けろ！６１式戦車隊とマゼラ・アタック隊は砲撃準備！ＭＳ部隊、戦術機部隊を射線から後退させろ！」

「了解しました！こちらＨＱより各機へ！戦車隊による一斉射撃を行う。当該地域のＭＳ及び戦術機は、安全圏に退避せよ！繰り返す」

オペレーターに指示を出す。前方より土煙を上げながら、突撃級の大軍が向かってくる。距離が詰まり戦車隊の射邸内に入る。ビッグトレーの砲撃も何時でも射てる。
更にＢＥＴＡが接近してくる

（まだだ。まだ、早い）

どんどん突撃級が迫って来る。そろそろ本艦の危険ラインに到達する所だ。

「今だ！一斉射撃始め」

私の掛け声により、ビッグトレー及び戦車隊から砲弾が発射される。発射された砲弾は、次々と突撃級を貫通して爆発を起こす。砲弾が全て爆発し終わると、辺り一面に突撃級の残骸が散らかっていた。

「前衛の突撃級の殲滅を完了しました！中衛の要撃級との距離が開きました！」

「良し！ヒルドルブ隊に入電しろ！砲撃で仕留めるんだ！」

オペレーターがヒルドルブ隊に通信を入れる。展開していた戦車隊が間を開ける。ただでさえ大きかった機体を、更に大型化されたモビルタンクヒルドルブが本艦のやや前方に展開する。その数５０機。３０インチ砲が既に発射準備が完了していた。

前衛の突撃級より遅れて、中衛の要撃級の大群が此方に接近してきた。その少し後ろから、要塞級や重光線級や光線級などが進軍してくる。

しかし、中衛の要撃級は突撃級よりも遅いため余り圧迫感が無い。中衛の要撃級や戦車級がヒルドルブの有効射邸内に入った。

「今だ！射てぇぇぇ！」

ヒルドルブの戦車砲が一斉に火を吹く。中衛の要撃級に命中して大爆発を起こす。凄まじい爆発と爆風が発生する。

まず爆発に巻き込まれたＢＥＴＡは全滅しただろう。最後の爆発が終わり、煙が晴れてゆく。要撃級を初めとする中衛のＢＥＴＡは無論、後衛にいた要塞級や重光線級等のＢＥＴＡが全滅していたのだ。

「す、凄い威力です」

「なんて、破壊力なんだ！」

ブリッジクルー達が様々な感想を口にする。
私はヒルドルブの戦果に目を奪われていた。

（なんたる強さ！これこそ陸の王者たる戦車だ！）

「増援のＢＥＴＡ群の撃破を完了しました！」

オペレーターが状況を報告する。私は直ぐ我に変えると指示を出す。

「全速前進！マンダレーハイヴを目指し進軍あるのみだ！」

私はそのまま指示を出しながら、進軍を再開するのだった。

ロイｓｉｄｅｏｕｔ

コンスコンｓｉｄｅ

「増援のＢＥＴＡ群の撃破を確認しました」

オペレーターが状況報告　をしてくれる。
儂は、ブリッジの司令席に座り指揮を取る。

本艦に同乗している大東亜連合の将軍達は、先程のヒルドルブ隊の砲撃の威力に目を奪われている。

「よし。前進せよ！急ぎマンダレーハイヴに向かうのだ！」

「は！機関全速前進！」

ビッグトレーが前進を開始する。大東亜連合の将軍達が側に寄ってくる。

「先程の戦車は素晴らしいですな。あれほどの大口径の戦車砲は始めて見ました」

「そうでしょうな。あの大型戦車はメビウスの新型主力戦車ですからな」

「なんと！あれが新型戦車ですか。まさに陸の王者ですな。ハッハハハ」

大東亜連合の将軍がヒルドルブの感想を伝えてくる。まあ、普通の軍ならまず量産するような戦車の大きさではないからな。どちからと言えば、移動砲台に見えるからな。

「センサーに反応あり！ＢＥＴＡの第四派目の増援です！」

「迎撃だ！迎撃するんだ！」

「距離・・・・３ｋｍ手前に出現します！」

オペレーターが状況報告した、次の瞬間地面が吹き飛び土煙がもう

もうと立ち上がる中、ＢＥＴＡ群が地底から表れた。

「く！ＭＳ部隊及び戦術機部隊を迎撃に当てろ！何としてもビッグトレー及び戦車隊に被害を出すな！」

「了解しました。ＨＱよりＭＳ部隊及び戦術機部隊へ、前方に出現したＢＥＴＡ群を撃破せよ。繰り返す」

儂の指示を受けたオペレーターが、ＭＳや戦術機に指示を出す。ブリッジの横を迷彩カラーのゲルググキャノンが通りすぎて行った。そのあとから続々と、ＭＳ及び戦術機が前線に突入していくのを見送るのだった。

コンスコンｓｉｄｅｏｕｔ

トーマス・クルツｓｉｄｅ

コンスコン少将の乗艦しているビッグトレーの横を通り過ぎて上空から、突撃級をビームライフルで射殺する。ビームライフルの直撃を受けた突撃級は体の真ん中に穴が開いて横転して死んだ。横転した突撃級に何体かの突撃級が巻き込まれて横転する。下にいた小型種が巻き込まれて死んだだろう。

「チッ！レーザー照射か！」

計器がレーザー照射を行われていると警告をする。俺は機体の高度を下げると、先程俺がいた地点をレーザーが通り過ぎた。レーダーを確認すると、出現した穴の付近に光線級と重光線級の反応があった。

（まずは、邪魔な奴から消すか！）

スラスターを全開にして一気にＢＥＴＡの群れに飛び込む。右手のビームライフルで接近してくる突撃級を纏めて射殺する。要撃級の尻尾が俺の機体に迫ってくる。

スラスターを小刻みに噴射して方向を変え、左手に持ったビームナギナタで要撃級を切り裂く。

「邪魔すんじゃねえよ！！」

更に奥を目指して移動する。地面に脚を着く。小型種の戦車級を纏めて踏み潰す。わらわらと赤い戦車級が俺のゲルググに取り付くが、いくら攻撃してもフェイズシフト装甲のおかげでキズ１つつかない。

「へっ！痛くも痒くもねえんだよ！」

光線級を守るように布陣する要塞級をロックオンする。ビームをチャージする。肩のビームキャノンにエネルギーが収縮する。

「くたばりな！ＢＥＴＡ！」

肩のビームキャノンから圧縮されたビームが発射される。圧縮されたビームは光線級を守るように展開していた要塞級を纏めて溶かし

た。その後ろにいた重光線級もドロドロに溶けて赤い体液を吹き出しながら絶命した。

「さあ！ショータイムの時間だ！」

俺はゲルググを操り、増援で表れたＢＥＴＡを皆殺しにするのだった。

トーマス・クルツｓｉｄｅｏｕｔ

第六十三話（後書き）

う～ん。最近戦闘シーンより日常編を書いていたから、ちょっと難しかったな。

感想などあればどうぞ。

第六十四話（前書き）

完成しました。今回でマンダレーハイヴ編は終了です。では、本文をどうぞ。

第六十四話

ギニアスｓｉｄｅ

陸路で進軍を開始してから三時間が経過した。
現在我々第六師団はマンダレーハイヴより４０ｋｍ地点まで進軍した。
既にＢＥＴＡの増援は第１０派を越えている。しかも、全て師団クラス又は軍団クラスで表れるのだ。数の暴力は恐ろしい物だ。

「ＢＥＴＡの増援を確認しました」

「規模はどうした？」

「はい。軍団クラスです。しかし、場所が変なんですが？」

オペレーターが首を傾げる。ＢＥＴＡはハイヴから進軍してくるのだから、変な場所に出現はしないはずだ。

「何処に出現する予定だ？」

「はい。進路は此方なんですが、向かってきた方向はマンダレーハイヴがある地点ではないのです」

オペレーターの発言に、私は頭にある推測が浮かんできた。

「何処からだ？何処から向かってくる？」

「え?あ、はい。中国の山間部の方角からです」

私の推測が1つに繋がった。間違いない。ＢＥＴＡの増援は他のハイヴからも来ている。

「そうか。今回の増援は恐らく、重慶ハイヴからの増援だ」

「「「「な!本当ですか!!」」」」

ブリッジクルー達が驚きの声をあげる。今まで、ＢＥＴＡの増援が他のハイヴから来た実例はあるから不思議では無い。

明星作戦の時にも、佐渡島ハイヴから増援部隊が出発しようとしたが、佐渡島ハイヴから1歩も出ることが出来ずに全滅させられたのだからな。

今回も同じものだ。

「案ずるな。各々がキチンと自分の実力をはっきすれば問題ないのだからな。それより、今は目の前のＢＥＴＡに集中するんだ。主砲発射準備!ＢＥＴＡに大量の砲弾をプレゼントしてやるのだ!」

「は!了解!主砲発射準備!」

ビッグトレーの砲頭が動きだし中央を向いた。

ＢＥＴＡ群が此方に向かって来る。有効射邸内に入った。

「主砲一斉発射!」

前方から接近してくるＢＥＴＡに、各ビッグトレーから発射された砲弾が命中して大爆発を起こす。

「射撃を怠るな。徹底的にＢＥＴＡに砲撃を浴びせろ」

それから暫くの間、凄まじい砲撃がＢＥＴＡ群に襲いかかるのだった。

ギニアスｓｉｄｅｏｕｔ

ノリスｓｉｄｅ

「ふん！」

Ｂ３グフのヒートサーベルで要塞級を真っ二つにする。切り裂かれた要塞級は、その巨体から体液を撒き散らしながら地面に崩れ落ちた。

既に戦闘開始から五時間は過ぎた。

既に第六師団は本隊から離れ、陽動任務に当たっている。マンダレーハイヴから引きずり出したＢＥＴＡ群相手に奮戦を続けていた。

（チッ！不味いな。いくら機体が良くとも、パイロットに掛かる負担はかなり厳しいな）

自機の周囲の友軍をレーダーで確認すると、現在交戦を続けている

ＭＳ部隊は私を含めて８００機余りのＭＳが戦っていた。

（厳しい状況だな。正面に１０００機はいたＭＳが今や、８００機前後まで減っているとわな。パイロットの死亡は無いものの、戦力は確実に低下してきているな。そうなると、右翼と左翼の部隊も確実に疲弊しているだろう）

そんな事を考えながら、此方に向かって来る要撃級に、ガトリングシールドを構えて発射する。

ガトリングシールドから発射された弾丸が要撃級に命中して、体のあちらこちらから体液と肉片を飛び散らせ、要撃級を絶命させる。

更に接近してきた要撃級を、今度はヒートサーベルで切り裂く。

要撃級が前腕を振り上げて攻撃してくるも、サイドブーストで間合いを取り回避してガトリングシールドを放つ。

ただひたすらＢＥＴＡを撃破する。

（ええい！いくら倒してもキリがないな！）

スラスターを吹かし、要塞級に接近して頭にヒートロッドを巻き付ける。　スラスターを切り、振り子の様に上から要塞級の腹の下に入る。触手が伸びてくるが、ガトリングシールドで衝角ごと蜂の巣にする。

「ふん！弱い！」

巻き付けていたヒートロッドを、そのまま下に降下しながら引っ張る。要塞級の頭がヒートロッドに切り裂かれて、地面に落下した。

「此方ＨＱ。ノリス大佐ご無事ですか？」

「此方は問題ない」

「そうですか。ノリス大佐の連続戦闘時間が6時間になりますので、一旦休憩の為に帰還してください。既に交代の部隊を派遣しましたので」

「了解した。交代の部隊の到着後、一時帰還する」

オペレーターとのやりとりを終え通信を切る。モニターで前を見ると、前方から要撃級が集団接近してくる。

「ふん！貴様らごときに私は殺られはせん！」

スラスターを全開にしてブーストダッシュで間合いを詰める。右手に持ったヒートサーベルですれ違い様に一体切り捨てる。次に隣にいた、要撃級をガトリングシールドで蜂の巣にする。

「甘い！不意を狙うならもっと分からんようにするのだな！」

ガトリングシールドを発射中に右側面から、要撃級の尻尾が迫ってくるがクイックブーストで回避し、ガトリングシールドの銃弾をプレゼントする。

「ぬ！ちぃ！」

後ろを振り向くと要撃級が前腕を振り上げて、叩き付けてきた。咄嗟にシールドを上に向けてガードする。ミシミシと音がコックピットの中に響く。

「なめるな！！」

スラスターを全開にして要撃級の腕を押し返す。地面から機体が浮き上がった。クイックブーストをして、要撃級から距離をとりガトリングシールドを構えると、要撃級から赤い花が咲いた。

「大丈夫ですか？ノリス・パッカード大佐！」

レーダーを確認してみると、交代の部隊が到着した所だった。

「援護感謝する。そちらは交代の部隊か？」

「はい。そうです。交代部隊の指揮官ロイ・グリンウッド少佐であります。パッカード大佐が維持していた戦線を代わりに維持することになりました」

通信画面にて敬礼するグリンウッド少佐。私も返礼する。

「あともう少しだ。残りのＢＥＴＡを撃破したら後退する。それで構わんな？」

「は！分かりました。援護します」

グリンウッド少佐との通信を切り、残存するＢＥＴＡを連携して撃破する。残存していたＢＥＴＡを全滅させるのには、さほど時間がかからなかった。その後、グリンウッド少佐の部隊に戦線を委ね、ビッグトレーに帰還するのだった。

ノリスｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

作戦開始から既に６時間が経過した。私はマリーネ・ライターに乗りハイヴ周辺の門（ゲート）の確保をしていた。軌道降下兵団は既に突入していた。

「チッ！突入部隊はまだ、反応炉を破壊出来ないのかい！？」

「シーマ様。まだ、突入してから１時間しか経ってませんから、我慢してください」

私の愚痴に、随伴する部下が宥めてくる。別に怒ってる訳じゃないんだがね。機体のレーダーが反応する。レーダーを確認すると、下から旅団規模のＢＥＴＡが向かって来ていた。此方を撃破するつもりなのだろう。

「お前たち！下から来るよ！上に飛びな！」

「了解です！」

私の指示に従って部下達がブーストジャンプして上空に退避する。

幸いモニュメントが後ろにあるため、光線級がいたとしてもレーダー照射はされない。私らの部隊が上空に退避すると、先程いた門（ゲート）より少し先の地面が吹き飛んだ。土煙を上げてＢＥＴＡ群が出現した。

「フフフ。選り取りみどり楽しいね」

穴を掘って出現したＢＥＴＡにロックオンする。　大型ビームマシンガンを発射する。穴から出てきたばかりの突撃級や小型種から体液が飛び散る。

「海兵隊をなめるんじゃねえ！」

「へっへ！くたばりな！」

僚機のゲルググＭ（マリーネ）が、ＭＭＰ－９０マシンガンを発射する。
密集するＢＥＴＡを撃破してゆく。
私は地面に着地して、ビームサーベルに持ち変えてスラスターを吹かし、ＢＥＴＡ群に突撃する。

「オラオラ！のんびりしてるんじゃないよ！」

頭部バルカン砲で小型種を撃破しつつ、先程出現したばかりの要撃級の体を切り裂く。凪ぎ払った勢いを生かしたまま、機体を１回転させる。
私の後ろに接近してきた要撃も切り裂く。

「シーマ様！ご無事ですか！？」

「このやろう！邪魔すんな！」

「くらいやがれ！」

僚機のゲルググMが、私の周りに寄ってきてＢＥＴＡを撃破する。
1機のゲルググMはビームサーベルで、要塞級を真っ二つにする。
他の2機は連携して要塞級に接近する。1機がマシンガンで牽制して周りの小型種を撃破し、もう1機がナックルシールドで要塞級の顔面を殴る。　ナックルシールドで殴られた要塞級は頭部が潰されてグチャグチャになり、地面にその巨体を預ける事になった。

「さあ、お前達！一気にケリをつけるよ！」

「「「了解です。シーマ様！！」」」

私は部下と共に出現したＢＥＴＡを掃討するのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

マリーダｓｉｄｅ

「へっへん！当たらないよ～だ！」

「はっ！私を狙うんなんて１００年早いよ！」

プルとプルツーが、ＢＥＴＡを陽動して１ヶ所に誘き寄せる。私はジャイアント・バズを構える。　プルとプルツーが回避行動に入ったのを確認してジャイアント・バズを発射する。

「墜ちなさい！」

発射された弾は１ヶ所に集まっていたＢＥＴＡに命中して、大爆発を起こす。

「ふう～。漸く最下層までたどり着いたね」

「全くだ。悠斗もなかなかめんどくさい事を命令するから、進むのが遅れているよ」

「プルツー。マスターの悪口を言わないの！それに　、ＢＥＴＡを全滅させるのは後々の事を考えているからよ」

「そんなことは、分かっているさマリーダ。唯の独り言だよ」

愚痴を吐くプルツーを叱る。確かに、ＢＥＴＡを全滅させながら進むより、最低限だけを撃破して進んだ方が遥かに早く反応炉に到達出来るだろう。しかし、此処でＢＥＴＡを全滅させておかなければ、反応炉を破壊した際に他のハイヴに退却して他のハイヴが飽和状態になり、東進が更に激しくなる恐れがある。後顧の憂いを断つためにも、ＢＥＴＡを全滅させなければならないのだ。

「よっしゃあ！俺が一番乗りだぜ！」

「くそ～。ライデン中佐に勝てなかった！」

「まだだ！まだ、終わらんよ！」

通信回線に近くの部隊の通信が入ってきた。声からすると、ライデン中佐、グレミー中尉、マシュマー大尉の３人の様だ。どうやら、上から縦坑を降下している最中の様だ。もうすぐ此処に到着するだろう。

「ハッハハ！残念だが反応炉を破壊して勲章を貰うのは俺だな！」

「いやいや。まだ、負けませんよ！勲章を貰うのは私です。そして、女性にモテるのも私なのです！」

「否！断じて否！騎士である私こそが、勲章を叙勲されるに相応しいのです」

３人の反応が近付いて来た。上を見上げると、１個大隊のＭＳ部隊が降下して来ていた。

「ライデン中佐。どうやら、一番乗りは我々ではなさそうですぞ」

「ああ。３機のドム（サイコミュ試験型）が既にいるね」

「ええ。カラーリングからして、プル、プルツー、マリーダ中尉の３人ですね」

他のパイロットの声が聞こえてきた。降下してきた部隊は私達の周囲に着陸した。ザク？、ドム、ゲルググ、各小隊が進路を確保及び確認を開始した。

「ラカン大尉、キャラ大尉、イリア中尉ですか。お疲れ様です」

「ご苦労だね。あんたらがいるなら、不動大将も既に突入してるのかい？」

キャラ大尉がモニターに映し出された。私が敬礼すると、キャラ大尉も返礼された。

「いえ。不動閣下は出撃されていません」

「そうかい。てっきりマリーダ中尉達が出撃してるから、不動閣下も出撃したと思ったんだ」

「いえ。今回はビッグトレーにて、指揮を執ることに専念されるとの事なので」

普通は総司令がＭＳに乗って、出撃して最前線に立つ事はしませんからね。あくまで、マスターが特別なだけなのです。

「おいおい？二人とも。俺を忘れないでくれよ。不動閣下が出撃しなくとも、この真紅の稲妻、ジョニー・ライデンがいるから安心してくれよ！」

歯をキラリと輝かせて、通信に割り込んでくるライデン中佐。

（正直、ライデン中佐のカッコつけはどうでもいいのですが。悠斗さん以外の男性に興味などありませんし）

「ライデン中佐！女性陣が引いてます！全く、女性にモテるのなら常に男はジェントルマンでなければなりませんよ！」

今度はマザコン、ロリコン、女運の無い、２枚目擬きのグレミー・トト中尉が通信に入ってきた。

（また、更に微妙なのが入ってきましたね。彼の下で戦っていた事を思い出すと、プル、プルツー、私が不憫でなりません）

既に二人が通信回線に入ってきてから、プルはプルツーとお喋りしているし、イリア中尉は苦笑いを浮かべている。キャラ大尉に至っては部下に指示を出している。

「何を言っとるのだ！余計に引かれたではないか！全く。騎士でないもの達はこれだから」

薔薇の花を手に持ってカッコつけたマシュマー・セロ大尉も通信に参加してきた。

（花屋で買っている薔薇でカッコいいと思う辺りで、既に駄目な気がするんですが）それから暫くの間、イケメントリオ（自称）の論戦が続き、最終的にラカン・ダニガン大尉が怒るまで続いたが、その頃には既に反応炉は女性陣により破壊されて制圧されているのだった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

マンダレーハイヴ攻略作戦、通称震える山を開始してから半日が経過した　辺りで、マンダレーハイヴの反応炉の反応が無くなり、残存していたＢＥＴＡが退却を開始した。　現在は第五師団と大東亜連合がハイヴ周辺の制圧と確保を行っている。
俺は残存ＢＥＴＡの追撃と掃討を指揮している。

「主砲一斉発射！残存ＢＥＴＡ群を逃がすな！」

ビッグトレーの主砲と三連装砲が一斉発射される。共に追撃に従軍しているビッグトレーからも砲撃を浴びさせる。
レーダーから撤退してたＢＥＴＡ群の反応が無くなった。どうやら、無事に全滅させる事に成功した。

（さて、後はＧ元素をめぐる話があるな。大東亜連合には分けるし、残りをどするかだな。世界が欲しがっているからな）

既に、大東亜連合とのＧ元素についての話はついている。マンダレーハイヴから手に入れたＧ元素をどう使用するか、考えるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第六十四話（後書き）

暑い日々がしんどいです。俺のＰＳ３、初期型だからゲームしてると熱いのなんの。まあ、バイオ〇ザード２やってるんで、肝は冷えまくりですけどね。

感想などあればどうぞ。

第六十五話（前書き）

やっとこ完成。短いですが、本文をどうぞ。

第六十五話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１０月１０日　メビウス秘密基地執務

マンダレーハイヴ攻略作戦。通称、震える山を完了してから3日がたった。　作戦完了後、大東亜連合軍にマンダレーハイヴ周辺の戦線維持と制圧を引き継いで、俺達は秘密基地に帰還した。
現在マンダレーハイヴ跡地は、大東亜連合軍が中心になって調査等をしている。手に持って目を通していた書類を机の上に置く。

（ふむ。反応炉の完全破壊をしてあるから、調査しても大した事は分からないだろう。G元素は既に突入部隊が内密に回収してあるからな）

マリーダ中尉達が突入して、反応炉破壊後に大東亜連合と交わした密約の通り頂いてある。総量の半分がメビウスに。もう半分が大東亜連合に渡ったのだ。

（まあ、月で手に入れたG元素と合わせると、かなりの量が手に入ったな。　マンダレーハイヴから手に入れたG元素は、香月博士に提供するか。そうすれば、帝国軍に提供するのに使われるだろう）

恐らく、帝国軍に借りを作る為に作った電磁投射砲のコアモジュールにG元素が使用されていたはずだ。その際にかなりの量が必要になるはずだ。

（まあ、いずれお世話になるだろうから、此処等でより友好関係になっておくのがベストだろう）

２００１年の１０月からは、横浜基地に駐屯するつもりだから、駐屯許可を貰う等の為に使うのが良いだろう。ついでにリーディング防止の為に使用されるだろう。

（まあ、００ユニットに対する防衛措置は完了してるからな。例え半導体１５０億個分の並列処理装置が可能だろうが、メビウスが使用しているスーパーコンピューター（神様仕様のチート改造済）の、処理能力には勝てないからな）

処理能力なら、００ユニットの数千倍だ。なおかつ、それを平然と使いこなす電子の妖精がいるからな。

（取り敢えず、暫く先の事より目の前の書類をかたずけるか）

机の上に置かれている書類を手に取って、目を通す。取った書類にはヒルドルブに関する報告書だった。

（うむ～。ヒルドルブに付いては、様々な問題点が浮き彫りになったな）

報告書には、ヒルドルブを正式量産するよりも、違う兵器を量産する方が良いと提言されていた。

（やはり、男のロマンだけでは駄目なのか？しかし、搭乗した戦車兵からの反応は上々だしな）

報告書によると、ヒルドルブの主砲の威力にや戦車としての能力は絶賛されているが、反面、横転した際に自力で建て直せない点などが数多く指摘されていた。

（う～ん。ヒルドルブの海外販売は一旦白紙だな。横転したヒルドルブを起こすのに、ザク？が１０機も必要なのは痛いしな。初期生産型１０００機をメビウスで使用するに止めるか）

戦闘中にヒルドルブを起こす為にザク？が１０機も取られたら、著しい戦力低下が発生してしまう。ましてや、強化されたザク？が１０機なら、戦術機ではまず起こせないだろうな。

そんなことを考えながら　ヒルドルブの書類を置き　、次の書類を手に取る。　今度は、ゲルググの配備に関する要望書だった。　しかも書類には、ギニアス少将、コンスコン少将、エリオット・レム中佐の連署による署名がされていた。３人の連署には意味があり、最重要項目と言う意味がある。

（確かに。レム中佐は良いところに目を付けたな。まさか、陸戦型ゲルググを配備してほしいか。あの機体は、三連装ミサイルポッドが標準装備されてるからな。ビームライフルを装備させないで、ＭＭＰ－８０マシンガンをメインにすれば、ビームナギナタだけがビーム兵器になるから、ＢＥＴＡに対策をとられる確率はかなり低くなるな）

要望書にはＢＥＴＡに対策をとられないようにするために、実弾兵器をメインにすることでゲルググの配備を進めて欲しいと記されて

いた。
更に、武装が少ないと言うゲルググの弱点を考慮して、左腕の三連装ミサイルポッドの他にシュツルムファウストを追加して火力を強化している。

（これなら、ビームライフルが無くても充分戦えるな。後は強化パーツにフェイズシフト装甲、無限弾薬＆エネルギー回復装置、ナノスキン装甲で充分だろう）

既に起動されているパソコンを操作して、生産ラインを選択する。
モニターにこう表示される。

陸戦型ゲルググ。生産数３０００機。日産１５０機。在庫数０機

（まあ、取り敢えずこれで良いな。後は、次期主力陸上艦だな。ビッグトレーは良い艦だけど、そろそろ機体の積載数を考えると厳しいんだよな）

マウスを操作して、陸上艦の項目を開く。ダブデやフリーデン等の艦が表示される。

（そう言えば、ハマーン事務総長は上手くいったかな？まだ連絡が来ないからな。まあ、相手には、けして悪い話を持っていった訳じゃないからな。後は、向こうの出方だな）

そんな事を考えながら、次期主力陸上艦を考えるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

マンダレーハイヴ攻略作戦を完了し、帰還した我々は休日となっている。まあ、総司令の悠斗だけは書類に追われているだろうがな。ワシの務室にて、旧友達と酒を酌み交わしていた。出席者は、ユーリー・ハスラー少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン少将だ。皆、ワイングラスを片手に談笑をしている。

「しかし、今回のマンダレーハイヴ攻略作戦は、なかなか大変だったな」

「うむ。ビッターの言う通りだ。各ハイヴからの増援は厄介だったからな」

ユーリーが相づちを打つ。確かに、此度の作戦はマンダレーハイヴからのＢＥＴＡよりも、増援で来たＢＥＴＡの数が多かったのが、実情だからだ。特に重慶ハイヴとボパールハイヴからの増援は双方合わせて１９回に達した程だからだ。

「しかし、今回の作戦で２つのハイヴのＢＥＴＡがかなり損耗しただろうから、暫くは戦線が膠着状態になるだろうな」

「コンスコンの言う通りだ。暫くの間ＢＥＴＡは南進しないだろう。大東亜連合も、マンダレーハイヴの跡地を利用して前線基地を建設

するだろうしな」

そう言って、グラスに注がれたワインを飲む。年代物のワインだけあって非常に上手い。皆もワインを飲んでいた。

「ふ～、上手いな。やはり、良い酒は早く減るな」

「ふふふ。アクシズにいた頃は、良い酒は無かったのか？」

「ビッター。流石にアクシズでは、良い酒には恵まれなかったよ。況してや閉鎖された空間で生活していたんだ。嗜好品で良い物は、上級将校位しかまともに手に入らなかったしな」

「そうか。まあ、アフリカ戦線は更に地獄だったからな」

ビッターとユーリーの二人が、辛気くさい暗い話を始める。

「こら、こら。なにを、辛気くさい話をしておる。今日は軽い祝勝会なんだから、暗い話は忘れて楽しまなければな！」

「ふふ。コンスコンの言う通りだ。我々は今、此処で生きておるのだ。過去に拘るより、今を精一杯生きねばな」

かつての記憶を忘れることは出来ん。ならば、新たに受けた生を楽しく生きねばならん。過去を引きずっていて、前に進める訳では無いからだ。

「そうだな。少々辛気くさくなってしまったな」

「そうだな。なら、改めて乾杯をするか」

全員がソファーからワイングラスを手に立ち上がる。

「では、マンダレーハイヴ攻略を祝して、乾杯！」

「「「乾杯！」」」

チンとグラスを全員と当ててワインを飲みほす。　また、ソファーに座りワインを注いで飲むのであった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

私は国連本部ビルの執務室にて、ある人物を待っていた。

（フフ。悠斗がまさか私に橋渡し役を頼むとわな。まあ、悠斗からの頼みだからな無下にする必要も無いしな）

そっと自分の唇を指でなぞる。悠斗にキスした時の感触が頭に思い出される。

（フフ。悠斗の唇は熱く柔らかかったな。やはり、あの時自重など

せずに舌を入れるべきだったな）

想像するのは、自宅のバルコニーで悠斗共にディープキスをする私の姿だ。悠斗に強く抱きしめられながら、情熱的なキスをするシーンが頭に浮かんでくる。

（欲を言えば、その後二人でベッドインもありだな。だが待てよ、そうするならドレスよりもう少し脱ぎやすい服装の方が、いや、悠斗は脱がす方が好きかも知れん！？）

様々な、思案が浮かんでは消える。正直、此れからある面会よりも、悠斗がどう言った趣味なのかが気になりはじめた。

「コーヒーをどうぞ」

「うん？ああ。すまないな」

何時の間にか、秘書官がコーヒーを出してくれていた。秘書官に礼を言い、砂糖を1つ入れてスプーンで混ぜて溶かす。スプーンを出して、コーヒーを口にする。ほんのりとした甘さが口の中に広がり、リラックスする。

「あまり、根を積めないでください。ハマーン事務総長が倒れられたら、誰も代わりはいないのですから」

「大丈夫だ。そんなに疲れてはいないからな」

「その割には、先程だいぶ難しいお顔をなされていましたが？」

「なに、大したことではないさ（悠斗に関わる大事な事なのだがな）

。それより、この後の予定はどうなっている？」

秘書官が私を心配してくれるが、生憎と心配されるほど疲れてはいない。　先程、私が考え事をしていた表情が疲れている様に見えたのだろう。

私の尋ねた事に、手帳を開いてこの後の予定を報告する秘書官。

「はい。本日はこの面会のが終われば、本日の職務は終了です」

「そうか。分かった」

そう言ってコーヒーを飲み干し、秘書官にカップを下げてもらう。

暫くすると、ドアがノックされた。

「どうぞ。お入りください」

「では、失礼しますハマーン事務総長」

ドアを開けて、スーツを着た一人の男性が室内に入ってきた。

私は立ち上がり、彼をソファーに案内する。秘書官にコーヒーを出すように指示して二人で向かい会う。

「それで、本日はどのような用件で私を呼び出したのですか？ハマーン事務総長」

「まあ、先ずはこれを見ていただきたい」

私は準備していた書類を彼に手渡す。彼は書類を受け取り、目を通し始める。途中で秘書官がコーヒーを持ってきた。それを置かせて、暫く下がる様に伝える。秘書官が部屋を退室した。

書類を見ている男性の表情がコロコロと変わる。　そして、書類を

机の上に置いた。

「ハマーン事務総長。これは本当なのか？」

「ああ。嘘偽りなく本当だ。メビウスの不動大将からの要望だ」

男性はかなり驚いた表情になる。まあ、普通なら信じられない内容だからだ。

「今回の要望は、貴殿達の国に不利益を与える物では無い。どうだ？この要望を承認できないか？」

「私の一存では何とも言えん。ですが、直ぐに本国に連絡を入る。返答を暫し待ってほしい」

「分かった。なら、よろしく頼みますぞ、ソビエト国連大使」

彼は、直ぐに立ち上がり部屋を退室していった。

（ふふ。さて、どう動くか見ものだな）

私は隣の部屋から秘書官を呼び、コーヒーをかたずける様に頼み帰宅の準備をするのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

第六十五話（後書き）

取り敢えず、暫くはゲルググを使います。
陸戦型ゲルググを思い出したのは、ガンダム戦記（ＰＳ２版）を久しぶりにやってた時に思い出したので出しました。
感想などあればどうぞ。

第六十六話（前書き）

完成～。疲れました。盆に入りましたが、仕事は休みにならない。
では、本編をどうぞ。

第六十六話

１９９９年１０月７日に行われたメビウスと大東亜連合による、マンダレーハイヴ攻略作戦成功の報は世界中に波及した。

アメリカｓｉｄ

緊急召集の一報を受けた政府関係者及び軍の各将軍が、ホワイトハウスにて緊急会議を行っていた。
大統領が机に両肘を着いて手を口の前で絡ませてため息を吐いた。

「諸君わざわざ、休日の呼び出しに応じてくれて感謝する」

「いえ。大統領の緊急呼び出しとあらば、例え休日と言えど集まらない訳には参りませんよ」

国防長官がそう言いはなつ。他の出席者達も頷く。

「そうか。さて、諸君等の大事な休日を潰して申し訳ないが、本日諸君等を呼び出したのには訳がある」

「我々を呼び出す程の、大事件が発生したのですか！？」

「そうだ。空軍の将軍。詳しい説明は、ＣＩＡ長官からしてもらう」

大統領がそう言うと、頭がやや後退した眼鏡をかけたＣＩＡ長官が、

椅子から立ち上がった。

「それでは、説明させていただきます。１９９９年１０月７日早朝から開始されたビルマ領マンダレーハイヴ攻略作戦ですが、メビウスと大東亜連合の共同作戦によりマンダレーハイヴの攻略に成功しました」

「な、なんだと!?G弾を頼らずに攻略に成功したと言うのか!?フェイズ5のハイヴだぞ!?」

海軍の将軍が驚きの声を上げる。他の出席者達は唖然とした表情だ。よもやG弾に頼らずにハイヴを攻略するとは、誰も信じていなかったのだ。

「残念ながら将軍、これは事実なのです。我が国の戦略衛星がマンダレーハイヴを撮影した所、ハイヴの地表構造物（モニュメント）は跡形もなく破壊されていました」

「「「「ハイヴの地表構造物（モニュメント）が!?」」」」

地表構造物（モニュメント）。それは、地球上にハイヴが建設された証である。天を貫かんと高く聳えるハイヴの象徴である。

様々な研究者達が調べてはいるが、未だに謎が多い構造物の1つだ。一説によると、６００ｍを超えた地表構造物（モニュメント）は射出体と呼ばれる機能を有する事から、ＢＥＴＡが宇宙に向けて何等かの物を打ち出している事が分かっている。また、地表構造物（モニュメント）は非常に硬く、通常兵器（戦術機の武装）では破壊するのが困難であると確認されている。破壊するなら、Ｓ－１１等の破壊力がある爆弾を、大量に使用しなければならい程だ。

それが破壊されているとなれば、ハイヴ攻略作戦が成功したとみて

間違いないだろう。

「更に、合衆国にとってマイナスなのが、G元素を大東亜連合とメビウスが手に入れた事です。メビウスは分かりませんが、大東亜連合は日本帝国と繋がりが深く、第四計画推進派です。恐らく、今回手に入れたG元素の何割かは、横浜の魔女の元に渡るかと思われます」

「それが分かっているなら、何故手を打たんのだ！　横浜の魔女に貴重なG元素をみすみす奪われるのだぞ！」

ダン！と机を叩いて、陸軍の将軍が声を荒げる。　出席者達の視線が集まる。

「手を打ちたくても、打てない状況なのです！大東亜連合には、我が国と内通してる者が誰一人上級職にいないのです！下組の者はG元素に近付く事が出来ないのです！」

「ならば、外交で攻めればよかろうが！！金を出せば簡単に言うことを聞くだろうが！！」

「既にメビウスに手を打たれたのだ！マンダレーハイヴ跡地に造られる基地の資材等をメビウスが援助するとな！残念ながら挽回の仕様がない！」

ＣＩＡ長官も負けじと声を荒げる。両者の空気は一触即発状態だ。

「二人とも止めないか！！我々が争ってどうする！？そんな事よりも、対策を練らねばなるまい！」

大統領が一喝する。ＣＩＡ長官と陸軍の将軍が席に座る。

「全く。Ｇ元素を手に入れられないのは痛手だが、それよりも今回のマンダレーハイヴ攻略成功により、Ｇ弾驚異論を唱える国々の動きが活発化する恐れがある。最悪の場合Ｇ弾不要論まで噴出しかねん。そんなものが、もし発表されたなら、我が合衆国の誇りに傷を付ける事になってしまう！
それだけは、何としても防がねばならん！」

「大統領の仰る通りです。我が合衆国のドクトリンを、根本からひっくり返す事態に成りかねません。早急に手を打つべきかと」

大統領の力説に国防長官が同意する。
出席者達も強く頷く。
それから夜通し会議を行う事になるのだった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

ロンドンのとある会議室にて、現在欧州連合に参加している各国が会議を行っていた。

「さて、今見てもらった映像がマンダレーハイヴ攻略作戦の全容だ」

「イギリス代表。これは本当なのですか！？未だに私は信じられません。G弾を使用せずに、フェイズ5ハイヴを攻略した等と」

「オランダ代表。今の映像は大東亜連合から、提供された本物の映像だ」

各国の代表達は驚きを隠せなかった。まさか、G弾を使用せずに、フェイズ5ハイヴを攻略したのだからだ。明星作戦の時ですら、G弾による攻撃でハイヴを攻略するに至ったのに、今回の作戦では通常戦力で攻略したからだ。

「メビウスの力を借りれば、欧州奪還とて夢ではない！」

「そうですな。西ドイツ代表の言う通りですな。我々、欧州連合の最大の目標は欧州奪還ですからな」

西ドイツ代表とイタリア代表が欧州奪還に意欲を見せる。他の国々の代表からも声が上がる。

「やはり、目下最大の目標はリヨンハイヴを攻略することですな。それに成功すれは、我がフランスは祖国を取り戻せる！」

「フランス代表。本音がただ漏れですよ。確かに、リヨンハイヴを攻略出来れば、欧州奪還の第一歩になります。反面、失敗したときは欧州戦線が崩壊するリスクがありますな。前例が仮にもあるのですから」

ベルギー代表がフランス代表に釘を刺しつつ、メリットとデメリットをしてきする。会議の出席者達は、かつて欧州戦線が崩壊した作戦を思い出していた。
パレオロゴス作戦。
今から、２１年前に行われた人類史上最大規模の作戦である。
当時フェイズ３レベルのミンスクハイヴを攻略して、欧州戦線の安定を目指した作戦である
人類初のハイヴ突入と、ヴォークルデータの回収が出来た作戦である。
しかし、作戦そのものが失敗したため、それが原因で今日至る迄欧州戦線が敗北を重ねる原因になった作戦だ。それから、２１年が経過したが遂に人類は欧州大陸から追い出され、島々でＢＥＴＡの進行を食い止める日々が続いているのだ。

「２１年前と今では、戦術機のレベルも兵の質も違う！更にメビウスと言う切り札（ジョーカー）があるのだ！今回は負けることなどない！」

「西ドイツ代表落ち着いてください。確かに兵の数は減りましたが、その分技術力は増加しましたな。しかし、遅々として第３世代機の開発がイギリスを除く国々では進んでいません。先ずは、戦力を整えるのが先かと」
「いや、マンダレーハイヴを攻略した今こそ、リヨンハイヴを攻略するべきだ。今なら、兵達の士気も高まっている」
各国代表達が様々な意見を議論する。会議室の中は怒号が飛び交い始めた。
「何を凄む必要がある！？今こそ、欧州大陸を取り戻す絶好の機会ではないか！」

「いや、長年の戦いで失われた兵力や装備を充実させてから、ハイヴを攻略すべきだ」

会議室の中は二つに割れていた。直ぐにハイヴを攻略するべきと主張する交戦派と、戦力を回復させてから攻略するべきと主張する消極派の意見に別れていた。

会議室が激しい喧騒に包まれているなか、我関せずと、コーヒーを飲んでいたイギリス代表とフランス代表が、一石を投じる。

「しかし、メビウスとてマンダレーハイヴ攻略作戦で、戦力を損失している筈だ。直ぐに要請しても、参加してもらえないだろうな。そう思わないかフランス代表？」

「そう思いますなイギリス代表。だいたい、どの国がメビウスの不動大将に要請を出すのですか？まず、不動大将とパイプを持っているのはハマーン事務総長だけなんだがな。ハマーン事務総長を説得するのは、並大抵の努力じゃないな」

会議室の中が静まり帰る。確かに、言われてみるとリヨンハイヴを攻略するにあたって、メビウスの参加が絶対条件に上がっているが、どの国がメビウスと交渉するか等は決まっていなかった。

ましてや、国連事務総長のハマーン氏を説得することなど、誰一人考えていなかったのだ。

「まあ、今は戦力を回復させつつ時期を待つのが、賢明だと思うがな」

「そうですな」

その後会議は激しい騒動に包まれる事なく、粛々と進むのだった。

欧州連合ｓｉｄｅｏｕｔ

ソビエトｓｉｄｅ

アラスカのとある執務室にて、ソビエト社会主義連邦を構成するもの達が一様に集まり、会議を開いていた。書記長が立ち上がり話を始める。

「さて、諸君。今、我々は祖国を追い出され租借地であるアラスカの地で生活を余儀なくされている。日々、我等が祖国の地で多くの兵達が戦っているが、戦線は日々後退の一路を辿っている。しかし、遂に我々に流れが来た。メビウスがマンダレーハイヴを通常戦略にて攻略したのだ」

出席者達が「おおー」と、声を上げる。皆非常に驚いた表情だ。書記長は長い髭を、右手で軽く撫でて話を続ける。

「更に先日、我が国の国連大使にハマーン事務総長から、不動大将からの手紙を受け取った。不動大将は、我等がソビエトとに援助を申し出てくれたのだ」

書記長の言葉に、一人の男が手を挙げて発言許可を求めた。

「どうした同士将軍よ?」

「書記長。メビウスが本当に援助してくださるのですか?私には、信じられないのですが」

「流石に、ただで援助してくれる訳ではない」

「では、どの様な要求があったのですか?」

出席者達が息を飲む。出席者達の表情が固くなり　執務室の空気に緊張が走る。

「なに。大したことではない。ユーコン基地で現在調整されている、第3計画の遺児二人を譲渡して欲しいだけだ。ただし、プロミネンス計画に参加してからだがな」

はぁ～と、参加者達がため息をついた。皆、もっと無理難題を突き付けてくると考えたからだ。

「そうですか。しかし、あれは、中央戦略開発軍団が管理しているはずですが?」

「なに、既に手を打ってある。イェジー・サンダーク中尉を大尉に昇進させて此方に呼び戻した。彼は、此方に戻り次第スフォーニ設計局に移動になる。ブドミール・ロゴフスキー中佐も此方に帰還させた後、昇進してミコヤム・グルビッチ設計局に移動になる」

「Π3計画の中心人物を全て入れ替えるのですな。研究者達はどう

するのですか？」

将軍が書記長に訪ねる。出席者達も書記長に注目する。

「研究者達はそのまま残すが、計画主任のイーゴリ・ベリャーエフには消えてもらう。これが、メビウスが望んだ要求だ。私にはあんな小娘どもに、なんの価値が有るか分からないが、メビウスには必要なのだろう。

それに、小娘二人を譲渡するだけでメビウスから援助を受けられるなら安い物だ。此くらいの移動など、何等影響が有るわけではないしな」

「ですが、書記長。中央戦略開発軍団が黙っているとは、思えないのですが？」

将軍が疑問をぶつける。中央戦略開発軍団はエリートの集まりだ。当然プライドの高い連中が反発して来るのは必須だ。

「問題はない。既に中央戦略開発軍団には、話を通してある。Π３計画が解散されるのは痛いが、メビウスからの援助を受け、祖国奪還に繋がるなら目を瞑るそうだ」

「そうですか。しかし、そうすると後任は誰にするのですか？」

ブドミール・ロゴフスキー中佐が帰還するとなると、後任を送らなければならない。中央開発軍団はロシア人のエリートで固められた組織だ。

当然後任もロシア人でなければならない。

「後任は決まっている。同士ニカノールだ」

「おお！ニカノール少将ですか！？彼ならば、問題ありませんな。彼は元中央開発軍団出身ですからな」

出席者達も頷く。次期ソビエト社会主義連邦の書記長候補として名高い男だ。現在の書記長の古くからの友人でもある。

「それで、同士ニカノールはどうしたのですか？」

「今、此方に向かっている最中だ。もう間も無く着くだろう」

「書記長。発言の許可を」

将軍とは別の男性が手を上げる。皆の視線が男性に集中する。

「どうした？ＫＧＢ長官？」

「メビウスから援助されるのは、なんなのですか？」

「うん？おお！そう言えば、話していなかったな。量産型砲撃支援ＭＳ」

書記長がＭＳの名前を言おうとした時、室内にノックの音が響いた。

「入りたまえ。鍵は開いている」

「失礼します」

ドアを開けて軍服を着た男性が室内に入ってきた。

「おお！着たか！同士ニカノール！」

「どうも。久しぶりですな書記長。本日はどのような用件で私を呼び出したのですか？」

やや、身長は低いががっしりとした体型の男性が書記長と握手をかわす。　彼の名は、セリョージャ・ヴィクトロヴィッチ・ニカノール。元中央開発軍団出身で、現在はスフォーニ設計局で局長を勤めている男だ。

「うむ。来て早々に悪いが、ニカノール。君にはユーコン基地に行ってもらう」

「ユーコン基地ですか？？なにか、緊急の事態が発生したのですか！？」

ニカノールが緊張した面持ちになる。自身が呼ばれたのはユーコン基地で何等かの事態が発生したと推測したようだ。

「違う。人事異動だ」

「ふう～。驚かさないでください。単なる人事異動ですか」

「フフ。単なる人事異動ではない。これはソビエト社会主義連邦の存続が関わる事なのだ」

「！なら、先ずは説明をお願いします」

「うむ。順を追って話そう。席に座ってくれたまえ」

ニカノールが席に座る。その後、書記長により事の発端を説明され

るのだった。

ソビエトｓｉｄｅｏｕｔ

香月博士ｓｉｄｅ

私は仙台にある、臨時の研究室にてある書類に目を通していた。

（へぇ～。まさか、マンダレーハイヴを本当に攻略するなんてね。まあ、明星作戦の時は邪魔が入ったから、仕方がないわよね）

鎧衣課長が持ってきた情報だから、情報の出所に間違いはない。
私は書類を机に置いて、背もたれに体重を預ける。

（まあ、私の研究は横浜基地が完成しない限り、進まないからどうしようもないのだけどね。
しかし、今回の作戦で手に入れたG元素をどうするのかしら？大東亜連合は第五計画に反対している立場だから、米国に渡る可能性は無いわね。むしろ、メビウスがどうするのか気になるわね）

不動大将も、あまり米国に良い印象は無いように見えるから、メビウスに渡ったG元素もやはり米国に渡る様な事は無いだろう。

（となると、メビウスが独自で何か開発するかも知れないわね。まあ、当面は様子見ね。下手に藪をつついて蛇が出てきたら困るからね）

そんなことを考えながら、背伸びをして体をほぐすのだった。

香月博士ｓｉｄｅｏｕｔ

神様ｓｉｄｅ

久しぶりの登場の神様じゃ！ワシは今、ヘラの説教を受けながら悠斗を送った世界を見ておる。

「良いですか貴方！私を差し置いて他の女を口説くとは、何事ですか！」

「悪かった。ワシが悪かった！この通り謝るから、勘弁してくれないか？」

ワシは妻のヘラに土下座する。しかし、ヘラの説教は止まる事を知らない。

「他の世界を見ながら言われても、誠意の一欠片も感じません！！」

ヘラの説教がどんどん激しくなる。

（ふむ。悠斗のやつめ、なかなか面白い様に動くの～。これからどうなるか、楽しみだのう～）

そんなことを考えていると、ヘラの説教が消えたのだ。ワシは顔を上げてみると、そこにはメチャクチャ良い笑顔をした妻のヘラと、フル装備状態の娘のアテナがいた。

（ワシ、終わったかも！？）

「「少しは、反省しなさい！！」」

「べぶぅ！」

ワシはそれから、妻と娘にボコボコにさるるのであった。

神様ｓｉｄｅｏｕｔ

第六十六話（後書き）

紅の姉妹救済フラグと。前から、感想で要望があったのでそろそろ救済に向かってみます。
まあ、彼女達が関わるのはＴＥ編に突入してからですけどね。
感想などあればどうぞ。

第六十七話（前書き）

か、完成した。お盆はマジで仕事が忙しいです。では、本文をどうぞ。

第六十七話

イルマｓｉｄｅ

１９９９年１０月２５日　秘密基地歓楽街

久しぶりの休日に私は基地の南側にある、歓楽街に家族と買い物に来ていた。

「お姉ちゃん久しぶりのお休みだね」

「そうね。キャサリンの言う通りね」

私の右隣を歩いている、妹のキャサリン・テスレフ。私と違い、髪は背中の真ん中まで伸びており、身長は私より少し低い。今は、この秘密基地の街で看護学校に通っているわ。

「そう言えば、家族揃って買い物に行くのは本当に久しぶりなのね。イルマは軍で働いているし、父さんは行方不明のままだものね」

「そうね母さん。でも、帰って来るたびに顔は出してたわよ？」

「そうだったわね。けど、こうして家族と過ごせる様になっただけ

でも、私は幸せよ。アメリカに居た頃は、イルマは忙しくて帰って来なかったから」

私は黙る。確かにアメリカに居た頃は、軍の訓練や職務が忙しくてなかなか、帰れなかったから。　私の左隣を歩いているのが、母のマリー・テスレフだ。母は、私より少し髪が長くセミロング程で、細身の体だ。激動の時代の中、私達二人を育てただけあって芯の強い女性だ。今は花屋で働いている。マシュマー・セロ大尉がよく薔薇を買いにくるらしい。

「そう言えば、姉さんはいつまで此方に居られるの？」

「そうね。まあ、しばらくは居られると思うわ。大規模な作戦は終わったばかりだから」

マンダレーハイヴ攻略作戦が終了したばかりだ。不動閣下は暫くの間は動くつもりはないと、この間の会議で話していた。

（たまには悠斗も休めば良いのに。昨日話してた感じからすると、今日も働いていいんでしょうね）

秘密基地に帰還してからと言うもの、悠斗は全く休んでいなかった。特にここ最近は休日返上で働いている。
正直、倒れないか不安がある。

「イルマ。どうしたの？眉間にシワを寄せて？」

「え？ああ。ゴメン母さん。大した事じゃないから」

母が心配そうな顔をしていた。私は、手を振り慌てて否定する。

「え～？本当は、好きな人の事を考えたりして～？」

「キャサリン～？拳骨が欲しいのかしら？」

私を茶化してくるキャサリンに、とても良い笑顔で振り向く。キャサリンは顔を真っ青にしていた。

「ゴメンナサイ！ゴメンナサイ！謝るから、許して！」

「ふう。全く」

「けど、姉さんはそろそろ歳を意識した方が良いと思うよ」

「そうね。母さんとしては、そろそろ孫の顔が見たいわね」

二人して「ねー」と、言ってくる。確かに私も結婚したいとは思う。でも、私の意中の相手の悠斗は、残念ながらまだ私の気持ちに気付いてくれていないのだ。

「ふふ。どうやらイルマには好きな人がいるようね。母さん、とても楽しみだわ」

手を口元に添えて微笑む母さん。２児の母とは思えない程可愛らしかった。

「へ～。お姉ちゃん好きな人がいるんだ～。どんな人なの？」

ニヤニヤと笑いながらキャサリンが聞いてくる。　どうやら私をからかうつもりの様だ。

私は無言で、キャサリンの頭に拳骨をおみまいした。キャサリンは膝を着いて、頭を両手で押さえて痛がっている。

「つっ～～～！！？」

「全く！姉をからかおうなんて、１０年早いのよ！」

「あらあら。姉妹喧嘩は止めなさいね。買い物に行くんだから」

呑気な口調で母が注意する。それから暫くして、キャサリンの痛みが取れたので、３人で買い物を続けるのであった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

私は今、マリーダ、プル、プルツーの四人で歓楽街のカフェテラスでお茶会をしていた。

「ふう。あらかた買いたい物は買えたね」

「はい。取り敢えず日常品は買い足し出来ましたからね」

私は注文したアイスカフェオレを飲む。ほんのりとした甘さが口の中に拡がる。マリーダは、レモンティーを飲んでいた。

「美味しい！やっぱり、パフェはイチゴだよ！」

「そうかい？私はチョコレートも捨てがたいと思うけど」

プルとプルツーはパフェを食べている。プルがイチゴパフェでプルツーがチョコレートパフェだ。　とちらも、高さ３０Ｃｍ位はある。二人とも幸せそうにパフェを食べている。

「プル。ちょっと待ってね」

「うん？なに？」

マリーダが隣に座っている、プルの頬っぺたに付いた生クリームを指で拭き取り口にする。

「うん。甘いわね。もう少しお行儀よく食べてね。慌てなくても良いから」

「は～い！」

マリーダの注意に返事をすると、再びパフェを方張るプル。見ていてとても微笑ましい光景だ。

「ふふ。なんだか姉妹てよりも、親子の様に見えるね」

「そうですか？まあ、プルはよく、頬っぺたにご飯とか付けていますからね。自然と私が取って上げるようになりましたから」

そう言って微笑むマリーダ。普段なかなか笑顔にならない彼女だが、いざ微笑むとなかなか可愛らしかった。

（こりゃ確かに、普通の男なら墜ちるね。まあ、悠斗はこれくらいじゃ駄目だからね）

そんなことを考えながら、私の隣に座っているプルツーを見る。先程から黙々とパフェを食べているが、その表情は年相応の少女の笑顔だった。

（まあ、プルツーはプルと違ってあんまり表情を出さないからね。でも、今の顔を見てると、やっぱり子供だね）

カフェオレを再び飲む。　氷が溶けて少し味が薄くなっていた。

（やっぱり悠斗の元に来てからは、大分落ち着いて生活してるね。おかげで悪夢に苛まれる事も無くなったしね）

リリーマルレーンで生活してた頃は、寝るたびに1年戦争の時の嫌な記憶が甦ってきたけど、今はそれも無くなりゆっくりと寝れる様になった。

戦う事には変わりないが、それでも補給や物資を気にしないで生活出来るとなると違う。出来なかった頃は、危ない橋を渡り続ける日々だったからだ。そんなことを考えていると声をかけられた。

「シーマさん？どうかしたんですか？」

「うん？なに、昔を思い出してただけだよ」

「そうですか。それより、このあとどうしますか？」

「そうだね。後は軽く見てまわればいいんじゃないかい？」

「そうですね。そうしましょうか」

マリーダと、この後の予定を話し合いながらお茶を楽しむのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

ドーンと鈍い音が響く。高射砲による砲撃の音だ。あちこちで銃声が鳴り響く。私は近くの遮蔽物に身を隠す。周りを見渡すと、何人もの兵士達がいた。隣にいたカリウスが話かけてくる。

「ガトー中佐！偵察部隊より報告です！！１ｋｍ先に敵の砲撃陣地があります！航空部隊の安全を確保するためにも破壊しなくてはなりません！」

「分かった！カリウス、貴様は部隊を率いて西から進軍するんだ！！私は東から攻める！」

「分かりました！第４分隊は私について来い！西から対空陣地を攻めるぞ！」

「「「「了解！」」」」

カリウスと共に１０数人の兵士達が西側から、砲撃陣地を目指して進軍を開始した。

「第３分隊は私に続け！東側から砲撃陣地を目指す！」

「「「「了解です！」」」」

私は遮蔽物から飛び出して先にある、民家の扉の前に立つ。小銃を構えてドアを蹴破る。ドアが倒れると、敵兵が機関銃を射ってきた。私は、素早く民家の階段に隠れる。　銃撃が止んだので、階段の影から飛び出し、小銃を構える。丁度物陰から頭を出して此方を伺っていた兵士の頭を小銃で狙い射つ。小銃から発射された弾丸は敵兵の頭に命中した。敵兵は頭から血を流して絶命した。民家の１階の中に血の臭いが拡がる。仲間の兵士が私に近寄ってきた。

「ガトー中佐。民家の制圧完了しました」

「ご苦労。敵増援はあるか？」

「今の所ありません。今、２階で鹵獲した通信機で情報収集してる所です」

慌ただしく兵士が２階から降りてきた。

「大変です！？敵の増援部隊が此方に向かって来ています！」

「なに！本当か！？」

「はい。先程通信機から流れてきた報告によると、砲撃陣地の防衛に当たるために追加の敵部隊の増援が向かっているそうです！」

「急ぐぞ！増援部隊が到着する前に敵を叩く！」

「「了解！」」

私は裏口のドアを蹴破り、外に出る。他の兵士達も私に続いて進軍する。　川沿いを暫く進軍すると、橋の近くに対空陣地を発見した。高い塔の上に対空砲があった。
周囲を確認すると、土嚢とコンクリートによる防御壁が設置されていた。私達は橋の下に降りる階段から下に降り、敵兵にバレない様に橋の下に移動する。案の定橋の近くに鉄製の扉があった。

「おい。爆薬を持ってこい！」

「はい。おい。最後尾のマーヴィンを呼べ」

「了解」

私は隣にいた軍曹に爆薬を持ってくるように命じる。軍曹は部下に、爆薬を持っている兵を呼ぶように指示する。
少しすると、爆薬を持っている兵士が来た。

「マーヴィン。扉を吹き飛ばせ」

「了解！離れてください！」

マーヴィンが爆薬をセットする。私達は近くの物陰に隠れる。爆薬をセットしたマーヴィンも隠れた瞬間、爆薬が爆発して扉を吹き飛ばした。

「今だ！突入するんだ！」

「「「「了解！」」」」

私の号令を受けて、兵士達が内部に突入した。私も最後尾で内部に突入する。内部の敵兵を殺害しつつ、対空砲を目指す。あちこちらに敵兵の死体が転がっているが、気にも止めずに進む。私は中腹程で止まり、脱出路確保に入る。３人の兵を連れて外に通じるドアを開く。案の定橋の正面に出た。それから暫くすると、対空砲が爆発した。

「「「「ヤッターー！！」」」」

周りから歓声が上がる。　私の画面にミッションクリアと表示されて、画面が暗くなる。私は操作個体から外に出た。
外に出ると、明るい照明に目を細める。周囲は機械音が鳴り響いていた。隣の操作個体からカリウスが出てきた。

「いや～。最後の方は見事でしたね」

「なに。私は出口を確保しただけさ。他のユーザーが爆発してくれただけだ」

私達は今日が休日とあって、久しぶりにゲームセンターに遊びに来ていた。今、私達がしていたのはリアルシミュレーターゲーム、メ

ダルオ○オ○ナーアーケード版だ。
なんでも、モビルトレースシステムの原理を流用、改修して、一般人でも負荷のかからない様にして、体を動かして遊べるゲームだ。
秘密基地の町にあるゲームセンターなら、何処にでもあるゲームだ。
また、グロテスクな表現をオン、オフがゲーム中でも出来るため、グロテスクが苦手な方でも出来る様になっている。
私はグロテスクオンでプレイしているがな。

「しかし、第二次世界大戦をモチーフにしたゲームだけあって、難しかったな。よもや、対人戦があれほど難しいとは思わなかったな」

「確かにそうですね。今、現実で使用している武器なら対人戦でもなんとかなるでしょうが、昔の武器は連射出来ないから大変ですな」

ほんの５５年前までは、あんな感じで戦争してた事を考えると今の戦争は画期的な感じすらするほどだ。

「まあ、ゲームはゲームだからな。それより、次のゲームをしようではないか？」

「そうですね。次のゲームに向かいますか」

私とカリウスは、違うゲームをするために移動するのだった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

俺は今、執務室でハマーン事務総長と衛星通信で話し合いをしている。

「以上がソビエトからの返答になる。なにか、不明な点はあるか？」

「いえ。寧ろ、ソビエトが条件を承諾してくれて、ホッとしています」

「まあな。しかし、提示した見返りはけして安くはなかろうに？」

ソビエトに渡す機体は、メビウスでは量産するつもりの無い機体だから、別に痛くも痒くもない。技術的な面から見ても、核反応炉を使用してる訳では無いので大したことはない。まあ、戦術機より圧倒的に強いが、メビウスの魔改造ＭＳよりは弱いからな。

「別に大したことありませんよ。では、モルゲンレーテ社を通じて、３日以内には全て納品させます」

「ああ。分かった。ソビエト大使に伝えておく。そちらも、余り無理をするなよ悠斗」

「分かってますよハマーン事務総長。暫くは大規模な作戦の予定はありませんから」

「そうか。では、またなにか進展があったら連絡する」

「は！」

大型モニターの映像が消える。俺は、机に付いているスイッチを押す。

大型モニターが天井にしまわれる。俺は椅子の背もたれに体重を預けて、天井を見上げる。

（ふう。まあ、たかだか、少年少女兵が乗れる様に十少し改造されたＴＡＦ－２、ザウートなんかくれてやっても、痛くも痒くもないからな）

ＴＡＦ－２ザウート。

ＣＥ（コズミック・イラ）に登場するザフトと呼ばれる軍隊が使用する、可変式砲撃用ＭＳだ。

優れた火力を持つ反面、機動性が乏しく運用しずらい機体なため前線での人気は高くない機体だ。俺は、そのザウートを改造してソビエトに譲渡したのだ。

まあ、改造した所はＭＳ形態の時の移動をドムと同じ、ホバー移動にした（ＭＡ形態はキャタピラ移動＋ホバー移動、切り替え可能）のと、子供が乗っても全く酔わない位は振動を無くしたのと、戦車級に噛まれても３０分位までコックピットに到達出来ない程の強度（ルナ・チタニュウム合金）にした位だ。元々、武装事態は実弾兵器しか無いので、特に改造はしていない。　メビウスの主力ＭＳには、相手にならない。

（メビウスのＭＳの材質は全てガンダニュウム合金）まあ、戦術機やＢＥＴＡ相手なら十分驚異になる。

（まあ、５００機だけだしな。売って欲しがったら、モルゲンレーテ社を通じて売れば良いしな）

既に、配送の手続きは済んでいる。先程ハマーン事務総長と会談してる途中に、モルゲンレーテ社北米支部に連絡をメールで入れた。間違いなく３日以内に届くだろう。

（さて、年が開けたら火星を攻めたいな。トワニング准将が、アステロイドベルトにアクシズか存在したと報告があったからな）

俺はまだ分からなかった。この時、自分がソビエトに譲渡したザウートが思いもよらない活躍を見せる事になることを。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第六十七話（後書き）

イルマさんの家族はオリキャラです。
説明すると、妹のキャサリン・テスレフ。髪型は背中まであるロングの金髪。イルマ中尉より、少し身長は低い。看護学校に通ってます。
イメージは、イルマ中尉を少し小さくして、ロングヘアーにした感じ。
母親、マリー・テスレフ。イルマ中尉より、髪は長くセミロング程の長さの金髪。身長は二人より小さいです。見た目は、３０代に見える程若い。　芯が強い女性。最近はイルマ中尉が早く孫を抱かせてくれるのを、楽しみにしている。旦那は行方不明。未亡人？

てな、感じです。
暫くはほのぼの路線が続くかな？
感想などあればどうぞ。

第六十八話（前書き）

う～ん、久しぶりに短いです。では、本文をどうぞ。

第六十八話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１１月１５日秘密基地執務室

今日は日曜日だ。通常の会社や戦闘準備体制に入っていない基地なんかは休日だ。たが、残念な事に俺は仕事があるため、休日にならないのだ。
俺は自分で煎れたコーヒーを飲みながら、椅子に座り書類に目を通していた。今、目を通しているのは、ソビエトに譲渡したザウートに関する書類だ。一通り、目を通すと書類を机の上に置く。

（まさか、ザウートが此処まで使える機体だとわな）
ソビエトに譲渡した５００機のザウートは、直ぐに前線に配備された。
そして、昨日迄に５回は戦闘に参加して多大な戦果を上げる事となった。　まず、戦車と違い戦術機　に随伴して行動することが出来ること。これは、戦車と違い待ち伏せする必要がなく、状況に合わせて素早く移動して、必要な支援を容易に要求できる利点がある。
また、火力そのものは戦艦並みにあるため、肩に装備されている２連装キャノン砲（×２）は突撃級の硬い前面装甲殻すら、容易に貫くため友軍の被害を軽減している。
また、中距離の武装である７６ｍｍ突撃砲は、戦術機の３６ｍｍ突

撃砲より大口径なため、戦術機で倒すのに苦労する要撃級すら簡単に撃破している。また、戦車級には胸部バルカン砲で近寄らせない様にしているため、この一月余りの戦いでザウートの被害は未だ０だ。

この実力が広まり、ソビエト軍の前線ではザウートの配備を急ぐ様にとの声が上がっている。

（原作だとヤラレ役だったのに、少し改良してやっただけなのに、此処まで使える機体になるとわな。これは、流石に読めなかったな）

更に、シベリア戦線ではザウートのパイロットは戦術機の衛士より人気があるらしい。

（まあ、前線での評価が高い事は良いことだからな。まあ、ソ連の上層部も本格的にザウートを配備するつもりらしいな）

既にソ連は、モルゲンレーテの北米支社にザウートの発注を働きかけているとの事だ。

北米支社の社長から連絡が有った。また、ハマーン事務総長もソビエト大使が購入出来ないかと、問い合わせが有ったと言っていた。

恐らく、ザウートを本格的に前線に配備して、戦線を押し返して祖国を奪還するつもりなのだろう。

（まあ、一応価格はＳｕ３７Ｍ２を2機造る予算でザウートは3機造れる程の価格だからな。コストパフォーマンスが良いのも、売りだしな）

北米支社の社長には、ソビエトからの注文は受けて構わないと言ってある。後はどれくらいの数が必要なのかは、俺には分からないがな。

そんなことを考えながらコーヒーを飲み、次の書類に取りかかるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ラルｓｉｄｅ

私は今、クルーザーで海に出て部下達と共に、釣りを楽しんでいる。

「お！かかった！」

「どれくらいの大きさだ？サラミス級位か？」

「馬鹿言え。グワジン級の大物だ！」

「お！タコが釣れた！」

「お、おい！バカ、バカ！扱い気をつけないと、墨を吐くぞ！」

あちらこちらで、兵達が釣りを楽しんでいる。

私はウイスキーを飲みながら椅子に座り、海に垂らした釣り餌に魚が掛かるのを待っている。

「どう？あなた。釣れそうかしら？」

「うん？ハモンか。なに、大物とはじっと待っていなければならないのだよ。此方が先に動けば、向こうは逃げてしまうからな。ただ、動かずに待つだけさ」

ハモンが私の側にやって来た。すると、今まで反応の無かった竿がしなり、釣糸が一気に持っていかれる。

「かかった！」

私は直ぐに竿を持つ。凄い力で釣糸が持っていかれる。私は、力が弱まるタイミングでリールを回し、此方に引き寄せる。

「クッ！これは、大物だな！長期戦になるな」

「あなた。大丈夫！？」

「問題ない！おっと？」

ハモンと話していたため、若干力が弱まってしまい、釣糸が再び魚に持っていかれる。

それからは、お互いに一進一退の攻防だった。

魚が釣糸を持っていき、疲れた所で私がリールを回し引き寄せる。

何時のまにか部下達も見に来ていた。既に、網の準備をしている者もいる。魚との攻防を始めて、１時間程がたった頃、魚の力が弱くなってきた。私は一気にリールを回し引き寄せる。海面に魚の姿が見えてきた。

「ラル大佐！大物ですよ！！」

「分かっとるさコズン。何時でも網で取れる様に、準備していてくれ」

しつこく抵抗する魚だったが、遂に船の近くまで来た。すかさずコズンが網を海に入れて、魚を包み込み引き上げ様とする。

「重い！手伝え！」

結局3人係で魚をクルーザーの上に引き上げる。　すると、とても大きなカジキマグロだった。

「凄いでよラル大佐！本当に大物だよ！」

「すげえ～」

部下達が、それぞれ感想を漏らす。私は、直ぐに血抜きを命じると、慣れた手付きで部下の一人が血抜きを作業を行う。

「流石ね。ラルの言った通りだったわ」

「ハッハハハ。まあざっと、こんなもんだな。さて、大物も釣れたし港に帰るぞ！」

「「「「おおー！！」」」」

その後クランプが、クルーザーを操作して港に帰還して、カジキマグロの重さを計ると２００Ｋｇの大物だった。その日の夕食は、マグロずくしになったのは言うまでもあるまい。

ラルｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

私は今、基地の屋上で日光浴をしながら本を読んでいます。基地の屋上には日光浴が出来るようにビーチチェアやプールチェア等が、設置されています。ビーチチェアに腰掛けながら本を読み、空いている手で、テーブルの上に置いてあるジュースを取り、口にする。オレンジジュースの程よい甘さが口の中に広がります。

（この日鳩さんは、お姫様から餌を貰えなかったのですか）

悠斗さんから借りた本は、中々な興味深く面白い本ばかりでした。今、読んでいる本は昨日借りたばかりの本です。　タイトルは『姫君の青い鳩』です。よく、悠斗さんが読んでいたので借りました。

（成る程。青い鳩さんは怪我をしているのに、姫君の為に頑張って木の実を探しに行くのですか）

物語が段々佳境に入ってくる。私が本に熱中していると、屋上の扉が開く音がした。誰かが出入りしたらしい。
コツコツと足音が私に近か付いてくる。

「よう！ルリ。こんな所で読書か？」

「うん？ああ。リョーコさんですか。こんにちは」

私は声をかけられたので顔を上げると、スバル・リョーコさんが居ました。リョーコさんは、私の正面に座りました。

私は、本にしおりを挟んで閉じて机に置きます。

「何の本を読んでたんだ？」

「姫君の青い鳩です。童話ですね」

「へぇ～。ルリが童話なんて、読むなんてな～」

驚いた表情をするリョーコさん。私が、童話を読むのがそんなに不思議でしょうか？まあ、悠斗さんが読んでいたので、読んでみたくなっただけなんですけどね。

「そう言うリョーコさんは、読書しないんですか？」

「無理無理。俺は本を真面目に読む位なら、運動するよ」

確かにリョーコさんが読書する姿は、想像出来ませんからね。

「今日は、ヒカルさんとイズミさんは一緒じゃないんですね」

「まあ、休みだしな。イズミはお笑いの勉強しに、歓楽街に行ったしな。ヒカルは、部屋でアニメを見てるしな」

「まあ、二人らしい休日の過ごし方ですね」

「だろ？しかし、ヒカルの奴もう少し音を下げて欲しいもんだぜ」

リョーコさんが、額にシワを寄せる。ヒカルさんの部屋は、リョーコさんとイズミさんの部屋が隣同士だから音が響くのだろうか？

「そんなにうるさいのですか？」

「いや、俺の部屋には聞こえ無いんだけど、廊下には聞こえてたからな。朝通った時は、『抱きしめて銀河の果てまで』て聞こえたし、昼には『決闘ですわ！！』て聞こえるし、さっき通った時は『ばあちゃんが言った。この世に、不味い飯屋と悪が栄えたためしがない』とか聞こえたんだよな。　俺らは慣れてるから良いけど、上官とかにバレたら始末書書かされるだろうと、思ってさ」

そう言って頭をかくリョーコさん。なんだかんだ言っても、仲間思いの人なのだ。

「まあ、休日ですから大目に見てくれるでしょう。悠斗さんも基地に帰還している時くらいは、大目に見るように言ってますしね」

「まあ、不動閣下ならそうなんだろうけど、キリング中佐辺りにバレると小言がうるさくてな～」

あの、オールバックデコ眼鏡ですか。確かに、あの人は規律にうるさい人ですからね。悠斗さんが来ると、借りてきた猫みたいに静かになるんですけどね。

「まあ、後でヒカルさんを注意しときましょう。所で、リョーコさんは、屋上に何しに来たんですか？」

「俺かい？俺は、昼寝でもしようかと思ってさ。いい天気だし、風も気持ち良いかならな。ルリは、読書の続きか？」

「ええ。そうしようかと思います」

「そっか。邪魔したな」

「いえ。構いませんよ」

そう言って、リョーコさんは席を立ちプールチェアで横になった。
私は、本を取り、しおりの挟んだ場所から読むのであった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

第六十八話（後書き）

明日は久しぶりに休みです。お盆が忙しかったから嬉しいです。
感想などあればどうぞ。

第六十九話（前書き）

完成。今回のお話で次期主力ＭＳが生産されます。様々な意見ありがとうございます。
では、本文をどうぞ。

第六十九話

ハマーンｓｉｄｅ

１９９９年１２月１日
アメリカ合衆国ニューヨーク国連本部ビル執務室

今年も残す所あと一月で終わる。外の風は日を追うごとに冷たくなっている。私は執務室で書類に目を通している。

（ふむ。ソビエト軍がザウートの正式配備に踏み切ったのは前から知っていたが、よもや他の国々も購入に前向きな姿勢を見せて来るとはな）

あくまで悠斗はアラスカにいる、二人の少女をメビウスに移動させる為に、見返りとしてくれた機体だった筈だ。

（しかし、報告書を見るとザウートの戦果は素晴らしいものだな。確かに、各国が購入したくなるのも分かる）

悠斗がソビエトにザウートを送ってから一月余り経つが、既に１５回も出撃して未だ損害１０機余り。しかも、撃破数は戦車や戦術機の非ではない。更に、各兵科での戦死率の低下などなど、様々な所で影響が出ている。これだけ利点が表面に現れて来れば、嫌でも実

力を認めなければならない。ソビエト軍内では、新型戦術機の配備よりもザウートの配備を急ぐ要請が多いようだ。
ヨーロッパ各国は、配備に意欲的な姿勢を見せている。アメリカ合衆国は研究目的で購入するか、検討に入っているらしい。

（フフフ。世界各国の軍事産業は軒並みザウートにしてやられたな。たが、これでよりいっそう新型機開発に熱が入るな。
プロミネンス計画には、更なる予算の増額が必要だな）

プロミネンス計画には、既に多額の予算を計上しているが、ザウートの登場により各国の軍事産業がシェアを奪われまいと、躍起になって開発を急ぐ事になるだろう。

（まあ、危機感を煽ると言った意味では、ザウートの登場は良いことかも知れんな。しかし、オルタネイティヴ計画にも多額の予算を計上しているからな。なかなか分配が大変だろうな）

オルタネイティヴ計画。ＢＥＴＡに対する人類の切り札的計画だ。
現在は二つの計画が争っている最中だ。１つ目は日本主導の第四計画。
これは、ＢＥＴＡに対する諜報が目的である。１９９５年から始まっているが、未だに何ら成果を出していない計画だ。　米国を中心に廃止すべきとの声が上がっている計画でもある。
二つめは第五計画。
米国を中心とする計画である。この計画は、地球を放棄して違う惑星に移住する計画と、Ｇ弾によるＢＥＴＡの殲滅がセットになった計画だ。
此方にたいしては、ヨーロッパ、ソビエト、日本、中華連邦等から激しい反対意見が上がっている。まあ、どちらも大変な予算が計上されている計画だ。

（ふう。プロミネンス計画、第四計画、第五計画、どれもが地球を奪還するための計画ではあるが、お互いに足を引っ張りあっている。漸く人類側に戦局の流れが向いてきたのにな。互いに足を引っ張りあっていては、勝てる戦いも勝てなくなってしまうな。まあ、どの計画にも各国の利害関係が働いているから、どうしようも無いのだがな）

人類が一丸となってＢＥＴＡと戦わなければならないのに、各国の政治家どもは戦後の利権ばかり考えている。それでは、何時まで経ってもＢＥＴＡに勝てないと何故気がつかないのだろうか？

（まあ、見ている分には滑稽で笑えるがな。
しかし、本気で団結しなければＢＥＴＡ大戦には勝利することは不可能だろうな。まあ、仮に人類が団結しなくとも、ＢＥＴＡに勝てるのはメビウスだけだがな）

そんなことを考えながら次の書類を取り、目を通す。

「コーヒーをどうぞ」

「ああ。済まない。頂くよ」秘書がコーヒーを机の上に出してくれる。
出されたコーヒーを飲みながら、書類に目を通すのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

グレミーside

「でぇやややや!!」

「ふん!騎士である私に貴様らの攻撃は当たらんよ!」

ラカン大尉のドライセンがビームトマホークで、接近してきた要撃級をまとめて切り裂く。切り裂かれた要撃級から赤い体液が噴き出して辺りを真っ赤に染める。マシュマー大尉のザク?が、肘から取り出したビームサーベルで要塞級を真っ二つにする。要塞級は真っ赤な体液を噴き出しながら、地面にひれ伏した。

「墜ちてもらう!」

私はドライセンのトライブレードを放つ。トライブレードが此方に向かって方向転換をしてきた突撃級の前部装甲殻をズタズタに切り裂き絶命させて、手元に戻ってきた。

「あ~ん!熱い!熱いよ!!皆、死んじまいな!」

「墜ちなさい!」

キャラ大尉のR・ジャジャから、3連装ミサイルが発射される。ミサイルの2発が要塞級に命中して爆発する。命中した要塞級は頭部を破壊され絶命した。外れた1発は地面に命中して地面にいた戦車級をまとめて吹き飛ばした。

イリア少尉のザク？からシュツルム・ファウストが発射される。地面にいた戦車級、兵士級等をまとめて吹き飛ばした。

モニター画面にミッションクリアと表示された。　どうやら今の攻撃で全てのＢＥＴＡを殲滅させたようだ。

「お疲れ様です。シミュレーター訓練を終了します。パイロットはシミュレーターから降りてください。繰り返します」

私はシミュレーターから出て、皆が集まっている大型スクリーンに向かう。大型スクリーンの前に着くと、ラカン大尉とマシュマー大尉が既にいた。

「お疲れ様です。ドライセンはどうでしたか？」

「お疲れ。やはり昔のドライセンとは訳が違うな。　近接戦闘能力の向上に、遠距離装備の追加があるから、よりバランスの取れた機体になったな」

「そう言えば、ラカン大尉は遠距離装備のバズーカを装備してましたね」

「おう。折り畳み式で背部ラッチに装備していられるから、邪魔にならなくて使い勝手も良かったぞ」

確か、不動閣下がドライセン開発の際にジャイアント・バズの改良して、より使い勝手を良くしたのだ。威力も従来の物に比べて３割程上がっている。

「ドライセンは、先月末の会議で正式配備が決定しましたからね」

「おう。ありがたい事だ。まあ、ザク？も正式配備が決まったからな」

「当たり前だ。汎用性がある機体なのだからな。騎士である私に相応しい機体だ。ただ、武装が大幅に変わったがな」

マシュマー大尉が薔薇を片手に持ちながら、キザなポーズをとる。

（ああした方が、女性にモテるのだろうか？私も検討してみる必要があるな）

私がそんなことを考えていると、ラカン大尉とマシュマー大尉が意見を交わしていた。

「武装が変わったて言ったて、量産機はビームライフルと腰部ビーム砲が撤廃されて、変わりに１２０ｍｍマシンガンとシュツルム・ファウストにハンドグレネードとクラッカー、それにザクバーズカを改良した４５０ｍｍザクバーズカ改になり、実弾メインになっただけじゃないか？頭部メガ粒子砲とビームサーベルは装備されたままだしな」

「何を言う！寧ろ、銃剣付きビームライフルが無ければ、格好が付かないではないか！！」

「いや、量産機が無いだけで専用器はちゃんとビームライフル等は、装備してるからな」

「そうなのか？なら、良いか。まあ、私は不動閣下から専用機を頂ける筈だからな！」

ハア、とため息ついてヤレヤレと言った表情のラカン大尉。私としてはどっちの機体もバックパックを変更することで、あらゆる環境に適応出来ることが強みだと思うのだが。そんなことを討論していると、キャラ大尉がやって来た。

「お疲れ。どうしたんだい？3人してさ？」

「いや。マシュマーのアホさ加減に呆れてた所だ」

「まあ、マシュマーがアホなのは今更だろ？」

「な！？心外な！私はアホではない！寧ろ、騎士だ！」

「「「ハア～」」」

全員がため息をつく。私達がため息をついた理由が分からないのか、首を傾げるマシュマー大尉。

「まあ、マシュマー大尉の事は置いといて、キャラ大尉の専用機である、R・ジャジャの感想を聞きたいのですが？」

「ああ。グレミーの言う通りだな。どんな感じに仕上がっていたんだ？」

「まさに、私向けの機体になっていたよ。ビームサーベル、銃剣付きビームライフル、3連装ミサイルポット、これ等は元々使い勝手が良かったからね。追加武装でシュツルム・ファウストにハンドグレネードは助かるね。近距離での火力が増加する分、戦いかたの選択肢が増えたからね」

豊かな胸を主張させるように、胸を張るキャラ大尉。パイロットスーツを胸元まで開けているおかげで、チラチラと豊かな脇乳が拝める。眼福。眼福。役得です。チラリと、周りをみるとマシュマー大尉はガン見してるし、他の男性パイロット達もチラチラ覗き見していた。ラカン大尉は興味無さげに欠伸をしていた。

「まあ、見るなとは言わないがそのだらけきった顔をどうにかしな」

「っ！」

「「「「「っ！やば！」」」」」

「わ、私は見ていないぞ！！？」

慌てて視線を胸元から外す。他のパイロット達も急いで視線を外して、訓練に戻って行く。

マシュマー大尉は慌てて否定するが、その反応だと見てましたと言っている様なものだ。

「本当、男なんてスケベなんだから」

「うん？イリアか。遅かったじゃないか」

「すいません。ラカン大尉。少々気になった部分を確認してきたので」

少し遅れてイリア少尉が合流した。てか、現れて言う一言目が厳しくないかい？私はあくまでも、変態と言う名の紳士なのだからな！

断じて、唯のスケベでわない！

「どう言おうと変態は変態ですよ、グレミー中尉」

「な、何故考えていたことが分かった!?」

「女の勘です」

私は地面に両手と両膝を着き、ガックリとへコむ。まさか、女の勘に私の私の考えが読み取られるなんて思いもしなかったからだ。

「あー。漫才はそれくらいにしてくれないか？いい加減この後の予定を説明したいのだが？」

「あ、はい。分かりました」

私は立ち上がり、ラカン大尉を見る。

「先ずは、訓練ご苦労だった。この後の予定だが、３０分後にデブリーフィングを行う。各人シャワー等を浴びるなりしろ。何か質問はあるか？」

ラカン大尉が全員の顔を見る。誰も意見や異論は内容だ。

「では、解散！」

「「「「は！」」」」

ラカン大尉が解散の号令をする。私達は敬礼を行い解散した。私はそのままマシュマー大尉、ラカン大尉と共にシャワーを浴びに行くのだった。

グレミーｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

俺は執務室にて、ソロモンのトワニング准将と会談を行っていた。
大型モニターにトワニング准将が映し出されていた。

「トワニング准将。報告を頼む」

「はい。不動閣下。まず、始めに報告しますのは、不動閣下が建設を急いでいた、グリプス２が先月末に完成致しました。現在はサイド３宙域でＭＳの生産にあっています」

「そうか。グリプス２が完成したか。これで宇宙での活動に問題は生じないだろうな」

俺は椅子に深く腰掛ける。グリプス２の完成でますます、戦力の増強が容易になった。

（やはり、来年初頭には火星を叩くか。準備を始めるとするか）

そんなことを考えながら、トワニング准将の報告を聞く。

「次にアクシズの件ですが、探索した部隊からの報告によりますと、アクシズに異常は無く直ぐに使えるとの事だったので、駐留部隊を派遣しました」

「そうか。分かった。他に何か報告はあるか？」

「いえ。ありません」

「そうか。なら、通信を終了する。何かと大変だろが頑張ってくれ」

「は！では、失礼します」

大型モニターからトワニング准将の姿が消える。　俺は、パソコンを操作してＭＳ生産ラインを開く。

（さて、来年からの主力ＭＳの生産を始めるとしますか）

マウスを操作して、機体を選択する。モニターにザク？が表示された。

（まあ、量産機の武装はビームサーベルと頭部メガ粒子砲以外のビーム兵器は外して、代わりに１２０ｍｍマシンガンとシュツルム・ファウスト、４５０ｍｍザクバーズカ改、ハンドグレネード、クラッカーを装備させてと。強化パーツは、無限エネルギー＆無限弾薬回復システム、フェイズシフト装甲、ナノスキン装甲、Ｉフィールド（レーザーだって効きません）位で良いか）

マウスを操作して、生産を開始させる。モニターに表示された。

ＡＭＸ－０１１ザク？、　生産数、０機、日産２５００機、設定生

産数、地上、５００００機。ソロモン、３００００機、グラナダ、３００００機、グリプス２、５００００機。
と表示された。
更にマウスを操作して、違う生産ラインを選択して機体を選択する。
モニターにドライセンが表示された。

（えーと、カラーリングは袖付き仕様にしてと、武装はビームトマホーク（ビームランサーにもなる）、３連装ハンドガン×２（両腕装備）トライブレード×３（壊れない。切れない物はない。欠けない。必ず投げた機体に帰ってくる）ジャイアント・バズ（シナンジュの使用している物を、改修した物）強化パーツはザク？に準ずる。オプションは、ビームランチャー、ビームライフル、ビームサーベル、　て所かな）

マウスを操作して、生産ラインを選択する。
モニターに表示された。

ＡＭＸ－００９ドライセン

生産数０機、日産２５００機、目標生産数、地上５００００機、ソロモン、３００００機、グラナダ、３００００機、グリプス２、３００００機。となっている。
俺はパソコンを閉じて、電源を落とし背伸びをする。

（これで、ザク？シリーズとドムシリーズの退役は決まったな。生産数が整いしだい、順次資源回収にまわすことになるな。　そうなると、現状のビッグトレーではこれから先は厳しいな。新型地上戦艦も考えなければな。まあ、それよりも火星を攻略しなくてはな）

背伸びを止めて、背もたれに体重を預け天井を見る。

（まあ、今日の仕事はこれくらいにして、修行に向かうとするか）

俺は椅子から立ち上がり、部屋を後にするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

第六十九話（後書き）

次期主力陸上戦艦も考えなければならいです。結構大変ですが、頑張ります。感想まってます。

第七十話（前書き）

完成しました。久しぶりに原作キャラの登場です。では、本編をどうぞ。

第七十話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１２月１６日日本帝国帝都東京

俺は今、日本帝国に来ている。名目上は前線部隊の視察と激励だが、本当の予定は違う。本日誕生日を迎えられる、煌武院悠陽殿下の誕生会に招かれたからだ。
招待状は１週間前に、ハマーン事務総長に日本帝国大使を通じて渡された。それを、ハマーン事務総長が俺に送ってくれたのだ。

（まあ、煌武院悠陽殿下の誕生日だからな。わざわざ今年は呼び出しをしてくるなんてな。その、行動力には驚きを隠せないな）

まあ、違う世界だと白銀武の為に転校してくるは、家を改造するは、人口島に招待するなど、ハチャメチャな事をする位だからな。しかも、半端ない金持ちでもある。更に言えば、好きな男の為に命を掛ける位の度胸もあるから凄いもんだ。

（まあ、現在の煌武院悠陽殿下は実権を取り戻していないからな。早く取り戻してもらいたいものだな。まあ、それは俺が言えた口ではないか）

そんなことを考えながら歩みを進める。誕生会の時間は夜からだが、

俺は昼間の内に会っておきたい人物がいるからだ。今は、武家屋敷が並んでいる通りを歩いている。この辺りは斯衛の者たちが住んでいる地区になる。

（やれやれ。武家屋敷ばかりだな。まあ、家の大きさで概ね位が分かるからな）

今は、武家屋敷の通りの中程だろう。大きな屋敷が並んでいるから山吹の斯衛の者が住んでいる地区だ。一応、この世界の俺の家族が住んでいる家の住所も分かっているが、寄るつもりは毛頭ない。あくまで、用事がある人物を訪ねるのが目的だからだ。

（しかし、遠いな。流石は将軍家の一員だな。いくら遠縁とはいえ、斯衛で言えば赤だからな）

まあ、いくら家が遠くても構わないからな。修行で徹底的に鍛えてるだけあって、全く疲れないからだ。手帳を開き住所を確認する。現在地を確認して更に進む。

（顔が冷たいな。空は雲っているしな。そろそろ東京でも雪が降るかも知れないな）

そんなことを考えながら更に進むと、更に大きな武家屋敷が並ぶ通りに出た。此処まで来れば、目的の家までは然ほど遠くはない。俺は更に先に歩みを進める。暫く歩いていると、大きな門がそびえる家の前に着いた。手帳を開き場所を確認し、表札を見る。

（間違いないな。此所だな）

手帳をポケットにしまい門を確認すると、チャイムのボタンが有っ

たので、近付いてボタンを押す。暫く待っていると、正面門の脇にある小さな扉から斯衛の白の制服を着た褐色肌の少女が出てきた。

「何者だ?当家に何の用だ?」

「尋ねたいのだが、此方は御剣雷電翁のご自宅で間違いでしょうか?」

「間違い。だが、何者だ?貴様の様な若僧が雷電様に何の用事だ?」

褐色肌の少女が、俺に殺気をぶつけてくる。だが、生憎俺にはこの程度の殺気では全く相手にならない。少女は俺が不審な動きをしたら即座に押さえ付けられるように、警戒している。

俺はポケットから手紙を取り出す。

「これを、雷電翁に渡して読んで頂きたい。返事を頂けるまで、俺はこの場で待っていると伝えて欲しい」

「分かった。手紙を預かる。雷電様にお渡ししてくるが、おとなしく待っていろ!」

褐色肌の少女に手紙を渡す。彼女は手紙を受け取り中に入って行った。

(まあ、顔が少々冷たいが修行の時に比べれば、かなりましだしな。大体体は寒く無いしな)

マスターアジア師匠と絶対零度の中で修行した事を思えば、これくらいの寒さはなんともない。俺は空を見上げ、返事がくるまで寒空の中待つのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

雷電ｓｉｄｅ

「やあぁぁぁぁ！！」

「踏み込みが足りんぞ！もっと、相手の懐に入るのだ！」

ガキーン、ガキンと刀と刀がぶつかりあう。今、庭で紅蓮醍三郎と孫の冥夜が真剣を使って修行を行っている。外は真冬だけあって寒いが、二人は激しく動いているため、体から湯気が出ている程だ。

「雷電様。熱いお茶にございます」

「うむ。頂こう」

冥夜の従順である、月詠真那がお茶を出してくれる。縁側に座っているワシは、湯飲みを受け取りお茶を飲む。冷えた体にはちょうど良い熱さであった。ワシが冥夜達の修行を見ていると、廊下を歩いて神代がワシの側に来て膝を着いた。

「雷電様。なにやら、若い男が雷電様に手紙を渡して欲しいとの事

で手紙を預かって参りました」

「手紙とな？どれ、見せてもらえぬか？」

ワシは神代から手紙を受け取り、開いて内容を読む。内容を確認したワシは、よもやと思い差出人の名前を確認すると、不動の所の三男である悠斗からの手紙であった。

「神代。届けた者の特徴を覚えておるか？」

「はい。青い髪に青い瞳の男です。今も正面門の前で待っております」

「なに！？誠か！？」

「え！あ、はい！雷電様に手紙を渡して、返事を頂けるまでは帰らぬと申しておりましたので」

神代はバツの悪そうな表情をする。まさか、あやつがわざわざ訪ねて来るとは思わなかった。

「どうした雷電？何かあったのか？」

「うん？おお！紅蓮か」

何時のまにか修行が終わったのか、紅蓮がワシの正面に立っておった。

「お爺様。どうかなさったのですか？」

「おお！冥夜。先ずは、この手紙を読むのじゃ」

ワシは持っていた手紙を冥夜に渡す。冥夜は受け取った手紙を詠み始めた。紅蓮も気になるのか、冥夜の後ろに立って上から手紙を覗いていた。

「お、お爺様！これは誠ですか！？」

「雷電。誠なのだな？」

「うむ。神代に尋ねたら、まだ正面門で待っているそうだ」

「ならば、早く入れてやらねば！外は寒いぞ！」

「うむ。紅蓮の言う通りだな。神代。手紙を持ってきた男性を客間に案内せい」

「あ、はい。かしこまりました」

神代は一礼して、足早に玄関に向かって行った。

「あの、雷電様。お客様はどなたなのですか？」

「うん？そう言えば、月詠には手紙を見せておらんかったのう。冥夜よ、月詠にも手紙を見せてやるのじゃ」

「はい。分かりました。月詠。これを読んでくれ」

「では、失礼します」

冥夜から手紙を受け取り、目を通す月詠。彼女の表情が驚愕の色に染まる。

「分かったかの？手紙を持ってきたのは、不動家の三男坊の悠斗じゃ。いや、今は不動悠斗大将と言うべきかの？」

「今、悠斗が来ているのですね！では」

「待て！月詠。そなたは何処に行くつもりなのだ？」

手紙を綺麗にかたずけて手に持ったまま、玄関に向かおうとする月詠を冥夜が止める。月詠は止まりたくないが、主の問いかけに歩みを止める。

「悠斗が来ていますので、少々玄関で皆様が中に入られるまでのお相手をして来ようかと」

にこやかに笑っているが、月詠の眼は笑っていなかった。あれはキレている証だ。だが、流石に行かせてやるわけにはいかない。

「月詠侍従長。客人の為に茶を用意してくれ。良いな？」

「うっ！雷電様！？・・・かしこまりました。では、失礼します」

渋々ながら、月詠は玄関に向かうのを止めて台所に向かっていった。

「さて、雷電。ワシらも客間に向かうとするかの？」

「そうだな。冥夜は、湯浴みをしてきなさい。流石に年頃の女子（おなご）が汗臭いのは、良くないからな」

「はい。分かりました。紅蓮師匠、先に失礼します」

「うむ。ゆっくり湯浴みをしてきなさい」

冥夜はワシと紅蓮に一礼して、風呂に向かっていった。ワシと紅蓮だけが取り残された。

「まさか、不動の三男坊が訪ねて来るとわな。冥夜と手紙のやり取りをしてたのは知っていたが」

「そう言えば、雷電は悠斗にまだ会っておらんかったのう」

「うむ。8年ぶりだのう。どれ程の男に育ったか楽しみだな」

「ふふ。驚くなよ。男子三日会わざれば刮目して会いまみえるべしと、言うからな」

腕を組んでニヤニヤ笑う紅蓮。まあ、もうすぐ二十歳になるしな。どれ程成長して良い男になっているか楽しみだからな。

「さて、立ち話をしているよりも、我々も客間に向かうとするかの？」

「そうだな。悠斗を待たせる訳にはいかんからな」

ワシと紅蓮は共に不動の三男坊が待っている、客間へと向かうのだった。

雷電ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

手紙を渡してから正面門の前で待っている。
空を見上げてボーッとしながら、流れていく雲を見ている。

（暇だな。こんな時は鼻歌でも歌いながら待つか）

なにか歌いやすい曲を考える。色々な歌詞が頭に浮かんでくる。

（寒い時期だからな。無難なこれにするか）

今の季節と全く関係の無い曲を鼻歌で歌う。気分は０８小隊のオープニングですな。
いや、正直暇なんですよね。手紙の返事はまだ来ないから、暇潰しの方法が無いんです。いやさ、Ｐ○Ｐとか出してゲームすれば良いんだけど、この世界だとゲームは将棋とかオセロなんかが当たり前で、テレビゲームが全く存在しないんだ。
だから、下手に出来ないんだよな～。まあ、秘密基地の町は普通にテレビゲームがあるから問題無いんだが、前線国家はまずないし後方国家である、米国ですら全く普及していないのだ。
（あれ？これってビジネスチャンスだよな？ゲーム会社設立して、ゲーム産業を開拓するのもアリだよな？まあ、するか分からないけど）

今の世界情勢の中では、娯楽に力を注いでる余裕など有る国は米国を筆頭とする、後方国家の連中位なもんだ。だが、それらの国ですらゲームを開発はしていない。やはり大切な資源を娯楽にまわすよりは、戦術機開発なんかにまわすわな。
そんなことを考えながら待っていると、誰かが此方に向かって歩いてくる気配を感じ取った。

（歩き方、歩幅の大きさ、気の感じからしてさっきの少女だな。どうやら、返事が出たようだな）

正面門の脇の扉が開き、先程の少女が出てきた。

「雷電様がお会いになるとの事です。どうぞ、中にお入りください」

「分かった」

褐色肌の少女に言われ、敷地内に入る。彼女の後に付いて移動する。玄関に着き、靴を脱いで母屋の中の長い廊下を歩く。暫く歩くと、少女が止まり両膝を着いたて、障子戸を開ける。

「雷電様。お客様をお連れしました」

「うむ。入れ」

「どうぞ。中にお入りください。くれぐれも粗相の無いように」

「分かった。案内ありがとう」

案内してくれた少女に感謝の言葉を伝え中に入る。中に入ると５０

畳程の広さの部屋に、独特の髪型をした人が二人いた。二人とも座布団に座っている。

（あれ？一人は御剣雷電翁だが、なんで紅蓮大将までいるんだ？）

頭に疑問が浮かんでくるも、とりあえず挨拶をする。

「お久しぶりでございます雷電翁。紅蓮師匠。本日、急に訪ねて参りましたが、お会い出来て光栄です」

「くだらん謝辞はいらん。今日はどうして、訪ねて参ったのだ？」

鋭い目つきで俺を見る雷電翁。流石は赤の斯衛だ。今は現役を退いた身だが、その闘気は年老いてなを失われていない。
隠居する前は、生身で紅蓮醍三郎と渡り合い、日本一の弓使いと言われただけはある。

（流石は達人クラスだけはあるが、やはり今の俺にはその程度の闘気では意味がないな）

恐らく、紅蓮師匠と二人で挑まれたとしても負ける事は無いだろう。

「今日お訪ねしたのは、冥夜の誕生日だからです。去年は忙しくて来れませんでしたが、今年は時間を作って参りました」
俺は雷電翁の眼を見ながら返事を伝える。互いに視線が合う。暫く見つめあっていると、雷電翁の表情が笑顔に変わった。

「ふふふ。はっはは。最後に会った時は、まだまだ未熟者の小僧だったお主が、今やこれほどまでになるとわな」

「ふふん。言っただろう？悠斗はとてつもなく強くなったと」

いきなり笑い出す紅蓮師匠と雷電翁。俺には訳が分からなかった。すると、後ろの障子が開き緑色の髪の毛をお団子状に束ねた女性が入ってきた。彼女は俺を見ると、一瞬非常に驚いた表情になるが、直ぐに元に戻ってお茶を出してくれた。

「雷電様。紅蓮様。お茶を持って参りました」

「うむ。ありがとう」

「おお！すまんな月詠」

（ああ。やっぱり真那さんか。横浜基地だとストレートにしてたけど、御剣家に居たときはエクストラと同じ、お団子にしてたんだ）

雷電翁の右後ろで控えている真那さんを見つめていると、互いに目が合った。　ジーと見つめあっていると真那の頬がほんのりと赤くなった気がした。

「おお！雷電。忘れておったわ！月詠を紹介せねば！」

「おお！そうだった！月詠、此方に参れ」

「はっ！」

雷電翁の隣に来る真那さん。斯衛の赤の制服を着てエプロンを着けていると、エクストラ編のメイド服に何処と無く似ている気がするな。

「悠斗よ。お主は覚えておるかの？」

「はい。覚えております。月詠真那さんですね」

「ならば、ワシからは何も言うことは無いな。積もる話も有ろう。ゆっくり話すがよい」

そう言って、雷電翁と紅蓮師匠は部屋を出ていった。部屋には俺と真那さんだけが残された。真那さんが俺の側に来る。

「久しぶりですね悠斗」

「そうですね。去年来たときは会えなかったですからね」

「そう！何故真耶には会っていて、私には会いに来なかったのだ！悠斗は、私の婿だろうが！！」

「ちょ！落ち着いてくれ真那さん！」

いきなり俺を押し倒し、上に乗る真那さん。今の状況を誰かに見られたら、大変な誤解を招く事になりかねない！

「全くお前は、私と言う婚約者がいる身で有りながら、私に会いに来ずに従姉妹の真耶に会いに行くなんて。１度、正妻は誰か体に叩き込んでやる」

「ちょ、待て落ち着いてくれ真那さん！」

普通なら簡単に押し返せるはずなのに、何故か体に力が入らない。

（待てよ。なんか視線を感じるぞ？）

俺は何気なく障子戸の方を見ると、戸が開いており青い髪の毛を束ねた少女がいた。てか、冥夜が戸を開けた状態で固まっていた。

「「あ！」」

互いに視線が合った瞬間、冥夜の顔が瞬く間に赤く染まって行く。

「・・・と言うようにて、悠斗。聞いているのか？何を見て・・・い・・・」

俺が返事をしないことを不審に思った真那さんが、俺の視線の先を見る。すると、そこには仕えている主がいた。

「つ、月詠。そ、そなたは、こんな日の明るい時間から・・・。いや、私が悪かった。お楽しみ中失礼した。ゆっくり楽しんでくれ」

「ま、待ってください冥夜様！これは違います！違うんです！」

戸を閉めて部屋を去ろうとする冥夜を、呼び止める真那さん。真那さんが、大きな声を出してしまった正で人が此方に集まってきた。

「うん？何事じゃ！？」

「悠斗。月詠。なにかあったのか！？」

「「「真那様！ご無事ですか！？」」」

一斉に障子戸が開かれる。慌ててきた全員の視線が俺と真那さんに集中する。

「雷電。これは、お楽しみ中と言う状態じゃな」

「うむ。これはよろしくないタイミングで来てしまった様じゃな紅蓮」

「「「ま、真那様が大人の階段を登る途中でした！？」」」

全員が有らぬ誤解をしているようだ。俺も弁明がしたいが、真那さんが、上に乗っている以上体を起こせないのだ。

「ち、違うんです！違～う～ん～～です！！？」

真那さんの声が屋敷内にこだまするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

冥夜ｓｉｄｅ

お爺様に言われて湯編みを終えて、客間に向かい戸を開けると月詠と私と同じ青い髪色の男性が押し倒されていた。

（ま、まさかこんなに日が明るい内から、月詠が男女の営みをしているとは）

私は戸を閉めることが出来ずにいると、男の方と目が合った。
私の存在に気が付いた月詠が大声で叫んだため、お爺様や師匠、神代達まで集まってきてしまった。あれから、月詠を宥めるのに大分時間がかかった。結局客間に皆が集まり、自己紹介等を行ったりした。

（しかし、悠斗兄上は素敵な殿方であった。月詠があああも熱中するのは分かる気がするな）

話をしてみると、気さくな方で優しい方だった。最後にお会いした時は私はまだ、小さかったから悠斗兄上が覚えておられるか心配だったが、悠斗兄上はきちんと覚えておられた。

（しかし、頭を撫でてもらった時は嬉しかったな。幼い頃は、悠斗兄上によく撫でてもらったから、久しぶりに頼んだら優しく撫でてくれたしな）

悠斗兄上は優しく微笑んでくれたし、月詠は少し羨ましそうな顔をしていたしな。お爺様達も笑っておられたしな。
神代は自己紹介の時に、なにやら謝っていたが悠斗兄上は優しく微笑んで、私と同じように頭を撫でてあげていた。
巴と戎も同様に頭を撫でてもらっていたしな。
悠斗兄上曰く、「撫でたくなったから」だそうだが。

（悠斗兄上は、次はいつ日本に来てくれるのだろうか？）

既に悠斗兄上は紅蓮師匠と共に、帰路に着かれてしまった。悠斗兄上は多忙なのは分かっているがたまには、会いに来て欲しいものだ。

「ハロ。ハロハロ。メイヤ、元気ダセ。元気ダセ」

「ふふ。大丈夫だ。私は元気だよ」

悠斗兄上から誕生日プレゼントとして貰った、手のひらに乗るほどの大きさの球体が励ましてくれる。

（確か、悠斗兄上がブルーハロと言っていられたな。なんでも、私の誕生日プレゼントの為に開発してくれた玩具らしい）

悠斗兄上が私の誕生日プレゼントに作ったのだが、改造して量産にすれば売れるか検討しているらしい。なんでも、人工知能が搭載されていて学習していくと、話す言葉が増えるらしい。

「ハロ。メイヤ悩ミゴト？」

「ふふ。大丈夫だ。さて、勉強の時間だからな。ブルーも覚えるのだぞ」

「了解。了解」

私は勉強机に向かい、勉強を始めるのだった。

冥夜ｓｉｄｅｏｕｔ

真那ｓｉｄｅ

私は今、自室にて自己嫌悪に陥っていた。悠斗を馬乗りにして説教するつもりが、まさか冥夜様に見られて勘違いされるは雷電様や紅蓮様。果ては部下達にまで見られて勘違いされるしまつだからだ。

（これも全て、悠斗が悪いんだ！冥夜様には手紙でやり取りをしているのに、私にはなんら連絡を寄越さなかった悠斗が悪い）

まあ、変わりに悠斗は冥夜様と同じハロと呼ばれる玩具を私にもくれたし、手紙を必ずくれる約束も取り付けた。更に、帰り際に悠斗は頬に口付けをしてくれた。

（ふふふ。真耶には悪いが私は正妻の座を譲るつもりはない。だが、篁も厄介だからな。油断は禁物だ）

この時私は知らなかった。悠斗を狙う女性は私を含めた3人だけでは無いことを。さらに言えば、私より飛躍的に正妻の座に近い女達がいることを。

「真那ドウシタ？元気デタノカ？」」

「む！？グリーンか？なに、なんでもないさ」

「ソウカ。ソウカ」

私が、グリーンの問いかけに答えると、羽根?をパタパタさせて理解したと表現する。

（これ程の物ですら玩具に出来るのだから、悠斗の発想は凄いのだな）

改めて、幼なじみの凄さを再確認するのだった。

真那ｓｉｄｅｏｕｔ

第七十話（後書き）

コンプを読んでいたらＴＥがアニメ化するのを、最近になって知った。
まあ、作者的にはオルタ本編をアニメ化して欲しいな。

感想待ってます。

第七十一話（前書き）

ギリギリ間に合いました。今回はマジで時間が無かった。では、本文をどうぞ。

第七十一話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１２月１６日日本帝国首都東京

御剣家を後にした俺は紅蓮師匠に、自宅に遊びに来ないか誘われたため、特に断る理由も無かったので遊びに行くことになった。現在、紅蓮師匠の自宅で師匠と共に将棋を指している。パチと言う音が部屋の中に響く。

「む～。そうきたか。どうつかが重要じゃな」

紅蓮師匠が台を見て考えている。現在は俺が圧倒的に優勢と言った所だ。う～んと、唸りながら碁盤を見つめる紅蓮師匠。　あと一手で負けが確定しまう状況だ。

「なあ、悠斗。待っ」

「待ったは無しですよ。てか、待ったを１５回もしてるんだからこれ以上待てません」

「くぅ～。厳しいのう。年寄りには優しくせんと」

「少なくとも、紅蓮師匠には必要無いかと」

だって、未だに現役で戦術機に乗るし、素手でＢＥＴＡを撃破するんですから。そんな、化け物じみた人に手加減は必要ないと思うんですが。

「さあ。紅蓮師匠。早く打ってください。これ以上手を出さないと負けになりますよ」

「く！よもやこれ程とは。ワシの負けじゃよ」

苦虫を潰した様な表情をして、敗北を宣言した紅蓮師匠。まあ、今回は上手く勝てたな。

「ふぅ。紅蓮師匠は流石ですね。今回はギリギリ勝てましたよ」

「何を言うか悠斗よ。貴様の成績は９戦９勝だろうが。ワシは１回も勝っていないんだぞ！？」

「まあ、たまたまですよ」

「さあ！もう一回勝負じゃ！」

駒を綺麗に並べ直す紅蓮師匠。すると、障子戸のが開いて女性が入ってきた。

「紅蓮様。帝都城に向かうお時間でございます。お車の用意は出来ております」

「なに？もう、時間なのか？すまんな悠斗よ。もう１戦は出来ないそうだ」

「いえ。また、機会があれば一手お相手願います。それに、私も帝都城に行かねばなりませんから」

「そうなのか。やはり、悠斗も殿下の誕生パーティーに呼ばれておったか」

「はい。珍しいですがね。よもや、私に招待状が届くとは思いませんでした」

だって、ただの特殊組織の総司令官なだけの俺が、煌武院悠陽殿下の誕生パーティーに呼ばれるなんて普通は思わないわな。

「おいおい。貴殿は地球をＢＥＴＡから取り戻せる可能性を証明しただろうが。今では、前線国家では英雄と名高いのだぞ？　それほどの人物であれば、招待されても不思議では無い。まあ、各国の大使が出席するから、外交行事の１つだと思えばよい」

苦笑いしながら紅蓮師匠が将棋番をかたずける。　俺は立ち上がり、刀掛台から村正を取り腰に指す。村正は歴史にその名を残す程の切れ味で一般的には妖刀村正と言った方が分かりやすい刀だろう。ＢＥＴＡすら用意に切り捨てる事が出来る切れ味だ。

「ふむ。準備は良いようだの。では、悠斗よ行くぞ」

「分かりましたよ師匠。参りましょうぞ」

俺と師匠は部屋を出て玄関に向かい靴を履き、正面に止めてある黒いセダンに乗り、帝都城に向かうのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

紅蓮ｓｉｄｅ

悠斗と共に自宅を出たワシは暫く車に揺られ、帝都城に着いた。帝都城は煌武院悠陽殿下の誕生パーティーのため、通常より警備が強化されているため、あちこちで斯衛の者達が厳重警戒を行っていた。ワシらは正面門から帝都城の敷地に入り、車を降りて帝都城内を歩いている。

「ふむ。悠斗よ。殿下へのプレゼントは用意しているのか？」

「ええ。きちんと用意してありますよ」

そう言って、ポケットから箱を取り出す。綺麗に梱包されて白いリボンで止められていた。

「中身は何か聞いても良いかの？」

「中身ですか？冥夜と同じ手乗りサイズのハロですよ？色は紫ですが」

再びポケットに箱をしまう悠斗。確か、御剣家で冥夜と月詠に渡し

ておったのを思い出した。なんでも、人工知能が搭載されてる玩具だとか。

「まあ、危険な物では無いから良いか」

「そう言えば、紅蓮師匠は悠陽殿下の護衛をしなくてもよろしいのですか？」

「なに、最初は月詠真耶が警護を担当する事になっておる。ワシは真耶と交代で途中から殿下の警護にあるのじゃ」

「そうでしたか。まあ、真耶さんなら問題無いですね」

「うむ。ワシや悠斗には及ばぬが、殿下を警護するには充分な力量の持ち主だからな」

少なくとも、かなりの手練れでも容易には勝てまい。月詠家の者達は武に秀でた者が多いからな。　真耶も例に漏れず、並の刺客なら簡単に撃破するだろう。今日の誕生パーティーはある意味危険だからのう。普段部外者が会うことの出来ない悠陽殿下に会うことが出来るからの。悠陽殿下の命を狙う者もおるやもしれん。ワシも気が抜けん。

そんなことを考えていると、黒の斯衛の制服を着た兵士が二人、両脇に立って警備している扉の前に着いた。兵士達が近付いて来る。

「お疲れ様です紅蓮閣下。失礼ですが、お連れの方は不動悠斗大将殿で間違いありませんか？」

「うむ。間違いないぞ」

「はっ！では、中にどうぞ」

兵士達が扉を左右に開く。開いた扉から誕生パーティーの会場に入る。既にパーティー会場には沢山の来賓の方々がおられた。中の兵士が我々の名前を叫ぶ。

「斯衛軍紅蓮醍三郎大将のご到着です。国連外郭部隊メビウスの不動悠斗大将のご到着です」

「おお！斯衛軍最強の戦術機乗り！」

「生きる伝説と言われる方だ！」

「隣にいるのはメビウスの不動悠斗大将だ！」

「まさか、このような場に現れるなんて！？」

会場にどよめきが走る。　パーティーの出席者達の視線がワシらに集中する。だが、悠斗はなんら臆することなく前に進んで行く。ワシは奴の背中を追いかけるように中に入る。悠斗は近くにいたボーイからワインを受け取り、歩みを進める。
ワシも同じ様にボーイから日本酒を受け取る。
悠斗は悠陽殿下が座られる席が一番良く見えるテーブルで止まった。
ワシも悠斗の側に行く。

「なんで此処にしたのだ？」

「うん？ただ、悠陽殿下が良く見える場所に陣どっただけですよ」

「別に、他のテーブルでも良かったのではないか？」

「そうですね。た「出席者の皆様、中央を御覧ください」と、どうやら始まる様ですよ」

他の出席者達と同じ様に中央を見る。脇から煌武院悠陽殿下が会場に御入場なされた。席に座り会場を見渡す悠陽殿下。
その姿は優雅であり、とても１６歳になったばかりの少女には思えない程だ。

「皆様。本日は私の１６回目の誕生パーティーにご出席いただき、ありがとうございます。今日本帝国は危機に瀕しております。自国の領土内にハイヴが建設されてから、１年が過ぎました。かつては繁栄を誇った帝国ですら、焦土と化してしまいました。今だ、人類はＢＥＴＡに対して日々戦線を後退させています」

煌武院悠陽殿下の演説に皆が聞き入っている。チラリと横目で悠斗を見ると、真剣な眼差しで殿下を見つめられていた。

（ふむ。悠斗は真面目に演説に聞き入っている様だの。ワシも真剣に聞くとするか）

ワシは悠斗を横目で見るのを止めて、殿下の演説を聞くのだった。

紅蓮ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

殿下の演説が終わりに近付いていた。パーティーの出席者達が皆、剣な表情で演説に聞き入っている。

（はぁ～。生で殿下の演説を聞けるなんてな。オルタ本編でも聞いたけど、素晴らしいな。ラダビノット准将の演説にも感動したけどな）

「以上をもちまして、会式の挨拶とさせていただきます。短い時間ではありますが、心行くまでパーティーをお楽しみくださいませ」

煌武院悠陽殿下の演説が終わると共に、会場が拍手に包まれる。俺も例に漏れず拍手をする。

殿下の演説が終わった事で、パーティーの出席者達があちこちで動き始めた。各企業の創業者や財界人の方々が煌武院悠陽殿下の元に向かい、挨拶を交わしている。

「では、悠斗よ。乾杯するかの」

「ええ。紅蓮師匠。では」

「「乾杯！！」」

チンとグラスとお猪口をぶつけて、一気にワインを飲み干す。なかなか美味いワインだった。

「なかなか良いワインですね」

「ほう？悠斗は西洋酒の味が分かるのか？」

「ええ。飲み慣れていますからね」

近くにあるワインボトルを手に取り、ワイングラスに注ぐ。紅蓮師匠は一升瓶を手に取り、お猪口に日本酒を注いでいた。

「ワシは西洋酒より日本酒の方が合うがの」そう言って、注いだばかりの日本酒を飲む。

（まあ、紅蓮師匠はワインより日本酒の方が似合う気がするな。てか、お猪口が普通のよりも圧倒的に大きくないか？）

紅蓮師匠が持っているお猪口を、良く見てみると湯飲み茶碗位の大きさだった。既に、お猪口の域を越えていた。

「やはり、日本酒は美味いの～。この、淡麗辛口の美味さが若いのには分からんかの～」

「はは。まあ、好みは人それぞれですからね」

そう言って、俺はテーブルに並べられている料理を摘まむ。丁度近くにサラミと六角形の形に切られたチーズが有ったので、それをツマミにワインを飲む。紅蓮師匠は、炙ってあるイカやマグロ等の魚介類をツマミにして酒を飲んでいた。

「紅蓮師匠はまた、シンプルな組み合わせですね」

「そうか？酒は人肌のぬる燗だし、ツマミは炙っただけのイカやマグロだからのう。まあ、シンプルと言えばシンプルだな。しかし、

悠斗とてオードソックスな組み合わせと見るがの？」

確かに、俺のワインのツマミの組み合わせはオードソックスな組み合わせだ。まあ、ワインの味を楽しみたいってのもあるがな。

「まあ、ワインの味を楽しみたいですから、どうしてもシンプルな物をチョイスしますからね」

「なんじゃ。悠斗も人の事を言えんではないか。まあ、ワシは歳を考えるとあまり脂っこいのは苦手での」

「確かに紅蓮師匠の年齢を考慮すると、脂っこいのは控えたくなりますからね」

紅蓮師匠と何気無い会話をしながら、煌武院悠陽殿下の座っていられる席を見ると、丁度最後の一人と挨拶を終えた所だった。

「紅蓮師匠。俺は、煌武院悠陽殿下に挨拶に行ってきます」

「おう。分かった。ワシは此処に居るわ」

師匠にそう告げて、俺は煌武院悠陽殿下の元に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

悠陽ｓｉｄｅ

「では、殿下。失礼します」

「はい。どうぞパーティーを楽しんでくださいませ」

最後の方と挨拶を終えた私はそっと、ため息を吐く。流石に一時に沢山の方々が挨拶に来られたので、少々疲れてしまいました。

「ゴホン。殿下。お辛いのは分かりますが、何分今は頑張ってくださいませ」

右後ろに立っていた、侍従長から小言が来る。

私は直ぐに姿勢をただした。

（やはり、今の私ではまだまだですね。もっと確りしなくてわ）

そんなことを考えていますと、私の方に向かって一人の男性が歩いてきた。

（あれは、悠斗兄様。どうやら、パーティーに来てくださいましたのですね！）

正直悠斗兄様が、私の誕生パーティーに来てくれるかは、全く分からなかった。むしろ、来られない可能性の方が高かった。悠斗兄様が私の正面に来た。

「お久しぶりです、煌武院悠陽殿下。誕生日を向えられておめでとうございます」

「ありがとうございます。不動閣下。本日は私のためにわざわざ時間を作っていただき、本当にありがとうございます」

「本日、誕生日を向かえられた殿下にささやかながら、誕生日プレゼントを用意させていただきました。どうぞ、お受け取りください」

悠斗兄様が、ポケットから箱を取り出しました。綺麗に梱包されて白いリボンで結んでありました。私はそれを手に取り受けとる。あまり重い感じはしませんでした。

「ご配慮ありがとうございます。開けてもよろしいですか？」

「どうぞ。開けてください」

悠斗兄様からも開けても良いと言われたので、私はリボンをほどき梱包された包装紙を剥がしていく。箱の蓋を外すと、中には紫色の球体が入っておりました。

私が困惑していると、いきなり球体が動き出しまして、箱から出てきました。

「え？動きました！？」

「ハロ。ハロハロ。悠陽。誕生日オメデトウ。オメデトウ」

「まあ、なんと不思議な物ですね！？」

侍従長が目を丸くしている。私も驚きのあまり、声が出ません。悠斗兄様を見ると、ニコニコと笑っておられました。

「それは、ハロと言います。今度、メビウスが販売しようとしている新しい玩具です」

「こ、これが、玩具なんですか！？これ程の物で玩具なんて信じられません？？」

「確かに、簡易的な人工知能が搭載されてるいますから、玩具と言われても直ぐに納得出来ないかもしれませんね」

左前で護衛をしていた、真耶さんも驚いています。私は改めて、ハロを見ています。良く見ると、可愛らしいです。無駄の無い綺麗な球体であり、触ってみてもツルツルしています。パタパタと体の一部を動かしている姿は、自己主張をしている様に見えて可愛らしいです。

「悠斗兄様。このようなプレゼントを頂けて、悠陽は大変幸せ者です。悠斗兄様の心遣いに感謝を」

「いやいや。ただのプレゼントにしかすぎませんから。感謝される様な事ではありませんよ」

苦笑いを浮かべながら、頬をかく悠斗兄様。
少し、恥ずかしそうにも見える。

「まあ、プレゼントは渡したしな。俺はこれで失礼させてもらいます。悠陽殿下、誕生日おめでとうございます」

「ありがとうございます。大切に致します。悠斗兄様もパーティーをお楽しみください」

そう言って、悠斗兄様は背を向けてパーティーに戻って行かれました。

「悠陽殿下。今年は良い誕生日になりましたね」

「はい。侍従長の言う通りですね」

私はプレゼントのハロを膝に乗せて、撫でるのであった。

悠陽ｓｉｄｅｏｕｔ

第七十一話（後書き）

前後半で終わらせるつもりが、終わらなかったのでもう1話パーティーが続きます。

感想待ってます。

第七十二話（前書き）

ギリギリ完成。今回は時間が取れなくて苦労しました。では、本文をどうぞ。

第七十二話

悠斗ｓｉｄｅ

煌武院悠陽殿下に誕生日プレゼントを渡した俺は、再び紅蓮師匠のいるテーブルに戻って見ると、既に師匠はいなくなっていた。周囲を見渡してみると、斯衛の誰かと酒を酌み交わしていた。

（まあ、紅蓮師匠がいなくても問題ないしな）

ワイングラスにワインを注いで飲む。上質なワインのフルティーな味が口に広がる。

ワインを飲みながら、周囲を見渡してみると顔に大きな傷痕を着けた男性と目が合った。てか、巌谷榮二中佐だ。俺に気付いた巌谷中佐が此方に歩いて来た。

「久しぶりですね。不動閣下」

「お久しぶりです。巌谷さん。前にお会いしたのは、ＭＳＸＯＳの教導に来たとき以来ですらね」

「そうだね。あの時以来だから、一年ぶりか。あの時ですら准将だったのに、今や大将閣下に成られたんですからね」

「巌谷さん。流石に、堅苦しい呼び方をしなくても構いませんよ？言いづらそうですし？」

明らかに俺と話づらそうだ。俺がそう言うと、巌谷中佐がニヤリと笑った。

「いや～。そう言って、もらうと助かるよ。正直話しづらい事、この上無くてな」

「まあ、聞いてる俺からしたら、違和感が有りまくりでしたからね。所で、なんで巌谷さんが殿下の誕生パーティーに出席してるんですか？」

「ああ。それはだな、俺にも招待状が来たんだよ。まあ、俺がかつてイーグルを落とした衛士て所もあるだろうがな」

「ああ。それでですか。納得いきました」

確かに巌谷中佐は、元は激震でイーグルに一騎討ちで勝負して、勝利した衛士だからな。　日本帝国だと、英雄視されているんだっけな。

その功績で呼ばれたのなら、全く不思議はない。

「悠斗君は、今日は1人なのかい？」

「いえ。紅蓮師匠と一緒に来たんですが、途中で紅蓮師匠もいなくなっていたので」

「へぇ～。まさか、斯衛軍の大将と一緒に来てたのか。他に着いてきた人はいないのかい？」

「ええ。今日は部下は来ていませんからね。前線部隊の指揮向上のため、連れてきたパイロットは日本海側で、教導にあたってますか

らね。そういえば、唯依ちゃんは一緒じゃないんですか？」

「いや、飲み物を取りに行ったから、もうすぐ来ると思うよ」

巌谷中佐と何気無い話をしていると、山吹の制服を来たロングヘアーの女性が、あちこちを見渡しながら歩いて来た。

巌谷中佐の姿を見つけたのから、一目散に此方に来た。俺は丁度、巌谷中佐の真正面にいるため、唯依ちゃんからは丁度死角になる。

巌谷中佐が振り向いて唯依ちゃんの方を見る。

「巌谷中佐。こちらでしたか。最後に居たテーブルに居られないから、探すのに一苦労しました」

「いや。悪かったね。丁度悠斗君が居たから、話をしてたんだよ」

「よ！唯依ちゃん。久しぶりだな」

「え、ゆ、悠斗君！？な、なんでいるんですか！？」

非常に驚いた表情をする唯依ちゃん。巌谷中佐はニヤニヤ笑っていた。

「なんでて言われても、殿下から招待状を貰ったからなんだよ」

「あ！そうなんですか。そう言えば、お久しぶりです。最後に会ってか一年ぶりになりますね」

「そうだね。もう1年が経つんだね」

「はい。そう言えば、悠斗君は八面六臂の大活躍なんですね」

「はい？」

唯依ちゃんがそう言うと、巌谷中佐も手を叩いて納得した表情をする。

（いやいや、八面六臂の大活躍てなんですか？俺が最近した作戦なんて、マンダレーハイヴ攻略作戦位なもんですよ？それ以外に、特にハイヴ攻略なんかしてないですよ？）

俺は、ワインを飲みながら頭をフル回転させて考えてみる。だが、思い当たる節が考えつかなかった。

「いや、唯依ちゃん。悪いが、俺には思い当たる節が無いんだが」

「え？何を言ってるんですか？新型ＭＳザウートを開発して、ソ連に譲渡したではありませんか」

「ああ！あれか。確かにソ連に譲渡したけど、それが大活躍となんの関係があるんだい？」

唯依ちゃんに言われてから思い出した。確かにザウートを譲渡したな。だが、あれはあくまで取引であって、俺の活躍でもなんでも無いんだけどな。そんなことを考えながら、ワインを注ごうとすると唯依ちゃんがワインボトルを手に持って、酌をしてくれた。ワイングラスに紫色のワインが注がれた。

「ありがとう。巌谷中佐にも酌をしてあげないのかい？」

「巌谷中佐はご自分で酌をされてますから」

巌谷中佐を見ると、自分でコップにビールを注いで飲んでいた。

「ぷはぁ～。美味い！生き返るな～」

「巌谷中佐は置いておきまして、悠斗君の大活躍ですがザウートをソ連が前線に投入してから、前線の後退速度が緩やかになったんです。更にザウートの登場により、戦車部隊の被害が格段と減って、戦死者数が格段と減ったんです。これを大活躍と言わずになんて言うのですか！更に・・・」

俺の隣で力説する唯依ちゃん。既に報告書が上がってきている内容だった。俺は暫くの間、唯依ちゃんの力説を黙って聞くのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

真耶ｓｉｄｅ

私は煌武院悠陽殿下のお側で、護衛の任に着いている。既に大方の出席者達が殿下への挨拶を済ませている。私は護衛の後退時間になったので、紅蓮提三郎大将に引き続きをしてパーティー会場を散策していた。

（しかし、紅蓮閣下はお強い方だ。あれだけ大量の酒を飲んでいるにも関わらず、まるで酔っていなかった）

引き続きの際に紅蓮閣下から、僅かに酒の臭いがしたため牽制程度に拳を放ったら容易に受け止められてしまった。

紅蓮閣下は、怒る様な事はせずガッハハハと、笑い飛ばしてくださった。　流石は生きる伝説と言われるだけはある。酒ごときに負けるほど、柔な方ではなかった。

（まあ、紅蓮閣下に護衛の件は任せておけば大丈夫だろう）

私は周囲を見渡す。すると、少し先のテーブルに悠斗の姿を見つけた。

（お！悠斗が居たな。久しぶりに話をするか）

私は悠斗のいるテーブルに向かう。すると、悠斗の側に山吹の制服を着た者が居た。

（あれは唯依だな。隣にいらっしゃるのは、巌谷中佐か。また、随分な大物と酒を酌み交わしているな）

そんなことを考えていると、唯依が私に気付いたらしく胸元で小さく手招きをする。私は手招きに頷きテーブルに向かう。悠斗が振り向いた。

「よ！真耶さん。お疲れ様。何か飲むかい？」

「久しぶりだな悠斗。私はウーロン茶でいい」

私がそう言うと、悠斗が素早くコップを取りウーロン茶を注いで、私に手渡してくれる。私はそれを受け取る。

「お疲れ様です月詠大尉」

「久しぶりだな篁中尉。最後に会ったのは一月程前になるな」

「そうですね。シミュレーター訓練でたまたまお会いして以来ですね。最近はお互い忙しいですしね」

篁中尉は現在、不知火壱型の改良点を洗い出している最中だ。私は私で殿下の護衛等で忙しいのでプライベート等でも、なかなか会えなかったのだ。

「ふむ。唯依ちゃん。私は少し席を外すよ」

「え？巌谷中佐？どうされたのですか？」

「なに、少々用足しに行ってこようと思ってさ」

「あ、はい。分かりました」

「じゃあ、すまないが失礼するよ」

そう言って、巌谷中佐がテーブルから去っていった。残された私達は、話を続ける。

「そう言えば悠斗。殿下に渡していたプレゼントなんだが、少々聞きたい事が有るんだが構わないか？」

「うん？何か、説明に落ち度が有ったか？」

ワインを飲み干し、空になったグラスを持って私の方を見る悠斗。
私はワインボトルを手に取る。空になった悠斗のワイングラスにワインを注ぐ。　再びワイングラスはワインで満たされた。

「いや。そうでは無いのだが、あれは本当に玩具なのかと思ってな」

悠陽殿下が悠斗から貰った、誕生日プレゼントの事だ。流石の私も、あれには驚きを隠せなかった。なんせ球体の物が喋ったり動いたりしたのだからな。出来れば、私も欲しいななんて考えたりもしたのは、内緒だったりする。

「ああ。ハロか。あれはメビウスの傘下企業のアナハイム・エレクトロニクス社から販売される予定の玩具だ。まあ、殿下にプレゼントした物は特別仕様だけどな」

「「特別仕様？どう言うことですか？（だ？）」」

「うん？ただ通常販売仕様と違って、特殊合金が用いられているから弾除けなんかにもなるし、学習型コンピューターが内蔵されているから、戦術機に乗る際に一緒に乗せて、コンピューターにアクセスさせてやると今までの機体の軌道なんかを学習して、常に最適な動きになるようにサポートしたりしてくれるのさ」

そう言ってワインを飲む悠斗。話を聞く限り普通の玩具なんかより、圧倒的に高性能なのが分かる。隣で聞いていた篁中尉がぶるぶると震えている。

（寒いのか？暖房は効いているのだが？）

そんなことを考えていると、篁中尉が悠斗の両肩を掴んだ。

「ゆ、悠斗君！それ、普通に玩具の域を越えていますよね！？」

「おいおい。唯依ちゃん落ち着いてくれ。てか、揺らさないでくれ。急性アルコール中毒になってしまうから」

「落ち着いていられますか！？それって、手のひらサイズのレベルに出来る物じゃ無いんですよ！？」

ガクガクと悠斗を揺らす篁中尉。私は素早く彼女の後ろに周り頭に拳骨をおみまいした。

「落ち着かんか。斯衛たる者、容易に取り乱すな！」

「きゅ～」

頭を抑えながら、黙る篁中尉。悠斗は苦笑いをしていた。

「まあ、唯依ちゃんが驚く位凄い機能を持ったハロなのさ」

「そうなのか。まあ、殿下はとても気に入ったご様子だからな。大事になさるだろう」

「それはありがたい事だ。まあ、御剣の所にいる方にも同じ物を渡したしな」

私は素早く周囲を確認する。どうやら、今の発言は誰にも聞かれて

いない様だ。

「へ？御剣？？？」

篁中尉は良く分かっていない様だ。私は悠斗に耳打ちする。

「悠斗。その件はデリケートな問題なんだ。不用意に話さないでくれ」

「ふん。まあ、俺からしたらクソくらえだがな。今時流行らんよ。双子を嫌がる理由がな」

「私達にどうこう言える問題ではないのだ。私とて嫌な話だが昔からの掟なのだ」

私とて、お二方に出来れば仲良く姉妹として生活してほしいと常図ね思ってはいる。しかし、少なくとも五摂家の老人方が許しはしないだろう。双子は家を別ける。これがお二方を別れさせた原因であり、それほどこの掟は古くからあるのだ。

（私と違い、簡単にお二方に会うことの出来る悠斗は、私以上に嫌なのだろう。ましてや悠斗は、煌武院家に名を連ねる一族なのだからな。さぞや無念なのだろう）

私は悠斗から離れる。悠斗はグラスに半分程残っていたワインを一気に飲み干した。

「ふう～。まあ、今の発言は忘れてくれ。少々酔いが回った様だ」

「さて？何を言ってるんだ悠斗？先程話していたのは、殿下にプレ

ゼントしたハロの性能だったではないか？」

私がそう言と、悠斗はニヤリと笑った。どうやら私の話に乗るらしい。

「そうだったな。酒を飲むとついつい忘れっぽくなるらしいな」

「？？？はぁ？？」

篁中尉は頭に？マークを浮かべて首を捻っていた。どうやら、状況についてこれていないらしい。

まあ、分からないなら分からない方が良い。

「そう言えば、二人にもプレゼントが有るんだったな」

「え？本当ですか！？」

「本当か？悠斗？」

悠斗がワイングラスをテーブルに置き、ポケットに手を入れた。悠斗がポケットから取り出したのは、綺麗に梱包され赤いリボンで結んであった2つの小箱だ。私と篁中尉に小箱が手渡される。

「少々早いけど、クリスマスプレゼントだよ」

「あ、ありがとうございます！開けても良いですか！？」

「ああ、構わないよ」

「私も開けるぞ」

「どうぞどうぞ」

私はリボンをほどき、綺麗に包まれた紙を外す。すると中から白い箱が露になった。箱を開くと、中から勢い良く赤い球体の物が飛び出して来た。

「ハロハロ。真耶コンバンハ！」

「悠斗！これは!?ハロではないか!?」

「ハロハロハロ！唯依。元気。唯依。元気！」

「これがハロなんですか!?可愛らしいですね」

私と篁中尉は色違いの手乗りサイズのハロを貰った。私のハロが赤色で篁中尉のハロは黄色だ。

「殿下達にプレゼントしたハロと同じタイプの物だから、大事にしてくれよ」

「はい。大事にします！ありがとう悠斗君！」

そう言って、篁中尉は悠斗の左腕に抱き付いた。悠斗も満更じゃないようだ。

「（ほう!?私の悠斗に抱き付くとは、いい度胸をしてるじゃないか！）

悠斗からのプレゼントなら、大事にするに決まっているだろう」

そう言って、私は悠斗の右腕に抱き付いた。今の状況は周りの者から見たら、両手に花だろうな。

「そう言ってもらえて良かったよ」

悠斗が優しい笑みを浮かべた。私は自分の鼓動が早くなるのを感じた。

篁中尉の方を見ると、顔を下にして頬を紅く染めていた。

（く！やはり悠斗を狙う者が多い様だな。だが！私には婚約者と言うアドバンテージがある。誰にも、悠斗を渡すつもりは無い！だが、私は心が広いから愛人位は許してやる。正妻の座は私が頂くからな）

改めて、悠斗を狙う者が多いと言う事実を確認するのだった。

真耶ｓｉｄｅｏｕｔ

唯依ｓｉｄｅ

帝都城でのパーティーを終えて私は自宅に戻り、自室の布団に横になっている。寝ようとしているのだが、なかなか寝付けないのだ。

（やっぱり嬉しすぎて眠れない。悠斗君からのプレゼントは本当に嬉しかったぁ～）

抱き締めているハロを見る。既にスリープモードに入っているため、動く事はない。悠斗が特別に作っただけはあって、さわり心地は良くあまり重くないのだ。

（やっぱり私は悠斗君が好き。この気持ちに嘘は無い。でも、悠斗君の周りには綺麗な人が多い）

私が知っているだけで、月詠姉妹、悠斗君の秘書官のイルマ中尉、それに海兵隊のシーマさん。皆タイプは違うが美人だ。　皆、悠斗君がいる場所では視線で悠斗君を追っていた。

（月詠姉妹は別として、秘書官のイルマ中尉とシーマさんはも悠斗君を狙っているのは間違いない）

女の勘が告げている。彼女達もまたライバルだと。しかも、その二人は自分と違い常に側にいるのだ。その点に関しては彼女達の方が有利である事は明白だった。しかし、私には彼女達にないアドバンテージがある。それがプレゼントされたハロだ。

（悠斗君に聞いたら、ハロは私と殿下と月詠姉妹にしかプレゼントしていないと言っていました。その部分で私はリードしています）

そんなことを考えていると、睡魔がゆっくりと私を襲ってきた。

（あ、明日の訓練にはハロを持って行かなきゃ）

私は襲い来る睡魔に抗う事無く、瞳を閉じて夢の世界に旅立つのだ

った。

唯依ｓｉｄｅｏｕｔ

第七十二話（後書き）

残暑かキツイです。ノロノロ台風の影響で外がフェーン現象で暑いので仕事がしんどいです。
夏バテならぬ、秋バテになりそうだ。

感想待ってます。

第七十三話（前書き）

完成。今日の夜は比較的涼しいので楽々書けた。では、本編をどうぞ。

第七十三話

悠斗ｓｉｄｅ

１９９９年１２月２４日秘密基地パーティー会場

今日はクリスマスイブだ。キリスト教ではイエスキリストの誕生（降臨）を祝うのが目的だ。まあ、メビウスは無宗教なので関係は無い。どちからと言えば、日頃の疲れや鬱憤を晴らす為にどんちゃん騒ぎのパーティーをするだけだ。

俺は今、サンタクロースの格好をして壇上に上がっている。右手にワイングラスを持っている。無論ワインは注がれているぞ。同じくサンタクロースの格好をした、ジョニー・ライデン中佐がノリノリで司会を担当している。

「さあ！今年もやって来ました！第一回メビウスクリスマスパーティーだ！」

「「「「うおー！イエーイ！！」」」」

ライデン中佐の司会に会場もノリノリで反応する。既に会場内のテンションはかなり高い様だ。

「今年も来ました、クリスマスパーティー。皆さん日頃の疲れや鬱

憤を存分に晴らしましょう！では、メビウス総司令の不動閣下に１つ開始の音頭をとってもらいましょう」

俺はスタンドマイクの前に立つ。正直こう言った場合は無難な事を言うしかない。

「諸君。今年は激動の日々だった。新年そうそうの月攻略、夏には明星作戦、そしてマンダレーハイヴ攻略作戦。諸君らは、厳しい戦いの中でよくぞ奮起してくれた。諸君らの活躍があってこそ、今、こうしていられるのだ。今日は日頃の世俗を忘れて楽しんでくれたまえ。諸君。メリークリスマス！」

「「「「「メリークリスマス！！」」」」」

全員でメリークリスマスと言って乾杯する。あちらこちらでグラスを軽く当てる音が響く。俺はワインを少し飲んで壇上を後にする。

「以上不動閣下の挨拶でした。続きましては・・」

ライデン中佐が司会者として、酒を飲みながら話をしているのをＢＧＭに俺は会場内を散策する。　壇上近くのテーブルにデラーズ中将、ユーリー・ハスラー少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン少将がいた。ただし、全員サンタクロースの格好をして。

「おお！悠斗か。開催の挨拶ご苦労だったな」

「いえ。たかだか、挨拶をしたくらいですよ。皆さんサンタクロースの格好をして、どうしたんですか？」

普段の四人の性格を考えると、絶対しない様な格好だ。しかも、白

い大きな袋も近くに置いてある。

「なに。コンスコンの発案で孤児院にサンタクロースの格好で行って、子供達にプレゼントを配る事になってな。だから、全員がサンタクロースの格好をしているのだ」

「どうかね？なかなか様になっているだろう？」

「ハスラー少将。髭が生えてないから流石に本物とは言えませんが、似合っていますよ」

正直、上級将校の方々は伊達に歳をとってる訳ではないようだ。四人とも、サンタクロースの格好が似合っている。ただ、残念なのが全員髭は生えていない事だ。

（本物ならもじゃもじゃの髭が生えてるんだが、全員生えてないから付け髭をするんだろうな）

そんな事を考えていると、コンスコン少将が腕時計を見た。

「お！皆、そろそろ行く時間じゃぞ。不動閣下、失礼します」

「ああ。頑張ってくれよ。外は暑いからな」

四人はワイングラスをテーブルに置き、地面に置いてあった袋を担ぐ。

「では、悠斗。メリークリスマス」

「ええ。デラーズ閣下。メリークリスマス」

「不動閣下も良い夜を。メリークリスマス」

「ハスラー少将も、無理なさらないでくださいよ。メリークリスマス」

「では、行って来ます。不動閣下も今日を楽しんでください。メリークリスマス」

「ビッター少将。サンタ役頑張ってください。メリークリスマス」

「では、行って参ります。子供達に幸せと笑顔を届けて来ます。メリークリスマス」

「コンスコン少将。子供好きなのは感心します。あまり、ハッスルし過ぎないでくださいよ。メリークリスマス」

上級将校の四人がサンタクロースの格好で、会場を去るのを見送る。
俺は再び会場内を散策するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

本日は、秘密基地にてクリスマスパーティーが開催されている。日頃の世俗を忘れてパーティーを楽しんでいる者が殆どだ。私はアンディとリカルドと共に酒を酌み交わしている。

「いや～。不動閣下も粋な事をしてくれますね。まさか、クリスマスパーティーなんか開いてくれるなんて、思いもしませんでしたよ」

「そうだな。まあ、おかげで美味い酒が飲み放題だからな。ありがたい事だな」

「アンディ、リカルド。飲み過ぎに気を付けろよ。上質な酒は、スイスイと飲めるからな」

アンディとリカルドに二日酔いに気を付けろと、注意する。私は手に持ったワイングラスに注がれているワインを飲む。普段、なかなか飲めない上質な酒はやはり美味だ。テーブルに置かれている、食事もまた最高級を使用した物ばかりだ。近くにある、六ピースに切られたチーズを摘まんで口にする。チーズ特有の味が口に広がる。

（流石だな。不動閣下はパーティー等に出す料理の材料には、最高級品しか使っていない。普通の兵士達が普段食する事が出来ないから、こう言った行事の時には必ず出している。そうする事で、士気を下げない様に配慮しているのか）

メビウスでは、ハイヴを攻略した時などは必ずパーティーをするから、兵士達はそれを楽しみにして、より訓練等を頑張っている。

（まあ、一部の若手パイロットは目的が違うのも居るのだかな）

壇上で司会進行を担当するジョニー・ライデン中佐を筆頭にした、一部若手は女性にモテる又は彼女を作るを目的に日々頑張っている者もいる。その成果をパーティー等で披露しているらしい。

（噂に聞く限りでは、ライデン中佐以外は失敗ばかりらしいな。まあ、私は関係ないがな）

自身の容姿には自信があるから、女性にモテるなんてのは訳ないからな。そんなことを考えていると、後ろから声をかけられた。

「シャア大佐。パーティーを楽しんでいるかね？」

「は？あ、不動閣下！わざわざご苦労様です。どう言ったご用ですか？」

振り替えるとワイングラスを片手に持って、サンタクロースの格好をしている不動閣下が居られた。素早く敬礼する。アンディとリカルドも敬礼をしていた。

「おいおい。今日はクリスマスイブだ。難いことは言わんよ。楽にしてくれ」

「分かりました」

「「は！」」

私達は敬礼を止める。不動閣下は苦笑いされている。

「まあ、シャア大佐も飲みたまえ」

「あ、どうもありがとうございます」

私のワイングラスに不動閣下が手に持ったワインボトルから、ワインが注がれる。私は、注がれたワインを飲む。不動閣下も、ワインを口になされていた。

「それで、不動閣下はどうして私達の所に？」

「うん？ああ。デラーズ閣下達がサンタクロースの格好で、孤児院を訪問しに行ってな。たまたま散策してたら、見知った相手のシャア大佐達が居たから来たんだ」

「そうでしたか。パーティーの催しには参加しなくて、よろしいのですか？」

丁度壇上では、有志による催し物が開催されている。一人の兵士が、被っていたシルクハットを頭からとって、左手に持ち指で三回帽子を指す。次の瞬間帽子から鳩が飛び出して来た。

「へぇ～。なかなか手が込んでるじゃないか。そう思わないかリカルド？」

「そうだな。かなり訓練をしたんだろうな。綺麗に出来てるな」

パスタを食べながら、リカルドに手品の感想を求めるアンディ。リカルドはリカルドで、ローストビーフを食べながら答えていた。私と不動閣下は手品を見ている。

「お！上手だな。手品とはなかなか面白いな」

「ええ。なかなかの腕前の様ですな（そうだ。丁度良い機会だから、前から聞きたかった事を尋ねてみるか）」

不動閣下が壇上で行われている催し物を見るのを止めて、私の方を見てきた。私は、ワインボトルを左手に持ち、不動閣下のグラスに注ぐ。

「ささ。不動閣下もどうぞ」

「すまんな。ふぅ～美味いな」

「そう言えば、前から不動閣下に尋ねたい事があったのですが、聞いてよろしかったですか？」

「うん？なんだろうか？新型のエース専用機の事か？」

「いえ。それも気になりますが、私が聞きたいのは不動閣下に好きな女性がいるのか、前から聞いて見たかったのです」

私も一応トトカルチョに参加している。まあ、掛けた額などはした金だ。　それよりも、不動閣下に意中の相手がいるかどうかは前から聞いてみたいと思っていたのだ。

ゾクリ！

（（な、なんだ!?今の重圧（プレッシャー）は!?））

私は急な息苦しさを感じた。不動閣下もどうやら感じ取ったらしい。

（ニュータイプの勘が危険を察知しているのか？だが、相手は敵意

を出しすぎている。その程度では、戦場を生き残れんぞ！）

周囲を見渡して見ると、女性陣の視線が私と不動閣下に集まっていた。

だが、私は構わずに質問をする。

「で？不動閣下は現在、意中の方がおらしゃるのですか？（女性陣の視線が痛いな。これは、藪を続いて蛇が出たどころではないかもしれん！）

「そうだな。まあ、歳を考えたら恋人は欲しいよな。まあ、意中の相手はいないけどな」

（まだ、悠斗は私の気持ちに気付いていないのね。でも、まだ負けないは！）↑不動閣下の筆頭秘書官

（くっ！そろそろヤバイかね？歳を考えたら、私が一番厳しい立場だからね。なんとか、手を打たないとね）↑海兵隊の司令官大佐

（やはり、歳がまだ若いのが原因ですかね？しかし、私の体はそこまで幼くないはずですが？むしろ、子供は作れます！）↑電子の妖精

（マスター。やはり、もっとお側にいるようにしないと、私の気持ちに気付いてくれないのですね）↑プルの口元をハンカチで拭いている１０番目の妹

（やっぱり、実力行使が一番手っ取り早いかもね？　なに、私の体で骨抜きにしてみせる！）↑巨乳のＲ・ジャジャのパイロット

（う～ん。私は今一影が薄いから、もうちょっと頑張らないと不動

閣下は気付いてくださらないのかしら？）↑褐色肌のピンク髪

（ふ。悠斗め。よもや私の気持ちに気付いておらんとはな。フフフ。丁度良い。今度こそ、私の物にしてやろう！）↑何故か、パーティーに出席している国連事務総長

不動閣下がそう言うと、様々思惑が女性陣達の頭を過っているなど思いもよらなかった。

「そうなのですか。ですが、不動閣下なら女性から引く手あまたのお誘いが有りそうに見えますが？」

「ハッハハハ。流石にシャア大佐の様にはいかんよ。恋愛に関しては百戦錬磨と聞いているからな」

「いえいえ。私とて、最初の頃は失敗の連続でしたから。まあ、恋愛は戦争よりも難しいですからね」

「まあ、シャア大佐の言う通りだな。人の心は誰にも分からないからな」

かつてアムロがアクシズを地球に落下させるのを止めた時に見せた暖かな希望の光とて、どれ程の人々の心に届いたかは分からない。だが、不動閣下から教えて頂いた歴史によれば、私が行方不明になってからも戦いは続いていた。

（結局の所、どれだけ時代が進んでも戦いの歴史は変わらないと言うことか。やはり、代わり行く人の心は誰にも制御する事など出来ないと言うことか。まあ、今の私には関係無い事か。寧ろ不動閣下の鈍さに驚くべきかな。これ程の女性達から、熱い視線を送られて

いるのにも関わらず、普通にワインを召し上がっている辺りは凄いと思う）

私ならば、直ぐに気付いて口説くだろう熱の籠った視線を一身に浴びても、全く気付いていないのはある意味病気だ。

（もしかして、不動閣下は仕事中毒（ワーカーホリック）なのか？もしそうだとすれば、納得出来るな）

よくよく考えて見ると、不動閣下が休日に休んでいる姿を殆ど見たことがないのだ。大半の場合仕事をされている姿だ。

「うん。シャア大佐？飲まないのか？」

「む？ああ。すみません。頂きます」

考え事をしていると、不動閣下に酌をされた。私はグラスに注がれたワインを頂く。今度のワインはやや甘味が強いワインの様だ。

「さて、そろそろ俺は行くとするかな」

「おや？どうかされましたか？」

「いや。他の者たちとも酒を酌み交わしてみたいからな。シャア大佐とは、いい酒を飲めたからな」

「身に余るお言葉です」

「じゃあなシャア大佐。パーティーを楽しんでくれよ。メリークリスマス」

「不動閣下も楽しんでください。メリークリスマス」

互いにそう言うと、不動閣下は会場の奥に消えていった。

「シャア大佐。不動閣下は凄いですね。俺は初めて見ましたよ。あれだけの好意の視線に全く気が付いていない人を見るのは」

「アンディの言う通りですよ。私も驚きました」

アンディとリカルドが私の側に来た。先程不動閣下と話してる際には、私から距離をとってサムズアップしてグッ！と親指を立てて、頑張ってくださいと口パクで言っていたのだ。

「まあ、不動閣下が筋金入りの鈍さと聞いていたが、よもやここまで酷いとはな」

噂に勝る鈍さだったな。　女性陣は頑張ってほしいものだ。

（まあ、今回のクリスマスパーティーで何等かの進展がある事を願うばかりだな）

そんなことを考えながら、アンディとリカルドと三人で酒を酌み交わすのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

第七十三話（後書き）

う～ん。なかなか、パーティーの描写が難しい。　このまま勢いで書けるのか？心配だな。

感想待ってます。

第七十四話（前書き）

ギリギリ完成。予定より早く出来たので投稿しました。では、本編をどうぞ。

第七十四話

悠斗ｓｉｄｅ

シャア大佐達と別れてから暫く会場内を散策している。すると、前方のテーブルにシン・マツナガ中佐、アナベル・ガトー中佐、ケリィ・レズナー少佐がいた。俺は彼等がいるテーブルに向かう。　マツナガ中佐が俺に気付いて敬礼をする。ガトー中佐達もこちらを見て、俺に気付くと敬礼してきた。俺は三人に返礼しつつテーブルに向かう。

「メリークリスマス。３人共、パーティーを楽しんでるか？」

「はっ！普段はなかなかこう言った機会はあまり無いので、楽しませて頂いてます」

「不動閣下お疲れ様です。クリスマスパーティーとは、洒落ていますな。まあ、パーティーは普段より良い酒を頂けるので楽しませてもらってます」

「メリークリスマスです、不動閣下。俺は充分楽しんでますよ！」

「おいおい。ケリィ少佐。だいぶ飲んでるんじゃないのか？」

ケリィ・レズナー少佐の顔を見ると真っ赤になっていた。彼の周りには日本酒が入っていたで有ろう徳利が大量にあった。　マツナガ中佐やガトー中佐と比べても明らかに飲み過ぎだと分かる程だ。

「大丈夫です！全然酔ってませんから！まだまだ飲めますよ！ハハハ！」

「ケリィ、飲み過ぎだ。そろそろ止めて、部屋に戻った方が良い。明日大変な事になるぞ」

「ガトー中佐の言う通りだ。日本酒の二日酔いはかなり辛い事になるぞ」

ガトー中佐とマツナガ中佐に説得されるケリィ少佐。彼は今にも倒れそうな程だ。会話はまだまともだが、先程からテーブルに掴まっていないと、倒れそうになっている。足が既にふらついている。

「む？そうなのか？だが、パーティーの際に出される酒は非常に美味くてな。もう少し位飲んでも良いだろ？」

「諦めろケリィ。もう、明らかに飲み過ぎだ。だいたい足がふらふらしてるから、立ってるのがやっとだろ？呂律がはっきりしてるうちに部屋に戻ろう。送ってやるから」

ガトー中佐が、ふらふらになっているケリィ少佐に肩を貸す。ケリィ少佐はガトー中佐の力を借りながらゆっくりとした足取りで歩き始めた。

「すいません不動閣下。ケリィ少佐を部屋に送ってきます。マツナガ中佐も申し訳ありません」

「しょうがないさ。気を付けてな」

「気にする事はない。下手な所で寝てしまう方が大変だからな」

「では、失礼します。ほら、ケリィ。行くぞ」

「ああ。すまないガトー。マツナガ中佐、不動閣下、失礼しやす」

ケリィ少佐はガトー中佐の力を借りて、会場を後にするのだった。

「やれやれですな。ケリィ少佐も、久しぶりにハメを外しておりましたからな」

「そうなのか？因みにどれだけの量の酒を飲んだんだ？」

顎に手を当てて考え始めるマツナガ中佐。ケリィ少佐はどれだけの量の酒を飲んだのだろうか？

「恐らくですが、１升は飲まれたかと」

「い、１升か！？凄まじい量の日本酒を飲んだのだな」

普通なら、泥酔して意識が混濁してるレベルの量だ。それだけ飲んでいるにも関わらず呂律がきちんとしていた、ケリィ少佐は化け物だ。

「まあ、明日は幸い休日ですからね。一日中ベットで横になってるでしょな」

「そうだろうな。日本酒の二日酔いはかなりきついからな」

苦笑いするマツナガ中佐。彼も日本酒で二日酔いをしたことがある

ようだ。

（俺も1度したことがあるからな。あれは辛いんだよな）

一言で表すなら、辛いだな。日本酒はアルコール度数が高いから二日酔いになると大変きつい。（作者もなった事があるが、真面目に辛かった）

そんなことを考えていると、マツナガ中佐に声をかけられた。

「不動閣下。ワインのおかわりはいかがですか？」

「いや、遠慮しておく。既に飲んでいるのは、グレープジュースだからな」

「え？そうなのですか？てっきり不動閣下なら、まだまだお飲みになられるかと思っておりましたから」

驚いた表情になるマツナガ中佐。普段渋い彼が驚く表情は非常に珍しい。　まあ、俺自信も非常に珍しい事をしてるしな。普通ならまだ酒を飲んでいるんだが、シャア大佐と別れてからグレープジュースに飲み物を変えたしな。

「なに、デラーズ閣下達も会場を去ったしな。上級将校が何時までもパーティーに居たら、他の者達がハメを外せそうにないと思ってな」

「そんなことはありません。不動閣下は下の者にも人気です。寧ろパーティーに居て頂いた方が良いと思いますが？」

「ハハハ。気を使う必要は無いさ。俺もたまにはゆっくり休みたいからな」

「そうでありましたか。そう言えば不動閣下は、あまり休んでおられませんからな。でしたら、早めに部屋に戻ってゆっくり休んでください」

マツナガ中佐は俺が酒を飲んでいない理由を聞いて納得してくれた。実際問題、月の休みが2日しか無いのはな～。

チラリと腕時計を見る。パーティーが始まってから良い時間になった。

「（総司令官ならではの忙しさだよな。まあ、明日は書類等がないから休みだしな。修行に明け暮れるかな）ありがとう。そろそろ俺は部屋に戻る。マツナガ中佐は、ゆっくりパーティーを楽しんでくれたまえ」

「は！有り難きお言葉です。不動閣下はゆっくりと休んでください」

お互いに敬礼して、俺はパーティー会場を後にして自分の執務室に戻るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

今日は秘密基地でクリスマスパーティーが開催されている。私は会場で悠斗を探している。先程までシャア大佐と話していた姿を見かけたのだが、少し目を放した隙に見失ってしまったのだ。

（チッ！久しぶりに来たチャンスなんだ。今回こそ悠斗に気持ちを伝えるんだ。まごまごしてる余裕は無いってのに）

恐らく私と同じような考えをしている連中（女性）は沢山いる。特に厄介なのは、ハマーン事務総長だ。

（まさか、悠斗がパーティーにハマーン事務総長を招待してたなんてね。予定外にも程があるよ）

実際問題、ハマーン事務総長が一番優位なポジションにいるのは間違いない。既にデートをしているし、尚且つキスまでしているのだから。これで告白してＯＫされたら、鳶に油揚げをさらわれるになってしまう。

（それだけは阻止しなくちゃね。イルマとは乙女協定を結んでるから、告白するときは二人でしなきゃならないけど、今は頼りになるからね）

実際一人で悠斗を探すより、二人で探した方が見つけられる可能性が高くなるからだ。
周囲を見渡すと前方からイルマがやって来た。
よく見ると他にも誰かがいるようだ。

（あれ？後ろにいるピンク髪の女性ってもしかして、ハマーン事務総長！！？なんで一緒にいるんだ！？）

私が驚いていると二人が私の側にやって来た。

「シーマ大佐。不動閣下は見つかりましたか？」

「いや、見つけてない。そしてイルマ中尉、何故ハマーン事務総長と一緒にいるんだ？」

「シーマ・ガラハウ大佐か。直に会うのは初めてだな。初めましてと言った方が良いか？」

両手を組んで私の前に出てくるハマーン事務総長。豊かな胸を強調させるような格好だ。

「（ふ～ん。なかなか胸はあるようだね。まあ、私には及ばないがね）いえ。何度もお会いしてますから結構ですよ。所でどうして二人は一緒に居るんですか？」

「悠斗を探してた所、ちょうど秘書官のイルマ中尉と出会ってな。彼女から悠斗に関する話を聞いてな。それで乙女協定を結んだから一緒にいるのだ。安心しろ。シーマ大佐も味方であると聞いているからな」

チラリとイルマを見る。ニコニコと笑っていた。　どうやら、最初から仲間に引き込むつもりだった様だ。

（まあ、告白するときの人数が二人から三人に増えただけだしね。

問題無いか）

「そう言えばイルマ中尉は、私と会う前は何をしていたのだ？」

「はい。先程まで間違ってお酒を飲んでしまった、ホシノ・ルリ少佐を介抱していました。同じ場所でプルとプルツーがお酒を飲んでしまって眠ってしまったので、マリーダ中尉が部屋に送っていきました。付き添いでイリア少尉も行きましたね。　同じ場所にキャラ大尉が居たのですが、既に酔いつぶれていたので部屋に送って来ました。私達の障害になる連中（女性）は、今はいません。今が最大のチャンスなのですが、肝心の悠斗さんが何処にも見当たらないのです」

「確かに最大のチャンスだね。でも、悠斗を見つけられなきゃ、チャンスがフイになってしまうよ」

「不動閣下がどうかされたのか？」

私達が話をしていると、後ろから声をかけられた。振り替えるとシン・マツナガ中佐が立っていた。

「なんだいマツナガ中佐？女の会話に簡単に入ってくるのは感心しないよ」

「ハハ。それは申し訳ないですなシーマ大佐。いや、シーマ大佐が先程不動閣下がうんぬんと、言っておられたのでな。ついつい話しかけてしまったのです」

「マツナガ中佐は不動閣下の居場所を、ご存知なのですか？」

「ええ。先程まで不動閣下と、酒を飲んでいたので。不動閣下なら、既に自室に戻られましたよ」

マツナガ中佐から、悠斗の居場所を聞くことが出来た。こうなれば、流れは私達にある。

「マツナガ中佐。ありがとうよ。ハマーン事務総長、イルマ、行くよ！」

「そうだな。マツナガ中佐。貴殿の情報が役にたった。感謝するよ」

「ありがとうございます。マツナガ中佐のおかげで、チャンスを掴めそうです。失礼します」

「はぁ？まあ、３人とも気を付けてくださいな」

私達はパーティー会場を後にして、悠斗の居る執務室に向かうのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

マツナガ中佐から悠斗の居場所を聞くことが出来た私達は、悠斗の自室がある執務室に向かって歩いている。

（漸く来たチャンスなんだから。絶対に物にするわよ）

前回の月攻略パーティーの時はシーマ大佐に先を越されてしまったけど、今回はそんなことはない。既にシーマ大佐とハマーン事務総長の3人で、乙女協定を結んでるからだ。

（前回のパーティーの時の収穫は、悠斗が極度の鈍感であることね。それには気を付けないと）

事実前回シーマ大佐の告白を、勘違いしてしまったのだ。今回は二の足を踏まないように、3人で告白するのだ。

「ついたよ。此処が悠斗の執務室だ」

そうこうしてるうちに、悠斗の執務室に到着してしまった。

（くっ！鼓動が早くなってるのが分かる。ドキドキが止まらない。負けちゃダメよイルマ！今日のチャンスをフイにしたら、次は何時になるか分からないんだから）

（チッ！私としたことが、心臓がバクバクするなんてね。危ない橋を渡る時以来の緊張だよ）

（フフフ。悠斗よ。今日こそお前を私の物にしてやる。待っていろ夜は長いのだからな）

3人が頭の中で様々な思惑を秘め、執務室のドアを開けて中に入っ

た。

すると、執務室の椅子に座ってコーヒーを飲んでいた悠斗がいた。

「うん？どうしたんだ3人とも？パーティーを楽しまなくて良いのか？」

悠斗が立ち上がり、私達に近付いて来た。私達は悠斗の問いに答える事なく近付く。部屋の真ん中程の場所で向かい合う格好になった。悠斗からの距離は、全員一歩踏み込めば抱きつけ、キスも出来る位近い位置だ。

「悠斗よ。1つ尋ねたい事があるのだが、構わないか？」

「なんですか、ハマーン事「ハマーンで良い」ハマーン？聞きたい事とは？」

「悠斗は今、付き合っている女性又は好きな女性はいるのか？」

ハマーン事務総長が最初に悠斗に訪ねた。悠斗は驚いた表情になるが、直ぐに真面目な顔になった。

「残念ながらどちらもいませんよ。寧ろ、俺を好きになってくれる人がいるのか分かりませんからね。こんなことが聞きたかったのか？」

「そうか。悠斗」

「うん？なん・・・」

頬を赤く染めたハマーン事務総長が、いきなり悠斗の唇を奪った。

チュパチュパと粘液が混ざりあう音が執務室に響く。

（う～。まさか、ハマーン事務総長がいきなりディープキスをするなんて！大胆です）

「ん・・ちゅ・・ちゅぱ・・・ちゅる」

「ん?！・・ちゅる！・・ちゅ」

悠斗は驚きながらも、ハマーン事務総長の舌を絡めながらキスに答えている。どれ程の時間がたっただろう。二人がゆっくりと離れた。舌に付いた唾液が1本の糸を引いていた。よほど濃こうなキスをしたのだろう。

「ハマーン?いきなり何を?」

「悠斗。聞いてくれ大事な話だ」

ハマーン事務総長の問いかけに悠斗は、黙って頷いた。二人は互いを抱き締めたままだ。

「悠斗。私はお前が好きだ。嘘偽り無く大好きだ。この気持ちを偽るつもりはない」

「ハマーン。本当に俺で、俺なんかで良いのか?」

「くどい。私は好きでもない男に唇を捧げる様な、安い女ではない！私の気持ちは分かってくれたか?」

私からはハマーン事務総長の顔は見えないが、恐らくハマーン事務

総長の顔は真っ赤になっていると思う。私自身も顔が熱いからだ。悠斗はゆっくりと深呼吸して、ハマーン事務総長を見つめ返した。

「ハマーン。君の気持ちは最初のキスで、痛いほど伝わった。だから俺からも言わせてくれ。俺は不器用で戦う事しか出来ない男だ。そんな俺でも良いんだな？」

「ああ。私が好きになったのは、真っ直ぐな悠斗なのだからな」

「ハマーン、俺も好きだ。大好きだ」

「悠斗・・ちゃ・・ん・・ちゅぱ・・・・・・・ちゅる・・ん」

今度は悠斗から、ハマーン事務総長の唇を奪った。再び二人のディープキスが始まった。

（羨ましい！！私も悠斗とキスをしたい！！）

（くっ！こんなに見せつけられるなんてね。ハマーンめ上手くやってくれたね）

二人の長いキスが終わった。どちらともなく離れた二人。ハマーン事務総長は、私達より一歩後ろに下がった。様は、自分が終わったと言う意味だ。悠斗が私とシーマ大佐を見る。

「一応聞くが、二人ともハマーンと同じく俺を好きになってくれたのか？」

「ああ。そうだよ」

「はい。そうです」

チラリとハマーン事務総長を見る悠斗。先程ハマーン事務総長の告白を受け入れた彼は、私達の告白を受け入れて良いのか、悩んでいるようだ。

「悠斗。二人を受け入れてやってくれ。私が今日、告白しに来れたのは二人の力があったからだ。それに、私は他の女がいても構わない。それくらいの器量は持ち合わせているからな」

「分かった。シーマ、イルマ、本当に俺で良いのか？」

「当たり前だよ！私を地獄から救ってくれた悠斗だからこそ、私は好きになったんだ」

「私もです。家族と離れ離ばれにされそうになり、尚且つ仲間すら裏切る事を強要された時に助けてくださった悠斗がいたからこそ、今の私がいるのです。好きです。大好きです悠斗」

シーマ大佐が悠斗に抱き付いた。そして、唇を重ねあう。

「「ん・・ちゅぱ・・ちゅ・・ちゅる・・ちゃ・・」」

二人の舌と舌が絡み合う粘着質な水音が響く。

暫くして、二人がゆっくりと離れた。

「悠斗好きだよ」

「俺もだシーマ」

もう一度、唇を重ねあう二人。軽いキスを終えると唇を離した。
悠斗が私の方を向く。
私は悠斗の筋肉の付いた二の腕に抱きしめられる。悠斗の厚い胸板に耳が当たる。悠斗の心音が聞こえる。

（悠斗も凄いドキドキしてるんだ。幸せ。好きな人に抱き締められるのがこんなにも、暖かいなんて）

私は顔を上げる。そこには大好きな悠斗がニッコリと微笑んでいた。
互いの唇が近付いて来る。

「悠斗。好きです。ずっと側に居てください」

「勿論だイルマ。ずっと、俺を支えてくれ」

「はい！」

互いの唇が重なった。
悠斗の暖かい舌が私の口の中に入ってきた。

「ん・・ちゅ・・ふ・ん・・」

悠斗の舌が私の歯を撫でる。僅かに空いた隙間に悠斗の舌が入ってきた。私の舌を優しく叩いてダンスを始める。私も悠斗の下の動きに合わせて舌を動かす。

（あ、悠斗、キスが上手だ。それに、凄く気持ちいい。蕩けちゃいそう）

「ん・・ちゅ・・ちゅる・・ちゅ・・ん・・んふ・・」

だんだんと激しい舌の動きになってきた。そして、私の二の腕の力がだんだんと抜けて来た。

（悠斗の唾液が美味しい。キスが気持ちよすぎるよ～。体に力が入らない。好きな人とのキスがこんなにも、気持ち良いなんて）

私の体の一部がキュンとしてきた。悠斗とキスをしてからずっと体が疼いているのだ。恐らく先にキスをした二人も同様だろう。やがて、一生続くかと思われたキスも悠斗が唇を離してくたれ事により終わってしまった。互いの舌から垂れる唾液の糸が美しく見えた。

「ずっと一緒だよイルマ」

「はい。絶対に離れませんよ」

もう一度だけ、軽いバードキスをして悠斗から離れる。そのまま3人で悠斗の寝室に行き、激しい一夜を過ごすのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第七十四話（後書き）

一挙3人を恋人にしました。少々強引かも知れませんが勘弁してください。感想待ってます。

外伝その2（前書き）

やってしまった。また、本編と関係ない外伝を書いてしまった。ノリと勢いだけで書いてみました。　では、外伝をどうぞ。

外伝その2

もしも悠斗が異世界に行ったらシリーズ第2段
今回は不動悠斗が神様の正で　真剣恋(マジ)の世界に行ったらどうなるのかです。
悠斗の強さはチート＋バグです。

その1

俺は今、神様の暮らしているヴァルハラ（神々が集う場所）に来ている。何時もの様に師匠と訓練をしていたら、突然風景が変わったんだ。正直超スピードとかのレベルじゃないね。もっと恐ろしいレベルだよ。まあ、正直、目の前で女性に縛られてる神様がいるんだが、精神的に厳しいね。

「あら？お客様ですか？私、ゼウス（神様）の妻のヘラと申します。今、旦那を折檻してる最中ですので、少々お待ちください」

「待ってくれヘラ！！ワシは悠斗に用事があるのじゃ！！悠斗助けてくれ！！」

「あ、すいませんがそのままで良いんで、用事だけ済まさせてください」

「分かりました。あなた、早く用件を済ませなさい！」

鞭で神様を叩くヘラさん。神様は体のあちこちに痣が出来ていたが、恍惚な笑みを浮かべていた。

「あ、なんだか違う世界が見えてきた！ヘラ、ワンモアプリーズ！！」

「早く悠斗君の用件を済ませたら、また打ってあげますわ」

「おお！そうだった！悠斗よ、ちょっと違う世界に行ってきてくれないか？」

早く鞭で叩かれたいのか、早口で話をする神様。　正直引くね。

「ああ。良いけど？何処の世界に行くんだ？」

「うん？ああ。武人達がいる世界だ」

「武人？三國志か？」

「違うぞ。まあ、行ってから確認してくれ。じゃあの」

「え？」

足元がいきなり無くなり、俺は重力に従って落ちて行った。

こんな感じで真剣（マジ）恋の世界に行きます。

その2

「知らない天井だ」

ヴァルハラから落下した俺は全く知らない家で、布団に寝かされていた。　ドタドタと人が歩く足音が聞こえてくる。どうやら、此方に向かって来ているよいだ。

（まあ、なんにせよ家人に会って世辞を言わなきゃな。此処が何処かも知りたいしな）

コンコンコンと3回障子戸がノックされる。

「どうぞ」

「失礼します。おお！意識が戻りましたか！」

障子戸を開けて中に入ってきたのは、執事服を着たツンツン頭のバンダナを巻いた青年だった。

（なんだか、聞いたことのある声だな。具体的には陸戦型ガンダムを使う小隊の隊長の声に似ているな）

「お加減はよろしいですか？」

「あ、ああ。何方か存じ上げないが、介抱していただきありがとうございます」

中に入ってきた青年に頭を下げる。彼は俺の寝ている布団の前に正座で座った。

「いや。私が助けた訳ではないのです。私の主の揚羽様が、敷地の近くで倒れていた貴方を見つけて、家に運んだのです」

「そうでしたか。重ね重ねありがとうございます。自己紹介がまだでしたね。俺は不動悠斗と言います」

「どうも。俺は武田小十郎。九鬼揚羽様に仕える執事だ。小十郎と呼んでくれ！少し待っていてくれないか？揚羽様に起きた事を伝えてくる」

「分かった。俺も悠斗と呼んでくれ」

小十郎は部屋から出ていった。俺は布団から出て、体の調子を確かめる。

（服装は黒の無地のTシャツに青いジーンズか。ドッグタグは着けてるし、腕時計も着いてるか）

自分の身なりを確認する。可笑しな格好はしていない様だ。布団を畳んで体を軽く動かす。拳を2発放つと、ヒュンヒュンと風切り音がした。

（ケガとかは無いようだな。力も弱くなってないな）

神様からいきなり呼ばれたかと思ったら、また違う世界に来るはめになっていた。

（しかし、九鬼か。確か、君が主で執事が僕で、ってゲームで出てきた名字だったかな?雑誌で読んだ位しか知らないんだよな）

悠斗は真剣恋をしたことがありません。君主も雑誌で見た程度の知識しかありません。

「ふはははははは！九鬼揚羽推参！」

「は?」

部屋で待っていると、突然障子戸が全開に開かれて、おでこにペケマークのキズがある銀髪でヘアバンドで前髪を上げた少女が入ってきた。服装は学生服の様だ。手には風林火山と書かれた軍配を持っている。

「おお！小十郎から聞いたぞ。意識が戻った様だな！」

「揚羽様！遅れて申し訳ありません！」

「遅いわ！馬鹿者が！」

やや遅れて小十郎が中に入ってきた。手にはお茶を出すための急須等の道具を持っている。

「腰を落として、右の拳で打ち上げる！」

「揚羽様あああああああ！！アッパーでございます！！！」

銀髪の少女が小十郎の顎を右アッパーで殴り宙に浮かせる。

「更に横に飛ばす！！」

「2ヒットコンボでございます、揚羽様あああああああ！！」

そのまま、流れる様な動作で小十郎に追撃の回し蹴りを放つ。小十郎の脇腹を捉える。そのまま、小十郎は部屋から叩き出された。しかし、手にはきちんと急須等を持ったままだ。

（小十郎大丈夫なのか？）

いきなりバイオレンスな光景を見せられてしまった。殴る蹴るをした少女は軍配で自身を扇いでいた。しかも、俺をまるで品定めをするかの様な視線で見ていたのだ。

「ほぉ～。我と小十郎のやり取りを初見で見て、反応が無かったのは初めてだな」

「そうですか？見たところ手加減はしていない様ですが、小十郎なら大丈夫な気がしたので。ああ、それと初めまして。介抱していただいてありがとうございます。俺の名は不動悠斗と申します」

「おお！そう言えば挨拶がまだだったな。我は九鬼揚羽である！！貴様を見つけたのは偶然だが、元気そうでなによりだ」

俺はとりあえず感謝の言葉と自己紹介を済ませる。九鬼さんに吹っ飛ばされた小十郎が急須等を持って、戻って来た。

「揚羽様。見事な2ヒットコンボでございました。この小十郎も、

揚羽様に追い付く為にも精進致します！」

「うむ。精進するのだ小十郎。小十郎、喉が渇いた。お茶を用意せよ」

「は！唯今！」

小十郎は持っていた、急須等を使ってお茶を用意する。いつの間にか畳の上に座布団が敷かれていた。九鬼さんは既に座っている。俺も九鬼さんの正面に座る。

「揚羽様。お茶をどうぞ。悠斗殿もお茶をどうぞ」

「うむ。頂くとしよう」

「小十郎ありがとう」

俺は出されたお茶を頂く。湯飲み茶碗からは湯気がモクモクと立っている。俺はお茶を口にする。

（う～ん。少々熱いな。もう少し温度が低くてもいい気がするな。お茶事態はなかなか美味しいんだけどな）

俺が内心で小十郎の煎れてくれたお茶の評価をしていると、九鬼さんが湯飲み茶碗を置いた。

「この馬鹿者が！！お茶の温度が熱すぎるわ！！」

「グハァ！申し訳ありません、揚羽様あああああああ！！」

九鬼さんは何等躊躇いもなく小十郎を殴り飛ばした。ドップラー効果で小十郎の断末魔が響いていく。

（バイオレンスだな。神様、ホントにこの世界は武人ばかりなのか？ぶっちゃけ、ギャグコメディじゃないのか？）

小十郎は揚羽様に殴られるのが当たり前です。このあと、悠斗が揚羽様に諸事情を説明します。

その３

俺は何故か九鬼さんの家の庭で、九鬼さん（揚羽）と向かい合って対峙している。何故か、ギャラリーと審判がいるのだが。

「ほう。姉上と戦う者が居るとはな。あずみ。あの男をどう見る？」↑銀髪×マークの男

「はい！英雄さまぁぁっっ！！どう頑張っても揚羽様には敵わないと思われます。どう視ても武術に関しては素人の動きです」↑裏があるメイド

「ほぇ～。まさか、姉上が素人と戦うとは。単なる虐めではないかの？」↑羽根の扇子を持った九鬼さんの妹？

「紋白様。恐らく揚羽様は試験か何かをされるのかと思われます」
↑メガネを掛けた白髪のダンディーな執事

「・・・・・・」↑庭の見える部屋の簾の向こうにいるため顔や姿が分からないが雰囲気的に一番偉い人（九鬼帝）

「揚羽様！頑張ってください！！悠斗殿、無理しないでください！」
↑小十郎

「ふ～ん。まあ、揚羽様の余裕勝ちね」↑通称血まみれの異名をもつメイド

「ええ。まずあの男が勝てる可能性はない」↑感情の変化が乏しいメイド

ギャラリーが様々な意見を言っている。俺はどうしてこうなったのか、理解出来ていない。
（あれ？なんで戦う事になったんだろう？あれか！小十郎とのやり取りを見てて、反応が無かったのが原因か？）

そんな事を考えていると、金髪でダンディーな雰囲気の人が俺と九鬼さんの間に来た。

「九鬼紋白専属のヒューム・ヘルシングだ。此度の決闘の審判を担当する。ルールは簡単だ。相手をＫＯするか、審判の私が戦闘続行不能と判断して止めに入るかだ。なを、時間は無制限だ。両者用意は良いな？」

「ヒューム師匠。我は良いぞ」

「まだダメです」

なんとなく、空気を読まずに反抗してみる。

「男がグズグズ言うな。始め！」

ヒュームさんは、俺の意見を無視して合図をだす。それと同時に体操着に着替えた九鬼さんが、俺に突進してくる。九鬼さんは俺の間合いに入ると、即座に蹴りを放つ。

（とりあえず、これでＫＯされた風に装ってみるか）

俺は周囲のギャラリーに気付かれない様に後ろにジャンプして、衝撃を相殺して蹴りを受ける。俺はそのまま３メートル程吹き飛ばされて、地面に仰向けに倒れる。

「やはり、姉上の勝ちか。まあ、当たり前か」↑銀髪×マークの男

「そうでございます。英雄さまぁぁっっ！！（あれは、脳が揺らされたな。恐らく意識が有っても立てないな）」↑裏表のあるメイド

「まあ、当たり前の結果じゃの」↑羽根の扇子を持った九鬼さんの妹

「どうでしょうか？（今のは、見間違いか？後ろに跳んだ様に見えたが？気のせいか？）」↑メガネを掛けた白髪のダンディーな執事

「・・・・・・」↑簾の向こうにいるため顔や姿が分からない九鬼帝

「流石でございます、揚羽様！！」↑小十郎

「まあ、当然の結果ね」↑通称血まみれの異名をもつメイド

「いや、けど、まさか？（今、ダメージを相殺したような？気のせいかしら？）」↑感情の変化が乏しいメイド

「ふむ？我の見込み違いだったな。ヒューム師匠。我の勝ち故、早く悠斗に医者を呼んでください」

九鬼さんは自身が勝利したと確信している様だ。ただ、審判のヒュームさんが勝利宣言をしていない。

（あれ？もしかして、見抜いたかな？）

「ヒューム師匠！早く宣言をしてください！小十郎！医療班を呼ぶのだ！」

「その必要はない。小僧。何時までやられた振りをしているつもりだ？さっさと立て！立つつもりがないなら、俺が叩き起こすぞ！！」

怒気を孕んだ声で俺に立てと言うヒュームさん。どうやら彼は俺がダメージを受けていない事を、見抜いたらしい。

俺は素早く立ち上がる。

「まさか、あれを見抜くなんてね」

「ギリギリだがな。俺も注視していなかったら、見逃していただろうな。それだけ見事な見切りだった」

「馬鹿な！我の必殺のタイミングで放った蹴りで、ダメージを受けていないだと！」

審判のヒュームさんは俺の見きりに、感心していた。ギャラリーや九鬼さんは、俺がダメージを受けていない事に驚いていた。

「ならば!!九鬼家最終奥義!!古龍昇天破!!」

「流派東方不敗が最終奥義!石破天驚拳!」

両者の奥義が炸裂する。九鬼さんの放ったアッパーは俺に命中せず、逆に回避して距離を取って放った俺の石破天驚拳が、九鬼さんに命中して爆発した。煙が立ち込めて辺りを覆う。暫くすると、煙が晴れ地面に倒れている九鬼さんの姿があった。

「勝者不動悠斗!」

ヒュームさんが俺の勝利宣言をする。俺は急いで九鬼さんに駆け寄り、抱き抱える。

「九鬼さん、しっかりしろ!?(かなり手加減して放ったから大丈夫のはずなんだが!?当たり所が悪かったのか?)」

「揚羽様!?しっかりしてください!!」

小十郎も慌てて俺の側にやって来た。すると、九鬼さんが目を開けた。

「うん?悠斗に小十郎か。もしや、我は負けたのか?」

「はい。残念ながら、揚羽様の敗けでございます」

「小十郎。そうか、分かった。そうか我は負けたのか！ふはははは！」

「あ、揚羽様！？」

俺の腕の中でいきなり笑い出す九鬼さん。もしかして、石破天驚拳の当たり所が悪かったのだろうか？俺の腕から出て、九鬼さんは笑いながら立ち上がった。俺と小十郎も立ち上がる。

「悠斗！我はお前が気に入った！悠斗を我の伴侶にするぞ！」

「「「「「「「な、なんだって！！？」」」」」」」

いきなりそう宣言する九鬼さん。小十郎に至っては顎が外れるかと思うほど、口が開いている。まあ、俺自身もかなり驚いているがな。

「揚羽よ。本気なのか？」

「ヒューム師匠。我は真剣（マジ）だ。常々我の夫は我より強い男と決めていたからな。そこに悠斗が現れたのだからな！それに良い男だしな」

こんな感じで夫にする宣言されて、揚羽様ルートになります。このあと、悠斗は揚羽様専属執事として小十郎と共に頑張っていきます。こんな感じで外伝を終わります。

外伝その2（後書き）

う～ん。好きな作者の真剣恋を読んでいたら書きたくなったので書いてみました。本編は精一杯製作中です。感想待ってます。

第七十五話（前書き）

疲れた～。ギリギリ完成しました。では、本編をどうぞ。

第七十五話

語りｓｉｄｅ

ＢＥＴＡ戦争が始まってから数十年の月日が過ぎた。地球に降りてきた災いと戦い、人類は日々戦線を後退させ続けた。
多くの人命が失われ、ユーラシア大陸にある大多数の国がその祖国をＢＥＴＡによって奪われた。軍を担っていたベテラン達は開戦当初から戦場に駆り出され、多くが戦死してしまった。祖国が戦場になった国々は未来ある若者までも戦場に駆り出さざるを得なかった。
　ユーラシア大陸のほぼ全てを制圧下に置いたＢＥＴＡは遂に海の向こうの島国に迄も侵略を開始した。格式高き英国は自国にＢＥＴＡの巣であるハイヴを建設させずにドーバー海峡を挟んで日々ＢＥＴＡと戦いを続けている。逆に東洋の日が上る国は自国にＢＥＴＡの巣であるハイヴを建設されてしまった。此所でもまた、未来ある若者が戦場に駆り出され祖国の為に命を賭けて戦っている。彼の国は２つもハイヴを建設されるも、１つは制圧することが出来た。ただ、その戦いにおける影響は小さく無かった。　海の向こうに存在する大国と深刻な摩擦を生んでしまったのた。そう。自国内に事前通達無しで放たれた、悪夢の兵器によってハイヴを制圧することは出来た。だがそれは、その土地に人が住めない土地になる副作用があったのだ。また、その戦いである男が死にかけたが生きて生還する事となった。二十世紀も終わりが見えてきた頃に現れた一人の男。彼は自身が開発した兵器を用いて、悪夢の兵器に頼らずに見事ハイヴを攻略することに成功した。これにより、悪夢の兵器に頼らずに祖国を奪還する事を夢見た国々は歓喜に沸いた。
激動の二十世紀のフィナーレを飾る最後の１年が来た。彼はこの先

世界をどう、救って行くのだろうか？それはまだ誰も知らない。

語りｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年1月7日火星アステロイドベルト地帯アクシズ

俺がハマーン、シーマ、イルマと結ばれてから2週間が過ぎた。クリスマスパーティーを途中で抜け出して彼女達の告白を受け入れたあの日の夜は、激しく互いを求めあった。おかげで次の日はハマーン、シーマ、イルマの3人は俺のベッドの上から起き上がる事が出来なかった。まあ、あれだけ激しく互いを求めあった事が原因なんだかな。　まあ、次の日は俺が大変だったがな。まず、デラーズ中将を筆頭に上級将校の方々は祝福してくれたし、その他兵士達、整備班、パイロットなど様々な人々からも祝福を受けた。デラーズ中将なんかは、「早く子を宿して欲しいですな。ハハハ！」なんて言っていたしな。

（メビウスの人々達からは祝福してくれたからな。まあ、子供が出

来るかどうかは分からないけどな）

3人とも子供は欲しいと言っていた。まあ、夜の営みを頑張るしかないな。クリスマスが終わってから、ハマーンがアメリカに帰国した。ハマーンは帰りのチャーター機に乗る別れ際に「悠斗。お前は私の伴侶なのだ。最低でも月に2回は私に会いにに来い。いいな？」と、言ってキスしてから帰りの飛行機に乗って帰って行った。その時、ハマーンに小さな十字架が着いたシルバーネックレスをプレゼントしておいた。まあ、クリスマスプレゼントとして渡すつもりだった物だったやつだ。

（まあ、ハマーンの笑顔を見れたから良しとするか）

ハマーンが帰国してからは、毎日シーマとイルマの二人が夜の相手をしてくれる。無論二人にもハマーンと同じネックレスをプレゼントしてある。　彼女達は自分のドッグタグ（認識票）に十字架の形をしたシルバーアクセサリーを通して身に付けている。
俺は自分ドッグタグを服の中から取り出して手に持って見る。ゾルオルハルコンニュウム合金で出来ている特注品だ。チェーンも同様の素材で出来ている。チェーンに通されているドッグタグの枚数は現在8枚だ。内訳は俺のタグが二枚、ハマーンのタグが二枚、イルマのタグが二枚、シーマのタグが二枚だ。彼女達が何時でも側に入るように感じれる様にとの事らしい。

（まあ、ドッグタグの増えた重さの分だけ護るべき・・・いや、愛する人がいる証だな）

メビウスではドッグタグ（認識票）は二枚式を採用している。この形式はアメリカ軍等でも採用されている。ちなみに一枚式を採用している国もある。これは二枚式と違い一枚のステンレス製（アルミ

ニウム製の場合もある、また二枚式もステンレス又はアルミニウム製である）の真ん中に折り目があり、上下に個人情報が刻印されている。二枚式は金属同士がぶつかり合うため、サイレンサーと呼ばれるゴム製の外部カバーを付けている国もある。メビウスはゴム製の外部カバーを着ける着けないは個人の意思に任せている。俺は着けていないがな。そんな事を考えていると、体を揺すられた。しかも、声も聞こえる。

「・・・閣下？・・・動閣下？不動閣下！？」

「は？済まないなラコック大佐。考え事をしていた」

ふと頭を上げると、頭部がやや薄くなり始めていたラコック大佐が視界に映った。

（ああ。そう言えば俺はアクシズに来ていたんだな。火星攻略作戦の準備に来ていたんだった）

改めて自分が何処に居るのかを思い出した。新年が明けて１週間が過ぎた。俺はハマーン事務総長とデラーズ中将に火星を攻略する事を伝え、シーマ海兵隊と共に火星アステロイドベルト地帯に存在するアクシズに来ていたのだ。俺はドッグタグを服の中に入れ、椅子に深く腰掛け直しラコック大佐に向き合う。

「不動閣下。お疲れでしょうか？」

「いや、少々考え事をしていただけだ。報告を続けてくれ」

「分かりました。現在アクシズの総員は１００００人であります。不動閣下と共に来た海兵隊と合計しても、１２０００人余りしかお

りません。また、特殊プラントは順調に稼働しております。食料、弾薬、部品等の物資に問題はありません。また、不動閣下が内密に進められてきたＭＳの生産も順調に進んでおり、明日には火星攻略作戦を開始出来ます」

ラコック大佐の報告を聞く。メビウス地上基地と同じプラントがあるため、宇宙艦艇、ＭＳ、食料、弾薬、保守部品等に問題は無いようだ。正直な話これはありがたかった。宇宙では、補給線の確保が難しいからだ。チートプラントのおかげで物資に困らないのは補給線を維持する観点から言えば、非常にありがたいのだ。

（月の基地から此処に来るまでは、３日もかかるからな。まあ、メビウスの宇宙艦艇だからこれだけの時間で済むのだがな）

普通に行き来してたら、どれだけ時間がかかる事やら。そんな事を考えていると、俺とラコック大佐の前にコーヒーが出された。

「どうぞ、不動閣下。ラコック大佐。長い時間話されますと、喉が渇きますから」

「ありがとうございます。イルマ中尉。正直喉が渇いておりましたから」

「ありがとうイルマ中尉。ラコック大佐。少々休憩しよう。大まかな状態は分かったしな」

「はい。そうしましょう」

イルマ中尉は俺のやや後ろに控えている。俺とラコック大佐は出されたコーヒーを飲む。喉が渇いていたため、普段より美味く感じた。

コーヒーカップをラコック大佐が机に置いた。

「そう言えば、昨晩はお楽しみだったようですね」

「ぶ！ゴッホ、ゴッホ」

「ふ、不動閣下！大丈夫ですか！？」

ラコック大佐がいきなり変な事を言ったせいで、飲んでいたコーヒーが気道に入ってしまいむせてしまった。慌ててイルマ中尉が俺の背中を擦ってくれる。

「ら、ラコック大佐？いきなり何を言ってるんだ！？」

「ハハハ。デラーズ中将に不動閣下にこう言えと言われましてな。その反応から察すると、昨晩はお楽しみだった様ですね。まあ、早い内に世継ぎを作られておくのは良い事です。子育ては歳を取れば取るだけ大変ですからね」

ニヤニヤと笑うラコック大佐。デラーズ中将も随分味な真似をしてくれる。危うくコーヒーをぶちまける所だった。

「ラコック大佐。そう言ったご冗談を言われんのは構いませんが、時と場合を考えていただけませんか？不動閣下がむせてしまいましたから（ニッコリ）」

「そ、そ、そうですね。私も少々場を弁えるべきでしたね」

ガクガクと震えるラコック大佐。背中を擦ってくれているイルマ中尉から放たれる黒いオーラが恐すぎだ。俺も恐くて後ろを振り向く

勇気がない。

「ま、まあ。イルマ中尉。そのくらいで勘弁してあげなさい。ラコック大佐の顔面から血の気が引いているから」

「分かりました。コーヒーのおかわりを持って来ます。ラコック大佐はいかがですか？」

「ああ。私はまだ大丈夫です」

「分かりました」

イルマ中尉は俺のコーヒーを一旦下げる。机を綺麗に拭いてからイルマ中尉は席を外した。

「ふう。流石にさっきのラコック大佐のセリフは危なかった。危うく天国が見える所でしたよ」

「申し訳ありません不動閣下。まさか、そこまで動揺されるとは思わなかったので」

「まあ、良いさ。そろそろ報告の続きを聞くとしようか」

「は！では、続いてですが不動閣下が秘密で生産していたＭＳの件ですが、現在三種類のＭＳが完成して量産され格納庫にて整備されています。また、不動閣下のＭＳトールギス？も整備は完了しております」

俺はそのままラコック大佐からの報告を聞き続けるのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

私は悠斗と共に火星アステロイドベルト地帯にある、秘密基地アクシズに来ている。私が悠斗と結ばれてから2週間が経ちました。悠斗と結ばれてからは毎日可愛がられています。

（昨日もサダラーンの悠斗の寝室で可愛がってもらったわね。夜の悠斗は普段と違って激しいから体が持つのか心配ね。思い出しただけで疼いちゃうわ）

悠斗のタフさは半端ではなかった。正直な話、私とシーマ大佐とハマーン事務総長の3人を同時に相手にしても全く疲れる素振りはなかったのだ。　それどころか、私達の方がダウンする有り様だ。ハマーン事務総長が帰国してからは、シーマ大佐と私の二人で可愛がられているのだ。悠斗は2人であろうが3人であろうが関係ないのだ。

（悠斗の胸板は逞しいのよね。腕枕で抱かれて眠るととっても安らぐのよね）

大好きな人に包まれて眠るのが、とても幸せなのだ。私は自身のド

ッグタグを取り出す。悠斗からクリスマスプレゼントとして貰った、シルバーアクセサリーの小さな十字架が付いている。ハマーン事務総長、シーマ大佐、私の3人でお揃いの物だ。

（ふふ。悠斗は顔を赤くしながら渡してくれたのよね。普段ならまずしない表情だったからちょっぴり可愛かったな）

普段は凛々しい悠斗がプレゼントを渡すときに見せた、恥ずかしそうな表情はなんとも可愛らしかった。私はドッグタグをしまうと、格納庫の扉を開けて中に入る。中には大量のＭＳが並んでいた。私は辺りを見渡してみると、パイロットスーツを着たシーマ大佐が私に気付いてこちらに来た。

「お疲れイルマ。格納庫に来るなんてね。どうかしたのかい？」

「お疲れ様ですシーマ大佐。不動閣下が内密に開発、生産したＭＳを一目見て見ようと思いまして」

「ああ。こいつらかい。まあ、私ら海兵隊には関係ない機体だからね。まあ、役にたつんだろう」

近くのハンガーに鎮座する黒い機体。肩の部分には、何か円い物が埋め込まれている。不動閣下曰く、本来なら使うつもりは無かった機体らしい。

「まあ、レーザー、ビーム兵器を完全に防ぐバリアを搭載しているらしいね。装甲はガンダニュウム合金を使用してるからかなりの硬度を保ってるらしいね。まあ、黒い方はビーム兵器しか搭載してないようだね。黄土色（オーカー）の方は、タイプ？でビームサーベルを搭載してるよ。一番奥の赤色の方は、タイプ？で能力的には一番高いね。タ

イ?と比べるとかなり改修されてるから、バランスが一番いい機体だね。まあ、所詮機械人形どもだから何処まで役にたつのやら」

「そうですね。有人機ではなく無人機ですからね。不動閣下もその辺りを考慮して、火星攻略作戦でテスト使用するのでしょう」

「そのようだね。まあ、悠斗は私が背中を護るから問題ないからね。それよりイルマ。そろそろ行かないかい?こんな機体達を見てもしょうがないからね」

「そうですね。行きますか。所で、今夜はどちらから可愛がってもらいますか?」

「そうだね～」

私はシーマ大佐と共に、夜の予定を話し合いながら格納庫を後にするのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第七十五話（後書き）

そろそろ現在の更新速度を維持出来るか不安になった今日この頃。
まあ、頑張るしかないんですがね。感想待ってます。

第七十六話（前書き）

完成しました。火星ハイヴ攻略編ですがこの1話で完結です。短めですが本文をどうぞ。

第七十六話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年１月８日火星衛星軌道上艦隊旗艦サダラーン格納庫

俺は今パイロットスーツに身を包み、愛機であるトールギス？のコックピットの中で出撃の時間になるのを待っている。
今回の火星攻略作戦を開始するに当たっては、人員は最低限しか連れてきていないのだ。

（まあ、戦闘指揮はホシノ少佐がしてくれるしな。シーマ大佐率いる海兵隊は俺と同じハイヴ突入部隊だからな。後は無人機のビルゴシリーズがＢＥＴＡの殲滅に当たるから俺達突入部隊は、可能な限り迅速に反応炉を破壊すればいいからな）

今回の作戦は、地球の連中に感ずかれずに行わなければならない。
（機械人形（オートマチック）でする戦争など、ただのゲームにしか過ぎないからな。ビルゴシリーズの存在を感ずかれるのは面倒だしな）

確かに人類は人的損耗が激しいのは間違いない。そこに強力な無人ＭＳビルゴが現れれば、瞬く間に戦局を優位に出来るだろう。しかし、仮にＢＥＴＡに対策をとられたら面倒な事になる。その正で人類が敗北してしまったら目も当てられなくなってしまう。

（まあ、結局は内緒にしてるのが一番なんだよな。ましてや、火星を攻略するには月と違って大艦隊を動かすのは大変だしな）

アクシズの収容能力では、宇宙軍全てを受け入れるには少々心許ない。現在急ピッチで拡張工事をしているが、まだまだ間に合っていない現状なのだ。そんな事を考えていると、モニター画面にイルマ中尉が映し出された。

「不動閣下。カタパルト準備完了しました」

「分かった。これより移動する」

トールギス?を操作してカタパルトに移動する。

「悠斗。無事に帰って来てください。貴方がいない世界に意味は無いのですから」

悲しげな表情をするイルマ中尉。今まで俺の傍で戦いを見ていた彼女から　しても今回の戦力の少なさは不安の様だ。俺はイルマ中尉を安心させるために、ニッコリと微笑む。

「安心しろイルマ。必ず帰ってくるさ。それにビルゴは使える兵器だ。何も問題ない」

「！は、はい！そうですね。不動閣下なら何等問題がありませんからね」

「そうだよ。悠斗の背中は私が護るから安心しな！」

「シーマ大佐か。頼りにしているぞ」

俺がイルマ中尉と通信をしていると、シーマ大佐がモニター画面に映し出された。

「そうですね。お二人なら問題ありませんからね。では、お気を付けて」

「ああ。行ってくる。不動悠斗。トールギス?出る」

「シーマ・ガラハウ。マリーネライターでるよ!」

トールギス?とシーマ大佐のゲルググ・Mがサダラーンのカタパルトから打ち出される。俺はスラスターを全開にして一気に火星に突入する。シーマ大佐も俺に追従してくる。レーダーで確認すると、艦隊から次々とMSが発進信して展開を開始したのを確認した。

(よし。問題無いようだな。なら先ずは俺が反応炉を破壊して戦端の口火を切らなければな!)

通信回線を開いてシーマ大佐に通信を入れる。

「シーマ大佐」

「どうしたんだい悠斗?」

「一気にオリジナルハイヴの中に突入するぞ!遅れるなよ」

「はん!私を誰だと思ってるんだい!?遅れるわけ無いだろう!」

「ふ、そうだな。なら、行くぞ!」

俺達はスラスターを全開にしたまま火星のオリジナルハイヴに突入する。　現在はＢＥＴＡに対して攻撃を一切行ってないので、ＢＥＴＡから攻撃を受ける事はない。火星軌道上で展開してる部隊にも、オリジナルハイヴが陥落するまでは一切の攻撃を禁止しているので、ＢＥＴＡは此方を敵と認識していないのだ。
内部を進みながら所々にいるＢＥＴＡを避けて更に内部の奥深くに進む。

（ふむ。やはり火星には兵士級や光線級（重光線級）が存在しないな。まあ、人類との戦闘が無かったからこそ、今こうして楽に侵入出来るのだがな）

あちこちに様々なＢＥＴＡが点在してはいるが、どれも俺達の機体を敵と認識していないので攻撃される事はない。おかげで既に突入から5分も経っていないのに最下層に到着してしまった。互いに空中に浮かんだまま周囲を確認する。

「悠斗。どうやら最下層に到着したようだね。早く反応炉を破壊するよ」

「そうだな。早めに破壊してしまうか」

シーマ大佐と共に大広場に向かって進軍を再開する。

（先ほどから感じる不快な感覚は重頭脳（ブレイン）からか！ニュータイプの勘が奴の思念を感じとっているのか？）

大広場に近付くほど、不快な感覚が増大する。ニュータイプの勘が俺に危険を知らせているのだ。

（何と無く分かるのは、奴等は俺達をリサイクル出来る素材と判断してるのか？分からん。それに俺に干渉してくること事態が不快だ！）

横坑を抜けるといきなり開けた場所に出た。どうやら大広場に到着したのだ。

「悠斗！彼処だ！反応炉！」

「分かった。俺より後ろに下がってくれシーマ大佐」

先行していたシーマ大佐を後方に下げる。俺はトールギス？のメガキャノンをチャージする。

（エネルギーチャージ率・・８０・・・９０・・・１００！）

「貴様らの思念が不愉快だ！！消えろ！メガキャノン発射！！」

発射体勢になり、右腕に装備されたメガキャノンを発射する。光の奔流が重頭脳級と反応炉共々呑み込み消滅させて行く。　メガキャノンのビームが消えた後には反応炉諸共全てが消え去っていた。

「悠斗。火星オリジナルハイヴの反応炉の反応が消えたよ。これでオリジナルハイヴのＢＥＴＡは退却するね」

「そうだな。だが、残っている他のハイヴの反応炉を叩き潰さなきゃならん。シーマ大佐、次のハイヴに向かうぞ！」

「分かってるさ！さっさと行くよ！」

俺達はスラスターを全開にして火星地表に戻り、違うハイヴを攻略しに向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

私は不動閣下に代わり、宇宙艦隊の指揮を執っています。先ほど火星のハイヴの反応がまた1つ消えました。現在はＭＤ（モビルドール）ビルゴシリーズを用いて、火星地表に現れたＢＥＴＡ群を掃討に当たっています。イルマ中尉が状況を報告してくれる。

「ビルゴ部隊、現在ＢＥＴＡ群と交戦に入りました！数は３０００体以上！軍団規模です！」

「オモイカネ。ビルゴシリーズにデータリンク。火星に存在するＢＥＴＡは上空に対する攻撃手段を持っていません。上空から攻撃する様に指示を出してください」

私の座っているキャプテンシートの右側空中にオモイカネが映し出される。正面モニターに映し出される戦闘状況及び被害状況を確認しながら戦域の様子を判断する。

「ビルゴ部隊、現在損害ありません！ビルゴ？、ビルゴ？の部隊も動揺に損害０を維持してます！」

「分かりました。此方のハイヴはビルゴ？部隊を向かわせます。ビルゴ？の部隊は次のハイヴに進軍させましょう。不動閣下はかなりの速さで反応炉を破壊してますしね」

既に作戦開始から６時間が経過しようとしている。火星に存在するハイヴは既に残りが半分を切っていた。ハイヴマップからまた１つ反応炉の反応が消えました。

（早いですね。悠斗さんがエースパイロットとは言え、ここまでの速さでハイヴを陥落させていくとは思いませんでした。シーマ大佐もよく、悠斗さんの援護をしてくれています）

不動閣下が乗っているトールギス？は通常のＭＳとは桁違いの推進力を有しています。通常のパイロットならその強すぎる推進力に殺されてしまいます。まず、初めて乗ったパイロットなら血を吐くことになる様な、危険な機体なのです。

（悠斗さんだからこそ乗れる機体なんです。シーマ大佐のゲルググ・Ｍだってかなりの改修をされてるからこそ、なんとか追従出来ています。普通のＭＳだとまず追従して行くのは無理ですからね）

私がそんな事を考えていると、また１つ反応炉の反応が消えた。反応炉が無くなった事で防衛をしていたＢＥＴＡ群が違うハイヴに向かって退却を開始しはじめた。

「オモイカネ。ビルゴにデータリンク。退却するＢＥＴＡを撃破するようにデータを変更してください」

私は再びオモイカネに指示を出す。オモイカネは私の指示を素早くこなしてくれる。

（オモイカネ。分かりました。戦闘が終わればメンテナンスをしますから安心してください）

オモイカネが私にメンテナンスを申請してきた。今回の戦闘で収集した情報を精査したいのでしょう。私は艦隊に指示を出す。

「サダラーン、レウルーラ、リリー・マルレーン、ムサカ×６隻は主砲発射準備をしてください。１分後に支援砲撃を開始します。目標はハイヴ地表のＢＥＴＡ群。不動閣下の突入を支援します」

「了解しました！こちら艦隊旗艦サダラーンより各艦へ、これより支援砲撃を開始する。各艦は主砲発射準備せよ。繰り返す」

私の指示を受けたイルマ中尉が、各艦に指示を伝える。サダラーンの主砲が砲撃準備を完了した。既にメガ粒子砲のチャージを開始した。周囲の艦艇も続々と砲撃の準備を完了した。

「ホシノ少佐。全艦砲撃準備完了しました！」

「メガ粒子砲発射してください」

「メガ粒子砲発射！」

私は砲撃の発射命令を出す。イルマ中尉が各艦に命令を伝達する。

サダラーンの砲門からメガ粒子砲が一斉発射される。僚艦からも主砲が発射される。火星に命中したメガ粒子砲でＢＥＴＡ群が大量に撃破され、不動閣下が通る道が出来る。そこに不動閣下とシーマ大佐の機体が現れて、撃破されたＢＥＴＡの死骸の間を通り抜けて次のハイヴに突入して行った。

「不動閣下が内部に突入しました！なおもＢＥＴＡ群が増えて来ています！」

「ビルゴ部隊をＢＥＴＡにぶつけてください。我々はＢＥＴＡの撃破を最優先に行います。反応炉は不動閣下とシーマ大佐に任せます。全艦砲撃を再開してください（悠斗さん。シーマ大佐。御無事で帰って来てください）

私は悠斗さん達の無事を祈りながら、ＢＥＴＡを掃討する指示を出すのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

私は悠斗と共に、火星にある最後のハイヴに突入している。最初にオリジナルハイヴを攻略した事で、戦局は私達に優位に傾いた。お

かげで今までこれと言った被害を出す事なく戦ってきたのだが、時間が経つにつれてだんだんハイヴの中のＢＥＴＡの数が異常なまでになってしまい、悠斗のトールギス?がメガキャノンを発射して、ある程度間引きしてからじゃないと中に入れない程になったのだ。

（ち！ＢＥＴＡが途方もないほど入るじゃないか。選り取りみどりだけど、流石に選んでる余裕はありゃしない！）

私はマリーネライターのビームマシンガンを連射する。要撃級や突撃級等に命中して、体液を撒き散らす。ビームマシンガンの弾が貫通して周囲のＢＥＴＡを巻き込んで絶命させていくが、全くと言っていいほど数が減っている気がしないのだ。

「はぁぁぁ！」

悠斗がトールギス?のビームサーベルでＢＥＴＡを薙ぎ払う。エネルギー出力を上げている状態の　ビームサーベルの一撃でかなりのＢＥＴＡが真っ二つになるが、空いた隙間をすぐさま違うＢＥＴＡ達が埋めていってしまう。

「ちぃ！数が些か多い要だな！」

「どうするんだい悠斗?このままじゃ、埒があかないよ！」

「仕方がない。メガキャノンでＢＥＴＡを消し飛ばす！エネルギーチャージを開始するから、その間護衛を頼む」

「任せときな悠斗！私が護ってやるからね！」

悠斗のトールギス?がメガキャノンのチャージに入る。私は前に出

て、ＢＥＴＡ群を屠る。

「この、シーマ様の上のまいを跳ねようってなら、悪いが行かさないよ！」

ビームマシンガンを連射して、此方に迫ってくる突撃級や要撃級に風穴を開ける。ゴゴゴと言う音と共に天井が吹き飛ぶ。ＢＥＴＡが擬装横坑（スリーパー・ドリフト）から出現したのだ。

「チィ！まだ、来るのかい！」

「シーマ大佐下がれ！チャージ完了だ！！」

「分かった！」

私はスラスターを全開にして、悠斗のトールギス？より後ろに後退する。　すると、トールギス？からメガキャノンが発射された。

「メガキャノン！！ファイア！！」

光の奔流がＢＥＴＡ群を消し去って行く。光が消えた後にはＢＥＴＡの残骸しか残っていなかった。

「一気に最下層に向かう！遅れるなよシーマ大佐」

「はん！安心しな。このシーマ様が遅れるわけないだろ悠斗！」

私達はスラスター全開にして反応炉を目指し再び潜って行く。それから３０分後には火星に有った全ての反応炉が消え去るのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

1日を掛けて火星攻略作戦は完了しました。メビウス側の大きな損害はビルゴ数機の大破又は中破に止まりました。有人機の損害はありませんでした。私はサダラーンの格納庫で悠斗さんの帰投を待っている最中です。
整備班の方々が慌ただしく働いています。

「ハンガーを開けろ!!シーマ大佐のマリーネライターが入って来るぞ!!」

「「了解しました!」」

アストナージ整備班長が部下に指示を出します。　シーマ大佐の機体が格納庫に入って来ました。
サダラーンに帰還したマリーネライターが、ハンガーに固定されました。　整備班の方々がマリーネライターに近寄って行きます。コックピットハッチが開いてパイロットスーツに身を包んだシーマ大佐が出てきました。近寄って来た整備兵に指示を出しています。

「私の機体はそんなに痛んでないから、オーバーホールする必要は

ないと思うよ」

「分かりました。簡易整備でチェックしてみます！」

「任せたよ」

シーマ大佐が私の方に歩いて来ます。私が手を振ってみると、シーマ大佐も手を振り返してくれました。

「お疲れ様です。１日がかりの大作戦になりましたね」

「お疲れ。本当にこれだけの戦力で火星を攻略したもんだね」

「本当そうですね。普通なら、全軍を動かす必要がある規模の作戦でしたからね」

そう。今回の火星攻略作戦では、地上にいる各師団を動かさずに海兵隊とアクシズ駐留軍のみで、行われたのだ。いくら不動閣下が内密に開発したＭＤが戦力の中心とは言え、敗北してもおかしくない戦いだったのだ。ビルゴシリーズは全部で六万機生産されました。一番多いのがビルゴ?の３００００機、次に多いのがビルゴの２５０００機、一番少ないのがビルゴ?の５０００機だ。ただ、性能的に一番高いのはビルゴ?なのですが、他の２機に比べるとコストが割高なので生産数が少ないのです。

「まあ、ビルゴシリーズはかなり役にたったね。火星に全軍を移動させるとなるとかなりの時間を要するから、敢えて最低限の兵力しか連れて来なかったんだろうね」

「確かにそうですね。全軍を移動させるとなりますと、かなり大変

ですからね。それに対して、シーマ大佐の海兵隊なら容易に動かせますからね」

「まあ、機動力が売りの1つだからね」

「不動閣下のトールギス?の帰還だぞ!!!」

「「「「「ワアァァァァ!!!」」」」」

整備兵の一人が叫ぶ。不動閣下のトールギス?がサダラーンに帰還すると、割れんばかりの歓声が上がった。
トールギス?が専用ハンガーに固定された。コックピットハッチが開いてパイロットスーツに身を包んだ不動閣下が出てきた。

「「「「「「ジーク・メビウス!!メビウスに栄光あれぇぇ!!!」」」」」」

「諸君。歓声ありがとう。皆の力があったからこそ、今回の作戦は成功したのだ!パイロット諸君はゆっくり休んでくれたまえ。整備班の皆は済まないが、機体の整備を頼む」

格納庫に居たパイロット、整備兵、警備兵など様々な兵士達が不動閣下の帰還に歓喜する。不動閣下は彼等に手を振り、整備班長のアストナージ整備班長と話をしている。

「アストナージ整備主任。悪いが俺の機体はオーバーホールしてくれ。関節が限界に達してる筈だ」

「分かってますよ。任しといてください!最高の状態にしておきますから!」

「そうか。後は頼んだ」

不動閣下が此方に向かって歩いてきた。

「ご苦労様だったなシーマ大佐。今回の僚機としての働きは良かったよ。イルマ中尉も管制ご苦労だったな」

「なに。悠斗の背中を護るのは妻として当たり前さ」

「お疲れ様です不動閣下。流石でした。これで暫くは地上に専念出来ますね。あと」

「？あと、どう・・・」

悠斗が言葉を繋げようとした瞬間、私は悠斗の唇を奪った。

「ちゅ・・・ちゅば・・・うん・・・う・・・ち・・・ちゅ」

「あ！イルマ！抜け駆けをするとはいい度胸だね！！」

シーマ大佐が何か言っているが私には聞こえていなかった。最初は驚いた表情をした悠斗だったが、すぐに私の舌に自身の舌を絡めてくれた。粘着質な水音が響く。暫くキスを楽しんでから互いに唇を離す。唾液でできた糸がキラキラと光って幻想的な空間を演出した。

「あと、疲れて帰ってきた旦那様を労るのは妻の役目ですから」

「ありがとうイルマ。だが、少なくとも場所を考えてくれると助かるな。周りの独身男性陣が血涙してるからな」

私達のキスシーンを見ていた整備兵、パイロット等の男性陣が目から血の涙を流していた。女性陣は羨ましそうに眺めていた。私は悠斗の右腕に抱き付く。

「嫌でしたか？」

「嫌じゃないが、任務中は勘弁してくれると嬉しいかな」

「こら！私を無視するな！」

シーマ大佐も悠斗の左腕に抱き付いた。悠斗は苦笑いを浮かべていた。

そのまま3人で格納庫を後にして、帰還報告を行い悠斗の部屋で肌を重ね合うのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

第七十六話（後書き）

ＭＤは宇宙限定です。
ビルゴ?を知ってる人っているのかな?マニアック過ぎるかな?
感想待ってます。

第七十七話（前書き）

やっとこ完成。あんまり長くはないです。では、本編をどうぞ。

第七十七話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年１月２５日
地球秘密基地寝室

朝焼けの太陽の日差しが室内を照らす。俺は太陽の光を浴びてぼんやりと目を覚ます。

（朝か。昨日も激しかったしな）

首を左右に動かすと、俺の腕を枕にして眠る二人の女性がいた。右腕を枕にして眠っているのはイルマ・テスレフ。金髪でショートカットの女性だ。スタイル抜群で出る所は出ていて、引っ込む所は引っ込んでいる。
俺の専属秘書官であり、恋人の一人だ。
左腕を枕にして眠っているのはシーマ・ガラハウ。俺よりだいぶ年上の女性だ。綺麗な緑色のロングヘアーが特徴だ。
荒くれ者の多い海兵隊を纏めている女傑であり、恋人の一人だ。
二人は安らかな寝息をたてて眠っている。俺を含めて全員が一切何も着ていない裸の状態だ。タオルケットを上からかけているだけの状態だ。

（うーん。俺が早く起きすぎたな。どうしようかな？）

部屋の壁に掛けてある時計を見る。起床時間より1時間程早く起きてしまった。

（とりあえずシャワーを浴びて、作戦会議の資料に目を通すか）

これからの予定を決めた俺は、二人を起こさない様に腕を抜いてベッドを後にする。シャワールームに入りシャワーを浴びてさっぱりする。体をタオルで拭いて制服に袖を通す。執務室に入りコーヒーを煎れて自分の椅子に座る。引き出しから資料を取りだしコーヒーを片手に資料に目を通す。　この資料は、メビウスが次に地球で行う予定の作戦事案が詳細に書かれているのだ。

（え～と。今日の上級将官会議では、３月中頃を目処に行う予定のアラビア半島に存在するＨ０９アンバールハイヴの攻略作戦、デザート・アロー（砂漠の矢）作戦の承認だな）

アンバールハイヴ。アラビア半島に建設されたフェイズ５のハイヴだ。アラビア半島の砂漠地帯ではＢＥＴＡの侵攻感知の鍵を握る震動センサーが殆ど有効に機能しなかった為、多くの人命が奪われていった。

それでも、中東連合軍の兵士達は１０年以上アラビア半島の戦線を維持したのだが、１９９７年に戦線を遂に突破されＢＥＴＡが紅海に到達してしまった。中東連合軍及びアフリカ連合軍の兵士達は防衛線をスエズ運河に引き直しアフリカ大陸へのＢＥＴＡ侵攻をそしている。海上輸送の要であるスエズ運河の安全を確保する上でも、アンバールハイヴは是が非でも攻略しなくてはならないハイヴだ。

（まあ、中東連合軍とアフリカ連合軍には既に交渉を開始してるからな。中東連合からはかなり良い返事が期待出来そうだしな。アフ

リカ連合も悪くない感じだしな。まあ、後は会議の席で決まるだろう）

俺はコーヒーを飲みながら資料を捲り目を通すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

ふと肌寒くなり目を覚ます。いつもならある筈の温もりが無いことに気付いた。

（うん・・・？悠斗が居ないのか。イルマはまだ眠っている様だね）

安らかな寝息をしながら眠っているイルマを横目に見つつ、壁に掛けてある時計を見る。時刻は午前４時半を過ぎたばかりだ。起床ラッパの時間まで１時間３０分以上余裕がある。窓の外を見ると朝焼けが部屋に差し込んでいた。今日も良い天気だろう。

（物音がするから、悠斗は執務室で仕事をしてるんだね。私もシャワーを浴びるとするかね）

イルマを起こさない様にして、ベッドから抜け出さしシャワールー

ムに入る。蛇口を捻ると上からお湯が出てきた。
私は頭からお湯を浴びながら、壁に掛けてある鏡を見る。

（最近はお肌の調子が良いね。やっぱり悠斗に抱かれてから、体の調子が凄く良い。後はね？）

右手で自身のお腹を優しく摩る。毎日悠斗のを沢山がれてるから、いずれ妊娠するかも知れない。

（歳を考えると高齢出産になるからね。早く出来ると良いんだけど）

今のご時世では男性が少なくなっているため、なるべく子ずくりを頑張るように推奨してる国が多々ある。ましてや、前線国家では人で不足も相まって積極的に推奨されているのだ。また、優秀な男性の子供は特に求められている。特に悠斗の様な男は、世界中から子が欲しいと要望があるくらいだ。

（まあ、悠斗の子供を最初に授かるのは私だからね！！）

私は蛇口を閉じてシャワーを止めて、体をタオルで拭いてシャワールームを出て軍服に着替える。　着替えてから悠斗のいる執務室に入る。

「おはよう悠斗」

「ん？ああ。おはようシーマ。今日は随分と早いな。まだ、起床時間前だぞ？」

「なに。たまたま早く目が覚めただけだよ。悠斗もコーヒーいるかい？」

「そうだな。丁度飲み終わった所だから、もう一杯もらえるかな？」

「ふふ。任せときな」

私は悠斗からマグカップを受け取りコーヒーメーカーのあるキッチンに入る。私は愛用のマグカップを棚から取り出して悠斗のマグカップと並べて机に置く。マグカップの絵は水墨画タッチで書かれた蜻蛉（かげろう）だ。悠斗のマグカップには絵は可愛く書かれた翼のない龍と絶対強者と書かれている。周りには、白い小さいネコ？と黒い小さいネコ？が描かれている。どちらも立っているんだけどね。

コーヒーメーカーを手に取りコーヒーをマグカップに注ぐ。コーヒー特有の香りがする。コーヒーメーカーを元の位置に置き、マグカップを持ってキッチンを後にする。

「悠斗。コーヒーだよ」

「ありがとう、シーマ」

悠斗は私からマグカップを受け取り、コーヒーを口にする。私もコーヒーを飲む。程よい苦さが口の中に広がる。

「ふう～、美味いな。コーヒーを飲むと落ち着くな」

「確かにコーヒーは美味しいけど、それより美味しいものがあるんだよ」

「うん？お茶菓子でもあるのかい？」

「ふふふ。それわね」

悠斗がマグカップを机に置いて顔を上げる。私はマグカップを悠斗の机に置いて悠斗の顔を両手で掴む。そしてそのまま悠斗の唇を奪った。

「ん!?ん・・・ち・・・ちゅ・・・ちゅる・・・」

粘着質な水の音が執務室に響く。悠斗は最初こそ驚くも、直ぐに舌を絡めてくる。暫くして、互いに唇を離す。

「ふふふ。どうだい?美味しかっただろ?」

「ああ。確かに美味しかったな。しかし、シーマは朝から大胆だな?」

「好きな男の前なら、女は大胆になれるのさ」

「敵わんな」

悠斗は照れくさそうに頬を紅くしながらコーヒーを飲む。それから起床ラッパが鳴るまでゆっくりと二人きりの時間を楽しむのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

ワシは今、会議室にて上級将官会議を行っていた。出席者は、不動悠斗大将、ワシ、ユーリー・ハスラー少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン少将、ギニアス・サハリン少将、ユーリ・ケラーネ少将、ロイ・ジェーコフ准将だ。

議案はＨ０９目標、アンバール ハイヴ攻略作戦デザート・アロー（砂漠の矢）だ。中央の大型モニターにハイヴの場所が表示される。

ホシノ・ルリ少佐が説明をするところだ。

「では、今回提案されたアンバールハイヴについて説明を始めます。まず、アンバール ハイヴはアラビア半島中部に建設された地球上で９個めのハイヴです。アラビア戦線は１０年以上ＢＥＴＡからの侵攻に耐えてきましたが、１９９７年に防衛線を突破された為、中東連合軍はアラビア半島の防衛を放棄してスエズ運河を中心に防衛線を再構築しました。この時アラビア半島を突破したＢＥＴＡ群がアフリカ大陸に上陸しましたが、再構築された防衛線で迎撃を行い見事撃破しました」

ホシノ少佐が説明をしてくれる。中東連合軍が１０年以上も耐えた戦線だ。しかも場所は砂漠地帯だ。人が戦うには過酷過ぎる環境だ。

「すまない。質問があるのだが、よろしいですか？」

「はい。なんでしょうか？」

ユーリ・ケラーネ少将が手を上げて、ホシノ少佐に質問をする。皆がユーリ・ケラーネ少将を見る。

「１０年以上耐えた戦線なら、なんで今まで反抗作戦を行わなかったんですか？」

確かに普通なら反抗作戦を行うだろう。事実、ソ連領内では反抗作戦のパレオロゴス作戦１９７８年に行っているからだ。貴重なハイヴのデータが手にはいったのは事実だ。

「場所が悪すぎるからです。砂漠地帯では、戦術機がＢＥＴＡを探知する要の震動センサーが有効に機能しない状況下だったのです。事実、防衛部隊は奮戦の甲斐なく壊滅し、人類はアラビア半島から退却するしかありませんでしたから。とても反撃に出る余裕がなかったのです」

「そうでしたか。分かりました。話を続けてください」

ユーリ・ケラーネ少将が納得した表情になっていた。ワシも気になっていた所だったから助かった。ホシノ少佐が説明を再開する。

「説明を再開します。砂漠地帯では戦術機の震動センサーの反応が著しく下がりますが、ＭＳの各種センサーは能力が低下する事はありません。
なので、中東連合軍とアフリカ連合軍と共闘してアンバールハイヴを攻略する事となりました。
また、不動閣下が新型陸上戦艦を開発したとの事です」

会場内に「おお！？」と声が響く。ワシを含めた全員が新型陸上戦艦が開発された事に驚いたのだ。

（悠斗はやるのう。いつの間に新型陸上戦艦を開発しておったとわ）

中央の大型モニターに新型陸上戦艦の映像が映しだされる。非常に大きな船体に3連装主砲が４門有るのが分かる。ビッグトレーより遥かに大きい。ホシノ少佐が新型陸上戦艦の説明を始める。

「此方の新型陸上戦艦は名をレセップスと言います。全長５００m。移動方法は船体喫水線下が砂中に没する半没式船体構造を持ち、底部全面に配されたウロコ状の推進装置「スケイルモーター」で砂を振動・液状化させて移動する。砂中でより高い浮力を得るため、底部は表面積が広く設計されています。スケイルモーターは水上航行も可能です。また、格納庫が特殊改造が施されているため、ＭＳ搭載能力は４３２機、ＭＳ１個師団が搭載可能になりました。
また、武装は８０Ｃｍ３連装主砲が４門。垂直ミサイルランチャー（ＶＬＳ）×３２、チャフ・フレア・スモークディスペンサー×３４、砂漠魚雷発射管×２０、対空機関砲が多数装備されています。単艦での火力でもかなり強力です。この戦艦が新たに１０００隻就航します。強化パーツは無限弾薬回復システム、フェイズシフト装甲、無限推進剤回復システム、Ｉフィールド（レーザーだろうがビームだろうが防げます）を搭載しています」
「圧巻ですな。これだけの火力とＭＳ搭載能力があれば、砂漠での戦闘で有っても容易に勝てますな」

「そうですな。ユーリー・ハスラー少将の言う通りですな。これなら、勝てますな」

周りからもこれなら勝てる等の意見が上がる。
まあ、ワシもこれ程大きな陸上戦艦を見るのは始めてだ。

（うむ。このレセップスが就航すれば、大分戦闘が変わるな。ビッグトレーが砲撃支援艦に成り下がるな）

ワシはそんなことを考えながら、ホシノ少佐の説明を聞くのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

「ええ。どうもよろしくお願いします」

「ああ。分かっているさ。そちらも、本国によろしく言っておいてくれ」

「はい。分かりました。失礼します」

扉が閉まる。漸く会談が終了した。私は自身が座っている椅子の背もたれに体を預ける。

（全く老害どもめ。まあ、中東連合は良い返事がもらえたしな。アフリカ連合も参加すると明言したから、良しとするか。しかし、中東連合は一枚岩では無いようだな。一部親米国が米国と何等かの接触を謀っている様だな。また、面倒事を増やさないで欲しいがな）

今の会談の相手は中東連合の大使だ。今頃自国の首相と連絡を取り合っているだろう。私の机の上にコーヒーが出される。秘書官が側

に立っていた。

「お疲れ様です。今ので今日の面会は全て終了しました」

「そうか。貴様もご苦労だったな」

「いえ。私はハマーン事務総長に比べればラクですから。しかし、最近は会談や面会が多いですが、何かあるのですか？」

秘書が疑問を尋ねてくる。確かに通常時に比べると面会や会談が段違いに多いのだ。

「（まあ、明日には分かることだしな）近々中東で動きがあるぞ」

「！！それって、もしかしますと反抗作戦ですか？！」

「明日には公表されるが、まあ良いか。その通りだ。アラビア半島奪回作戦が行われるぞ」

秘書は驚きを隠せないでいる。なにしろ、砂漠地帯での戦いは人類にとって、圧倒的に不利な地形なのだ。ましてや、砂漠地帯での戦闘に慣れている部隊は中東連合軍や1部のアフリカ連合軍の精鋭部隊位なものだ。

（まあ、メビウスには砂漠戦に慣れたノイエン・ビッター少将やロンメル少佐等がいるからな。問題ないのだろう）

そんなことを考えながら秘書の淹れたコーヒーを飲むのだった。

ハマーンsideout

第七十七話（後書き）

二つの連載を持つのって意外と大変だと気付いた。なるべく今の更新ペースを守ります。

感想待ってます。

第七十八話（前書き）

ギリギリ完成。仕事が忙しくて書く時間がなかなか取れなかった。
短いですが、本編をどうぞ。

第七十八話

ライデンｓｉｄｅ

２０００年２月３日節分　地球秘密基地

俺は今、マシュマーとグレミーと共に市街地の公園に来ている。この公園には遊ぶスペースの他にランニングコース等が、整備されている。俺達は長袖長ズボンでサウナスーツを着てランニングシューズを履いて、芝生の上でストレッチをしている。柔軟体操は大切だからな。怪我を未然に防ぐためにも確りとすると良いんだぞ。俺は股を開いて地面に向かって上半身を倒す。ピッタリと地面に着く。

「ライデン中佐は体が柔らかいですな。騎士である私もかなり体は柔らかいと思っていましたが、ライデン中佐は更に柔らかいですな」

「そうかい？まあ、パイロットは体が資本だからな。怪我なんかしてたら、話にならないんだからな」

「しかし、ライデン中佐。何故こんな休日にわざわざ訓練なんかするのですか？」

アキレス腱を伸ばしているグレミーが尋ねてくる。マシュマーは腕の間接の柔軟体操をしている。

「お前らも知っての通り、次の作戦地域は砂漠だ。確実に長丁場になるだろう。そう言った作戦の場合、必ずしも休息が取れるとは限らない。なら、少しでも基礎体力を付けといた方がいい。ましてや、グレミーとマシュマーは１０代なんだ。まだまだ体力を付けられるからな。だからこうして休みの日でも自主トレをするのさ」

「それなら、基地の設備の方が良くないですか？わざわざ市街地の公園に来てするより、効率的でいいと思うのですが？」

ストレッチをしながら、意見を言ってくるマシュマー。何故俺がわざわざ市街地の公園に来ているのか分かっていないようだ。

（まったく。若い奴等はまだまだだな。基地でトレーニングしてたって、美女が見れる訳じゃないんだぞ。なら、市街地の公園に来て市街地の中を走りながら、美人チェックをするのが男ってもんだろうが！）

内心で二人にダメ出しをしつつ俺は立ち上がる。　マシュマーとグレミーの二人も準備が出来た様だ。

「よし。まずは体を暖めるため、公園内をゆっくり走るぞ」

「分かりました」

「はい！頑張ります！」

俺達は公園内を走始める。今日は天候も良く、日差しが有るためぽかぽかしている陽気だ。公園内には沢山の親子連れやカップルがいる。彼等を横目で見つつ走っていると、正面から3人でいる子ずれの親子が歩いて来た。

（あれ？男の方何処かで見たことがあるような？）

俺は前方から来る親子の男を注視する。男は金髪の１０代から２０代前半なかんじだ。女は赤毛のロングヘアーで腰くらいまで髪の長さがある。

子供は黒髪だ。

だんだん距離が縮んで来る。向こうの会話が聞こえてきた。

「バーニィ兄ちゃん、クリス姉ちゃん。今日は何処に遊びに行くの？」

「そうだな、遊園地にでも行くか！」

「良いですね！アル。今日は遊園地に行きましょう！」

「やったー！！そしたら、ザクに乗れるアトラクションがしたいな！」

「いいよ。じゃあ行こうぜ！」

「「はい！」」

どうやら３人は公園の先にある、遊園地に遊びに行くようだ。俺達は３人の横を走り抜けて行く。３人を通り過ぎて少しすると、マシュマーとグレミーが俺の横に並んだ。

「微笑ましい親子でしたな。あんな風に、我々が戦う事で守れる平和があるのですな」

「やはり我々が頑張らねばなりませんな。騎士である私も、更に精進せねば」

「（男が誰だったか思い出せないが、まあ良いか）そうだな。俺達が頑張らないとな。そろそろ、身体が暖まって来ただろう？　市街地の方に向かうぜ！付いてきな！」

「ま、待ってください！」

「く！まだまだ！このマシュマー負けませぬぞ！！」

二人よりペースを上げて駆け出す。二人は負けじと追いかけてきた。俺達は市街地に向かうのだった。

ライデンｓｉｄｅｏｕｔ

グレミーｓｉｄｅ

私達は公園を抜けて現在市街地中心部に向かって走っている。不動閣下が進めている都市計画で作られた町並みは、日本帝国を思い出すような町並みだ。道路には歩行者用の歩道、ランニングコース、軽車両道路、車道に分けて整備されている。　また、道路交通法等で厳しく取り締まりがされている。例えば、自転車は軽車両道路又

は車道の一番端しか走れない。原則的に歩道又はランニングコースの通行は禁止されている。（緊急時は別だ）　また、交通違反者を取り締まりを担当するのはＭＰ（ミリタリーポリス）だ。彼等は軍人だろうが民間人だろうがきちんと平等に取り締まる。そうした厳しいルールが整備されているため、違反者は殆どいない。私がそんなことを考えながら走っていると、何処からか子供の声が聞こえてきた。

「ドナヒューおじさん！絵を描いてください！！」

「僕も！僕も描いてよ！」

「あたしもあたしも！」

「ハッハハ。分かった分かった。皆を絵に描いてあげるからな」

どうやらこの先にある教会と孤児院が隣接した場所からの様だ。その場所に走りながら近付いて行く。すると、視界に入ってきたのは子供達と話をしながら、大人が楽々座れる石の上に座り、スケッチブックを広げて色鉛筆で絵を描いている眼帯の男性と、孤児院で暮らしているであろう数人の子供達だった。しかも、道路の近くでだ。先を走っていたライデン中佐が止まる。私とマシュマーもライデン中佐の隣で止まる。ライデン中佐は口を開けて、ポカーンとしていた。

此方の視線に気付いた眼帯を着けた男性が顔を上げる。

「おや？珍しいですな。ライデン中佐ではありませんか？今日はどうしてこんな場所に？」

「ヴィッシュ・ドナヒュー大尉じゃないですか！貴方が何故こんな所に！？」

「え！あの、有名な荒野の迅雷ですか！」

「おお！殿戦で普通の3倍の戦果を叩き出すと有名な！」

私も会った事はなかったが、まさかメビウスでもかなり有名なエースパイロットに、こんな所で会うことになるとは思わなかった。日本帝国での民間人退却作戦では、殿を任され部下を1人も死なす事なく、見事役目を果たしたパイロットと聞いている。私達が驚いていると、ドナヒュー大尉の前に座っていた子供達も、此方を見てきた。

「ドナヒューおじさん。あの人達は誰ですか？」

「あのお兄さん達は、俺と同じメビウスのパイロット達だよ」

「あ！真ん中の人、テレビで見たことがある！」

1人の子供がライデン中佐を指差す。ライデン中佐はなんだが上機嫌になっていた。

「おう、坊主！俺を知っているのかい？」

「うん。真っ赤なザクに乗ってる人だ！」

「おお！よく分かってるじゃないか！さあ、お兄さんの名前を言ってごらん！」

「うん！赤い彗星のシャア・アズナブル！」

ライデン中佐が膝を付いて地面にひれ伏した。ライデン中佐の目の前が真っ暗になった。

「ライデン中佐！それだと残金が半分になってしまいます！確りしてください！」

マシュマーがライデン中佐の肩に両手を当てて、激しく揺らしながら声をかける。

「は！俺は危うくリセットしなきゃいけなくなるところだった！そして、坊主！俺は赤い彗星じゃない！深紅の稲妻、ジョニー・ライデンだ！」

立ち上がり、腰に左手を当てて右親指を自分に向けて宣言するライデン中佐。子供達はぼ～と見ているだけだった。

「まあ、まあ。ライデン中佐。子供が言った事ですから気にしないでやってください」

「く！こうなったら、もっと活躍して有名になるしかないな！」

「頑張ってくださいライデン中佐。私も負けませんよ」

「ふ。騎士である私が一番になるのは、目に見えているのだがな」

「ハハハ。まあ、頑張ってください」

「皆～おやつの時間よ。手を洗って中に入りなさい～」

「「「はあーい！」」」

我々がのんびり話していると、孤児院の入口から声がかけられる。入口には若い女性が立っていた。恐らく、孤児達の面倒を見ている人なのだろう。子供達は元気よく返事をして中に入って行った。

「おや。もうそんな時間か。済まないなたいした相手も出来ずに」

「いや、気にしないでくれ。俺達はまだまだ走るからな」

「そうか。じゃあ気を付けてな」

「ありがとよ。グレミー、マシュマー。休憩は終わりだ。さっさと行くぞ！」

「はい。では、失礼しますドナヒュー大尉」

「は！では、私達は行かせてもらいます。基地でお会いしたときは、ゆっくり話をしてみたいですな」

ライデン中佐が走り出す。私とマシュマーは、ドナヒュー大尉に挨拶をしてから、ライデン中佐を追いかけるのだった。

グレミーｓｉｄｅｏｕｔ

マシュマーｓｉｄｅ

私達はヴィッシュ・ドナヒュー大尉と別れ、市街地の中心部にやって来た。先程から汗が出るため、タオルで汗を拭く。薔薇の香りがする柔軟剤で洗ったため、肌触りが良く顔を拭くと薔薇の香りも楽しめると言う、最高のタオルだ。現在は休憩　を取っている最中だ。ライデン中佐は自販機から買ってきたスポーツドリンクを飲んでいる。グレミーは息をハアハアと切らしている。

（まったく。だらしがないな。騎士を目指すならば体力、気品、優雅に溢れていなくてはならないからな。日夜鍛えている私からすれば、この程度等、たいした運動に入らん）

「おいおい。大丈夫かグレミー？お前、以外に体力がないな」

「ハアハア。いや、いや。まだまだ、行けますよ」

「まあ、無理するなよ。それより、マシュマー。あちの女の子に何点つける？」

ライデン中佐が指差す方向を見る。なかなか綺麗な女の子が歩いていた。茶髪のサイドポニーの女の子だ。声は平〇綾が似合いそうだ。私は両手を組んで何点つけるか考える。

「そうですな。８５点ですね。まだ、青い気がしますが将来性を考えると、更に美人になっている気がします」

「ほう！なかなか高得点だな。俺なら７５点て所だな」

「ライデン中佐はやや、厳しい評価ですな？どうして７５点何ですか？」

「周りをよく見ろ。他にも美人が沢山いるだろ？他の美女達も評価するんだから、最初からそんな甘く評価してどうする？他の美女達に失礼だろうが」

私は稲妻を受けたかの様な電流が体を駆け抜けて行った。

（そうか！此処には最初の子以外にも、沢山の美人美女美少女がいるのだ！盲点だった！まだまだライデン中佐の域には届いていなかった！）

「では、お二人はあちらの美少女は何点つけますか？」

呼吸を整えたグレミーが指差す方向を見る。今度はセミロング位の黒髪の　美少女が歩いていた。すると、柄の悪い二人組の男が絡んできた。

「マシュマー、グレミー、点数つけるより、助けに行くぞ！」

「いや、待ってください！誰かが助けに入りましたよ！」

ライデン中佐が動き出そうとするのを、グレミーが制止する。先ほどの二人組の男に絡まれた少女の元に、１人の若い男が助けに入った。若い男の顔をみた二人組は行きなり、若い男と美少女に謝ると急いで逃げていった。なにか、過去にトラブルでも起こした相手なのだろうか？若い男と美少女は何か話してから、別れて去って行ってしまった。

「出番奪われましたね」

「グレミーが止めなければ、俺が美少女に感謝されたかもしれないのに！！」

「え！私のせいですか！？」

驚きを隠せないグレミー。それから暫くの間、３人で美少女美人美女チェックをするのだった。

マシュマーｓｉｄｅｏｕｔ

第七十八話（後書き）

今回の登場したキャラが分かる人っているのか？かなり古いゲームのキャラなんだけどな。展開もそうだし。

感想待ってます。

第七十九話（前書き）

完成と。相変わらず余り長く書けない。では、本編をどうぞ。

第七十九話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年３月１０日
スエズ運河レセップスブリッジ

俺は今、アフリカ大陸側のスエズ運河防衛線前線基地に来ている。
もう間もなく、アンバールハイヴ攻略作戦、通称砂漠の矢（デザート・アロー）が開始される。今回軌道降下兵団はメビウスの部隊が担当する事になった。
ソロモンから出発した部隊が、地球軌道上で降下の準備を進めている。今回は何故、国連宇宙総軍の降下兵団を使用しないかと言うと、ハマーン事務総長から忠告が会ったからだ。今回共に作戦に参加する旧中東連合参加国が一枚岩ではないと言われたのだ。
そのため俺も、諜報部を使って中東連合の内情を調べさせたり、ホシノ少佐に調べてもらった所、親米だった、サウジアラビア、ＵＡＥ（アラブ首長国連邦）、帝政イラン、の３カ国が攻略作戦発表する前後から米国とかなりの頻度で接触していたのが分かった。

（現在、中東連合は国連軍に編入されてスエズ運河の防衛に当たっているからな。今回の作戦は、国連印東洋方面第３軍と共に行うからな。その為にわざわざ旧中東連合の国々と、接触して協力をお願いしたからな。しかも、親米３カ国にも交渉してよい返事をもらったのだが、もしかすると米国の間者が紛れてるかも知れないからな）

正直戦闘中に後から射たれたら、たまったものではない。そんなのは、明星作戦の時だけで充分だ。今回の作戦は国連印東洋方面第３軍、アフリカ連合軍、メビウスの編成で行われるのだ。
米国が介入出来るのは、旧中東連合に参加した国々だろう。もしかすると、親米３カ国と何等かの密約を結んでいる可能性を否定出来ないのだ。

（ままならんな。人類勝利の為にいくら頑張っても、人類同士で足を引っ張られたらどうしようもないからな）

若干弱気な事が頭に浮かんだが、頭を振って考えるのを止める。今は、目の前の作戦に集中しなければならない。

（司令官が弱気になっていれば、それは周りに伝染してしまうからな。確りしなくちゃな）

自分自身に気合いを入れる。改めて現在展開している兵力を思い出す。

第一師団　師団長エギーユ・デラーズ中将

陸上戦艦

レセップス級陸上戦艦
２０隻
ビッグトレー級陸上戦艦　４０隻

ＭＳ

ザク？　４３２０機

ドライセン（袖付き仕様）　３６００機

戦車

６１式戦車　５００車両

マゼラ・アタック　５００車両

ヒルドルプ　５０機

ザメル　５０機

ホバートラック　５００車両

第二師団　師団長ノイエン・ビッター少将

陸上戦艦

レセップス級陸上戦艦
３０隻

ビッグトレー級陸上戦艦　３０隻

ＭＳ

ザク？　４３２０機

ドライセン（袖付き仕様）３６００機

陸戦型ゲルググ　３０００機

戦車

６１式戦車　５００車両

マゼラ・アタック　５００車両

ホバートラック　５００車両

ヒルドルプ　５０機

ザメル　５０機

ガンタンク？　３００機

となっている。第一師団、第二師団は地中海からアンバールハイヴに進軍して、反応炉を目指す突入部隊だ。ガンタンク？はレセップス級の甲板に出て、火力支援強化を担当する。戦車部隊は支援砲撃がメインになる。ザメルも此方に含まれる。

第三師団　師団長ユーリー・ハスラー少将

陸上戦艦

レセップス級陸上戦艦

３０隻

ビッグトレー級陸上戦艦　４０隻

ＭＳ

ザク？　５０００機

ドライセン（袖付き仕様）　４５００機

戦車

６１式戦車　１０００車両

マゼラ・アタック　１０００車両

ホバートラック　１０００車両

ヒルドルプ　１００機

ザメル　１００機

ガンタンク？　５００機

第四師団　師団長不動悠斗大将

陸上戦艦

レセップス級陸上戦艦

４０隻

ビッグトレー級陸上戦艦　４０隻

ＭＳ

ザク？　６０００機

ドライセン（袖付き仕様）　６０００機

ゲルググ・Ｍ（マリーネ）　３０００機

戦車

６１式戦車　１５００車両

マゼラ・アタック　１５００車両

ホバートラック　１５００車両

ヒルドルプ　２５０機

ザメル　２５０機

ガンタンク？　２０００機

第三師団、第四師団はスエズ運河を越えてアンバールハイヴ正面に展開して、支援砲撃やＢＥＴＡの殲滅が主任務になる。また、場合によってはハイヴ内部に突入も行う。　また、陸上戦艦に余裕を作ってあるのは、軌道降下兵団を回収するためである。軌道降下兵団は一度地上秘密基地に戻り、その後秘密基地のマスドライバーでソロモンに帰投することになっている。

第五師団　師団長コンスコン少将

陸上戦艦

レセップス級陸上戦艦

３５隻

ビッグトレー級陸上戦艦　３５隻

ＭＳ

ザク？　５０００機

ドライセン（袖付き仕様）　５０００機

戦車

６１式戦車　１０００車両

マゼラ・アタック　１０００車両

ホバートラック　１０００車両

ヒルドルプ　８０機

ザメル　８０機

ガンタンク？　７５０機

第六師団　ギニアス・サハリン少将

水上艦隊

オリジナル戦艦播磨級

３０隻

紀伊級　２０隻

イージス艦　１００隻

タケミカズチ級空母
１００隻

水中艦隊

ユーコン級潜水艦　１００隻

マッドアングラー級大型潜水艦　５０隻

ＭＳ

ザク？　３０００機

ドライセン（袖付き仕様）　３０００機

ズゴッグＥ　２０００機

ハイ・ゴッグ　４０００機

となっている。第五師団、第六師団はペルシャ湾から上陸して、アンバールハイヴからＢＥＴＡを引き離す陽動が主任務になる。陽動が上手く行けばいくほど、突入部隊が楽になるから彼等の働きが重要だ。
そんなことを考えていると、中央大型モニターにカウントが映し出された。イルマ中尉がカウントダウンを開始する。

「作戦開始時計合わせスタート！３０、２９、２８」

大型モニターに映し出されている数字がどんどん減ってゆく。

「１５、１４、１３、」

「全砲門開け！ミサイル発射管開け！一斉発射準備！」

「はい。全艦発射準備を完了しています」

俺が指示を出すより早く、全艦が準備を完了していた事をホシノ少佐が言ってくれる。残りカウントが後３だ。

「２、１、０！作戦開始です！」

「主砲一斉発射！ミサイル全弾発射！」

レセップスの８０インチ３連装砲が起動する。

上空に向かって砲撃が開始された。３２本のミサイルがハイヴに向かって発射されるのだった。

「全艦全速前進！第一師団、第二師団に遅れるな！」

「了解しました。全速前進」

レセップスが運河に浮いていた状態から、砂漠に上がり移動を開始する。　少しして、上空に沢山の光が放たれた。光線級、重光線級による迎撃だ。　上空でＡＬＫ（アンチレーザー撹乱幕）弾とＡＬ弾が迎撃されたのだ。

「重金属雲の発生を確認！アンチレーザー撹乱幕の展開を確認しました！光線級、重光線級からの迎撃率は１００％です！」

「砲撃、ミサイルの発射を止めるな！弾幕を徹底的に展開しろ！イルマ中尉！エジプト、カイロにある国連印東洋方面第３軍とアフリカ連合軍の、総司令部に入電！作戦を開始したと伝えてくれ」

「かしこまりました！こちらメビウス。総司令部に入電です」

イルマ中尉がエジプトにある、国連印東洋方面第３軍とアフリカ連合軍が総司令部を置いている、カイロに通信を始めた。俺はホシノ少佐に話しかける。

「ホシノ少佐。今回の作戦で米国が介入してくるとしたら、どのタイミングだと思う？」

「そうですね。宇宙は我々が押さえていますから、Ｇ弾を投下してくる事は１００％と出来ないですから、恐らく国連印東洋方面第３軍に工作員か特殊部隊を忍び混ませていると思います」

「そう考えるのが妥当か。なんにせよ、気を引き締めて行かなきゃな」

「はい。この作戦が成功すれば、来るべきヨーロッパ奪還も夢ではありませんからね」

「そうだな。ヨーロッパもＢＥＴＡから「ＢＥＴＡ第一派！軍団規模が来ました！」と、砲撃を浴びせろ！ＭＳ部隊を発進させろ！」

イルマ中尉がＢＥＴＡが来たことを報告する。俺とホシノ少佐は会

話を止めて、即座に指示を出すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ビッターｓｉｄｅ

我々第二師団は地中海より進軍を開始した。現在はアンバールハイヴの西４０ｋｍ地点で交戦している。私はレセップス級陸上戦艦のブリッジで指揮を取っている最中だ。オペレーター達から様々な情報が入ってくる。

「ＭＳ第３師団、ＢＥＴＡ群第三派と交戦を開始しました！」

「右翼の国連印東洋方面第３軍より支援砲撃要請です！」

「支援砲撃を開始せよ！右翼後方のビッグトレー級から砲撃を開始せよ！」

「了解しました。こちらメビウス第二師団です。支援砲撃をおこないます！砲撃の範囲内の部隊は速やかに後退してください。繰り返します」

アンバールハイヴ攻略作戦開始から一時間近く経過したが、予定進

軍速度より遅れている。我々が予想していた以上に、砂漠での戦闘は困難なのが現状だ。少なくとも、予定よりハイヴ周辺に到着するのが遅れるのは必須だ。

（むう。ロンメル少佐の部隊は砂漠での戦闘に慣れているため、容易にＢＥＴＡを撃破してくれている。砂漠戦に慣れていない部隊は、やや苦戦しているな）

砂漠は平地と違い、ＭＳ等では足を砂に取られやすいため、通常より戦い難いのだ。逆にホバー移動するＭＳには砂に足を取られる事はないので、関係は無いのだがな。本艦よりミサイルが発射される。既にミサイルの発射回数は２０回を越えている。

現在は重金属雲とアンチレーザー撹乱幕のおかげで、光線級、重光線級から迎撃される事なくＢＥＴＡに命中している。おかげで、ＭＳ部隊や戦術機部隊が直接交戦する時にはＢＥＴＡの数が減っているため、ＭＳや戦術機が激しい被害を被る事なく進軍出来ているのだ。

（やはり、此度の作戦は長期戦になるな。そうなると、被害を覚悟せねばならないか。なるべく戦死者だけは出さぬようにしなくてはならないな）

私が考え事をしていると、オペレーターの一人が声を上げた。

「ＢＥＴＡの第四派来ました！軍団規模です！本隊の正面から来ます！」

「弾幕を展開するのだ！ＭＳ部隊を前に出せ！主砲、ミサイル、砂漠魚雷発射準備！」

「各砲座準備完了しました！」

「全砲門開け！発射ぁぁ！」

轟音と共に８０インチ３連装砲から砲弾が発射される。ミサイル発射口からミサイルが発射され、ＢＥＴＡ群に向かって飛来する。砂漠魚雷が砂を駆け抜けて行った。

そして、数秒後に砂漠に大爆発と轟音が鳴り響いた。

「ＢＥＴＡ群第四派に命中しました！残存ＢＥＴＡ規模は師団規模に低下しました！」

「ＭＳ第５師団、残存師団規模ＢＥＴＡ群と交戦状態に突入しました」

「第一師団のデラーズ中将より入電！」

「読み上げろ！」

「はい。第一師団は損害皆無。引き続き進軍を継続すると」

どうやら、第一師団もＢＥＴＡの迎撃をしながら　前進を続けているのが分かった。向こうもなかなか激戦らしい。

「（デラーズは、予定通りに進軍を続けるか。此方も遅れる訳には行かないな）ＢＥＴＡ群の撃破を急がせよ。ただし、討ち漏らしはするな！此方もアンバールハイヴに向けて進軍を急ぐぞ！」

部下に指示を出しながら、アンバールハイヴに向けて進軍を急ぐのだった。

ビッターｓｉｄｅｏｕｔ

???ｓｉｄｅ

とある暗い一室に男女が集まっていた。
中央のスクリーンに映像が映し出された。
1人の士官が出てきてスクリーンを叩く。

「諸君。メビウスによるアンバールハイヴ攻略作戦が開始された。今回諸君らに集まってもらったのには訳がある。忌々しい事に、メビウスは今回の作戦で国連宇宙総軍の軌道降下兵団の投下を認めず、逆に自らの月駐留軍から選抜した降下兵団を使用する事にした。そのせいで、我等が偉大なる大国が進めるプランの介入を阻んでいる」

スクリーンの前で熱弁を振るう士官。室内に集められた男女達は黙って聞いているだけだ。

「そこで、諸君等にはあるミッションを命じる。既に諸君等と同様の内容のミッションを他に2つの部隊にも命じてあるが、そちらには別任務を命じているため実行できる可能性が極めて低い。そこで諸君等に命じる事となった」

「質問があるのだが」

士官が話している最中に1人の男が手を上げる。室内にいる全員の視線が集まる。

「どうした少佐？何か腑に落ちない所があったか？」

「他に我々以外に命令が行ってるのは何処の部隊なんだ？場合に依るが、我々が出撃する必用も無くなるからだ」

「そんな事か。他に命令が行っているのは、グラーバクとオヴニルの部隊だ。彼等は優秀だが別任務を優先するように言ってある。だからこそ、諸君等の部隊に白羽の矢が立ったのだ」

「そうか。して、内容は？」

「簡単だ。メビウスの総司令不動悠斗を亡きものにするだけだ」

士官がニヤリと笑う。集められた男女達は笑っていた。少佐と呼ばれた男は笑いながら話を続ける。

「ハッハハハ。良いのか？メビウスの連中と敵対する事になるだぜ？」

「諸君等は、そんなことを気にする必要はない。それに、君達はメビウスを快く思っていない。そうだろ少佐？」

「当たり前だ。オペレーションルシファー（明星作戦）で、奴等に殺された教え子の敵を取らせてもらうからな！！」

少佐の発言に集められた男女達は激しく同意していた。一室に殺気や怨念が凝縮されたかのような雰囲気になる。此処に集められた男女達は、オペレーションルシファーで大切な者達を失った人だ。皆、パイロットとしての腕は一流だ。だからこそ、彼等が選ばれたのだ。

「ゴホン。では、ミッションの説明に入るぞ。スクリーンを見てくれ」

士官は咳払いした後、集められた男女達に状況を説明するのだった。戦場に黒い悪意と殺意が芽生え花開こうとしていた。

???sideout

第七十九話（後書き）

ネタが古いな。まあ、作者がこのシリーズの作品が好きなので。

感想待ってます。

第八十話（前書き）

ギリギリ完成。時間が取れなかったので、短いです。
では、本文をどうぞ。

第八十話

ギニアスｓｉｄｅ

私は今、ペルシャ湾に艦隊を展開させている。
艦隊旗艦播磨のブリッジで陽動作戦の指揮をとっている。
播磨の８０インチ３連装砲から休みなく砲撃が続いている。
支援砲撃要請は途切れる事がないのだ。

「アンバールハイヴよりＢＥＴＡの第八派を確認しました！軍団規模で此方に向かって来ます！」

「射程に入り次第、順次砲撃を浴びさせろ。ミサイルも出し惜しみなどするなよ。我々がＢＥＴＡをハイヴから誘き寄せた分だけ、本隊が楽になるのだからな」

「はい！」

オペレーターに指示を出す。既に作戦開始から2時間が経過した。
ハイヴ突入を担当する第一、第二師団は漸くアンバールハイヴの３０ｋｍ圏内に到着した。しかし、同時に地下茎(スタブ)構造の範囲内に入ったため、地下進行してくるＢＥＴＡの迎撃に追われているため、門(ゲート)の確保には至ってはいないのだ。　第三、第四師団はまだハイヴの地下茎(スタブ)構造の範囲に到達出来ていないのが現状なのだ。

（不味いな。このままだと、軌道降下兵団の降下予定時間迄に門(ゲート)の確保が間に合うか分からないな。だが、軌道降下兵団のパイロット

達は優秀だ。仮に、門（ゲート）の確保が間に合っていなくても、自分達で確保するからな。大した問題にはならないか）

「よう、ギニアス。どうした？そんなに眉間にシワをよせて？イケメンが台無しだぞ」

私が考え事に集中していると、後ろから声をかけられる。振り向くと軍服を半袖に切った幼なじみのユーリ・ケラーネ少将がいた。彼は私の座っている椅子の隣に来た。

「ユーリ少将。此処はブリッジだ。せめて階級は付けて呼んでくれないか？」

「なに、固いこと言ってんだよ。それに、俺とお前の仲じゃないか。小さな事ばっかり気にしてると禿げるぞ」

「はぁ。君には何を言っても無駄なようだな。それで、わざわざどうしたんだ？紀伊級戦艦で指揮をとっていたはずだが？」

「いや。ギニアスが悩んでいるかと思って来てみたら、案の定だったな」

流石は幼なじみと言うべきか。直感的に私が悩んでいるであろうとみて、わざわざ足を運んでくれたのだ。

（全く。出来るやつは違うな。昔の私はこれ程良い親友を己の野望のために手にかけてしまったのだからな。全く、馬鹿なことをしたものだ）

私は自嘲気味に笑う。

本当に不動閣下には感謝してもしたりない位だ。

「お兄様。ユーリ・ケラーネ少将。コーヒーをお持ちしました」

「おお！アイナちゃん。ありがとう。いやー、相変わらず綺麗だね！本当、ギニアスは良い妹をもったな」

いつの間にかお盆にコーヒーカップを乗せたアイナが私達の側に来ていた。ユーリにコーヒーカップを渡したアイナは、私にもコーヒーカップを手渡ししてくれる。

「はい。お兄様。コーヒーをどうぞ」

「ああ。すまないなアイナ。わざわさありがとう」

「いえ。気にしないでください。私は食堂で食事の準備を手伝って来ますので、失礼します」

お盆を持ってアイナはブリッジを出ていった。私は受け取ったコーヒーを飲む。程よい苦さのコーヒーが口に広がる。ユーリ・ケラーネ少将もコーヒーを飲んでいた。不意に彼が話かけてきた。

「なあ、ギニアス。現状の進行速度で軌道降下兵団の突入迄に、突入地点を確保出来ると思うか？」

「正直に言えば、間に合うか微妙な所だな。最悪の場合、軌道降下兵団が自ら門（ゲート）を確保するはめになるかも知れない」

「そうだよな。かと言って、俺達陽動部隊が支援に向かっても足手まといにしかならないからな」

そう。我々第五、第六師団は陽動任務がメインだ。海岸付近は砂漠だけでなく若干だが高台や平地があるため、まだ戦うのが容易だからＢＥＴＡ相手に苦戦せずにいられるのだ。そんな我々の師団が援護に向かっても、砂漠戦の経験が少ない兵しかいないため、足手まといになるのは必須なのだ。

「まあ、結局の所、俺達は与えられた役目を最大限にこなすしかないのだからな」

「そうだな。我々が後方でいくら悩んでも、どうしようもないからな。結局は本隊が判断するのだろうからな」

そう言って再びコーヒーを飲む。

「ＢＥＴＡの増援を確認しました！第９派めです！規模は師団規模です！射邸内に入りました！」

私は素早く、椅子に内臓されている受話器を取る。電話の相手は砲撃長だ。

「砲撃長。主砲はまだ連射しても問題ないか？」

「はい！まだまだ、行けますよ！」

「分かった。全主砲一斉掃射！」

播磨の８０インチ３連装砲から一斉に砲弾が発射される。遠くで空に黒煙が上がり、赤く燃えているのが見える。

「主砲ＢＥＴＡ群に命中しました！」

「ＭＳを前に出せ！ＢＥＴＡを殲滅するんだ！」

「了解しました。こちら」

「じゃあなギニアス。俺も船に戻るわ」

「ああ。わざわさありがとう」

「気にすんな。じゃあな」

ユーリ・ケラーネ少将がブリッジを出て、自身が指揮する艦に戻って行った。私は再び指揮をとるのだった。

ギニアスｓｉｄｅｏｕｔ

バーニィｓｉｄｅ

「うおぉぉぉぉ！当たれぇぇぇぇ！！」

俺はペルシャ湾に近い丘の上で、突撃してくるＢＥＴＡの大軍に３８０ｍｍバズーカを発射する。発射された弾丸が突撃級に命中して

爆発を起こす。付近にいた突撃級や要撃級、小型種を巻き込んで吹き飛ばす。

「ガルシア、アンディ！前に出てＢＥＴＡどもに鉛だまをプレゼントしてやれ！」

「了解です！アンディ、後ろは任せるぜ！」

「おう！ガルシア任せときな！」

アンディ少尉とガルシア少尉が乗ったザク？が前に出て、要撃級を１２０ｍｍマシンガンで蜂の巣にする。要撃級から血飛沫が上がる。アンディ少尉が右側の要撃級を倒せば、ガルシア少尉が反対側の要撃級を射殺する。互いに背中を合わせて、円を描くようにＢＥＴＡを撃破して行く。

「そ～ら～。墜ちやがれ！」

ミーシャ中尉のドライセンがジャイアント・バズを発射する。此方に向かってきていたＢＥＴＡの集団を纏めて吹き飛ばす。

「は！甘い！」

シュタイナー隊長が乗ったドライセンが、ビームトマホークで突撃級を横に真っ二つにする。　次に近寄ってきた要撃級をビームランサーで突き、頭を貫いた。頭部を破壊された要撃級は、そのまま地面にひれ伏した。

「バーニィ！後ろだ！」

「は！」

シュタイナー隊長が俺を怒鳴る。俺は機体を振り向かせると、要撃級が直ぐそこまで接近していた。要撃級の前腕が俺のザクに迫ってくる。俺は左手で腰のマウントからヒートホークを取り出して、鍔迫り合いになる

「くっ！コノォォォ！」

鍔迫り合いになって要撃級に押されるも、俺はスラスターを全開にして弾き返し、ヒートホークで要撃級の頭を叩き潰す。　潰された頭から体液が噴水の如く飛び散った。俺のザクが赤く染まる。モニターの通信画面にシュタイナー隊長が映しだされる。

「バーニィ！大丈夫か！？」

「はい。隊長のおかげで何とかなりました」

「たく。ぼさっとしてるんじゃねえよ！戦場は遊び場じゃねえんだからな！」

ガルシアさんが通信で俺を怒る。ミーシャさんは笑っているし、アンディさんはやれやれって言っている。隊長のドライセンとミーシャさんのドライセンが俺の側にやって来た。

「バーニィ！漸くお前が使える様になってきたんだ。単純なミスを犯すな！」

「そうだぜバーニィ。お前さんはミスして被弾するのは構わねえが、そのせいで俺達に負担が増えるのは御免だぜ」

「すいませんでした。隊長、ミーシャさん、ガルシアさん、アンディさん」

俺は皆に頭を下げる。

隊長の言う通り、今のはレーダーをきちんと確認していれば良かっただけの話だ。

「たく。最近彼女が出来たからって、浮かれすぎなんだよ。きちんと気を引き締めとけよ」

「はい。って、なんでガルシアさんが知ってるんですか!?」

まだ、クリスの事は誰にも話してなんかいないはず。アルとはサイクロプス隊の皆は面識がないはずなのに。

「すまんバーニィ。お前が遊園地に3人で行くのを見たとライデン中佐から聞いて、つい口が滑っちまった」

「隊長!?そりゃないですよ!」

まさか、この間のデートをライデン中佐に見られていたなんて思いもしなかった。

「てか、なんで「お客さんの追加が来たぜ!」て、また増援ですか」

「お前たち、配置に着け!ガルシアとアンディは前衛。俺とミーシャは中衛。バーニィのザク?改は後衛だ。バーニィ、次はミスするなよ!」

「はい！分かってます」

「よし！なら、お客さんを丁重にもてなすぞ！」

「「「「了解（だ、ですよ）」」」」

俺達は陣形を組んで、増援で現れたＢＥＴＡ群を迎撃するのだった。

バーニィｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

ブリィーフィングを終えた男女達はそれぞれ自身の機体に乗るために格納庫向かって歩いて行く。　だが、３人の男達は格納庫に向かわずにブリィーフィングルームで話をしていた。

「今回の任務は容易ではないぞ。オヴニル、アベェンジャー（復讐者）そっちはどうだった？」

「アシュレイ・ベルニッツ中佐いや、グラーバグと共同任務ですよ」

「俺達は、不動悠斗の暗殺だ」

二人の男が驚いた表情をする。しかし、アベェンジャー（復讐者）と呼ばれた男は淡々としていた。

「お前たちの部隊が一番面倒な任務が来たのだな」

「ああ。だが、そのためにわざわざ博物館から機体を強奪してきたのだからな。俺達にはもってこいの任務だ」

「まさか、世界一高価な鉄屑か？あんなの強奪してきて、どうするんだ？」

「なに、物は使いようと言うことだ。俺達の部隊が使う機体は全て、個体番号が存在しない機体だからな。偉大なる祖国に迷惑はかからんよ」

アベェンジャー（復讐者）と呼ばれた男はニヤリと笑った。グラーバグとオヴニルの二人は背中に冷たい物を感じた。

（（こいつら、本気で刺し違えてでも不動悠斗を暗殺する気だ））

「じゃあな。俺は行くぜ。そっちも気を付けてな」

アベェンジャー（復讐者）はブリィーフィングルームを出ていった。オヴニルとグラーバグの二人が部屋に取り残された。

「ふぅ。まあ、あいつらはあいつらで何か作戦があるのだろう。我々は我々の仕事をこなすとするか」

「ええ。そうしましょう。全ては、偉大なる祖国のために」

オヴニルとグラーバグの二人も部屋を後にして、格納庫に向かうのだった。

???sideout

第八十話（後書き）

仕事が忙しい。二つの連載はちょっと辛いです。　ああ、真剣恋は見切り発車だから大変だ。

感想待ってます

第八十一話（前書き）

ギリギリ完成。いや。なかなか書けなくて苦労しました。では、本編をどうぞ。

第八十一話

マリーダｓｉｄｅ

私は今、プルとプルツーと共に陸上戦艦レセップスのブリッジに来ている。プルは、座っているマスターの膝に両手を着けて頭を撫でてもらっている。私とプルツーは、マスターの左右に控えている。

「えへへ。悠斗。私も出撃してもいい？」

「ああ。構わないよ。ただし、無理はしないでくれよ？砂漠戦は平野や市街地と違い、砂に足をとられるからかなり大変だ。　だから、危険と感じたらすぐに戻ってくるんだ。いいね？」

「はーい！じゃ、逆に頑張ってＢＥＴＡを沢山倒したらご褒美頂戴！」

「プル！よしな！悠斗だって大変なんだ。そ・・「プルツー、構わないよ」・・良いのかい悠斗？」

おねだりをするプルを窘ようとするプルツーの言葉をマスターは遮る。プルツーがやや、鋭い視線をマスターに投げ掛けるとマスターは苦笑いした。

「まあ、プル一人だけにあげるのは不公平だから、プル、プルツー、マリーダの３人の中で一番ＢＥＴＡを撃破した人に、俺が出来る範囲内で褒美をあげよう。それで良いかな？」

「ぶー・・。まあ、良いかな。じゃあ、私達の機体を使って良いの？」

不貞腐れ気味なプル。まあ、私としては何も言わずにマスターとお近づきになれるチャンスが巡ってきたのはありがたかった。

（このチャンスを生かさない訳にはいきません。二人には悪いですが、私が一番になり悠斗からご褒美をいただきます）

私が内心でそのような事を考えていると、マスターがプルの問に答える。

「ああ。3人の為の新型機は格納庫に搬入されてるよ。プルの機体のカラーは黒。プルツーは赤。マリーダは黒なんだが、形が少し違うよ。あと、武器は大気圏ないでも使える様に改造してあるから、何等問題ないと思うんだけど、何かあったら整備兵に言って調節してもらっていいから」

「やったー！私達も新型だよ！」

「ほう？悪いな悠斗。なら、期待に答えて一番を目指すか」

「ありがとうございますマスター。必ずや、ご期待に答えてみせます」

私の返事に苦笑いするマスター。何か可笑しな事でも言っただろうか？

「あー、その、なんと言うべきか」

「珍しく歯切れが悪いな？何か、言いずらい事でもあるのか？」

「いや、まあ。プルツーの言う通り言いずらいのだが、マリーダ中尉の機体なのだが、クシャトリヤではなく量産型の方なんだ。マリーダ中尉の嫌な記憶を呼び起こしてしまいそうでな」

プルを撫でながら、空いている左手で頬をかくマスター。私の事を第一に考えてくれているのだ。

「（確かにクシャトリヤではないのは残念だが、悠斗が用意した機体ならば私は安心して戦えるから問題ない）大丈夫です。例え量産型であっても、問題なく戦えます」

「本当なのだな？」

マスターが鋭い視線で私を見る。その目は嘘は許さないと言っていた。

マスターの視線は常人なら震え上がる程の気をはらんでいる。私も数多くの戦場を越えてきたが、マスターの鋭い視線には、なれそうにない。これでいて、全く本気ではないのだから凄いものだ。　私はマスターから目を反らさずに返事をする。

「はい。全く問題ありません」

「そうか。なら、いいさ。だが、もし嫌な記憶を思い出したら即座に艦に帰投してくれ。無理に戦う必要はないのだから」

「はい。分かりました」

「不動閣下。よろしいでしょうか？」

マスターと話していると、後ろから声が聞こえてきた。振り向くとマスターの秘書官のイルマ中尉がいた。すごく良い笑顔で立っていた。笑っているはずなのに全く、和む様な感じがしない。寧ろ、ピリピリした空気を纏っている気がした

「どうしたイルマ中尉？なにか、不測の事態が発生したか！？」

「いえ。今の話を聞いていまして、私もマリーダ中尉達に提案したご褒美レースに参加したいと思いまして」

「はぁ。まあ、プル達が良ければ良いんじゃないのかな？プルはどう思う？」

頭を撫でるのを止めて、プルに問うマスター。プルは暫く考える様な動作をしてから、マスターに話かける。

「いいよー！でも、ハンデは無いからね」

「構いませんよ。なら、引き継ぎをしてから出撃します」

「ああ。分かった。そうだな、ホシノ少佐」

「はい？なんでしょうか？」

作戦推移を確認していたホシノ少佐が此方に来る。イルマ中尉は、他のＣＰ（コマンドポスト）将校に自身のＣＰの仕事を引き継ぎしている。

「現状で俺が出撃する必要はあるか？」

「いえ。今の所はありません。作戦そのものは遅れぎみですが、確実に進行を続けています。第一、第二師団は漸くハイヴの地下茎構造（ブ）の１５ｋｍ圏内に入りました。我々、第三、第四師団も２５ｋｍ圏内に入りましたから、緊急な援軍要請と不動閣下が出撃したいと思わない限りは、出る必要が無いと思います」

「そうか。分かった。なら「引き継ぎ完了しました」と、分かった。なら、イルマ中尉はＧタイプの機体が用意してあるから、それに乗って出撃するといい」

「分かりました。では、出撃します」

イルマ中尉が不動閣下とホシノ少佐に敬礼する。私達も、同じ様に敬礼する。

「貴殿達の健闘を祈る。くれぐれも、ケガの無いようにな。また、絶対に戦死するな。これは絶対守るように」

「皆さん。くれぐれも戦死しないでください」

マスターとホシノ少佐が返礼する。私達は返礼を確認しブリッジを出て、下に降りて更衣室に入り、パイロットスーツに着替える。プルは着替える気が無いので、先に格納庫に向かった。プルツーはすぐに着替えてプルの後を追って先に行ってしまった。

今、更衣室には私とイルマ中尉の二人だけだ。互いにパイロットスーツに着替え終わっている。

互いに更衣室を出て、格納庫に向かって歩いていると、イルマ中尉が話かけてきた。

「マリーダ中尉」

「はい。なんでしょうか？」

「貴女は今回１位になった時のご褒美に、何を望むのかしら？」

「・・・・・・」

私はすぐには答えられなかった。私が１位になったらマスターに望むのは。

（で、出来ればマスターと、二人っきりで散歩等が出来ればいいな）

「じゃあ、聞き方を変えるわ。マリーダ中尉は、不動閣下を異性として抱かれたいと思ってるかしら？」

「（ま、マスターに抱かれる！？そ、それは嬉しいな。て、私は何を考えている！？でも、出来れば子供は四人くらいで）・・・・・・ぽ」

私は頭の中で、マスターとラブラブな新婚生活を描いて行く。恐らく表情が少し緩んでいるかも知れない。

「あー。成る程。分かりにくいけどその反応は、脈ありね。そこでマリーダ中尉に提案があるのだけどどう？」

「提案ですか？」

「ええ。貴女が良ければと言うことが前提なんだけどね。今回の戦いで１位になって、悠斗と二人きりになるだろうから、その時告白しなさい。１位になったご褒美が二人きりになる事と言えば問題無

いから。それに私達も、人数が増えるのには賛成してるからね」

「賛成とはど言う事でしょうか？」

「あれ？マリーダ中尉は知らないの？私とシーマ大佐は今、不動閣下と付き合っているのよ」

「あ！？・・・・・そう言えばそうでしたね」

「お付き合い始めてからまだ、３ヶ月しかたってないからね。普段は分からない様にしてるしね。発表したのは１度きりだったから忘れてても、仕方ないわよ」

マスターの事を楽しそうに話すイルマ中尉。たが、私は負けるつもりはなかった。

（私も、悠斗さんと恋人になりたい。けど、悠斗さんは私を受け入れてくれるだろうか？こんな汚れた私を）

私の視界が急に暗くなる。柔らか香りに顔が包まれる。イルマ中尉が私を抱き締めてくれたのだ。

「大丈夫。悠斗なら受け入れてくれるから」

私が顔を上げると、イルマ中尉は慈愛に満ちた表情でイルマ中尉は、私を抱き締めてくれる。細く綺麗な手で私の髪を優しく撫でてくれる。

「はい。イルマ中尉のおかげで希望が見えて来ました」

「じゃあ、頑張りましょう。マリーダが悠斗の恋人の一人になれる

様に」

「はい！頑張ります」

私達は更衣室を後にして、格納庫に向かうのだった。

（あれ？そう言えば、賛成の理由を聞くのを忘れていた。まあ、帰還してからでも良いか）

私はそんな事を考えるのだった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

私は今、マリーダ中尉と共に格納庫に向かって歩いている。今回のご褒美レースに参加したのには訳がある。

（まず、私が１位になったら悠斗と二人でデートね。まあ、なるべくマリーダ中尉を１位にするようにするから、無いでしょうけど一応考えておかないとね。

マリーダ中尉が私達と同じ恋人になれば、だいぶ楽になるはず。流

石に私とシーマ大佐だけだと、夜の悠斗には勝てる気がしないわ）

昼間と違い夜のベッドの上の悠斗は、優しいが激しくタフなのだ。
私とシーマ大佐が何回も浮遊感に達してしまう。なおかつ回数も尋常じゃないのだ。このままでは、私達が先にダメになってしまいそうだからだ。

（あと、悠斗はロリコンじゃ無いようだしね。ホシノ少佐は残念だけどまだ無理なのよね。その点、マリーダ中尉は幼くないから問題ないしね）

私がそんな事を考えて歩いていると、格納庫に到着してしまった。
ハンガーには４機のＭＳが鎮座していた。
カタパルトから真っ白いゲルググＪ（イェーガー）が発進していった。

「イルマ中尉。私達もＭＳに乗りましょう」

「ええ。行きましょう」

私達はハンガーに鎮座しているＭＳの前に向かう。ＭＳのコックピットに向かう道で先に着いていた、プルとプルツーが整備兵と共に機体のチェックを行っていた。
マリーダ中尉はその先にある機体のコックピットに乗り込む。
私は自分が乗る機体のコックピットに乗り込み、電源を入れる。
モニターに機体名が表示される。

ガンダムＦ９０？

（これが私の為の新型機！ミッションパックを状況に応じて装備す

る事で、ありとあらゆる環境に適応出来る機体！今回の装備を選ばなくちゃ！）

私は機体に内臓されたパソコンを操作して、自分に適した装備を探す。

（あった！L型装備ね。これは整備班に伝えれば変更出来るのね。なら）

機体の通信機能を操作して、整備班に繋げる。
モニターにアストナージ整備主任が映し出された。

「はい。こちら整備班。イルマ中尉か！何か注文があるのかい？」

「私の機体をL型装備に変更してください！」

「分かった。すぐに換装作業を開始する！コックピットを閉めて待機しててくれ！2分で完了させる！」

「はい。お願いします」

通信を切ってコックピットハッチを閉める。すると、機体に何かが装着される衝撃が伝わってくる。再びモニターにアストナージ整備主任が映し出された。

「機体の換装が完了した！何時でも出撃出来るぞ！」

「ありがとうございます。イルマ・テスレフ出撃します！」

「了解だ！気を付けてな！」

私は機体を移動させて、カタパルトに向かう。
私の前にカタパルトに乗って黒いＭＳが発進しようとしていた。

「マリーダ・クルス。量産型キュベレイ。出撃する！」

マリーダ中尉の機体がカタパルトから発進していった。私も機体をカタパルトに固定する。
通信回線が開かれて、モニターに金髪ポニーテールで碧眼の美人の女性が映し出された。

「イルマ中尉。今回は私が代理で管制を務めさせてもらいます」

「よろしくね。シルビア・ニムロッド少尉」

「はい。頑張ります！」

シルビア・ニムロッド少尉。私と同じ欧州出身の女性だ。私より歳が若く１８歳だと言う。ＣＰ将校になったばかりの新米だけど、冷静で的確な判断が出来る子だ。だだ、経験が足りていないため時々テンパってしまう事が数少ない欠点だ。

「状況はどうなってるの？」

「はい。現在の状況は我が軍優位で展開していますが、一部戦線では押され気味です。イルマ中尉は、今回の出撃する装備ならレセップスの艦上から援護する事をオススメします」

「そう。アドバイスありがとう。なら、今回はアドバイスに従って戦うわ」

下手に無理して前線を乱すよりは、確実な距離で戦う方が安全だからだ。　ましてや、今回の装備に近接戦闘用の武器が無いのだ。

（私はもともと、格闘戦より射撃戦の方が得意だから問題無いわね）

「・・・で説明を終わります。何か質問はありますか？」

「いえ。なにも無いわ」

「分かりました。システム、オールグリーン！ガンダムＦ９０？発進どうぞ！」

「イルマ・テスレフ。ガンダムＦ９０？Ｌ。出撃します！」

私はカタパルトから打ち出される。外は見渡す限り砂ばかりだ。だか、ハイヴのモニュメントだけはこの距離からでも確認出来た。

（流石狙撃型装備ね。２０ｋｍ先の光線級まで確り見えるわ）

モニターにはハイヴの門（ゲート）すら、容易に確認する事が出来た。私は機体を操作して、レセップスの主砲やミサイル発射口の邪魔にならない、右側の足の部分に着地する。ロングライフルを構えて２０ｋｍ先の光線級を守るように前にいる要塞級をロックオンする。

「悪いけど消えて頂戴！」

ロングライフルから弾丸が発射される。弾丸を途中で操作して、確実に要塞級の頭部に当たるようにする。要塞級に命中した弾丸は頭部を貫き体の中程まで進んでから爆発した。あまりの爆発で周りに

いた他の要塞級や戦車級、兵士級、要撃級を　巻き込んで絶命させてしまった。

「・・・・・・え？」

私は、たった１発の弾丸が恐ろしい程の威力だった事をすぐに理解出来なかった。だった１発。１発で少なくとも大型種５０体は撃破してしまったのだ。

（これは、もしかすると私が１位になっちゃうかしら？実弾モードでこれだけの威力なら、ビームモードはどうなるのかしら？）

私がそんな事を考えていると、遠くでビームの輝きが確認できた。私はモニター画面で確認してみると、マリーダ中尉の機体が何か小型な兵器を操ってＢＥＴＡをどんどん撃破しているのだ。

（あら？マリーダ中尉も何か、特殊な兵器を使用してるようね。プルやプルツーの機体からも確認できるから、これは私も気合い入れて頑張らないと！）

私は再びライフルを構えて狙撃を開始するのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

１２機の戦術機が地面すれすれを飛んで戦場に向かう。彼等の機体には皆、８４９２と書かれたエンブレムマークがついていた。１機たりとも編隊を崩す事無く飛び続けている。

「全機聞こえているな。もう暫くしたら前線に到着する。予定地点に到着後、目標を誘き寄せるまで待機になる。此方は待ち伏せ（アンブッシュ）だ。オヴニルとグラーバクが上手くやってくれる。お前達はターゲットを撃破する事だけを考えればいい。余計な事は一切考えるないいな？」

「「「「「「「「「「「「「「「了解です。ＢＯＳＳ（ボス）」」」」」」」」」」」」」」」

１２機の戦術機はそのまま前線を目指して飛び続けるのだった。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

第八十一話（後書き）

ガンダムＦ９０?を知ってる人っているのかな?マイナー過ぎたかも?

感想待ってます。

第八十二話（前書き）

ギリギリ完成。今回も悠斗ｓｉｄｅはありません。
では、本編をどうぞ。

第八十二話

シャアｓｉｄｅ

私は今、ゲルググに乗って最前線で乱戦を繰り広げている最中だ。
私の部隊はハイヴから２０ｋｍ地点でＢＥＴＡを相手にしながら進軍を続けている。

「ええい！迂闊な！」

右手に持ったビームライフルで近寄ってきている要撃級を纏めて撃ち抜く。撃ち抜かれた要撃級は体に穴を開けて絶命する。

「おらよ！墜ちな！」

「お！まだまだ！！」

アンディとリカルドの乗るドライセンがそれぞれ要撃級を撃破する。
私は正面でゆっくりと近付いてくる要塞級にブーストジャンプして、高さを合わせスラスターで一気に接近する。要塞級から触手が襲ってくるが、左手に持ったビームナギナタですべて切り裂く。

「墜ちろ！」

ビームナギナタで頭を叩き切り、体も真っ二つにする。要塞級の体から体液が吹き出すが、私のゲルググにかかる事はなかった。

「ちぃ！」

要塞級を撃破したあと、上空を飛んでいたらレーザー照射がきたため、回避する。要塞級より後方にいる重光線級からの照射だった様だ。

「ええい！私の邪魔をするな！」

私はスラスターを吹かして重光線級、光線級群に接近する。光線級からレーザー照射がくるが、それを回避して接近する。　私は重光線級、光線級群の懐に入る。下にいる光線級は足で踏み潰し、重光線級にはビームライフルを撃ち込んで撃破していく。

「け、当たるかよ！」

「行け！トライブレード！！」

アンディのドライセンがビームトマホークで、要撃級を凪ぎ払う。切り裂かれた要撃級は数体纏めて頭が地面に落ちて絶命する。リカルドのドライセンが投げたトライブレードは、上空を飛んで周囲にいたＢＥＴＡを切り裂く。あちこちで赤い噴水が発生した。

「む！」

ニュータイプの感が私に危険を知らせる。私は素早く機体を操作して、地面に着地すると私の居た場所をレーザーが通って行った。ビームライフルを構えてまだ、残っていた光線級をロックオンする。

「沈め！」

光線級はビームライフルのビームを受けて、跡形もなく消滅した。

（やはり、一瞬の判断の遅れが命取りになるな。それにゲルググも既に私の反応に追い付けていない。不動閣下に頼んで、新型機を開発していただくか。でないと、この先の頼んで、戦いは厳しいな）

私は内心で次期新型機を進言する事を決めつつ、レーダーを確認する。

師団規模でいたＢＥＴＡは全て残骸に成り変わっていた。だが、先ほど残骸の中に光線級が居たばかりなので、警戒を怠るような事はない。

アンディとリカルドのドライセンが私の側にやってくる。

「なんとか撃破に成功しましたね」

「もうすぐ、軌道降下兵団が地球に降下してくる時間ですからね」

「そうだな。む！アンディ、リカルド。どうやら軌道降下兵団が降下してきた様だぞ」

空を見上げると、大量の再突入殻がハイヴに向かって地球に落下してきた。既にアンバール ハイヴ周辺の光線、重光線級の排除は完了しているため、再突入殻がＢＥＴＡから迎撃される事はない。　再突入殻からは次々とＭＳが発射され、ハイヴ周辺の門（ゲート）を確保して行く。

「降下兵団のお出ましですね。これなら勝ったも同然だ！」

「アンディ。まだまだ気を抜くなよ。まだ、反応炉を破壊した訳じゃないんだからな」

「行くぞ。我々も門（ゲート）を確保しなければならんからな」

「「了解（です）」」

スラスターを吹かし、ハイヴ周辺の門（ゲート）確保に向かうのであった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

ラカンｓｉｄｅ

俺達はいま、ハイヴの内部に突入を開始したところだ。ハイヴ内部はぼんやりと明るく光っている。まあ、ＭＳのモニターにははっきりと映像が映し出されるため、暗かろうが明るかろうが関係ないのだがな。センサーが全方からくるＢＥＴＡを感知した。

「ラカン大尉。どうやら向こうが我々を歓迎してくれるようですよ！」

「ふふふ。騎士である私に戦いを挑もうとするか。その心意気は買おう」

グレミーが報告する。マシュマーに至っては、既にツッコムのを止めた。

（はぁ。マシュマーの癖はいくら言っても治らないからな。なら、個性と判断して放置した方が早い）

かなり治すように注意したのだが、全く治らなかった。むしろ、最近は更に悪化してる気がする。　モニター画面が真っ赤に染まる。警戒音がコックピットに鳴り響く。
ドドドドと地鳴りが響く。前方から突撃級が大量に現れた。

「旅団規模のＢＥＴＡを確認！小型種は測定不能です！」

「よし！出迎えに来た連中を歓迎してやるぞ！グレミーは右翼に小隊を展開しろ！マシュマーは左翼だ！正面は俺が担当する！」

「了解であります！第一小隊は私に続くのだ！」

４機のバウが右翼正面に出る。

「お任せあれ！第二小隊は私に続くのだ！グレミーの小隊より前に出るぞ！」

グレミーに対抗したマシュマーの緑色のザク？改と3機のザク？が左翼正面に展開した。

「第三小隊は横に並べ！ＢＥＴＡにメガランチャーをおみまいしてやるぞ！」

「「「了解！」」」

４機のドーベン・ウルフが１列に並ぶ。このドーベン・ウルフは弱点であったジェネレータの出力を向上されているため、メガランチャーの連続発射を可能にしている。
また、射線の制限があった腹部メガ粒子砲は、拡散メガ粒子砲に変更する事が可能になったので、より戦術の幅が広がった。両足を地面に固定する。メガランチャーのチャージを開始する。
モニターにエネルギーチャージ率が表示される。　全方からＢＥＴＡ群がどんどん近付いてくる。

（エネルギーチャージ率、５０、６０、７０、８０、９０、）

ＢＥＴＡまでの距離は１ｋｍを切った。マシュマー率いる第二小隊は交戦を始めた。だが、我々の射線にはけして入らない。

「（９５、９６、９７、９８、９９、１００！今だ！）メガランチャー発射あああああ！」

４機のドーベン・ウルフからメガランチャーが発射された。ビームが全方に展開していたＢＥＴＡを飲み込んで行く。光の奔流が消えると、旅団規模で迫ってきていたＢＥＴＡ群に大きな穴が空いていた。今の一撃で、接近していたほぼ全てのＢＥＴＡが消滅しただろう。

「ラカン大尉！危ないじゃないですか！！危うく私も巻き込まれるところでしたよ！」

「ははは。スマンスマン。だが、これで先に進み易くなったのだから我慢しろ」

マシュマーが文句を言ってくるが笑って流す。その間にグレミーの部隊は残存しているＢＥＴＡを掃討している。

（ドーベン・ウルフの性能はこれで把握出来たな。後は量産されれば言う事無しだがな）

現状では、ドーベン・ウルフは試験的に４機が生産されるに止まっている。不動閣下は火力で上回るドーベン・ウルフよりも、凡庸性の高いザク？を主力にして生産されている。ならば、早い話がドーベン・ウルフで高い戦果を上げれば不動閣下も、量産するか考えてくれるかも知れん。

（まあ、ともかく戦果を手っ取り早く上げるには反応炉を破壊する事だな。他の部隊も進行してるだろうしな）

そんな事を考えていると、モニターにグレミーが映し出された。

「ラカン大尉。周辺の制圧完了しました！」

「分かった。良し！全機進軍を再開するぞ！目標の反応炉はまだまだ先なんだ！くれぐれも、警戒を怠るんじゃないぞ！」

「了解。皆、遅れるな！」

「はっはは！当たり前です！今度はグレミーに遅れはとらん！」

「「「「「「「「「「了解（です）」」」」」」」」」」

俺は内心若干の不安を抱えながら、ハイヴの最下層を目指して進軍するのだった。

ラカンｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私は今、ハイヴの上層部分を通過して中層に到達したところだ。最短ルートを進軍しているのだが、ＢＥＴＡの増援に阻まれて思うように進軍が進んでいない。私は到着したばかりの横坑（ドリフト）の内部を確認する。縦坑（シャフト）からは、次々と友軍ＭＳ部隊が降下してくる。

「ガトー中佐！第五中隊、斥候に出ます！許可を」

「ああ。第五中隊は斥候部隊として、先に進軍してくれ。ただし、危険と判断したら即座に戻るようにな」

「は！よし、第五中隊先に進むぞ！」

「「「

す。第十一大隊も第八大隊と共に進軍するそうです」

「分かった。此方は第一大隊と第五大隊が進行するのだな。既に第五大隊の一部が斥候に出た。我々も進行を再開するぞ」

「はい！お供します！」

私はゲルググのスラスターを吹かしてハイヴ内部を進行する。後方から他の部下たちが追従してくる。暫く飛行して進軍していると、前方でビームが発射された光を確認した。

（む！どうやら、斥候部隊が交戦しているようだ！急ぎ支援せねば！）

「ガトー中佐！味方が交戦しています！急ぎましょう！」

「ああ。カリウス。遅れるな！」

私はスラスターを全開にして、戦域に突入する。　右手に持っているビームライフルで味方のドライセンを殴りかかろうとしていた要撃級を狙い射つ。ビームが命中した要撃級はその前腕を無くし、体に穴を開けて絶命した。私の攻撃を切っ掛けに、追従していた部下達も攻撃を開始した。

「悪いが落ちてもらう！」

カリウスのドライセンがジャイアント・バズを放つ。ジャイアント・バスの弾丸が突撃級に命中して、大爆発を起こす。周りにいたＢＥＴＡが爆発に巻き込まれる。

「沈めぇぇぇ！」

地上に急降下して、左腕に持ったビームナギナタで要塞級を切り裂きながら、右手に持ったビームライフルで周囲のＢＥＴＡを撃破する。

「ええい！数が多いな！だが、我々は負けん！」

私はスラスターを吹かしながら、地面をホバー移動の真似事をしながら移動する。近くにいた要撃級をビームナギナタで切り裂き、やや遠くにいる要撃級をビームライフルで射殺する。足元にいる戦車級は踏み潰す。

「なんの！あたるか！」

カリウスは３連装ガトリングガンを背後を取った突撃級に浴びせている。それから１０分程したら、ＢＥＴＡ群の掃討を完了した。

「すみませんガトー中佐。おかげで助かりました」

「いったい何が有ったんだ？」

斥候部隊の中隊長に訪ねる。彼は、ベテランのパイロットだ。簡単にはＢＥＴＡ相手に苦戦するようなパイロットではない。

「偽装横坑（スリーパードリフト）です。我々が周囲の安全を確認しながら進軍していたら、いきなり地面が吹き飛んだかと思ったらＢＥＴＡの大群が現れましたからね」

「偽装横坑（スリーパードリフト）か。ならば、こうも乱戦になったのが分かる」

偽装横坑ハイヴ内に無数に作られた地下茎構造の拡張が進むにつれて、不要になって封鎖された横坑だ。一見するとただの壁や、地面にしか見えないため油断しがちになるが、いきなりＢＥＴＡがそこを破って現れたりするから危険なのだ。どうやら今回は、偽装横坑の存在を見落としていたのが原因でこのような乱戦になったのだ。

「今回は救援が間に合ったから良かったが、なるべく気を付けて進軍するぞ」

「はい。分かりました」

中隊長が頭を下げる。モニターから中隊長が消える。私は部下に指示を出す。

「これより、我々は二個大隊で進軍する。いいな。くれぐれも油断するな！反応炉はまだまだ遠いのだからな！」

「了解です。ガトー中佐！我々もガトー中佐に負けてる場合ではないぞ！」

「「「「「おお！！」」」」」

周りから雄叫びが上がる。兵士達の士気はまだまだ高いようだ。興奮冷めやらぬうちに進軍を再開して、下層を目指すのであった。

ガトーｓｉｄｅｏｕｔ

第八十二話（後書き）

相変わらず短くしか書けない。もう少し長く書いた方がいいのかな？

感想待ってます。

第八十三話（前書き）

ギリギリ完成。相変わらず余暇の時間が無い。
では、本編をどうぞ。

第八十三話

悠斗ｓｉｄｅ

作戦は既に最終局面に移行しつつある。ギリギリのタイミングで地上部隊が光線級及び重光線級の排除を完了した事により、軌道降下兵団は１機の損害を出すことなく無事に降下する事が出来た。レセップスのブリッジで指揮を取っている俺は、ホッとした。

（やはり、砂漠での戦いは経験がものを言うな。砂漠戦に慣れたロンメル少佐の部隊は楽々進軍していたが、逆に宇宙（そら）での戦いに慣れているパイロット達はかなり苦戦を強いられようだ）

今回の砂漠戦では、慣れていないパイロット達は機体に何等かの被弾をして帰艦するものが多かった。前回のマンダレーハイヴ攻略作戦の数倍は損害が発生しているのだ。

（まあ、これはこれで仕方ない事だ。砂漠戦の経験がないパイロット達には良い経験になっただろうしな。今回の作戦で得たものは多いだろう）

後は反応炉を破壊するのを待つばかりだ。
そんな事を考えていると、イルマ中尉に代わってオペレーターを担当しているシルビア・ニムロッド少尉が声を上げる。

「不動閣下。緊急要請です！エリア２３０でＢＥＴＡと交戦している部隊が増援を要請しています！」

「なに？ホシノ少佐！現在至急救援に迎える部隊はいるか？」

「不動閣下。現状では、戦力をこれ以上割くことは出来ません。殆どの部隊は既にハイヴ内部に突入してしまいました。また、地上に残った部隊は地下から進行して来るＢＥＴＡの迎撃に当たっています。これ以上本艦の護衛部隊まで割くことは出来ませんので」

ホシノ少佐が現状を報告する。現状では友軍部隊を支援するのが、難しいのが現状なのだ。

「（ならば、俺が出撃するしかないな！イフリート・ナハトならば問題無いしな）そうか。なら、俺が出撃する。師匠に連絡をしてくれ。師匠と共に出撃する」

「よろしいのですか？一応あちらに出現したのは小規模なＢＥＴＡ群の様ですが？」

「なに。友軍が助けを求めているのだ。見捨てる訳には行かないさ。シルビア少尉。友軍に伝えてくれ。救援に向かうとな」

「分かりました！此方ＨＱより、８４９２戦術機部隊へ。これより友軍が救援に向かいますので、それまで持ちこたえてください」

シルビア少尉が友軍部隊に通信を入れる。ホシノ少佐が此方にやって来た。俺は司令官席から立ち上がる。

「では、後の指揮はホシノ少佐に任せる。俺は出撃する」

「はい。分かりました。マスターアジアは格納庫で待っているそう

です。
くれぐれも油断しないでくださいね？」

「ご忠告感謝するよ。後は任せたからな」

「はい」

俺はブリッジを出て廊下を歩き格納庫に向かう。パイロットスーツに着替えるのが面倒なので、軍服のまま格納庫に向かう。自動ドアが開く。中に入ると喧噪が酷かった。　整備兵達が慌ただしく動いている。此処は彼等の戦場なのだ。俺は格納庫を歩き、自身の機体のハンガーに向かう。イフリート・ナハトがハンガーで鎮座している。俺の機体の隣のハンガーには、マスターアジア師匠のマスターガンダムが鎮座していた。ハンガーの前に師匠が立っていた。
俺は師匠の側まで歩く。

「悠斗よ来たか。すぐに出るのだな？」

「はい、師匠。友軍部隊の救援に向かいます」

「分かった。ならば、行くぞ悠斗！」

「はい！行きましょう師匠！」

互いにＭＳに乗り込む。俺は機体の電源を入れてＭＳを起動させて、コックピットハッチを閉じる。モニター画面に映像が映し出される。カタパルトまで移動する。通信回線を開くと、コックピット内部の空間にオペレーターが映し出された。

「不動閣下。救援を求めた友軍部隊は現在ＢＥＴＡ群と交戦してる

模様です。然ほど数はいないと思われます」

「分かった。ならすぐに終わらせて来るさ」

「了解しました。ご武運を。イフリート・ナハト発進どうぞ」

「不動悠斗。イフリート・ナハト出撃する！」

カタパルトから発射された俺はスラスターを吹かし上空で待機する。
師匠が乗るマスターガンダムもレセップスから射出された。
師匠から通信が来た。

「行くぞ悠斗よ。遅れるでないぞ！」

「分かってます師匠。指定された戦域に急ぎましょう！」

「うむ。そうだの」

俺と師匠はスラスターを全開にして、友軍部隊の救援に向かうのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

不動閣下が出撃されたので代わりに私がレセップスの指揮を執っています。作戦は現時点では、スケジュール通りに進行しています。先程入った通信では、ガトー中佐率いる部隊が下層に到達目前だと報告がありました。他の部隊もガトー中佐の部隊に負けまいと、進行速度を上げて進んでいます。

「ホシノ少佐！再び救援要請です！エリア２４０にて交戦している部隊からです！」

「すぐに救援に向かえる部隊はいますか？」

不動閣下が救援に向かった地域に地域に近い場所で再び違う部隊から救援要請が来る。シルビア少尉が端末を操作して、検索をかける。

「一番近いのは不動閣下とマスターアジア師匠だけです。どちらかに救援に向かってもらうのが最短です！」

「分かりました。不動閣下とマスターアジア師匠に通信を入れてください。どちらかに救援に向かってもらいます」

「了解しました！此方にＨＱ。不動閣下、マスターアジア師匠、応答願います」

シルビア少尉が二人に連絡を入れる。私は私で末端を操作する。

（都合よく同じ様なタイミングで救援要請が来るなんて変です。少々調べる必要がありますね）

私はオモイカネに手伝ってもらい、救援要請を出した部隊を調べ始める。　するとシルビア少尉が声を上げた。

「ホシノ少佐！マスターアジア師匠がエリア２４０に救援に向かってくれるそうです！」

「分かりました。ですが、ＢＥＴＡを殲滅したら即座に不動閣下の援護に向かうように伝えてください」

「了解しました。マスターアジア師匠。ＢＥＴＡの掃討が完了したら」

私は指示を出して、再びモニター画面に目を向ける。救援要請はどちらも８４９２戦術部隊からだ。作戦に参加している部隊は既に人員レポートが我々の手に来ているので、検索をかければ直ぐに出るはずだ。

（へんですね？何故、検索をかけてもヒットしない？まさか！？）

モニター画面に表示されたのは、検索した結果だ。そこには、該当無しと表示されている。

「（これはもしかすると罠！？いけない！不動閣下達が危ない！）シルビア少尉」

私は冷静に判断する。不動閣下達の身が危険だとすぐに分かったので、オペレーターのシルビア少尉を呼ぶ。間に合えば良いのだが。

「はい！ホシノ少佐、なんでしょうか？」

「至急不動閣下に連絡を入れてください。これは罠です！」

「え？どう言う事ですか？」

「明らかにタイミングが良すぎました。不振に思って、救援要請を出した部隊を調べたところ、存在しない部隊だと分かったのです」

「そんな！？は！すぐに連絡します！不動閣下、聞こえますか？！こちらＨＱ！く！既に連絡が取れません！」

ブリッジに戦慄が走る。　最悪のシナリオが進んでいるようです。

「緊急事態発生です！至急デラーズ閣下に連絡を入れてください。なを、現時刻をもってブリッジ要員はブリッジからの退席を禁止します。全員、この事を話すことを禁じます。下手すればハイヴ攻略作戦が失敗する恐れがあります。一切他言厳禁です。デラーズ閣下の判断を扇ぎましょう」

ブリッジ要員達は私の命令に頷いてくれました。　シルビア少尉がデラーズ閣下に連絡しています。中央モニターにデラーズ閣下が映し出されました。

「ホシノ少佐。話は聞いた。子細の説明を頼む」

「分かりました。まずは」

私とデラーズ閣下は緊急会談を行い対応を協議するのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

マスターアジアｓｉｄｅ

ワシは悠斗と共に友軍部隊の救援に向かっておったのだが、途中でＨＱから通信があり他にも苦戦している部隊がおるため、救援に向かって欲しいと要請を受けた。
ワシと悠斗は協議した結果、ワシが新たに救援要請を出した部隊を助けに行くことになった。
そして今、要請を出した部隊が交戦を続けているエリアに突入した。

（ふむ。要請ではこの辺りのはずなのだが？）

周囲を見渡すと、あちらこちらにＢＥＴＡの死骸が散乱しておった。
所々に戦術機の残骸も確認出来た。

（もしや既に部隊が全滅したか？いや、ならばＢＥＴＡどもがワシを狙って襲ってくるはずじゃ。しかし、未だに何もないとするとまだそう遠くないところで、交戦を続けている部隊がおるはずじゃ！）

改めて周囲を見渡してみると、遠くで何かが爆発するのが見えた。
おそらく生き残りの者達が戦っているに違いないと判断したワシは、スラスターを全開にして、急いでそちらに向かう。
上空から下を見ると、１個中隊規模の戦術機が連隊規模のＢＥＴＡ

と交戦をしておった。
ストライクイーグル達は３６ｍｍ突撃砲射ち弾幕を展開するが、あまりに数が多いＢＥＴＡを撃破しきれるはずもなく、後退を続けている。

（ふむ。急ぎ助けるとせねばな！）

ワシは機体を急降下させて、地面に向かって落下する。下には硬い前腕を振るいストライクイーグルに攻撃しようとした要撃級がいたので、そのまま足で要撃級の頭を踏み抜いた。

「は？」

通信回線から間の抜けた声が聞こえた。
ワシのガンダムの足で踏み抜かれた要撃級から、赤い体液が吹き出る。

「ふむ。大丈夫か？救援要請に応じて来たぞ」

「あ、ああ。救援感謝する」

「早い！」

「もう来たのか！！

「メイン盾来た！」

「これで勝つる！」

助けられた衛士は、未だに状況に付いていけて無いようだ。周りか

らは色々な声が聞こえる。
ワシはそやつをほっておいて、ＢＥＴＡ群の方に振り替える。
すると、モニター画面に戦術機部隊の隊長が映し出された。

「ありがとう。おかげで部下を失わずに済んだ。部隊を代表して感謝の言葉を言わせてくれ」

「なに。気にするでない。ワシはただ、言われた通りに来ただけじゃ」

「しかし、１機だけの様だが、他に救援部隊は来ないのか？」

「他に救援は来ん。しかし、安心せい。ワシは一騎当千の活躍をして見せよう」

「あ、ああ。まあ、済まないが頼む。此方は既に満身創痍の機体ばかりだかな。済まないがたいした援護は出来ない」

申し訳なさそうに謝る指揮官。まあ、ワシの場合は下手な援護など要らぬのだがな。

「ならばそこで見ておれ」

「え？お、おい！無茶だ！単機であれだけの数を相手にする気か！？」

ワシは大きく息を吸い、呼吸を整えて天高く声を上げる。

「流派東方不敗は！」

機体を素早く動かし此方に向かって突撃してくる突撃級の前面装甲殻に拳を放つ。突撃級の前部装甲殻を貫く。突撃級は拳によって空いた穴から体液を噴出させて絶命した。

「王者の風よ！」

スラスターを全開にして、少し離れた場所にいる要撃級の頭に蹴りを放つ。要撃級は硬い前腕と頭を蹴りで吹き飛ばされ、自身の体も蹴りあげられ上空に上がり重力によって地面に叩きつけられた。叩きつけられた衝撃で体液はあちらこちらに飛び散る。

「全新！」

後ろからワシに前腕を振り上げて攻撃してきた要撃級の前腕を左腕で受け止める。

「系裂！」

空いている右拳を顔面に叩き込む。要撃級は頭から大量の体液を長し、頭部を潰されて絶命した。　ワシは、両手で前腕を掴み放り投げる。

「天破侠乱！」

手拭いを持ちマスタークロスを発動させる。
そのまま、マスタークロスを横にはらう。
周囲にいたＢＥＴＡは体を横に真っ二つにされ、絶命する。

「見よ！東方は赤く燃えている！！」

ワシは両腕を組み真っ直ぐに立つ。ワシの周囲にはＢＥＴＡの骸が倒れているだけだ。

「す、すげえ！」

「ば、バカな！」

「今、大型種だけでも１００はいたのに」

「た、たった１分で全滅させやがった」

「メビウスのＭＳは化物か！？」

味方の戦術機部隊の衛士達から声が上がる。皆、ワシの活躍に驚きを隠せぬようだ。

「馬鹿者が！今ので、ＢＥＴＡの勢いは削げたのだ！反撃をするのだ！」

ワシの渇に戦術機部隊の連中は驚きを見せたが、直ぐに行動を開始した。

「最強の援軍が来たのだ！我々も国連軍の意地を見せるぞ！」

「「「「「「「「「「ウオォォォ！殺るぞぉぉぉ！意地を見せるんだ！（みせます！）」」」」」」」」」」

彼等は再び息を吹き替えした。それからワシは戦術機部隊と共に突撃してくるＢＥＴＡ群を迎え撃つのだった。

マスターアジアｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

とある戦域に８４９２と書かれた１２機のストライクイーグルが待機していた。彼等は戦闘に積極的には参加せず、後方でＭＳを観察していた部隊だ。戦術機のパイロット達が話をしている。

「アシュレイ・ベルニッツ隊長」

「どうした？」

「我々のミッションは完了しました。オヴニルの方はどうですか？」

「あっちは、ミヒャエルが指揮を執っているから問題ない。先程連絡があった。向こうもデータ収集は完了したようだ」

「なら、後はアヴェンジャーの連中だけですね。彼等は無事に成功しますかね？」

「さあな。だが、少し前に報告があったぞ」

「なんと言ってました？」

「餌に魚が食い付いたと言っていたぞ。まあ、我々はこれから戦域を脱出するぞ。予定のミッションは終了してるのだからな」

隊長の話を聞いたパイロットは、何か考えるしぐさをするが、直ぐに考えるのを止める。

「まあ、我々はアヴェンジャーの連中みたいには馴れないですからね」

「まあ、彼等はメビウスに復讐する為にわざわざ来ているのだからな。
彼等の挺身が偉大なる祖国の繁栄を守る為に必要なのだ。アヴェンジャーの連中なら、必ずや不動悠斗を亡きものにしてくれるだろう。
そうすれば、アヴェンジャーの連中は英雄になるだろう」

「そうですね。彼等ならやってくれるでしょう。
それより、隊長。そろそろ離脱しませんか？」

「そうだな。全機、戦域を離脱するぞ」

「「「

第八十三話（後書き）

もうすぐＸｂｏｘ３６０でマブラヴオルタネイティヴのが発売するな～。まあ、ツインパックは予約済みです。発売したら暫くやりこみ確定ですな。
感想待ってます。

第八十四話（前書き）

作者が書いた中で一番多い文字数になりました。　アンバールハイヴ編のラストにあたります。
では、本編をどうぞ。

第八十四話

悠斗ｓｉｄｅ

俺は指示された戦域に到着した。辺りにはＢＥＴＡや戦術機の残骸は無く、だだの砂漠が広がっているだけだった。

（おかしいな？救援要請があったエリアに間違いないはずなのだが？まだ、先なのか？）

ブーストジャンプして、上空から見渡して見る。やはり、周囲に残骸等は確認出来ない。

一度地面に着地して改めて周囲を確認する。

（やはり、なにもない。もしかして場所を間違えたのか？いや、そんなはずは無い）

計器を確認するが、場所は間違いなかった。

計器の故障はありえないので、誤報だったのかも知れない。

（まあ、一人で考えても仮定の話にしかならないしな。ＨＱに指示を仰ぐか）

通信回線を開いてＨＱに連絡をとる。だが、激しいノイズしか聞こえてこなかった。

（なんだ？このざらついた気持ち悪い感覚は？何かくるのか？）

俺が不快な感覚に戸惑っていると、ドーンと音と共にいきなりコックピットに衝撃が走った。

（なんだ！？ＢＥＴＡの攻撃ではない！？ロックオン警報が鳴らない！？ＩＦＦ（敵味方識別装置）が作動しているのか！なら、設定を変更すれば良い！）

いきなり襲ってきた衝撃に驚きながらも、ＩＦＦ（敵味方識別装置）を操作する。すると、コックピット内部に警報器の音が鳴り響いた。

（この感覚！敵意だけじゃない！憎悪の念も強い！だが、黙って殺られる訳にはいないんだよ！）

機体を覆っていた煙が晴れる。すると周りには１２機の戦術機が銃を構えて、イフリート・ナハトを包囲していた。

「チッ！囲まれたか！ＨＱこちら不動だ！応答してくれ！」

構えていた突撃砲から３６ｍｍ弾が発射される。　俺はブーストジャンプして、包囲網から抜け出す。しかし、１１機のストライクイーグルと謎の１機の戦術機は、３小隊に別れて追撃してくる。

（くそ！通信が繋がらないのは、ジャミング（電子妨害）か！ならば、奴等を倒すしか道は無いようだな！）

そんな事を考えながら、追撃してくるストライクイーグル。エレメント（２機分隊）は決して崩さない。更に言えば、連携も伊達ではない。隙が殆どないのだ。右からエレメント（２機分隊）を組んだストライクイーグルが突撃砲を射ってくる。手前の機体が３６ｍｍ

で足止めを仕掛けてくる。

「く！殺らせるかよ！こっちとら！ガンダニュウム合金とフェイズシフト装甲が付いてるんだよ！」

クイックブーストで３６ｍｍを回避して、左腕の３連装ガトリング砲を射つ。だが、敵ストライクイーグルは射撃動作をキャンセルして俺の攻撃を回避した。

（なに！相手はＭＳＸＯＳを搭載してるだと！？どうやら、ただの特殊部隊じゃ無さそうだな！）

相手の戦術機はどうやら単なるテロリスト等のレベルではなく、きちんとした補給等が受けられる設備を持った相手だと分かった。

回避したストライクイーグルの後ろからエレメント（２機分隊）の相方が１２０ｍｍ滑空砲を射つ。　俺はスラスターを吹かし、スラスターでホバーの真似事をしながら回避する。ホバー移動で相手に接近しつつ、ロックオンする。左腕から３連装ガトリング砲を射つも、やはり回避された。

更に左側から他のエレメント（２機分隊）の攻撃が来る。それを回避しつつも、状況判断をする。

（ふむ。これは少し厄介だな。ジャミング（電子妨害）で通信は繋がらないからな。しかも、相手は射撃戦に特化してるようだな。完全に俺の機体と相性が悪いな。となると、イフリート・ナハトのＥＣＣＭ（電子対抗手段）を使うか？確かに最善の手だが、それは最後の手段だな）

イフリート・ナハトは格闘戦に特化した機体だ。射撃武器事態は、３連装ガトリング砲と８連装ミサイルポッドのみだ。あとは、投擲武器のコールドナイフが有るくらいだ。

（まあ、勝てるな。要は相手の懐に入れば俺の勝ちだしな。推進力と最高速度は圧倒的に此方が上だしな）

寄ってくるストライクイーグルの小隊に牽制射撃を仕掛ける。ストライクイーグルは左右に別れる。俺は、砂の山をブーストジャンプで飛び越えて、１度身を隠す。
相手もどうやら、砂の山の間に全機隠れた様だ。

（要は命懸けの鬼ごっこて事か。なら、負けるわけにはいかないな！悪いが俺はこんな場所で死ぬわけには行かない！人類を勝利させるまではな！）

俺は腰に装備されているナハトブレードを左手のみ抜いて持つ。右手はコールドナイフを取りだし握りしめる。

「さて、狩りの時間だ！俺に手を出したことを後悔させてやる！」

俺は物影を静かに移動して、相手を探すのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

８４９２ｓｉｄｅ

俺達の罠にまんまと引っ掛かったターゲットは、なんとか包囲網を脱出しようと足掻いているが、時間の問題だ。既に、奴の通信手段はＥＣＭでジャミング（電子妨害）を仕掛けているので、潰されている。また、ターゲットの特性から格闘戦に特化した機体が来ると判断して対策を練ったところ、これが大当りだった。　案の定相手は自分の間合いに入れない為、逃げ惑っている。現在は見失ってしまったが、おそらく砂山の影にでも隠れているのだろうが、いずれ見つかるだろう。俺は、砂山の頂上から部下に指示を出している所だ。少々風が吹いてきたため、若干視界が悪いのが難点だがな。副官が俺に報告する。

「少佐。アメリアの小隊が現在左翼からターゲットを探しています。右翼からは、ジェリドの小隊が捜索をしています」

「そうか。まあ、ターゲットは砂漠戦に慣れてない様だ。このまま、敵の本隊に感ずかれる前に、ターゲットを撃破するぞ」

「了解です。ジャミングフィールドの中では我々の通信は可能ですが、相手は不可能ですからね。

しかし、時間をかければ相手の本隊にバレる恐れがありますからね。急ぐように伝えます」

「そうしてくれ。そうなると、わざわざこの機体を博物館から強奪してくる意味は無かったかもしれんな」

かつてＦ－２２と凌ぎを削ったこの機体はトライアルでは、Ｆ－２２を凌駕するも採用されなかった世界一高価な鉄屑と呼ばれる機体だ。

乗ってみると、性能はやはりＦ－２２ラプターより良いだけある。

少々じゃじゃ馬だが、俺には使いやすい機体だ。

たが、相手があまりにも弱いため下手をすると、俺が動く必要がないかも知れんのだ。

（しかし、不可解な点がある。ターゲットの機体は１２０ｍｍ滑空砲を全弾直撃したはずなのに、何故どこも壊れていなかったのだ？少なくとも、ザウートに１２０ｍｍ滑空砲を命中させたら、装甲はヘコむくらいはしたのだぞ？すると、奴の機体はそれ以上に堅いのか？）

そうなると、かなり厳しい事になってしまう。
ザウートは実弾訓練で１２０ｍｍ滑空砲を命中させたことがあるから、ある程度堅いとは知ってはいた。しかし、ターゲットの機体はそれ以上に堅い可能性があるのだ。

（そうなると、自爆特攻の為に装備したＳ－１１を使用する必要があるな。まあ、その必要はないと思うのだがな）

もし、自爆特攻を仕掛けるような事態になったのなら、それを仕掛けるのは俺の役目だ。若い連中にはまだまだ祖国の為に働いてもらう必要があるが、ある程度年の行った俺ならば復讐相手を道ずれにして死ぬのには問題が無いからだ。

（まあ、今の段階ならその必要は無いのだがな）

俺がそんな事を考えていると、部下の通信が聞こえてきた。

「こちらジェリド。此方にターゲットの機体は確認出来ない」

「こちらアメリアだ。こちらの網にも引っ掛からない。捜索を続ける」

「こちらアベンジャー02了解だ。引き続き捜索を続けろ。まだ、何処かに隠れているはずだ。小隊から分隊(エレメント)に切り替えて捜索範囲を広げろ」

副官が各小隊に指示を出す。分隊(エレメント)になって更に捜索を続ける。最後の反撃から、2分はたっている。だが、今度はターゲットの機体が見つからないのだ。

部下達は捜索に躍起になっている。

「こちら、サーシェス。隊長。ターゲットは何処で震えながらお祈りを捧げているのでしょうかね？」

「さあな。大方、見つからない様に影にでも隠れて震えているのだろうな」

「ハッハハハ！違いない！なら、哀れな子羊をあの世に導いて・・・ぎゃあああああ！！！」

いきなりサーシェスの悲鳴が管制ユニットに響く。部隊に緊張が走る。

「サーシェス！どうした、何事だ！？」

「痛い！痛い！お、俺の足が！血！血が！や、止めろ！く、来るなあああああああああ！」

サーシェスの断末魔が響く。どうやら、サーシェスが殺られたらしい。

あいつは戦術機に乗って十年のベテランだ。簡単に殺られるような、

奴じゃない。
レーダーを確認すると、サーシェスの反応が消えていた。だが、分隊（エレメント）のパートナーの反応はある。

「バルグリント！バルグリント！応答するんだ！何があった！」

「き、機体の電源が落ちた！真っ暗です！何も見えません！誰か、誰か、外の状況を教えてください！」

バルグリントの機体はどうやら、機体の電源が落ちている様だ。強化装備の通信を使って、応答しているが状況が分からない様だ。

「待ってろ！すぐに向かう！マウアー着いてきてくれ！」

「分かってるよ。ジェリド！バルグリント！すぐに再起動をかけるんだよ！」

ジェリドとマウアーの二人がバルグリントの救援に向かう。アメリアの分隊（エレメント）もバルグリントの救援に向かった。

「は、はい！分か・・・・」

いきなりバルグリントとの通信が途絶えた。
すぐさま、バルグリントに呼び掛ける。

「バルグリント、応答しろ！どうした？なにか、不具合が発生したのか！？」

俺の問いかけにバルグリントから返事は返って来なかった。ジェリドとマウアーの二人が、サーシェスとバルグリントの最後の反応が

あった地点に到着した。

「う！こ、これは！」

「ひ、酷い殺しかただ。バルグリントの機体は管制ユニットの正面から、ガトリング砲を叩き込まれてる」

俺は2機の回線を通じて、サーシェスとバルグリントの機体を見る。すると、目の前には形容しがたい光景が映し出された。サーシェスのストライクイーグルは、管制ユニットに穴が空いていた。明らかに、長刀等の類いで突き刺された後だ。

隙間から管制ユニットの内部が見えた。内部はサーシェスの血で赤く染まっていた。サーシェスの肉体は長刀に貫かれた際に両足が、切り落とされており、更に上半身は潰れて見る影も無かった。　バルグリントのストライクイーグルは、地面に両膝を着いてた。管制ユニットには至近距離から発射されたガトリング砲の弾痕が大量に付いていた。しかも、管制ユニットからは血が流れている。

「クソ！まさか、二人が殺られるなんてな！彼奴らの敵をとるぞ！必ず、見つけ出せ！」

「「「「「「「「「了、了解」」」」」」」」」

部下が返事をするが、返事をした数が少ない気がした。

「おい、今、返事を「う、うあああああ！！」ヒキュー！どうした！」

左翼で捜索をしていたヒキューの悲鳴が響く。レーダーを確認するが、敵機の反応は何処にもない。

「アメリア！救援に迎え！ジェリド達もだ！」

「了解です。ヒキュー待ってなさい！今、行くわ！」

「クソ！どうなってるんだ！？なんで、今度は反対側に居るんだ！？」

「ジェリド、落ち着いて！今は助けに行かなきゃ！」

４機がヒキューの救援に向かう。だが、無情にも管制ユニットの中にヒキューの悲鳴が響いた。

「こ、殺してやる！殺してやる！殺・・し・・て・や・」

「ヒキュー！ヒキュー！応答するんだ！クソ！エメラダ無事か！？」

「く！当たらない！当たらない！なんでよ！さっきは当たったのに！」

エメラダが錯乱しつつも、相手を攻撃している様だ。銃弾の発射音が鳴り響いている。

「当たれ！当たれ！当たりなさいよ！！私の弟を殺したくせに！死になさいよ！」

半ば自棄になりながら、オープンチャンネルで叫ぶエメラダ。

だが、声を聞く限り攻撃が相手に命中していない様だ。

「待っててエメラダ！もうすぐ到着するから！「きゃあああ！」エメラダ！」

左側で大きな爆発が起こる。どうやら、自決用に持ってきていたＳ－１１に敵の攻撃が命中したようだ。

「きゃ！」

「チッ！エメラダ！」

「下がれジェリド！」

「ぬぅ！」

「隊長。伏せてください！」

エメラダのストライクイーグルが大爆発を起こし、周囲を焦土にしてしまった。

「全機無事か？」

「アメリア、コレット、どちらも無事です」

「ジェリド、マウアー、両名無事です」

「二番機以下、３名無事であります」

「そうか。全機無事で何よりだ。だが、サーシェス、バルグリント、ヒキュー、エメラダ、の４名が殺られた。敵はこちらにバレないように気配を殺しているぞ！４人が殺られた以上、本気で警戒するんだ！敵は１機とは言え、侮るな！ジェリド、マウアーは、アメリア、コレットと合流しろ！今度は、小隊を崩すな！分隊（エレメント）になったら殺ら

れると思え！
俺達も捜索を開始する！」

「「「「了解です（だ）」」」」

部下達に指示を出してから、俺も自身の小隊を率いてターゲットの捜索を開始するのだった。

８４９２ｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

「ふう。流石に焦ったな。まさか、Ｓ－１１を搭載してるなんてな。予想外だったな」

現在俺は、４機のストライクイーグルを葬った所だ。時間がかかるが、なるべく１機ずつ倒した方が安全なのだ。
また、今回は天候が俺の味方をしてくれたのが幸いだった。俺は砂山なのど影に隠れながら移動して、闇討ちしながら敵機を撃破しているのだ。

（今回は砂漠で良かったな。バズーカを装備させて無かったから、射撃戦は辛いのなんの。まあ、砂煙のおかげで相手は視界不良な状況下で俺を探してたから、背後を取りやすかったな。しかし、最後のストライクイーグルの衛士の言葉がな）

弟を殺した。彼女はオープンチャンネルでそう叫んだ。必死に敵をとるために銃を射ち続けた。

（これが、俺が理想を叶える為にとった行動のツケか。まさに俺が生んだエゴだな。だが、ここで俺は死ぬわけには行かない！例え、世界を敵にまわそうとも、ＢＥＴＡを地球上から排除して平和な世界にするためには、俺は止まる訳にはいかないんだ！）

確かに俺の選択、行動次第では助けられる命は他にもあったはずだ。それは間違いない。たが、俺は自身の理想を叶える為に多くの犠牲を出しているのも事実だ。
それは否定することは出来ない。いや、否定してはならないのだ。

（確かに、俺はチートの力でここまで来た男だ。だが、俺は俺の理想を叶える為に戦った事で、守れた命があることを忘れてはいない）

原作なら既に亡くなっている彩峰萩閣中将。
ＢＥＴＡ日本進行で亡くなるはずだった民間人の方々。
明星作戦で死ぬはずだった鳴海孝之と平慎二。
後のクーデターで首謀者になる沙霧尚哉大尉。
同じくクーデターで死ぬイルマ・テスレフ中尉。など、いろんな人達の命は救う事ができた。
だが、反面守れなかった命もあった。
横浜にＢＥＴＡが進行した時に助けられなかった民間人。
明星作戦でメビウスの若手将校達の行動で戦死してしまった将兵達。
など、沢山の命を奪っていったのも事実なのだ。

（すべて受け入れてやるさ！例えどんなに険しい道のりだろうと、俺は必ず理想を叶える為に！どれだけ恨まれようとな！

その為になら修羅にすらなってやる！）

目を閉じて拳を握る。

自身に修羅になる覚悟を決めさせるのだ。

（俺は逃げん！ただ、自分の信念を貫き通すだけだ！ならば、立ち塞がる壁を叩き切るだけだ！）

目を見開きモニターを見る。相変わらず視界は砂煙のため悪いが、俺には敵の位置が手に取るように分かった。

自分の頭の中で種が割れる。ＳＥＥＤを初めて開放したのだ。

（へぇ～。これが種割れした感じなのか。なかなか馴れないな。だが、機械人形の用に感情の変化がしなくなるわけではないのかな？よく分からないがな）

俺はレーダーを確認する。幸い相手のジャミング（電子妨害）はあくまで、長距離通信を阻害するのが主目的の様なのでレーダー等に影響は一切無かった。

（あと、残機は８機。二個小隊か。なら、まずは見たことのない戦術機が居ない方の部隊を潰すとするか）

俺は、スラスターを小刻みに噴射させてホバー移動で敵機に接近する。

４機が固まって行動しているのが分かる。俺はイフリート・ナハトのＥＣＭを発動する。こうすることで、ギリギリまで敵機に見つかる事なく接近できる。

「一気にケリをつけさせてもらう！！」

スラスターを全開にして、一気に相手に急接近する。向こうもこちらに気づいたが、既に遅そかった。
右手に持ったナハトブレードで、４機のストライクイーグルの内、右後方にいるストライクイーグルの管制ユニットから横に真っ二つにする。ストライクイーグルは機体を真っ二つにされて崩れ落ちた。
他の３機は散開する。

「う、うわあああ!?」

オープンチャンネルを開いていたので、パイロットの悲鳴が聞こえた。

「このやろう!コレットをよくもおおおお!!」

「ジェリド落ち着いて!冷静さを欠いたら、殺られるよ!」

「カクリコンの敵!死になさい!」

激昂した敵の通信が聞こえてくる。僚機を殺られたストライクイーグルが、膝から短刀を取りだし俺に突撃してくる。
右手に持ったナハトブレードでストライクイーグルの短刀を受け止める。受け止めた事によりブレードから火花が散る。
オープンチャンネルで敵が話しかけてくる。

「お前さえ!お前さえ現れなければ、私は恋人を失う事などなかった!」

「なに?どう言う事だ?」

「貴様らが、オペレーションルシファーでおとなしく機体を奪われてさえいれば、カクリコンは死ななかった！なのに、貴様らが抗った正でカクリコンは死んでしまった！」

「（機体を奪われてる？黒い三連星が交戦した部隊の事か？）ふざけるな！そちらが一方的に仕掛けて来たのだろうが！」

相手は跳躍ユニットの推進力で俺を押しきろうとするが、俺のイフリート・ナハトはビクともしない。そもそも機体の性能が違い過ぎるのだ。

（スラスターを吹かす必要すらないな。だが、明星作戦で先に仕掛けてきたのはアメリカの部隊の連中だった。逆恨みにしては迷惑な話だ。だが、それも俺が生んだエゴなのか？）

つばぜり合いをしながら自問自答していると、相手が下がって距離を取ろうとする。俺はスラスターを全開にして一気に距離を詰める。他にいた2機のストライクイーグルが左右から現れて、距離を取らせる為に援護射撃をしてくる。

「くたばれ！」

「落ちなさい！」

３６ｍｍ突撃砲を連射してくるが、俺は機体を前後左右にずらして回避しながら、右側のストライクイーグルに接近する、

「ちっ！野郎！なめるなあああ！」

突撃砲を破棄して短刀を取り出す。俺はナハトブレードでストライ

クイーグルの両腕を切り捨てる。

「な、なに！」

そのまま、ターンして右足で管制ユニットに蹴りを放つ。加速した蹴りを受けたストライクイーグルは吹っ飛ばされて仰向けに倒れた。管制ユニットは大きく歪みへこんでいた。おそらくあの状態ならベイルアウト（緊急脱出）出来ないだろう。中のパイロットは死んでいないはずだ。

（生きてる証人が必要だからな。戦闘が終了したらあらいざらい吐いてもらう）

「ジェリド！確りしろ！く！悪魔め！ジェリドの仇をとらさせてもらう！」

「マウアー。私が援護するよ！だがら、必ず殺すよ！」

「ええ。アメリア。背中は任せるわよ！」

2機のストライクイーグルが突撃してくる。前衛は突撃砲を連射してくる。俺は、左手に持っていたコールドナイフを投擲する。

「え？きゃあああ！」

「ま、マウアー？どうしたの！？」

コールドナイフが命中したストライクイーグルが地面に正面から崩れ落ちた。

それを見た、僚機のストライクイーグルの動きが止まった。空かさず脚部に装備された8連装ミサイルポッドを発射する。

「し、しまった!ごめんなさいカクリコン。貴方の仇」

８発のミサイルを全弾直撃したストライクイーグルは、原型を止めていなかった。

俺はダウンしているストライクイーグルに向かって歩き出す。

「殺らせんよ!」

「くたばれ!」

離れていた最後の小隊が救援に駆けつけてきた。　２機のストライクイーグルが俺に１２０ｍｍ滑空砲を放つ。俺はスラスターで横に移動しながら、左腕に装備された3連装ガトリング砲を連射する。その間に、謎の戦術機とストライクイーグルが、ダウンしているストライクイーグルを立ち上げる。俺は邪魔をする2機のストライクイーグルの撃破を優先するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

８４９２ｓｉｄｅ

ギリギリのタイミングでマウアーの救援に駆けつける事が出来た。

「マウアー。機体の再起動は出来るか？」

「はい。少佐。今、立ち上がりました。あと、1分程待ってください」

「分かった。ウル。ジェリドの方は無事か？」

僚機のウルは、倒れているジェリド機を起こす。　起こされたストライクイーグルの管制ユニットは大きくへコんで、かなり歪んでいた。

「はい。ジェリドは無事です！さっきまで気絶してた様ですが、今目を覚ましました！」

「っう～。すみません隊長。不様な姿を見せてしまって」

モニターにバストアップされるジェリド。取り敢えず怪我をしてはいない様に見えた。

「よし。二人とも戦域から離脱しろこれは命令だ」

「何故ですか！？まだ、戦えます！」

「ジェリド。貴様の機体では無理だ。既に両腕を切り落とされてるんだ。足手まといだ」

マウアーのストライクイーグルなら、戦闘は可能だろうがジェリドのストライクイーグルはまず不可能だ。足手まといになるくらいなら、退却して生き延びてもらった方が良いだろう。

（未来ある若人を、俺達の復讐に付き合わせる必要はあるまい）

ジェリドとマウアーは、俺を含めた１０人とは違い、人数が足りなかった為に補給要員として本国から回された隊員に過ぎないからだ。そんな事を考えているとマウアーのストライクイーグルが立ち上がった。　どうやら、再起動が成功したようだ。

「マウアー。行けるか？」

「はい。大丈夫です隊長！戦闘可能です」

「ならば、ジェリドを連れて戦域を離脱しろ。これは命令だ。一切の反論は認めん」

「な！？く！分かりました。命令に従います」

苦虫を噛み潰した様な表情をするマウアー。しぶしぶ命令に従った。マウアー機がジェリド機を支えて、跳躍ユニットで上空に飛び上がった。

「離せマウアー！俺はまだ、戦える！隊長達の援護をするんだ！」

「止すんだジェリド！私だって戦いたさ。けど、隊長達の気持ちも分かってやりなよ！隊長達は、わざと私たちを逃がしてくれるんだ！だが、助けてもらった命を粗末にするんじゃないよ！」

「ち、ちくしょうおおお！！」

オープンチャンネルで叫ぶジェリド。ゆっくりとだが、２機のスト

ライクイーグルが戦域から離脱を図る。すると、後方から爆発音が聞こえた。
レーダーを確認すると、ジョニーとグラムの反応が消えていた。

「ジョニー副官も、戦死されましたね。残ったのは俺と少佐だけになりましたね」

「そうだな。ウル。付いてこい！教え子達の仇を討つぞ！」

「了解です。少佐。ジェリドとマウアーは無事に離脱出来たでしょうかね？」

ウルに言われて、後ろを振り向く。2機のストライクイーグルが大分遠くなった。おそらくこのまま離脱出来るだろう。そう思った瞬間、赤い閃光が空を切っていった。上空で爆発が発生する。

「まさか！？今のは光線級の攻撃なのか！？メビウスの連中が排除したはずじゃあ！？」

「分からん。だが、正面からお客さんが来たぞ」

おそらく今の攻撃は、メビウスの兵器だろう。
だが、そんなことを考えている余裕は無さそうだ。俺が振り返ると、正面に2本の長刀を持ったモノアイの青い棘つきが立っていた。

「ウル。行くぞ！敵討ちだ！」

「了解です。くたばれ！棘つきが！」

俺とウルは、棘つきに攻撃を仕掛けるのだった。

場所は代わり、レセップスのブリッジの上。
ライフルを持ったガンダムが2機のストライクイーグルを撃破した。

「今のが敵ね。悪いけど悠斗の命を狙った段階で貴方達に生きるチャンスは二度と来ない。私が悠斗の敵を滅ぼすから。
私はスナイパー。悠斗の敵は見敵必殺（サーチ&デストロイ）よ」

と言ってから、ブリッジに敵機を撃破したことを伝える不動悠斗の恋人がいたとか。

８４９２ｓｉｄｅｏｕｔ

ホシノｓｉｄｅ

イルマ中尉から連絡が入り、８４９２の数字が入れられた所属不明のストライクイーグルを撃破したと報告を受けました。　撃破したストライクイーグルがいたエリアは２００。最初に救援要請があったエリアから左に大きくそれていた。
だが、おかげで不動閣下が交戦しているエリアを割り出す事が出来た。
私は大型モニターに映るデラーズ閣下に話しかける

「デラーズ閣下。不動閣下が交戦している地域を割り出すのに成功しました」

「そうか！でかした！すぐに救援部隊を派遣して、不動閣下を助け出すのだ！」

「分かりました。すぐに部隊を派遣します。シルビア少尉。海兵隊のシーマ大佐に連絡してください。彼女の部隊が一番近い場所にいますから」

「了解。こちらＨＱ。シーマ大佐。至急応答願います」

シルビア少尉がシーマ大佐に連絡をいれる。
後は海兵隊が不動閣下を救出すれば問題ない。
私はシートに深く腰かけ、デラーズ閣下と向かい合う。

「しかし、今回の件は許しがたい暴挙だ。仮にも、総司令官が戦闘に参加して命を狙われた以上、断固たる措置を取らねばあるまい。それには、なんとしても生きた証言人が必要だとは思わんか？」

「確かに、相手の尻尾を掴むためには生きた証言が必要ですね。しかし、相手は念入りに対処してるらしく、人員の数すら不明なままです。現在分かっているのは、８４９２と言う部隊名を使っている事だけです。捕虜を捕まえる事が出来れば、より情報を手にいれる事が出来ますからね」

「そうだな。だが、まずは悠斗が無事に帰って来ることが大切だからな。しかし、今回の一件は何処が仕掛けてきたとホシノ少佐は見る？」

「十中八九米国でしょう。メビウスの台頭で一番損害を受けている国ですからね」

あの国なら、平気でやりかねないのだからタチが悪いのだ。

「うむ。ワシもそう見てる。しかし、確たる証拠が無ければな。憶測だけではどうしようもないのが現実だ」

「そうですね。後の対応は不動閣下が無事に帰還してから、協議するべきかと思います」

「うむ。そう「ガトー中佐より、緊急入電！」なにごとか！？」

「はい。アンバールハイヴの反応炉の破壊に成功しました！また、G元素を含めて、すべて破壊したそうです！」

シルビア少尉が報告する。通信回線には作戦に参加した将兵達の歓喜の声が響いている。

「シルビア少尉。ガトー中佐に連絡してください。反応炉周辺にメビウス以外の部隊が入ることを禁止すると」

「え？あ、はい。分かりました。こちらＨＱ。ガトー中佐聞こえますか？」

私はシルビア少尉に指示を出しつつ、デラーズ閣下と会談を続けるのだった。

ホシノｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

ホシノ少佐から連絡を受けた私は、部下を率いて悠斗の救援に向かっている。ホシノ少佐が割り出した位置に向かう。
指定された場所に向かう途中、あちこちに戦術機の残骸を確認した。

（ルリの言う通りだね。此処等で、戦闘した形跡が多数あるよ。悠斗。無事でいなよ！）

スラスターを吹かして、上空を移動しているとレーダーに反応があった。

「（この先だね！あと、少しだ）お前たち！この先に悠斗が居るよ！敵が居たなら即座に無力化するんだ。良いね？」

「「「「「「「「「「了解です。シーマ様！」」」」」」」」」」

砂山を越えて、次の砂山の山頂に着地する。すると、眼下で悠斗のイフリート・ナハトと謎の戦術機が格闘戦を行っていた。私は即座にロックオンする。

「シーマ！邪魔するな！これは、俺とコイツの戦いだ！」

「よく言った！だが、勝つのは私だがな」

ナハトのブレードと謎の戦術機の長刀がぶつかり合い、火花を散らす。
互いに1歩も譲らない。

「まさか、日本人以外に長刀を上手く操る者が入るとはな」

「貴様を殺すためだけに鍛えたのだからな。少なくとも貴様に負けるきはない！」

戦術機が間合いを取るために、後退する。悠斗は追撃せずに立っている。

「ふん。余裕のつもりか？11機の戦術機を相手にした後でまだ、余裕があるように振る舞うか。
だが、どのように振る舞おうが貴様は私を倒せん！」

「何故だ？」

「私は復讐を誓ったのだ！貴様の正で殺された教え子の仇を討つとな！その為に、血反吐を吐く程の訓練を繰り返したのだからな！オペレーションルシファーで貴様が現れなければ、私の教え子達は死ぬことなどなかった！彼等は優秀な隊員だった！貴様さえ貴様さえいなければな！」

謎の戦術機が長刀を構え、跳躍ユニットを全開にして突撃を仕掛けて行った。悠斗のイフリートは迎撃の構えをとる。

「死ねえええええええ!!教え子と部下にあの世で死んで詫びてこい!!!!」

謎の戦術機の長刀が降り下ろされる。悠斗のイフリートは右手に持った、ブレードで受け止める。更に、左手に持ったブレードで戦術機の両腕を切り落とす。長刀を持っていた両腕が無くなったため、肘から先が砂の上に崩れ落ちた。
戦術機は悠斗のイフリートに抱き付いた。

「なに!なにをするつもりだ!?」

「フフフフ。ふはははは!!死なばもろともだ!貴様だけは連れていく!不動悠斗おおおおお!」

「悠斗!振りほどくんだ!」

私がそう叫んだ瞬間辺りが光に包まれた。次の瞬間大爆発が起きて辺り一面に爆風と爆発音が響いた。私は咄嗟にゲルググ・Mのシールドで機体をガードする。部下達も、ナックルシールドでコックピットをガードする。
爆風と砂埃が辺り一面を覆う。モニター画面を見ても何も見えない状態だ。

「お前たち無事かい!?」

「大丈夫です。シーマ様!全機健在です!」

「不動の若旦那はどうなったんだ!?」

「ダメだ!熱源探知をしたくても、爆風と砂埃で何も視認できねえ

！」

「そっちはどうだ！？」

「馬鹿か！お前が出来ないのに、後ろにいる俺が出来るわけねえだろうが！」

部下たちが思い思いに通信で話す。私は頭が痛くなってきた。こめかみを押さえつつも部下を叱る。

「いい加減にしな！それより、悠斗の生存を確認するんだよ！」

「「「「「「「「「「「「り、了解です。シーマ様！！」」」

な。至近距離で爆発こそしたが致命的なダメージにはならなかったよ」

私のモニター画面に悠斗の顔が表示される。
見た感じには怪我などは無いようだ。

「良かったよ。本当に心配したんだよ！」

「悪かったなシーマ。だが、俺は簡単には死なないさ。それより、ハイヴの攻略はどうなったんだ？」

私がハイヴの攻略に成功した事を伝えようとしたところ、回線に割り込みの通信が入ってきた。

「不動閣下！ご無事でしたか。良かったです」

「ホシノ少佐か。済まない。敵の捕虜を捕まえる事は出来なかった」

「仕方ありません。不動閣下の戦闘記録から、可能な限りデータを取り出してみますから、問題ありません。ハイヴの攻略ですが、ガトー中佐が反応炉とG元素の集積地を纏めて破壊しました」

「アンバールハイヴ攻略完了だな。後始末は国連軍に任せて、全機帰還するぞ！」

「「「「「「「「「「了解（です、だ）」」」」」」」」」」

悠斗のイフリート・ナハトを先頭に私達はレセップスに帰還するのだった。

シーマｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

日の光が届かぬ場所に、２４機の戦術機とそのパイロット達が集まっていた。彼等は誰も私語をせずに黙っている。
一人が誰かと通信をしているが、他の誰もが口を閉ざしたままだ。
やがて、その一人も通信を終えたのか場所が静まりかえる。
一人の男が口を開いた。

「オヴニル。状況はどうなった？」

「グラーバク。残念ながら、アベンジャーの連中は失敗して全滅した様だ。　集合地点に誰も帰って来なかったそうだ」

オヴニルと呼ばれた男は、首を振り、両手を上げてやれやれと言った表情をする。彼等は仲間が死んだ事さえたいした事だと、感じていないようだ。

「そうか。優秀な連中だったからな。もしかするとと思ったが、ダメだったか。まあ、我々の任務は遂行したのだ。あとは、ラングレーの連中が解析するだろう。我々は祖国に帰還するぞ」

「そうだな。あとは、上層部の仕事だ。我々が関与する必要は無いな」

そう言うと、他の者達は集まっていた場所から去っていく。残ったのは二人だけだ。

（しかし、あのアベンジャーが殺られたか。信じられんな。彼奴は教官の中でも俺とオヴニルに次ぐほどの腕を持っていたんだがな。世界一高価な鉄屑を使って負けるとわ思えんな。いや、今更何を言っても無駄か。まあ、今回の件で少なくともメビウスは暫く動けんだろう。彼奴はなら、ターゲットに何等かの負傷は与えたはずだろうからな）

一人の男が考え事に耽っていると、もう一人の男が煙草を吸い始める。

「グラーバク。どうかしたのか？」

「いや、たいしたことではない。それよりも、祖国に戻ったらバカンスの申請をするか。ゆっくり休みたいしな」

「そうだな。仮にも、実戦に参加した訳だしな。いい女でも抱くさ」

そんなことを話ながら、二人の男達も戻って行くのだった。

???sideout

第八十四話（後書き）

う～ん。纏めようとしたら長くなりました。

感想待ってます。

第八十五話（前書き）

ギリギリ完成。
後、１週間でマブラヴオルタネイティヴの発売日だ！では、本編をどうぞ。

第八十五話

アメリカｓｉｄｅ

ホワイトハウスの大統領室に5人の男達が集まっていた。彼等の表情は皆固い。大統領が口火を切る。

「ＣＩＡ長官。報告を頼む」

「は！では、先程手に入った情報から報告します。まず、昨日行われたメビウス主導のアンバールハイヴ攻略作戦、通称砂漠の矢（デザート・アロー）作戦は成功したと、報告がありました」

ＣＩＡ長官が報告書を読み上げる。室内には彼の声が響く。大統領が話かける。

「まあ、地上からＢＥＴＡの巣が無くなったのは喜ばしい事だ。だが、肝心の件はどうなったのかね？」

「は、はい。まず、メビウスの主力ＭＳの戦闘データの入手には成功しました。入手さたデータをもとに、現在解析が続けられています。おそらく、一月以内には検証結果が出ると思われます」

「機体の奪取には成功したのかね？」

「いえ。残念ながら国防長官の期待には添えなかった。優秀な隊員を送ったが、メビウス側の警備が厳重過ぎた為、機体の奪取には失

敗した」

ＣＩＡ長官がそう言うと、国防長官が残念そうな表情をする。しかし、手に入らなかった物を今更、悔いてもしょうがないのだ。更にＣＩＡ長官は話を続ける。

「また、アンバールハイヴが攻略された事により、スエズ運河を通じて、インド洋に軍を派遣しやすくなりました。コレにより、今まで生じていた時間的なロスを無くす事が出来ます」

「だが、それはあくまで、国連印度洋方面軍が守りきれればの話だろ?当てにして良いのかね?」

「副大統領が懸念されるのは分かりますが、アンバールハイヴの跡地を基地として、改修して使用するつもりでしょうから、大丈夫だと判断出来ます」

「そうかい。しかし、肝心のG元素はどうした?手に入ったはずだろう?その為に、わざわざ中東各国と交渉したのだからな」

「そ、それが、その」

急に口ごもるＣＩＡ長官。何やら、答えにくいらしい。室内の空気が更に厳しくなる。

「で?どうなんだね?G元素は手に入ったのか、入らなかったのか?」

「申し訳ありません。残念ながらメビウスが反応炉諸共全てを吹き飛ばしてしまい、手に入りませんでした」

勢いよく頭を下げて、大統領に謝るＣＩＡ長官。またしてもG元素は手に入らなかった様だ。
大統領は手で目元を隠し顔を上げる。

「はぁ。またか。またしてもメビウスに先手を打たれたか」

「一体ＣＩＡはなにをやっているんだ！なんのために、我々が時間を掛けて交渉してきたと思っているのだ！」

ダンと副大統領が机に拳を叩きつける。その衝撃で机の上にあった書類が落ちた。ＣＩＡ長官は、落ちた書類を拾い弁明する。

「た、確かに、副大統領のお怒りも分かりますが。　しかし、今回参加させた隊員が優秀だったおかけで、メビウスのＭＳ等のデータが手に入ったのですぞ！？一概に、我々だけを非難しないで頂きたい」

「う！？だ、だがな、貴様らが確りしないから我々は苦渋を嘗めさせされてるんだぞ！もっと確りしろと言っているんだ！」

「な！？なんですと！？我々は祖国の為になるようにと、日々心血を注いでおるのですぞ！我々が血塩をかけて任務を遂行しているのに、なんたる言い草ですか！」

副大統領とＣＩＡ長官が言い争いを始める。殴りあいに発展しそうな勢いだ。

「ええい！いい加減にしないか！！仲間内で言い争いをしている場合か！！そんな事をしてる暇があるのなら、一刻も早く有効な手だ

てを考えないか！」

「も、申し訳ございません」

「は、はい。申し訳ありません」

大統領が渇を入れる。言い争いをしていた二人は、意気消沈して静かになった。

「それより、報告を続けたまえ。まだ、報告が来ていない案件があるだろ？」

「は、はい！大統領。アンバールハイヴ攻略作戦の折を見て・・・・に命じた・・命令ですが、残念なが失敗しました。アヴェンジャーズは全滅、装備は全て失われました」

「そうか。まあ、悪運の強い男だな。次の手は打ってあるのか？」

「いえ。現状では難しいと判断しましたので、暫くは此方からアクションを起こさないつもりですが？」

「いや、ＣＩＡ長官がそう判断したなら、それで構わん。せいぜい、・・・・の寿命が少し長くなるだけだ。それよりも、我が国が政治的、軍事的に他国より優位に立つための、行動を考え様ではないか」

その日は一日中大統領室から明かりが消える事は無かった。

アメリカｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

イギリスロンドンに有る連合本部にて会議が行われていた。
会議室には、欧州連合に参加する国々の代表者達が円卓の机に集まり欧州奪還に関する議論を交わしていた。
司会役のイギリス代表に、一人の秘書官が近寄り耳打ちをする。

「・・・・であります。・・・・から報告がありました」

「本当なのだな？」

「はい。間違いありません。国連地中海方面総軍第３軍からの情報です」

「分かった。下がってよい」

秘書官が頭を下げてから部屋を退席した。隣に座っていたフランス代表が話かけてくる。

「どうしたのかね？なにか、緊急事態でも？」

「いや、そうでは無い。各国代表。私から１つ報告がある。少し私の話を聞いてくれたまえ」

今まで議論を交わしていた国々の代表が静まりかえる。視線はイギリス代表に集まっている。

「先程、秘書官が伝えてくれたばかりの情報なのだが、本日未明にアラビア半島にあるアンバール ハイヴが攻略された」

「「「「「「「「「「な、なんだったて!?（と!、です!?）」」」」」」」」」」

各国代表達が驚きの声を上げる。陸戦において最も辛い砂漠の戦いで人類がＢＥＴＡに勝利したからだ。

「各国代表が驚くのも無理はない。私とて、半信半疑なのだがな。だが、国連地中海方面総軍がわざわざ連絡を寄越したのだから、まず間違いはない」

「ほう。良い報告ではありませんか。マンダレー ハイヴに続き、二つ目のハイヴを陥落させる事が出来たのですから」

「フランス代表の言う通りですな。やはり、今回もメビウスが主力ですか?」

フランス代表はコーヒーを優雅に飲みつつ、イギリス代表を見る。イギリス代表は紅茶を飲みながら返事をする。

「そうです。スペイン代表。国連印度洋方面総軍が共に作戦に参加した様だが、主力はメビウスだったそうだ」

「ほう。そうなると、ますますメビウスが頭角を出して来ましたな?いささか、やり過ぎなのでわないか?」

「西ドイツ代表の言う通りだな。しかし、米国相手に仮は作りたく無いのが、各国の本音ですからな。しかし、メビウスが勢い付くのもよろしい訳ではないな」

「イタリア代表。いささか、言い過ぎですぞ。米国が欧州に兵を割いてくれてるのは事実だが、メビウスがなければ今日間でのハイヴ攻略作戦が、成功する通りが無かったのも事実ですぞ」

西ドイツ代表とイタリア代表が、メビウスが目立ち始めた事を非難する。　スイス代表が両国代表に苦言を言う。そんな状況でポルトガル代表が口を開いた。

「マンダレー、アンバール、の順で来たらメビウスは次は何処を攻略すると各国代表は考えられますか？」

ポルトガル代表の一言で、各国代表が考え始める。当のポルトガル代表は、中央に表示された世界地図を真剣に見ていた。　その姿を見ていた、イギリス代表がポルトガル代表に問いかける。

「では、ポルトガル代表はどう判断するのかね？」

「皆さん、世界地図をご覧ください」

各国代表が中央に表示された世界地図を見る。
ポルトガル代表は立ち上がり、世界地図の横に立ち説明を始めた。

「まず、メビウスが昨年攻略した東南アジアのマンダレーハイヴ。次に、今日攻略されたアンバールハイヴ。この二つを線で繋ぐと、間に1つのハイヴがある。そう！旧インド領にあるボパールハイヴ

だ！かつて、スワラージ作戦で多大な被害を被ったハイヴだ！私は、メビウスが次に攻略するのは、此処だと予想する」

「何故そう思ったか聞いても構わないかね？」

フランス代表がコーヒーを飲みつつ、そう訪ねる。各国代表も無言で、成り行きを見守っている。

「理由は簡単です。先に攻略したハイヴの場所から、考えたまでの話です。　仮に、メビウスの次の目標がボパールハイヴだった場合、先に二つのハイヴを攻略した理由が成り立つからです。まず、マンダレーハイヴですが、此方は東南アジア諸国にとって厄介なハイヴでした。また、同時にインド亜大陸に兵を送るために攻略して起きたい場所でもあります。いくら海路で兵を送れるとは言え、輸送能力には限界があります」

「確かに一利あるな。なら、アンバールハイヴはどうしてかね？彼方は砂漠しかない不毛な大地だが？」

「確かにオランダ代表の言う通りだ。だが、アンバールハイヴを攻略しておくことで、西側からも兵を送れる様になるからです。あいだにマシュハドハイヴが存在しますが、陽動等を掛ければ問題無いと考えられます」

「まさか！メビウスの真の狙いは！！」

此処まで説明されて、初めて各国代表はポルトガル代表が言わんとする事に気が付いた様だ。皆、緊張した面持ちになる。

「そう。約３０年前に地球に落下した最初のハイヴ、カシュガルを

攻略するつもりなのだ！」

「地球に落ち、今日まで我々人類を苦しめてきたＢＥＴＡ達の親玉が居る、オリジナルハイヴカシュガルをか！？」

「いくらなんでも、早計過ぎないか？少なくとも、メビウスなら不可能では無いかも知れんが、仮に、カシュガルを攻略するつもりなら、マシュハドや重慶ハイヴ等も攻略してから、万全な状態で攻略すると考えるな」

ポルトガル代表の突拍子も無い発言に、驚くベルギー代表と苦言を言うデンマーク代表。会議に参加している他の代表達の意見は、半々に別れていた。ポルトガル代表の言うことはある意味で利にかなっていると、同意する代表。いや、たまたま偶然に過ぎないとデンマーク代表と同じ考えをもつ国々等様々だった。
イギリス代表がゴホンと咳払いして、話に介入する。

「まあ、ポルトガル代表の言った事も、１つの可能性として考えるのは悪くない案だ。しかし、現状では憶測でしかないのだから、その点には各国代表は留意してくれたまえ。それよりも、ポルトガル代表が言った通りになられては、欧州奪還が遠退くばかりだ！なんとしても、欧州奪還の為にメビウスの協力を仰ぎたいのだ！各国代表も、メビウスに対する懸念も大事だが、それ以上に欧州奪還に目を向けてくれたまえ。取り敢えず会議は一時休憩にしようと思う。異論はあるかね？」

イギリス代表が室内を見渡す。どの国の代表からも異論は出なかった。

「では、一旦休憩だ。３０分後に集合してくれたまえ。では、解散

だ」

イギリス代表の一言で、各国代表は席から立ち上がり会議室を後にして、本国との連絡を取るのであった。

欧州連合ｓｉｄｅｏｕｔ

ソ連ｓｉｄｅ

アラスカにあるソビエト社会主義連邦共和国の書記長室に数人の人間が集まり、会議を開いていた。書類を手に持った高官が説明を続ける。

「・・・であり、現在は緩やかに後退を続けるまでになりました。やはり、メビウスから提供を受けて正式採用したザウートのおかげだであります。前線からはザウートの早期に、全域配備を求める意見書が日々多数届いております。よって、現行のまま戦術機の配備を急ぐよりも、より戦果の上げられるザウートの購入を急ぐべきかと思われます」

高官が説明を終えて、椅子に座る。書記長は顎髭を左手で撫でながら、考えている様だ。少しして、書記長が口を開いた。

「分かった。ザウートの件は優先的に配備を進める方向で構わん。皆もよろしいか？」

書記長の問いかけに、会議に参加している者たちは頷いた。提言をしていた高官がホッとした表情をする。

執務室の扉が開いて一人の秘書官が入ってきた。

「会議中に失礼します」

「何事かね？今は、大事な会議の最中だぞ？緊急な用件でなければ後にしたまえ」

「は！しかし、今回の件は火急の案件故にどうしても、お伝えしたいと思いまして」

高官の一人がいきなり入ってきた秘書官を注意する。秘書官は食い下がった。

「まて、何が有ったのだ？」

「はい！書記長。先程国連大使から連絡がありました。メビウスがアンバールハイヴの攻略に成功したと」

「な、なんだと！？」

「あの、厳しい砂漠戦で勝利したのか！？」

「地獄と言われたアラビア半島で勝利しただと！」

会議に出席している高官達から、様々な声が上がる。書記長が口を

開いた。

「そうか。分かった。下がってくれ」

「は！失礼しました」

秘書官は扉を開けて、書記長室から退室した。高官達の視線が書記長に集まる。

「ふむ。アンバールハイヴも落ちたか・・・・。出来れば、我等が祖国を奪還する為にも力添えを願いたいな。そうわ思わんか？皆？」

「はい。メビウスの力添えしてくれれば、苦渋を嘗めている我等が偉大なる祖国の地を奪還出来るでしょう」

「左様だ。だからこそ、メビウスとの結び付きを大事にしなければならんでしょう」

「しかし、同時に彼の国が黙っていないでしょう。他の国の動向に留意するべきかと」

「その方がよろしいかと。少なくとも、祖国の地を奪還出来るまでは、下手に動かない方が良いかと」

高官達から様々な意見が上がる。書記長は顎髭を左手で撫でながら、高官達の意見に耳を傾けていた。

「皆の意見は分かった。ならば、今は我々は来るべき時が来るまで待つとしよう。それで良いな？」

書記長が高官達の顔を見渡す。高官達は静かに頷いた。

「よろしい。では、次の議案に取りかかるとしよう」

書記長の発言により、会議の議案は次の議案に移行するのだった。

ソ連ｓｉｄｅｏｕｔ

香月博士ｓｉｄｅ

私は新しく完成したばかりの、横浜基地の地下にある研究室にでピアティフからの報告を受けていた。

「・・・・です」

「そう。分かったわ。まさか、アンバールまで落とすなんてね。今まで、人類がＢＥＴＡに押され続けてきたのに、遂に反撃に出たって所かしら？あ、コーヒーお代わりね」

「はい。少なくとも、メビウスによる勝利の影響は小さく無いと思われます。比較的戦い易いと言われる、マンダレーハイヴの様な山間では無く、最も厳しい砂漠での勝利ですから」

ピアティフが私にコーヒーのお代わりを淹れながら答える。コーヒーメーカーから、コーヒーをついで私の机に置く。私はコーヒーカップを手に持ち、コーヒーを口にする。本物の豆の香りが鼻腔をくすぐる。味も良かった。

「そうね。しかも、次の狙いは私達に分かる様になってるわね」

「はい。まず間違いなく、ボパールハイヴですね」

「まあ、人類がＢＥＴＡに勝利するためには、カシュガルを落とさなきゃならないわね。だから、最短コースを攻略するつもりね」

メビウスが落とした２つのハイヴの場所を見れば、大体の連中は気付くはずだ。次の狙いが。

「はい。カシュガルさえ攻略出来れば、人類の勝利がグッと近くなりますから」

「そうね。でも、簡単にいくかしら？ＢＥＴＡだって馬鹿じゃないだろうしね」

「た、確かにそうですね。航空戦力に２週間で対応したのですから」

ＢＥＴＡも航空戦力に２週間で対応して見せたのだ。何等かの対応が有ってもおかしくないと言えばおかしくない。しかし、２０年余りのあいだ、突撃戦法しかしてこないのだからもしかすると、ＢＥＴＡは極端な被害を被らない限り進化しないのかも知れない。

（まあ、どうしたって私の研究が進まない限り、何も解明出来ない

わね。理論は完璧なはず！後は技術力さえあれば出来るはずなのよ！）

日本帝国に私の理論に付いてこれるだけの技術力があれば、既に成果等出せているはずだ。だが、現実はそこまで甘くないのが実情だ。

（まあ、焦ってもしょうがないわね。少なくとも、メビウスが表だって活躍していれば、私に影響は来ないから。精々頑張ってもらわないとね）

そんな事を考えながら、コーヒーを再び口にするのだった。

香月博士ｓｉｄｅｏｕｔ

第八十五話（後書き）

マブラヴオルタネイティヴＸｂｏｘ版。買ったら確実に更新が遅くなるな。
オープニングは見たが、ちょっと残念だった。
だから、本編には期待してます！
感想待ってます。

第八十六話（前書き）

ホントにギリギリ完成。　いや～、危うく間に合わなくなる所でした。
では、本編をどうぞ。

第八十六話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年３月１２日
ソマリア共和国メビウス仮設駐屯地、艦隊旗艦レセップス会議室

メビウスは今、アンバールハイヴ攻略作戦、通称砂漠の矢（デザート・アロー）の第２段階砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）の準備を整えるため、アフリカ大陸のインド洋に面したソマリア共和国で、艦隊を待機させている。現在ガルダ級大型空母でＭＳ等の補給を行っている。先の砂漠の矢（デザート・アロー）で損傷した機体や戦車を急ピッチで修理、整備させている。整備兵には地獄だろうな。

俺は現在、レセップス艦内会議室に各師団の師団長を集めて、緊急会議を行っている。会議の内容は２つだ。１つは砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）に関する事だ。もう１つは俺の暗殺未遂の件だ。最初に砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）の説明をホシノ少佐が始める。

「説明を始めさせてもらいます。現在我が軍は、ソマリア共和国仮設駐屯地にて、戦力を整えています。戦力が整うのは３日後になります。３日後には砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）を開始する事になります。この、砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）は、砂漠の矢作戦（デザート・アロー）の第２段階に当たる作戦です。通常なら秘密基地に帰還するのですが、今回は帰還せずにそのまま作戦を続行する事になります。兵達には負担がかかりますが、若干のイ

ンターバルがありますので、その間に休んでもらいます」

「うむ。皆、何か質問はあるか？」

「はい！私から1つ聞きたいのですが、攻略目標のハイヴを聞いていないのですが？」

デラーズ閣下が、参加者に質問が無いか確認すると、ユーリ・ケラーネ少将が手を上げて質問する。俺は質問の内容で、危うく机に頭を打ち付けそうになった。

「ユーリ・ケラーネ少将。砂漠の矢作戦（デザート・アロー）の開催前の最後の会議の時に説明をしたはずですが？」

「ケラーネ少将。お主も居たはずだが？覚えておらんのか？」

「すいません。さっぱり覚えていません！」

「はぁ。分かりました。説明させていただきます」

スクリーンに世界地図が映し出される。ホシノ少佐がポケットから指し棒を出して、インド亜大陸を指す。

「今回、砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）の攻略目標はインド亜大陸に存在する、ボパールハイヴです。此処は、オリジナルハイヴカシュガルに近いハイヴです。此処を攻略することで、オリジナルハイヴに進軍する為の橋頭堡を作るのが目的になります。また、今回の作戦は大東亜連合と共に行う、共同作戦になります。質問はありますか？」

「いえ。続けてください」

ユーリ・ケラーネ少将は、ホシノ少佐から質問があるか、問われるが特に無かったので話が次に進んで行く。

「今回の作戦では、西からメビウス。東から大東亜連合が攻撃を仕掛ける事になります。第一師団から第五師団までは、ハイヴの攻略がメインになります。第六師団は、後方支援がメインになります。この作戦が成功すれば、オリジナルハイヴカシュガルを攻略する目処が立つ戦いです。ですので、此処で敗北する訳にはいきません。何か質問はありますか？」

「ああ。気になったのだが、俺達は何処から上陸するんだい？」

「インド亜大陸の西部、ボパールハイヴに最も近い地点からの上陸になります。ＢＥＴＡからの激しい増援が懸念されます」

国連印東方面総軍は、先に攻略されたアンバールハイヴに戦力をまわしているため、今回の作戦には参加しない。そのため、援軍を期待する事は出来ないのだ。
また、大東亜連合軍に損害を多く出させてはならない。彼等には、ボパールハイヴ攻略後にインド亜大陸の防衛を任せるからだ。

（まあ、アンバールハイヴ攻略作戦で出た被害が、俺の予想を下回ったのは幸いだな。おかけで、ＭＳの交換は最小限で済んでいるからな）

慣れない砂漠戦で将兵達が奮戦してくれたおかげだ。彼等には悪いが、もう1度、頑張ってもらわなければならないのだ。

「ふぅ～。また、砂漠戦ですか。まあ、頑張るしか無いですな」

「当たり前だケラーネ少将！第2段階はより、厳しい戦いになるのだからな」

「分かってますよ、ギニアス少将。しかし、この戦いに勝てば、人類が勝利する可能性が飛躍的に上がるんだからな。俺も、気合い入れて戦うか！」

「そうしてください。何処かの総司令官は、ホイホイ最前線に出ていきますから。私としては、もう少し自重して欲しいのですが」

会議に出席している人達の視線が俺に集まる。
俺は苦笑いするしかなかった。
デラーズ閣下が、ため息を吐きながら話を進める。

「まあ、不動閣下が自重しないのは今更だからな。ホシノ少佐。あまり、気にするだけ無駄だと言うことだ」

「はい。分かっています。気にするだけ無駄なのですから。・・・何か、砂漠の電撃作戦（デザート・ブリッツ）に関する質問はありませんか？」

ホシノ少佐が会議室を見渡す。特に誰も質問等は、無いようだ。

「では、次の議題に移行させていただきます」

そのまま会議は次の議案に移行するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

ワシはレセップス艦内の会議室で会議を開いておる。最初の議題が終わり、次の議題に移行してからは会議室の中の空気は一変した。議題の内容は、悠斗の暗殺未遂の件だ。ホシノ少佐が事件の概要を説明している。

「・・・・であります。また、現在分かっているのは、不動閣下と交戦した戦術機は全て強奪された機体と判明しました」

「強奪された機体だと？」

「はい。ユーリー・ハスラー少将。ストライクイーグルは、国連印東方面総軍が新規に配備する予定の新型機が１個中隊分、輸送中に何者かによって強奪されています」

「待ってくれ。襲撃されて強奪されたら、普通は各国や各軍に通達が有るはずだ？だが、我々は誰もその様な報告は受けておらん」

コンスコンの言う通りだ。それだけの規模になれば、各国が総力を上げて捜索するはずだ。また、各国の軍に通達が必ずあるはずだ。だが、それすら無いのは可笑しな話だ。

「はい。この強奪事件は、明るみになっていません。国連印東方面

総軍の一部上級将校が、隠蔽していました。私が、電子ネットワークを駆使して調べたところ、明るみになったのです」

「成る程。ならば、隠蔽していた上級将校はどうなったのだ？」

これだけの事実を隠蔽していたとなると、通常の軍規違反等では済まない可能性が高い。最悪、反逆罪を適応されかねない。

「調べてみましたが、居場所を突き止めて国連印東方面総軍司令部及び、国連本部に告発しました。ＭＰ（ミリタリーポリス）が自宅に踏み込んだ所、揉み消しをしていた、上級将校は銃で家族ごと自決されていました」

「そうであったか。なら、犯行に使用されたのは、全てストライクイーグルだったのだな？」

「いえ。違います。不動閣下のイフリートから抽出した戦闘映像に、１機だけ謎の戦術機が映っていました。此方の機体になります」

中央モニターに黒い戦術機が映し出される。見たこともない戦術機だ。

ホシノ少佐が指し棒で機体を指して説明を始める。

「此方の戦術機は、現在生産されている戦術機に該当する機体はありませんでした。なので、色々な場所を調べた所、ある機体である事が判明しました」

「ほぅ。特殊な機体なのか？」

「いえ。試作機でした。機体名はＹＦ－２３ブラックウィドヴ？です。かつて、Ｆ－２２と採用トライアルを繰り広げ敗れた機体です。

別名、世界一高価な鉄屑と呼ばれています。アメリカのとある博物館に飾られていましたが、此方も強奪されていました」

「な、なんだと！だが、機体を強奪した所で、メンテナンス等はされていないはずでわ？」

「ユーリー・ハスラー少将の言う通りだ。だが、映像を見る限りでは、キャンセル動作を行っているぞ！これは、一体どう言う事だ！？」

ユーリーにビッターが声を上げる。確かに、映し出されている映像には、キャンセル動作等を行っているシーンが多数見受けられる。これは、ＭＳＸＯＳが搭載されている証しでもある。

「はい。最初にも言いましたが、強奪されたストライクイーグルは１個中隊分でした。どうやら、強奪した犯人は余った１機のストライクイーグルの、管制ユニットやＣＰＵを乗せかえた上で使用してきた様です。事実、このブラックウィドヴ？からジャミング電波が、広域に渡って発信されていましたから」

「となると、相手は単なるテロリスト等と言った連中ではなく、プロの特殊部隊の可能性が高くなるな」

「ホシノ少佐。貴官なら何処の国が犯人だと思う？」

ワシの問いかけに、ホシノ少佐が考える素振りを見せるがすぐに答えた。

「可能性が最も高いとすれば、米国です。しかし、米国以外の可能性も否定出来ません。今回被害を被っているのが、国連と米国です

から。もしかすると、米国に罪を擦り付ける為に他国が行ったのかも知れません。今回の暗殺未遂では、確たる証拠が手に入りませんでしたから」

「通信記録等から、犯人を特定する事は出来んのか！？」

「コンスコン少将。残念ながら難しいかと思われます。相手はメビウスに恨みがある事が分かった位で、後は何も」

ホシノ少佐が肩を落とす。彼女も最善を尽くして調べてみたのだろう。だが、たいした情報を得る事が出来なかったのだろう。

「そ、そうか。済まないホシノ少佐。怒鳴るように言ってしまって」

「いえ。大丈夫です。更に追跡調査するにしても、1度秘密基地に帰還しないと難しいのが実情です。ですので、今は不動閣下の警護担当等を増やす事が先決だと思います」

「その通りですな！先ずは、不動閣下が出撃するのを控えてもらうべきかと」

「ギニアス少将の意見に同意です。わざわざ狙われている不動閣下を、前線に出す必要は無いと考えます」

「ユーリ・ケラーネ少将の意見に反対だ。私としては、不動閣下に最前線に出てもらう事に問題は無いと思う。寧ろ、警護の為に部隊を廻せば良いと思う。いきなり不動閣下が最前線に出なくなれば、不審に感じる兵が出てくる可能性がある。我々上級将校以外に悟られぬ為にも、前線に出ることをいきなり止めるのは良くない」

「ワシはビッター少将の意見に賛成する。故ドズル閣下も、率先して前線に出向く方だった。ならば、前線に出られて戦果を上げていただく事で、兵の士気を上げていただくべきだ！」

各上級将校達から様々な意見が出る。会議室内の空気が更に熱を帯始めた。だが、その空気を打ち消す覇気が会議室を包み込む。全員の視線が1人の男に集まる。

「各将軍達の意見は分かった。だが、俺は前線に出ることを止めるつもりは無い！前線に居ようが、後方に居ようが、狙われると分かっているなら何等関係ない。前線で対応しにくいか、後方で対処しやすいの違いにしかならないなら、俺は率先して前線に出る」

「しかし、不動閣下がもし亡くなられたら、指揮系統が混乱する事は必須です！！」

「そうです！今一度、ご再考願います！

ケラーネ少将とギニアス少将が、考え直すように説得する。しかし、不動閣下は首を横に振った。

「残念ながら俺は、後方で指揮を執っているタイプの司令官では無いのだ。そう言ったのが得意なのは、ユーリー・ハスラー少将、デラーズ中将、ホシノ少佐と言った方々だ。俺は前線に出て、一匹でも多くの敵を排除して、士気を高めるタイプの司令官なのだ。だから、前線に出ることを止める事は無いんだ。それに次の作戦でも、俺は出撃するつもりだからな」

「しかし！それは、危険ですぞ！」

「なに。俺の前に立ち塞がり邪魔をするなら、叩き潰すまでよ」

そう言って拳を突き出す不動閣下。その目には熱い闘志がみなぎっていた。それから、会議は不動閣下の護衛をどうするかの内容に移行し、更にひと悶着する事になるのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

私は今、ＭＳ格納庫に向かって歩いている。リカルドとアンディも共に来ている。

「シャア大佐。新型機が授与されたらしいじゃないですか！羨ましいですよ」

「そう言うなよアンディ。シャア大佐は、今まで旧式のゲルググで戦って来たんだから、新型機を廻してもらうのは当たり前だろ？」

「ハハハ。まあ、不動閣下に無理を言って頼んだのだ。正直ゲルググでは、私の反応に付いて来れないとな。そうしたら、新型機を廻してくださったのだ」

先のアンバールハイヴ攻略作戦で思い知ったのだ。ゲルググでは、もう私に対応出来ないと。まあ、私としては申請してすぐに新型機が来るとは、思わなかったがな。
アンディとリカルドの3人で、そんな話をしながら格納庫に入る。すると、整備兵達が忙しく働いている姿が目に飛び込んで来た。

「八番機の修理には、客部スラスター用の部品を使え！それで代用出来るから！」

「第2小隊の三番機は、フレームが歪んでるか、新型機と入れ換えろ！基地に廻して修理させろ！」

「電圧チェック急げ！小破位なら、装甲板を変えるだけで問題ないからな！」

「此処は、整備兵にとって戦場ですね」

「その様だな。アンディ。リカルド。私達の機体の元に行こう。此処に立っていても邪魔にしかならなそうだしな」

「「はい！シャア大佐」」

私達は自身の機体が鎮座しているハンガーに向かう。すると、そこには金色に輝く機体が鎮座していた。

「なんとも、派手な機体ですね」

「なんて言うか、戦場以外でも目立つカラーリングですな」

「そうだな。あ、君！私に新しく授与された機体はあれかね？」

「あ、はい！シャア大佐ですね。不動閣下から話は聞いています。彼方のハンガーにあるのが、シャア大佐の新型ＭＳになります！」

近くを通った整備兵に声をかける。どうやら、私の機体は鎮座している機体で間違いない様だ。

すると、近くで陣頭指揮を執っていた、アストナージ整備長が私の側に来る。

「シャア大佐。暇なら、大佐の新型機の座席調整やその他、諸々に付き合って欲しいんですが？構いませんか？」

「ああ。構わない。そう言えば私の機体の名前は、なんて言うのだ？」

機体には百改と書かれているが、それだけでは機体名は分からない、

「あれは、フルアーマー百式改て名前ですよ。なんでも、試作ＭＳらしいですが高性能な機体な反面、扱えるパイロットがいなかったので、格納庫の奥で埃を被ってたのを引っ張り出して来たそうです。性能は、ドーベンウルフより上だそうですよ」

「そうか。分かった。なら、調整を手伝おう。忙しそうだしな」

「すいませんね。何分、機体が多いんでね。あと、アンディ中尉とリカルド中尉には、リック・ディアスて機体が支給されました。そっちの機体は、後ろのハンガーにあります」

「やったぜ！これで更に活躍出来るな！」

「よし！やる気がでてきたぞ！シャア大佐、行きましょう！」

「ああ。そうだな」

それから私達は、機体の微調整等を整備兵達と共に行い、初期トラブルになるバグなどが無いかを確認してゆくのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

第八十六話（後書き）

シャア大佐の新型機は、フルアーマー百式改にしました。暁とどっちにするか、真剣に悩んでいたら本編が全く書けなかったので。

感想待ってます。

第八十七話（前書き）

ギリギリ完成。箱版マブラヴマジで笑える！
いやー。危うく懐かしいネタの嵐で投稿落とす所だった。では、本編をどうぞ。

第八十七話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年３月１５日
インド洋西部インド亜大陸上陸地点、艦隊旗艦レセップスブリッツ

ソマリア共和国で戦力を整え終えた、メビウス各師団は砂漠の電撃（デザート・ブリッツ）作戦を開始した。現在、海岸から上陸を続けている。
各師団の戦艦、陸上戦艦から砲撃とミサイルの嵐が、此方に向かってくるＢＥＴＡ出迎える。他の師団は上陸作戦を継続している。作戦は今のところ順調に進んでいる。

「左舷弾幕薄いぞ！なにやってんの！！ＭＳ部隊を前に出せ！ただし、無闇に進軍させるな！」

「了解しました！此方ＨＱより各機へ」

俺の指示に従い、イルマ中尉がＭＳ部隊に連絡する。ＢＥＴＡ群は途切れることなく、此方に向かってくる。

「地下振動を感知しました。恐らくＢＥＴＡの増援です」

「あと、何分で戦場に到達する！？」

「あと、1分程です」

「出現予測地点は判断できるか！？」

「本艦より右舷2ｋｍ前方です！」

「ＭＳ部隊を下げろ！出現と同時に、砲撃とミサイルをご馳走してやるぞ！」

「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」

部下達が返事をする。すると、地面が吹き飛んで砂埃が天高く舞い上がった。

「ＢＥＴＡ群、出現しました！旅団規模です！」

「主砲一斉発射！ミサイルも射ちまくれ！」

レセップスの主砲から砲弾が発射される。後続のビッグトレーからも、砲撃が開始される。

砲弾がＢＥＴＡに命中して爆発を起こす。

しかし、ＢＥＴＡ群は地下から涌き出てくる。そこに、ミサイルが突撃すると砲撃を免れたＢＥＴＡ群に襲いかかる。

辺り一面に黒煙と砂埃が舞い上がる。

「ＢＥＴＡ群の消滅を確認しました！ですが、ボパールハイヴよりＢＥＴＡ群の増援を確認しました！」

「（まだまだ、作戦は開始されたばかりだ！大東亜連合軍が東側から進軍してきてるんだ！彼等に負担を押し付ける訳にはいかん！）

全軍奮戦せよ！　ハイヴまでの道のりは長い！気を抜くな！」

「「「「「「「「「「了解です！」」」」」」」」」」

俺は指揮を取りながら、攻略目標のボパールハイヴを目指して進軍するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

デラーズｓｉｄｅ

ワシの指揮する第一師団は現在、ボパールハイヴより東に５０ｋｍ地点の場所で陽動作戦を展開している。悠斗率いる第四師団が既にハイヴまで４０ｋｍ地点まで進撃を進めている。第二師団と第三師団が　南から進撃を続けている。第五師団が第四師団の後方に展開して援護を続けている。
ワシはレセップス級のブリッジで指揮を執っておる。

「ボパールハイヴより、ＢＥＴＡ群の増援を確認しました！師団規模です！正面から来ます！」

「各艦砲撃準備用意！ミサイル発射菅開け！」

「主砲発射準備！ミサイル発射管開け！」

「上空にＡＬＫ（アンチレーザー攪乱幕）ミサイル発射！アンチレーザー攪乱幕を展開させよ！」

「ミサイル一斉発射！」

レセップス級の戦艦からミサイルが一斉に発射される。上空に光線、重光線級発射されたレーザーで埋め尽くされる。ミサイルは次々に発射されると、迎撃されて攪乱幕を形成して行く。ＢＥＴＡ群はどんどん近付いて来る。

「今だ！主砲一斉発射！ＢＥＴＡ群に砲撃を浴びせい！」

「目標、前方のＢＥＴＡ群！全艦主砲発射用意。発射！」

ワシの指示をオペレーターが全艦に通達する。

レセップス級の３連装８０インチ砲から次々に砲弾が発射される。後方からビッグトレーの砲撃もＢＥＴＡ群に降り注ぐ。　光線、重光線級から迎撃のレーザーが発射されるが、アンチレーザー攪乱幕のおかげで一発一発の砲弾にレーザーが届く前に拡散して消えしまう。光線級、重光線級の攻撃を掻い潜った砲弾が命中して爆発を起こす。爆発に巻き込まれたＢＥＴＡ群が著しい速度でレーダーから消えて行く。ブリッジにオペレーターの声が響く。

「ＢＥＴＡ群の消滅を確認しました！更に、マシュハドハイヴより、増援を確認しました！軍団規模が本艦より、西３０ｋｍ地点に出現しました！」

「第六師団はどうした！？」

「ギニアス・サハリン少将の艦隊は、海上より支援砲撃を行っていますがＢＥＴＡ群の数は、依然として軍団規模のままです！」

「分かった。第一師団の艦隊の内半数は西からのＢＥＴＡ群を相手にせよ！　もう、半数は引き続き陽動作戦を継続するのだ！」

「「「「「「「「「「了解！（です。だ。しました）」」」」」」」」」」

ブリッジ要員達が返事をする。各員が己の出来る最大限の事をこなす。

ワシは通信回線を開いて、格納庫にて待機しておるガトーに繋ぐ。

モニター画面にガトーの姿が映し出された。

「ガトー、調子は良いか？」

「は！デラーズ閣下。今のコンディションは最高であります。何時でも出撃出来る所存であります」

「うむ。そうか。先ほど西からＢＥＴＡ群の増援があった」

「私の出撃の出番でありますか！」

モニター画面に映るガトーは、ワシの言葉を聞いて出撃は今か今かと待っている。

「いや、艦隊の半数とそっちに搭載されているＭＳで、迎撃を任せる事にした。ギニアス少将の艦隊の援護があるゆえ、問題なかろう」

「そうでありますか。・・・しかたありません。しかし、私は何時まで待機していれば良いのですか?同胞達が死地に赴いているのに、私だけおめおめと待機などと」

「ガトーよ。慌てるでない。貴殿が出撃する機会は必ず来る。それまで待つのだ。良いな?」

「は!分かりました!デラーズ閣下」

ワシに敬礼するガトー。　ワシが口を開こうとした瞬間、オペレーターの声が響いた。

「ボパールハイヴより、ＢＥＴＡ群の増援を確認しました!!軍団規模で此方に向かっています!」

「分かった。ガトーよ、聞いておったな。貴公の力をＢＥＴＡどもに見せつけてくるのだ!」

「はい!分かりました!アナベル・ガトー!ゲルググ、出撃する!」

通信回線が切れ、ガトーの乗った専用の青いゲルググがレセップス級から、出撃していった。カタパルトから次々とＭＳ部隊が発信して行く。

(うむ。未来ある若人達がその命をかけて死地に赴いて行く。彼等の挺身を無駄にせぬ為にも、ワシも確りと役目を果たさねばな)

ワシは再び艦隊の指揮を執るのだった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

マツナガｓｉｄｅ

私は今、ボパールハイヴから３５ｋｍ地点にて、愛機のゲルググＪに乗りＢＥＴＡを撃破している。

「でえりゃぁぁぁぁぁ！！」

ビームマシンガンを連射して、接近してくる要撃級や突撃級の体に穴をあける。命中した箇所から、赤い体液が辺り一面を染め上げる。地面にいる戦車級以下の小型種を踏み潰す。足場を確保する為だ。

「白狼の名を刻み込め！ＢＥＴＡども！」

ビームサーベルを右手に持って、此方に向かってくる要撃級を真っ二つにする。更に側にいた、要撃級の前腕２本と首をはねる。斬られた断面から赤い体液が噴水の如く吹き出る。

（むう。なかなか、数が多いな。やはり、ＢＥＴＡの脅威は数だな。個体個体の能力はさほど高いわけではないか）

ＢＥＴＡの戦力分析をしながら、ビームマシンガンを構える。大量

の要撃級が私に集中して向かってくる。

「ふん！私に挑むか！ならば刻み込め！白狼の名を！」

ブーストダッシュで一気に要撃級の中心に向かう。尻尾の攻撃を避けて中心に着地しビームマシンガンを乱射しながら、円を描くようにその場で回転する。

「でえりゃぁぁぁぁぁ！！」

ビームマシンガンから発射されたビーム弾が要撃級に命中して、身体中に穴を開ける。ビームマシンガンを発射するのをやめて、周囲を確認すると辺り一面に要撃級の残骸が転がっていた。

「なに、気にする事はない。貴様らと私の実力が違いすぎただけなのだからな」

私はこの時油断してしまっていた。残骸の中で辛うじて生きていた、要撃級が私に尻尾で攻撃を仕掛けて来たのだ。

「なに！？くっ！」

回避が間に合わない。私はそう思い両腕でガードの構えをすると、要撃級の尻尾が黄色い光に包まれて消滅した。

「油断大敵だぜ？マツナガ中佐」

通信回線から若い男の声が聞こえた。ガード動作を解き、両腕が脇に移動すると正面に真紅に染まったゲルググが、私の機体を攻撃しようとしていた要撃級をビームナギナタで真っ二つにしている姿が目に飛び込んで来た。

「赤い彗星の「違ぁぁぁぁぁうぅぅぅぅぅ！！真紅の稲妻！ジョニー・ライデン中佐だ！！！」お、おお！？ライデン中佐であったか。失礼した。貴殿のおかげで助かった。礼を言う」

「たく。間違えるのは、勘弁してくれよな。まあ、礼は受け取っとくけどな」

ライデン中佐がモニター画面に映し出される。すると、私の機体のモニターにライデン中佐が乗るゲルググに要撃級の前腕が迫るのが見えた。

「ライデン中佐！後ろだ！」

「なに！くっ！間合いに入られただと！？」

私は要撃級をロックオンする。トリガーを引き、ビームマシンガンを発射する。要撃級にビームマシンガンが命中して、振り上げた前腕共々蜂の巣にした。

「悪い！助かった！」

「なに。先程の借りを返したまでよ。それより」

「ああ。お客さんの様だな」

モニターに大量のＢＥＴＡが映しだされた。レーダーを確認すると、辺り一面にＢＥＴＡが居ることが分かった。

「ならば、撃破するまでだな」

「そうだな。背中は任せたぜ」

「承知」

私とライデン中佐は、互いに武器を構える。そこに通信が入った。

「レセップスＣＰより、各機へ。ボパールハイヴよりＢＥＴＡの増援を確認。規模は軍団規模と判明。ＭＳ部隊は当該地域に急行せよ。迎撃に当たれ。繰り返します」

ＣＰより伝えられた情報は、あまりよろしい物ではなかった。しかも、該当エリアにいる我々からすれば、規模が分かっただけましだ。

「さて、マツナガ中佐。お客さんは大部隊らしぜ」

「ならば、尻尾を巻いて逃げるかね？」

「はっん！此所で活躍しなければ、何時活躍するんだ？俺は、逃げるつもりは更々無いぜ！」

「ならば、突撃あるのみぞ！」

私とライデン中佐のゲルググは、スラスターを全開にしてＢＥＴＡ群に突撃して行くのだった。

マツナガｓｉｄｅｏｕｔ

サカイｓｉｄｅ

私の名は、ジェラルド・サカイ。第四師団キマイラ隊所属の隊員だ。私は現在、新たに出現したＢＥＴＡの増援を撃破するために移動している最中だ。他の部隊も続々と向かって進んでいる。

「ナカガワ中尉。サカイ中尉。聞こえるな？ライデン中佐が既にＢＥＴＡ群と交戦してるらしい。急ぎ救援に向かうぞ」

「了解です。クルツ少佐」

「分かりました。ライデン中佐は無事でしょうか？」

「隊長なら、簡単には死にはしないだろうな。次の砂山をブーストジャンプで越えれば戦場だ！気を引き締めな！」

「「了解！」」

ブーストジャンプして砂山の上に出ると、そこには大量のＢＥＴＡがいた。いや、居たはおかしいな。居た形跡があったと言うべきか。クルツ少佐が口を開く。

「こりゃ、どうなってんだ！？なんだ？この、夥しいＢＥＴＡの死骸は！？」

そう。私の機体のモニター画面に映し出されているのは、夥しい数のＢＥＴＡの死骸だった。真っ二つにされている突撃級。爆発で体ごとバラバラに吹き飛ばされた要塞級。マシンガンで蜂の巣にされた重光線級等、様々な殺され方をしていたのだ。

「む！クルツ少佐！サカイ中尉！彼処を見てください！」

「なんだ？ナカガワ？あっちにな・・・に・・」

クルツ少佐が絶句する。私も指示された方向をを拡大解析する。すると、そこには万を越えるＢＥＴＡを殺害して、なを止まることなく戦い続ける、真紅のゲルググと、白狼のマークが入ったゲルググＪが居た。

「見事な連携だ」

私は思わず口にしてしまった。そう。あの２機の連携は一朝一夕で出来るものではない。むしろ、長年連携を組んでいるかの如く自然な連携だった。真紅のゲルググがナギナタでＢＥＴＡを真っ二つにすれば、それを隙だと判断して寄ってきた要撃級を白狼のゲルググＪがビームマシンガンで排除する。互いに信頼して、背中を任せて戦っているのだ。

「って！見とれてる場合か！救援に向かうぞ！」

見とれていたクルツ少佐が、我に帰ってきて指示を出す。

「「り、了解！」」

私とナカガワ中尉は、反応が遅れてしまった。

クルツ少佐がブーストダッシュで、救援に向かう。私とナカガワ中尉も、急いで追いかけるのだった。

サカイｓｉｄｅｏｕｔ

第八十七話（後書き）

箱版をやった後に、ＰＣ版の初期のマブラヴをやろうと思う。なんか、懐かしさを感じてしまったので。あと、彩峰テラカワユスｗｗｗｗ

さすが、クーデレ！不思議系少女だ！！

第八十八話（前書き）

1週間振りの投稿。
箱版のマブラヴ面白いよ。久しぶりやったから、彩峰がマジで可愛いよ！　不思議系クール少女でデレると可愛すぎ！

では、本文をどうぞ。

第八十八話

ランバ・ラルｓｉｄｅ

私は部下を率いて、ボパールから２５ｋｍ地点で攻勢に出ている。ハモンとクランプ少佐にビッグトレーの指揮を任せて、私はゲルググに乗りＢＥＴＡを撃破している最中だ。

「ふん！ザクとは違うのだよ！」

ビームライフルを構えて発射する。放たれたビームは奥で光線級や重光線級を守っていた、要塞級の顔面を貫通して、重光線級まで命中した。頭部と体に大穴を開けた要塞級は体液を噴射しながら倒れる。巻き添えをくらった、重光線級も目の部分に穴を開けて倒れた。

通信回線から声が聞こえてきた。

「そらよ！こっちとら、ザク？なんでな！」

「当たりはしない！くらえ！」

コズンとアコースがそれぞれ、要撃級を仕止める。だが、ＢＥＴＡの数は簡単に減る分けではない。まだまだ、旅団規模のＢＥＴＡが我々に迫って来る。

「コズン！アコース！陣形を崩すな！光線級、重光線級を叩くぞ！」

「了解であります！ラル大佐！」

「了解しました！援護します！」

私は、スラスターを全開にして重光線級等がいる後衛に突撃を仕掛ける。　要撃級がわらわらと群がって来る。

「ふ！甘い！」

ビームライフルを射つ。黄色い光が前方に迫ってきた要撃級を貫通する。　一直線上にいた要撃級3体が体から、体液を噴射して絶命する。

「む！」

要撃級の尻尾が私のゲルググに迫る。スラスターを噴射して、サイド移動して回避する。

「ふん！小童が！」

腰からビームナギナタを取り出し、要撃級を切り裂く。頭部を縦に真っ二つにする。大量の赤い体液が地面を染めて行く。

「大佐！危ないすよ！」

「む？コズンか。済まんな。助かった」

コズンのザク？がビームライフルで、背後から攻撃しようとしていた要撃級を撃破してくれた。
更に、我々の横に接近してきていた要撃級が2体赤い花を咲かせた。

「お二人ともご無事ですか！？」

「お、アコースか。ナイスアシストだ」

「やるじゃないか！助かったぜ！」

アコースのザク？が１２０ｍｍマシンガンで、我々の側面から突撃してきた要撃級を撃破してくれた。

「よし！一気に叩くぞ。アコース、コズン。遅れるな」

「「了解！」」

スラスターを全開にして更に奥に進む。寄ってきたり、進行の邪魔になる要撃級等を撃破してゆくと、正面に要塞級の軍団が見えてきた。

「ラル大佐！先に仕掛けます！」

「分かった。無理するじゃないぞ」

コズンのザク？が要塞級に突撃を仕掛ける。正面にいる要塞級にビームライフルを連射する。ビームライフルの直撃を受けた要塞級は、頭部から体の中をビームが貫通して体液を撒き散らしながら、地面に倒れた。

「バケモノが！人間様を舐めんじゃねえ！」

ビームライフルを腰のマウントに置いて、ビームサーベルを抜き隣にいた、要塞級に斬りかかる。要塞級は体から、触手を伸ばしてコ

ズン機を捕獲しようとするが、コズンは冷静に触手をビームサーベルで切り払って、体の下に潜った。

「くたばれや！！」

コズンの怒鳴りつけた様な声が聞こえた。すると、要塞級の体が真っ二つになった。体を真ん中から切り裂かれた要塞級は地面に崩れ落ちた。

「む！コズン！下がれ！」

「え！なんですか？」

私はビームライフルを構えて、即座に発射する。　背中を向けていたコズンのザク？に近付いていた要塞級の衝角が迫っていたのだ。私の射ったビームで要塞級の衝角が吹き飛ぶ。２発目のビームで頭部を吹き飛ばした。体のバランスを失った要塞級が地面に平伏した。

「あぶねえ！助かりましたラル大佐」

「気を抜くなよ！まだまだ、要塞級は沢山いるからな！」

コズンのザク？の隣に着地する。アコースの機体も隣に着地した。視界に重光線級や光線級を捉えた。レーダーを確認する。

「（距離は５００ｍか。なら！私の間合いだ！）コズン！アコース！援護しろ！重光線級を仕止める！」

「了解！要塞級を仕止めます！」

「了解しました！道を開きます！仕掛けます！」

アコースのザク？が顎部メガ粒子砲をチャージして発射する。射線軸上にいた要塞級8体が巻き込まれる。巻き込まれた要塞級は全て消滅した。

コズンのザク？が、要塞級に突貫する。

ビームサーベルを右手に持ち、要塞級の頭を切り裂く。左手の持ったビームライフルで、隣にいた要塞級の脚を全て撃ち抜く。要塞級はそのまま、地面に倒れる。倒れた要塞級は最後の悪足掻きと言わんばかりに触手を伸ばしてくるも、コズンのザク？はスラスターを駆使して回避する。コズンはビームライフルで頭を撃ち抜く。撃ち抜かれた要塞級から体液が辺り一面に飛び散る。

（よし！僚機のおかげで道は開けた！行くぞ！）

スラスターを全開にして重光線級等がいる地点に突入する。二人が開いた道を駆け抜ける。

ビームライフルを右手に持ち構える。前方にいる重光線級をロックオンする。

「ふ！もらった！」

ビームライフルを発射する。黄色の閃光が真っ直ぐ進んで行く。重光線級にビームが命中する。

レーザーを発射する眼球に大穴が開いて中から、体液が吹き出す。

重力に従い重光線級の体が地面に倒れる。下にいた光線級が巻き込まれて下敷きになり絶命する。

残っている重光線級群の照射粘膜が輝いている。

（不味い！レーザー照射がくる！）

私がそう思った瞬間、重光線級からレーザーが発射された。レーザーが私のゲルググに襲いかかる。私は光に包まれた。

「「ラル大佐！」」

コズンとアコースは叫ぶ。自分達の部隊の隊長機が重光線級のレーザー照射が命中したからだ。

重光線級のレーザーが段々と小さくなってゆく。　レーザーが消え去るとそこには青いゲルググが、全く傷付く事無く存在していた。

「ラル大佐！？無事だったんですか！？」

「あ！Ｉフィールドか！」

「アコースの言う通りだ。Ｉフィールドでレーザーを完全に防いだのだよ。さあ！アコース！コズン！インターバルの内に、重光線級を仕留めるぞ！」

「了解であります！」

「任せてください！さっさとかたずけ終いましょう！」

そのまま、私達は重光線級の一団に突撃して、殲滅するのだった。

ランバ・ラルｓｉｄｅｏｕｔ

シーマｓｉｄｅ

私はボパールハイヴから１５ｋｍ地点で愛機のマリーネ・ライターを操り、ＢＥＴＡの進行を防いでいる。部下達も、連携を組んで迎撃にあたっている。モニター画面に映し出される映像は、要撃級が視界を埋め尽くしている。

「チッ！数だけは馬鹿みたいに多いんだからね！！邪魔なんだよ！」

私に接近してくる要撃級をマルチロックする。ビームマシンガンを発射する。ビームマシンガンから放たれた弾丸が次々と要撃級に命中して、赤い華を咲かせてゆく。

通信回線からコッセルの声が聞こえてきた。

「シーマ様！大東亜連合の部隊が救援を求めてますぜ！援護に向かえますか！？」

「あいよ！此処はお前達が抑えな！いいね！？」

「了解しやした！おら！第三中隊に入電しろ！シーマ様の代わりに前に出るんだよ！」

通信越しにコッセルが命令を下す。私は部下に通信を入れる。

「お前達、大東亜連合の救援に向かうよ！付いてきな！」

「「「「「「「「「「了解です！シーマ様！」」」」」」」」」」」

私が部下に通信を入れてると、第三中隊のゲルググ・Mがやって来た。

「シーマ様！後はお任せください！」

「お前達も無理するんじゃないよ！いいね？」

「へい！分かってます！野郎共聞いたな！」

「「「「「「「「「「聞いてましたぜ！隊長！」」」」」」」」」」」

第三中隊の連中の意気の良い返事が返ってきた。

「よし！第一中隊、私に付いてきな！行くよ！」

「「「「「「「「「「了解です！シーマ様！」」」」」」」」」」」

第一中隊の部下を率いて、東に向かう。暫く進軍すると大東亜連合の戦術機部隊を発見した。通信が入ってきた。

「こちらは、大東亜連合軍第１０大隊李少佐であります！救援感謝します！」

「こっちは、メビウス所属海兵隊司令のシーマ・ガラハウ大佐だ。かなり、押されてるようだね。すぐに援護に入るよ」

モニター画面に映る戦術機の数は、既に9機迄に減っていた。かなりの戦術機がＢＥＴＡに撃破されたようだ。

「お前達！まずは、要撃級を全滅させるよ！私に続きな！」

「「「「「「「「「「了解です！シーマ様！」」」」」」」」」」

スラスターを噴射して大東亜連合の部隊を飛び越えて、その先にいる要撃級に攻撃を仕掛ける。

「ふふふ。選り取り見取りだね。楽しませておくれよ！」

要撃級をマルチロックして、ビームマシンガンを発射する。放たれた弾丸が要撃級の体に穴を開ける。次々と要撃級に命中して、屍の山を築いてゆく。部下達も、ＢＥＴＡに突撃して行く。

「おらおら！邪魔なんだよ！」

「は？そんなんで、攻撃してるつもりか？当たんねんだよ！くらいな！」

「あん！？舐めんじゃねえぞ！此方は海兵隊だぞ！」

ＭＭＰ－８０ｍｍマシンガンを連射して、要撃級を撃破する者。ビームサーベルを抜いて、要撃級を切り裂いて行く者。要撃級の攻撃を避けてから、ナックルシールドで顔面を叩き潰して絶命させる者等、各々が自由勝手にＢＥＴＡを撃破してゆく。私は、大東亜連合のＦ－１５Ｃイーグルの側に着地する。

「だいぶ殺られた様だね。このまま、戦闘を継続出来るかい？」

「いや。既に隊としての機能は事実上崩壊してますから、一旦本隊に戻って他の部隊と合流します」

「そうかい。分かったよ。もうすぐ部下がＢＥＴＡの掃討を完了するから、それから戻ると良いさ」

「わざわざ救援に来てもらって済まない。此方の戦力の中心は、大多数が第一世代戦術機だ。おかげで、被害が大量発生してるのが現実なのでな。ＭＳがあるメビウスが羨ましいな」

李少佐がそう呟く。確かに、李少佐を除くと生き残ってる戦術機は７機がＦ－４ＥファントムやＦ－５フリーダムファイターだ。確かに旧式感は否めない。

「まあ、それは仕方ないさ。ＭＳはメビウスが集中運用してる以外は、ザウートが販売されている以外に出回ってないからね」

「そうですな。大東亜連合でも、ザウートの配備は始まったばかりですしね。しかも、数が少ないですから。本隊に配備されてますからな。しかし、不動閣下の作られたＭＳが、此処まで凄い性能だったとわ。３年前に共闘したときに初めて見たのが懐かしいですな」

「３年前に共闘した？李少佐は、不動閣下と共闘した事があるのかい？」

「ええ。正確に言えば、約３年前になりますね。まだ、不動閣下が大佐だった時ですがね。光州作戦の時に一時だけですが。あの時の不動閣下の活躍は凄かったですからね」

「そうなのかい。なら「シーマ様！ＢＥＴＡの掃討完了しました！」・・・て、了解だよ。李少佐。此処のＢＥＴＡの殲滅が完了したから、下がってくれて問題ないよ」

私が李少佐に訪ねようとしたところ、丁度よく部下から通信が入った。レーダーを確認すると大隊規模のＢＥＴＡ群は全滅していた。

「了解しました。救援感謝いたします！第１０大隊、本隊に一時帰投するぞ！」

「「「「「「「「「了解！（です）」」」」」」」」」

大東亜連合の戦術機が次々と本隊に向かって帰投して行く。私と部下達が此処に残された。

部下のゲルググ・Ｍが私の側にやって来た。

「シーマ様！上を見てください！」

「うん？何か問題発生かい？」

上空を見てみると、軌道降下兵団の再突入殻が大量に降下してきていた。　先程、重光線級や光線級の排除が完了したため、特に迎撃されることなくＭＳが次々と、門（ゲート）の確保や内部に突入を開始して行く。

「ふむ。私らも内部に突入するよ！付いてきな！」

「分かりました！付いて行きますぜ！」

私は近くの門（ゲート）に向かう。部下達を連れて少し先の門（ゲート）に到着する。ドライセンの中隊が門（ゲート）の、確保を担当していた。
隊長機から通信が入る。懐かしいパイロットが映し出された。

「こちら、スバル・リョーコ大尉であります。久しぶりですねシーマ大佐」

「おや？月で共闘して以来だね。配置転換されて、今は軌道降下兵団にいるんだってね」

「ええ。ヒカル中尉やイズミ中尉と一緒に降下してきました。今、門（ゲート）内部に先遣隊が突入しました。ザク？とドライセンの3個大隊が先行しています」

「分かったよ。お前達聞いたね！ちんたらしてる暇は無いよ！行くよ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「了解です！シーマ様！」」」」」」」」」」」」」」」」

部下達から威勢が良い返事が返ってきた。部下のゲルググ・Mが内部に突入して行く。

「じゃあ、門（ゲート）の確保を頼んだよ。死ぬんじゃないよ」

「はい！分かりました！そちらも気を付けて！」

互いに敬礼する。私は門（ゲート）を潜りハイヴ内部に突入するのだった。

シーマsideout

第八十八話（後書き）

箱版やってたら、武君の逆行系のマブラヴオルタネイティヴが書きたくなった。メインヒロインは彩峰と委員長で。

まあ、今の現状だと無理だけどね。

感想待ってます。

第八十九話（前書き）

ギリギリ完成。1日に2本本編を完成させるのは辛いです。では、本編をどうぞ。

第八十九話

マリーダｓｉｄｅ

私はボパールハイヴの内部に突入して、プル、プルツー、と共に反応炉を目指して進行を続けている最中だ。周囲には、共に突入したラカン大尉が率いるドーベンウルフ隊と、マシュマー大尉が率いるザク？隊とグレミー中尉のバウがいる。私は前方から迫って来るＢＥＴＡの一段を視界に捉えた。

「来たぞ！お客さんだ！各隊は陣形を整えるんだ！　マシュマーは左翼を任せる！グレミーは右翼だ！マリーダ中尉達は、正面前衛を任せる！」

「了解だ！ザク？各機は私に遅れるなよ！」

「了解しました！此方で迎撃に当たります！」

「プル、プルツー。敵が来たわよ。殲滅する」

「了解だよ！私が一番沢山ＢＥＴＡを倒して、悠斗に誉めてもらうんだからね！」

「ああ。見えてるさ。気持ち悪い感覚が私の中に入って来ようとするからね！全部、皆殺しにしてやるよ！」

マシュマー大尉の部隊が左翼に展開する。グレミー中尉の部隊は右

翼に展開した。私達は、ラカン大尉率いる本隊より、更に先に展開する。
突撃級が此方に向かって地響きを鳴らしながら、向かって来る

「行け！ファンネル！」

「イッケー！ファンネル！」

「ふん！ファンネル！」

3機のキュベレイシリーズから、ファンネルが展開される。ファンネルを突撃級の上空などに移動させる。全部で９０機のファンネルからビーム砲が発射される。
ファンネルから発射されたビームは次々と突撃級を貫いて、撃破して行く。

「む！抜けられた！だが、甘い！」

ファンネルの攻撃を掻い潜ってきた突撃級をロックオンする。背中から両肩にアクティブカノンを展開する。

「落ちなさい！」

アクティブカノンからビームが発射され、突撃級の前面装甲殻を貫いて、後方にいた突撃級までも倒す。絶命した突撃級の残骸が唸りを上げながら止まる。残骸を飛び越えて奥に進む。まだまだ、沢山のＢＥＴＡが出迎えてくる。

「当たらないよーだ！死んじゃえ！」

「はぁぁぁ！ふん！とりゃあ！」

「甘いんだよ！沈みな！」

「ふん！ワシに当てようなど、１００年早いわ！」

プルのキュベレイがハンドビームとファンネルで、突撃級を撃破する。

私のモニター画面の正面にいた、突撃級が宙を舞い地面に叩きつけられた。プルツーは、ビームサーベルに切り替えてファンネルで突撃級を纏めて攻撃して撃破する。ファンネルの攻撃を掻い潜ってきた突撃級はビームサーベルで、ズタズタに切り裂いて行く。

側面から抜けてきた突撃級は、何故か真っ二つになって絶命していた。

突撃級の一団が過ぎると、遅れて要撃級の一団が迫ってきた。

「ふん！騎士であるこの私に、要撃級等が相手になるものか！」

「甘い！てぇりゃゃ！」

「此方もマシュマー大尉に負けてられんぞ！グレミー隊も前に出るぞ！」

「貴様らのような侵略者にワシが倒せるかの？」

マシュマー大尉率いるザク？部隊が、ビームライフルや顎部メガ粒子砲やビームキャノンを放って要撃級をどんどん撃破してゆく。途中で、要撃級が纏めて数体が３０ｍほど上空に浮き、爆発して体液を辺りに撒き散らしたりする。

グレミー中尉のバウ部隊は、ビームライフルやシールド付きメガ粒

子砲やミサイルを発射して、要撃級の一団を撃破して行く。２～３体の要撃級が頭をつぶされて、吹き飛んでいった。

「はぁ。マリーダ中尉。いい加減存在を認めたらどうだ？流石に、俺も生身でＢＥＴＡと戦う閣下はどうかと思うが、ＭＳよりＢＥＴＡを先に撃破してるんだしな」

ラカン大尉が溜め息を吐きながら、私に忠告してくる。そう。先程からＢＥＴＡが上空に浮いたり吹き飛ばされてるのは、マスターとマスターアジア師匠の二人が共に進行をしているからである。ただし、二人共生身なんです。しかも、私達ＭＳより遥かにＢＥＴＡを撃破してるんです。

「ふん！貴様の攻撃など既に見っ切った！くらえ！」

「悠斗の邪魔をするのは、許さないよ～！ファンネル！」

「ふん！その程度の攻撃など！」

「チッ！邪魔なんだよ！」

「く！不動閣下には負けられない！騎士である私も前に出る！」

「マシュマー大尉！陣形を崩さないでください！ああ！もう！我々も前に出るぞ！」

マスターがジャンプして要塞級の顔面に蹴りを放つ。蹴られた要塞級は衝撃により、顔面が潰れ体が真っ二つになって絶命した。プル、プルツー、の二人はファンネルで要塞級や要撃級を撃破してゆく。マスターアジア師匠は下にいる戦車級を纏めて拳の嵐をおみまいし

て絶命させている。
マシュマー大尉がマスターに感化されて、陣形より更に前に出てくる。
グレミー中尉が引き留めようとするが、既に聞こえていない。仕方なく、グレミー中尉の部隊も前に出てきた。

「まったく。どいつもこいつも先に進みやがって・・。ドーベンウルフ隊！前に出るぞ！後でバカ共に拳骨だ！」

ラカン大尉も前に出てくる。

（はぁ。マスターに感化されて全員が前に来ましたね。陣形はあまり意味がなかったようです。私も負ける訳にはいきません！1位になったとは言え、今回の作戦でも1位にならなければ、ご褒美が貰えない可能性がありますから。奮起しなくてわ）

キュベレイを中心にファンネルを展開する。

「さて、ＢＥＴＡには私の首位を維持する為に死んでもらう！行け！ファンネル！」

３０機のファンネルがハイヴ内部の横坑（スタブ）の中を飛び回る。私の視界に入ったＢＥＴＡを次々とビーム砲で撃破してゆく。

（チャンスは逃がさない！全ては、マスターの為に！）

私達は、ＢＥＴＡを撃破しつつ更に奥に向かって進行を続けるのだった。

マリーダｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

私は新型機フルアーマー百式改に乗り、アンディとリカルドと共にハイヴの中層を進軍している。途中で合流した軌道降下兵団と共に現在ＢＥＴＡ群と交戦している最中だ。

「敵意を放ち過ぎている！当たれ！」

右手に持っているビームライフルを発射する。
私に接近してきていた要撃級に命中して絶命させる。

「おら！当たりな！」

「このぉぉぉぉ！」

アンディのリック・ディアスがビームピストルで要撃級を射ち抜く。
リカルドのリック・ディアスがクレイバズーカで要撃級を纏めて吹き飛ばす。

「ちぃ！当たれ！」

私に尻尾を振り回して要撃級が攻撃を仕掛けてくる。それを、スラ

スターを吹かして回避して腰部ミサイルを2発放つ。
ミサイルが命中した要撃級は木っ端微塵に吹き飛んだ。

「そらよ！邪魔すんな！」

「く！これくらい避けられなきゃ、笑われちまう！墜ちろ！」

アンディは自機に近付いてくる戦車級の群れに、バルカン砲を発射して撃破してゆく。
リカルドは要塞級の触手を回避して、顔面にクレイバズーカを発射する。バズーカの弾が命中して爆発を起こす。煙が要塞級の顔面付近を包んでいるが、要塞級の体が右に傾いて地面に倒れる。下にいた小型種が巻き添えになって押し潰される。

「シャア大佐！危ない！」

軌道降下兵団のザク？がビームライフルを発射する。私の背後から攻撃を仕掛けようとした、要撃級が体液を吹き出しながら絶命した。

「すまんな。助かった」

「いえ。しかし、数が多いですな。ＢＥＴＡは数が取り柄と聞いていましたが、まさか此れ程とわ」

「そうだな。だが、まだ中層だ。これから更に下に行けばまだまだ、ＢＥＴＡは出てくるぞ」

全てのＢＥＴＡが必ずしも、地表に出てくるとは限らない。少なくとも、エネルギーが減って反応炉でエネルギー回復をしているＢＥＴＡが必ずいるものだ。

「そうですね。っと！当たれないんでな！」

「ええいぃぃ！迂闊な奴め！」

隊長と会話をしながら、ＢＥＴＡを撃破してゆく。それから３０分後にＢＥＴＡを殲滅する事に成功した。

「やはり、下に向かえば向かうほどＢＥＴＡの出現率が高くなってきているな」

「ええ。そうですね大佐。俺達は合わせても、１個連隊規模しかいないのに、相手は師団や軍団が当たり前ですからね」

「やはり、ここは休息を取るべきかと。連戦に次ぐ連戦ですからね。他のパイロット達も疲労が溜まっている様ですしね」

アンディとリカルドが、それぞれ現状報告をしてくる。モニター画面には軌道降下兵団のパイロット達の表情が映し出されている。確かに皆、疲れた表情をしている。

（確かに、デザート・アロー作戦から５日しか経っていないからな。全てのパイロットが必ずしも、休めた訳では無いからな。しかし、ハイヴ攻略戦は内部に突入してからは、スピードが命だからな。仕方あるまい。彼等には奮起してもらおう）

私は様々な要因を考慮して結論を出す。

「リカルド。残念だが、休憩は無しだ。不動閣下は生身でハイヴに突入しておられるのだ。ＭＳに乗っている我々が休んでいる場合で

は無いのだ」

「「「え！本当なんですか？」」」

アンディ、リカルド、軌道降下兵団の部隊長が驚いた表情を見せた。

まあ、普通に考えたらありえない事だからな。

「ああ。本当だ。先程、ホシノ少佐から連絡が有った。既に不動閣下が率いる部隊は下層まで進軍しているそうだ」

「そうだったんですか。なら、我々も負けてられませんね」

「ああ。生身で戦ってる不動閣下にたいして、ＭＳに乗っている俺達が休んでいるなんて知れたら、笑い者になっちまうからな」

「そうですな。不動閣下だけに良いカッコばかりされては、我々の立場が無いですからね」

全員の目に再び闘志が宿る。他のパイロット達もやる気がみなぎっている。

「（これなら問題なく進軍を再開出来るな。私も、不動閣下に負けていられないからな）よし、諸君。急ぎ下に向かうぞ。我々も負けてられんからな！」

「了解です！まだまだ、行けますよ！」

「了解！若い連中に良いカッコばかりさせてたまるか！」

「了解しました！軌道降下兵団の意地をみせるぞ！全機シャア大佐

に続け！」
「「「「「「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」」」
私達はスラスターを吹かして、反応炉を目指して進軍を再開するのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

俺達は今、反応炉まで後少しの地点まで進軍している。大広間（メインホール）に俺達を入れまいと、軍団規模のＢＥＴＡが行くてを阻んでいる。
「せい！でりゃあ！邪魔だ！」
俺は大量にいる要撃級に拳や蹴りを放って、殺してゆく。最下層に突入してからも、ＭＳに乗ることなく自身の体１つでＢＥＴＡを撃破している。
「はあ！さあ！でぇりゃぁぁ！」
マスターアジア師匠が、腰に付けている手拭いを使ってマスタークロスにて要塞級を纏めて数体撃破する。師匠と俺は背中を合わせる。

俺達を捕食せんと、戦車級、闘士級、兵士級のＢＥＴＡが続々と寄ってくる。

「悠斗よ。数が些か多い。久しぶりにあれをやるか？」

「はい。師匠！やりますか！」

「うむ！ならば、やるぞ！」

地面を蹴って師匠が高く飛び上がる。

「「流派！東方不敗が奥義！！」」

「超級！」

「覇王！」

「電！」　「影！」　「「弾！！」」

師匠が回転して闘気を纏い大きな弾丸の様になる。

「悠斗！今ぞ！射て！」

「はいぃぃぃぃ！師匠！」

俺は闘気を纏った師匠を打ち出した。師匠はそのままＢＥＴＡに向かって、一直線に進んでゆく。要塞級、要撃級、突撃級や、戦車級等の小型種も巻き込んで撃破してゆく。

師匠が闘気を消して、地面に着地した。

「爆ぁぁぁく発！！」

その瞬間世界が光に包まれたかと思うと、大爆発が起きた。俺は安全圏に脱出していたため、難を逃れた。爆発が終わり、煙が晴れると辺りを覆っていたＢＥＴＡは全て残骸に成り果てていた。
無線機に通信がはいる。

「マスター！ご無事ですか！」

「マリーダ中尉か。俺は大丈夫だ。そちらに被害は無いか？」

「はい。此方は全機無事です」

「そうか。なら、このまま反応炉に突入するぞ！遅れるな！」

「了解しました！」

通信を終えた俺は、駆け足で師匠の元に向かう。　師匠は悠然と立っていた。

「師匠！ご無事でなによりです！」

「悠斗か！よし！反応炉に向かうぞ！」

「はい！師匠！」

俺と師匠は地面を蹴ってジャンプして、反応炉に向かう。大広間（メインホール）に到達すると、エネルギー回復をしているＢＥＴＡと中央にそびえ立つ反応炉を確認した。

「うむ。生身でこう見ると、反応炉はなかなか大きいのだな」

「そうですね。これを生身で破壊するなら、最終奥義が一番確実ですね」

「よし！悠斗よ！やるぞ。準備は良いな！」

「はい。師匠。何時でもできます！」

「ならば！」

「「流派！東方不敗が最終奥義！！」」

「石！」

「破！」

「天！」

「驚！」

「「拳ぇぇぇぇぇ！！」」

俺と師匠の手から気の塊が発射される。２つの光が１つになって反応炉を包み込む。やがて光が大爆発を起こす。

煙がゆっくりと晴れてゆく。先程まで存在した、反応炉は跡形もなく消滅した。周囲にいたＢＥＴＡも爆発に巻き込まれた様で全滅していた。

その後は、ＭＳ部隊に引き継ぎして俺と師匠は地上に戻るのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

師弟ｓｉｄｅ

ボパールハイヴの最下層から出てきたマスターアジアと不動悠斗。
二人が地上に出てきて目にした光景は、東の地平線から昇る朝日だった。

「美しいの」

「美しゅうございます。師匠」
二人はただ、地球がもつ自然の素晴らしさに感動していた。地球を汚し人類を滅亡に追い込もうとするＢＥＴＡの拠点を１つ破壊したばかりの二人の間には、言葉は必要なかった。

「悠斗よ。やるか」

「はい！師匠」

「流派！東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新！」

「系裂！」

「「天破侠乱！」」

「「見よ！東方は赤く燃えている！！！」」

二人で流派東方不敗の心得を叫ぶのであった。

２０００年３月１６日

１９９４年に陥落したインド亜大陸を奪還する事に成功した。これにより、人類は劣勢を挽回する事に成功した。３０年あまり続くＢＥＴＡ戦争は新たな局面を迎える事になるのだった。

師弟ｓｉｄｅｏｕｔ

第八十九話（後書き）

うん。最後のはGガンのアニメをビデオで見たからつい、やりたかっただけです。マブラヴオルタネイティヴのオープニングは、ＰＣより感動しなかった。なんか、熱く慣れない歌だったな。それとも、俺が変なんだろうか？

感想待ってます。

第九十話（前書き）

完成。今回は他国がメインです。では、本編をどうぞ。

第九十話

米国ｓｉｄｅ

ホワイトハウスの大統領執務室で会議が行われていた。出席者は大統領、副大統領、国務長官、ＣＩＡ長官、首相補佐官、国防長官となっている。　大統領はコーヒーを飲んでから口を開く。

「ふん。漸く法案が可決されたな。野党の無能どもが、Ｇ弾の威力を考えれば資金がかかるのは分かっているくせに文句ばかり言いおって」

「仕方ありませんよ。我々は民主主義なのですから。意見が出るのは仕方の無い事なのですから」

「補佐官。それくらいは分かっている。なに、気にくわないだけさ」

先程までアメリカ合衆国議会議事堂（キャピトル・ヒル）で行われていた、補正予算案の質疑応答と採決が行われていた。法案そのものが、可決されたが野党議員からＧ弾等の開発に対する資金がかかりすぎだと批判を受けていたため、大統領の機嫌はあまり良いものではなかった。

国防長官が口を開いた。

「確かに。一部議員からは、Ｇ弾開発よりも新型戦術機の配備を優先するべきだとの意見も上がりましたからね。彼等には理解出来ていないのでしょう。所詮戦術機など、Ｇ弾の爆発後に生き残ったＢＥＴＡを掃除するだけの存在にしか過ぎないのだと」

「その通りだ。流石は国防長官！良く分かっているじゃないか。Ｇ弾には金がかかるのは仕方の無い事なのだよ。横浜ハイヴの時の威力を考えてみれば、結果は一目瞭然じゃないか！」

「ハッハハハ！いやいや。国務長官。それほどでは無いよ。所詮野党の議員達がそれを理解出来るほど頭が足りていないだけなのだよ」

大統領執務室に笑い声が響く。先程まで機嫌が悪かった大統領も笑っている。ＣＩＡ長官が口を開く。

「そう言えば、曾て我が米国で第二世代戦術機が登場した事により、ＢＥＴＡ戦争は第二世代機の耐用年数いないに決着がつくと言った陸軍の将軍がいましたな」

「ああ。戦術機の父、ロイド・バンデンブルグ中将の事だな。確かに彼が提唱したな。彼の提言でＦ－２２が開発される事になったのだな。まあ、Ｇ弾の登場により戦術機は中核戦力から補助兵力に移行したがね」

「そうですな。陸軍や海軍は未だに戦術機の拡充を求める輩もいますからな。まあ、予算圧縮でＦ－２２の開発は遅れていますからな」

「まあ、大抵そう言う連中は、閑職に追いやられていますがね。Ｇ弾の素晴らしさが分からぬ者を要職に付けておく理由がありませんからね」

大統領を初めとする、会議の出席者達が談笑していると、執務室にノックの音がした。

ドアを開けて一人の男性秘書が中に入ってきた。息が切れているの

にも関わらず、大統領の元に素早くやって来た。

「大統領！大変です！」

「どうしたんだ？血相を変えて？なにか、問題が発生したのか？」

「これを見れば分かります！メビウスが先程世界に向けて配信した、ボパールハイヴ攻略作戦の映像です！」

「は？馬鹿を言うな。ボパールハイヴ攻略作戦は、開始から1日しか経って無いんだぞ！？しかも、彼処はオリジナルハイヴに近いから、増援の規模とて半端なものでは無いのだぞ！？」

「まずは、この映像を見てください！見れば分かります！」

秘書がパソコンを開いてプロジェクターを準備する。中央にスクリーンが降りてきてた。スクリーンに映像が映し出された。大統領以下出席者達は驚きを隠せなかった。

「な！？馬鹿な！？あ、ありえん！？」

「そ、そんな馬鹿な！？大型種のＢＥＴＡを素手で殴り殺すだと！？」

「メビウスの総司令官は化物か！？小型種を素手で仕留めるだけでなく、大型種まで倒すなんて！？」

映像がどんどん進んで行く。反応炉を破壊した映像が映し出された。

「はぁ！？なんだ今の光は！？反応炉が跡形もなく消滅しただと！

？」

「ありえん！？反応炉を破壊するにはＳ－１１クラスの威力が必要なのだぞ！？」

「本当に人なのか！？」

全ての映像が映し出され再生が終了した。執務室の中に重い空気が漂っている。秘書がパソコンを閉じて口を開いた。

「大統領！理解していた・・だけ・・ま・・したか？」

秘書が大統領を見ると、大統領は口から泡を吹き出して気絶している姿だ。よく見ると、副大統領も気絶している。
慌てて側近達が駆け寄る。

「大統領！大統領！ミスタープレジデント！確りしてください！」

「副大統領！気を確かに！誰か！医者だ！ドクターを呼べ！」

執務室が慌ただしくなる。秘書が慌てて掛かり付け医を呼びに行く。警備兵も気付いて騒ぎ始める。この日ホワイトハウスは、空前の忙しさに教われた。大統領と副大統領が失神する等対応に終われた。
大統領と副大統領は命に別状こそ無かったが、暫くの間休養を必要とする事態になるのだった。

米国ｓｉｄｅｏｕｔ

欧州連合ｓｉｄｅ

イギリスにある欧州連合の本部で参加国による会議が開かれていた。内容は、先日有ったＢＥＴＡの進行の件だ。リヨンハイヴから旅団規模でイギリスに向けて進行してきたのだ。幸い、ドーバー海峡に面した前線基地で迎撃に成功したが、少なからず被害が出たからだ。円卓の席に座る各国代表は様々な意見を出していた。

「やはり、先の防衛戦では少なくない被害が発生したな」

「そうですな。イギリス代表。しかし、今までの防衛戦に比べると格段に被害は減りましたよ。やはり、モルゲンレーテからザウートを購入したのが良い結果に繋がりましたから」

各国代表も頷く。メビウスの不動悠斗大将が開発したザウートは、ソビエトに販売し戦果を上げたのが切っ掛けで世界中に配備が進んでいる。格闘戦が出来ない事を除いても、有り余る程の性能を持った機体なのだ。

今回の防衛戦でも、目覚ましい活躍をしたのだ。ザウートが無ければ今回の防衛戦では、発生した被害の３倍は損害が出ただろう。それだけ、ザウートは各国から信頼されている機体なのだ。

コーヒーを飲んでいた西ドイツ代表が口を開いた。

「確かに発生した損害は、軽視出来ないのは事実です。今回の防衛戦ではイギリス、フランス、我が西ドイツが損害が多かったですか

らね。軍の再編が急務かと」

「確かにその意見には賛成だが、これ以上各戦線からは兵力をさけませぬぞ」

各国軍隊の損害も無視出来る状況だ。他の国の代表が口を開いた。

「それよりも、新型戦術機の開発を急ぐべきなのでは?ザウートに使用されている技術を流用すれば、第3世代戦術機を凌駕する機体を開発出来るのでは?」

「イタリア代表。確かに新型戦術機の配備を求める声は少なくないが、その予算を何処から調達するのですか?大体、戦力の回復に繋がらないでしょうに」

「やはり、歩兵等の他兵科からの転属で穴埋めするのが良いのでは?ザウートならば、戦術機に乗れなくとも車に乗れる程度の適正で戦術機より戦果を上げられるのだから」

「スペイン代表。ザウートがいくら優れているとて、前衛たる戦術機がいなければ運用が厳しいかと。しかも、値段も安いわけではありませんよ」

各国代表達が様々な意見を出すも、会議は遅々として進展する気配は無かった。白熱した論議が行われるなか、一人の秘書が会議室に入ってきた。秘書は直ぐにイギリス代表に駆け寄って耳打ちをする。

「代表。大変です!先程メビウスからボパールハイヴ攻略作戦の映像が送られて来ました」

「む!?しかし、まだ攻略作戦は開始されたばかりなのでは?」

「いえ。攻略が完了したと国連事務総長ハマーン・カーン氏から発表されました」

「なに!そうか!なら、映像を再生する準備をしてくれ」

「はい」

秘書がイギリス代表に頭を下げて、その場から離れてパソコンを準備する。

「皆さん。只今報告がありましたので、一度私の話を聞いてもらいたい」

今まで白熱した論議を交わしていた各代表達が静かになり、イギリス代表に注目する。

「メビウスがボパールハイヴを攻略したと、ハマーン・カーン国連事務総長から発表がありました。また、ボパールハイヴ攻略作戦の映像も届きました」

「馬鹿な!?メビウスは化物か!」

「アンバールハイヴ攻略からたった数日でだと!?」

「凄まじいの一言に尽きる。いったいどんな映像なのか、興味がそそられますな」

各国代表達がざわめく。中央スクリーンに映像が映し出された。

先程までのざわめきから会議室の空気が一転する。各代表達は言葉を発する事が出来ない。
紅茶を飲む手が震えているフランス代表が辛うじて、言葉を口にした。

「こ・・こ・これは、現実なのか?まるで、夢物語を見ているようだ」

紅茶を飲む手が震えているフランス代表が口を開いた。
そう。彼らが見ている映像は彼等の理解力のキャパシィイを越えていた。　人類がＢＥＴＡと戦争を開始してから一度とて兵器を使用しないで、ＢＥＴＡを倒した者がいるかと聞かれたら、１９９８年迄にはいなかったと答えるだろう。
ＢＥＴＡ戦争の初期のころ、即ち戦術機が開発される前であれば地球上での戦いに絞れば、歩兵がＲＰＧ－７等で突撃級等の大型種を撃破した記録がある。
だが、映し出されている映像はどうだ?
なんら、兵器に頼らずに己が拳を武器にして戦っているではないか。
確かに、メビウスの総司令官不動悠斗は横浜進行の際に、小型種・・限定であるがＢＥＴＡを素手で撃破していた記録はある。

「と、突撃級の突進を手のひらで受け止めただと!?」

「ば、馬鹿な!?ありえん!要撃級を蹴りで撃破しただと!?」

今まで氷の様に固まっていた各国代表達からも、様々な声が上がり始めた。更に映像が進み、反応炉が映し出され爆発した。会議室の中はまるで通夜の様に暗く静かになった。秘書が映像を終了させて、パソコンの電源を切る。イギリス代表が重い口を開いた。

「あ～、ゴホン。非常識の塊の様な映像でしたな。まあ、なんにせよボパールハイヴを攻略して、インド亜大陸を奪還出来た事は喜ぶべきかと」

「そう・・ですな。しかし、いや。なんと言って良いでしょうか。改めて不動閣下の恐ろしさを感じましたな」

「そうですなフランス代表。しかし、不動閣下無くして、地球奪還は難しいのが実情ですからな」

「西ドイツ代表。確かにそうかも知れませんが、一概にメビウスありきは如何なものかと？

「スペイン代表の言う通りです！寧ろ、危険分子と考えた方が良いのでわ？」

「ポルトガル代表。言い過ぎですぞ！メビウスの今までの活躍をお忘れですか！」

各国代表達が様々な意見を出す。此処に来て先程から静かにしている国々の代表に意見が飛び火した。

「先程から静かにしているオランダ代表！なにか、言ったらどうですか！」

「そうだそうだ！ベルギー代表やスイス代表は、机で寝てる場合では無いのだぞ！？」

３カ国の代表達は皆、机に腕置いて枕がわりにして眠っている。映

像を見る前はキチンと起きていたにもかかわらずだ。だが、罵声を浴びさせられたにも関わらず、誰も反応しなかった。

「待った！様子が可笑しいぞ？秘書官！３人を起こしてやってくれ」

「はい。分かりました」

パソコンをかたずけて待機していた秘書官が、オランダ代表を起こすために体を揺する。だが、反応がない。不信に思った秘書が呼吸を確認すると、息をしていなかったのだ。

「あ！あわわわ？！代表！息をしていません！」

「なに！医者だ！医者を呼ぶんだ！蘇生措置を施すんだ！」

「は！はい！」

他の代表の秘書官達も慌てて駆け寄る。会議室は騒然となる。ＥＵ本部ビルに救急車が駆け付ける騒ぎになった。幸い３カ国の代表は心肺停止状態になっていたが、秘書官らの活躍と駆け付けた医師によりなんとか無事に蘇生する事に成功したのだった。

欧州連合ｓｉｄｅｏｕｔ

香月博士ｓｉｄｅ

私は今、横浜基地の地下研究室で私が研究を進めている理論の洗い直しをしている。部屋のあちらこちらに書類が散らばっている。だが、そんな事を気にせずに理論の洗い直しに集中する。

（く！何故！何でなのよ！私の理論は完璧なはず！何故、計画の中核をなす［あれ］が開発出来ないの！）

私は書類を持っていない、左手で机を叩く。ダンと机が揺れて重ねて置いてあるだけの書類の山が崩れて床に散らばる。

（なにが、私の理論が「間違っている」だ！技術力が追い付いてない事を、理解していないだけじゃない！あの、無能どもが！）

私は右手に持っていた書類を投げる。書類が辺りに散らばる。私は左手で顔を覆って天を仰ぐ。視界に入ってきたのは、無機質な天井だった。

（やはり、帝国の技術だけじゃ無理なのよ。私の理論に付いてこれる技術を持っているのは、メビウスの不動悠斗だけ。彼さえ、私の元に呼び寄せれば完璧な［あれ］が完成するはず！）

私は1度、彼が開発して販売したザウートを解体して研究した事がある。あの、ザウートに使用されている技術は現在の戦術機を凌駕していた。
コンピューターだけに絞っても、戦術機が玩具にしかならないレベルだった。

（不動悠斗。彼は確実に世界の技術力の1歩先、いや、１０歩先を行っている！もしかしたら、理論を見せれば［あれ］を開発してしまうかも知れないわね）

そんなことをすれば、私の存在理由が無くなってしまう。最悪、第四計画の中止が確定してしまう。私がそんなことを考えていると扉が開いた。

ピアティフと社が入ってきた。

「香月博士。メビウスより映像が送られてきました」

「そう。なんの映像？」

「ボパールハイヴを攻略した映像だそうです」

「ボパール？アンバールじゃなくて？」

私の記憶だと、アンバールハイヴを攻略していたはず。私が知らないうちに月が変わってしまったのだろうか？

「はい。デザート・アロー作戦の第二段階、デザート・ブリッツ作戦が敢行されました」

「（やはら、不動閣下は抜かりが無いわね。間髪入れずにハイヴ攻略作戦をするなんてね）そう。今日は何月何日？」

「はい。博士。３月１６日です」

「社？冗談よね？アンバールハイヴ攻略作戦から5日しか経って無いじゃない？」

私は壁に掛けてあるカレンダーを見る。アンバール ハイヴ攻略作戦は3月11日に開始されたはずだ。

「はい。嘘ではありません」

「社少尉の発言は間違っていません。本当に間髪入れずに作戦を開始されたのです」

「そう。分かったは。なら、映像を映してちょうだい」

ピアティフがパソコンを操作する。スクリーンに映像が映し出された。

そして私は理解し難い映像を見ることになった。

「はあ？素手で要塞級を殴り殺す！？ふざけてるんじゃ無いわよ！」

「う、嘘？ありえませんよ。要撃級を纏めて撃破するなんて」

「・・・・！？凄いです」

私は映し出された映像に立ち上がり噛み付いた。私の理論だとかそんなものじゃない！私の理解力を超越していたのだ。ピアティフは普段なら鉄面皮と呼ばれ感情の変化が少ないはずが、今は驚きを隠せていなかった。社は不動閣下がＢＥＴＡを倒す旅にウサミミをピコピコと動かしている。

映像が進み、反応炉が映し出された。そして、二人から放たれた光が反応炉を破壊した。

私は椅子に凭れ掛かる様にして座った。

「あはは。最早、不動閣下を解剖した方がいいかも知れないわね」

「副司令」

「香月博士」

「二人とも、下がってちょうだい。今は一人になりたいの」

ピアティフと社を部屋から退室させる。私は再び天井を仰ぐ。

（はぁ。ヤバいわね。最悪、国連が動き出すかも知れないわね。私の進める計画も潰されるかも知れない。なんとか、目に見える成果を出さないと！なら、もう一度洗い直してみるか）

危機感を感じた私は再び理論の洗い直しに取り掛かるのだった。

香月博士ｓｉｄｅｏｕｔ

第九十話（後書き）

眠いですな。最近夜が冷えてきて辛いです。
読者の皆様も風邪を引かない様に。作者は鼻風邪を引きましたから。

感想待ってます。

第九十一話（前書き）

ギリギリ完成。今回はほのぼの路線です。
では、本編をどうぞ。

第九十一話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年３月３１日
メビウス秘密基地執務室

俺は今、執務室にて書類と格闘している。視界に広がるのは紙、紙、紙、紙、紙、紙、紙、紙しかない！これらは全て山になっているのだから大変な量だ。秘書官のイルマ中尉だけではとても、かたずけたり出来ないのでシーマ海兵隊を使って、確認が済んだ書類を運ばせている。

「はぁ。作戦が終わったら次は書類と格闘かよ。しんどいな」

「悠斗、頑張りな。私やホシノ、マリーダも手伝っるんだからさ」

右隣の席で俺のするべき書類の一部を、担当してくれているシーマ大佐に励まされる。左隣にはホシノ少佐が書類をテキパキと処理している。

マリーダ中尉は、応接用のソファーで書類を優先的な順番に並び替えてくれている。俺は次々とくる書類に目を通しては判子を押して行く。イルマ中尉が次の書類を机に置く。俺は書類を取り目を通す。

「不動閣下。頑張ってください。まだまだ、書類がありますから」

「はい、イルマ。あれ？これは・・・・アナハイムの決算書類か」

書類を見るとアナハイムの今季の決算に関連した書類だった。グループ合わせて数千億の利益を計上していた。

「なにか、不可解な点がありましたか？」

「いや。問題ない。ホシノ少佐。オモイカネは決算書類に問題点が無いって言ってたっけ？」

「はい。オモイカネに、アナハイムグループのメインコンピューターをハッキングしてもらいましたが、不振な点はありませんでした。不正経理や私的流用、改竄等の痕跡も見当たりませんよ」

「分かった。なら、これとモルゲンレーテは問題無しと。これは、かたずけてくれ」

「はい。分かりました」

ホシノ少佐に頼んでいたハッキングによる、抜き打ち検査でも問題が確認されなかったから書類な判子を押す。それをイルマ中尉に渡して次の書類に取り掛かる。

すると、入口のドアが開いてコッセル大尉と、海兵隊の隊員2名が部屋に入ってきた。

「悠斗の若旦那！次はどの書類を運べば良いんですか？」

「うん？ああ。ホシノ少佐の机の前から、緑の書類が有る所までだ」

「分かりました！おう！野郎共、さっさと運ぶぞ」

「へい！分かりやした！」

「了解でっせ！」

コッセル大尉達が書類を持って部屋を退室していった。それにより、少し山の数が減った。だが、依然として山の数は沢山あるのだ。俺はサクサク判子を押す。次の書類を山から取り出す。次は要望書だった。俺は要望書を捲り目を通しす。

「何々？新型ＭＳの開発を願うか。エースパイロット達からの要望だな」

書類には、各エースパイロット達からゲルググは厳しいとの意見が寄せられていた。俺はパソコンを開いて生産ラインを選択する。機体のリストが表示された。

（エースパイロット用の機体か。考えなくちゃな。確か、大東亜連合も要望を寄越してたな。まあ、大東亜連合には世話になってるからな）

マウスを操作して機体を確認して行く。大東亜連合向けの機体を考える。

（やはり、大東亜連合は東南アジア諸国がメインだからな。東南アジアと言ったら、陸戦型ジムだよな）

まんま、アニメの影響を受けている俺だった。まあ、メビウスには陸戦型ガンダムを率い隊長はいないがな。マウスを操作して、陸戦型ジムの設計図を映し出させる。

（まあ、核反応炉は無しだよな。ザウートと同じバッテリーに変更

だな。ただし、バッテリーの能力はザウートの3倍にしておくか。長期戦に耐えられる機体の方が良いしな。ビームサーベルは外さなくて良いな。大東亜連合なら問題無いし。てか、彼らには世話になってるからサービスだな）

マウスを操作して、設計を変えて行く。
生産ラインが映し出された。

（まあ、ソビエトにザウート５００機を紅の姉妹と取引したからな。大東亜連合ならハイヴ２つの攻略支援だから、陸戦型ジム１０００機だな。これ以降販売するならアナハイム経由で良いな。と、生産開始）

マウスを操作して決定を押す。生産ラインが稼働した。

（エース用の機体か。次世代機が４月から生産させなきゃならないからな。なんか、良い量産機いたかな？）

俺は次々と書類を確認しては判子を押す。頭の中は、次世代機とエース用の機体で悩んでいる。
それから暫くして、書類の山をかたずける事に成功した。

「やれやれ。慣れないデスクワークはするもんじゃないね」

「仕方ないかと。シーマ大佐は本来ＭＳパイロットですからね」

「今、コーヒーを淹れますから待っててくださいね」

「あ！イルマ中尉。お手伝いします」

女性陣は書類との格闘が終了したので、ソファーに集まってリラックスしている。俺はパソコンの画面とにらめっこしている。

（とりあえず、次世代機の生産を始めるのが先決だな）

俺はマウスを操作して、機体リストを開く。更に生産ラインを選択する。

（よし。これで次世代機の方は完了だな。後はエース用の機体と新型陸上戦艦か。まあ、陸上戦艦に関しては既に決まってるから問題ないな）

パソコンの画面にはこう、表示されていた。

ギラ・ドーガ

生産数０機

生産予定数２０００００機

生産基地　グラナダ

　　ソロモン

　　グリプス２

　　地球秘密基地

ギラ・ドーガ改

生産数０機

生産予定数　１００００機

生産基地　グラナダ

ソロモン

グリプス２

地球秘密基地

と、表示された。俺は更にパソコンを操作して、新型陸上戦艦を選定する。

（まあ、次の陸上戦艦はアドラステア級だよな。これを魔改造しよう（レセップスと同じように）にすれば良いな。ただし、大きさ大分変わるけどな。やはり、タイヤで要塞級を踏み潰せる程じゃないとな）

アドラステアを選択して、魔改造して行く。強化パーツを付けて更に大型化もさせる。おかげでアドラステアの大きさが１ｋｍクラスになってしまった。

（まあ、大型化してしまったが問題ないか。カタパルトも着けること出来たしな）

マウスを操作して、生産ラインを開く。決定を押して生産が始まる。

アドラステア級　生産数０艦　生産予定数　５００艦
生産基地　　グラナダ
ソロモン
グリプス２
地球秘密基地

とパソコンに表示された。俺の側にコーヒーカップを持った、マリーダ中尉がやって来た。

「コーヒーになります。マスター、どうぞ」

「マリーダ中尉。ありがとう。いただくよ」

マリーダ中尉からコーヒーカップを受け取り、口に運ぶ。コーヒー特有の苦味が口に広がる。
俺はコーヒーを飲みながら、エース用の機体や次回の作戦を考えるのであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

不動閣下の執務室で書類の確認を終えた私は、シーマ大佐、ホシノ少佐、マリーダ中尉の四人で来客用のソファーでコーヒーブレイクをしていた。

「ふぅ。慣れないデスクワークはするもんじゃないね」

「仕方ありません。シーマ大佐は本来ＭＳパイロットですからね」

「不動閣下にコーヒーを渡してくれました？」

「はい。イルマ中尉。コーヒーを渡したあと、マスターはかなり真剣な表情でパソコンと向かい合っていました。かなり集中していますから、おそらくもう私達の声は届いていません」

悠斗の方を見ると、眉間にシワを寄せて真剣な表情でパソコンを操作している。

「そのようね。でも、なんの仕事をしてるのかしら？」

「おそらく、次の作戦ではないでしょうか？不動閣下は、１つハイヴを攻略する度に次のハイヴの攻略作戦を考える方ですから」

「確かに。ルリの意見は分かるね。悠斗は割りとやり手だからね。

次のハイヴの目星でもつけてるのかも知れないね」

ホシノ少佐とシーマ大佐はそう言ってコーヒーを口にする。
私もコーヒーを飲む。
コーヒー特有の苦味と砂糖のほのかな甘味が口に広がる。相変わらず悠斗が飲むコーヒーは高級品なので非常に美味しいのだ。無論、メビウスの一般兵士が飲むレベルのコーヒーも今のご時世なら、考えられない程上物を使っている。
シーマ大佐がコーヒーカップをテーブルに置く。

「そう言えばイルマは、来月から昇進するんだったね」

「ええ。明日からは大尉になりますよ」

今回の昇進はデザート・アロー作戦で戦果を上げた事によるものだ。
私も頑張れば佐官も夢では無い所まで来たのだ。

（本当は、もっと前線にでて戦果を上げたいけれど、悠斗が私をＣＰ将校にしているから殆ど前に出る機会が無いのが現実なのよね）

無論、ＣＰ将校の仕事は決して嫌いではない。私の情報処理能力を存分に生かせているから問題はない。

「そうなのですか？イルマ中尉。昇進おめでとうございます。私と１つしか変わらなくなってしまいましたね」

「そんなことないわ。ホシノ少佐の様に、佐官になるのは難しいのよ。だって、佐官と尉官では権限からして違うもの」

実際、佐官ならば中隊から大隊又は連隊クラスまでの指揮を執ったりする。また、権限も非常に増えて責任ある立場になるからだ。無論、尉官でも責任はあるが佐官程ではない。権限も佐官に比べると格段と少なくなる。

「そうですか。イルマ中尉は大尉になられるのですか。おめでとうございます。私も負けてられません」

「マリーダ中尉。ありがとうね」

マリーダ中尉も私の昇進を祝ってくれる。
私は再びコーヒーを飲む。コーヒーを飲みながら、シーマ大佐が口を開いた。

「そう言えばマリーダ？デザート・アロー作戦の時に約束した件は、どうなったんだい？」

（そう言えば、一番になったのはマリーダ中尉だったわね。撃破数は、私は4位でプルツーが3位、プルが2位で1位がマリーダ中尉だったものね）

「は、はい。そ、それはその、昨日の夜にマスターにお願いして、二人きりになって私の気持ちを伝えました」

両指を胸元で軽く当てあいながら、話すマリーダ中尉。頬がほんのりと紅く染まっている。

「それでどうしたのですか？」

「そ、そ、それで、マスターにＯＫをもらいました。後はそのまま、

今日の朝までベッドの上で可愛がってもらいました」

ホシノ少佐の問いかけにキチンと答えるマリーダ中尉。私とシーマ大佐はアイコンタクトを交わす。

（マリーダで四人めだね。私は良いけど、イルマは問題ない？）

（私も文句はありません。寧ろ、増えた方が良いです。流石に私とシーマ大佐の二人だけで悠斗の夜の相手をするのは、少々大変でしたから）

（そうだね。多分ハマーンも文句は言わないだろう。なら、今夜から3人だね）

（はい。そうですね）

互いにアイコンタクトを取り、視線で会話をする。私の意思はシーマ大佐に伝わった。シーマ大佐も自身の意見が私に伝わったと確証している。

更にホシノ少佐が、マリーダ中尉に質問している。

「それで、何回したのですか？」

「え～と、１日で４０回程ですね」

「それは、不動閣下の寝室でですね？」

「はい。そうです。初めは寝室でディープキスをしながら、マスターが服越しにむ・・・」

「はい。マリーダ中尉。それ以上はダメよ。誰も夜の馴れ初めを聞きたい訳じゃにいからね。あと、ホシノ少佐。聞き出そうとしゃ、ダ・メ・よ！初体験の記憶は大切な思い出だから」

私はマリーダ中尉の口を片手で塞ぐ。危うく、喋りそうになっている。

聞き出そうとしたホシノ少佐を軽く叱ると、私達の胸元を見てホシノ少佐は悔しそうな表情をする。

「やはり、私ではダメなのでしょうか？3人と比べると胸も小さいですし」

「これかい？」

シーマ大佐が自身の胸を両腕で下から持ち上げる。たゆんとした膨らみが服越しに強調される。

「まあ、ホシノ少佐。成長には個人差がありますから。ホシノ少佐がもう少し大きくなれば、豊かになると思いますよ」

「そうだね。まあ、私は悠斗に揉んでもらってからサイズが1つ上に上がったからね。イルマはどうだい？」

マリーダ中尉がホシノ少佐をフォローするが、シーマ大佐の発言で再びホシノ少佐は落ち込む。

「まあ、私も2サイズ大きくなりましょ。けど、大きすぎても肩が凝るだけですよ」

「・・・ズルいです。どうやったら大きくなるのでしょう？」

「そうだね。牛乳を飲むと大きくなるって聞いたことがあるね」

私が不利な点を話すが、ホシノ少佐は全く聞く耳を持たなかった。

それから話し合いは、胸を大きくする方法に移っていくのだった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

私は今、国連本部ビルの執務室で面会をしている最中だ。ソファーに座り、私の正面に座っている白髪で髭を綺麗に揃えた男性が口を開く。

「ハマーン事務総長。先のメビウスの件は些かやりずぎなのでは？各国からメビウス脅威論が出かねませんぞ」

「分かっているさ。無論、不動悠斗大将にはきつく灸を据えてやったさ」

「そうですか。しかし、あの映像は誠の映像なのですか？私は信じられません」

「あれは間違いなく本当の映像だ。各国の解析でも本物だと確認されている」

はぁとため息を吐く男性。彼は信じていなかった様だ。

（だいたい、悠斗が偽りの映像を流してなんの特になるのだ？視察団を派遣するには、地域の安定が不可欠になる上に余計な出費になるだけだぞ。唯でさえ、米国は国連の顔を立ててやるとしか、考えていないのだからな）

私が内心で毒ついてると男性が口を開いた。

「正直な事を申しますと、このままでは不動閣下が人類の敵と認識される恐れがありますが、宜しいのですか？」

「ほう？なら、逆に問うがメビウス以外にハイヴを奪還出来る軍が何処にいるのだ？米国はG弾等と言う、地球を汚染する兵器を使用しするつもりだぞ。仮にその正で地球に人が住めなくなったらどうするつもりなのだ？答えてみよ、珠瀬玄丞斎事務次官！」

「ふぅ。確かにハマーン事務総長の仰る通り、メビウス以外G弾を用いずにハイヴを奪還出来る軍隊は存在しないでしょう。しかし、各国に要らぬ不信感を与えた行為は問題ですぞ！唯でさえ、人類は勝利する可能性が出てきたのです！ここに来て、メビウスを解散させようとする輩やメビウス脅威論を発生させないためにも、不動閣下には何かしらの厳罰を与えるべきかと」

静かにしかし、熱い口調で話す珠瀬玄丞斎事務次官。確かに、彼が言っている事は間違ってはいない。

（仕方あるまいか。今回は何等かの厳罰を与えるか。いや、待てよ。悠斗が私に寄越した作戦計画なら、この機会を上手く利用出来るな。悠斗め、こうなる事を見越してデザート・アロー作戦の前に作戦計画を寄越したのだな）

私はコーヒーを飲んでから、カップをテーブルに置く。

「珠瀬玄丞斎殿の意見は分かった。ならば、メビウスには明日より半年間の活動自粛命令を出す。異論はあるまい？」

「む？些か長すぎはしませんか？メビウスが長期離脱した場合、押し上げた戦線が後退する可能性がありますが？」

「不動閣下に理解させる為だ。不要な事をするなと。それとも、更に期限を伸ばすか？」

「いえ。そのままで結構です。ならば、私はこれで失礼します」

「ああ。分かった。わざわざご苦労だったな」

ソファーから立ち上がり執務室から珠瀬玄丞斎事務次官が退席していった。私は、執務机に置いてある電話機の受話器を取り、短縮ダイアルを押す。数コール後に電話が繋がった。

「はい。俺です」

「私だ。先程、珠瀬事務次官から厳しいお言葉があったぞ」

「やはりそうですか。それで、なんと言ってましたか？」

「ふ。よく言うな。今回の件とて計算済みの癖にな。まあ、早い話が自重しろだ。それと、処分を与えろだそうだ」

「ふふふ。まあ、そうですか。処分があるなら、これから新しく「理由」を作らなくて済みそうですな」

受話器の向こう側でクスクス笑う声が聞こえる。やはり、本人には予想済みだったらしい。

「まあ、良いさ。それより、処分だが私の一存で決めさせてもらった。言うぞ、メビウスは４月１日ずけで半年間の活動自粛を命ずる。良いな？」

「分かりました。半年間の自粛ですね。これはあくまで、ハイヴ攻略をするなと言うことですね？」

「ふ。大規模な軍事行動も禁止だ。ただし、例外としてＢＥＴＡに戦線が押し返されたりした場合は、即座に自粛命令を解除する。流石に、人類が再び敗走しそうになった場合は働いてもらうぞ」

「分かりました。あと、今からそちらのパソコンに送る、機体データを大東亜連合にくれてやってください。ハイヴ攻略を支援してくれたお礼ですと」

「分かった。必ず渡す。後は、大人しく戦力を増強してるんだな」

「分かりました。では、失礼します」

「ああ。愛してるぞ悠斗」

「俺もだよハマーン。じゃあな」

互いに電話を切る。私は受話器を置く。

（さて、戦線はどう推移するか。まあ、私は静かに見させてもらうか。後は、悠斗がニューヨークに来るのを待つばかりだ。今度は何処にデートに行こうか）

私は椅子に座り、外を見ながら悠斗とデートするプランを考えるのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

第九十一話（後書き）

う～ん。エース用の機体が決まらない作者です。　ギラ・ドーガが出てきたから、いっそのことギラ・ズールで良いかな？と考えてます。

感想、アドバイス、意見待ってます。

第九十二話（前書き）

ギリギリ完成。最近は寒い日が続いてキツイです。では、本編をどうぞ。

第九十二話

デラーズｓｉｄｅ

２０００年４月３日
秘密基地会議室

ワシは今、将官クラス会議に出席しておる。
今回の会議は悠斗より、緊急連絡事項があると聞いておる。会議の出席しゃは、ワシを筆頭に、ユーリー・ハスラー少将、ノイエン・ビッター少将、コンスコン少将、ギニアス・サハリン少将、ユーリ・ケラーネ少将、ロイ・ジェーコフ准将、不動悠斗大将が会議の出席者だ。ホシノ少佐が悠斗の斜め右後ろで待機しておる。悠斗が口を開く。

「皆、揃った様だな。なら、会議を開始する。今回の事案は先のデザート・アロー作戦及びデザート・ブリッツ作戦での損害とその影響だ。ホシノ少佐。説明を頼む」

「かしこまりました」

ホシノ少佐が中央スクリーンの側に立って一礼する。指し棒を伸ばしてスクリーンを指す。スクリーンには世界地図とハイヴの場所が映されておる。

「説明をさせていただきます。先月中旬に行われたデザート・アロー作戦とデザート・ブリッツ作戦では、対ＢＥＴＡ防衛線の外周部にあたるアンバールハイヴとボパールハイヴの攻略に成功しました。特に、ボパールハイヴを攻略した事により、Ｈ０１オリジナルハイヴへの橋頭堡を確保出来ました」

出席者達は首を縦に振る。ボパールハイヴを攻略するにあたっては、強行軍に等しかったからだ。　ホシノ少佐は説明を続ける。

「しかし、その反面メビウスが被った損害は決して小さくはありません。特に、２つのハイヴがある場所は砂漠地帯だけあって、砂漠戦に慣れていな部隊を中心にザク?やドライセン等の、主力ＭＳが４０００機近く中破又は大破に等しいダメージを受けました」

各出席者達は厳しい表情に変わる。先の砂漠戦で想定外の損害を受けたからだ。

（むぅ。報告を受けてはいたが、第一師団、第二師団は砂漠戦に慣れた隊員が多かったため、これと言った損害は被っていないが、第三師団、第四師団は慣れてない隊員が多かったため、損害が集中しておる。再編にはかなりの時間が掛かることは必須だな。せめてもの救いは、２つの作戦を結構したにも関わらず、死者が出なかった事だな）

ＭＳの損害は酷いものだが、反面パイロットが誰も死ななかったのは幸いだ。機体は生産すれば何とでもなるが、パイロットは別だ。特に経験豊富なベテランパイロットは育て上げるまで大変だ。かなりの経験を積まなくてはならないからだ。

出席者達から声が上がる。

「確かに先の作戦で被った損害は、決して無視できる者では無い」

「コンスコン少将の言う通りですな。しかし、再編にはかなりの時間が必要になるでしょうな」

「ユーリー・ハスラー少将の言う通りだ。少なくとも数ヶ月は掛かるだろう」

コンスコン、ユーリー、ビッターがそれぞれの見解を示す。ケラーネ少将が口を開く。

「確かに損害は無視出来ません。しかし、２つのハイヴを攻略した今こそ、ユーラシア大陸奪還に向けた大規模作戦を展開するべきではありませんか？」

「ユーリ少将。いたずらに戦線を拡大してはいけません。我々メビウスだけならば問題無いでしょうが、他の軍隊はこれ以上の戦線拡大は厳しいと思いますよ。それに、不動閣下の緊急連絡事項が非常に気になりますからね」

「う、う。確かに不動閣下の緊急連絡事項を聞いてからでも、判断は決して遅くは無いからな」

ギニアス少将に諭されて、ケラーネ少将は静かになる。会議に出席した全員の視線が不動閣下に集中する。

不動閣下が口を開いた。

「そうだったな。皆、落ち着いて聞いてもらい事がある。先月３１日にハマーン事務総長から、メビウスにある命令が下った。それは」

「「「「「「「「「「それは？」」」」」」」」」」

「半年間の活動自粛命令だ」

オウム返しの如く返事をすると、不動閣下の口から意外ないや予想外な返事が返ってきた。

皆、一様に固まった。

（なんだと！？何故、このタイミングで活動自粛命令が下ったのだ？まさか、米国からの圧力か？）

ワシは即座に気を取り戻し、脳を回転させる。

我に戻ったコンスコン少将が机に握り拳を叩き付ける。バンとした音で皆が我に変える。

「何故ですか！これだけの成果を上げてきた我々がなぜ！何故、活動自粛を命じられるのですか！」

「そうですぞ！納得がいきません！」

「これも、米国からの圧力だとでも言うのですか？！」

「許されない行為だ！断固とした態度を取るべきです！」

出席者達から怒号が飛ぶ。彼等が怒るのは無理はない。ワシとて怒りたい気持ちを理性で押さえておるからだ。

悠斗が口を開く。

「皆、静かにしてくれ。今回の命令は俺の責任だ。ボパールハイヴを生身でハイヴに突入した映像を公表したら、世界各国に要らぬ不

信感を与えてしまってな。それによる、メビウス脅威論を噴出させない為の措置なのだ」

「う！？しかし！」

「コンスコン少将。少し落ち着きたまえ。不動閣下の話をキチンと聞いてからでも反論は言える。今は、黙って話を聞くのだ」

ワシの諭しに、コンスコンは腕を組んで静かにする。他の出席者達も静かになり、会議室が静寂に包まれる。

「済まない。デラーズ閣下。さて、自粛命令を出された以上我々は大規模な作戦行動は取れなくなってしまった。しかし、これは予想していた範疇の事だ。悲観する必要は無い。寧ろ、チャンスなのだからな」

「チャンスか。悠斗よ。貴殿はどう動くつもりだ？」

ワシの問いかけに、悠斗はニヤリと笑った。

「はい。先に失った戦力の回復に努めると共に、次の作戦の準備に当てる期間にする予定です」

「次の作戦の準備だと？何時行うつもりなのだ？」

「そうですね。１０月末から１１月上旬の予定ですよ。日本帝国に駐留させているキリング・Ｊ・ダニガン中将が７月１日には全軍を率いて帰還します。しばらくは全軍将兵を休ませます。そして、星１号計画を開始するつもりです」

「星1号計画？」

ワシの初めて聞く作戦名が出てきた。悠斗はニヤリと笑らう。

「皆さん、これを見てくれ。これが星1号計画の第二段階に当たる作戦の予定表だ」

ワシの目の前にスクリーンが表示される。

皆、食い入る様にスクリーンに映し出された、作戦予定表を見る。

それから、自粛命令期間中は全軍に休息を与え、次の作戦に備えるようにする等の事が会議で決定されるのであった。

デラーズｓｉｄｅｏｕｔ

悠斗ｓｉｄｅ

会議を終えた俺は、執務室の自分の席でパソコンを開いてエース用の機体の選定を行っている。

モニターには機体の種類が映し出されている。

（やはり、ギラ・ドーガと共通パーツを多数使っているギラ・ズールが一番良いかも知れないな。パイロット達の個々の判断で、バックパックを変更する様にすればありとあらゆる戦場に対応出来るし

な。パイロットによっては高機動パックをメインにする隊員もいるだろうしな。強化パーツはゲルググと同じで良いな・・・待てよ。実弾装備があるから、無限弾薬回復システムを追加しておかなきゃな」

いろいろ検討してみたが、バックパックを変更するだけであらゆる戦場に対応出来る機体が一番良いのだ。

（まあ、今までパイロット達はジオン系の機体が主流だったからな。今更、操作系統が違う機体を覚えるのは手間がかかり過ぎるからな）

俺はマウスを操作して画面をクリックする。
ＯＫのコマンドを押す。モニターに生産ラインの状況が表示された。

ギラ・ズール　在庫数０機生産目標１００００機

生産基地　　秘密基地

ギラ・ズール（袖付き仕様）　在庫数０機　　生産目標１００００機

生産基地　　秘密基地

と表示される。俺は生産ラインの表示を消して違うファイルをクリックする。画面に暗証番号を入力してくださいと表示される。俺はキーボードてパスワードを入力する。　ファイルが開かれる。
（さて、予想通り活動自粛命令は来たか。次は大規模作戦に向けた準備を本格化しなきゃな）

各国の上層部に流した映像の影響はある程度予測はしていた。また、何かしらの処分が来ることも予期してはいたのだ。

俺はパソコンのモニターを見つめる。

（先ずは、大陸奪還に向けた準備だな。アドラステア級を主力としたモドラット艦隊の準備は始めたしな。後は、兵士やパイロット達には英気を養ってもらうために今回の命令を上手く活用させてもらうからな）

俺は内心でそんなことを考えながら、地球奪還計画通称星1号計画のスケジュールを調整したり改定するのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

シャアｓｉｄｅ

私は今、基地の格納庫で自機の機体のチェックを行っている。先の作戦で私の機体も随分無茶な機動を行ってしまったからだ。整備兵がパソコンを開いて説明してくれる。

「シャア大佐。フルアーマー百式改の関節等にはこれたと言った、損傷はありません」

「なに？大気圏内でロール等を、行ったにも関わらずにか？」

「はい。おそらくナノスキン装甲のおかげでしょう。機体のデータには損傷した時のデータが残っていますが、実機チェックでは何も損傷はありませんでしたから」

「そうか。分かった。わざわざすまなかったな」

いえ。と言って整備兵が私の側から離れる。私は愛機を見上げる。

（ゲルググとは比べ物にならないくらい、操作しやすい機体だ。色が派手だが私向けの機体をまわしてもらったな）

私が考えに耽っていると、突然肩に手を置かれた。

「キャスバル様。探しましたぞ」

「む！？その声はランバ・ラル大佐か！」

私が振り替えると、ランバ・ラル大佐がいた。彼が私の隣に来る。

「私はキャスバル・レム・ダイクンでは無い。メビウスのシャア・アズナブル大佐だ」

「ふふふ。なら、そう言う事にしておきましょう。それより、先程不動閣下から命令が発令されましたぞ」

「なに？基地に帰還したばかりだぞ？なにか不測の事態が発生したのか！？」

「いえ。それが、メビウスの活動自粛命令が発令されたため、メビウスは暫くのあいだ大規模な軍事的活動を休止すると説明がありま

したぞ」

それだけ言ってランバ・ラル大佐は腕を組んで静かになり、ハンガーに搬入されてくる機体を見つめている。

「そうか。まあ、休める事に越したことは無いか。だが、不動閣下は活動休止してるあいだはどうするつもりなのだろうか？」

「さあ？私には秤かねます。少なくとも、何かしらの考えがあるのでしょう」

私も腕を組んでハンガーに搬入されてくる機体を見る。ちょうど青いゲルググがハンガーに固定される所だ。

「私の機体ですな。シャア大佐の百式改に比べると、圧倒的に旧式な機体ですがな」

「何を仰る。ラル大佐の腕前ならば、旧式や新型等関係あるまい」

「さて。どうでしょうかな？私も久しぶりに光線級のレーザーを、直撃してしまいましたからな。まあ、Ｉフィールドのおかげで事なきをえましたからな」

「なら、機体の反応が追い付いていないのでしょう。新型機の要望は、出しておられないのですか？」

「いえ。出してはいるのですがな。不動閣下も新型機の配備に悩んでいる様ですしな」

ラル大佐が手すりに凭れ掛かる。私も肘を置く。すると、奥から此

方に向かって金髪の男が歩い来た。彼は私達の前に来て、敬礼をする。私達も返礼する。

「お疲れ様です！シャア大佐。ランバ・ラル大佐。お二人ともどうしたのですか？」

「ジョニー・ライデン中佐か。なに、私とシャア大佐は新型機の配備がどうなるか話していたのだよ」

「そうでしたか。まあ、確かにシャア大佐の百式改と比べると、俺やラル大佐が乗っているゲルググでは、性能が違い過ぎますからね」

気さくな感じで話すライデン中佐。話し方は軽そうな優男に感じるが、身に纏うオーラはエースパイロットの気質を醸し出していた。

（なるほど。彼がよく私と間違われるエースパイロットか。今でも間違われるにもかかわらず、相変わらず私をリスペクトしてくれていて、乗機を赤くしている私派の青年だったな。いずれ私が将軍になったら、是非とも欲しい人材だ）

私が内心で彼を評価していると、私達が話をしているハンガーの渡り廊下の入口から、渋い男がやって来た。

「む？これは皆さん。お疲れ様です。何故、こんな所にお集まりになってるのですか？」

「お！マツナガ中佐じゃないか！お疲れ」

「久しぶりだなマツナガ中佐」

「む？これはこれは。ランバ・ラル大佐ではありませんか。お久しぶりです。息災そうで何よりかと」

「そちらもな。なに、話は聞いてるぞ。随分派手に暴れたそうじゃないか」

「はっはは。いやはや、お恥ずかしいですな。ラル大佐に比べれば私など、まだまだですぞ」

ライデン中佐が挨拶する。ランバ・ラルとマツナガ中佐が久しぶりの再開を楽しんでいる。

（てか、何故こんなに暑苦しくなったのだ？元々私は機体のチェックに来ただけなのだが！？）

私はため息を吐く。すると、ライデン中佐が私の肩に手を置いた。

「なに、辛気くさい顔してるんですか？シャア大佐？」

「いや。何故、こんな風になってしまったのだと考えていたのだよ」

ラルとマツナガ中佐を見ると、思い出話に花を咲かせている。暫くは終わりそうに無い。

ラルとマツナガ中佐の後側から銀髪の髪を結った男が歩いて来た。

「む！お疲れ様です。何故こんなところで屯（たむろ）しているのですか？」

「お！ガトー中佐！お疲れ様！俺は機体のチェックに来てたんだ。そしたら、ラル大佐とシャア大佐が居たんだ」

私は姿勢を只してガトー中佐と向き合う。互いの視線が重なる。

「ほう。久しぶりだなガトー中佐。ア・バオア・クーの時以来だな」

「は！お久しぶりです。あの時はお世話になりました！それで、一体どうしてこんな所に集まっているのですか？」

「さあ？私にも分からん。元々、私は機体のチェックに来ていたのだが、それが終わって戻ろうとしていたら、ラル大佐に捕まってな」

ガトー中佐は「ああ」と言って納得した表情をする。私の隣でマツナガ中佐とラルが楽しげに武勇伝を話し合っている。

すると、整備兵の大声がハンガーに響く。

「新型機が入ってくるぞぉぉぉぉ！！！ハンガー開けろぉぉぉ！！固定が完了次第、コックピット周りから整備を開始するんだ！」

「「「「「「「「「了解！アストナージ整備班長！！」」」」」」」」」」

整備兵達の返事と共にハンガーに新型機が固定される。表面を覆っていたシートが外され、外観が露になる。機体のカラーは緑。ザクを彷彿させるような頭部に型のシールド。左肩は旧ザクのスパイクの無い丸みを帯びたショルダーだ。

「あれが、新型機ですか。全体的にはザクを彷彿させるな」

「そうですな。おや？奥のもう一機はやや違う様ですぞ」

もう一機の機体もシートを外される。
最初の機体と違いシールドが左腕に装備されており、両肩もスパイクになっている。

（後の機体はギラ・ドーガか。だが、前の機体は私は知らないぞ。あれは何の機体なのだ？）

私達の側を整備兵が通り過ぎようとする。ライデン中佐が整備兵を呼び止める。

「おーい。そこの整備兵。ちょっといいか？」

「あ？はい！なんでしょうか？」

「あの、２体の新型機はなんて言う機体なんだ？」

「ああ。あの２機ですか？手前がギラ・ズール。奥がギラ・ドーガです。ギラ・ドーガは量産機ですし、ギラ・ズールはエースパイロット用の機体だそうです」

「そうか。分かった。悪かったな引き留めて」

いえ。と言って整備兵は走って行った。私達はギラ・ズールとギラ・ドーガを見る。

「ほお。あれが新型か。どれ程の性能か気になりますな」

「まあ、あれが俺達エース用の機体か。乗るのが楽しみだな」

「ほぉ。なかなか、私向けの機体が来たな」

「まあ、今はまだ乗れませんからな。それより、此処に何時までも居るのは整備兵達の邪魔になりますゆえ」

マツナガ中佐が移動を促す。確かに邪魔になってしまっているようだ。

私達は格納庫を後にして、ラルが奢ってくれるとの事で全員で酒を飲みに行くことになるのだった。

シャアｓｉｄｅｏｕｔ

第九十二話（後書き）

風邪をひいてしまいました。やはり、疲れているときに夜更かしはしてはいけない様です。なかなか、風邪が治りません。　読者の皆さんも気を付けてください。

感想待ってます。

第九十三話（前書き）

若干時間を越えてしまいましたが完成しました。では、本編をどうぞ。

第九十三話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年４月２９日
秘密基地執務室

メビウスの活動自粛命令からもうすぐ一月が経つ。最初の頃は活動自粛命令に反発する者もいたが、今では命令に意見する者はいなくなった。
まあ、公に休めと言われている様なものなのだから、文句を言っても仕方の無いことだからだ。寧ろ、最近はバカンスを与えられたと解釈する兵が殆んどになってしまった。通常勤務はあるものの、基本的に秘密基地に居るあいだは極めて平和なのだ。大半の兵や士官は通常勤務が終わると街に繰り出して、遊んだり買い物したりと自由に日々を過ごしている。
まあ、一部には例外もあるのだからな。その、例外の中に俺は入っている。俺は今、執務室のデスクで書類に目を通している。書類の内容は、大東亜連合に譲渡した陸戦型ジムの評価報告書だ。

（ふむ。まあ、ある程度の予測は立てていたが、此処まで反響が大きいか）

陸戦型ジムの評価は凄まじいものだった。
先のボパールハイヴ跡地に建設中のボパール基地に向けて、マシュ

ハドハイヴよりＢＥＴＡ群一個旅団が進行してくるが、陸戦型ジム二個連隊とザウート三個連隊の部隊で迎撃に当たり、損害皆無でＢＥＴＡ群一個旅団を殲滅させる事に成功したのだ。この戦果に、大東亜連合の上層部は歓喜したとの事だ。また、前線の陸戦型ジムのパイロット達からは陸戦型ジムは非常に使いやすい機体との評判だ。

（やはり、ザウートと違い近接戦闘が出来るおかげで、前衛職の連中からは受けが良いな。シールドでもＢＥＴＡを攻撃して撃破出来るしな）

陸戦型ジムのバトルシールドは、今でも戦術機で使用されている多目的追加装甲と違い、爆薬を用いてＢＥＴＡを撃破するのではなく、そのまま直にシールドの先端でＢＥＴＡを刺したりすることが可能なのだ。また、追加改造を施した事により追加装備された胸部マルチランチャーは、戦車級以下の小型種を撃破するのに丁度よいらしい。

（まあ、前線で陸戦型ジムが活躍してくれて何よりだ。まあ、暫くはインド亜戦線は問題なく持ちこたえられるだろうな。寧ろ、問題があるとすればアラビア戦線の方か）

手に持っていた、陸戦型ジムの評価報告書を机に置き、アラビア半島戦線の状況が報告された書類を手に取り目を通していく。

（やはり、砂漠の戦線の維持は厳しいのが実情が）

報告書によると、既にマシュハドハイヴからアンバールハイヴに向けて、２回の進行があったと記載されている。

いずれの戦いも、宇宙衛星から情報が即座に伝達されたため、国連軍は即座に迎撃体制を整えて事なきをえたが、ＢＥＴＡとの二度に

わたる交戦でかなりの損害が発生したとの事だ。
大東亜連合との戦力差を鑑みても、かなり厳しい状況になった。
下記の報告を受けて、漸く国連総軍でもＭＳの実験的な導入を検討するかしないかの論議に入ったらばかりらしい。

（まあ、国連総軍全体にＭＳを配備するには、少なくとも数年は掛かるだろうな。資金は無論、管轄が広すぎるのだ。全ての地域にＭＳを直ぐに配備出来る訳では無いからな）

実際、各国の軍においてもＭＳの配備が優先されるのは、最前線の部隊が基本になる。ソ連がいい例だが、ザウートは最前線の部隊に集中して配備されている。安定している戦線（後方）にはザウートは１機も配備されていないのだ。だからこそ、最前線はゆっくりとだが後退してはいるが、ブリッジスが初めてソ連に行った頃の様な逼迫した状態にはならないだろう。もしかしたら、逆にハイヴを攻略してるかも知れない。

（まあ、どうなるかは分からないがな。だが、ハイヴの建設は知識通りになっているしな）

俺は新たな書類を手に取る。この書類にはソ連領内に新しいハイヴ（Ｈ２５ヴェルホヤンスクハイヴ）が建設されたと記されている。

（やはり、ＢＥＴＡも黙って指を銜えている訳では無いようだな。２つのハイヴを奪還しようと進行を試みるだけではなく、新たにハイヴを建設して勢力の拡大に勤めている様だしな。この分だと、今年中にシベリアはＢＥＴＡに占領されるかも知れないな。まあ、俺は動けないからな。暫くは推移を見守るしか出来ないからな）

俺は書類を机の上に置いて、椅子から立ち上がりコーヒーを淹れる

のであった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

マスターアジアｓｉｄｅ

ワシは今、秘密基地にある多目的訓練室で修行を行っておる。ワシの眼下には女性達と二人の子供が肩で息をしながら、地面に倒れておる。

「どうした?この程度の修行で音を上げるか!それでも貴様らは軍人か!!」

「く!流石にまだ、寝てらんないね!この、シーマ様が音を上げてなるもんか!」

長い髪を髪止めでポニーテールにして、タンクトップで迷彩ズボンを掃いたシーマ・ガラハウがボロボロになりながらも立ち上がる。

「そうです!私も寝てる暇なんてありません!」

シーマに感化されて、先程まで倒れていたイルマ・テスレフもなん

とか立ち上がる。身体に付いた土がポロポロと落ちる。

「く！全てはマスターの為に！私は敗北する訳にはいかない！」

立ち上がろうとするが力が入らないのか方膝を地面に着けながらも、必死に立ち上がろうとするマリーダ・クルス。

「ううぅ。マスターアジアの修行は厳しいよ！」

「なに、メソメソしてるんだ！あたしらも寝そべってる場合じゃないよ！さあ、プル！私が肩を貸すから立つんだ！」

プルに肩を貸して立ち上がるプルとプルツー。

プルは軽く涙目になってはいるが、ワシをキチンと見ておる。目には闘志が宿っていた。

（うむ。まだ、皆の闘志は失われてはおらんようだな。悠斗に頼まれたのは、あくまで自身の身は自分で守れる程の強さにして欲しいとの事だったな。この分なら、あと数年も修行をすれば、少なくとも自分の身をキチンと守れる様になるだろう）

ワシは内心で皆を評価する。皆、厳しい修行に泣き言は言うが、諦めずに付いてきて来ておる。

ワシは新たな修行を課すことにした。

「よろしい。ならば、次の修行に移る。今までしてきたのは、あくまでも基礎に過ぎぬ。次の修行は死角からの攻撃をどう防ぐかだ。ワシが死角から攻撃をする。それを見事防いでみよ！まずは、シーマからだ！他の者は見ておるのだ！シーマ！準備はよいか！？」

「ああ！今までの修行を生かしてみせるよ！」

「ならば、いくぞぉぉぉ！」

ワシは立っていた岩の上から、素早く移動してシーマの真後ろに周り、シーマがギリギリ反応が出来る位の速さの拳を放つ。

「！チ！」

シーマはワシが背後に回ったのに気が付いて、即座に両腕をクロスさせてワシの拳をガードするも、威力を殺しきれずに少し宙に浮いて地面に倒れた。

「どうした！？この程度の一撃で地面に平伏すのか！！」

「ち！なめんじゃないよ！！」

シーマが立ち上がって、ワシに蹴りを放つ。女性の蹴りはしなやかでムチの様な蹴りになるため、男の蹴りに比べるとやや弱くなってしまうが、シーマの蹴りは充分な威力と重さを持っていた。
ワシはその蹴りを人差し指で受け止める。

「うむ。良い蹴りだ。ガンダムファイターには効かんだろうが、人間ならば用意に骨を粉砕出来る威力になったな」

「ち！相変わらず化け物のだね！私の蹴りを指一本で止めるなんてね！」

シーマが脚を戻してバックステップで間合いを取る。文句を言っているが普通の軍人の蹴りが相手の骨を折るのならば、シーマを始め

とする修行をつけている者達は、蹴りで骨を粉砕するまでに強くなったのだ。

「何を言っておる。充分強くなって来ておる。後は、お主らが気ざしを習得すれば少なくとも刺客から悠斗を守れる程になるわ！」

「そうかい！なら、なんとしても習得しなくちゃね！」

「ええ！悠斗ばかりに守ってもらうのは嫌ですからね！」

「マスターを守るのは、我々の役目ですからね！」

「はぁ。どんどん人間離れしてるような気がするよ～」

「言うなプル。私もそう思ってた所だよ」

皆が様々な事を言っている。悠斗が愛されている証拠であろう。

（ふふ。悠斗めがやるの。女性からこれ程好かれるとわな。我が弟子ながらたいした者よ）

ワシは内心で感心しながらも、再び構える。
シーマも構えをとった。

「さあ、お喋りは少し止めるぞ。行くぞぉぉぉ！シーマぁぁぁ！」

「来なよ！今度は迎撃してみせるよ！」

ワシは地面を蹴りシーマに向かって駆け出す。
それから暫くの間、多目的訓練室には悲鳴が響くのであった。

マスターアジアｓｉｄｅｏｕｔ

バーニィｓｉｄｅ

俺は今、格納庫で自機のザクを洗っている。今日の訓練で大量にペイント弾を射ち込まれた正で、機体がシルバーからイエローに変わっていた。特にコックピットの辺りは酷いものだ。
必死にブラシでペイントを落とす。

（ちっくしょ～。ガルシアさんやアンディさんは容赦無さすぎでしょ！いくら対人訓練とはいえ、いくらなんでも俺だけに集中して攻めてくるなんてずるい！）

内心で今日の訓練内容に文句を言う。手を止めて、額に出てきた汗を首に掛けたタオルで拭き取る。周りには同じように機体を洗っているパイロットがいる。皆、訓練でペイント弾が命中した証拠だ。

（はあ、まあ、暫くは実戦が無いからな。皆、腕を落とさない為に一生懸命訓練に励んでるんだろうな。俺も戦死したくないからな。訓練に励んでるつもりなんだけどな）

いくら訓練に励んでも、ベテランパイロット達に毎日ボコボコにさ

れていれば流石にヘコむ。俺はため息を吐きながらも、再びモップで機体を擦る。

「よう。バーニィ。正が出てるな」

「え？って、シュタイナー隊長。どうしたんですか？」

声をかけられたので振り替えると、そこにはジュースが入ったペットボトルを２つ手に持ったシュタイナー隊長がいた。

「ほら、飲みな」

「あ、どうも。すいません」

シュタイナー隊長が投げたペットボトルを両手でキャッチする。キャップを開けてジュースを飲む。汗をかいて乾いた喉を冷えたジュースが潤していく。

「ふー。上手いです」

「そうだろう。体を動かした後は特に上手く感じるからな。それよりバーニィ」

「はい。なんでしょうか？」

「今日の対人訓練をどう感じた？」

真剣な表情で俺に問いかけるシュタイナー隊長。　恐らくは何かを計っているのかも知れない。

「そうですね。正直対ＢＥＴＡ訓練ばかりしてきた俺には怖かったですね。いくらペイント弾を使っているとはいえ、実戦だったら死んでると考えるとやっぱり怖かったです」

「そうか。バーニィ。そう感じたお前は正常なんだ。俺だって人を殺すのは嫌だ。だが、任務によっては人を殺さなければならない任務もある。その事を忘れるなよ」

「はい。出来れば仲間である、人類に銃を向ける事が無いといいんですけどね」

シュタイナー隊長が俺の肩を叩いた。

「俺もそう思う。まあ、そうならないことを祈るだけさ。バーニィ、洗うの頑張れよ」

「はい！分かりました！」

シュタイナー隊長はそれだけ言って格納庫を去っていった。俺も再びモップで機体を洗うのだった。

バーニィｓｉｄｅｏｕｔ

第九十三話（後書き）

暫くはほのぼの路線がメインになります。

感想待ってます。

第九十四話（前書き）

完成。短いながら投稿しました。

第九十四話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年5月2日
アメリカ合衆国ニューヨーク国連本部ビル

俺は今、ニューヨークの国連本部ビルの国連事務総長の執務室にいる。
秘密基地での仕事が一通り済んだため、ハマーンに会いに来たのだ。
無論、表向きの理由はアナハイム社、モルゲンレーテ社の北米支社の査察と言うことになってはいる。まあ、一人で来てる時点で査察もクソも無いと、言われればそれまでなんだけどな。
ソファーに座りハマーンと向かい合っている。

「コーヒーをどうぞ」

「ああ。ありがとう」

「ああ。ありがとう。暫く下がっていてくれ。不動閣下と話があるのでな」

「はい。かしこまりました」

ハマーンの秘書がコーヒーを出してくれる。彼女はコーヒーを出し

終えると、一礼して部屋から退席していった。
俺はテーブルに置かれたコーヒーカップを手に取る。コーヒーの香りが鼻をくすぐる。コーヒーを口にすると、コーヒー特有の苦味が口に広がる。

「どうだ？天然物のコーヒーだぞ？」

「まあ、美味しいですな。飲み慣れていますからね」

「ふふ。そう言えばそうだな。メビウスでは天然物が当たり前なんだからな」

ニッコリと微笑むハマーン。普段はキリッとした表情が多いが、二人っきりの際に見せる笑顔は綺麗だ。

（う～ん。久しぶりにあったせいなのか、前よりも妖艶で綺麗に見えるな）

前に会った時とは違い、今日はほんのりと甘い香りがする。恐らくは、香水の香りなのだろう。
俺はコーヒーカップを手に持ったまま、ハマーンを見つめる。

「どうした悠斗？私の顔に何か付いているのか？」

「いや。何も付いてはいないよ。まあ、ハマーンに見とれていたんだ。久しぶりに直接会ったら、凄く綺麗になってたからな」

「ふふ。全く。今更何を言っているんだ？私と悠斗は恋人同士なのだぞ？恋人が会いに来るのに、綺麗にしない女が何処にいると言うのだ？」

馬鹿者めと言いながら、コーヒーを口にするハマーン。ほんのりとだが、ハマーンの頬が紅く染まっていた。
俺もコーヒーを口にする。

「そう言えば悠斗。活動自粛になった事に対する反応はどうだ？流石に反対意見が無かった訳ではあるまい？」

「うん？ああ。まあ、コンスコン少将や若手将校から抗議するべきとの意見　も出たが、最終的に納得してもらった。何分、先の２つの攻略作戦で、メビウスのＭＳ部隊にかなりの損害が発生したからな。戦力の回復を優先したかったから、今回の自粛命令は渡りに船だったな」

まあ、戦力の回復なんかは２～３日あれば出来るが、兵士やパイロット達に充分な休息を与えたかったと言う理由もある。機体は壊れてもいくらでも生産すればいいが、経験豊富なベテランパイロット達は簡単には作れない。だからこそ、彼等には確りと休んでもらいたのだ。

「そうか。ならば、今回の命令は逆に良い結果をもたらしたか。それで、次はどう動くつもりだ？自粛中に戦力を蓄えているだけではあるまい？」

ニヤリと笑うハマーン。大方、自粛期間終了後の俺の行動予測は立てているはずだ。
俺は飲み終わったコーヒーカップをテーブルに置く。

「まあ、星一号計画に則り大規模反攻作戦を決行するつもりです」

「そうか。それで、目標は何処にするつもりだ？」

「それは内緒です。生憎と機密事項です故に、おいそれと軍事機密を話す訳にはいきませんから」

「そうか。まあ、構わないさ。メビウスがハイヴを1つ攻略する度に、人類の勝利する可能性が一歩近付くのだからな」

そう言ってハマーンはコーヒーカップをテーブルに置いた。

「そう言えば、陸戦型ジムの活躍は素晴らしいらしいな。大東亜連合に参加している国々の大使から、感謝状がメビウス宛に届いているぞ」

「まあ、陸戦型ジムが活躍するのは予想出来てましたから。まあ、反響はザウート以上になりましたから」

おかげで大東亜連合から追加の注文は来るし、各国も購入に意欲を示しているしな。会社の経営者としては嬉しい限りだ。

「そうか。確かに国連総軍でも、陸戦型ジムを配備するべきとの意見は出ているからな。まあ、全軍に配備するつもりなら、少なくとも数年は掛かるだろう。それまでに、それ以上の機体を開発、販売されては購入した意味が無くなってしまう。まあ、仮に国連総軍に配備するとしても試験的運用に限られるだろう」

「そうですね。国連総軍の規模を考えると、厳しいでしょうね。戦術機ですら未だに旧式の第一世代機のファントムが活動してますからね」

現段階でメビウスを除くと、ＭＳを正式に採用しているのはソビエト、大東亜連合、欧州連合、位なものだ。また、試験採用に踏み切ろうとしてるのは統一中華戦線、オーストラリア、日本帝国、アフリカ連合の一部に留まっている。購入を予定していない国だが、米国はＧ弾が開発予算の殆どを持っていってるため、Ｆ－２２の配備すら遅らせてる始末なため、それより高価なＭＳを購入することはないだろう。

「まあ、ＭＳの配備の話はこれで終わりにしよう。話していたらキリが無いからな。それより悠斗、今晩時間は空いてるか？」

「ええ。大丈夫ですが？どうかしました？」

「なら、私の自宅でディナーに招待しようと思ったのだ。どうかな？」

「構いませんよ。寧ろ、たまにはハマーンと一緒に夜を過ごしたいからな。何時ごろ訪ねましょうか？」

「ああ。夕方６時頃に来てくれ。場所は覚えているよな？」

「ええ。大丈夫です。では、俺はそろそろ失礼させてもらいます。また、夜にお会いしましょう」

「ああ。また、後でな」

俺とハマーンはソファーから立ち上がる。俺はそのまま、ドアまで移動する。

「悠斗」

「うん？」

声をかけられたので振り替えると、俺の唇が塞がれた。ハマーンがキスをしてきたのだ。

「う！・・ん・・ち・・・・・・ちゅ・・・ちゅぱ・・ん・・く・・ふ」

執務室に水音が響く。ハマーンは俺を抱き締めている。俺も優しくハマーンを抱き締める。

やがてどちらからともなく唇が離れる。

ハマーンが俺の顔を覗きこむ。頬がやや紅く染まっている。潤んだ瞳が俺を見つめている。

「悠斗」

「ハマーン」

互いに言葉は入らなかった。俺はハマーンを抱き締めながら、もう一度熱い口付けをするのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンの秘書ｓｉｄｅ

どうも初めまして。私はハマーン・カーン事務総長の秘書です。
普段は、国連本部ビルでハマーン事務総長の秘書としてお仕事をさせて頂いてます。
今日は珍しい事に、国連外郭部隊メビウスの総司令官である不動悠斗大将閣下が来ています。滅多に国連本部に現れない人物です。前に初めてお会いしたのは、昨年の事でした。噂では非常にイケメンと聞いていましたが、噂以上に素敵な方でしたのを覚えています。
同僚達に話したら、非常に羨ましがられました。　と、話がそれましたね。　午前中に不動閣下は、ハマーン事務総長との会談を終えて戻られました。　不動閣下が退席した後、私は事務総長の執務室に入っていつもの様に仕事をしています。
普段ならキリッとしたハマーン事務総長なのですが、今日は少し様子が違う気がします。なんと言うか、何処と無く違う気がするのです。無論、仕事はテキパキとこなしています。私は思いきって口を開きました。

「ハマーン事務総長」

「うん？どうした？なにか、書類に不備が見つかったか？」

「いえ。そう言った訳では無いのですが、何か良いことがありましたか？
なんだか、不動閣下が退席されてから機嫌が良い様に見えたので」

「まあ、確かに良いことがあったな。不動閣下のおかげて、地球上からハイヴを3つも消すことが出来たのだからな。私の肩の荷も少しは軽くなったからな」

そう言ってニッコリと微笑むハマーン事務総長。同性ながら見惚れてしまいそうな位綺麗な微笑みでした。

「そうですね。今まではＢＥＴＡに戦線を押し上げられて、ただ敗北を繰り返していた大陸戦線が、攻勢に出始めましたしね。ただ、シベリア戦線は後退の一途を辿っていますから、どうにか手を打たないと北米大陸も危険にさらされますよ？」

「確かにな。シベリア戦線はソビエトの管轄だ、迂闊には介入出来ないからな。仮に介入するなら、メビウス位なものだな。不動閣下はソビエトと個人的な繋がりがあるからな。まあ、大陸戦線を押し上げるつもりなら、次に攻略する必要がある場所と言えば」

「Ｈ０１オリジナルハイヴカシュガルですね。カシュガルさえ落とせば、大陸で一気に反抗作戦が結構されるでしょう」

地球上に最初に建設されたハイヴであり、人類の最大攻略目標である。

このハイヴを攻略する事が出来れば、人類の勝利が見えて来るのだ。

「そうだ。だからこそ、メビウスには頑張ってもらわねばならん。無論、戦場で戦っている各国の軍人達にも奮起してもらうがな」

「そうですね。彼等が頑張ってくれているからこそ、私達は安全圏で生活していられるのですからね」

「そうだ。さて、雑談はこれくらいにして仕事に戻ろうか」

「はい」

ハマーン事務総長は再び書類に向かうのであった。

（あ！良いことの内容を聞くのを忘れていました！）

チラリとハマーン事務総長を見ると、とても真剣な表情で書類に目を通している。とても、話しかけられる状態では無かった。

（まあ、いいか。今度機会が有ったら聞けばいいや）

私は目の前の書類を整理して、ハマーン事務総長の机に置く作業に取りかかるのであった。

ハマーンの秘書ｓｉｄｅｏｕｔ

ハマーンｓｉｄｅ

私は今、悠斗と共に今はベッドで横になっている。互いに一糸纏わぬ生まれたままの姿だ。

時計を見ると時刻は夜中の１時を回った所だ。

（うん？少し眠ってしまった様だな。久し振りに行った夜伽は激しかったな）

悠斗との夜伽はついつい激しくなってしまった。　首を動かして悠斗を見ると、すやすやと眠っていた。

（全く。眠っていると可愛らしい顔だな。まあ、起きているときはカッコイイ男だかな）

私は悠斗の頭をそっと抱き寄せる。悠斗の柔らかい青い髪が私の肌に当たる。私はそっと髪を撫でる。

（ふふふ。普段は聡明で闘士に溢れた男だ。眠っていれば関係ないな。私にとっては愛しい男であり、大切な未来の旦那様だ）

う、う～んと言って悠斗が私を抱き締める。本人は私を抱き締めながら苦しげな表情で眠っている。

「安心しろ。私は何処にも行かない。ずっと側にいるからな」

そう言って私は悠斗の頭をそっと撫でる。悠斗は私を抱き締める力を緩める。表情はさっきとうってかわって安らかな表情ですやすやと眠っている。

（ふふふ。安心しているのだな悠斗。確か、悠斗は命を狙われたと言っていたからな）

悠斗自身、決して敵は多くは無いが存在する。無論、簡単に命を奪われる様な悠斗では無いが、メビウスの存在を煙たがる輩がいるのは確かだ。

（悠斗の双肩には人類の未来が掛かっているからな。悠斗はＢＥＴ

Aを駆逐する事だけに集中してもらわないとな。政治的な話は私がかたずければ何も問題は無い。だからこそ、メビウスには新たな予算と権限が必要だ。極東の魔女や米国の進める計画等よりも確実性のある計画を作る為にな）

私は内心で強い決意を固める。やがて、再び睡魔が私を襲ってくる。私は悠斗の頭を抱き締めながら睡魔に抗うことなく、眠りにつくのだった。

ハマーンｓｉｄｅｏｕｔ

第九十四話（後書き）

飲み会で酔っぱらいながら投稿しました。

感想待ってます。

第九十五話（前書き）

投稿が遅れました。申し訳ありません。仕事が何分忙しかったので２つの作品を同時進行できませんでした。では、本編をどうぞ。

第九十五話

ジョニーside

２０００年６月４日秘密基地シミュレータールーム

俺は今、新型機のギラ・ズールをシミュレーターで体感している最中だ。

（なかなか良い機体だな。操作性に問題は無いし、反応も良いな！）

スロットペダルを踏み込み、更にスピードを上げる。様々な軌道を描きながら敵の攻撃を回避する。敵機はジェガンとスターク・ジェガンとか言う機体だ。相手の機体も格段と性能が良い機体だ。スターク・ジェガンからミサイルが発射される。３発のミサイルが俺を追跡してくる。頭上からビームライフルの軌跡が俺の居た場所を通過して行く。

（チッ！上からもかよ！だが、甘い！）

俺はビームライフルを発射する。上から攻めてくるジェガン３機をビームライフルでコックピットを撃ち抜いて撃破する。ミサイルはデブリに衝突させて回避する。デブリに命中したミサイルが爆発を起こす。

（チ！後方支援機は邪魔だな。デブリに隠れて上手く射線には入らないようにしてくるしな！）

ギラ・ズールのスラスターを吹かして一気に、スターク・ジェガンに突撃する。ビームライフルを射ってくるが、ロールで回避してからロックオンした。

（悪いが墜ちな！）

ギラ・ズールのビームライフルの光がスターク・ジェガンを貫いた。スターク・ジェガンは爆発して木っ端微塵になった。

（良し。これで終わりか？）

周辺にいたＭＳは全て撃破した。俺は、再度レーダーを確認すると、いきなり機体内に警報音が鳴り響いた。

（なんだ！？って！チ！）

機体を緊急回避させる。俺が先程までいた場所にビームの閃光が走った。　更に、高速で移動する青い戦闘機が駆け抜けて行った。

「野郎！逃がすかよ！」

高速で移動する青い戦闘機をロックオンして、ビームライフルを射つが青い戦闘機になかなか当たらない。ビームライフルを避けた戦闘機がいきなりＭＳに変形した。
手に持ったビームライフルを構えていた。

（やべ！クソ！そっちがその気なら！）

俺は青いＭＳのビームを回避しながら接近する。　左手に持ったシュツムルファウストを発射する。　青いＭＳはシュツムルファウストを回避する。

「もらった！」

スラスターを全開にして、青いＭＳに急接近する。右手に持ったビームホークで相手の機体に切りかかる。青いＭＳもビームサーベルを抜こうとするが、俺は相手のＭＳの両腕をビームホークで切り裂く。肘から下を切られた青いＭＳは間合いを取るために、下がろうとするが逃がすはずもなく、ビームホークでコックピットから真っ二つに切り裂いた。青いＭＳが爆発して消滅した。

（ち！ちょっとシミュレーターにしては内容が、辛すぎないか？！不動閣下もえげつない内容を作ったもんだな）

俺がやっているシミュレーター訓練の内容は、敵の独立艦隊に発見されたため、所属艦隊を安全圏まで退却する時間を稼ぐ事だ。しかも、一定時間が過ぎると敵艦隊の殲滅及びＭＳ部隊の完全排除に任務が変わるから最悪だ。おかげで、共に戦ってる部下達も各地で戦闘になっているしまつだ。

（まあ、味方艦隊は脱出出来たから問題無いが、変わりにいくら探しても敵の主力艦隊が見つからないんだよな。バクじゃないのか？）

既にシミュレーター開始から1時間近くがたっているが、未だに敵の主力艦隊を発見したとの報告は入ってこない。
俺がレーダーを確認しながら周囲を確認すると、こちらに向かってくる機影を確認した。

拡大してみると、友軍機であった。無論、ＩＦＦでも確認をとる。間違いなかった。
３機のＭＳが俺の側にやって来た。最初の１機はマシュマーの専用機ザク？改だ。次の１機は、ラカン大尉のドーベンウルフだ。最後の１機は、グレミーに新たに配属される予定のクイン・マンサとか言う大型ＭＳだ。
３人の顔がモニターに映し出される。マシュマーが口を開いた。

「ライデン中佐。ご無事で何よりです」

「大丈夫そうだな。それより、敵の主力艦隊を発見出来たか？」

マシュマーは首を横に振る。どうやらまだ、敵の主力艦隊を発見出来ていないらしい。
ラカン大尉が口を開く。

「そっちも収穫は無しか。こちらでも、発見出来てはいないんだ」

「ラカン大尉の方もダメでしたか。となると、グレミーの方はどうだった？」

「私の方も索敵して見ましたが、発見には至りませんでした。残る区域は此処しかありませんよ？」

俺以外の３人も発見出来なかったらしい。あと、捜索するとしたらこのデブリ帯の中だけだ。

「しょうがない。デブリ帯の奥を調べて見るぞ」

「分かりました。まあ、あと調べられるのは此処しかありませんし

ね」

「ああ。そうだな。だが、デブリ帯の中は気を付けろ。デブリが邪魔になって、理想の軌道が描けないからな。特にグレミーはな」

「失敬な！この、クイン・マンサは確かに大きいですが、出力、火力共に通常のＭＳの数倍ですぞ！邪魔なデブリなんて、メガ粒子砲で吹き飛ばせば良いのです！」

やたらと胸を張るグレミー。俺はそんなグレミーを無視して、ギラ・ズールをデブリ帯の中に侵入させて行く。ラカン大尉はすぐに俺の後を追いかけて来た。俺達の行動に気付いたマシュマーとグレミーが、慌てて追いかけて来るのであった。

ジョニーｓｉｄｅｏｕｔ

ラカンｓｉｄｅ

ライデン中佐のギラ・ズール（真紅カラー）の後に続いてデブリ帯の中を移動する。周囲のデブリは戦艦や補給艦の残骸や隕石等様々な物で構成されている。シミュレーターとは言え、まるで本当に激戦が有った地帯にいるかなの様な錯覚を感じてしまう。

（本当に戦士達が散っていった宇宙を、此処まで忠実に再現するとわな。
まるで、実戦に参加している感覚だな。訓練だとは思えんな）

そんな事を考えながら辺りを確認すると、左側の奥のデブリ帯の切れた先に何か黒い影が動いた気がした。

「（む？もしや、あれが敵主力艦隊か？此処からでは分からんな。行ってみるしか無いか）ライデン中佐。左側の奥のデブリ帯の切れ目に怪しい影を確認しました」

「なに？それが、敵主力艦隊かもしれないな。よし、調査に向かう。マシュマー、グレミーはデブリ帯の中で待機しつつ周囲を警戒してくれ。俺とラカン大尉が調べてくる。　いいな？」

「「了解しました！お二人とも武運を！」」

四人で敬礼を交わす。
俺とライデン中佐がデブリ帯の切れ目までスラスターを吹かして一気に移動する。だんだんとシルエットが浮かび上がってきた。俺は敵艦のシルエットで相手の戦艦が何か分かった。

（チ！敵艦はネェル・アーガマか！クソ！相手はガンダムチームか！）

「なんだ？あの、ヘンテコな形をした艦は？しかも、相手の射程圏内な筈なのに何故射ってこないんだ？」

ライデン中佐の言う通り、俺達はデブリの中にいるとはいえ、既に射程内には入っている。にも、関わらず敵艦は攻撃を仕掛けてこな

い。すると、カタパルトからＭＳが発進した。発進したＭＳは此方に向かってきた。

「相手は1機だが油断するなよ！どうやら、やり手のようだぜ！」

「承知！そちらも無理せずに」

俺とライデン中佐が居た場所にビームの閃光が通り抜けて行く。しかも、１発のビームは異常な程の広範囲の物を壊して進んで行った。相手のＭＳを直視すると、全身が白く塗装された機体で頭部に角の飾りを付けている。ジム系とも、ガンダム系とも言えない微妙な機体が俺達と対峙する。

「タクよ！見かけ倒しが！消えな！」

ライデン中佐がビームラライフルを構えて発射する。だが、白い角付きは難なくビームを回避する。しかも、一気に此方に向かって接近してきた。

「なに！？だが、格闘戦なら負けないぜ！」

「ライデン中佐！援護する！」

俺は無線式ハンドビームを2発発射する。白い角付きはビームをギリギリで回避する。体勢を崩した角付きにライデン中佐のギラ・ズールが一気に近付いてビームホークで攻撃を仕掛けるか、相手もビームサーベルを抜いて鍔迫り合いなる。
ビームとビームが干渉しあいバチバチと閃光が辺りを明るくする。

「は！やるな！」

ライデン中佐が一旦距離を取る。相手の白い機体も下がる。

「墜ちろ！」

俺は隙を見て大型対艦ミサイルをネェル・アーガマに向けて発射する。案の定ネェル・アーガマは迎撃してきた。だが2発発射したミサイルの内、1発は左舷に命中した。もう1発は対空砲に迎撃されてしまい、途中で爆発した。

「ラカン！そっちに白いのが行ったぞ！」

「む！承知！」

ライデン中佐が相手にしていた白い奴が一直線に俺に向かって来る。俺はビームライフルを構える。

「堕ちろ！

ビームライフルから発射されたビームが白い奴に命中する。しかし、白い奴はビームが命中したにも関わらず、何等ダメージを受けていなかった。

「なに?！馬鹿な！だが、俺は負けんぞ！」

白い奴がビームサーベルを抜いて斬りかかってくる。俺はビームライフルを持っているせいでサーベルに持ちかえられない。白い奴がビームサーベルを降り下ろすが俺のドーベンウルフには届かない。

「甘い！」

隠し腕に持たせたビームサーベルと白い奴のビームサーベルがぶつかり合い、閃光を散らす。互いの力が拮抗して鍔迫り合いになるが、だんだんと俺の機体が押され始めてきた。

「馬鹿な！このドーベンウルフが、パワー負けしてると言うのか！？」

だんだんと姿勢が崩れてくる。スラスターを噴射して押し返すも、相手も同じようにスラスターを噴射して此方を叩き潰そうとする。

「く！舐めるな！」

更に、スラスターを噴射するが相手が更にスラスターを噴射したため、パワー負けして俺のドーベンウルフが弾かれた。そのまま、デブリに背中から激突する。

「ガハ！」

背中を座席に強打する。一瞬で肺から酸素を吐き出してしまう。痛みに耐えながらも、モニターを見ると目の前にビームサーベルを構えた白い奴が迫っていた。

（く！南無三！）

俺は死を覚悟した。だが、次の白い奴にビームが命中して吹っ飛んだ。

「ラカン大尉！ご無事ですか！？」

「遅れて申し訳ありません」

「その声はマシュマーとグレミーか！」

レーダーを確認すると、右翼からマシュマーのザク?改とグレミーのクイン・マンサが俺の側にやって来た。

「すみません。まさかデブリ帯の中で不意討ちを受けて、先程まで好戦していましたので」

「そうか。ライデン中佐はどうした?」

「現在、敵の別動隊を発見したため、そちらの撃破に向かいました」

「分かった。敵の白い奴は強いぞ。油断するなよ！」

「了解しました！」

「分かりました。この、クイン・マンサの実力を見せてやります！」

白い奴が体勢を立て直しして此方に向かって来た。左手にビームライフル?を持っている。奴がビームライフルを射った。

「散開！」

「「了解！」」

俺達は3手に別れる。マシュマーは右に回避する。グレミーは左に回避する。俺は上に回避する。　俺達が居た場所にビームが通り抜ける。周りのデブリを根刮ぎ破壊する。

「なんて威力なんだ！化け物だな。だが、騎士である私は負けん！」

マシュマーのザク？改が白い奴に吶喊する。

俺は援護するために、ビームライフルを構える。

「マシュマー！私が支援する！後ろは気にするなよ！」

「グレミー！頼むぞ！」

「行けぇ！ファンネル！」

グレミーのクイン・マンサから多数のファンネルが射出される。すると、白い奴がいきなり輝き始めた。

「うわ！？な、なんだ！」

『ニュータイプの存在を確認しました。全てのニュータイプを駆逐します。ＮＴ－Ｄシステム起動します』

全ての回線から声が聞こえる。生身の人間の声ではなく、機械に言わせている声だ。

白い奴の装甲が割れて機体が赤く輝き出す。頭に付いていた角が割れ顔が露出した。頭部はガンダムだった。

「なに！ガンダムだと！マシュマー！グレミー！一旦下がれ！下がるんだ！」

「ふん！見かけ倒しが！私が直々に成敗してくれる！」

「たかが、ガンダムもどきが！派手に壊れるがいい！」

マシュマーとグレミーは不用意に敵のガンダムタイプに近付いて行く。

ガンダムタイプがスラスターを噴射した。次の瞬間、マシュマーのザク？改の左腕が切り捨てられ、グレミーのクイン・マンサのファンネルが撃破全て撃ち落とされていた。

「な！なんだと！」

「馬鹿な！私のファンネルが！？」

二人が驚愕して動きを止める。次の瞬間白い奴がビームライフル？を構えて発射した。射線軸にはマシュマーのザク？改がいた。

「マシュマー！！」

俺は叫ぶ。だが、マシュマーのザク？改の回避動作を開始するが間に合わない。

「メビウス、バンザァァァイィィィ！！！」

マシュマーがそう叫んだのが聞こえた。ビームがマシュマーのザク？改に命中した。ザク？改は大爆発を起こして消滅した。

「おのれ！マシュマーの仇だ！」

「よせ！グレミー！！」

グレミーのクイン・マンサがビームサーベルを抜いて、ガンダムタ

イプに吶喊する。大型ビームサーベルとガンダムタイプのビームサーベルが鍔迫り合いを起こすが、一閃。クイン・マンサの右手が切り落とされた。

「馬鹿な！この、クイン・マンサの腕を切り落としただと！？」

「クソ！バカ共が！」

俺はガンダムタイプをロックオンして、ビームライフルを連射する。だが、ビームはガンダムタイプに命中する事は無い。華麗な動きで俺のビームを回避している。

「くらえ！ファンネル！オマケだ！」

グレミーがファンネルを展開して、オールレンジ攻撃を仕掛ける。胸部メガ粒子砲も発射した。

だが、ガンダムタイプはそれを嘲笑うかの様に回避して見せた。しかも、グレミーのクイン・マンサに向かって接近する。

「舐めるな！「グレミー！距離を取るんだ！」マシュマーの仇！」

俺の命令を無視して、ガンダムタイプとサーベルをぶつけ合う。鍔迫り合いになるが、次の瞬間クイン・マンサの頭部が爆発した。ガンダムタイプが左腕ビームライフル？を持っていたのだ。

（クソ！二人とも、意図も簡単に殺られただと！？あいつらだって、ベテランのパイロットなんだぞ！頼みのライデン中佐は連絡が取れん。となると、絶体絶命か）

俺が脳内で状況を判断する。ガンダムタイプが此方に向かって来た。

「俺にも意地があるんでな！ジオン魂を見せてくれるわ！」

俺はドーベンウルフに装備されたあらゆる武装を駆使して、ガンダムタイプを迎え討つのであった。

ラカンｓｉｄｅｏｕｔ

マシュマーｓｉｄｅ

シミュレーターを降りた私は大型モニターの前に来ていた。先程まではシミュレーターで宇宙戦の訓練をしていたが、敵機に撃破されてしまったのだ。私がモニターを見ると、丁度ラカン大尉のドーベンウルフが撃破された所だった。

（なんだ！あの、ガンダムの強さは！明らかにチートの類いだろ！あんなのに勝てるか！）

いきなり左腕は無くなるは、気付いたら死に台詞は言ってるはで大変だった。私の側にグレミーがやって来た。

「どうやら、グレミーもヤられたのか」

「ああ。全く相手にならなかった。なんだ？あの見たことのないガンダムタイプは？」

「分からん。私も初めて見るタイプの機体だ」

「畜生！なんなんだあのガンダムは！オールレンジ攻撃なんてしてきやがって！」

私とグレミーが話していると、後ろからやたら機嫌が悪いライデン中佐がやって来た。

「お疲れ様です！ライデン中佐。ライデン中佐も、あのガンダムと戦ったのですか？」

「ああん？なんだあのガンダムは？俺が戦ったのは此方だぞ」

ライデン中佐が指を指す方を見ると、さっきのガンダムとは違うガンダムがライデン中佐を撃破しているシーンがモニターに映し出されていた。

「なんですか？この、ガンダムタイプは？私とマシュマーが交戦した機体と違う様ですが？」

「そっちのガンダムタイプは、別動隊と交戦してたら現れやがった。おまけに艦隊の支援砲撃が半端ないから、回避しながら交戦するのが辛いのなんの」

溜め息を吐くライデン中佐。すると、ラカン大尉がシミュレーターから降りてきて此方に来た。

「お疲れラカン大尉。どうだった？相手の新型機は？」

「お疲れ様ですライデン中佐。相手の新型機は化け物の一言です。まるで我々が相手になりませんでした」

「そうか。たっく。不動閣下もえげつないよな。勝てるかよ！あんな化け物染みた機体に！」

ライデン中佐がそう、愚痴を漏らす。すると、此方に向かって仮面を着けた赤い軍服を着たパイロットがやって来た。てか、シャア大佐が来た。

「ハハハ。皆お疲れの様だな。先程の訓練の様子は視させてもらったよ」

「は！シャア大佐！無様な、結果をお見せして申し訳ありません」

私は即座にシャア大佐に敬礼する。グレミーも何気に敬礼していた。ラカン大尉も、やや疲れてた表情をしていたが敬礼している。ライデン中佐もめんどくさそうに敬礼した。

「まあ、楽にしてくれたまえ。さて、諸君らが戦った機体だが、ラカン大尉達が戦ったのはユニコーンガンダムと言う機体だ。ライデン中佐が戦った機体だがあれは、νーガンダムと言う機体だ」

それから暫くの間、シャア大佐によるガンダムタイプの説明会が開かれ、シミュレータールームで訓練していたパイロット達が皆で、話を聞くのであった。

マシュマーsideout

第九十五話（後書き）

戦闘シーンは、ユニコーンを見ていて思い付きました。
オットー大佐って、なんであんなに無能なんだろう？ブライト大佐と比べると、明らかに艦長に向いてないな。
地球連邦の腐敗うんぬんより、自身の練度を上げようぜ。だから副長に指揮を奪われるんだ。
（まだ、2話しか見てないけど）

感想待ってます。

外伝その3（前書き）

なんとなく思い付いたので書きました。原作からかなりはずれてます。
では、本編をどうぞ。

外伝その3

もしも悠斗が異世界に行ったらｆａｔｅ編
因みに悠斗の強さはチートとバクです。

その１

何時もの様にマスターアジア師匠と修行をしている。精神統一を終えて目を開けると、至近距離で俺を見つめている女性がいた。彼女はジーと俺の目を見つめている。
俺もどう反応すれば良いか、分からなくて見つめ返している。

「オッホン！アテナに悠斗よ。お主ら何を見つめ会っておるのじゃ！」

「！！」

「ん？」

いきなり目の前の女性が後ろに下がった。俺は声がした方を見る。
すると、そこには神様とヘラさんが立っていた。

「久しぶりじゃの悠斗。さて、何か弁明する事はないかの（怒）」

「なんで神様が怒ってるんだ？訳が分かんないぜ？」

「喧しいわ！ワシの娘に手を出しおって！くらえ！神の雷！」

「ぎゃあああああああ！！！」

上から雷が墜ちてくる。ズドーンと大きな音が辺りに響く。煙が辺りを包むがやがて晴れてきた。煙が晴れた場所には黒焦げになった神様が倒れていた。

「な、なんで・ワシに・・雷が」

「全く。悠斗に迷惑をかけるんじゃありません！大体、貴方は人の事を言える立場ですか！？」

ボロボロになった神様に、般若の表情で説教するヘラさん。アテナは俺の背中に隠れて服の裾を掴んで震えている。

雷を操作して神様に直撃させたのはヘラさんの様だ。黒焦げだった神様は何時のまにか綺麗になって立ち上がっていた。

回復するの早いな。

「さて、戯れ事はこのくらいにして、本題に入るかの。悠斗よ。お主は聖杯をしっておるか？」

「聖杯？たしか、聖遺物だったよな？レオナルド・ダ・ヴィンチの書いた最後の晩餐に登場した杯の事だよな？」

他にも聖杯伝説なんてのも有るが、恐らく神様が求める答えではないだろう。

「うむ。そうじゃな。実は、ある世界で聖杯を巡る争いが起きてて

の。その、争いがその世界の未来を左右するほど危険な状態になってしまっての。悪いのだが、その戦いを終わらせてきてほしいのじゃ」

「本来なら、私達が介入出来れば良いのですが、下手に私達が介入して世界を滅ぼしてしまう恐れがあるので」

眉間に皺を寄せて悔しげな表情をする神様。
ヘラさんも恐縮そうな表情をしている。

「良いよ。その世界の人達も助けたいしな」

「すまぬ悠斗よ。本来、ワシら神々の仕事なのだが、下手な事が出来ぬ故にな」

「気にすんなよ！ＢＥＴＡ以外にも闘えるなら、面白そうだしな」

「ありがとう悠斗君。変わりに、私から能力を授けます。行ってもらう世界はかなり強者揃いですからね。特に気を付けてね。生半可な強さではないから」

「分かりました」

俺がヘラさんの前に立つ。するとヘラさんの手が光る。やがて光は消えた。

「新たな能力として、絶対強者を与えます。頑張ってね」

「はい。分かりましたありがとうございます」

「あ、あ、あのう?私からもいいですか?」

「うん？」

振り替えると先程、俺の顔を除き混んでいた美少女がいた。

「私の娘の一人、アテナじゃ。アテナよ。何を悠斗にやるのじゃ？」

「え！えっと、この短剣をお守りの変わりにと」

彼女の手には革の鞘に包まれた短剣が握られていた。大きさはサバイバルナイフ位だ。俺はアテナから短剣を受けとる。

「ありがとう。この短剣は大事に使わせてもらうよ」

にっこりとアテナに微笑むと、彼女は頬をほんのりと紅く染めた。

「はい！大事に使ってください！あと、能力が付属されていますから、上手く使ってください。発動に必要な言霊はルールブレイカー（破戒すべき全ての符）です」

「分かった。ありがとう。じゃあ、神様送ってくれ」

「うむ。悠斗たのんだぞ」

「頑張ってください！」

「気をつけてね。悠斗君」

そんな感じでｆａｔｅの世界に送られます。

悠斗は弱体化しません。

ｆａｔｅの記憶は悠斗がプレイしたのを僅かに覚えてるレベルです。

その2

「初めましてマスター。サーヴァントキャスター求めに応じ、参上致しました」

「・・・・へ？」

神様に送られた世界に到着するやいなや、重力に引かれて民家に落下してしまった。屋根をぶち抜きながら着地すると、そこにはローブを深く被った人がいた。

「な、なんだ！貴様は！？大体、なんで私の呼んだクラスがキャスターなのだ！？ふざけるな！」

「あ？」

「ひ、ひい！！？」

後ろでぎゃあぎゃあ騒ぐ馬鹿が一人いた。キャスター？サーヴァント？訳が分からない状態な俺に、馬鹿が何か叫んでいる。

「お、おい！キャスター！コイツを殺せ！貴様が最弱なサーヴァントでも、普通の人間位殺せるだろ！」

「クッ！・・・分かりましたマスター」

ローブに身を包んだ女性（声を聞いて分かった）が何や構える。

「なあ？キャスターさん？あんたは、そんな奴の命令に従うのか？」

「・・・不本意ですけど、マスターの命令ですからね」

「何をごちゃごちゃ言っている！さっさと殺らないか！クズなサーヴァントだな！そんなんだから、最弱なサーヴァントと呼ばれるんだカス！」

「あ？テメエ！いま、なんっていった？」

「ひ、ひいぃぃぃ！！？」

馬鹿がキャスターさんを罵倒する。俺が睨み付けると、馬鹿は小さくなって震えだした。

「な、なんだ！お前は！こ、この、この私を誰だと思っている！」

「さあ？知らん」

「なんだと！この、名門！「ああ。１つだけ分かってる事がある」なに！？」

「テメエがグズな奴って事だ！」

「グペェ！」

俺は左の拳でグズの顎を砕く。キャスターさんは全く反応出来ていなかった。グズは叫びながら、壁に叩きつけられる。

「え?な、なに?今の?まさか!貴方もサーヴァントなの?」

「が・がぁ・・」

「すいませんね。キャスターさん。悪いけど、このグズを叩き潰させてもらうよ。あと、サーヴァントってなに?」

「まさか?貴方、聖杯戦争を知らないの?」

「ぎゅ・ぎゅずだー・ひゃ・ひゃれ・ほいふを!ひょひょれ!」

「喧しい!俺とキャスターさんの会話に入って来るな!」

「ゴバァ!」

グズの腹を蹴る。グズは口から血を吐き出しながら、地面を跳ね壁に激突する。壁に頭が刺さってピクピクと動いている。死んではいない様だ。

「貴方、魔術って知ってるかしら?」

「なんだそれ?」

ハァーと溜め息を吐くキャスターさん。どうやら、魔術なるものを知らないのはダメらしい。

「ところで、あのグズはどうする?辛うじて生きてるけど?」

「そうね。貴方、私と契約しない?聖杯戦争に勝利したら、聖杯が願いをかなえてくれるのよ?」

「ふーん。キャスターさんは聖杯に願う事があるの？」

「そうね。あるわよ」

「じゃあ。良いよ。俺は頼まれた聖杯を巡る争いを終焉させるって仕事があるから、その聖杯戦争とか言うやつが頼みの事の争いなのか、調べたいしな」

「じゃあ、交渉成立ね。じゃあ、私の力を見せてあげるわ」

そう言って、いきなり火球を作り出すキャスターさん。グスに向かって火球を射つ。グスは、たちどころに燃え骨すら残さずに燃え尽きた。

「く！キツいわね。さあ、私と契約を」

「ああ。分かった」

こんな感じでキャスターと契約します。悠斗は令呪を基本的使いません。　てか、悠斗が前衛である以上、敵をキャスターに指一本触れさません。

そんでもって、悠斗はこの世界にきちんと戸籍があります。神様のアフターサービスです。

因みに、ヒロインはキャスターです。

その3

キャスターと契約してから、1週間が過ぎた。今は冬木市と言う場所に住んでいる。キャスターと出合った場所は冬木市の町外れの古びた洋館だ。今は、神様のアフターサービスで用意された、冬木市にある一軒家に住んでいる。近くには藤村組と言う極道さんが住んでたり、古い武家屋敷がある。この世界だと、俺は株取引なんかで儲けている若手資産家らしい。

今は、のんびり散歩をしている。キャスターは家で冬木市全域を監視するシステムを構築して、他のマスター達の動向を探っている。あとはキャスターの本名（真名）を教えてもらった。ギリシャ神話に登場する裏切りの魔女メディアだった。まあ、俺には気にならなかった。彼女が裏切るなんてこれっぽっちも思ってないからだ。

散歩を終えて家に帰る道を煙草を吸いながら歩く。夜空を見上げると、満月が輝いていた。

「ふむ。雅だな」

そんな事を考えていると、夜風が吹く。

（ん？血の臭い？）

風の中に僅かに混じっていた血の臭いに気が付いた。風が吹いてきた方を見ると、武家屋敷の階段が目に入った。

（確か、此処には衛宮さん家の高校生が一人暮らししてるはずだ。まだ新しい臭いだ。行ってみるか！）

階段をかけ上がり、衛宮さん家の正面に到着する。すると、バリーンとドアを突き破って赤毛の少年が庭に飛び出してきた。

「大丈夫か！衛宮君！」

「ん？チッ！また、一般人かよ。たく、ついてねえな」

急いで彼に駆け寄ると、服が赤く染まっていた。　腹部から大量の血を流していたのだ。

「っく！に、逃げてください。殺されます」

「喋るな！すぐに、救急車を呼ぶから待ってな」

「そいつは勘弁だな」

「あん？」

衛宮君から視線を動かす。そこには全身を青い服に身を包んで、赤い槍を持ったイケメンがいた。槍の先には血が着いていた。俺は立ち上がり、青い服の男と対峙する。

「お前か？衛宮君に怪我をさせたのは？」

「ああ。悪いが目撃者は、殺せと言われてるんでな。あんたの命も貰うぜ！」

男が槍を構える。構えに隙は少なく、かなりの腕前を持つ男だと分かる。俺も、拳を構える。

「衛宮君！そこの蔵に隠れてなさい！」

「で、でも」

「早く、隠れろ！俺がコイツをボコボコにしてやるから、邪魔にならないように隠れているんだ！」

「わ、分かりました」

衛宮君は脇腹を押さえながら、覚束ない足取りで蔵の中に入っていった。

「はっ！なかなか良い、啖呵を切ったじゃねえか！まあ、苦しまない様に一撃で終わらせてやる！」

「ケッ！獲物が長いからっていい気になるなよ。叩き潰してやるよ」

「はん！なら、行くぞ！」

男が一気な間合いを積めて来る。俺は相手の手の動きを見る。

（突きか。なら、払うか）

真紅の槍が俺に迫って来る。俺はその場から動かずに左手で槍を軽く払う。風切り音と共に、青い服の男が吹き飛ぶ。

「な！ちっ！よっと！」

空中で体勢を整えてから着地する青い服の男。
その表情は驚愕半分、嬉しさ半分と言った感じだ。

「なんだテメエ！まさか、お前もサーヴァントか！？」

「はあ?俺はサーヴァントじゃないぞ。普通の人間だ!」

「馬鹿言え!普通の人間がサーヴァントの攻撃を左手1本で弾き返せるか!!」

「弾き返しただろうが。それが現実だ」

互いに口論が続く。
青い服の男が再び構えた。

「なら、テメエを最大級の敵と見るぜ」

「ほざくな。さっさと来い!」

「うぉぉぉぉ!はぁぁぁぁ!!」

突きの嵐。青い服の男から暴風の如く槍が襲いかかってくる。俺はそれを全て拳で受け流しながら、間合いを積めて行く。

「せい!」

俺は右ストレートを放つ。青い服の男はギリギリで槍でガードする。

「はい!」

即座に左ローキックを放つ。相手の右兄がバキッと相手の骨が折れる音がする。
男が槍を横に払う。
俺はバックステップして、間合いを取る。

相手は片膝を着いている。

「く！サーヴァントの俺の、足をへし折るだと！？テメエ本当に人間か？！　大体、槍を拳で受け流すなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「そう言われてもな。俺の武器は拳だしな」

青い服の男と対峙していると、突然目映い光が辺りを包む。

（スタングレネードか！）

「ちっ！なんだ！？」

蔵の中から鎧を身に纏った美少女が現れた。
美少女からは王者のオーラが感じられた。
美少女は此方を見る。

「どうやら、ランサー。貴方が敵の様ですね」

「チッ！セイバーだと！？このタイミングでか！？　最悪だな」

「それと、そこの男。マスターを護ってくれた事は感謝します」

「あ、どうも。あ！衛宮君は大丈夫か！？」

「今は、横になっています。早急に手当てを必要とします。まずは、外敵を潰します」

「は！言ってくれるじゃねえか！セイバー！俺が、負けると思ってるのか？」

「当たり前です。私が負ける可能性はありません」

手には見えない剣を持っている金髪の美少女が構える。青い服の男・・メンドイからランサーが立ち上がり構える。

「まさか、さっきの小僧がマスターだとわな。ただの民間人だと思ってたんだがな。まあ、目撃者を殺せと命令されて嫌だったが、こんな大物二人と闘えるなら文句ねえな！」

「おお！足の骨折られたのに立ち上がったよ！」

「当たり前だ。俺は英霊だぞ。怪我なんかすぐに治るに決まってら」

「じゃ、次は塵ひとつ残さずに消滅させてやろう」

俺は力を3パーセント解放する。身体中から殺気、闘気、が辺りに放たれる。辺りの空気が重くなる。

「く！なんて殺気だよ！テメエ、本当に人間か！？」

「なんと言う闘気。だが、怖くはない。寧ろ勇気が沸いてくる」

俺が構える。全員が構えている。一触即発の状態になる。だが、ランサーが構えを解いた。

「チッ！クソ！これからって時に帰ってこいだと！ふざけやがって！」

「む！？ランサー！臆したのですか！？」

「まて、嬢ちゃん。相手が下がるならその方がいい。衛宮君が怪我をしているから、治療したいしな」

俺は美少女の肩を掴んで止める。衛宮君が倉から出てきた。
顔色は心なしか、先程より良く見える。

「不動さん。大丈夫ですか？」

「む！衛宮君。大丈夫か！？」

「マスター！隠れていてくださいと、言ったではありませんか！なぜ、出てくるのです！」

「へぇ～。まさか、ボウズがマスターだったとわな。本当は殺りあいたいが、家のマスターが帰ってこいと言ってるんでな。って！チッ！」

いきなり何かが地面に刺さる。刺さった衝撃で地面が吹き飛ぶ。ランサーが後ろに飛んで距離を取る。俺は衛宮君の前に素早く移動して、彼に石などが当たらないように壁になる。

「ふん。避けたか。運がいいなランサー」

「テメエ！アーチャー！やってくれるじゃねえか！」
白い髪に赤色の服で、鋼の胸当てを着けた男性が庭に立っていた。
その側に、ツインテールの美少女がいた。

「こんばんは衛宮君。まさか、貴方がマスターだったなんてね」

「と、遠坂！なんで君が？」

「その説明は後よ。アーチャー。ランサーの相手をお願い」

「やれやれ。人使いの荒いマスターだ」

アーチャーと呼ばれた男性は、やれやれと言った表情をする。
遠坂と呼ばれた少女がプルプルと震えている。
嫌な予感しかしない。

「なんか、嫌な予感がするから、逃げるぜ！あばよ！」

「あ！待ちなさい！ランサー！」

「む！逃がすと思うか」

ランサーが慌てて逃げて行く。アーチャーと金髪の美少女が急いで追いかける。
俺と衛宮君と遠坂ちゃんの３人が残された。

「と、遠坂？大丈夫か？」

「うん？なにがかしら？」

「い、いや。なんでもない」

凄くいい笑顔で答える遠坂ちゃん。衛宮君はぶるぶると震えている。

「まあ、二人とも落ち着いてな。それより、衛宮君。怪我は大丈夫

か？」

「え？あ、はい。大丈夫です。不動さんの助けがなかったら俺は死んでました」

「気にしないでくれ。散歩の帰りにたまたま、衛宮君の家から凄い音が聞こえたから、慌てて来てみただけだから」

「そう言えば貴方は何者？さっき、ランサーの攻撃を拳で迎撃してた様に見えたけど？」

「うん？君は遠坂ちゃんだったかな？初めまして。不動悠斗と申します。衛宮君のお隣さんだ。職業は投資家でね。若手資産家として割と有名かな？」

「（資産家！狙い目ね！）初めまして。遠坂凛と申します。以後、よろしくお願いします」

互いに挨拶して頭を下げる。その後、アーチャーと金髪の美少女が帰って来たので話し合いをする事になった。

こんな感じでランサーは逃げていきます。

悠斗は衛宮と遠坂と同盟を組みます。無論、同盟を組む際にはキャスターを呼んできて、マスターで有ることを明かします。

その４

協会で麻婆神父に出会ってマスターとしての登録を済ませた。今は、帰り道をのんびりと歩いている。

「ふふ。こんばんはお兄ちゃん。ちゃんと呼び出したんだね」

「な！君はこの間の！」

後ろから声をかけられたので振り向くと、そこには浅黒の半裸のムキムキマッチョの大男と銀髪ロングの可愛らしい少女がいた。衛宮君は何やら、驚いている。

「なんだ衛宮君。君はロリコンだったのか？こんな幼気（いたいけ）な少女にお兄ちゃんと呼ばせるなんて」

「マスター」

「衛宮君。流石に引くわよ」

「まあ、坊やだしね」

女性陣が距離を取り、白い目で見る。何故かアーチャーが落ち込んでいる。

「ち、違う！違いますから！俺はロリコンじゃないです！！大体、彼女と会ったのはこれが２度目なんですよ！！」

衛宮君が絶叫する。チラリと銀髪の可愛らしい少女を見る。ニコニコと笑っていた。

「うん。お兄ちゃんと会ったのはこれが2度目だよ。ふふふ。お兄ちゃんはセイバーか。でも、私のバーサーカーの方が強いんだからね！」

「一体君は誰なんだ？俺に妹はいないんだが？」

「そっか。お兄ちゃんに自己紹介してなかったね。私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。バーサーカーのマスターだよ。私のバーサーカーはヘラクレスなんだから！」

「アインツベルン！まさか、聖杯戦争を始めた三家の1つがバーサーカーのマスターだなんて！しかも、大英霊のヘラクレスですって！？」

「止めるんだイリヤ！俺は戦いたくない！話し合おう！」

「ふふふ。お兄ちゃん達は死んでもらうよ。殺っちゃえバーサーカー！」

「■■■■■■■■■■■！！」

イリヤちゃんが命令をすると、バーサーカーが雄叫びを上げてこちらに突撃してきた。

「アーチャー！迎撃してちょうだい！」

「分かった！」

「シロウ！下がっていてください！私が前に出ます！」

「分かった！セイバー。無理しないでくれよ」

「キャスター。背中は任せた」

「お任せください悠斗様。援護致します」

俺、アーチャー、セイバーの3人が前に出る。
衛宮君、凛ちゃん、キャスターは後衛でバックアップに入る。

「■■■■■■■■■■■■！！」

バーサーカーが戦斧を持った右腕を力任せに振るう。大地が抉られる。
俺、アーチャー、セイバーはそれぞれバーサーカーの攻撃を回避する。

「く！あんなのをまともに受けたら武器どころか、腕も使い物にならなくなるぞ」

「しかも、生半可な攻撃は通用しそうではありませんね」

アーチャーとセイバーが冷静に相手を分析する。再びバーサーカーがこちらに向かって突撃してくる。
二人が回避しようとしているなか、俺は前に駆け出してバーサーカーの戦斧を指で挟んで受け止める。所轄、真剣白羽取りだ。

「「「「「う、嘘！（でしょ！です！だろ！）」」」」」

「流石悠斗様。私の旦那様だけはありますわ」

皆が驚きの声を上げる。キャスターだけは驚く所か、色っぽい声を出して見とれていた。

「嘘！なんで人間がバーサーカーの攻撃を受け止められるの！？ありえない！バーサーカー！殺っちゃえ！」

「■■■■■■■■■■■■！！」

主の命令を受けてなんとか俺から戦斧を抜こうとするが、俺はがっちり指で挟んでいるため全く動く事はない。

「まあ、バーサーカー。悪いが寝てろ！」

俺は空いている右腕でバーサーカーの顎殴る。バーサーカーはそのまま後ろに倒れた。

「立ちなさい！バーサーカー！」

シーンとした空気が辺りを包む。バーサーカーはダウンしたままだ。

「え？ウソ？バーサーカーは１２個の命を持ってるはず！バーサーカーの宝具のゴッドハンド『十二の試練』は？あれ？」

「うん？バーサーカーは気絶しただけだぞ？」

俺が放ったパンチはバーサーカーの脳を揺らして気絶させただけだ。

そんな感じでバーサーカーを気絶させてイリヤを仲間にします。イリヤを仲間にして、士郎との蟠りを解決させます。
こんな感じで外伝は終わりです。

外伝その３（後書き）

つい、ｆａｔｅ／ＺＥＲＯのアニメを見たら書きたくなったから書きました。
第４次は無理だから第５次にしました。

感想、ご意見待ってます。

第九十六話（前書き）

完成。久しぶりに予約投稿じゃないです。
では、本編をどうぞ。

第九十六話

悠斗ｓｉｄｅ

２０００年６月２４日
秘密基地シミュレータールーム

先月導入した新しい戦闘プログラムがクリア出来ないとパイロット達から批判が続出した。
いや、実際にクリア出来たのパイロットもいるのだが、シャア大佐だけなので他のパイロット達からは、おかしいとの意見が出た。
そのため、今回わざわざ俺が更に強化したバージョンをシミュレーターでする事になった。俺が今使用しているのはヤクト・ドーガ（緑）だ。僚機はシーマ大佐がギラ・ズール。イルマ大尉がＦ９０Ｖ。マリーダ中尉が量産型キュベレイだ。現在俺は、敵ＭＳ１２機と交戦している最中だ。

「（キュルリーン）む！？そこか！」
上からビームが俺の居た場所を通って行く。俺はスラスターを使って回避して、上から攻撃してくるジェガン３機をマルチロックする。

「墜ちろ！」

ビームアサルトライフルから、ビームが発射される。３機のジェガ

ンのコックピットを貫く。ビームが命中したジェガンは爆発した。

（ち！警報か！）

俺はスラスターを使って機体を回転さる（ロール）で俺に向かってくるビームを回避する。

側面から3機のスターク・ジェガンがビームライフルとミサイルを発射してくる。

「ふん！猪口才な！当たらんよ！」

ミサイルはビームライフルを使って射ち落として、ビームは回避動作で回避する。一番右にいるスターク・ジェガンをロックオンしてミサイルを4発発射する。

「墜ちろ！」

更に両肩に装備されたファンネルを展開する。

ファンネルで残った2機のスターク・ジェガンを強襲する。

ミサイルを迎撃しようとするが間に合わず、2発のミサイルが命中したスターク・ジェガンは爆発した。更に、ファンネルの攻撃を受けたスターク・ジェガン2機も爆発して宇宙の塵になった。

（後、3機！来たか！）

レーダーを確認する。正面から3機のMSが此方に向かって来た

（ヘビーガン2機にGキャノン1機か！腕がなるな！）

2機のヘビーガンがビームライフルからビームを射ってくる。俺は

スラスターを吹かしながら回避して、間合いを詰めようとするとGキャノンが4連装マシンキャノンで弾幕を張ってくるため、迂闊に近寄れない。

（舐めるなよ！仮にも俺もエースなんだからな！）

ファンネルを展開して、ヘビーガンとGキャノンに向かわせる。ビームアサルトライフルで牽制射撃を行い、相手に回避させた所を纏めてファンネルのビームでコックピットを貫く。3機が纏めて爆発した。

レーダーで周囲を確認すると、大型の熱反応を確認した。

モニターをズームして機影を確認すると、此方の区域にサラミス改が4隻向かって来ていた。

（ふむ。敵の主力艦隊じゃないからパトロール艦隊か。Gタイプが出てくる前にかたずけた方がいいな）

幸い、敵はまだ此方の存在に気付いてはいない。アウトレンジから攻撃を仕掛けるのが安全だ。

（だが、ファンネルなどいらないな。通常兵器で撃破するか）

安全策よりも、俺は艦艇相手の戦いをしてみたくなった。俺はスラスターを全開にして距離を摘める。サラミス改の上に回り込みながら、スラスターを全開にしてすれ違い様にサラミス改1隻をロックオンしてビームアサルトライフルを発射していく。

「もらったな！」

発射されたビームが主砲、ブリッジ、機関部に命中する。主砲は爆

発、ブリッジは吹き飛び機関部を撃ち抜かれたサラミス改は爆発して撃沈した。俺は更に後ろにいたサラミス改をロックオンする。今度は相手が俺と同じ高さにいたため、左斜め側から攻撃を仕掛ける。

「墜ちろ！」

左主砲と正面の主砲を撃ち抜く。更にスピードを上げてサラミス改の側面にビームアサルトライフル連射する。

側面部に数発のビームを受けたサラミス改は大爆発を起こして轟沈した。　敵襲に気付いた2隻のサラミス改は、カタパルトからジム？を発進させようとする。

「やらせるかよ！」

俺は手前のサラミス改に接近して、ジム？とカタパルトをロックオンする。シールドを構えてメガ粒子砲を発進しようとした、ジム？に発射する。ジム？は難なくメガ粒子砲に直撃して爆発する。これでカタパルトは使い物にならなくなった。サラミス改は煙をあげながら、なんとか体勢を直そうと懸命に努力している。奥にいるサラミス改にはビームアサルトライフルを連射して、ブリッジを吹き飛ばす。カタパルトからジム？が数機発進してきた。

生き残っている砲座から対空レーザー砲で迎撃を受けるも、回避してビームアサルトライフルで生き残っている機関部を撃ち抜く。機関部が大爆発を起こしてサラミス改全体に誘爆を起こした。

（あと、サラミス改は1隻！出てきたジム？は4機か！）

損傷しちサラミス改から主砲のメガ粒子砲とミサイルが飛んで来る。

主砲を回避しながらミサイルを射ち落とす。

右側面からもビームが飛んで来る。

モニターで確認すると、ジム？がビームライフルを構えて接近して

きていた。

「甘い！」

ビームサーベルに持ち変えて、スラスターを全開にしてジム？に突撃する。ジム？はビームライフルで弾幕を張るが俺ののるヤクト・ドーガには届かない。俺がビームサーベルの間合いに入ると、頭部バルカン砲を発射してくるが、シールドで防ぎコックピットをビームサーベルで真っ二つに切り裂く。

（見える！そこだ！）

シールドメガ粒子砲を構えて右斜め上に発射する。デブリに隠れていたジム？が飛び出した瞬間、メガ粒子砲に直撃して爆発した。俺に向かってメガ粒子砲が飛んで来る。

「チッ！死に損ないが！」

カタパルトから煙をあげながら、なんとか体勢を立て直したサラミス改から、メガ粒子砲が飛んで来る。発進出来た２機のジム？が護衛している。　敵が此方に向かってスピードを上げてくる。回避機動を駆使してビームやメガ粒子砲を避ける。俺が反撃に転じようとした瞬間、サラミス改のブリッジが吹き飛び、機関部にビームが命中した。サラミス改は大爆発を起こして撃沈した。護衛に付いたジム？は、瞬く間に蜂の巣にされて爆発した。

俺のヤクト・ドーガの正面に、黄色と灰色を基調としたギラ・ズールとＦ９０Ｖそれに量産型キュベレイがやって来た。

「悠斗！大丈夫かい？」

「マスター！ご無事ですか！？」

「悠斗閣下。大丈夫ですか？」

「シーマ、マリーダ、イルマか。すまないな。救援感謝する。俺事態は大丈夫だ。機体にも損傷はない」

3人が安堵の表情をする。俺は簡単に被弾するようなパイロットじゃないんだが。多少小言が言いたくなるが、そこは軽く流して本題にはいる。

「3人は敵艦隊と何回交戦した？」

「私は4回だよ」

「私も4回です。マスター」

「私は3回しか交戦していません」

「俺が今ので4回だから、そろそろ敵の主力艦隊が出てくる筈なんだがな？」

ホシノ少佐がオモイカネと共に作り上げたプログラムだ。一応敵の種類や艦隊の数、本隊の出現タイミングは全てランダムに設定なっている。

今回のはあくまで、俺の独自試算に依るがそろそろ出てきてもおかしくないタイミングなんだがな。

（う～ん。パイロットの疲労状況、機体の蓄積ダメージ、連続戦闘

時間、敵の撃破数、なんかを元に試算してみたんだがまだ出てこないか？）

３人の表情をモニターで確認する。やはり、顔には出さない様にしているが疲労が溜まっているのは感じ取れる。

俺は再度頭の中で試算を試みようとする。

「レーダーに反応あり！敵の主力艦隊です！」

イルマ大尉の一言で全て吹き飛んだ。戦局が新たな１面に突入したのだった。

悠斗ｓｉｄｅｏｕｔ

イルマｓｉｄｅ

私がレーダーを確認していると、宙域に侵入してくる大型の熱反応を確認した。

「レーダーに反応あり！敵の主力艦隊です！」

私は直ぐに叫ぶ。私のＦ９０Ｖのセンサーとレーダーの範囲は半径２００Ｋｍ迄の機影を捉える事が出来る。しかし、今の敵主力艦隊

は突然現れた。つまり、プログラムにより出現したのだ。

（艦級の形式、解析開始。・・・・判明した！）

私は素早く敵の主力艦隊の戦力分析を開始する。　データベースを検索して、該当する艦を確認する。

「解析完了しました！」

「イルマ大尉！艦の種類と規模はどのくらいだ！？」

「敵艦隊旗艦は、ラー・カイラム級機動戦艦、ラー・カイラム。クラップ級巡洋艦、ラー・カイム、ラー・キェム、ラー・チャター、ラー・エルム。　ネェル・アーガマ級強襲揚陸艦ネェル・アーガマです！敵艦隊からＭＳの発進を確認！種別は、ジェガン、スタークジェガン、ジェスタ、ジェスタ・キャノン、ベビーガン、リゼル、ガンダムタイプの出現を確認しました！」

「ガンダムタイプはなんだ！？」

「νガンダム、ユニコーンガンダム、ガンダムＦ９１です！」

私は矢継ぎ早に情報を伝える。不動閣下は私から聞いた情報を元に素早く判断をくだす。

「シーマ大佐！イルマ大尉！」

「はいよ！なんだい悠斗？」

「はい！悠斗閣下。なんですか？」

「両名は敵艦隊を攻撃してくれ。俺とマリーダ中尉でＭＳを相手にする」

「分かった。悠斗も無理するんじゃないよ！」

「分かりました！悠斗閣下も無理をなさらずに」

「分かっている。二人とも気を付けてな」

私とシーマ大佐はスラスターを全開にして敵艦隊に向かって接近する。
艦隊を護衛している敵ＭＳが進路を塞ぎ邪魔をしてくる。

「フフフ。選り取りみどり楽しいね」

「私の機体にあなた達の攻撃は届かないわ」

シーマ大佐がビームマシンガンで次々とジェガンに風穴を開けて撃破していく。私もビームライフルを連射して、迫って切るジェガンを撃破する。

「墜ちなさい！」

「墜ちな！」

私に接近してきたジェスタのビームライフルの閃光を回避して、ビームライフルでジェスタのコックピットごとバックパックを貫く。
ジェスタは爆発を起こして撃破される。シーマ大佐は、シュツルム・ファウストを2発発射した。発射されたシュツルム・ファウストは、

ジェスタ・キャノンの頭部モニターとコックピットに命中した。シュツルム・ファウストの直撃を受けたジェスタ・キャノンは爆発した。
ある程度艦隊に接近すると、敵ＭＳが集団で囲んで来た。
四方八方から敵の攻撃が飛んで来る。

「ち！邪魔だよ！！」

「く！往生際が悪いですね！」

敵の攻撃を回避しながら反撃して敵ＭＳを撃破していく。

（キリがないわね。本当に厄介だわ）

内心で毒づいていると、私の背後からリゼルが接近してきた。私は急いで反転すると、斜め上からビームが飛んで来た。

（く！？ジェスタ！デブリの影にいたのね！？）

「く！このシーマ様の上のまいを跳ねようってのかい！？舐めるんじゃないよ！」

私は突撃してくるリゼルの攻撃を回避する。
シーマ大佐の方を見ると、あちらもリゼル相手に苦戦していた。
更に周囲には敵ＭＳがやって来る。
だが、次の瞬間６機のジェガンがビームに貫かれた。

「え？」

「イルマ大尉！大丈夫か！？」

私は直ぐにレーダーを確認する。すると、そこには3機のガンダムを相手にしながら、私を援護してくれた悠斗のヤクト・ドーガを確認した。
マリーダ中尉が援護のため、ファンネルを展開している。ユニコーンガンダムは既に顔がガンダムになっている状態だ。更に言えば、Ｆ９１は分身している様に見える。
そんな状況下で悠斗は私を援護してくれたのだ。

「イルマ！悠斗に尻拭いばかりさせてられないよ！」
「はい！私達も頑張りましょう！悠斗の恋人である以上無様な姿ばかり見せられませんから！」

そう。悠斗の名に恥じない戦いをしなくてはなりません。私は機を引き締めて、リゼルと交戦するのであった。

イルマｓｉｄｅｏｕｔ

ガトーｓｉｄｅ

私はシミュレータールームで、不動閣下が行っているシミュレーション映像を大型モニターで観戦している。シミュレータールームは水を打ったが如く静まりかえっていた。ここにいる全てのパイロッ

ト達が、今行われている戦闘映像を見ているのだ。誰一人無駄口を叩くものはいない。ただ静かに見つめているのだ。不動閣下の機動、動作、攻撃、回避、援護、様々な技を披露して敵ＭＳを葬っていく。

（なんと言うテクニック。なんと言うセンス。私達がまだ到達していない域で不動閣下は戦っていらっしゃるのだ！）

ガンダムタイプを3機、同時に相手にしながら友軍の援護をファンネルで行い敵ＭＳを撃破していく。いくら、マリーダ中尉の援護が有るとは言え、機体を完全に己が手足の如く扱う姿は素晴らしいものだ。

いま、1機の赤く光っていたガンダムタイプがビームサーベルで切り裂かれ爆発した。

（残るガンダムタイプは2機か。3機を今まで相手にしていた不動閣下なら問題あるまい）

私はシーマ達が映し出されているモニターを見る。既に敵ＭＳの排除が完了した二人はクラップ級巡洋艦に攻撃を仕掛けていた。攻撃を受けたクラップ級が1隻爆発した。

（ラー・チャターが撃沈したか。む！続けてラー・カイムも撃沈しただと！？馬鹿な！いくらＭＳの性能が良いとは言え、2隻をあっという間に撃沈しただと！？」

私が驚きを隠せないでいると、残っていた他の2隻のクラップ級を瞬く間に撃沈した。その後シミュレータールームは最高難易度の訓練をクリアした四人を称えるため、歓喜に包まれるのであった。

第九十六話（後書き）

本編が訓練ばかりです。もう少しヒロインとイチャイチャするシーンが書きたいな。

感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9076p/

MUVLUVにチート転生者あらわる！

2011年12月7日00時07分発行